えりーもの 選物 【名】魚を賣る人。〔中國の方言〕

えりーもーみさき 襟裳岬・選藻岬・江里茂岬 【名】〔地〕北海道日高國幌泉(ホロイ)郡の南端にある岬。太平洋に突出すること四里。燈臺の設あり。近海に暗礁多し。

えりやうーじゆ 衣領樹 【名】〔佛〕死後の世界なる三途(サンズ)川のほとりに聳ゆといふ大樹。懸衣翁(ケンエ)・奪衣婆(ダツエ)の二鬼ありて、死者の衣を奪ひて、この樹に懸くと云ふ。偽經として學者に排斥せらるる十王經の所說なり。

えりーやく 選役 【名】江戸幕府の職制の一。銀座方の役にて、出來上りたる銀貨の善惡を鑑別・選擇する事を掌りしもの。

えりやなるみ・ぎよげふ 鮏築類漁業 【名】支柱を以て網又は簀(ス)を設け、或は堤を作りて、陷穽(オトシ)又は漁堰(ハヅギ)を設くる漁業法。

えりーわ 襟輪 【名】〔建〕木材を組合せ又は接合する場合に、一方の材の緣に少しく突出したる部分を作ること。いりわ。

えりーわく 選分く 【動下二他】多くの中よりえらびて、善惡を分つ。よりわく。

えりーわけ 選分 【名】えりわくること。

えりわーどめ 襟輪留 【名】〔建〕入口枠などに用ふる仕口(シクチ)。留と襟輪とを附す。

える 縒る 【動四他】よる(縒る)に同じ。

える 選る・擇る 【動四他】えらぶ(選ぶ)に同じ。源氏「御供にしたひきこゆる限りは、またえりいでたまへり」

える 《英Ell》【助數】西洋の尺度(多くは布帛の長さ)の單位。英國のは我が三尺七寸七分餘、佛國のは三尺二寸九厘餘、和蘭のは三尺三寸强に當る。

えるぐ 《英Arg》【助數】〔理〕仕事の單位。一ダインの力が物體に作用して、その力の方面に一センチメエトルだけ動かすもの。

えるじーてつ L字鐵 【名】斷面のL字形をなせる鐵材。建築材料に使用す。

えるみん 《英Ermine》【名】〔動〕食肉類に屬する獸。鼬鼠(チイク)の類。亞細亞・歐羅巴・亞米利加の溫寒兩帶地方に產す。身長約一尺。尾端黑く、腹部は白く、背部は冬は白く、夏は赤褐色。毛皮は衣服の裝飾用として、高價に賣買せらる。

えれき 越列幾 【名】〔理〕えれきてるの略。

えれきーうなぎ 越列幾鰻 【名】〔動〕しびれうなぎ(痲痺鰻)に同じ。

えれきてる 《蘭Electriciteitの訛》【名】〔理〕でんき(電氣)に同じ。

えれくとろおど 《英Electrode》【名】〔理〕でんきよく(電極)に同じ。

えれくとろーたいぷ 《英Electro-type》【名】でんきばん(電氣版)に同じ。

えれくとろん 《英Electron》【名】〔理〕でんし(電子)に同じ。

えれーさう 延齡草 【名】〔植〕えんれいさう(延齡草)の略。

えれべえたあ 昇降機 《英Elevator》【名】『擧げ高むる物の意』電力・汽力・水力などを動力とし、複滑車・索條(サクジヨウ)・運轉臺等を具へて、物又は人を上下に運搬する機。

えろお 《英Yellow》【名】『黃色の義』西洋繪具の一。黃色にて種種あり。鉛より製せらるるが故に、シエナ土の鐵の酸化物にて染めたる繪の外は、黑色に變ずるを免れず。

えろおーおおかあ 《英Yellow Ochre》【名】西洋繪具の一。不透明なる黃色。鐵の過酸化物又は水酸化物より成り、耐久力に富む。但し含有せる鐵は、他の繪具を害す。

えろおーれえき 《英Yellow lake》【名】西洋繪具の一。一種の黃色。礬土に果實の煎汁を加へたるもの。乾くこと遲し。オレンジ又は赤に變色する處あり。

えろす 《英Eros》【名】希臘神話に於ける愛の神。「夜」の卵中より生れ、その矢と炬(マタイ)とは萬物を照射して、「生」と「歡喜」とを生ずといふ。きゆうぴつと參照。

えろひむ 《ヘブライ語Elohim》【名】『强大なる者、即ち有力者の意といふ』造物主。神。

え-をお 伯父 【名】『兄(エ)小父(オヂ)の義』父の兄。(おとをぢに對して)〔古語〕字鑑「阿伯、江乎知」

え-をとこ 好男 【名】かはゆき男。よきをとこ。〔古語〕

え-をとめ 好少女 【名】かはゆきをとめ。よきをとめ。〔古語〕

お

發音 一あ行第五の音。母音。口をやや廣く開きて、舌の後部を少し低め、上下脣にて圓形を造り、氣息によりて聲帶を振動せしめて發す。口の開き具合は、あよりも狹く、うよりも廣く、大體えに同じ。故に、まづうあの中間の音なり。他行のお列の音は、すべて此の母音を含めり。わ行のをは元來woなりしが、今は發音全く變じて母音となり、假名のみ舊形を存して區別す。但しうをは(魚)に於ては、u・o二母音の重なるが故に、尙woの發音を存せるが如し。

二長音は、おお又はおーと記す。本書は前者に依れり。あの條下二參照。

三下にう・ふ・ほの來りたる時は、相合して長音に發音することあり。おうな(嫗)・おふし(唖)・おはし(多し)の如き類。但しおふ(追ふ・逐ふ)の場合には、文語にては長音に發音することあれども、口語にてはオウと發音す。おうと記す漢字音の場合も皆然り。例へばおうたい(應對)・おうと(嘔吐)。この事は他行のあ列音にも適用す。例へばこう(工)・とふ(乞ふ・請ふ)・ほり(氷)・そう(僧)・そふ(添ふ)・とう(東)・とふ(問ふ・訪ふ)・をう(翁)・はふ(法)等の如し。皆古音の轉訛せるに外ならず。四鼻音nの下に連なる時、nの添はりて音韻變化を起すことは、他の母音に同じ。例へばくわんおん(觀音Kwan-on)をくわんのん(kwan-non)・はんおう(反應han-ō)をはんのう(han-nō)といふ類。五促音つの下にて音韻變化を生ずることは、いの條下四に說けると同じ。例へばぶつおん(佛恩Buki-on)をぶつとん(but-ton)といふ類。但し極めて限られたる用例に屬す。

字源 平假名のおは「於」(漢・吳音共にオ)の草體より來り、片假名のオは「於」の偏より出づ。この外、萬葉假名にては、「意」・「奚」・「隱」・「應」・「愛」・「飫」・「憶」・「淤」・「唹」等にて、此の音をあらはせり。漢・吳音又は古音を用ひたるなり。

オ 【名】おもて(表)の略。書籍の或丁數の表にある由を示す符號として用ふる語。例へば「十八枚オ」は十八枚目の表面に在りとの意なる類。(ウに對して)

お 【感】一意外又は俄かなる事にあひて驚きたる時に發する聲。二おい(一)に同じ

お 御 【接頭】『おほ(大)の約』一尊敬の意。おん。「お手紙」「お泣きあそばす」二女の名に添へて鄭重にいふ語。「お松」「お竹」「お春」「お秋」太平記「菊亭殿に、御妻(イサヲ)とて…なまめきたる女房ありけり」

お-あいさう 御愛想 【名】飲食店・花柳界などにて、客に差出す勘定書。〔俚語〕

お-あいにくさま 御生憎樣 【名】おきのどくさま(御氣毒樣)(一)に同じ。

お-あかし 御明 【名】ごふそく(蠟燭)を云ふ。〔女の語〕

お-あがり 御上 【名】食物の敬稱。めしあがり。「がりもの。

お-あがり-すぎはら 御上杉原 【名】杉原紙の一種。縱一尺一寸・橫一尺五寸ありて、五百枚を一束とす。おほひろ。

お-あさもの 御淺物 【名】廣蓋(ヒロブタ)・硯蓋などの蓋。〔女の語〕

お-あし 【名】ぜに(錢)に同じ。あし。

お-あしす 《英Oasis》【名】おおしすに同じ。

お-あづけ-にん 御預人 【名】大名・旗本などの、罪ありて、諸大名に預けられてある者。〔江戸時代の語〕

お-あはせ 御合 【名】〔動〕『貝合せを合はす

おあひ

るよりいふ。『はまぐり(蛤)を云ふ。〔女の語〕

おーあひ 御會【名】貴人との面會。おめみえ。拜謁。而謁。

おーあひだ 御間【名】物事のうまく行かずとととのはぬこと。〔東京の語〕

おーあへ 御齏【名】あへもの(齏物)に同じ。

おーあま 【名】げいしや(藝者)を云ふ。〔關西の方言〕

おーあん 御庵【名】尼の敬稱。〔徳川時代の語〕おあん物語小供あつまりて、おあん樣、昔ものがたりなされませ、といへば」

おあんものがたり おあん物語【名】〔書〕大阪陣の時に、美濃國大垣の城の圍まれし實狀を、口語のままに記せるもの。一卷。お菊物語と合刻す。あん(安)參照。

おい

おい 老【名】【三】おゆること。年のよること。老年。更衣「おいの秋明け六つを聞くおもしろさ」【三】年のよりたる人。老人。「おいも、若きも」鶴村「おいを山にすてし世もあるに紙衣(カミ)かな」大功記「なんと、嫁女(ヨメ)、嬉しいかと、おいの詞に、初菊は」

老が身【句】年老いたる身。續古今「七そちに一とせ足らぬおいがみのいつとたのみて花をまつらん」

老せぬ宮【句】わかぎみ(若君)に同じ。(長壽を祝ひていふ語)

老にほる【句】老年になりてぼける。おいぼる。おいほほく。

老の一徹(イテツ)【句】老人の常として、頑固にして、一たび斯くと定めたることは容易に變ぜぬ意。

老の入前(マイリ)【句】老年になりてよりの生活。〔徳川時代の語〕堀川夜討「世の諺にも、老のいりまへとぞいふに、餘命なき御身に、苦勞をさせましたも」

老の鬼【句】年の暮に人を老いしめんとて來るといふ鬼。大貳集「わが捨つる年は暮れぬと宿ごとにやらふは老の鬼にざりける」

老の思出【句】【三】老年になりての決心。「じ。

【三】老後の記念。

老の學問【句】おいがくもん(老學問)に同

おい

に附くるもの。【三】白髮に譬へていふ語。

老の方人(カタウド)【句】年老いし人をその道の長老として、慕ひたふとぶこと、又そのたふとぶ人。その道に老功なる人。〔古語〕徒然「年老いたる人の、一事すぐれたる才能ありて、この人の後には、誰にか問はんなどいはるるは、老のかたらどにて、生けるも、いたづらならず」

老の繰言(クリゴト)【句】老人の常として、幾たびも、同じ事を繰返しいふこと。吾吟我集「口の内にとなふるあみだぶつめかし手にもつ數珠(ズ)も老のくりごと」

老の坂【句】辛苦を重ねて老年に至るを、坂を越ゆるに譬へていふ語。謠曲(雍鬼)「辿るやおいのさかならん」

老の姿(ミボ)【句】老衰を、花のしぼむに譬へていふ語。新古「年ごとに撫づとはすれどゆづるはのかひこそなけれ老のしぼみは」

老の底【句】年老いたる末。夫木「月日のみ流るる水と早ければ老の底より年はかへらず」

老の使【句】人を老いしむる役目の使者。(想像にていふ)夫木「君が代の盡きぬ千とせの友とならん老の使になしとこたへて」〔古語〕

老の苞(ツト)【句】おいづと(老苞)に同じ。

老の手習(テナラヒ)【句】「老の學問」に同じ。

老の波【句】おいなみ(老波)に同じ。

老の涙【句】老人の常として、とかくに涙脆(モロ)きこと、又その涙。

老の寢覺【句】老人の常として、ねざめがちなる意。夫木「夜やさむき月やすずしき明けがたのおいのねざめに風ぞ身にしむ」

老の春【句】春の更けたるを、年の老いたるに譬へていふ語。晩春。

老の袋【句】老いかがまりて、衣の腰などのふくらみたることなりといふ。〔古語〕保憲女集「老の袋、腰に餘りて、家とじ待ち喜び」

老を送る【句】老後の生活をなす。餘生を送る。夫木「石の橋松の柱と住みそめて老を送りし山ぞゆかしき」

おい

老を嚙(カ)む【句】老いて齒の脆けたる口を嚙みあはす。壓笈波「老を嚙む齒もおちぶれて見ぐるしや高野聖(カウヤヒジリ)をおどすむく犬」

老を手向(タム)く【句】老いたる齡を手向けささぐ。夫木「千早振るかつまの宮の姫小松おいをたむけて仕へまつらん」

老を延ぶ【句】年の老いゆくを長引かす。謠曲(養老)「岩井の水は藥にて、老を延べたる心こそ、なほ行く末も久しけれ」

老を養ふ【句】【三】老いて、その身體の靜養をなす。【三】老いたる人を、手厚く養ふ。

おい 俺【代】第一人稱。われ。おれ。〔薩摩國の方言〕

おい【感】【三】俄かなる事に出會ひてやや驚きたる時に發する聲。おゝ。杜「おい、この君にこそ」【三】呼ばれて答ふる聲。おう。おいの。源氏「おい、さりさりとうなづきて」

【三】同輩以下の人に對して呼掛くる聲。

おーあし 老葦【名】枯れたる葦。かれあし。

おいーいり 老入【名】次條に同じ。

おいーいれ 老入【名】年老いたること、又その境遇。おいいり。おいこみ。おいれ。老境。老衰。

老入の學問【句】おいがくもん(老學問)に同じ。

おいーうぐひす 老鶯【名】晩春より夏にかけて鳴く鶯。老鶯(ラウ)。

おいーうま 老馬【名】老いたる馬。老馬(バウ)。著聞「老いうまは草喰ふべくもなかりけり」

えいーえび 老蝦【名】老いたる蝦。(老人の腰の蝦のごとく曲るに譬へていふ)夫木「今はわれ世をうみにすむ老いえびのもくづが下にかがまりぞする」

おいーおい【感】【三】おい【三】を重ねていふ語。榮花「おいおい、さなりさなりと宣ふほど」

【三】大いに泣く時の聲。おうおう。落窪「おいおいと泣きたまふ」【三】おい【三】を重ねていふ語。

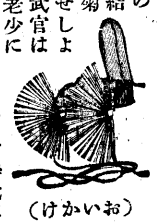
おいーおいし 老老し【形二】年老いたるさまなり。〔古語〕榮花「御息所(ミヤスドコロ)も、清げにおはすれど、物おいおいしく、いかにぞやおはして」

おいかが

おいーかがまる 老屈まる【動四自】老いて腰かがむ。老いて衰ふ。老いさらばふ。〔古語〕源氏「おいかがまりて、むろの戸にもまうでず」

おいーがくもん 老學問【名】年老いての學問。晩學。老學。老入(オイイ)の學問。老(オ)の學問。老の手習。榮穢「おい學問皆せらるるなかに」

おいーかけ 老懸緩【名】昔、武官の冠の左右・兩耳の上の處に附けて、飾りとしたるもの。毛にて作り、形菊花を半切にせるが如し。もと、老人は髮(ハツ)無く、冠を止むる法無きため、冠の緣(フチ)に緒の端を結び附け、その端を菊綴(キクトヂ)の如くにせしより起り、後には、武官は運動激しきより、老少に拘らずこの緒を懸くるに至り、中古時代に至りては、ただ裝飾の具となれり。あげを。ほほすげ。およかけ。字音「冠のおいかけなどあるべき定めにしければ」


(けかいお)

おいーかしん(英 Oilasin)【名】牛乳の滋養成分を取りて精製・乾燥したる粉末。無味・無臭にして、滋養强壯劑とす。

おいーがしら 老頭【名】兜(トカブ)の鉢の上に、白毛を被ひたるもの。

おいーがる 老嗄る【動下二】老いて聲かる。〔古語〕源氏「うちおどろきて陀羅尼(ダラニ)讀む。おいかれにたれど、いとくうづきて、賴もしう聞ゆ」〔古語〕

おいーがれ 老嗄【名】おいがれたること。

おいーき 老木・老樹【名】老いたる木。古木。老樹(ジユウ)。老木(ボクク)。源氏「そのかみのおいきはうべもくちぬらん植ゑし小松も苔生ひにけり」

老木に花咲く【句】若がへる譬。〔諺語〕夫木「一とせに再び春はたちぬれどおいきの花はいかが咲くべき」

おいーきた 【感】『きたは「來た」にて、「引受けたからよこせ」といふほどの意』待構へ居て引受くる時の掛聲。よしきた。おつときた。〔俚語〕

おい-ぎつね 老狐【名】老いたる狐。老狐(コウ)。夫木「人も見ばあなしらじらし おいぎつねいとどもひるのまじらひなせそ」

おい-いきまき 御息巻【名】『いきまく(息巻く)を見よ』腹の立つこと。〔女の語〕

おい-くち 老朽【名】老いくつること、又その人。老朽(ロウキウ)。水鏡「老いくちは、おのれがおいぼれ知らずして」

おいくつ 老朽つ【動上二自】老いて衰へはつ。老いて役にたたずなる。老朽す。

おいぐむ 老ぐむ【動四自】ふけて見ゆ。〔古語〕曾我「遙に見ねばや、老いぐみて見ゆるものかな。十郎よりおいぐみて見ゆ」

おい-ご 老子【名】老年になりて生みたる子。としより子。〔古語〕狭衣「おいごは人の大事なることと聞かせたまへば」

おい-ごころ 老心地【名】年老いたる者の心もち。おいごころ。〔古語〕落葉「中納言、老いごころにまどひたまひぬ」

おい-ごころ 老心【名】前條に同じ。謠曲(天鼓)「聞けば、誠においごころ、別れの涙の雨の袖」

おい-ごたち 老御達【名】老年の女房たち。老女ども。ふるにようばうたち。〔古語〕源氏「おまへの梢ほろほろと殘らぬに、おいごたちなど、ここ・かしこの御木丁(キチ)のうしろにかしらをつどへたり」

おい-こみ 老込【名】おいれ(老入)に同じ。

おい-こむ 老込む【動四自】老いて、活氣無くなる。

おい-ごゑ 老聲【名】老境に入れる聲。としよりごゑ。終りに近き聲。〔古語〕枕「鶯…夏・秋の末まで、おいごゑに鳴きて」

おい-さかる 老盛る【動四自】晩年になりて榮ゆ。〔古語〕榮花「おいさかり、命延ぶらんやうにおぼゆる殿のありさまになん」

おい-さぶ 老さぶ【動上二自】『老人らしくなる。〔古語〕』『物、ふるくなる。〔古語〕』

おい-さん 【名】『おいへさん(御家樣)の訛』他人の妻を指していふ語。〔越中國の方言〕

おい-いし 【形二】『おは接頭語、いしは、いみじの略、一說には、よし(美し)の轉』味よし。うまし。〔おいしい物〕

おい-じた 老舌【名】『年老いて齒落ち、ものいふ時にあらはれ出づる舌。〔古語〕萬葉「ももとせに老舌出でてよよむともわれは厭はじ戀はますとも」』『老人の、議論がましく言立つること。「おいじたをつかふ」〔語〕

おい-じに 老死【名】老年になりて死ぬること。老死(シラウ)。平家「今年は六十四にぞなられける。老死と云ふべきにはあらねども」〔ぬ。「おいしなぬ藥」〕

おい-しぬ 老死ぬ【動奈變自】年老いて死ぬ。

おい-しよ 【感】『他人に注意をうながし、又みづから注意する時の掛聲。よいしよ。〔俚語〕』『諧謔をまじへたる談話の中に、聞く人の插む掛聲。よいしよ。〔俚語〕』

おい-しらく 老白く【動下二自】年老いて、色白くなる。〔古語〕清輝集「山かげにおいしらけたる椎柴のわかばえ出づる春もありけり」

おい-しらふ 老いしらふ【動四自】互に老ゆ。〔古語〕增鏡「ことわりに、おいしらへる大臣・上達部など、みな御袖うるほひわたりぬ」

おい-しらむ 老白む【動四自】老いて、白髮になる。〔古語〕宇治「老い白みたる老僧」

おい-しる 老痴る【動下二自】老いて、愚かしくなる。老いぼる。おいほほく。〔古語〕空穗「われのみ貧しくおいしれにたるやといふ」〔條下を見よ。〕

おい-せぬみや 老せぬ宮【句】おい(老)の

おい-そげもの 老そげ者【名】おいぼれて、他人に侮らるる人。〔古語〕業式部日記「おいそげものと見おとされにけるとは」

おいその-もり 老蘇森・老曾森【名】〔地〕近江國蒲生(カバ)郡安土(アヅ)村の東南にある森。夫木「年へたるおいその森のした草につむともわかなまじりやはせん」

おい-それ 【感】他人より賴まれ又は促されて、思慮無く直ちに承諾する掛聲。〔俚語〕「おいそれと承知はしてくれず」

おいそれ-もの おいそれ者【名】他人より賴まれて、思慮なく承諾する輕率なる人。〔俚語〕〔同じ。〕

おいた 大分【名】〔地〕おほいた(大分)『三』に

おい-いた 御板【名】かまぼこ(蒲鉾)を云ふ。〔女の語〕〔の語〕

おい-いた 【名】幼兒のいたづら。わるさ。〔女

おい-いたち 【名】〔動〕おほいなご(大蝗)を云ふ。〔京都の語〕〔語〕

おい-いたみ 御痛【名】しほ(鹽)を云ふ。〔女の

おいたま 置賜【名】〔地〕羽前國の舊郡の一。明治十一年に、東置賜・西置賜・南置賜の三郡に分てり。

おい-いち 御市【名】『いちまつにんぎやう(市松人形)を云ふ。〔畿内の方言〕』『菓子の一種。浮世風呂「それは、お市といふ菓子でございます」〔俚語〕』

おい-いちよ 【名】ちよぼいち(樗蒲一)に同じ。

おい-づき 老月【名】陰曆十四日以後の月。

おい-づく 老づく【動四自】『老人になる。年よる。〔古語〕萬葉「おもかげにもとな見えつつかく戀ひばおいづくあが身けだしあへむかも」』『年よりめく。老人らし。〔古語〕源氏「みちのく紙に、おいづき書きたまひて」

おい-づと 老苞【名】老人のみやげ。老(オイ)の苞。〔古語〕山家「おいづとに何をかせましこの春の花待ちつけぬ我が身なりせば」

おい-づま 老妻【名】老いたる妻。おいにようばう。老妻(ラウサイ)。

老妻の擬笑(ラウセイ)【句】『老いたる妻が、なさけを含みて笑ふこと。』『その甲斐なきことの譬。

おい-つむ 老積む【動四自】老いて、年をかさぬ。〔古語〕貫之集「若菜つむ春のたよりに年ふればおいつむ身こそわびしかりけれ」

おい-づる 老鶴【名】年老いたる鶴。謠曲(鑑慈)「つれなく殘るおいづるの」

おい-て 於【接】『おきての音便』助辭の「に」を伴ふ名詞又は代名詞の下に附きて「にて」の意を示す語。

おいで 御出【名】『往くこと又は來ることの敬稱。おこし。』『居ること又は在ることの敬語。「おいでになる」』『祭禮の前に、神輿を拜殿又は御旅所(ヰタビ)に遷しおく間。おたび。

おいで-おいで 御出御出【名】他人を呼ぶ時に、手まねぎをすること。〔俚語〕

おいて-き-ぼり 置而行堀【名】おいてけぼり(置而行堀)の轉。〔俚語〕

おい-て-くれ 措いて呉れ【句】おく(置く)の條下を見よ。

おいて-け-ぼり 置而行堀【名】『今の東京本所緑戸町の東方に在りし堀の名にて、ここにて釣りせし魚は、持歸らんとすれば、何處となく「置いて行け」といふ聲の聞ゆるより名づくといふ』後れたる者を見捨てて立去ること。おいてきぼり。〔俚語〕

おい-て-たも 措いてたも【句】おく(置く)の條下を見よ。

おいで-ぶぎやう 御出奉行【名】武家時代に、將軍家の御成の時、供奉人の交名(ケウメイ)を定め、路次の行列を整ふる等の一切の事をつかさどりし役。

おい-でる 御出でる【動下一自】出づ・來る・往く・居る等の敬語。〔關西の俚語〕

おいとこ-さうだ 【名】他人を罵りていふ語。馬鹿野郎。まぬけ。すっとこどっこい。〔東京の俚語〕

おいとこ-しよ 【感】みづから注意する時に發する聲。おいしよ。よいしよ。〔俚語〕

おいとこ-ぶし おいとこ節【名】俗謠(ゾクエウ)の一。

おい-どん 【代】『己殿(ワレ)の音便』第一人稱。われ。おれ。〔薩摩國・大隅國の方言〕

おい-なすび 老茄子【名】久しく枝にある茄子。〔古語〕小大君集「くひどころみれば うれなるおいなすびうゑたる人のくへるなるべし」

おい-なみ 老波【名】『年老いて顏に皺(シワ)の寄るを、波に譬へていふ語。老の波。謠曲(天鼓)「打つや、打たずや、おいなみの立寄るかげも夕月の」』『年の寄るを、波の寄るに譬へていふ語。老の波。

おい-なみに 老並に【副】老い行くにしたがひて。年のよるままに。〔古語〕萬葉「こともなくありしこものをおいなみにかかる戀にも我はあへるかも」

おい-なむ 老並む【動四自】老ゆ。年よる。

〔古語〕 名義抄「稌、オイナム」

おいいなりさん 御稲荷様【名】いなりずし（稲荷鮨）を云ふ。〔東京の語〕

おいなる 老成る【動四自】おゆ（老）に同じ。〔古語〕 源氏「いと見にくく老いなりて」

おいにふだら 老入道【名】老年になりたる入道。 沙石集「常州筑波山の麓に、老入道あり」

おいによばう 老女房【名】年上の女房。年かさの妻。老妻。 雪女五枚羽子板「この女が私に六十二の老女房、當年八十五歳」

おいぬ 御犬【名】次條の略。 柳樽「三角な雪見お犬が嬉しがり」

おいぬこども 御犬小供【名】江戸幕府の大奥の職制の一。御錠口詰（オチヅケクチ）以下御三の間までの雑用を弁ずる少女。 おいぬ。

おいねずみ 老鼠【名】一年を經たる鼠。催馬樂（老鼠）「西寺のおいねずみ・若ねずみ」

おいの 【感】おい 二に同じ。 今宮心中「おきさか。おいの、二郎様か」

おいのかたうど 老の方人【句】おい（老）の條下を見よ。

おいのさか 老の坂【句】おい（老）の條下「江山」を見よ。

おいのさかおほえやま 老坂【名】〔地〕 大江山を見よ。

おいのり 御祈【名】古、天災・地變・兵亂などの折に、禁中にて護持僧をして祈禱せしめしこと。

おいのりぶぎやう 御祈奉行【名】鎌倉幕府の職制の一。臨時の職にて、水旱・疾病・妖災などの事ある時、評定衆・引附衆の内より補せられ、陰陽家及び佛家に祈禱せしめしもの。いのりのぶぎやう。

おいはつ 老果つ【動下二自】甚しく老い衰ふ。老いくつ。

おいはひかた 御祝方【名】室町幕府の職制の一。將軍家にて、年中恒禮又は臨時の大禮を行はるるに際し、將軍家及び御相伴衆などに賜ふべき酒肴の調進をつかさどりしもの。いはひかた。

おいはひとり 御祝取【名】祝義・不祝儀に關らず、その事ある家に至り、慶弔の詞を述べて、物を乞ふ賤民。

おいはひぶぎやう 御祝奉行【名】室町幕府の職制の一。將軍宣下・任大臣大饗・拜賀などの祝儀の式を行ふ時、饗饌のことを掌りしもの。いはひぶぎやう。

おいばむ 老ばむ【動四自】老いたるさまになる。おいさぶ。〔古語〕 枕「おいばみ、うたてある者こそ、火桶のはたに、足をさへもたげて」

おいひがむ 老僻む【動四自】老いて、心ひがむ。 源氏「深からぬけにや、おいひがめるにや、いとほしくぞ見ゆる」

おいびと 老人【名】老いたる人。らうじん。 源氏「おいびとも、うれしと思ふ」

おいふ 於邑【名】『於は嘆息の辭、邑は悒に通じ、憂ふる意』もだへうれふること。煩悶（モンモン）。憂苦。

おいへ 御家【名】一他人の宅の敬稱。二他人の妻の敬稱。おへ。〔京都・大阪の語〕

おいへきやうげん 御家狂言【名】御家物の狂言。

おいへさうどう 御家騒動【名】加賀騒動・黒田騒動・伊達（ダテ）實錄などの如く、封建時代の大名・小名の家内に起りたる騒動。

おいへさま 御家様【名】他人の妻の敬稱。おいへさん。おへさん。おへさま。〔京都・大阪の語〕

おいへさん 御家様【名】前條の音便。〔京阪の語〕

おいへほぼ 御家頬【名】皺（シワ）なく、なめらかに作りたる面頬（メンボウ）。「敬稱。

おいへぼり 御家彫【名】いへぼり（家彫）の

おいへもの 御家物【名】一御家騒動を仕組みたる小説又は狂言。（世話物・時代物に對して）二俳優その他の藝人の得意とする藝、例へば市川家の荒事（アラゴト）・尾上家の怪談狂言などの類。おいへりう。

おいへやう 御家様【名】次條一に同じ。

おいへりう 御家流【名】一和様の書法の一種。尊圓法親王の筆法を傳へたるもの。江戸幕府の御祐筆は、この書體に限れり。おいへやう。いへやう。 二おいへもの（御家物）二に同じ。 三香道の一派。三條西實隆より公卿の間に傳はりしもの。

おいぼく 老惚く・老耄く【動下二自】おいぼる（老耄る）に同じ。 落葉「おいぼけて、もののおぼえぬままに、のたまへば」

おいぼふし 老法師【名】老いたる僧。老僧。 源氏「おいぼふしのためには、功德をつくりたまへ」

おいぼる 老惚る・老耄る【動下二自】老いて心鈍くなる。老耄（ラウモウ）す。おいぼく。 奈穢「物うくなりにたるは、無德になりもて侍るにや侍りつらん、おいぼれたるとだに思ひ定めぬ」

おいぼれ 老惚・老耄【名】一老いぼれたること、又その人。老耄（ラウモウ）。二老人を罵りていふ語。

おいまちよらう 於今女郎【名】下等の遊女。〔遊廓の語〕

おいまつ 老松【名】一老いたる松。（若松に對して）二小唄（コウタ）の曲の一。三謡曲の一。老松の神靈あらはれて、松梅のめでたき由を示現することを作りしもの。德川氏の謡初式には、必ず謡はれたり。四俗曲の一。江戸長唄にも常盤津にもあり。

おいまつのみやうじん 老松明神【名】北野神社の末社なるべしといふ。又、薩摩國出水（イヅミ）郡に老松天神宮あり。 太平記「北野の御眷屬・老松の明神」

おいまひ 老舞【名】〔音〕壹越（コツチ）調の雅樂三十四曲中の一。高麗より傳來せるもの。舞あり。

おいみ 御忌【名】『この月には、神神、出雲國に集まりたまふといふより、忌慎むべき時なりとて云ふ』陰暦十月を云ふ。〔出雲國の方言〕

おいみあれ 御忌荒【名】『前條を見よ』陰暦十月、空の荒ること。かんあれ。〔出雲國の方言〕

おいむしや 老武者【名】一年老いたる武者。（わか武者に對して） 平家「そのうへ、老武者ではあり、手塚が下にぞ成りにける」 二老練なる武者。てだれの武士。 三河物語「信玄は、老武者と申し、度度の合戰に馴れたる人なり」

おいもがは 御芋川【名】〔地〕おとなせがは（音無瀬川）の別稱。

おいや 【感】咄嗟（サツ）の場合に驚きて發する聲。お。おい。〔古語〕 源氏「おいや、聞きし人なりとおぼし出でて」

おいやみ 老病【名】年老いて病にかかること。としやみ。老衰病。老病（ラウビヤウ）。女殺油地獄「老人たちの老いやみには、白髭明神・白髮藥師」「だんだんに老ゆ。

おいゆく 老行く【動四自】次第に年よる。

おいら 己等・俺等【名】おいらん一に同じ。

おいら 己等・俺等【代】第一人稱の複數又は單數。（多くは單數に用ふ）〔東京の俚語〕

おいらか 【貌】おとなしくすなほなるさま。じんじゃう。〔古語〕 源氏「いづこのさる女かあるべき、おいらかに鬼とこそ向ひたらめ」

おいらく 老【名】『おゆ（老ゆ）の連體形の延轉』おい（老）に同じ。〔古語〕 古今「さくら花ちりかひくもれおいらくのこんといふなる道まがふがに」

おいらん 【名】一『己等（ラオイ）の姉分といふ意』姉分の娼妓。あねちよらう。おいら。〔江戸吉原の娼妓の語〕 二位置の高き娼妓。太夫。〔花魁〕〔江戸の語〕

おいらんさう 花魁草【名】〔植〕萬苣（ヂシヤ）科に屬する多年生の草。高さ二三尺に達し、莖も葉も千日紅（センニチコウ）に似て、夏、淡紅又は白色の花むらがり開く。

おいらんだちやら 花魁道中【名】だうちゆう（道中）二に同じ。

おいり 御入【名】入り來ることの敬語。

おいる 【英 Oil】【名】『油の義』油繪の繪具を煉るために用ふる油。種類多し。

おいるくろす 油布【英 Oil cloth】【名】油を引きたる布。質堅く、面に種種の花模樣を附け、西洋風の座敷又は馬車・人力車の蹴込（ケコ）などに張る。

おいるたんく 油槽【英 Oil tank】【名】油を入れて貯藏し、又は輸送するに用ふる大なる槽。油槽。

おいれ 老入【名】おいいれ（老入）の略。〔俚語〕「おいれの學問」

おいれ 大入・追入【名】〔建〕一材の端（ハシ）を、全部他材へ差入るること。〔語〕

おいろ 御色【名】べに（紅）を云ふ。〔女の

おう 【感】一思ひ當りて發する聲。いかにも。おお。二應諾の意を示す聲。三驚き叫ぶ聲。四蹴鞠(ギシク)にて、鞠を乞ふ時の聲。著聞「鞠を受くるには、やくはといひ、ありといひ、おうといふ」

おう 【名】〔植〕とりかぶと(烏頭)に同じ。

おう-あ 歐亞 【名】〔地〕歐羅巴洲と亞細亞洲と。亞歐。

おう-あ 謳啞 【名】晉のさわがしきこと。

おうあん 應安 【名】北朝の後光嚴天皇の御代の年號(紀元二〇二八年—二〇三四年)。

おうーうつ 蓊鬱 【貌】一草木のしげれるさま。二雲・霧などの盛んなるさま。

おうえい 應永 【名】後小松天皇及び稱光天皇の御代の年號(紀元二〇五四年—二〇八七年)。

應永の亂 【句】應永六年、大内義弘の攝津國堺浦に據りて叛きしより、將軍足利義滿これを討ちし戰亂。義弘はその子滿義と共に敗死せり。

おうえい-き 應永記 【名】〔書〕應永の亂の顚末を記せるもの。一卷。著者不詳。一名、大内退治記。

おう-おう 【感】一呻吟する聲。わめく聲。二大いに泣く聲。おいおい。國姓爺後日合戰「おうおうと啼く聲は、磯山風に音添へて」

おう-か 謳歌 【名】一多くの人が同音にうたふこと、又その歌。謳吟。二天子の德を、衆人が同音にほめたたふること。謳吟。「泰平を謳歌す」

謳歌の說 【句】誰言ふとなき說。巷說。太平記「天下の反覆遠からじと、謳歌の說、耳に滿ち候」

おう-き 應器 【名】〔佛〕おうりやうき(應量器)の略。

おう-き 嘔氣 【名】嘔吐の氣。はきけ。

おう-ぎ 應儀 【名】〔佛〕『人天の供養に應ずべき威儀を具へたる意』あらかん(阿羅漢)の舊譯。

おうぎ-しや 應議者 【名】〔法〕平安時代に、六議(ギク)に應當すべき人。おうぞくしや(應贖者)參照。

おう-きふ 應急 【名】とりあへず間(マ)にあはすること。

おうきふ-てあて 應急手當 【名】創傷などを受けたる時の、さしあたりての手當。

おう-ぎん 謳吟 【名】おうか(謳歌)に同じ。

おうきよ 應擧 【名】〔人〕まるやまおうきよ(圓山應擧)を見よ。

おう-ぐ 應供 【名】〔佛〕『梵Arhat(阿羅訶)の譯語。一切の惡を斷じて、人・天の供養を受くる義』如來十號の一。

おう-くわ 歐化 【名】風俗・思想等の上にて、歐・米風の感化を受くること。

おう-くわ 應化 【名】『英Adaptation』一〔生〕生物が、外圍の狀態に適應して、自己の組織・機能を變化する作用、又その作用によりて變化したる狀態。二〔哲〕人心が、外部の事情によりて、その作用を變じ、又は傾向を改むること、及びその結果。適應。順應。

おう-くわ 應果 【名】〔佛〕『人・天の供養に應ずべき德を具へたる意』あらかんくわ(阿羅漢果)に同じ。

おう-けい 御請 【名】うけしよ(請書)に同じ。

おう-げ 應化 【名】〔佛〕佛及び菩薩が、衆生を救ふため、機に臨みてその身を變じ、これに應用すべき化體を出現すること。應現。應作。

おうげ-しん 應化身 【名】〔佛〕おうじん(應身)に同じ。

おうけつ 甌穴 【名】〔地〕急流のために生ずる、溪(タニ)などのくぼめる處。「じ。

おうげん 應現 【名】〔佛〕おうげ(應化)に同

おうげん-しや 應減者 【名】〔法〕平安時代にて、特典に依りて刑の減等を受くる身分の者。おうぞくしや(應贖者)參照。

おうげん-すねじやく 應現垂迹 【名】〔佛〕すねじやく(垂迹)に同じ。

おうげ-りしやう 應化利生 【名】〔佛〕佛又は菩薩が、身を變じて、衆生に接近し、佛道に入らしめて、利益を與ふること。太平記「佛法東漸の靈地たるべければ、いづれの所にか、應化・利生の門を開くべき」

おうご 應護 【名】〔佛〕佛又は菩薩が、衆生の祈願に應じて、その衆生を護ること。

おうご 應其 【名】〔人〕眞言宗の僧。初名は日齋。字は順眞。佐佐木氏の臣。主家亡びて後、佛に歸し、高野山に在りて修學す。秀吉の高野征伐に當り、周旋宜しきに適ひ、一山の兵禍を免れしむ。世に木食(ジキモク)上人と稱す。慶長十一年寂す。年七十二。

おうさ 應作 【名】〔佛〕『機に應じて作(ナ)す意』おうげ(應化)に同じ。太平記「兩所權現は、これ伊弉諾・伊弉册の應作なり」

おうさ 【感】それはさる事ながらといふ意。おおさ。〔芝居の臺詞などにいふ語〕

おう-さい 【感】『「おう然(サ)りや」の意。一說に、お于思の義。うさいをう(于思翁)を見よ』三番叟を舞ふとき唱ふる聲。

おうさう-しふ 鷗巢集 【名】〔書〕後水尾天皇の御歌集。四卷(寫本)。四季・戀・雜に分ち、奥に御著到百首・三十首などの御製その他八條宮智仁親王御點の御製、中院通村の點に詞書の添ひたる御製をも載せらる。

おう-しい 【感】おしおしに同じ。

おう-しう 應酬 【名】人より寄來れる書信に對して、返事をすること。

おうしう 歐洲 【名】〔地〕よおろっぱしう(歐羅巴洲)に同じ。

おうじ-がへし 應返 【名】擊劍にて、相手の擊込む刀を受くると同時に、神速にその相手の隙を覗ひて擊返すこと。

おう-しん 應眞 【名】〔佛〕『人・天の供養(クヤウ)に應ずべき眞人の意』あらかん(阿羅漢)に同じ。

おう-じん 應身 【名】〔佛〕『梵Nirmāṇakāya の譯語』佛の三身の一。佛が、諸種の衆生を濟度(ド)するため、諸種の色身を應現して、諸種の法を說くこと。化身。應化身。應現の身。(法身・報身に對して)

おうじん-てんわう 應神天皇 【名】〔人〕第十五代の天皇。御名は譽田(ホムタ)。仲哀天皇第四の皇子。母は神功皇后。在位百十年(紀元八六一年—九七〇年)、空位二年。壽百十歲、一說に百三十歲。

おうじん-と 應身土 【名】〔佛〕應身佛の住める國土。

おうじん-ぶつ 應身佛 【名】〔佛〕應身を現はせる佛。印度に出でたる釋迦の如きを云ふ。應佛。

おう-しやう 毆傷 【名】一毆打して傷をおはすること。二うちきず。うたれきず。三〔法〕おうださうしやう(毆打創傷)の略。

おう-じやく 應迹 【名】〔佛〕おうげんすねじやく(應現垂迹)の略。

おう-しよう 應鐘 【名】一〔音〕十二律の一。二陰曆十月の異名。

おうず 應ず 【動佐變自】一こたふ。「問に應ず」二したがふ。「募に應ず」三かなふ。あてはまる。「分に應ず」

おう-せい 應制 【名】『制に應ずる義。制は天子の命令』天子の命を奉じて、詩文を作ること。應詔。

おうせい-しや 應請者 【名】平安時代にて、刑に處せらるる場合に、請(セ)の特典に依りて、特に減等せらるる身分の者。おうぞくしや(應贖者)參照。

おう-せい 歐西 【名】〔地〕歐羅巴。西洋。「泰西。

おうせい-ちゆう 應聲蟲 【名】腹中に蟲ありて、その物の言ふ聲の聞ゆといふ病。閑田次筆「奥丹波の何とかいふ山里に、農人の妻、五十歲ばかりにて、應聲蟲の病あるよし聞き傳へて、觀場に出さんやと、語らひに行て、二三日逗留してありしが、いかにも腹中に聲ありて、病人の聲に應じて、その詞の如く言ふこと、分明に聞ゆ」

おう-せう 應詔 【名】おうせい(應制)に同じ。

おう-せう 應召 【名】召しに應ずること。

おうせう-ゐん 應召員 【名】陸軍又は海軍の召集に應じて、指定地に參集すべき人。

おう-せつ 應接 【名】一あへしらふこと。もてなすこと。應對。二面會。接見。

應接に遑(イトマ)あらず 【句】物事の續續とせはしくあらはるる意。

おうせつ-しつ 應接室 【名】次條に同じ。

おうせつ-じよ 應接所 【名】應接をなすための室。應接室。應接間。

おうせつ-ま 應接間 【名】前條に同じ。

おうせん 應戰 【名】攻來る敵と戰ふこと。

おうそ 應訴【名】〔法〕被告が、原告の訴訟に對して、陳述すること。

おうぞく-しゃ 應贖者【名】平安時代にて、刑に處せらるる場合に、特に贖銅若しくは官を以て罪を贖(アガ)ふことを得し身分の者。應議者・應減者・應請者及び八位・勳七等以下十二等以上の人、又は官位・勳等減を得る者の父母・妻子、これに當る。

おう-だ 毆打【名】一人をうちたたくこと。二〔法〕舊刑法にて、不法に他人の身體に暴行を加ふること。「毆打致死」

おう-たい 應對【名】人に應接して、その問にこたふること。應答。

おう-たう 應當【名】あてはまること。あたること。相當。

おうたう-じつ 應當日【名】〔法〕『英 Corresponding day』或一定の日に相當すべき日。例へば期限などの計算に於て、本年の二月二十九日の應當日は、翌年の二月二十九日なる類。故に應當日なきこともあり。

おう-だく 應諾【名】應じて承諾すること。

おう-たくわい 御歌會【名】宮中に催さるる歌會。歌會始。

おうたくわい-はじめ 御歌會始【名】年の始めの御歌會。大抵は一月の十八日午前十時を以て行はせらる。

おうだ-さうしやう 毆打創傷【名】〔法〕舊刑法にて、人を毆打して、その身體を傷害すること。毆傷。

おうださうしやう-ざい 毆打創傷罪【名】〔法〕舊刑法にて、暴行または詭計を用ひて、故意に他人の身體を傷け、もしくは死に致したる犯罪。

おうだ-わし 毆打致死【名】〔法〕他人の身體に傷害を與へ、これが原因となりて、被害者を死にいたらしむること。

おうたどころ 御歌所【名】宮內省に屬し、兩陛下を始め宮中の人人の詠歌を掌り、兼ねて臣民の詠進を管理する役所。所長(一人、勅任)・主事(一人、奏任)・寄人(七人、勅任待遇又は奏任待遇)・參候(十五人、奏任待遇)及び錄事(六人、判任)の職員あり、寄人と參候とは名譽職にて、前者は詠歌に關する編纂撰述を分掌し、後者は歌御會の事を分掌す。又、主事と錄事とは庶務を處理す。

おう-たふ 應答【名】おうたい(應對)に同じ。

おう-うち 御打【名】のしあはび(熨斗鮑)を云ふ。〔女の語〕

おうちやう 應長【名】花園天皇の御代の年號(紀元一九七一年)。

おう-つり 御移【名】うつり(移)四の敬稱。

おう-てう 鷗鳥【名】〔動〕かもめ(鷗)に同じ。

おうてん-もん 應天門【名】平安城內の內裏の八省院の正門。外廓の南面にあり、七間の重閣にて、遙かに朱雀門を望む。宇治「水尾のみかどの御時に、應天門燒けぬ」

おうてん-らく 應天樂・應殿樂【名】〔音〕黃鐘(ワウシキ)調の雅樂二十一曲中の一。仁明天皇の時、應天門下に奏せしに由り、名づけたりといふ。

おう-と 首【名】おびと(首)の音便。〔古語〕

おう-と 嘔吐【名】胃の中にある飲食物を吐(ハ)戻すこと。へど。ゑづく。

おうとく 應德【名】白河天皇の御代の年號(紀元一七四四年—一七四六年)。

おうな 嫗・媼・老女【名】老いたる女。おみな。おむな。おんな。およな。〔古語〕源氏「おうなとつけて、心にも入れず、いかでそむきなんと思へり」

おう-なし 奧無し【形ク】あうなし(奧無し)に同じ。〔古語〕

おうにん 應仁【名】土御門天皇の御代の年號(紀元一二一二七年—一二一二八年)。

應仁の亂【句】應仁年間に、京都を中心として、細川勝元と山名宗全との間に起りし、前後十一年間の大亂。

おうにん-き 應仁記【名】〔書〕應仁の亂の始末を記せるもの。一卷。著者不詳。

おうはう 應保【名】二條天皇の御代の年號(紀元一八二一年—一八二二年)。

おう-はう 應報【名】〔佛〕善惡の因緣により、吉凶・禍福の果報を受くること。

おうはう-しゆぎ 應報主義【名】〔法〕『獨Vergeltungstheorie』刑罰權の基礎に關する主義の一。刑罰を犯罪に對する應報なりと說くもの。

おうばひがさ 御乳母日傘【名】兒を乳母に抱かせ、日傘をさしかけて、大切に育つること。その日傘には、さまざまの繪を書きたるものにて、延寶・天和・貞享の頃大に行はれたり。おんばひがさ。骨董集「今の世、いやしき者の、人に誇るに、おうば日傘にて育ちたる者ぞ、といふ諺あり」

おう-ぶつ 應佛【名】〔佛〕おうしんぶつ(應身佛)に同じ。

おう-ぶん 歐文【名】一歐羅巴諸國の文字。よこもじ。「歐文電報」二〔文〕歐陽修の作れる文章。

おう-ぶん 應分【名】『分際に應ずる意。くわぶん(過分)參照』よきほどなること。身分にかなふこと。ぶんさうたう。

おうぶん-わよくやく-たい 歐文直譯體【名】西洋文學の輸入と共に起りたる一種の文體。例へば「云云することのそれが、より多く待設けられつつある」の類。

おうぶん-でんぱう 歐文電報【名】歐文にて記したる電報。(和文電報に對して)

おうぶん-りやくがう 歐文略號【名】電報の受信人が自己の住所・氏名に常に用ふる歐文の略號。この略號を常用せんとする受信人は、その配達を受くべき電信局所に登記料を納めて、登記を經るを要す。

おう-へ 御上【名】奧の間(マ)。かみのま。(勝手の方より指していふ) 曾根崎心中「おうへには亭主夫婦、上がり口に料理人」

おうへ-さま 御上樣【名】主人の妻の敬稱。きのふはけふの物語「夫婦ござある所にて、御返事を、こまごまと申し上ぐる。おうへさまの御まへでは申しにくい、と云ふ」

おう-へん 應變【名】不慮の事に應じて、便宜に處置すること。「臨機應變」

おうへん-りう 應變流【名】刀法の一派。小田義久を祖とす。

おう-ぼ 應募【名】募集に應ずること。

おうぼ-かかく 應募價格【名】〔商〕公債・又は株式などの募集に應じ、その額面價格に對して、實際に拂込む金額。例へば額面價格は百圓にして、拂込額は九十五圓なる類。

おうぼ-かぶきん 應募株金【名】〔商〕募集に應じて拂込みし株金の總額。應募資本金。

おうぼ-しほんきん 應募資本金【名】〔商〕前條に同じ。

おう-ぼ-しや 應募者【名】募集に應ずる人。

おう-ほふ 應法【名】〔佛〕法に應じ、理に背かぬこと。如法。

おうほふ-しやみ 應法沙彌【名】〔佛〕三沙彌の一。正しく沙彌たる年齡に相當する沙彌、即ち十四歲乃至十九歲の僧。

おうま-あづかり 御馬預【名】江戶幕府の職制の一。御召馬預(アヅカリ)と共に若年寄の管下に屬し、官馬の飼養・調習等の事を掌りしもの。

おうま-がた 御馬方【名】江戶幕府の職制の一。將軍の廐のことを掌りしもの。

おうま-べったう 御馬別當【名】おめしうまあづかり(御召馬預)に同じ。

おう-めい 鷗盟【名】『鷗のしづかに群居せるに譬へていふ』俗世間を離れたる會盟、即ち詩文の會などの類。

おう-もと 御門【代】おもと(御許)の訛。

おう-もん 應門【名】一支那にて、王宮の正門。二門・玄關などにゐて、來訪者の取次をなすこと。

おう-もん 應問【名】質問に應じて答ふること。こたへ。「王。

おう-や 歐冶【名】〔人〕支那の越國の鍛冶。

おう-やう 鷹揚【名】おほやう(大樣)の訛。孔陣八景「さも鷹揚に來らるる」

おう-やうしう 歐陽修【名】〔人〕支那宋の學者。字は永叔、醉翁また六一居士と號す。仁宗に仕へ、累官して、太子少師となり、熙寧五年卒す。年六十六。文忠と諡せらる。新唐書・五代史・集古錄・歐文陽忠公集・六一居士詩話等の著あり。

おう-やうじゆん 歐陽詢【名】〔人〕支那唐の書家。字は信本。王羲之の書法を習ひ、遒勁なる一體を開く。卒する年八十五。そ

の子通、また能書を以て父と名を齊しうし、その書法、大小歐陽體と稱せらる。

おうゆ 應用【名】〔佛〕衆生救濟のための應現の妙用。太平記「應用無邊に候へば、いづれをまさり、いづれを劣れりとは申しがたく候へども」

おうよう 應用【名】物事又は道理を、場合場合に應じてうまく用ふること。活用。

おうようくわがく 應用科學【名】『英 Applied science』一定の原理を實際に應用するを目的とする科學、即ち知識その物のみならず、又これを利用して、人生のある目的を達する手段として講究する性質の科學。例へば工學・農學・醫學・航海學などの類。

おうようくわがく 應用化學【名】『英 Applied chemistry』〔化〕Ⅰ化學中の應用に關する部分のみを研究する學科。生物化學・農藝化學・工業化學等に分つ。Ⅱ(特に)こうげふくわがく(工業化學)に同じ。

おうようけいざいがく 應用經濟學【名】〔經〕國民の經濟生活に關して、國家の方針を研究する學科。(純正經濟學・理論經濟學に對して)

おうようすうがく 應用數學【名】〔數〕理論を主とせず、自然科學上の計數等のごとき實地に應用する數學。例へば力學・熱學・航海學・測地學などの類。

おうようびじゅつ 應用美術【名】〔美〕賞玩に供するを主とせず、實用品に適用せしむる美術。例へば繪畫の圖按に於けるが如き類。

おうようりきがく 應用力學【名】きかいがく(器械學)に同じ。「に同じ。

おうよる 奥寄る【動四自】あうよる(奥寄る)

おうらごてん 御裏御殿【名】うらかた(裏方)の敬稱。「敬稱。

おうらさま 御裏樣【名】うらかた(裏方)の

おうらやまぶき 御裏山吹【名】『御裏山に、お美しきをかけていふ』美しきことの隠語。〔俚語〕 轉おうらやまぶき、日かげの紅葉」

おうりしゅう 應理宗【名】〔佛〕おうりゑんじつしゅう(應理圓實宗)の略

おうりやうき 應量器【名】〔佛〕『梵 Pâtra(鉢多羅)の譯語。腹の分量に應じて食ふ器の意』佛及び佛教の僧が人の布施し供養する物を受くるに用ふる器。鐵・土又は木を用ひて作り、色は黑・青・赤を限り、大さは五合より三升まで種種あり。應器。鉢。

おうりよう 應龍【名】『廣雅に「有レ翼曰二應龍一」とあり』つばさのある龍。

おうりゑんじつしゅう 應理圓實宗【名】〔佛〕『その說くところ、すべて理に應じて圓滿・眞實なりとの意』ほっさうしゅう(法相宗)の異稱。應理宗。

おうる 甌窶【名】高くして、狹く傾きたる「土地。

おうろ 歐露【名】〔地〕歐羅巴にある露西亞の領土。(東露に對して)

おうわ 應和【名】村上天皇の御代の年號(紀元一六二一年—一六二三年)。

おうゑん 應援【名】たすけ。加勢。援兵。

おえき 御益【名】おためおえき(御爲御益)を見よ。

おえききん 御益金【名】天保中、幕府の歲出入に不足を生ぜしとき、金銀を改鑄して、わづかに國用を辨ぜし、その利益。

おお【感】Ⅰ應答の聲。親狎「神主・祝部(ハフ)等(ラ)、唯(オオ)と申す」Ⅱ笑ふ聲。Ⅲ『笑ふ聲より轉じたるもの』神樂の時、曲の終りに發する聲。神樂「阿知女、於於、於於」Ⅳ思ひ當りて發する聲。おう。おおう。Ⅴ咄などの呻(ウメ)く聲。おおん。

おおい【感】遠くに行く人を呼びかくる聲。狂言(法師頭)「おおい。おおい、田舍者、返せ、狂言(昆布布施)「おお返せ」

おおう【感】おおⅣに同じ

おおかあ(英 Odine)【名】〔美〕西洋繪具の一。鐵の酸化物にて染めたる粘土質の黃色の繪具。永久に變色せず。顏料に用ひらる。おおくる。

おおくる(英 Ocire)【名】〔美〕前條に同じ。

おおけすとら 管絃樂(英 Orchestra)【名】Ⅰ(音)洋樂にて、一定の組織によりて、管絃樂器並に太鼓類を合奏する一種の音樂隊。おるけすとら。Ⅱ洋式の劇場・公開場等に設けたる音樂演奏の席。おるけすとら。

おおーさ【感】おうさに同じ。

おおしす(英 Oasis)【名】『もと亞弗利加のサハラ(Sahara)地方の膏地を呼ぶ名稱』沙漠中にて、多少泉水の湧出し、附近に樹木の茂れる地。沙漠を横斷する隊商等は、此處を途中の休息場となす。おあしす。

おおすとらしや(英 Australia)【名】〔地〕亞細亞の東南海に存在する諸島國の總稱。濠洲(オオストラリヤ)及びニュウギニヤ・ニュウジイランドを包括す。

おおすとらりやーしう 濠斯太剌利亞洲・濠洲(英 Australia)【名】〔地〕世界六大陸の一。面積約四十九萬方里、大陸中最も小なるもの。太平洋と印度洋との間に介在し、全部英國領たり。おせあにや洲。大洋洲。

おおすとりや 澳太利・墺地利【名】〔地〕『西・葡 Austria(獨 Oeste reich の訛)』歐羅巴洲の中央部に位する帝國。次條を見よ。

おおすとりやはんがりい 澳太利洪牙利・墺地利匈牙利(英 Austria-Hungary)【名】〔地〕歐羅巴洲の一大帝國。墺太利帝國と匈牙利王國と合併して、墺太利皇帝は匈牙利國王を兼ぬることとなれるもの。墺太利の首府はウィンナ。匈牙利の首府はブタペスト。あうきようこく。あうすとりあはんがりい。

おおーおさへ 御押【名】さされたる杯を押へて、ささしたる人に、重ねて飲ますること。おさへ。

おおそりちい 權威(英 Authority)【名】信ずべき據りどころ。大家の說。權威。泰斗。典據。官憲。「斯道のオオソリティイ」

おーおそれながら 御恐ながら【副】おそれながら(恐ながら)に同じ。長門本平家「おおそれながら、君もくやしくこそ渡らせたまはんずらめ」

おおぢん(英 Odin)【名】北歐神上の最上神。知慧及び勇氣を賦與すといふ。

おおとーけえき(英 Oat-cake)【名】オオトミイルにて製したる菓子。

おおとーばい(英 Auto-bicycle の略)【名】『自動自轉車の意』小き石油發動機を取附けたる自轉車。乘手は、足を動かして運轉するを要せず、又、速力極めて迅し。

おおとーぼおる(英 Auto-ball)【名】自動車に乘りて行ふ打毬。

おおとーみいる(英 Oat-meal)【名】燕麥(カラスムギ)の皮を去り、焙爐(ホイ)にて乾かして碾(テ)割りたるもの、又それを煮て作れる粥。

おおとーむぎ(英 Oat)【名】〔植〕からすむぎ(燕麥)に同じ。

おおなめんと(英 Ornament)【名】〔美〕裝飾用として描き、もしくは彫刻したる模樣の總稱。繪畫・建築・印刷物その他、工藝品等にひろく用ひらる。唐草模樣の如く自然物を用ひたるもの、また藝術家の想像に成る種種の線を集めたるもの等、種種あり。

おおにそぷたあ(英 Ornithopter)【名】飛行機の一。機に備へられたる羽翼の羽ばたきによりて、空中に支へらるるもの。

おおばあ【名】次條の略。(俚語)

おおばあーこおと(英 Over-coat)【名】洋服の外套。おおふるこおと。おおばあ。

おおばあーしゅう(英 Over-shoe)【名】雨雪の時などに、濕氣を防ぐために、普通の靴の上に重ね穿つ、ゴム製の靴。

おおーふおるど【名】(佛 Eau-orte)〔美〕金屬版の一種。版の全面に蠟を塗り、その上に彫刻用の針を用ひて繪を描きたる後、硝酸と水とを溶かしたる液の中に浸せば、針の跡にその液の浸潤して、腐蝕作用を起し、凹版を生ずること、エンチングに同じ。

おおふる-こおと【名】おおばあこおとの訛。

おおむ(英 Ohm)【助數】〔理〕『「オオムの定律」を發見したる獨逸の學者の名に因む』電氣抵抗の單位。起電力一ボルトに電流一アンペヤの通ずるときの抵抗。

おおむーけい オオム計(英 Ohmmeter)【名】〔理〕電氣抵抗測定器の一種。手動發電裝置を有し、電磁作用に依りて、簡便に電線路・電氣機械等の絕緣抵抗を測定するに用ふ。

おおむーのーていりつ オオムの定律(英 Ohm's law)【名】〔理〕電流の强さは電動力に正比し、抵抗に反比すといふ定律。第

十九世紀における獨逸の物理學者オオム（Georg Simon Ohm）氏の發見せしもの。

おおん【感】唖などのうめく聲。おお。おん。

おおら【代】卑下していふ第一人稱。おら。

おおーらい（英All right の訛）【感】仕度整ひたればもはや差支なし、などいふ意のかけごゑ。（停車場にて汽車の發する時などに、掛員の用ふる語）

おおる（英Oar）【名】端艇を漕ぐに用ふる「櫂。」

おおるごおる（蘭Orgel）【名】〔音〕■**おるがん**に同じ。■西洋樂器の一。樂譜に合はせて、小針を植ゑたる圓筒を、彈機（ぜんまい）にて廻轉し、櫛齒狀の銅鐵に觸れしめて、音を發す。近時、置時計等に裝置す。おるごる。自鳴琴。

おおれおる（佛Aureore）【名】上帝又は聖徒の頭上にある圓形の光明。

おおろら（英Aurora）【名】■希臘（ギリ）の神話にて、曉をつかさどるといふ女神。■〔地〕きょくくわう（極光）に同じ。

おーが 大鋸【名】おほが（大鋸）の略。

おーかあ【名】はは（母）を云ふ。〔京都・大阪の小供の語〕

おーかうぞり 御髮剃【名】かうぞり（髮剃）の「敬稱。」

おーかうだい 御香臺【名】めしわん（飯椀）を云ふ。〔下總國の方言〕

おーかうばこ 御香箱【名】女兒の陰門。〔俚語〕

おーかか【名】鰹節、又その削りたるもの。〔女「の語」〕

おーかか【名】■はは（母）を云ふ。〔周防國・長門國・越後國の方語〕■つま（妻）を云ふ。〔御嬶〕〔周防國・長門國の方言〕

おかかへすまふ 御抱相撲【名】かかへすまふ（抱相撲）の敬稱。

おかかへーもの 御抱者【名】かかへもの（抱「者」）の敬稱。

おーかがみ 鏡餅【名】おかがみもち（御鏡餅）の略。曾我會稽山「床に移せば、女子ども、供へのおみき・お鏡に、向ふ心のますぐなる」

おかがみびらき 御鏡開【名】かがみびらき（鏡開）の敬稱。

おーかがみもち 御鏡餅【名】かがみもち（鏡餅）の敬稱。おかがみ。

おがくづ 大鋸屑【名】大鋸（おが）にて材木を挽く時に出づる屑。おがくづ。

大鋸屑も、言へば言はる【句】『無用なる大鋸屑も、有用なりといへばいはるる意』物事は、道理の附けやうにて、いかやうにも言はる。〔諺語〕

おーかけ 御掛【名】■小供の著くる前掛。■しる（汁）を云ふ。〔女の語〕

おーかげ 御蔭【名】■神佛のたすけ。加護。■他人よりの恩惠。

おかげーさま 御蔭樣【名】おかげ（御蔭）の敬稱。

おかげーまゐり 御蔭參【名】『路金を持たず、沿道の人の助力に依りて參詣する意』ぬけまゐり（拔參）に同じ。

おーかこ 御圍【名】かこひもの（圍者）の略。〔俚語〕浮世床「さあさあ、見さっし、いかいこと女が揃った。ありや、ありや、おかこまで出て來たぞ」

おーかご 御駕籠【名】■かご（駕籠）の敬稱。■小供の遊戲の一。二人、各自に右の手にて、左の二の腕を掴（つか）みたるを出しあひ、左手にて、互に相手の右腕を握りて、四つ目に組み、その上に他の一人を跨らせて歩むもの。

おーかさ 御蓋【名】きざら（木皿）に同じ。

おーかさね 御重【名】小供の物を乞ふ時、兩手の掌をかさぬること。〔女の語〕

おーかーさま 御上樣【名】おかみさま（御上樣）の略。おかっさま。冥途飛脚「むむ、忠三殿に、おかさまは無かったが、こなたは、誰でばしどざるぞ」

おーかざり 御飾【名】■神佛の前の裝飾又は供物。■正月の七五三（シチゴサン）かざり及び松かざり。俗曲（かぞへ歌）「一つとや、ひと夜明ければ、賬かで、おかざり立てたる、まつかざり」■『正月の七五三（シチゴサン）かざりに見立てて蜿曲にいへる語』衣服の汚れ破れて垂れさがれるもの。〔俚語〕

御飾の下を餘計潛（クグ）ってゐる【句】年齡を重ぬること多くして、經驗に富みたる譬。〔諺語〕

おかし【形二】をかしを見よ。

おーかしまい 御借米【名】江戸幕府より旗本・御家人（ゴケニン）等に扶持米を下付したるは、春・夏に四分の一づつ、冬に二分の一と定まれる内の、春と夏との分。

おかす 置かす【動四他】おく（置く）の敬語。〔古語〕萬葉「二つの石を…みづからおかしたまひて」

おかす 犯す・侵す・冒す【動四他】をかす（犯す）を見よ。

おーかず 御數【名】『數數取合はするよりいふ』飯の菜（イ）。〔女の語〕

おかずーごのみ 御數好【名】おかずの好ききらひをすること。さいごのみ。

おーかた 御方【名】■他人の敬稱。狂言（三人片端）「おかた、名殘が惜しけれど、ようらや濱の手ぐり船が、急ぐほどにの、やがて來（コ）うぞい」■貴人の子息の部屋住（ヘヤ）なる者の敬稱。

おかたーうち 御方打【名】正月十四日に、新婚の家に亂入して舞踏し、酒肴を出さしめてもてなさしむること。甲斐國の風俗なりといふ。

おかたーごしよ 御方御所【名】將軍家又は大臣家の長男にて、未だ家督を繼がざる者。おかたずまひ。宣胤卿記「一條殿、同御方御所」

おかたーざむらひ 御方侍【名】『女に比して嘲りて呼ぶ語』武事に携はらざる侍。例へば武家に使はるる右筆・茶坊主など、又は公卿・醫者に使はるる侍。

おーかたーじけ 御忝【貶】『かたじけはかたじけなしの略』忝き感じ。浮世風呂「幸（カ）さん、おかたじけ、こいつはいいなら」

おかたーずまひ 御方住【名】おかたごしよ（御方御所）に同じ。

おかたーばうちやう 御方庖丁【名】『鍛工がその妻に手傳はせて造りしことあるによりていふとぞ。おかた（御方）■を見よ』和泉國の堺より出だす庖丁。

おかたまーのーき 御賀玉木【名】『をかたまのきの音に附會したる語』としぎ（年木）に同じ。

おーかため 御固【名】かため（固）四の敬稱。

おかためく 御方めく【動四自】おかたの如く見ゆ。高貴の人の妻らしく見ゆ。一代女「もの柔く、人のおかためきたるしかけ」

おーかち 御徒【名】おかちめつけ（御徒士目附）の略。

おーかちん【名】■もち（餅）を云ふ。かちん。〔東京の語〕■間食に食ふ菓子。〔京都・大阪の小供の語〕

おかちーめつけ 御徒士目附【名】かちめつけ（徒士目附）に同じ。「云ふ。〔女の語〕

おーかちやう 御蚊帳【名】かちやう（蚊帳）を

おーかつ 御鰹【名】〔動〕かつを（鰹）を云ふ。〔女の語〕「の訛。」

おかっーくづ 大鋸屑【名】おがくづ（大鋸屑）

おかっーさま 御上樣【名】おかみさま（御上樣）の訛。狂言「つり女」「釣ろよ、釣ろよ、おかっさまを釣ろよ」

おーかったるい【形】『かったるいを見よ』不足なり。十分ならず。おけったるい。〔俚語〕

おかっーちやん【名】おかみさま（御上樣）の訛。〔駿河國靜岡の方言〕

おーかは【名】『御厠（ハヤ）の略』小供の便器。おまる。〔女の語〕

おーかはん 御母樣【名】『はんはさん（樣）の轉』はは（母）を云ふ。〔京都の女の語〕

おかぴ（英Okapi）【名】〔動〕偶蹄（グウテイ）類に屬する獸。麒麟（キリン）の類。鹿に似たれども、角なくして、旋毛あり。頸太くして鹿より短し。亞弗利加の森林中にて近時發見せしものなり。

おーがーひき 大鋸引【名】こびき（木挽）に同じ。

おーかーひこ 御蠶【名】■〔動〕かひこ（蠶）の敬稱。おこさま。〔俚語〕■絹の織物。〔俚語〕博多小女郎波枕「施しの一錢を差出しながら、はあ、この乞食は、おかひこを著てゐる」

おかひこーぐるみ 御蠶纏【名】絹製の衣服を、身にまとひてあること。衣服に奢れること。

おーかぶ 御株【名】その人特有の癖。〔俚語〕

おかぶとーもち 御兜持【名】將軍の兜を持つ役。「稱。」

おーかぶら 御蕪【名】〔植〕かぶら（蕪）の敬

おかべ 御壁【名】㊀『白壁に見たてていふ』とうふ(豆腐)を云ふ。〔女の語〕 東海道名所記「焼豆腐今一しほに味ぞよき名さへおかべの宿とおもへば」 ㊁豆腐の滓(カラ)の、熬煮(ニイリ)にしたるもの。〔肥前國長崎の方言〕

おかぼ【名】〔植〕かぼちや(南瓜)を云ふ。〔關西の女の語〕

おかま 御釜【名】㊀かま(釜)の敬稱。㊁下女。〔俚語〕 大倭故事「下女を、俗におかまといふ」 ㊂しり(臀)に同じ。〔俚語〕 ㊃なんしよく(男色)に同じ。〔俚語〕 ㊄つま。〔俚語〕 本朝俚語「東國の俗、妻を呼んでおかまといふことは」

お釜を起す【句】『新に竈(カマド)をきづく義』はたらきて、身代をゆたかにす。家を起す。〔俚語〕

お釜を掘る【句】雞姦を行ふ。〔俚語〕

おかまご 御竈子【名】〔動〕次條の略。

おかまこほろぎ 御釜蟋蟀・御竈蟋蟀・竈馬【名】〔動〕『夜間多く竈の邊に來りて鳴くよりいふ』蟋蟀の一種。體は裸出し、滑かにして赤褐色を帶ぶ。觸角は長くして絲のごとく、後脚よく發達して巧みに跳躍す。夏、床下等の陰地に棲みて、夜間、廚房・竈の傍などに來る。聽覺なく、從って鳴器を有せず。いいぎり。うさぎむし。えびこほろぎ。えんのしたこほろぎ。かまどうま。おさるこほろぎ。おかまご。

おかまのとり 御蒲鳥【名】〔動〕めじろ(目白)に同じ。

おかみ 龗【名】龍。たつ。龍神。龍王。〔古語〕 萬葉「わが岡のおかみにいひて降らせたる雪のくだけしそこにちりけむ」 紀「龗、於箇美」 豐後風土記「蛇龗、謂二於箇美一」

おかみ 御上【名】㊀天皇・朝廷又は諸侯。政府。(臣下・臣民などよりさしていふ) ㊁上流社會の戸主又はその家族。(婢僕よりさしていふ) ㊂おかみさま(御上樣)の略。㊃料理屋・遊女屋・待合茶屋・旅宿などの女主人。〔女亭・女將〕〔俚語〕

おかみさま 御上樣【名】中流以上の人の妻の敬稱。おかみ。おかっさま。おかさま。

おかみさん 御上樣【名】『おかみさま(御上樣)の音便』他人の妻を親しみ呼ぶ稱。

おかみそり 御剃刀【名】かうぞり(髪剃)を見よ。

おかみのじんじや 意上奴神社【名】因幡國岩美(イハミ)郡津ノ井(ツノヰ)村大字香取(カトリ)に鎭坐せる式内の神社。

おかむいざき 御神威崎【名】〔地〕後志(シリベシ)國積丹(シヤコタン)郡の西北端にある岬。長さ七町・高さ三百尺餘。巨岩屹立し、北西端に燈臺あり。附近の海は、古來船行の難所として知らる。おかもいざき。

おかん 御燗【名】酒の燗(カン)。かん。 堀河波鼓「お燗を見てと引受けて」

おかん 御羹【名】正月中の節の食物。〔德川時代の遊廓の語〕 洞房語園「おかん、正月中の節の食物のことなり…今は絶えていはず。かんは羹といふて、あつものといふことなり」

おかん 御母樣【名】『おかはん(御母樣)の略』はは(母)を云ふ。〔攝津國・和泉國・河内國及び播磨國の方言〕

おかんあげ 御髪上【名】かんあげ(髪上)の敬稱。みくしあげ。おぐしあげ。 若風俗「數多のおもと人・おかんあげ」

おかんじん【名】おくわんじん(御勸進)を見よ。

おかんだち 御神立【名】かんだち(神立)の敬稱。

おかんばば 御母婆婆【名】攝津國の住吉邊にて半夏生(ハンゲシヤウ)の日に作る一種の饅頭(マンヂユウ)。饂飩粉(ウドンコ)に、ささげの餡(アン)を入れて、蒸したるもの。

おかめ 阿龜【名】㊀おたふくめん(阿多福面)に同じ。㊁おたふくめんに似たる顔の女を嘲りていふ語。今戸燒のお龜。おたふく。㊂おかめそば(阿龜蕎麥)の略。

今戸燒(イマドヤキ)の阿龜【句】前條㊁に同じ。いまどやき。〔俚語〕

おかめざさ 阿龜笹【名】〔植〕ごまいざさ(五枚笹)に同じ。

おかめそば 阿龜蕎麥【名】種物(タネモノ)の蕎麥の一種。蒲鉾・椎茸・海苔などを入れたるもの。おかめ。

おかもいざき 御神威崎【名】〔地〕おかむいざき(御神威崎)に同じ。

おかもじ 御母文字【名】かもじ(母)に同じ。〔女の語〕

おかもじさま 御母文字樣【名】前條の敬語。〔女の語〕 松風村雨束帶鑑「お主に袖を引かれ初めたる阿漕(アコギ)が浦、おかもじ樣、恪(リン)もじに、まづお暇といふ離」

おかり【動辰變自】置けり(置きてあり)の訛ならん。〔古語〕 萬葉「しほ船のおかればかなし、さ寢つれば人ごとしげしなほとかもしむ」

おかりな(英Ocarina)【名】土製又は金屬製の中空の樂器。小孔を穿ちて吹奏す。我が國の玩具なる鳩ポッポに似たり。

おかる 阿輕【名】『假字手本忠臣藏の七段目に、阿輕が、二階にて酒の醉をさましゐる事あるよりいふ』にかい(二階)を云ふ。〔盗賊の隱語〕

おかれい【形】おそろし(恐ろし)を云ふ。〔伊勢國の方言〕

おき 息【名】いき(息)㊀に同じ。〔古語〕

おき 沖・澳【名】㊀海又は大なる湖などの、岸より遙かに遠きところ。おきそ。㊁田野の開けて遠き處。㊂ひだり(左)に同じ。(邊(ヘ)に對して)〔古語〕 萬葉「おきつ櫂いたくなはねそへつかいいたくなはねそ」

沖な物當【句】あてにする事の確かならぬことの譬。沖のはまち。〔諺語〕

沖にも附かず、磯にも離る【句】たよるべき處のなき譬。とりつく島なし。〔諺語〕 太平記「澳にもつかず、磯にも離れたる心地して、進退歩みを失へり」

沖の飯(ハマチ)【句】「沖な物當」に同じ。〔諺語〕

沖を越える【句】『游泳術より言ひそめしなるべし』技藝など、上手になる。〔俚語〕

沖を漕ぐ【句】多く世故を經(フ)。

沖を深めて【句】行末かけて。末久しく。〔古語〕 萬葉「かくのみにありけるものを猪名川のおきをふかめてわがもへりける」

おき 起【名】㊀起くること。 千五百番歌合「あひ見てもなごりをじまのあま人はけさのおきにぞ袖ぬらしつる」 ㊁花合せにて、花札を反(カヘ)して、そのあらはれたるもの。めくりふだをめくりて出でたるも。おこし。

おき 熾・燠【名】㊀おこりたる火。おきび。㊁薪の燃えはてて、炭火のごとくになりたるもの。

おき 置【名】㊀さしおくこと。すておくこと。 浮世風呂「なんの洒落っくせえ、おきにするがいい」 ㊁能(ノウ)にて、小鼓の打方の一種。

おき 置【接尾】事を行ふに、時を隔つる意。「一時間おき」「三年おき」「一日おき」

おき 隱岐【名】〔地〕『沖にある島の意』山陰道八箇國の一。出雲國の北方の海中にある群島より成る。知夫(チブ)・海士(アマ)・周吉(スキ)・穩地(オチ)の四郡に分つ、全國、島根縣の管轄に屬す。嘗て後鳥羽院・後醍醐天皇の遷幸ありし處。

おきあかす 起明す【動四他】寢ねずして、夜を明す。 源氏「いとねぶたし。夜べも、すずろにおきあかしてき」

おきあがり 起上【名】おきあがりこぼふし(起上小法師)の略。 一代男「小箱をさがし、芥子人形(ケシニンギヤウ)・おきあがり・雲雀笛(ヒバリブエ)をとり揃へ…このおきあがりがそなたに惚れたかして、こけかかると云ひざま、膝枕して」

おきあがりこぶし 起上小法師【名】次條の轉訛。 鷹筑波「散れば咲く花はおきあがりこぶしかな」

おきあがりこぼし 起上小法師【名】次條の略。 狂言(長光)「なに、おきあがりこぼしぢや、小供たちの土産に、これがよからう」

おきあがりこぼふし 起上小法師・不倒翁【名】小供の玩具の一種。達磨(ダルマ)の形に造りたる土の人形の、底におもりをつけたるもの。いかに投出すとも、やがて起きあがりて倒るることなし。おきあがりこぼし。おきあがりこぶし。おきあがり。

おきあがる 起上る【動四自】臥したる者、すわり又は立つ。起きかへる。おきなほる。 源氏「日高くなれど、おきあがりたまはねば」

おきあげ 置上【名】一器物を高く置くために、その下に他の物を置くこと。二彫刻・蒔絵などの、模様の部分を、地(ヂ)より高くせるもの。〔置揚〕

おきあげにんぎやう 置上人形・置揚人形【名】木彫(リホ)の上に置上(アオキ)の著色を施せる人形。元祿の頃に流行せり。

おきあさり 沖淺蜊【名】〔動〕あさりの一種。殼(カラ)厚くして毛多く、種種の斑あり。

おきあぢ 沖鰺【名】〔動〕一鮃(ヒラ)の幼魚。しらぐち。二はたはた(鰰)に同じ。

おきあはせ 置合【名】程よく取合すること、又その物。とりあはせ。配合。

おきあひ 沖合【名】一海の沖の方。二次條の略。

おきあひ-せんどう 沖合船頭【名】漁獲に從事する時、船の運用又は漁具の使用等の總指揮に任ずる者。おきあひ。

おきあひ-ぶね 沖合船【名】數艘の船が連合して漁獲に從事する時、指揮者の乘れる船。

おき-あふ 起合ふ【動四自】起出でて出あふ。著聞「或所に偸盗入りたりけり。あるじ、おきあひて、歸らん所を打ちとどめんとて」

おき-あみ 置網【名】まちあみ(待網)に同じ。置網を云ふ【句】間接に諷して言ふ。〔俚語〕

おき-いし 置石【名】一風致を添ふるために庭などにすゑおく石。二砌(リキ)の石。三圍碁にて、うは手に向ひて、あらかじめ碁盤の表に配りおく碁石。おきご(置碁)參照。

おき-いた 置板【名】船の吾妻表(アヅマオモテ)の一部の名目。

おき-いだす おき出す【動四他】だしぬく(出抜く)に同じ。〔俚語〕十訓「かうほどにおきいださるる事、左右(ヒダリ)に及ばずかたきにこそあれとて」

おき-いづ 起出づ【動下二自】臥しゐたる人、起きて出づ。新千載「初霞の起きいでて見れば白妙の衣手さむき月のかげかな」

おき-うしなふ 置失ふ【動四他】物を置きて、そのありかを失ふ。おきどころを忘る。

賴政集「こひこひてまれにうけひく玉づさをおきうしなひてまた嘆くかな」

おきえん 置緣【名】据ゑおく緣。すずみだい。しやうぎ。おきざ。

おき-おき 起起【名】目ざめたるままなること、又その時。九重「おきおきの鏡するどしけさの秋」

おき-がかり 沖掛【名】沖に碇泊すること。博多小女郎波枕「申しきかする趣有りがたくも承れ。一、沖がかりの大船に通路を求め」

おき-かき 熾搔・燠搔【名】一熾火(ヒオキ)を搔立て又は搔寄するに用ふる道具。鐵にて作り、柄を籐などにて卷く。ひかき。二じふのう(十能)に同じ。

おき-がき 沖牡蠣【名】〔動〕沖に產する牡蠣。どぶ貝に似て扁からず。

おき-がけ 起掛【名】おきしな(起しな)に同じ。

おき-かご 置籠【名】すゑこ(据籠)に同じ。

おき-がた 置形【名】布帛の模樣をあらはすに、染めずに、形紙(カタ)にて繪の具を擦りつけたるもの。(そめ形に對して)

おき-かはる 置代はる【動四自】かはりて置く。新古今「逢ふことをおぼつかなくてすぐすかな草葉の露のおきかはるまで」

おき-かふ 置換ふ【動下二他】一おきかはらしむ。玉葉「散ればかつ風の跡よりおきかへて落つるともなき萩の下露」二質物などを、これと彼れと、とりかへて預く。

おき-かへ 置換【名】一これとかれとを置きかふること。二あらたに物を質におきて、前の質物を出すこと。〔俚語〕三〔化〕『英Substitution』一の物質が、或化合物に會ひ、これを分解して、その一成分を排出し、みづから代りて、新化合物を生ずること。四〔數〕『英Substitution』代數式の中の未知數を、他の未知數にて代へて示すこと。

おき-かへし 起返【名】田畑の荒れたるを回復すること。

おき-かへる 起返る【動四自】おきあがる(起上る)に同じ。

おき-がほ おき顏【名】『人の命のはかなきを草葉におく露の消えやすきに譬へていふ』かりの世に生きて居る樣子。謠曲

滿經「とても消ゆべき露の身を、猶おき顏に浮草の波にさそはれ」

おき-がらし 置枯らす【名】〔動〕かざご(笠子)に同じ。

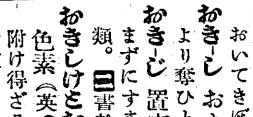
おき-からす 置枯らす【動四他】霜のおきて、草を枯らす。夫木「春雨は霜のあだとぞなりにける置からす草の萌えしおもへば」

おき-ぎす 沖鱚【名】〔動〕硬骨(コツコツ)類に屬する魚。太平洋沿岸に產し、常には深海に居り、春に至りてやや淺き所に來る。長さ一尺餘。全形やや鱚(スヽ)に似、背部は鼠色、腹部は銀白色。多く蒲鉾(カマボコ)の材料に供せらる。だぼぎす。

おき-ぐくり 置括【名】いとゆふむすび(絲遊結)に同じ。

おき-くち 置口【名】金・銀などにて緣(ヘリ)を取りて飾りたること。〔古語〕落窪「おきくちの經營に、一部づつ入れたり」紫式部日記「袖口には、おきくちをし」

おき-くむし お菊蟲・蝨蟲【名】〔動〕鳳蝶(アゲハテフ)の蛹(サナギ)。繭もしくは巢を造らず、ただ硬皮におほはれ、安全なる場所を選みて懸垂す。ある時期に羽化して蝶となる。



（しむくきお）

おきくものがたり お菊物語【名】〔書〕元和の役、大坂城内に仕へしお菊といふ女の、當時見聞せる事どもを、ありのままに筆記せるもの。一卷。おあん物語と合刻す。

おき-くら 置座【名】物を載せおくところ。たな。臺。〔古語〕祝詞「千座(チクラ)の置座に置き足らはして」

おきくるみ 置くるみ【名】開闢の神。〔アイヌの話〕

おき-ご 置碁【名】圍碁にて、技倆の劣れる方の人が、最初に二目以上を置きて打つこと。その內、九目だけ置くを井目(モクイ)といひ、それ以上置くことは稀なり。

おき-ごたつ 置火燵・置炬燵【名】行火(アンクワ)の如く匣(ハコ)の內に爐を設けて、座上に置くやうに作りたる火燵。(据火燵に對し) 蕪村「春をしむ宿や近江の置火燵」

おき-ごち 沖東風【名】海邊にて。東北東より吹きくる風。寅の風。

おき-ごとの-しろ 沖鰶【名】〔動〕にしん(鯡)に同じ。

おき-こひ 置鯉【名】祝の席に据置く鯉。國姓爺「今日祝言の大吉日、式作法まで敷島の大和をうつす座敷の飾り…置鳥置鯉」

おき-こむ 置籠む【動下二他】くまなく置きわたす。滿面に置く。夫木「秋の野のちくさの色も枯れあへぬに露おきこむる夜はの初霜」

おき-ざ 置座【名】おきえん(置緣)に同じ。

おき-さく 沖放く【動下二自】沖の方に遠ざかる。〔古語〕萬葉「おきさけて漕ぎくる船へつきて漕ぎくる船」

おき-さはら 沖鰆・瀛鰆【名】〔動〕さはらの一種。體長六七尺。我が國東南海に產す。美味ならず。

おき-さより 沖鱵【名】〔動〕だつに同じ。

おき-ざり 置去【名】すておきて去ること。おいてきぼり。おきずて。

おき-し おき師【名】金錢授與の際、橫合より奪ひとる掏兒(リス)。

おき-じ 置字【名】一漢文を和讀する時、讀まずにすます文字、即ち「矣」「焉」などの類。二書翰文にて、副詞・接續詞等の文字。

おきしけとおん-しきそ オキシケトオン色素(英Oxyketone dyes)【名】直接に染附け得ざるアリザリン屬染料は、これに屬す。諸種のアリザリン屬染料は、これに屬す。

おき-しじみ 沖蜆【名】〔動〕瓣鰓(ベンサイ)類に屬する軟體動物。殼は楕圓形、蝶番(チヤツツ)の齒は三枚、表面は黃褐色の表皮に被はれ、內面は白し。我が國中部・南部に產す。

おき-しな 起しな【名】朝、寢床を離れたるすぐの時。おきがけ。おきぬけ。

おき-しほ 置潮【名】止(ヤ)むべき好機會。狂言「三人片端」「好いおきしほもござったれども、又、取らう取らうと大欲にかかつて」

おき-じほ 沖潮【名】沖なる潮。九重「おきじほの早瀨を戀ふや蓼の雨」

おき-じんじや 隱岐神社【名】隱岐國海士(アマ)郡海士村に鎭坐せる神社。祭神は後鳥羽天皇。

おき-じやうるり 起淨瑠璃【名】一曲の淨瑠璃の前置として語る、一段落の文句。芝居の所作事(ショヨ)にていへば、幕あきて

未だ俳優の出ぬうちに、山臺(ダイ)に太夫と三味線ひきと居ならびて語る文句の如き類。これを語りをへて後のきっかけより、揚幕(マク)あがり、俳優、花道にあらはる。

おき-じやく 置尺【名】織物などの寸尺をはかるに、疊の上などに置きて、物さしをあてがふこと。(もち尺に對して)

おき-しるす 置記す【動四他】書きとめておく。倭訓栞「おきしるす。日本紀に、存注を訓めり。今、簡牘、多く存字を用ふるは、この義なり」

おき-す 置簀【名】ぬき(貫簀)の類。

おき-す 沖洲【名】おきつす(沖津洲)に同じ。國姓爺「沖洲にすだく浦千鳥汐の干潟を」

おき-すう 置据う【動下二他】ものをする。置く。

おき-すずき 沖鱸【名】〔動〕あら(嶋)に同じ。

おき-ずて 置捨【名】■置きたるままにて、取あげぬこと。■おきざり(置去)に同じ。

おき-ずみ 置墨【名】頭髮のうすき部分に入れて、濃く見ゆるやうに化粧(ケワ)する墨。女の髮の生際(ハエギハ)に塗り、又、眉にひくこともあり。眉のは、別に眉墨(マユズミ)といふ。

おき-すゑ 置据【名】置きたるままに据ゑおくこと。

おき-せ 御著【名】あるじより召使の人人に給與する衣類。しきせ。

おき-せ 御被【名】茶碗などの蓋(フタ)。

おき-せん 置錢【名】■博奕(バクエキ)に賭(カ)けて張る錢。■男女の私に通ずること。〔大阪の俚語〕

おき-せんどう 沖船頭【名】海上にありて、その任務を執る船の長。

おき-そ 沖【名】「そは助辭」おき(沖)に同じ。一說に、息嘯(オキ)の略にて、風につきてのみ用ふる語なりと。〔古語〕萬葉「おほぬ山霧たちわたるわがなげくおきその風に霧たちわたる」

おき-そで 置袖【名】鎧の袖の、鞐(コシ)にて繡手(コテ)の上に掛置くやうにせるもの。近代の制にて、且つ小き袖に限られたり。

おき-そはる 置添はる【動四自】次條に同じ。古今「夕さればいとどひがたき我が袖に秋の露さへおきそはりつつ」

おき-そふ 置添ふ【動四自】置きてある上に、更に置く。おきそはる。新撰「さのみやは更けては霜のおきそはん月に涙の落つるなりけり」

おき-そふ 置添ふ【動下二自】前條に同じ。蜻蛉「おきそふる露に夜な夜なぬれこしは思の中にかわく袖かは」

おき-そふ 置添ふ【動下二他】おきそはす。後拾遺「八重菊に蓮の露をおきそへて九しなまでうつろはしつる」

おき-そむ 置初む【動下二自】おきはじむ。夫木「おきそむる露の白玉枝ながらみかきが原の萩の初花」

おき-そむ 置初む【動下二他】おきはじめしむ。古今「露ならぬ心を花におきそめて風吹くごとに物思ひぞつく」

おき-たか-なす 置高爲す【動四他】高く積みおく。〔古語〕觀佛「くさぐさの物を、横山の如くおきたかなして」

おき-たがふ 置違ふ【動下二他】おきちがふ(置違ふ)に同じ。蜻蛉「はちすにも玉ぬよとこそ結びしか露は心を置きたがへけり」

おき-たがへ 置違【名】おきちがへ(置違)に同じ。

おき-たつ 起立つ【動四自】起きあがる。おき出づ。萬葉「おきたたば母知りぬべしいでゆかば父知りぬべし」

おき-だて 置楯【名】すゑおく楯。(もち楯に對して)

おき-だな 置棚【名】座敷の都合よき場所に据ゑて、違棚(チガヒダナ)と同じ目的に使用する棚。即ち裝飾用の器具又は書畫などを載するもの。

おきたまの-かみ 興玉神【名】さるだひこのかみ(猿田彦神)に同じ。篇曲(御祭還)「その時の田作の翁は、今の興玉の神、これなり」

おき-だら 沖鱈【名】〔動〕たらの一種。形は尖鋭にして、頭部やや小く、背部の色淡く、斑紋明かにて、肉味美なり。(いそ鱈に對して)

おき-ちがふ 置違ふ【動下二他】これとかれとたがへおく。おきたがふ。

おき-ちがへ 置違【名】おきちがふること。おきたがへ。

おき-ちぢみ 起縮【名】蠶の病氣の一種。眠起の際に成長の止まりて、却りて縮少するもの。

おき-ちやくね 沖著値【名】〔商〕うんちんほけんれうこめだん(運賃保險料込値段)に同じ。

おきつ 興津【名】〔地〕■駿河國庵原(アハラ)郡にある町。もと東海道五十三驛の一。薩埵(サツタ)山の麓にありて、清見潟(キヨミガタ)に臨む。風景佳麗。避寒・避暑に適し、興津鯛を產す。清見(キヨミ)寺あり。延喜式には「息津」、十六夜日記には「沖津」と書けり。■和泉國和泉郡大津(オホツ)村にある濱。大津。小津(オヅ)。古今「君を思ひおきつの濱に鳴くたづの涛ねくればぞ有りとだに聞く」

おきつ 掟つ【動下二他】おきてす。さだむ。命ず。參考「みづしどころ・大殿の具、いとよく掟てたり」

おきつ-あらし 沖津嵐・奥津嵐【名】沖合を吹く嵐。

おきつ-ありそ 沖津荒磯・奥津荒磯【名】沖の荒磯。〔古語〕萬葉「みさごゐるおきつありそによる浪の行くへも知らず我が戀ふらくは」

おきつ-いくり 沖津いくり・奥津いくり【名】海底にある巖。〔古語〕萬葉「わたの底、おきついくりに鮑玉さはにかづきて」

おきつ-うみ 沖津海・奥津海【名】海の沖。〔古語〕夫木「おきつうみみなそこ深く思ひつつ藻引き馴らしし菅原の里」

おきつ-かい 沖津櫂・奥津櫂【名】沖にて漕ぐ櫂。一說に、左の方の櫂。(へつ櫂に對して)〔古語〕萬葉「奥津かいいたくなはねそへつかいいくたなはねそ」

おきつ-かがみ 瀛都鏡【名】十種神寶(サヒクサ)の一。

おきつ-かぜ 沖津風・奥津風【名】海の沖を吹く風。大洋を吹く風。〔古語〕

おきつ-かぢ 沖津楫・奥津楫【名】沖に居る船。一說に、おきつかい(沖津櫂)に同じ。〔古語〕萬葉「おきつかぢしはしはしふを見まくほり我がする里の隱らく惜しも」

おき-つ-き 奥津城【名】おくつき(奥津城)に同じ。〔古語〕神樂「おきつきにすめがみたちをいはひこし心は今ぞ樂しかりける」

おき-づき 置注【名】酒の酌をするとき、人の盃の膳などの上に置きてあるものに注(ツ)ぐこと。(正しくは、その人の手に盃を持たせおきて注ぐべきものとす)

おき-づき 置月【名】質におきたる月。質入れせし月。

おき-づきん 置頭巾【名】まるづきん(丸頭巾)に同じかるべしといふ。落花集(正村)「けふよりや風は心をおきづきん」

おき-つく 置附く【動下二他】■すゑおきて、他に移さず。■置くこと、習慣となる。おきなる。

おき-つくに 沖津國・奥津國【名】海上を隔てて遠き方にある國。〔古語〕萬葉「おきつくにしらせる君が染屋形(カメヤ)黄染(キヌ)の屋形神の門(ト)わたる」

おきつくり-の-いた おきつくりの板【名】まないた(俎板)に同じかるべしといふ。〔古語〕字鏡「杜、於支豆久利乃板」

おき-つけ 置附【名】常にすゑおくこと。おきすゑ。

おき-づけ 沖漬【名】小鯛・小鰺(アジ)・鰯(スキ)などやうの小魚類の脊開(セビラキ)にせるものに、諸白(ハクロ)・醋(ス)・鹽などを交へて煮て、冷して漬けたるもの。

おき-つ-こじま 沖津小島・奥津小島【名】沖の方にある小き島。おきつをじま。〔古語〕續後撰「都人おきつこ島の濱びさし久しくなりぬ波路へだてて」

おき-つ-しほ 沖津潮・奥津潮【名】沖のうしほ。大洋の潮水。〔古語〕

おき-つ-しほあひ 沖津潮會・奥津潮會【名】沖の方にて、潮流の會ふところ。〔古語〕新古今「和歌の浦や沖つ潮會に浮び出づるあはれわが身の寄邊しらせよ」

おき-つ-しほかぜ 沖津潮風・奥津潮風【名】沖を吹く潮風。〔古語〕續拾遺「住吉の松が根あらふ波のおとを梢にかくるおきつ潮風」

おき-つ-しほさゐ 沖津潮騷・奥津潮騷

【名】沖合にて、潮のさす時に、波の騒ぐこと。しほさゐ。〔古語〕萬葉「しほひなば久も我がこむいざゆかむおきつしほさゐ高く立ちきぬ」

おきつしほせ 沖津潮瀬・奥津潮瀬【名】沖にある潮瀬。〔古語〕玉葉「雲はるる磯山あらし音ふけて沖つしほせに月ぞかたぶく」

おきつしほぢ 沖津潮路・奥津潮路【名】沖合の潮の流るる路。〔古語〕新後撰「漕ぎ出づる沖つしほぢのあとの波立ちかへるべきほどぞはるけき」「島」[三]に同じ。

おきつしま 澳津島【名】〔地〕**おきのしま**(沖にある島。おきつしまね。海島。〔古語〕

おきつしま 沖津島・奥津島【名】大洋中

おきつしまね 沖津島根・奥津島根【名】前條に同じ。〔古語〕

おきつしまびと 沖津島人・奥津島人【名】沖の島に住む人。〔古語〕新古今「あけがたき二見の浦による波の袖のみぬれて沖つ島びと」

おきつしまひめのみこと 奥津島姫命・嬴津島姫命【名】宗像(ムナカタ)三女神の一。古事記には、多紀理姫(タキリヒメ)の別名とし、日本書紀の一書には、市杵島姫(イチキシマヒメ)命の別名とせり。

おきつしまもり 沖津島守・奥津島守【名】沖の島を守る人。しまもり。〔古語〕萬葉「八百日(ヤホカ)ゆく濱のまさごもわが戀にあにまさらめや沖つ島守」

おきつしまやま 沖津島山・奥津島山【名】沖にある島山。〔古語〕

おきつしらたま 沖津白珠・奥津白珠【名】沖にある白珠。海底の眞珠(シンジュ)。〔古語〕萬葉「かへるさにいもに見せむにわたつみの沖つ白珠ひりひてゆかな」

おきつしらなみ 沖津白浪・奥津白浪【名】沖のしら浪。沖に立つ白浪。〔古語〕

おきつす 沖津洲・奥津洲【名】沖合の洲。沖にある洲。おきす。〔古語〕萬葉「夏そ引くうなかみがたの沖つ洲に船はとどめむさ夜ふけにけり」

おきつすたべ 奥津棄戸【名】**おくつすたべ**(奥津棄戸)に同じ。〔古語〕紀「奥津棄戸、オキツスタベ」

おきつだひ 沖津鯛・奥津鯛【名】[一]〔動〕**あまだひ** 甘鯛)に同じ。[二]甘鯛の内臓・骨骼・眼球などを取去りて、一時鹽に漬け、後、鹽抜して乾燥せし食品。駿河國興津の産、殊に名高し。

おきつち 置土【名】[一]ある上に、更に置き添へたる土。一代女「天井に置土して」[二]〔農〕**かくど**(斧土)に同じ。

おきつづみ 置鼓【名】[一]する為おきて打つ鼓。(手鼓に對して)傾城酒呑童子「人に心を置き鼓」[二]能(ノウ)の小鼓の打ち方の一。最後に一つ「ポ」と打攻むるもの。

おきつどり 沖津鳥・奥津鳥【枕】[一]沖に棲む鳥なるより、**あぢ**(鶴)・**かも**(鴨)にかけていふ。萬葉「おきつどりあぢふの原にものふのやそとものをはいほりして」記「おきつどりかもどく島にわがいねしいもは忘れじ夜のことごとに」[二]水鳥は常におのが胸を見るが如き形して水に浮ぶものなるより、**むなみる**(胸見る)にかけていふ。記「おきつどりむなみるとき」

おきつなはのり 沖津繩海苔・奥津繩海苔【名】〔植〕沖に生ぜる繩海苔(ナハノリ)。〔古語〕萬葉「海原のおきつなはのりうちなびき心もしぬにおもほゆるかも」

おきつなみ 沖津波・奥津波【名】**おきなみ**(沖波)に同じ。(へつ波に對して)〔古語〕

おきつなみ 沖津波・奥津波【枕】沖の波は重なりてしきりに立ち、たわみ、又、高く立ち、荒れもするものなるより、**しきたをむ**・**たかし**(高し)・**あれ**(荒れ)にかけていふ。萬葉「なぐさむる心はなしにおきつなみしきてのみやもこひわたりなむ」同「おきつなみとをむまよひき」古今「おきつなみたかしの濱のはままつの名にこそ君をまちわたりつれ」同「おきつなみあれのみまさるみやのうちは」

おきつなみま 沖津波間・奥津波間【名】沖に立つ波のあひだ。〔古語〕新千載「行かでこそ見るべかりけれ暮れかかる沖つ浪間の浦の初島」

おきつのなみ 沖津波・奥津波【名】**おきなみ**(沖波)に同じ。〔古語〕

おきつのり 沖津海苔・興津海苔【名】〔植〕紅色藻類に屬する海藻。海中の岩石に附著し、形小くして扁く、數回枝を分ち、長さ一寸五分乃至二寸五分。色は紅紫、乾せば黄褐色に變じ、且つ質强靱となる。又、數回熱湯に投じて綠變せるものを、刺身(サシミ)のつま等に用ふ。きくさいみ。きくのり。さいみ。すぢふのり。

おきつはるかぜ 沖津春風・奥津春風【名】沖を吹く春風。〔古語〕壬三「にほの海やおきつ春かぜ吹かぬ日はかすみを出でぬあまのつり船」

おきつひこのかみ 奥津日子神・奥津彦神【名】大年(オホトシ)神の御子。奥津姫神と共に人家の竈(クマ)を守りたまふといふ。

おきつひめのかみ 奥津姫神【名】大年(オホトシ)神の御子。奥津彦(ヒコ)神と共に人家の竈(クマ)を守りたまふといふ。おほべひめの神。

おきつふなびと 沖津船人・奥津船人【名】沖を漕ぎゆく船人。〔古語〕新拾遺「ころろして苦引きおほへ浮雲も雨に鳴門の沖つ船人」

おきつふね 沖津船・奥津船【名】沖を漕ぐ船。沖をゆく船。〔古語〕

おきつべ 沖津邊・奥津邊【名】**おきべ**(沖邊)に同じ。〔古語〕

おきつぼ 置壺【名】能(ノウ)の猩猩(シャウジャウ)の曲にて、壺の作り物を出す形。

おきつまかも 沖津眞鴨・奥津眞鴨【名】沖に居る鴨。〔古語〕萬葉「まをこものふのみちかくて逢はなへばおきつまかものなげきぞあがする」

おきつみうら 沖津御浦・奥津御浦【名】沖にある島の浦。一説に、「おき」は奥の義にて、海の浦の入込み行きつまりたる處。〔古語〕萬葉「浦まより漕ぎこし船を風早みおきつみうらに宿りするかも」

おきつみかみ 沖津御神・奥津御神【名】海の神。わたつみ。一説に、海の荒くおそろしき處。〔古語〕萬葉「すすのあまのおきつみかみにい渡りてかづき取るといふあはび白珠」

おきつみとし 奥津御年【名】〔植〕**いね**(稲)の異名。一説に、「おくつみとし」と訓むべしと。〔古語〕祝詞「手肱(ヒタヒ)に水沫(ミナ)かき垂り、向股(モモ)に泥(ヒヂ)かき寄せて取作らむ奥津御年(ミトシ)を」

おきつみや 沖津宮・奥津宮【名】海の神の住む宮。たつのみやこ。(邊津(ベツ)宮に對して)〔古語〕

おきつむ 置積む【動四自】置添ひて積もる。〔古語〕後撰「秋の野にいかなる露のおきつめばちぢの草葉の色かはるらん」

おきつも 沖津藻・奥津藻【名】沖に生ずる藻。おきつもは。(へつ藻に對して)〔古語〕

おきつもの 沖津藻の・奥津藻の【枕】海の沖の底にある藻は、隱れてあるより、**なばる**・**かくる**といふ意の古語)にかけていふ。萬葉「わがせこはいづちゆくらむおきつものなばりの山をけふかこゆらむ」

おきつもは 沖津藻葉・奥津藻葉【名】**おきつも**(沖津藻)に同じ。(へつも葉に對して)〔古語〕祝詞「奥(オキ)つ藻葉・邊(ヘ)つ藻葉に至るまでに」

おきづり 沖釣【名】沖合にて釣りすること。浮世風呂「錢が無くなると、せうことなしの沖釣す」

おきつをじま 沖津小島・奥津小島【名】**おきつこじま**(沖津小島)に同じ。〔古語〕萬葉「みなぎらふ奥津小島に風をいたみ船よせかねつ心はもへど」

おきて 掟【名】[一]いましめ。さだめ。處置。法令。法律。源氏「親のおきてに違へり」[二]心ばへ。心だて。人物。性格。源氏「おきてひろきうつはものには、さいはひも、それにしたがひ」

天(テン)の掟【句】天つ神のおきて。〔古語〕

奈良「娘は天道に任せたてまつる。あめのおきてあらば、國母(コクボ)・女御ともなれ。おきて無くば、山がた・みこともなれ」

おきていすけ 沖禎介【名】〔人〕忠士。肥前國平戸の人。支那北京に文明學校を創立

す。日露戰役の際、同志六人と共に深く敵地に入りて、鐵橋の破壞を企て、捕へられて銃刑に處せらる。年三十」。

おきーてがみ 置手紙【名】用向きを書きてその場所に殘しおく手紙。かきおき。おきぶみ。

おきてさく 掟作【名】こさく(小作)に同じ。

おきーてぬぐひ 置手拭【名】一仕事をし又は話をする時などに、手に持ちぬたる手拭を疊みて、頭又は肩などに載すること。(專ら下等の人のなすわざ) 二昔、若衆(ワカシ)歌舞伎の禁ぜられて、野郎(ヤラウ)歌舞伎となりし時、俳優は皆野郎あたまの者のみとなり、且つ鬘(カツラ)も發明せられざりし時、その剃りたる前額を蔽ふために用ひし、色絹の鉢卷(ハチマキ)。

おきてまい 掟米【名】さだめまい(定米)に同じ。

おきーと 置戸【名】物を置据(スエ)うる物。机などの類。〔古語〕起「置戸、オキド」千座(チクラ)の置戸【句】あまたの置戸。〔古語〕記「速須佐之男(ハヤスサノヲ)命に、ちくらのおきどをおほせ」

おきーどけい 置時計【名】机・棚などに据置く時計。(掛時計・懐中時計などに對して)

おきーどこ 置床【名】家屋の造作とせずして、別に組立てて、据附け、又は取去ることの出來るやうにせる床。

おきーどころ 置所【名】物を置く場所。おきばしよ。 宗因「白露や無分別なるおきどころ」

置所無し【句】我が身をいかに處置すべきか、當惑す。(物おもひ又は謝罪などにいふ)〔古語〕源氏「おきどころなき物おもひつきて」同「いともかしこきは、おきどころもはべらず」

おきーどほり 沖通【名】耕地の眞中、根通の離れたる田畑。

おきーとり 置鳥【名】婚禮の席などに飾りおく鳥。園姓鑑「今日祝言の大吉日、式作法まで敷島の大和をうつす座敷の飾り…置鳥置鯉」

おきな 翁【名】一年老いたる男。二年老いたる先輩の敬稱。翁(ヲウ)。三老翁の容貌に作りたる假面(メン)。おきなおもて。四能(ノウ)又は芝居にて、老翁の假面を附けて行ふ舞。めでたき者とす。おきなまひ。しきさんば(式三番)參照。五(動)どぶがひの一種。六(人)まつをばせう(松尾芭蕉)の尊稱。本居宣長「二つなき翁なりけりこの道におきなと云へばこのおきなにて」柳梅「ころばずばおきなの雪見はてがなし」(芭蕉の句に「いざさらば雪見にころぶ處まで」)

翁の看板【句】芝居の看板の、式三番の繪組を示せるもの。顔見世興行にこれを出せり。

おきな 【名】九州地方に行はるる夫婦達磨の人形。おきんおよらう(おきん女郎)參照。

おきなーあふぎ 翁扇【名】能(ノウ)にて、翁に扮(ダイテ)つ者の持つ翁。白骨(ホネ)にて、蓬萊山・鶴・龜・松竹・橘などを描けるもの。

おきなーあんどん 翁行燈【名】行燈の一種。方形にして、昔、主に芝居の顔みせ興行の初日に、式三番を行ふ前、舞臺の左右なる大臣柱に掛けたるもの。

おきなーあめ 翁飴【名】越後國直江津及び高田地方の名產の粟飴。水飴としたると、一寸四方ほどに堅めたるとあり。

おきなーえびず 翁戎【名】〔動〕腹足(フクソク)類に屬する軟體動物。殼は圓錐形をなし、螺塔高く、刻み目粗し。美麗にして產出稀なれば、價甚だ高し。長者貝。

おきなーえぼし 翁烏帽子【名】能(ノウ)にて、翁に扮(ダイテ)つ者の用ふる黑色の立烏帽子。

おきなーおもて 翁面【名】おきな(翁)三に同じ。七一職人歌合「さるがく。秋の霜おきなおもての白ひげの長き夜あかず月を見るかな」

おきーなか 沖中【名】沖の中。海上。拾遺「わたつうみのおきなかに火の離れ出でて燃ゆと見ゆるはあまのいさりか」

おきーなが 息長【名】命の長きこと。〔古語〕

おきなが 息長【名】姓氏の一。應神天皇の皇子稚野毛二派(フタマタノ)王より出でたるもの。姓(カバネ)は眞人(マヒト)又は宿禰(スクネ)。

おきなーがらし 翁格子【名】やたら縞(マジ)を縱横にしたるがごとき格子形の模樣。能(ノウ)・芝居の翁に扮(ダイテ)つ者の著用すること多し。

おきーなーがは 沖中川【名】河の中道を流るる水。〔古語〕

おきながーがは 息長川【名】〔地〕近江國坂田郡にある川。伊吹(イブキ)山の西南より發し、琵琶湖に入る。長さ約五里。壬申の亂の古戰場。日本書紀には「息長の横河」と云ひ、今は普通に天野(アマノ)川又は筑浦(ツクラ)川と稱す。萬葉「にほ鳥のおきながの川は斷えぬとも君に語らむこと盡きめやも」

おきなーかざり 翁飾【名】能(ノウ)にて、翁の出づる前、その假面(メン)を樂屋に安置し、神酒を供ふること。

おきながーたらしーひめのーみこと 氣長足姫尊【名】〔人〕じんぐくわうごう(神功皇后)に同じ。

おきながーたるひーひろぬかーのーすめらみこと 息長足日廣額天皇【名】〔人〕じよめいてんわう(舒明天皇)に同じ。

おきなーかづら 翁鬘【名】能(ノウ)・芝居などにて、老人にいでたつ者の著くる白髮のかづら。

おきながーのーみささぎ 息長陵【名】敏達天皇の皇后廣姬命の墓。近江國坂田郡大原村に在り。

おきながーのーよがは 息長横河【名】〔地〕

おきなががは(息長川)を見よ。

おきなーがひ 翁貝【名】〔動〕瓣鰓(ベンサイ)類に屬する軟體動物。殼は白色・長方形にして、前後兩端に開き、大さ一寸二三分ばかり、薄くして脆(モロ)し。

おきなーがへり 翁歸【名】能(ノウ)にて、翁の舞終りて、舞臺より幕に入ること。

おきなーかりぎぬ 翁狩衣【名】能(ノウ)にて、翁の著用する狩衣。蜀紅(ショクコウ)の錦にて仕立つ。

おきなーぐさ 翁草【名】〔植〕一毛良(ケンボ)科に屬する宿根草。山野に自生す。莖・葉等に白毛蜜生し、根葉は羽狀に細裂し、三・四月の頃、葉叢の間より花莖を抽出し、その頂に一花を著く。花は六枚の花蓋を有し、その外面には白色の軟毛あり、內面は無毛にして、暗紫色を帶び、始は垂れて開く。果實は瘦果(クワ)の數多集合せるものにて、各長き白毛を有す。觀賞用又は藥用に供せらる。しやぐまざいこ。うなねこ。うねこ。ぜがいさう。おきなつつ。おばかしら。〔白頭翁〕 三きく(菊)の異名。〔古語〕藏玉集「菊をも翁草と申すなり」 四まつ(松)の異名。〔古語〕藏玉集「翁草。松。住吉や庭のあたりのおきなぐさ長ゐもてみる人をおこちて」

（一さぐなき・お）

おきなぐさ 翁草【名】〔書〕神澤貞幹の隨筆「筆。二百卷。

おきなーとと 翁語・翁言【名】翁の言ふ語。老人のことば。〔古語〕源氏「いとけざやかなるおきなごと」

おきなーさふ 翁さぶ【動上二自】一老人らしくなる。おきなぶる。〔古語〕二ふるくなる。(樹木などにいふ)〔古語〕

おきなーしま 翁島【名】〔地〕岩代國猪苗代(ヰナシロ)湖中にある島。

おきなーじるこ 翁汁粉【名】白餡を用ひ、餅の代りに求肥(ギウヒ)を入れたる汁粉。

おきなーすがた 翁姿【名】年寄りたる姿。夫木「かたくなやしりへの園に若菜つみかがまりありく翁すがたよ」

おきなーせんべい 翁煎餅【名】江戸日本橋の照降(テリフリ)町の翁屋といふ家より賣出しし煎餅。

おきなーつき 翁附【名】能(ノウ)にて、曲の初に翁を演ずること。例へば翁が高砂の前に演ぜらるれば、翁附高砂といふ類。

おきなーつつ 白頭公【名】〔植〕おきなぐさ(翁草)一に同じ。〔古語〕字鏡「白頭公、於支奈豆豆」

おきなーなし 翁代【名】能(ノウ)にて、翁を演ぜぬ時、その代りに脇師(ワキ)が翁烏帽子を著けて行ふ一種の式法。「繩。水索。

おきーなは 沖繩【名】魚を捕ふるに用ふる

おきなは 沖縄【名】〔地〕四十三縣の一。琉球國全部を管轄する縣。那覇(ナハ)・首里(シユリ)の二區と島尻(シマジリ)・中頭(ナカガミ)・國頭(クニガミ)・宮古(ミヤコ)・八重山(ヤエヤマ)の五郡とに分つ。縣廳を那覇區に置く。あこなは。

おきなはしま 沖縄島【名】〔地〕琉球列島中の最も大なるもの。長さ四十里・幅十里・周回百一里。首里區と國頭(クニガミ)・中頭(ナカガミ)・島尻(シマジリ)の三郡とに分れ、沖縄縣の大部分を占む。別稱、大琉球島。りうきう(琉球)参照。

おきなは-しよたう 沖縄諸島【名】〔地〕りうきうれつたう(琉球列島)に同じ。

おきなひ 補【名】一おぎなふこと。たしまへ。二薬などを飲みて、精力の衰へたるを回復すること。三次條の略。

おきなひ-ぐすり 補薬【名】一精力の衰へたるを回復するために服用する薬。おぎなひ。ほやく。二當座の間(マ)に合せに服用する薬。おぎなひ。

おきなひと 翁人【名】老いたる人。おきな。老人。〔古語〕土佐「おきなびと一人・たうめ一人」

おきなぶ 翁ぶ【動上二自】おきなさぶ(翁さぶ)に同じ。〔古語〕源氏「翁びたる聲」

おぎなふ 補ふ【動四他】一足らざるをみたす。かけたるをつくろふ。補充す。おぎぬふ。おごぬふ。二おぎなひぐすりを服用す。補薬を呑む。

おきなほほ 翁頬【名】武具の一。能(ノウ)の翁の假面(ノウ)に似たる面頬(メンボ)。

おき-なほる 起直る【動四自】おきかへりて、姿を正す。起坐す。

おき-なます 沖膾【名】沖にて捕りたる魚を、その場にて酢に浸せるもの。曉臺「沖膾早きを以ていさぎよし」言水「沖膾箸のしづくや淡路島」

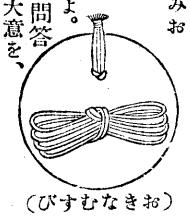
おきなまひ 翁舞【名】おきな(翁)四に同じ。

おきなまる 翁丸【名】清少納言の枕草子中に記されたる犬の名。藪村「短夜を眠らでもるや翁丸」

おき-なみ 沖波【名】沖の波。大洋の波。おきつなみ。おきつのなみ。(へ波に對して)

〔古語〕萬葉「夕なぎにあさりするたづ潮満てばおきなみ高みおのが妻呼ぶ」

おきなむすび 翁結【名】紐の結び方の一。下の圖を見よ。



（びすむなきお）

おきなもんだふ 翁問答【名】〔書〕儒教の大意を、老翁の物語に托し、假名書に和(ワヤウ)げて記せるもの。五卷。中江藤樹の著。

おきなやき 翁燒【名】鯛の肉に、白味噌と白味噌とを塗りて燒きたる食品。

おきなやもめ 翁鰥夫【名】年老いたる男やもめ。〔古語〕參考「帥(チノ)のぬし、おきなやもめにて」

おきなゆり 翁百合【名】〔植〕おにゆり(鬼百合)に同じ。

おき-ならぶ 置並ぶ【動下二他】ならべておく。夫木「うきねして枕と頼むふなばたにおきならべたるかちもありける」

おき-なる 起慣る【動下二自】起くることの習慣となる。新撰古今「おきなれてあけぬとや知る鳥の音も聞えぬ山を急ぐ旅人」

おき-なる 起成る【動四自】おひなるに同じ。狂言「樋の酒」「おのれ、また、ふせってをるか。にくいやつの。起きならぬか。起きならぬか」

おきな-わたし 翁渡【名】一能(ノウ)の翁の曲の中にある一種の所作。二能(ノウ)にて、翁を舞ふこと。三昔、芝居の顔見世及び正月興行に、祝儀として、式三番を舞ひしこと。

おき-にし 沖螺【名】〔動〕腹足(フクク)類に屬する軟體動物。法螺貝(ホラガヒ)の類。殼は黄白色を呈し、長さ凡そ二寸五分に達す。我が國南海に產す。「の語」

おきぬ-うつし 【名】きぬた(砧)を云ふ。〔女

おきぬけ 起抜【名】おきしな(起しな)に同じ。

おぎぬひもの 補物【名】衣類を補ひ綴ること。〔古語〕字鏡集「縫、オギヌヒモノ」

おぎ-ぬふ 補ふ【動四他】一おぎなふ(補ふ)二に同じ。〔古語〕三衣類などを縫ひ綴る。〔古語〕名義抄「縫、オギヌフ」

おき-の-あまむら-の-みささぎ 隱岐海士村陵【名】隱岐國海士(アマ)郡海士村大字森郷(サトヒ)なる背後、勝田(カツタ)山にありし陵。後鳥羽天皇を火葬し奉りし處。おほほらのみささぎ(大原陵)参照。

おき-の-えらぶしま 沖永良部島【名】〔地〕えらぶしま(永良部島)二に同じ。

おき-の-けんてう 【名】〔動〕しのりがも(しのり鴨)に同じ。

おき-の-しま 沖島【名】〔地〕一土佐國幡多(ハタ)郡の海中にある島。周回四里十八町。數個の小き群島を有す。古名、妹兄島(ヨセセ)。二近江國琵琶湖にある島。蒲生(カブ)郡島村に屬す。周回一里二十七町。三筑前國宗像(ムナカタ)郡にある島。玄海洋の中、對馬海峽との間に位す。周回約一里。日露戰役の際、我が海軍この附近にバルチック艦隊を迎へて接戰せり。一名、恩賀(オガ)島。四宇佐(ウサ)島・澳津(オキツ)島。四伊豫國越智(オチ)郡に屬する島。一名、魚島。五安房國館山(タテヤマ)灣にある島。周回十町。

おき-の-たいふ 沖大夫【名】〔動〕あほうどり(信天翁)に同じ。

おき-のごく-さま 御氣毒樣【名】一商人が、顧客にわざわざ足を運ばせて、注文の品を渡すこと出來ず、氣の毒に思ふこと。おあいにくさま。二他人に手數を煩して感謝する語。

おき-のり 沖乘【名】船にて、沖へ乘出すこと、又その人。

おぎ-のり 賒【名】おぎのること。〔古語〕字鏡「賒、於支乃利」

おぎのり-わざ 賒業【名】おぎのるわざ。〔古語〕土佐「おぎのりわざをして、ぜにも持てこずおのれだにこず」

おぎ-のる 賒る【動四他】『補(オギ)賭(ノ)るの義』かけにて、物を買ふ。〔古語〕名義抄「賒、オギノル」同「貸、オギノル・カル・カス」

おき-の-ゐん 隱岐院【名】一〔人〕『隱岐國に遷幸せられたまひしよりいふ』ごばじゃくわう(後鳥羽上皇)に同じ。二謠曲の一。一人の狂女、後鳥羽院の御廟前にて、院の御事を舞曲に作りて歌ひたる末、父に再會して、めでたく故郷に伴ひ歸ることを作れるもの。「に同じ。

おき-ばしよ 置場所【名】おきどころ(置處)に同じ。

おき-ばち 置撥【名】能(ノウ)の太鼓の打方の一。曲終りて、頭を打ちたる後に、一つ「天」と打收むること。

おき-ばん 起番【名】終夜寢ずに番すること、又その人。ねずのばん。

おき-び 熾火・燠火【名】おき(熾)一に同じ。字鏡「熾煨、於支火」

おき-びと 置人【名】あておく人。あておきたる人。

おき-ひらめ 置平目【名】蒔繪にて、金粉を蒔かずして、粗き平目を、一粒づつ切金置(キリオカキ)のごとく置並べたるもの。

おきふ 大給【名】姓氏の一。德川親忠の子加賀守乘元を祖とす。一に松平といひ、十八松平の一。三河國加茂郡荻生(ワギ)の地に住せしにより、他の松平と別つために、「荻生の松平」といひ、後、荻生を大給(ワギ)と改む。子孫四家に分れ、内二家は松平を稱へ、他の二家は信濃國龍岡と豐後國府内との藩主となる。明治維新後、四家とも子爵を授けらる。まつだひら(松平)参照。

おき-ふし 起臥【名】起くると臥すと。起臥(キガ)。

おき-ふし 起臥【副】次條に同じ。〔古語〕古今「手もふれて月日經けるしらま弓おきふしよるは寢(イ)こそねられね」

おき-ふじ 御給仕【名】一きふじ(給仕)の敬稱。二女兒の遊戲の一。多人數、環(ワ)をなして列なる中央に、目隱して盆と茶碗とを持ちたる者一人立ち、列の者、歌曲に連れて廻り動きて止まりたる時、中央の者、盆に茶碗を載せ、「誰さん、お茶召上れ」と呼びながら差出して、給仕の眞似をなし、その人の名當れば、當りたる者、代りて中央に坐し、また前のごとく繰返す。

おきふしに 起臥に【副】起きても、臥しても、ねても、さめても。おきふし。つねに。い

つも。玉葉「假まくら小筵が露のおきふしになれていく夜の有明の月」

おき-ふす 起臥す【動四自】おきたりねたりす。起臥（キガ）す。

おき-ぶたい 置舞臺【名】芝居にて、所作ごとを行ひ、又は義太夫物を演ずる時、足拍子の音を高からしむるために、花道の中ごろまで、常設の舞臺の上に置添ふる床。所作舞臺。敗舞臺。

おき-ぶみ 置文【名】おきがみ（置手紙）に同じ。〔古語〕

おみ-ぶるし 置舊【名】置きふるしたること、又その物。東鑑「被レ殘二御置文一之處」

おき-ふるす 置舊す【動四他】捨ておきて、時を過ごす。物を使用せずに過ごす。萬葉「おしてるや難波すげがさおきふるし後はたが著む笠ならなくに」

おき-べ 沖邊【名】海の遙かなる方。沖の方。おきつべ。〔古語〕萬葉「おきべより潮滿ちくらしからの浦にあさりするたづ鳴きて騷ぎぬ」

おき-べい 置幣【名】神前に供ふる幣帛。

おき-まい 置米【名】ロ留番所又は森林の番人などの如く、附近の村民より採りし地方（ヂカタ）役人の扶持米。概ねその居村又は附近の村落にて預り、隨時所要の分を支出す。

おき-まつり 釋典【名】せきてん（釋典）に同じ。俳諧新選「瓜流」「なにがしの家根屋出られつおきまつり」

おき-まどはす 置惑はす【動四他】①見わけがたきやうに置く。（霜などにいふ）古今「心あてに折らばや折らん初霜のおきまどはせる白菊の花」②置きどころを忘れて、發見しえず。おきわする。源氏「鍵をおきまどはしはべりて」

おき-まよふ 置迷ふ【動四自】置きどころに迷ふ。あやまりて置く。新勅撰「置きまよふ篠のはぐさの霜の上によをへて月のさえ渡るかな」

お-きまり 御決【名】①きまり（決）の敬稱。おさだまり。②遊里にて、ほぼ一定せる「略。（古語）

お-きみ 正親【名】おほきみづかさ（正親司）の遊興費。（俚語）

おき-みち 置路【名】置土（ツチ）をして盛上げたる道路。

おき-みやげ 置土產【名】立去る時に殘し置くみやげ。留惠。留贈。

おきんじふ-いし 御近習醫師【名】おくいし（奥醫師）に同じ。

おきんちゃ 【名】きんちゃく（巾著）を云ふ。（幼兒の語）

おきん-おようら おきん女郎【名】『おきんはおきあがりこぼふし（起上小法師）の起上りの意ならんといふ』京都にて行はるる女達磨（ダル）の玩具。おきな參照。

おき-め 置目【名】①おきて。さだめ。きまり。法則。②刑に處すること。しおき。懲入卦柱曆「きっと訴へて、おきめにするやつなれど」③圖案の模樣などを、器物の面に寫し取り、その下書とする方法。

おきめ 沖海布【名】沖合にある海布（メ）。〔古語〕

おきめ 置目【名】〔人〕顯宗天皇の父、市邊押磐（ハイチノオシハ）皇子の、大泊瀬（ワカヲホ）皇子に殺されたまひし時、その屍の所在を天皇に告げ奉り、その功によりて、恩遇を蒙りたり。記「おきめもやあふみのおきめあすよりはみやまがくりて見えずかもあらむ」

おき-めばる 沖眼張【名】〔動〕あかめだひ（赤目鯛）に同じ。

おきもの 置物【名】①神佛の前又は床の間の飾などにする物。香爐・花瓶・文臺などの類。源氏「おきものの御廚子（ズシ）、ひきもの・ふきものなど、藏人所よりたまはりたまへり」②「床の間の置物」に同じ。置物の机【句】①置物を載せおく机。源氏「おまへに置物の机二つ」②清涼殿の御倚子の左右に据ゑてある机。床（トコ）の間（マ）の置物【句】見かけのみ立派にて、實際の役には立たぬ物。おきもの。かざりもの。

おきもの-だい 置物臺【名】客間などに備へて、花瓶・石菖などを載（セ）置く臺。

おきもの-づし 置物廚子【名】置物（モノ）を載せおく廚子。著聞「筆墨（ヒミツ）一つを置物廚子に殘したりけるを」

おきもの-びやうぶ-ぶぎやう 置物屏風奉行【名】室町・幕府の職制の一。將軍の諸家に臨む時、諸家にて臨時に命じ、屏風・茶席の置物など、すべて座敷を飾りたつることを掌らしめられしもの。

おき-や 置屋【名】娼妓を養ひおく家。わが家へは客を寄せつけず、客は揚屋（ヤゲ）・茶屋・呼屋（ヨビヤ）などの手を經て娼妓を招く。（揚屋に對して）〔京都・大阪の語〕

おぎやあ 【感】赤兒の啼く聲。

おきやあせ 置きやあせ【句】おく（置く）の條下を見よ。

おきやあせ-ことば おきやあせ言葉【名】尾張國の言語を卑しめていふ語。（俚語）

おきやあせ-だね おきやあせ種【名】尾張國より出でたる人を卑しめていふ語。（おもに藝・娼妓にいふ）〔俚語〕

おき-やう 御經【名】きやう（經）の敬稱。

お-ぎやう 御形【名】〔植〕はは（母子草）に同じ。（正月の七草に用ふる時にいふ）

お-きやうげんし 御狂言師【名】きやうげんし（狂言師）の敬稱。

おきやう-しゆ 御經衆【名】〔佛〕如法經を行ふ時、寫經に從事する人。

おきやう-どき 御經時【名】きやうどき（經時）の敬稱。狂言「宗論「いや、とかう申すまに、お經時になった。くわ、くわ、くわ、まないだ」

おきやう-ながし 御經流【名】きやうながし（經流）の敬稱。

おきやがり-こぼし 起上小法師【名】おきあがりこぼふし（起上小法師）の訛。狂言（二人大名）「京に、京にはやるおきやがりこぼし、よい殿みれば、殿さへ見れば、やよ合點か、合點か、ついころぶ」

おきやがれ-こぼし 起上小法師【名】おきあがりこぼふし（起上小法師）の訛。萬葉千紅「疱瘡みまひの不倒翁、おきやがれこぼし」「あたまをはらるるも」

お-きやく 御客【名】①きやく（客）の敬稱。おきやくさん。②月經の隱語。（俚語）

おきやく-さん 御客樣【名】前條に同じ。

おきやく-だいみやう 御客大名【名】どぎまだいみやう（外樣大名）に同じ。

おきやく-ゑしやく 御客會釋【名】江戸城の大奥に於ける接待役。多くは、一旦、年寄を勤めし者、老後の願出に依りて仰附けられ、いはば大奥の隱居役の如きもの。

お-きやん 御俠【名】きやん（俠）を見よ。（俚語）

おぎやる 【動四他】おっしゃる。（江戸時代の仙臺の方言）浮世風呂「なんと、辯慶、謎をかけべえが、解く氣は無（ネ）えかどさ、おぎやり申せば」

お-きよ 御清【名】①『おきよどころ（御清所）を見よ』下女。女中。（江戸時代の畿内の俚語）俗曲「おきよどん、杓子はえ。杓子は、はしりの棚にある」

お-きよい 御御意【名】きよい（御意）を一層丁寧にいふ語。狂言（かくすい）「身共は、あなたに、いやとおぎよいなさるるほどに」

お-きよどころ 御清所【名】きよどころ（清所）の敬稱。

おきよ-の-ま 御清間【名】江戸城の大奥の部屋の一。二箇所ありて、一は御臺所御兩親の位牌を安置して、夫人毎朝禮拜する處に充て、一は信仰の鬼子母神（キシモ）などを祀る。

おき-らんぷ 置洋燈【名】据ゑおくランプ。（釣らんぷに對して）

おぎろ 蹟【貌】廣大なるさま。奥深きさま。〔古語〕記「甚大、オギロナリ」太平記「事の蹟（オギ）、誠に思ひきったる體かな」

おき-ろく 隱岐綠【名】おきろくしやう（隱岐綠青）の略。

おき-ろくしやう 隱岐綠青【名】『むかし隱岐國より產せしよりいふ』綠青の一種。繪具に用ふ。おきろく。

おぎろ-なし 蹟【形ク】『蹟（オギ）甚（ナ）しの義』甚だ大なり。廣大無邊なり。〔古語〕萬葉「そぎたくもおぎろなきかもこきはくもゆたけきかも」

おぎろ-に 蹟に【副】甚しく。非常に。太平記「あまりに敵を侮りて、おぎろに大ばやりなりし故に、毎度の軍に負けにけり」

おき-わかる 起別る【動下二自】前夜に逢ひたる男女が、朝おき出でて、別る。謠曲「盧

刈」「人の心はしら（知・白）露の おき（置・起）わかれにしきぬぎぬの」

おきわする 置忘る【動下二他】物の置きどころを忘る。物を或場所に置きたるまま、持歸ることを忘る。おきまどはす。

おきわた 置綿【名】わたぼうし（綿帽子）に同じ。日本武尊吾妻鑑「頭に置き綿や、三平二滿の大口紅、肌の艶の四十過ぎ」

おきわたし 沖渡【名】〔商〕もとふねわたし（本船渡）に同じ。

おきわたす 置渡す【動四自】滿面におく。夫木「おきわたす霜のたづやうとからし森の落葉のふかき下草」

おきわぶ 起佗ぶ【動上二自】起きにくく思ふ。〔古語〕狭衣「まだしらぬ曉露におきわびて八重たつ霧に迷ひぬるかな」

おきをる 起居る【動上一自】起きて居る。後撰「白露の上はつれなくおきゐつつ萩の下葉の色をこそ見れ」

おきゑ 置餌【名】鷹を飼ふ餌。

おく 奥【名】一或場所の內部にありて、外部より遠きところ。枕「車…奥までさし入りたる月に」二家の內にて、家人の常に居る處。三徳川時代の幕府諸侯及び大なる旗本などの殿邸の一部。諸侯・旗本には、表・奥の二部に分ち、表は主人の事務を視る所、奥はその樂居及び妻・妾などの居室とし、幕府にては、奥を更に中奥・奥・大奥の三部に分ち、中奥は表に屬し、奥は將軍の居室にて、その所要の事物一切を具備し、大奥は御臺所の居室にして、將軍の休息所を兼ね、仕ふる者は女子のみなりき。源氏「おくなる御ましに入りたまひ」四身分ある人の妻。おくがた。五芝居の樂屋（ヤク）。（表に對して）六左の方。おき。（澪（ヤク）に對して）〔古語〕萬葉「わぎも子はくしろにあらなむ左手のわが奥の手にまきていなましを」七物の末尾の方。すゑ。ゆきどまり。「おく書き」八事の奥深くして知りがたきこと。〔古語〕萬葉「あきつ羽の袖振る妹を玉くしげおくに思ふを見たまへわぎみ」九技藝・學問の奥儀。「琴のおくの手」十おくて（奥手）の略。十一（地）尾張國中島郡にある町。木曾川に沿ひ、葉

栗（リグ）郡玉の井村に接す。十二姓氏の一。伶人（レイジン）の家。上（ウ）氏と同じく狛（マ）氏より分れ、共に龍笛（チリキウ）を專門とす。十三（地）みちのく（陸奥）に同じ。「おくの國」夫木「長月の月の有明のけしきをばおくのえびすもあはれとや見ん」

奥聞かんより、口聞け【句】事の奥深く入組みたる點をたづねずとも、その端緒を知れば、全般を推知するを得べし。〔諺語〕

奥無し【句】はてなし。きはまりなし。おくがなし。夫木「常盤なる花もやあると吉野山おくなく入りてなほ尋ねみん」

奥の「お」【句】發音の混同せる「を」「ヲ」と區別するために、いろは歌の順序によりて示せる假名の「お」「オ」。（端（シ）の「を」に對して）

奥の卷（キ）【句】一書籍の末の卷。二おくのて。奥儀。

奥の「ゐ」【句】發音の混同せる「い」「イ」と區別するために、いろは歌の順序によりて示せる假名の「ゐ」「ヰ」。（端（シ）の「い」に對して）

おく 邑久【名】〔地〕備前國六郡の一。上古の大伯國（オホクニ）にして、もと「おほく」と發音せしなり。郡役所を邑久村に置く。

おく 億【數】一萬の一萬倍。二數の限りなく多きこと。

おく 置く・措く【動四他】一定りたる場所に在らしむ。据（ス）う。拾遺「ちひさき瓜を、扇におきて」二葬る。〔古語〕紀「葬、オク」三己の家に居らしめて使ひ又養ふ。「學僕をおく」「下女をおく」四質物を預け入る。空穗「みはかしを、質におかん」五箔蒔繪・模樣などを施す。六算盤（ソロバン）にて數ふ。七心にとどむ。氣に懸く。八除く。はぶく。さしおく。古今「この人人をおきて、又すぐれたる人も、吳竹の世世に聞え」九後のために備ふ。「聞いておく」「告げおく」十時日をへだつ。「一日おきて、その次の日に」

措いて吳れ【句】言ふな。爲（ス）るな。〔俚語〕

措いてたも【句】『たもは賜はらんの訛』

前條の敬語。〔俚語〕

置きて來たり【句】『智慧を置忘れて生れ來りし意』愚かなり。〔徳川時代の俚語〕しかた咄「昔、おきてきたる男あり」南瓜咄「昔、おきてきたる者あり」

置きやあせ【句】『置きませの訛』さしおきたまへ。止（ヤ）められよ。〔尾張國名古屋の方言〕「置く。

氣を置く【句】氣づかふ。遠慮す。心を

心を置く【句】前條に同じ。伊勢「心おくべき事もおぼえぬを」

おく 置く【動四自】露・霜など、降りたまる。萬葉「秋さればおく露・霜にあへずして都の山は色づきぬらむ」

おく 起く【動上二自】一横になりたるもの、立ちあがる。二臥したる所より出づる。いねあぐ。三目をさます。うつし心になる。四船、浮びて動く。殿島譚記「しほの干（ヒ）て居たる船の、しほ滿ちて浮ぶをば、おくるといふにこそ」

起きて半疊（デフ）**、寢て一疊**【句】一いかに慾ばりても、人の起臥・飲食には限あれば、それ以上は不要なり。分に安んじて足ること知れ。〔諺語〕俗譚「起きて半疊寢て一疊、天下取っても二合半」二家屋の狹苦しき形容。〔諺語〕

おくあみ 奥網【名】うなぎり（魚捕）に同じ。

おくい 奥意【名】一他人にあらはさぬ心。二おくが（奥處）に同じ。

おくいうひつ 奥右筆【名】江戸幕府の職制の一。表右筆と共に、若年寄（ワカドシ）の下にありて、顧問となり、文書を掌り、機密なる政務を取調ぶるなどの事に任ぜしもの。今日の祕書官に相當す。

おくいうひつくみがしら 奥右筆組頭【名】江戸幕府の職制の一。老中の文案を記錄し、古例に徵して事の當否を議することに任ぜしもの。

おくいし 奥醫師【名】徳川時代に、將軍の診察及び醫藥の事をつかさどりし醫官。御近習醫師。おさじ。

おくいん 奥印【名】眞正確實なることを明らかにするため、眉書・願書・證文などの

終りの署名人の名の下に押す印。おくがき（奥書）二參照。

おくうみ 奥海【名】〔地〕陸奥（ムツ）の海。

おくえぞ 奥蝦夷【名】〔地〕北海道日高國の襟裳（エモ）崎より東の方の土地。

おくが 奥處【名】一おくぶかきところ。はて。〔古語〕萬葉「大海のおくがもしらずゆくわれをいつきまさむといひし子らはも」二おくい。おくぎ。おくのて。

奥處無し【句】一深きところ無し。隱れたるところ無し。おくそこなし。二「奥無し」に同じ。〔古語〕萬葉「霞立つ春の長日をおくがなく知らぬ山路を戀ひつつか來む」

おくからい 奥高麗【名】正親町天皇の頃、肥前國唐津にて、高麗の茶碗に摸して造り出しし陶器。

おくがき 奥書【名】一文書・册子などの奥に、年月・筆者の名又はその來歷などを書記すこと。うらがき（裏書）參照。二願書・屆書・證文などの末に、その眞正確實なることを證明して書く文。おくいん（奥印）參照。「郡長のおくがき」

おくがた 奥方【名】貴人の妻の敬稱。奥御前。夫人。おくさま（奥樣）參照。

おくがは 奥革【名】莫臥爾革（ムウル）に似て少し劣れる革。

おくかびの 置蚊火の【枕】据置く蚊遣火の意にて、蚊遣火は下よりこがれゆくものなるより、したこがれ（下焦）にかけていふ。新古今「足びきの山田もる庵におくかびのしたこがれつつわが戀ふらくは」

おくがらう 奥家老【名】奥づとめの家老。丹波與作「御迎人の奥家老、本田彌三左衞門」

おくき 憶起【名】〔哲〕『英Reminiscence』以前經驗の事を、意志によりて、意識に喚起する精神作用。再現作用の一種。

おくぎ 奥義【名】學術・技藝などの、深く高尚なるところ。あうぎ。あうひ。おくのて。極致。

おくぐち 奥口【名】奥の方への入口。丹波與作「時に、おぐちさざめいて、はや御たちと、姫君の御輿舁（カ）きあげ」俚言集覽

「落葉にはおくぐちもなし吉野やま」

おくくふ 億劫【名】おくこふ・億劫）㊀の訛。

おくぐらし 奥暗し【形一】奥まりて暗し。源氏「夕かげなれば、さやかならず、おくぐらきここちするも、いと口をし」

おくけん 臆見【名】㊀想像によりたる不確實の意見。臆測の考。㊁〔哲〕『英Opinion』主觀的の確實性を有すれども、客觀的根據を缺ける認識。（眞理に對して）

おくげんくわん 奥玄關【名】奥の方にある玄關。

おくこ【名】とびせみ（飛蟬）を見よ。

おくごしやう 奥小姓【名】奥づとめの小姓。

おくごぜん 奥御前【名】おくがた（奥方）に（同じ。）

おくごぜんしよ 奥御膳所【名】江戸幕府の大奥の部屋の一。將軍の大奥に御成の節、御膳を調進せし處。

おくごてん 奥御殿【名】奥向にある御殿。津國女夫池「夏冬知らぬ室町の御所ぞ榮華の奥御殿」

おくこふ 億劫【名】㊀〔佛〕一劫を億倍したる時間。數へ盡されぬほどの多くの劫。萬萬劫。億萬劫。㊁手間のかかることを豫想して、著手に氣の乘らぬこと。手おもきこと。おくくふ。（俚語）

おくさく 奥蹟【名】あうさく（奥蹟）に同じ。

おくざしき 奥座敷【名】家の奥の方にある座敷。

おくさま 奥樣【名】身分の中等以上なる人の妻の敬稱。おくがた（奥方）おくさん（奥樣）參照。

おくさまびろめ 奥樣廣【名】奥樣となり、又、奥樣を迎へたるを、親戚・知己にひろむること。曾我五人兄弟「二の宮の館には、奥樣びろめの一門振舞」

おくさん 奥樣【名】おくさま（奥樣）の訛。（その意味、奥さまよりは輕し）

おくし 抑止【名】〔佛〕㊀惡事を抑（オ）へ止むること。㊁彌陀（ビ）の本意は如何なる惡人をも救へども、人の放逸・無慚（ザン）を戒むる方便として、暫くその大慈悲心を抑へて、大無量壽經の願文の如く、五逆を犯し、正法を謗る者は救はざる旨を述べたること。（攝取に對して）（淨土門の語）

おくぐし 御髮【名】㊀『くし』を見よ』頭髮の敬稱。みくし。㊁くび（首）の敬稱。狂言六地藏「お手を作る者にはお手、おぐしを作る者にはおぐしを作らせ」

おぐしあげ 御髮上【名】おかんあげ（御髮上）に同じ。

おくしざいくわい 抑止在懷【名】〔佛〕思ふ所を胸に祕（ヒ）めて、言語又は行爲に現はさぬこと。

おくしじま 奥縞・奥島【名】㊀赤絲入りの立縞。さんとめ（棧留）參照。㊁たうざん（唐棧）に同じ。（江戸時代の京都・大阪の語）

おくしもん 抑止門【名】〔佛〕彌陀（ビ）が、方便として、抑止（オク）㊀を說けること。（攝取門に對して）（淨土門の語）

おくじやうるり 奥淨瑠璃【名】淨瑠璃の一種。德川時代の中頃より奥羽地方の座頭（ザト）の語りしもの。外記節（ゲキ）に似、專ら頼光四天王・金平（ヒラ）手柄・義經記などを語れり。奥州にては、御國（オク）淨瑠璃といふ。せんだいじやうるり。あうしうじやうるり。

おくじゆしや 奥儒者【名】江戸幕府の職制の一。若年寄（ワカドシ）の管下に屬して、將軍の侍講を掌りし儒者。「書院。

おくしよゐん 奥書院【名】奥の方にある

おくじりじま 奥尻島【名】〔地〕後志（シリ）國の西南方に在る島。周回、二十一里十六町。久遠（クオン）郡に屬す。

おくす 臆す【動佐變自】氣おくれして進み得ず。枕「など、さはおくせしにか。すべて、面さへ赤みてぞ思ひみだるるや」

おくす 遣す【動四他】おこす（遣す）の訛。よこす。くす。致す。狂言「萩大名「鋸おくせえ、引き切って心（シン）に立てうに」

おくすぢ 奥筋【名】〔地〕奥州の地方。奥州すぢ。

おくぜい 奥勢【名】奥州の軍勢。みちのくのいくさ。源氏浴泉節「秀衡が催しにて、奥勢十萬騎餘を參らする」

おくぜいじ【名】〔動〕いさき（雞魚）を云ふ。〔奥州の方言〕

おくせつ 臆說【名】㊀臆測の說。たしかならぬ說。あてずぬりやう。㊁〔哲〕かせつ（假說）㊁に同じ。

おくせつべん 臆說辨【名】〔書〕俗諺を和漢の書に考へて、その義を釋せるもの。二卷。小山儀（タダノ）の著。

おくせふ 抑攝【名】〔佛〕抑止と攝取と。

おくせめ 奥攻【名】奥州を征伐すること。著聞「大將奉衡を討つとて、奥ぜめを思ひたちて、兵を揃へらるべき事」

おくそく 臆測・億測【名】㊀こまかに調べずに考へはかること。あてずぬりやう。推測。「推摩（マ）・臆測」㊁〔哲〕事實上の根據もなく、論理上の推理法にもよらず、自己の感情にのみ訴へて、事物の如何を推量ること。

おくそこ 奥底【名】㊀奥深き處。隱れたる處。㊁心の奥。ほんしん。㊂心に祕して、うちとけぬところのあること。博多小女郎波枕「千年の馴染ほど心とけたる朝霜のおくそこもなく成りにける」

おくそづきん 御高祖頭巾【名】おこそづきん（御高祖頭巾）の訛。

おくそで 奥袖【名】裁縫にて、一布（ヒロ）半又は二布より成立つべきものの、奥の方になる袖。

おくだ 奥田【名】姓氏の一。足利氏の支流、斯波（シバ）氏より分る。尾張國中島郡大里（オホト）村大字奥田の地に住みて氏とし、織田信長に仕へ、堀秀政に屬し、堀氏を稱す。子孫、越後國村松・同國椎谷（シヒ）・信濃國須坂の藩主となりて分れ、明治維新後、いづれも舊姓奥田に復し、みな子爵を授けらる。

おくたあぶ（英Octave）【名】〔理・音〕倍音の一。原音の二倍なるもの。音樂にては、長短音階のいづれの音よりしても、その第八位に當る。即ち高音部における或音名の音は、低音部における同じ音名の音に對して、いづれもオクタアブたる關係を有す。八音（ハチオン）。おくてえぶ。

おくだえいせん 奥田穎川【名】〔人〕陶工。通稱は茂右衛門、陸方山と號す。京都の人。海老清に陶法を學び、粟田に窯場（バ）を設けて、支那の古陶を摸造す。その門より木米（モクベイ）・龜助・嘉助等の名工出づ。文化八年歿す。年五十九。

おくだかし 臆高し【形一】きおくれする性質なり。臆病なり。（古語）源氏「おくだかき者どもは、ものもおぼえず」

おくたく 臆度・億度【名】おしはかること。臆測。推量。

おくだしげもり 奥田重盛【名】〔人〕赤穗四十七士の一人。淺野長矩の臣。馬廻りとなり、武具奉行を兼ぬ。初め孫太夫と稱し、主家滅亡の後、姓名を西村清右衛門と變ず。元祿十六年死を賜はる。年五十七。

おくだひら 奥平【名】姓氏の一。本姓は村上源氏。赤松氏の分家。子孫、今の上野國北甘樂（キタカク）那岩平（ヒイラ）村大字奥平の地に住みて氏とす。後、三河國に移りて、德川氏に歸し、諸地に轉封の後、享保二年以後、豐前國中津（ナカツ）を領し、明治維新後、伯爵を授けらる。

おくだひらけんすけ 奥平謙輔【名】〔人〕長州の藩士。明治九年、前原一誠等と兵を起して、官軍に抗し、遂に捕へられて、斬に處せらる。

おくだひらのぶまさ 奥平信昌【名】〔人〕德川氏の功臣。九八郎と稱す。始め武田氏に仕へ、後、背きて德川家康に降服し、軍功あり。天正二十年歿す。年六十一。

おくたん 臆斷【名】おし量りて斷定すること。

おくたんと（佛Octant）【名】物の角度を測るに用ふる器械。周圍の三百六十度を八分したるもの。八分儀。八分圈儀。角度器。測度器。

おくだよしと 奥田義人【名】〔人〕法學博士。男爵。鳥取の人。法典調査委員として法典制定に功あり。文部大臣・司法大臣・宮中顧問官に歷仕し、後、東京市長に擧げらる。大正六年薨ず。年五十八。市葬を以て葬らる。

おくち 憶持【名】記憶して忘れぬこと。

おくちやうば 奥帳場【名】㊀商家の奥に

ある帳場。主人又は重役・支配人などの居るところ。 ㊁おくやく（奥役）に同じ。

おく-およちゆう 奥女中【名】奥づとめの女中。

おく-ぢゑ 奥智慧【名】㊀深き智慧。㊁小供の智慧づきの遲きこと。遲く出でくる智慧。おそぢゑ。おそまき。

おく-くつ 御沓【名】『取持つといふ意なりといふ』たいこもち（太鼓持）を云ふ。〔江戸時代の吉原遊廓の語〕

おく-つ-き 奥津城【名】次條に同じ。〔古語〕萬葉「かつしかのままのてこながおくつきをことは聞けど」

おく-つき-どころ 奥津城處【名】はか（墓）に同じ。〔古語〕萬葉「われも見つ人にもつげむ葛飾（シカツ）の眞間（マ）の手こながおくつきどころ」

おく-づけ 奥附【名】書物の終りに添へて、著者・發行者の姓名、又、發行年月などを書記したる紙。

おく-つ-すたべ 奥津棄戸【名】『奥津柄津上（オクツ）の義にて、柄は住處の義といふ』太古、床などをあげて造り、起臥の料とせし家。一説に、「す」は簀にて、家の奥の方にある簀（ス）に編める床。おきつすたべ。〔古語〕

おく-づとめ 奥勤【名】大名などの家の、奥むきの事に關する役をつとむること、又その人。〔德川時代の語〕

おく-づま 奥妻【名】甚だ愛する妻。〔古語〕拾遺「しらつゆのおくづまにするをみなへしあなわづらはし人な手ふれそ」

おく-つ-みとし 奥津御年【名】〔植〕おきつみとし（奥津御年）を見よ。

おく-つむぎ 奥紬【名】奥州より產出する紬。宰町殿日記「奥紬の小袖、兩面無紋黑」

おく-づめ 奥詰【名】德川時代に、大名の、將軍の諮問に對するため、隔日交替に上直して、營中の山水の間（マ）に伺候せしこと。元祿二年設置せられ、寶永六年廢止せらる。

おくづめ-しゆう 奥詰衆【名】奥詰をつとむる大名たち。

おくつゆ-の 置く露の【枕】露は消えやすきものなるより、きゆ（消ゆ）にかけていふ。萬葉「あさなあさな草のへ白くおくつゆのきえぬともにといひし君はも」

おく-て 奥手【名】㊀おそく實のる稻。おくていね。〔古語〕㊁おそく實のる稻。〔晚稻〕（わせ・なかてに對して）古今「あさつゆのおくての田かりそめにうき世の中をおもひぬるかな」奥手の稻【句】前條㊀に同じ。曾丹集「あしげなるおくての稻を守るまに萩のさかりは過ぎやしぬらん」

おく-ていね 奥手稻【名】おくて（奥手）㊀に同じ。

おく-てう 億兆【名】多くの臣民。おほみたから。

おく-てう 億兆【數】㊀億と兆と。㊁數の限りもなく多きこと。「ぶに同じ。

おくてえぶ（英Octave）【名】〔理音〕おくたぶに同じ。

おくて-なる 晚稻なる【枕】晚稻はさかりの久しきものなるより、ながき（長き）にかけていふ。萬葉「咲く花もうつろふはうしおくてなるながき心になほしかずけり」

おく-ど 奥土【名】〔地〕奥の土地。奥州。日本武尊吾妻鑑「寶祚を傾け、秋津州の主たらんと、奥土を立ちて、駿河の國沖津に、たむろを構へたり」

おく-どこ 奥床【名】家の奥にあるふしど。〔古語〕萬葉「奥床に母はねたりとつどこに父はねたり」

おく-どしより 奥年寄【名】るすねどしより（留守居年寄）に同じ。

おく-なし 奥無し【句】おく（奥）の條下を「見よ。

おく-なんばん 奥南蠻【名】〔地〕よおろっぱしう（歐羅巴洲）の異稱。〔德川時代の語〕

おく-に 御國【名】大名の領地の敬稱。御領國。狂言「墨塗」「御國へ歸らせられたらば、妾がことなどは、ふっつりと忘れさせらるるであらう」

おくに-かぶき 阿國歌舞伎【名】女歌舞伎の始祖、出雲の阿國の興行せし歌舞伎。後世の芝居のおこりとなれり。

おくに-かぶき 阿國戲場【名】だてくらべおくにかぶき（伊達競阿國戲場）の略。

おくに-きやうだん 御國鄕談【名】ある一地方の人人の間にのみ通ずる語。おあん物語「他國の者には通ぜず、御國鄕談なり」

おくに-じやうるり 御國淨瑠璃【名】おくじやうるり（奥淨瑠璃）を云ふ。〔奥州の方言〕

おくに-ばら 奥國腹【名】昔、大名などの、在國中に儲（モウ）けし子。丹波與作「丹波の國の一城主…しらべの姫はお國腹」

おくに-めいぶつ 御國名物【名】一國の中の名だかき物。俗曲（越後獅子）「御國名物さまざまあれど、田舍なまりの片言まじり」

おくに-もの 御國者【名】㊀くにもの（國者）の敬稱。㊁るなかざむらひ。勤番者（キンバン）。〔德川時代の語〕

おく-ぬき 奥拔【名】諸俳の點取の句集に、點者が秀逸として拔書せる最終の者、即ち最高點の者。

おくぬき-らくくわん 奥拔落卷【名】俳諧の點取句集にて、最高點者がその集冊を貫ふこと。

おくぬきいうざん 奥貫友山【名】〔人〕武藏國川越の儒者。名は正鄕、字は伯雅、通稱は五平次。寛保二年の大洪水に、家產をつくして飢餓を救助すること十餘萬人、天明七年歿す。年八十。

おくぬの 奥布【名】昔、陸奥國より產出せし布。〔古語〕夫木「今は世にあるもまれなるおくぬのの用ひられしは昔なりけり」

おくねん 憶念・臆念【名】㊀〔佛〕『憶は憶持、念は明記して忘れざる意』堅く心中に保持して、忘失せざること。㊁心中にたもちて絕えず憶（モ）ひ起すこと。執念。平家「讃岐院の御靈、宇治惡左府の御おくねん」

おく-の-えらぶしま 奥永良部島【名】〔地〕えらぶしま（永良部島）を見よ。

おく-の-ざ 臆座【名】がうおくのざ（剛臆座）を見よ。

おく-の-しま 奥島【名】〔地〕近江國の琵琶湖にある第一の大島。周回五里餘。今は島村と呼び、蒲生（フマ）郡に屬す。

おく-の-たき 奥瀑【名】〔地〕和泉國泉南（ナン）郡にある瀑。犬鳴山（イヌナ）七瀑の一。高さ七丈二尺、幅四尺。

おく-の-て 奥手【名】㊀おくぎ。おくい。おく。祕訣。㊁たやすく世人に知らせぬ腕まへ。「おくのてを見す」

おく-の-ふじ 奥富士【名】〔地〕おくふじ（奥富士）に同じ。

おく-の-ほそみち 奥細道【名】〔書〕元祿二年の三月より九月にかけて、門人河合曾良と共に奥州より北越地方を旅行し、越前國敦賀（ガツ）より美濃國大垣を經て伊勢參宮せしをりの紀行。一卷。松尾芭蕉の著。

おく-の-みたち 奥御館【名】〔人〕ふぢはらひでさと（藤原秀鄕）に同じ。

おく-の-や 奥家【名】おくや（奥屋）に同じ。

おく-の-ゐん 奥院【名】寺院の本堂よりなほ奥に在りて、本尊などを安置せる所。おくみや（奥宮）參照。

おく-ば 奥場【名】劇場の棧敷番（サンジキ）。〔京都・大阪の語〕

おく-ば 奥齒【名】口の奥の左右にある齒。臼齒（シキウ）。

おく-ば 奥齒に劍（ギル）【句】心の中に憤りて、禍心をきざす譬。〔諺語〕源平布引瀧「御殿でなくばと、奥齒につるぎ」

奥齒に物が挾まる【句】仲たがひなどして、互に又は一方が、十分に心打解けず、從って思ふことを殘らず言ひきらぬ時の感じの譬。奥齒に物を插（サシ）む【句】前條に同じ。〔諺語〕

おく-ばうず 奥坊主【名】江戸幕府の職制の一。江戸城の奥向に在りて、將軍に茶を進め、登城の諸侯等に對する給仕などを掌りし坊主。定員八十人乃至百三十人。（表坊主に對して）ばうず（坊主）㊁參照。

おくばうずくみがしら 奥坊主組頭【名】江戸幕府の職制の一。若年寄に屬し、奥坊主を統轄せしもの。

おく-はちべゑ 奥八兵衛【名】〔人〕京都の魚商。常に禁中の御用を勤む。後光明天皇、火葬の不仁なることを憂へたまひが、その崩じて、火葬の議あるや、八兵衛、有司の邸に到り、土葬を行はせられんことを請ひしより、火葬の議止（ヤ）めり。寛文九年死す。

おくばん-やく 奥番役【名】徳川時代の銀座の職制の一。鑄造濟の丁銀の數、當日の吹方の出來高を、銀座筋役の者と共に屆くことを掌りしもの。

おくばら-せいこ 奥原晴湖【名】〔人〕閨秀畫家。下總國古河の人。江戸に出でて福田羊江に學び、後、清人鄭板橋の畫風に私淑す。性豪放、畫もまた雄健・粗朴を以て勝る。晩年武藏國熊谷附近に閑居し、大正二年歿す。年七十六。

おくび 衽衽【名】『おほくび(大領)の略』**おくみ**(衽)[1]に同じ。〔古語〕 參考「君のおんしたがひのおくびに附け」

おくび 吹呿・噯氣【名】『あくび(欠)の轉』胃に滿ちたる瓦斯の、食道を通り、口に上り出づるもの。

吹呿にも出さぬ【句】すこしも口に出して言はず。

おく-ひばん 奥火番【名】江戸城大奥の火の番を掌りしもの。晝夜、各局(ツボネ)・女中部屋を巡回して警めたり。

おく-びやう 臆病【名】膽力なくして、すこしばかりの事にもおそるること。いささかの事にも、心の動ずること。おぢけ。

おくびやう-いた 臆病板【名】せいた(背板)に同じ。

おくびやう-かぜ 臆病風【名】何となく臆病の心の起るを、風に吹かるるに譬へていふ語。「臆病風が吹く」「臆病風に吹かる」

おくびやう-がね 臆病金【名】鎧の臑當(ツネヒ)の一部、臑の背を被ふところ。

おくびやう-がみ 臆病神【名】何となく臆病の心の起るを、目に見えぬ神の業なりとしていふ語。「臆病神が憑(ツ)く」「臆病神につかる」

臆病神に引かる【句】おぢけつく。おぢづく。

おくびやう-ぐち 臆病口【名】[1]能舞臺の切戸(ドキリ)の俗稱。[2]芝居の、本舞臺の下座の方の出入口。

おくびやう-にん 臆病人【名】**おくびやうもの**(臆病者)に同じ。

おくびやう-むし 臆病蟲【名】臆病の性質。

おくびやう-むしや 臆病武者【名】臆病なる武者。

臆病武者の痴(シ)れかへり【句】臆病者の、殊更に平氣を裝ふこと。〔諺語〕

おくびやう-もの 臆病者【名】臆病なる人。臆病人。

臆病者の據(コロヨド)なし【句】臆病者の、止むをえぬ場合となりて、はじめて處置すること。〔諺語〕

おく-ふか 奥深【形一】[1]奥の方ふかし。[2心の中深くして、容易に知りがたし。 參考「歌を、いみじくよませたまふ。すきずきしきものから、おくふかく煩はしき御心にぞおはしける」

おく-ふかし 奥深し【形一】[1]奥の方ふかし。[2心の中深くして、容易に知りがたし。 參考「歌を、いみじくよませたまふ。すきずきしきものから、おくふかく煩はしき御心にぞおはしける」

おく-ふじ 奥富士【名】〔地〕陸中國岩手山の別稱。おくのふじ。

おく-ぶんめい 奥文鳴【名】〔人〕京都の畫工。名は貞尊、字は萬撰、通稱は順藏。應擧の門に學びて、その十哲の一人と稱せられ、一家をなす。文政頃の人。

おくま 御供米【名】くましね(洗米)の敬稱。 狂言「目近大名「おくまのやうな物を、扇につけて、それが何ぢや」

おく-まく 奥まく【動下二自】心を深む。おくまふ。〔古語〕 萬葉「近江のみ沖つ島山奥まけてわがもふ妹がことのしげけく」

おく-まふ 奥まふ【動下二自】前條に同じ。〔古語〕 萬葉「おくまへてわれを思へる我がせこは千歳いほとせありこせぬかも」

おくまん-ごふ 億萬劫【名】數へ盡くせぬ多くの劫。億劫。

おく-まる 奥まる【動四自】奥深くあり。(場所にも心にもいふ) 源氏「君たちも、おくまりておはす」 同「心にくくおくまりたるけはひ」

おく-み 御組【名】くみ(組)[1][2]の敬稱。

おく-み 衽衽【名】[1]『おくび(衽)の轉』衣服の衿(ミヒ)の左右にありて、上は襟(エリ)につづき、下は褄(ツマ)に至る、半幅のきれ。[2]『斜に仕切りたるさま、衣服の衽に似たるよりいふ』芝居の西の花道の傍なる、土間に割りたる殘りの空處。

末の衽【句】芝居の揚幕(マクヒ)よりすこし先にある割りあまりの空處。

おく-みいた 衽板【名】和船の反戞の下にありて、衽形をなせる板。 「同じ。

おく-みがた 衽形【名】**おくみなり**(衽形)に

おく-みさがり 衽下【名】衣服の衽さきより襟さきに至る間。

おく-みさき 衽前【名】衣服の衽の上の方の端、即ち襟と袖つけとの間に狹まりて尖りたるところ。 「くみがた。

おく-みなり 衽形【名】斜めなるかたち。おく-みや 奥宮【名】本社よりも奥の方にある宮。おくやしろ。**おくのみ**(奥院參照。

おく-むき 奥向【名】家の奥の方、即ち主人の居間の方。「奥むきの用事」

おく-むら-いほ 奥村五百【名】〔人〕愛國婦人會の創立者。肥前國唐津(カラツ)の弘樂寺に生れ、一度嫁したれど、故ありて離緣す。北清事件の際、戰地の慘狀を目擊して、軍人遺族救護の志を起し、翌年、愛國婦人會を起す。明治四十年歿す。年六十二。

おく-むら-まさのぶ 奥村政信【名】〔人〕江戸の畫肆。浮世繪を能くし、文角・觀妙・芳月堂・丹鳥齋等の號あり。多く草雙紙を發行す。紅繪(ベニエ)を書きしは、この人より始まる。明和五年歿す。年七十九。

おく-むら-りやうちく 奥村良筑【名】〔人〕醫者。越前國府中の人。名は直、南山と號す。治術精妙、特に吐法に妙を得、麻疹(ハシカ)を療するに灌浴を以てすることを發明す。寶曆十年歿す。年七十五。良筑は「良竹」とも書く。

おく-めつけ 奥目附【名】江戸幕府の職制の一。幕府又は諸侯の家の奥勤の者の執る事務の可否を監督せしもの。奥づとめの目つけ。おくよこめ。〔徳川時代の語〕 續反魂香「奥目附より聞きたれども」

おく-めん 臆面【名】臆したるおもてもち。おそれたる顏色。

おくめん-なし 臆面無【名】小供などの、他人の家に至りても、臆し憚らぬ性質。

おくも-がは 大雲川【名】〔地〕**おとながは**(音無瀨川)の別稱。 夫木「おくも川ことたびさめるしるしには今日ぞ千とせの初めなりける」

おく-や 奥屋【名】たいのや(對屋)に同じ。〔室町時代の武家の語〕

おく-やく 奥役【名】芝居の樂屋一切の事を支配する人。おくちやうば。

おく-やしき 奥屋敷【名】町又は村の入口より、奥の方にある屋敷。 「じ。

おく-やしろ 奥社【名】**おくみや**(奥宮)に同

おく-やま 奥山【名】[1]奥ぶかき山。しんざん。[2]催馬樂(ササラヒ)の呂の曲の一。

おくやま-が 奥山家【名】奥深き山中にある人家又は家里。おくやまかど。

おくやま-かど 奥山門【名】前條に同じ。〔古語〕 安法集「いかならん奥山かどの初時雨都はただに心細きに」

おくやま-じやう 奥山城【名】遠江國引佐(サイナ)郡奥山村字奥山にありし城。元中元年藤原朝藤の築きて、子孫在住し、次いで戰國時代に至り、井伊氏の族奥山氏これに據りて守りしが、遂に滅ぶ。

おくやま-そだち 奥山育【名】奥山にて育ちたること、又その人。やまがそだち。

おくやまつみ-の-かみ 奥山津見神【名】伊弉諾(イザナギ)尊、御子の迦具土(カグツチ)神を斬りたまへる時、腹より生れたまへりといふ神。

おくやま-でら 奥山寺【名】奥山にある寺。夫木「かしの葉のもみぢぬからに散りつもるおくやまでらの道ぞかなしき」

おくやま-ねんりう 奥山念流【名】劍法の一派。念流より出づ。修驗者光明院行海を祖とす。

おくやま-の 奥山の【枕】[1]奥山には杉・檜などの眞木(マキ)の生ずるものなるより、まきにかけていふ。 萬葉「おくやまのまきのいたどをおしひらきしゑやいでこれのちはなにせむ」[2]奥山は深きところなるより、ふかき(深き)にかけていふ。 古今「とぶとりの聲もきこえぬおく山のふかき心を人にしられん」

おくやま-まごじらう 奥山孫次郎【名】

おくやま

〔人〕新陰（カゲ）流刀術の名人。上泉秀綱の門人。名は公醫、休賀齋と號す。德川家康及び秀忠に仕ふ。

おくやまりう 奥山流【名】刀術の一派。奥山孫次郎を祖とす。醒睡笑「ある時、奥山流の兵法者、上洛しけり」

おく-ゆかし 奥床し【形二】奥深くしてゆかし。心だてなつかしく見えてあり。源氏「こよなくおくゆかしくおぼしわたるに」

おく-ゆき 奥行【名】家・地面などの表より奥への隔り。うらゆき。（間口に對して）奥行が無い【句】淺はかなり。淺薄なり。うすっぺらなり。

おく-ゆるし 奥許【名】師より奥義の傳授を免許せらるること。（初手（シヨ）許・中許に對して）

おく-よこめ 奥横目【名】おくめつけ（奥目）に同じ。

おく-くら【名】一『くらは、千秋樂のらく（樂）を逆に言へる語』芝居の一興行の終ること。せんしらく。（俚語）二事のをはり。（俚語）「衆」に同じ。

おく-くら 御倉【名】なふせんいちしゆう（納錢一衆）に同じ。

おくらかす 後らかす【動四他】おくらす（後らす）に同じ。源氏「車など、かたへは、おくらかし、さきに立てなどしたれど」

おくら-ことねり 御藏小舍人【名】『納殿（ドウサメ）の御物の出納（クスキ）に從事するよりいふ』藏人所（ドクコロウド）の小舍人。

おくらす 後らす【動四他】おくれしむ。おくらかす。古今「かぎりなき雲井のよそにわかるとも人を心におくらさんやは」

おくら-せん 御藏錢【名】『江戸幕府にて、御藏に納（イ）置き、時時拂下げたるよりいふ』初期の淺草錢。製作最も精巧なり。

おぐら-づつみ 巨椋堤【名】〔地〕巨椋池の中を、南北にかけて築きたる堤。伏見より奈良への街道に當る。豐臣秀吉の時の造築なりといふ。「小倉堤」

おくらなふせんかた 御倉納錢方【名】なふせんいちしゆう（納錢一衆）に同じ。

おぐら-の-いけ 巨椋池【名】〔地〕山城國紀伊郡より久世郡に跨る池。伏見町の南。周回四里十一町。もと宇治川の溯入によりて生じたるものにて、上古は「おほくらの入江」と稱せり。おほくらのいけ。「小倉池」萬葉「おほくらの入江とよむなり射目人の伏見が田井に雁わたるらし」

おくら

おくら-もんと 御倉門徒・御藏門徒【名〔佛〕眞宗異安心（ジンアンジン）の一派。土藏の中に入りて念佛すれば、彌陀の本體を拜し得と說き、普通の眞宗は表面の淺義に屬し、親鸞上人所說裏面の深義は、却りて親鸞の長子善鸞より自派に傳はれりと稱し、口傳祕密を重んずること甚し。明和年間、不正宗教として禁ぜられしが、祕密の間に傳播し、今日もなほ行はる。

おくり 送【名】一送り屆くること。二見おくること。古今「山崎より神なびの森までおくりに、人人まかりて」三おくりじゃう（送狀）の略。四『樂屋の出入に送りゆくよりいふ』俳優の從僕。こんがう。五酒肴の價。遊里の茶屋の語。六小鼓の打方の一。八つ拍子に三つ拍子を添へて打つ場合に用ふるもの。七淨瑠璃の節の一。八土木にて、一間を或數に等分し、その等分點の數に兩端を合はせて、幾箇となるかを示すこと。九犯罪者が裁判所、或は處刑地に護送せらるること。

おくり 送の七箇條【句】淨瑠璃の節の、普通の送に、小吟おくり・色おくり・うおくり・あたりおくり・歌おくり・つきおくりを加へたる名稱。

おくり- 御庫裏・御庫裡【名】門徒宗の僧の妻。おくりさま。

おくり-あし 送足【名】一古代の禮式の一。貴人の前に目錄等を持出づる時、敷居の際までは常のごとく歩み行き、片足をあげ、敷居を越えんとして越えず、その足を引きて、踏直したる上にて、越ゆること。二擊劍にて、進んで打懸らんとする時、前足を後足に引寄せながら同時に踏出す動作。

おくり-あり 送蟻【名〔建〕釣木にて、鴨居・竿緣などの横木を吊る時に用ふる仕口（チク）。

（りありくお）

おくり-うち 送擊【名】擊劍にて、左手の握（リギ）を右手に代へ、送足二をなして、敵手の頭部を打つこと。

おくりお

おくり-おほかみ 送狼【名】人の行くあとをつけて、すきを窺ひながらゆく狼。おほかみれん（狼連）參照。

おくり-がう 諡號【名】おくりな（諡）に同じ。元祿太平記「文敏先生と諡號を請けしは、學問の德ゆゑにや」

おくり-がな 送假名【名】一漢文を訓讀するため、語尾の音又は助辭を、その字の右方に小さく書添ふる假名。すてがな。二假名交文にて、動詞・形容詞の活用等を區別するため、漢字の下に附くる假名。

おくり-かへす 送返す【動四他】送りて元へ返す。送りもどす。讀猿蓑（活圖）「狼をおくりかへすか鉢叩」「じ。

おくり-きん 送金【名】そうきん（送金）に同じ。

おくりきん-かはせてがた 送金爲替手形【名】そうきんかはせがた（送金爲替手形）に同じ。

おくりきん-てがた 送金手形【名】そうきんてがた（送金手形）に同じ。

おくり-ぎやう 送經【名】孟蘭盆（ウラブ）の終りの日に、亡者の冥途に歸るを送るとて、經を讀むこと。おくりび（送火）參照。小町歸（以立）「花にこふ蓮の卷葉やおくりぎやう」

おくり-けん 送券【名〔商〕實手より買手に送る勘定書。同一地方に住する商人の間の小取引に行はる。小荷物賣上書。

おくり-ご 送子【名】おにごと（鬼事）を云ふ。〔陸奥國津輕の方言〕

おくりこし-とりひき 送越取引【名】くりこしとりひき（繰越取引）に同じ。

おくり-こみ 送込【名】一送り込むこと。二能（ノウ）の間（ヒ）をつなぐ、間語の狂言師が、シテの腰を立てて、後より靜に樂屋に送り込むこと。「まで至る。送り入る。

おくり-こむ 送込む【動四他】送りて、先方へ屆かす。おくりつく。

おくり-ざい 送栄・送旌【名】通矢（シトセ）を射る時、人人、射前（ヘイ）の所に居り、矢を發するごとに、采配を擧げ、聲をかくること。

おくり-ざかな 送肴【名】おくりぜん（送膳）に同じ。

おくり-さま 御庫裏樣・御庫裡樣【名】おくり（御庫裏）の敬稱。

おくりさ

おくり-さんぢゆう 送三重【名】芝居の淨瑠璃の三重の一。段ぎれを、次の文句へ續くるもの。

おくり-ざる 送猿【名〔建〕『戸の隣接せるごとに、順次に貫くよりいふ』雨戸の猿の一種。隣接せる戸の緣と緣とを横に貫く小木片。

おくり-じ 送字【名】假名又は漢字にて、同字を重ね記せるもの。「しし」・「をりをり」「漫漫」・「皚皚」・「疊疊」などの類。かさね字。をどり字。たたみ字。毛吹草「重見「おくりじか同じ形の天つ雁」

おくり-じやう 送狀【名】一物を送る時に、その品目・數量などを記して、これに添へて送る文書。おくりぶみ。二うんそうじやう（運送狀）に同じ。

おくりじやう-ねだん 送狀値段【名〔商〕貨物の原價に、荷づくり費、その他の諸掛りを加へたる値段。

おくり-ぜん 送膳【名】饗應する時、差支ありて來らざる客に、膳に載せて、料理を贈ること、又その料理。

おくり-だし 送出【名】相撲（スマ）の手の一。突合ひたる時、相手の背後より突出すこと。

おくり-づき 送突【名】擊劍にて、左手の握（リギ）を右手に代へ、柄の端を執り、手甲を上にして、送足をしながら、敵手の左方を突くこと。

おくり-つく 送附く【動下二他】おくりとどく（送屆く）に同じ。類政集「夜もすがらさえゆく月を山の端に送りつくるは心なりけり」

おくり-づけ 送附【名〔文〕俳諧の連句の附方の一。毎句、順次に、同樣の意又は語を用ひて續けゆくこと。

おくり-てがた 送手形【名】送る品物に添へてやる、發送者の記名・捺印せる手形。

おくり-とどく 送屆く【動下二他】送りて、先方へ屆かす。おくりつく。

おくり-な 贈名・諡【名】人の死後に、敬ひて附くる名。多くは、その人の生前の行狀などに本づく。諡號（シガウ）。

おくり-の-ないし 送の内侍【句】ないし（内侍）の條下を見よ。

おくり-び 送火【名】一死者を家より出す時に焚く火。二先祖の魂の冥土に歸るを送る意にて、陰暦七月十六日の宵に、門前にて、麻柯(ヲガ)の火を焚くこと。(むかへ火に對して)

おくり-びと 送人【名】見送る人。蜻蛉「おくり人あまたなとしてものしたり」

おくり-ぶ 送夫【名】荷物を送る人夫。東鑑「送夫二十人、國雜色二人」

おくり-ぶね 送船【名】客を載せて送る船。俗曲「入幡がね「八幡がねのきぬぎぬに、別れともないおくりぶね」

おくり-ぶみ 送文【名】おくりじやう(送狀)に同じ。

おくり-まぜ 送眞風【名】夏の末より秋の初めに吹く風。おくれまじ。(畿内・中國の船人の語)

おくり-むかふ 送迎ふ【動下二他】往くを送り、又、來るを迎ふ。往く先まで送りて行き、又、迎へて歸り來る。送迎(ソウゲイ)す。千載「都にて送り迎ふと急ぎしをしりてや年の今日はくるらん」

おくり-むかへ 送迎【名】送り迎ふること。そうげい。源氏「道のほどのおくりむかへも、おりたちてつかうまつらんに」

おくり-もの 送物【名】客の歸る時に贈り遣す物。源氏「ところにつけたる御おくりものども、ささげ奉りたまふ」

おくり-もの 贈物【名】一人に贈り遣す物。しんもつ。二同輩以下の人に贈り遣す物。(進物に對して)(鎌倉時代の語)

おくりもの-ぶぎやう 贈物奉行【名】鎌倉幕府諸奉行の一。配下の武士たちへの贈物のことを掌りしもの。

おくりやり-もの 御呉物【名】『くりやりは呉れられの訛』贈られたる品。下されもの。(俚語)手習鑑「心づけなおくりやりもの」

おくり-れい 送禮【名】見送りの禮。

おくり-をさむ 送納む【動四他】死にし人を埋葬するために送る。送葬す。(古語)玉葉「はらからなる人のみまかりて、おくりをさめける夜」

おくる 送る【動四他】一かなたへ遣(ヤ)る。つかはす。二行く人のあとに從ひゆく。見送る。三死にし人を運ぶに附從ひて、埋葬地まで行く。四位置を順順に移す。五過ぐす。ふ(經)。「月日をおくる」六かへす。むくゆ。「恩をおくる」七漢字の下に假名を附ぐ。おくりがな(送假名)參照。

おくる 贈る【動四他】一送り與ふ。つかはす。やる。贈與す。伊勢「ともだち、これを見て、よるの物までおくりてよめる」二死後に、官位を與ふ。追贈す。

おくる 後る【動下二自】一のちになる。おそくなる。次になる。(先だつに對して)二あとにのこる。及ばず。とどかず。(先だつに對して)「死におくる」三生殘る。死に殘る。(先だつに對して)土佐「ゆくさきに立つ白波の聲よりもおくれて泣かんわれやまさらん」四鈍(ニブ)くなる。劣る。源氏「すこし品おくれたり」五あとより生えたる毛、他のよりも短くあり。おくれげ(後毛)參照。源氏「ひたひ髮は、すこし短くぞあめるを、むげにおくれたる筋のなきや」六臆病になる。卑怯になる。氣おくれす。おそる。きおくれ(氣後)參照。

おーぐるみ 鬼胡桃【名】(植)おにぐるみ(鬼胡桃)に同じ。

おくれ 後【名】一おそくなること。二おくれげ(後毛)の略。長町女腹切「長柄の夕嵐、髮のおくれのはらはらと」三臆すること。臆病。氣おくれ。四負くること。劣ること。鉾くなること。「く。

おくれ 遅れを取る【句】負く。敗(ハイ)を招

おくれ-あし 後足【名】おくればせ(後馳)一に同じ。

おくれ-がけ 後驅【名】おくればせ(後馳)一に同じ。

おくれ-がっせん 後合戰【名】退却する軍勢の最後に列して、敵と戰ひつつ退くこと。殿戰。

おくれ-がみ 後髮【名】おくれげ(後毛)に同じ。驅山比翼塚「言ひそそくれし後髮」

おくれ-げ 後毛【名】おくれて生えたる鬢(ビ)の毛。他の毛より短き髮の毛。おくれがみ。おくれ。おくれの髮。

おくれ-ざき 後咲【名】時季に後れて、花の咲くこと。(早咲に對して)

おくれ-さんばい 後三盃【名】かけつけさんばい(驅附三盃)に同じ。

おくれ-ばせ 後馳【名】一おくれて、跡より馳せつくこと。おくれがけ。おくれあし。二おくれて、思案の出づること。おそまき。三時機のおくれたること。

おくれ-まじ 後眞風【名】おくりまぜ(送眞風)に同じ。(伊豆國・志摩國の船人の語)

おーくわく 御畫【名】次條を見よ。

おーくわくにち 御畫日【名】古、中務(ナカツカサ)省の內記、內旨を承け、詔書を起草して奉りたる時、年月の下に、日を宸署せられしこと。御畫日の後、下付せられしを、中務卿謄寫して、太政官に送り、太政大臣・左右大臣・大納言連署の上、これが宣布を奏請するに及びて、御裁可のしるしとして、末尾に可の一字を宸署して下したまひしを、「可(カ)の御畫(クワク)」といふ。

おくわし-ぶぎやう 御菓子奉行【名】武家時代の職制の一。將軍の諸家に臨む時、諸家より臨時に命じて、菓子のことを掌らしめしもの。

おーくわんじん 御勸進【名】こじき(乞食)を云ふ。(常陸國・下總國の方言)

おく-ぶし 奥繪師【名】江戸幕府の時、畫を以て幕府に仕へし、中橋(ナカバシ)・銀冶橋(ハガネ)・木挽町(コビキチヤウ)・濱町(ハマチヤウ)の四家。いづれも狩野家にて、江戸市中における住地により呼びしなり。(表繪師に對して)

おけ 【名】【植】さはら(花柏)に同じ。

おけ 【感】神樂・催馬樂(サイバラ)歌の拍子の詞。神樂「いせ島やあまのとねらがたくほのけ、おけ、おけ」催馬樂「飛鳥井「あすかゐにやどりはすべし、おけ」

おけさぶし 御袈裟節【名】小唄(コウタ)の節の一。二上りの調子にて、越後國柏崎邊より流行しはじめたり。俗曲「越後獅子「「茶九茶九もおけさぶし」「に同じ。

おーけし 御芥子【名】けしばうず(芥子坊主)

おけーする 飫憩水【名】(植)秋美しく紅葉する樹なりといへど、實物詳かならず。或は檜とも榊ともいふ。(古語)

おーけそく 御華足【名】一けそく(華足)の敬語。二華足(ケソク)に盛りて佛前に供へたる品。(加賀國の方言)「する臺。

おけそく-だい 御華足臺【名】御華足を載

おーけったるい 【形】おかったるいに同じ。(俚語)

おけ-てんわう 億計天皇【名】(人)『おけわう(億計王)を見よ』にんけんてんわう(仁賢天皇)に同じ。

おーげぶく 御元服【名】げんぶく(元服)に同じ。

おーけんつう 【名】一髮の毛の末のすくなくすがれたるもの。(江戸の語)二きどりて、愛敬の無きこと、又その人。(江戸の語)

おげんぶく-てんそう 御元服傳奏【名】古、天皇・皇太子の御元服の時、臨時に置かれ、御元服の事を傳奏することを掌りし職。

おーけら 御螻蛄【名】(動)けら(螻蛄)に同じ。(女・小供の語)

おけーわう 億計王【名】(人)仁賢天皇の御即位以前の御名。

おーこ 枕【名】あふご枕の訛。「こさま。

おーこ 御蠶【名】(動)かひこ(蠶)の敬稱。お

おーこ 御兒【名】他人の子の敬稱。お

おこ 於期・海髮【名】(植)おこのり(海髮)に同じ。

おーご 【名】おごうに同じ。醒睡笑「これのおごは、ことし二十にこそなられれ」

おーごい-さあ 【名】おごうさまを云ふ。(薩摩國の方言)

おーごう 御講【名】一宮中にて行はせらるる佛事の敬稱。二佛教殊に眞宗信徒の、集合して、讃經・聞法(ホモン)などを行ふこと。三『はっかんこう(報恩講)の敬稱。「料人)に同じ。(眞宗信徒の語)

おーごう 【名】『おごうを見よ』ごれうにん(御料人)に同じ。

おごう-さま おごう樣【名】前條に同じ。きのふはけふの物語、おごうさま、御乳(チオ)の人を召して、なう、うば、聞かしめ…と仰せければ」

おーご-おご 【貌】うどうどの訛。

おごき 動【名】おごくこと。うどくこと。(古語)保憲女集「おどきなき奈良の都のひ

んがしには、よろづよの影見ゆる鏡の山さやかにすめり」

おごく 動く【動四自】うごく（動く）に同じ。〔古語〕重之集「ささがにのくものはたてのおごくかな風をいのちに思ふなるべし」

おーとご 【名】『御（オ）供御（ゴ）の轉』ひるめし（晝飯）を云ふ。〔畿内の方言〕長町女腹切「嵯峨へおりたりや、しあはせと、釋迦樣の開帳の相伴やら、おこごやら、旅籠屋で支度して」

おーごし 【形二】大きくして強し。いかめし。〔古語〕起「沈毅、オコゴシ」

おーとざ 【名】ばか（馬鹿）を云ふ。〔尾張國の方言〕

おござーひき 御莫蓙延【名】おさすり（御摩）〔回〕に同じ。〔俚語〕

おこーさま 御兒樣【名】他人の子の敬稱。

おこーさま 御蠶樣【名】〔動〕かひこ（蠶）の敬稱。〔關東の語〕

おごさま おごう樣【名】おごうさま（おごう樣）を云ふ。〔東北・中國の方言〕

おござーやらう 御莫蓙野郎【名】他人を罵る時にいふ語。ばかやらう。〔美濃國・近江國の方言〕 續滕栗毛「馬が棚にあるとぬかしよった。このおござやらうめ」

おこし 興・粧・粉【名】おこしごめ（興米）の略。

おこし 起【名】〔一〕おこすこと。〔二〕花合せにて、めくりふだを開くこと、又めくりて出でたる札。おき。〔三〕〔地〕尾張國中島郡にある町。木曾川に沿ひ、その附近にては、木曾川を起川（おこし）と云ふ。名古屋・大垣間の通路に當る。

おーこし 御越【名】行くこと、又は入來ることの敬語。おいで。

おこし 御越【名】〔地〕豐後國速見（はや）郡にある町。別府灣に沿ひ、溫泉多し。

おこしがは 起川【名】〔地〕おこし（起）〔三〕を見よ。

おこしーかへる 起反る【動四自】りきみかへる。傾城反魂香「八丁・走井（ハシリ）の問屋・組頭・組町引具し、おこしかへって、聲聲に」

おこしーごめ 興米・粧・粉【名】糯米（ウルチ）又は粟の蒸して乾したるに、水飴をまぜたる砂糖をまぶし、炒（イ）りて製したる菓子。大阪にて製するもの、最も名あり。おこし。著聞「御くだものをまゐらせられたりけるに、おこしごめをとらせたまひて」

おこしーずみ 熾炭【名】おこして火にしたる炭。〔古語〕起「熾炭、オコシズミ」

おこしーたつ 起立つ【動下二他】おこす（起す）〔一〕に同じ。枕「前栽などをとりあつめ、おこしたてなどするを」

おこしーたて 御興立【名】興を載する臺。

おこしーどころ 起所【名】おこすべきところ。現六「家の風吹き枯らしたる柴のねのおこしどころもなくなりにけり」

おこしーび 熾火【名】おこしたる炭火。おき。おきび。〔古語〕起「炭火、オコシビ」

おーこしもの 御腰物【名】腰に帶ぶる刀の敬稱。曾我「いそぐとてさすが刀を忘るるはおこし物とや人の見るらん」

おーこしやう 御小姓【名】こしやう（小姓）の敬稱。俳諧新選之反「御小姓の顏にかがやく牡丹かな」

おこしやうーばり 御小姓張【名】煙管の張樣（ハリ）の一。

おこじり 奥尻【名】〔地〕後志（シリ）國十七郡の一。檜山（ヒヤ）支廳の所管。

おこじりかいけふ 奥尻海峽【名】〔地〕次條を見よ。

おこじりたう 奥尻島【名】〔地〕後志（シリ）國久遠（クドウ）町の西にある島。周回十四里。全島を一郡（奥尻郡）とす。檜山（ヒヤ）支廳の管轄に屬す。島の東岸稻穗岬と久遠郡太田岬（一名帆越（ホコシ）岬）との間を奥尻海峽と云ふ。

おこしーゑ 起繪【名】しくみゑ（仕組繪）に「同じ。

おこす 起す【動四他】〔一〕立たしむ。おこしたつ。源氏「君も、しひて御心をおこして、心の中に佛を念じたまひて」〔二〕新に開く。はじむ。「會社をおこす」〔三〕他人の眠を覺す。源氏「おこしつる老人の出できたるには」〔四〕發生せしむ。「病をおこす」〔五〕土を掘りかへす。「田地をおこす」〔六〕熾（サカ）ならしむ。振ひたたしむ。更科「すびつに、火などおこして」〔七〕花合せにて、めくりふだを返して、表をあらはす。「めくりおこす」〔八〕固著せる物を剝（ギ）取る。「膠をおこす」〔九〕檣を立て又は碇を上ぐ。「す。〔昔の船戰の語〕

おこす 版に起す【句】版に彫る。出版す。刊行

おこす 遣す・致す【動四他】次條に同じ。狂言太刀ばひ「鞘にをさめておこしをろ」

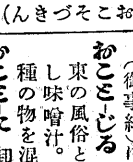
おこす 遣す・致す【動下二他】送り來る。よこす。おくす。くす。〔古語〕土佐「講師、もの・酒おこせたり」大鏡「東風（ヒガシ）吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ」

おこぜ 虎魚・鱸【名】〔動〕硬鱗（ギヤウ）類に屬する海產の魚。かさごの類。ぎぎに似て大なり。「東の方言」

おこぜ 【名】〔動〕いらむし（苛蟲）を云ふ。〔關東の方言〕

おこーそか 嚴【名】いかめしきさま。嚴重。嚴格。字鏡「嚴、於己曾加爾」

おこそーづきん 御高祖頭巾【名】『これをかぶりたる姿、日蓮宗の高祖日蓮の像に似たるよりいふ』女の用ふる頭巾の一。目の部分のみをあらはし、他の顏面と頭部とを包みおほふ。そでづきん。おくそづきん。大明（ダイ）頭巾。隱元（イン）頭巾。順光（ジユンクヮウ）頭巾。



（んきづそこお）

おこそでーばんしゆう 御小袖番衆【名】むろまちばんしゆう（室町番衆）を見よ。

おこたり 怠【名】〔一〕怠ること。なまけ。ぶしやう。不注意。怠惰。懶惰（ダン）。懈怠（ケタイ）。〔二〕罪過を詫ぶること。謝罪。〔三〕病の少し癒ゆること。〔古語〕

おこたりーざま 怠樣【名】病氣の少し快方に赴きたるさま。源氏「二十ょ日、いと重くわづらひたまへれど、ことなるなどり殘らず、おこたりざまに見えたまふ」

おこたりーぶみ 怠文【名】たいどやう（怠狀）に同じ。〔古語〕字治「名簿（ナフ）に、おこたりぶみを添へていだす」

おこたる 怠る・惰る【動四自】〔一〕はたらかず。なまく。〔二〕注意せず。油斷す。〔三〕病、すこし癒ゆ。〔古語〕古今「心地そこなへる頃、あひ知りて侍りける人の問はで、心地おこたりて後とぶらへりければ」

おこたれ 怠【名】おこたり（怠）の訛。謝罪。用明天皇職人鑑「御湯をささげて、七座の物忌、七日のおこたれとござある」

おーごぢよ 御御女【名】『御（オ）御料（ゴレ）の轉訛か。おごれんを見よ』ごれうにん（御寮人）を云ふ。〔薩摩國・大隅國の方言〕

おこーづく 【動四自】談話又は物が調子づく。はずむ。〔古語〕著聞「嘲りおこづく」

おこづり 誘【名】おこづること。〔古語〕

おこづる 誘る【動四他】甘言を以て誘ふ。をこづる。〔古語〕起「誘、慶而、アダヲオコツリテ」

おーこと 御事【名】おことじる（御事汁）の略。

おーこと 御事【代】親しみていふ第二人稱。おもと。おほんこと。おんみ。そなた。そこ。〔古語〕取替「おことを、いと忘れがたく戀ひきこゆめるを」

おこと-じまひ 御事仕舞【名】おことをさめ（御事納）に同じ。

おこと-じる 御事汁【名】江戸時代に、關東の風俗として、御事始と御事納とに食せし味噌汁。芋・人參・牛蒡・小豆・豆腐など種種の物を混じたり。おことに。おこと。

おこと-に 御事煮【名】前條に同じ。

おこと-はじめ 御事始【名】ことはじめ（事始）「に同じ。

おこと-をさめ 御事納【名】ことをさめ（事納）〔一〕〔二〕に同じ。

おことはゐ 行はる【動下二自】『もとおことなふ（行ふ）の被役形』〔一〕障りなく成る。行ふやうに成る。〔二〕ひろく用ひらる。流行す。はやる。

おこなひ 行【名】〔一〕行ふこと。なすこと。しわざ。動作。〔二〕行狀。品行。操行。身もち。〔三〕僧の、佛戒を修すること。勤行（ゴンギヤウ）。戒行（カイギヤウ）。源氏「おこなひのらふは積りて」

おこなひーがち 行勝【名】佛事の勤行のみに、月日を過ごすこと。榮花「一條の宮には、心のどかに思しめさるるままに、御おこなひがちにてすぐさせたまふ」

おこなひーごゑ 行聲【名】戒行して讀經する聲。夫木「昔深き豐浦（ラウ）の寺は山伏のおこなひごゑもさびしかりけり」

おこなひ-すます 行澄ます【動四自】佛戒を修して、餘念なく暮す。狭衣「おこなひすましたまへるけはひ、いみじうあはれなり」

おこなひ-びと 行人【名】佛戒を修する僧、又、在家にて佛戒を修する者。道士。源氏「かしこきおこなひびとはべり」

おこなふ 行ふ【動四他】㊀なす。扱ふ。まかなふ。働く。㊁佛戒を修す。後撰「物にこもりたるに、知りたる人の、局ならべて、正月おこなひていへる」

お-となんど 御小納戸【名】こなんど（小納戸）の敬稱。

おご-ぬふ 補ふ【動四他】おぎなふ（補ふ）㊀に同じ。〔古語〕字鏡「綴、於己奴不」

おご-のり 於期海苔・海髪・頭髪菜・江籬【名】〔植〕紅色藻類に屬する海藻。磯邊の岩に生じ、形亂れたる髪の如くにて、全長一尺ほどに達し、暗紅色を呈す。料理のつまに用ひられ、又、寒天製造の材料となる。晒（サラ）して赤く染めたるを、猩猩（シヤウジヤウ）海苔といふ。おご。うご。えご。いぎす。うどこぶ。〔の語〕

お-とは 御強【名】こはめし（強飯）を云ふ。〔女語〕

おこはに-かく お恐に掛く【句】こはし（恐し）の條下を見よ。

お-こはひ 御強飯【名】「こはひはこはいひ（強飯）の義」こはめし（強飯）を云ふ。〔筑後國の方言〕

お-こびと 御小人【名】こびと（小人）㊁の敬稱。

おこびと-めつけ 御小人目附【名】こびとめつけ（小人目附）の敬稱。

お-こぶし 御拳【名】㊀放鷹場の内にて、將軍の親しく臨む場所。〔江戸時代の語〕㊁〔動〕ささえ（蠑螺）を云ふ。〔女の語〕御拳の鳥【句】將軍が親ら放鷹して得たる鳥。〔江戸時代の語〕

お-こ-ぶる 御兒振る【動四自】㊀貴人の子弟の如くにたかぶる。〔俚語〕㊁女が、その容貌を誇る。〔俚語〕

お-こん 御紺【名】あぶらや（油屋）㊁を見よ。

お-こん-さん 御こん樣【名】〔動〕『こんこんと鳴くよりいふ』きつね（狐）の異稱。〔俚語〕童謡「山越して、川越して、お山のお山のおこんさん」

おご-めく 蠢く【動四自】うごめく（蠢く）に同じ。

お-こも 御薦【名】こじき（乞食）を云ふ。こもつかぶり。〔江戸時代の女・小供の語〕

お-こ-もの 御小者【名】こもの（小者）㊁の敬稱。

お-こもり 御籠【名】神佛などに祈誓をこめて、社堂に參籠すること。〔俚語〕

お-こやば 御小屋場【名】享保年間江戸城の中に設けたる工作場。當時の名工多く集りて、幕府用の蒔繪その他の調度類を製し優秀の品を出せり。

お-こら-ご 御子良子【名】伊勢神宮の内にある子良館（コラノ）に居て、神饌を供する等の神事にあづかる少女。神官の娘の紅潮期に達せぬものを採用し、神慮にかなひたる者は、二三十歳に至るも月經なしと云ひ傳ふ。芭蕉「子良館の後に梅ありといへば、おこらごの一もとゆかし梅の花」

お-ごら-もち 鼹鼠【名】〔動〕むぐらもち（鼹鼠）に同じ。

お-ごり 怒【名】おこること。いかり。はら

お-こり 起【名】事のはじまり。事のもと。原因。起源。起因。

お-こり 瘧【名】『おこり（起）の義』間歇（カンケツ）熱の一種。寒・熱の、隔日又は毎日時間を定めて發する病。わらはやみ。ぎやく。國太曆「春宮大夫、おこり、いまだ落ちゐず」

おごり 驕・傲【名】驕ること。たかぶり。おほへい。

おごり 奢【名】㊀料理茶屋にて飲食すること。〔俚語〕「これからおごりに行く」㊁奢ること。奢侈。

お-ごりう 【名】『御（オ）御料（ゴレウ）の轉訛か。おごれんを見よ』ごれうにん（御料人）に同じ。

おこれん おごう。狂言「来市」「身共はさう思へども、又おごりうの何と思しめすも知らぬ。先づ何うて見よ」

おこり-おとし 瘧落【名】〔植〕きんぽうげ（毛茛）に同じ。

おこり-ごころ 瘧心地【名】瘧の病に苦しむこと。〔古語〕續世纜「おこりごころ煩ひたまひけるに」

おこり-さめ 發歇【名】體熱の、高くなり又低くなること。

おこり-じやうご 怒上戸【名】㊀三人上戸の一。酒に醉ひて怒る癖、又その癖のある人。はらたちじやうご。（泣上戸・笑上戸に對して）㊁怒りやすきこと、又その人。〔俚語〕

おこり-っぽい 怒りっぽい【形一】「ぽいは接尾語」怒りやすし。怒ること多し。

おこり-び 發日【名】瘧などのおこる日。

おこり-ぶるひ 瘧慄【名】おこりを病みて、身のわななきふるふこと、又その病にかかれる人。

瘧慄が湯治に行く【句】『瘧病には入湯を忌むよりいふ』みづから禍を求むる譬。〔諺語〕「る人。

おごり-もの 奢者【名】奢侈なる人。おご

おこる 熾る【動四自】火が炭にうつる。炭火の氣盛んになる。

おこる 起る・興る【動四自】㊀あらたに始まる。新に立つ。「國おこる」㊁發す。出づ。生ず。㊂さかんになる。振ひ立つ。

おこる 怒る【動四自】いかる。腹だつ。

おこる 奢る【動四自】㊀分を過して、金錢を費す。分を過して、飾をなす。㊁（特に）料理茶屋にて飲食す。㊂自ら金を出して、他をもてなす。ふるまふ。〔俚語〕

おごる 驕る・傲【動四自】㊀人を見下ぐ。誇る。たかぶる。㊁制し難くなる。㊂我がままなるふるまひをなす。

驕る平家、久しからず【句】㊀昔、平清盛の一族、驕奢を極めしが、久しからずして、檀ノ浦に敗れたり。㊁驕奢なる人は、長くその身を保つこと能はず。驕る者久しからず。〔諺語〕

驕る者、久しからず【句】前條㊁に同じ。〔諺語〕

お-ごれ 【名】次條に同じ。〔陸奥國の方言〕

お-ごれん 【名】『御（オ）御料（ゴレウ）の轉訛か。ごれうにん（御料人）・おごりう・おごおよ（御御女）を見よ』㊀他人の妻。おごれ。〔越後國の方言〕㊁他人の娘。おごれ。〔大和國奈良の方言〕

お-ころ 【名】おころりに同じ。〔俚語〕風流徒然草「おねんねや、おころおころと、御子樣方をすかすも」

おごろ-もち 鼹鼠【名】〔動〕むぐらもち（鼹鼠）を云ふ。〔畿内・中國・四國の方言〕

お-ころり 【名】『御轉の意』寢ぬること。おころ。〔俚語〕子守唄「寝ん寝んよ、おころりよ、ねんねの御守（オモリ）は何處（コト）へ行（イ）た」

お-ざ 御座【名】㊀座席の敬稱。㊁僧の說教の敬稱。「御座を聽聞す」

御座が冷（サ）める【句】座興うすらぐ。興味が無くなる。

お-さい 御宰【名】さいりやう（宰領）の敬語。俗譬「殿さまお江戸入り、さても見事なおつづら馬、あとの御宰に問うたらば、加賀の宰相ちんちろりん、奴の尻や、寒さらし」

おさいしんはち-ぶぎやう 御再進鉢奉行【名】武家時代の職制の一。將軍の諸家に臨む時、その諸家の臨時に命じて、目錄に表したる進物の外に、更に鉢を進むることなどを掌らしめしもの。

おさいじやう-ぶぎやう 御西淨奉行【名】武家時代の職制の一。將軍の諸家に臨む時、諸家の臨時に命じて、御座敷附の小大便所を新造し、諸具を備ふる等のことを掌らしめしもの。

お-ざうり 御草【名】『さうはざうり（草履）の略』ざうりとり（草履取）に同じ。〔武家時代の語〕

おさか 忍坂【名】〔地〕『忍（オ）坂の略』㊀今の大和國磯城（キシ）郡城島（キシマ）村大字忍坂（オサカ）の邊。昔は、宇陀地方へ通ずる途に當り、道臣（オミチ）命、神武天皇の命を奉じて、この地に虜を誘殺したり。〔押坂・息坂・刑坂〕㊁姓氏の一。神別にして、火明（カガリ）命より出づ。姓（カバネ）は連（ムラジ）。大和國忍坂（オサカ）の地によりて氏とす。

おさかづきだい-おをりぶぎやう 御盃臺御折奉行【名】武家時代の職制の一。將軍の諸家に臨む時、諸家の臨時に命じて、將軍・公卿等に差上ぐべき盃臺・折等を扱はしめしもの。おをりぶぎやう。

おさか-の-うち-の-みささぎ 押坂内陵【名】舒明天皇の御陵。大和國磯城（キシ）郡城島（シマ）村大字忍坂（オサカ）にあり。

おさかーのーおほなかーつーひめ 忍坂大中津姫【名】〔人〕允恭天皇の后。衣通姫（ソトホリヒメ）の姉。天皇、皇太子たりし時、納れられて妃となり、安康・雄略の兩天皇を生む。

おさかべ 刑部【名】一姓氏の一。神別にして、火明（ホノアカリ）命第十七世の孫、屋主（ヤヌシ）宿禰より出づ。姓（カバネ）は首（オビト）。攝津國有馬郡忍壁（オサカベ）郷に住みしより氏とせしならんといふ。二姓氏の一。蕃別にして、吳（クレ）國の人李牟羅彌の後。姓（カバネ）は造（ミヤツコ）。河内國若江郡刑部郷に住みしなるべし。

おさかべーしんわう 忍壁親王【名】〔人〕天武天皇の第九子。詔を奉じて帝紀及び上古の事を撰し、又、律令の制定に與（カヅ）る。三品に敍せられ、知太政官事となり、慶雲二年薨ず。

おーさがり 御下【名】一正月三箇日の間に降る雨又は雪。〔御降〕 紹巴「おさがりとこれもやいはん初時雨」 二神佛に供へ又は客に出したる食物などの殘。おろし。 三主家などより貰ふ古き衣服の類。おながれ。 四都より地方に向ひて出發すること。下向。（おのぼりに對して）〔京都の語〕「大阪へ、何時（ツイ）おさがりになるか」

おさがりーあめ 御下雨【名】正月の三箇日の間に降る雨。

おーさき 御先【名】一さき（先）の敬稱。「おさきに參ります」 二人の手さきに使はる者を嘲りていふ語。〔俚語〕「おさきに使はる」

おさきーぎつね 御先狐【名】〔動〕狐の一種。形、通常のより小く、性きはめて獰惡なりといふ。

おさきてーがしら 御先手頭【名】さきてがしら（先手頭）の敬稱。

おさきてーぐみ 御先手組【名】さきてぐみ（先手組）の敬稱。

おさきーまっくら 御先眞暗【名】思慮の乏しきこと。めあてなきこと。むやみ。一手先が見えず。寸前暗黑。〔俚語〕

おさくじーはじめ 御作事始【名】さくじはじめ（作事始）の敬稱。

おーさげ 御下【名】一女の帶の結び方の一。矢の字に結ばずに、兩端を垂れさげたるもの。 二さげがみ（下髮）一の敬稱。

おさけーかた 御酒方【名】室町幕府の職制の一。酒の出納（スヰナフ）を掌りしもの。

おさげーなほし 御下直衣【名】おひきなほし（御引直衣）に同じ。

おさけーぶぎやう 御酒奉行【名】武家時代の職制の一。將軍が諸侯の第に臨む時、その諸侯の臨時に命じて、當日、酒を供ふる事を掌らしめしもの。

おーさし 御差【名】一さしうば（差乳母）の敬稱。 二さしむかひ（差向）の敬稱。〔俚語〕

おーさじ 御匙【名】一江戸幕府の奥醫及び大名の侍醫の敬稱。おさじい。〔德川時代の語〕 二細長き顏を嘲りていふ語。〔俚語〕

おさじい 御匙醫【名】前條一に同じ。

おさしきーしつらひ・ぶぎやう 御座敷室禮奉行【名】『室禮は假借の字、しつらふを見よ』次條に同じ。

おさしきーぶぎやう 御座敷奉行【名】武家時代の職制の一。將軍の諸家に臨む時、諸家の臨時に命じて、屋舍を新造し、又、座敷飾などを掌らしめしもの。御座敷室禮奉行。

おさしーぼうこう 御差奉公【名】差乳母（サウバ）として奉公すること。乳母奉公。 雪女五枚羽子板「連合には、大名方の若君のおさし奉公といひ聞かせ」

おーさすり 御摩【名】一かしはもち（柏餅）を云ふ。〔女の語〕 二下婢を兼ねたる妾。おごさひき。おなで。〔俚語〕

おさたーがき 御沙汰書【名】德川時代に、諸藩の留守居役の依賴により、幕府の坊主より、日日の政治もしくは將軍・老中などの動作を報告せし文書。

おーさだまり 御定【名】おきまり（御決）に同じ。〔俚語〕 一代女「おさだまりの文章、そこここに書きちらし」

おさだめーがき 御定書【名】江戸幕府の制定せし法典。上下二卷に分れ、上卷には幕吏の執務及び司法・警察に關する規定八十一箇條を收め、下卷には專ら刑法・訴訟法に關するもの百三箇條を收む。一名、公事方（クジカタ）御定書。下卷のみの又の名は、御定書百箇條・御仕置（オキ）百箇條。寛保律。

おさだめがきーひやくかでう 御定書百箇條【名】前條を見よ。

おーさつ 御薩【名】〔植〕さつまいも（薩摩芋）を云ふ。〔女の語〕

おーざつき 御座附【名】ざつき（座附）四を見よ。

おーさと 御里【名】素性（スジヤウ）または經歷。〔俚語〕 澤世風呂「入らっしやいのと、たべつけねえものいひをしでもお里が知れらあ」

おーざなり 御座形【名】ざなり（座形）を見よ。

おさふ 押ふ・抑ふ【動下二他】一押す。押しつく。 二ふせぐ。支ふ。くひとむ。 三こらひ忍ぶ。辛抱す。 四さされし盃を押返して、更に飲ましむ。「さしつ、おさへつ」 五捕ふ。「盜人をおさふ」 蕃「おさへた鰕蟹（クバン）」 六わが意のままにするために、他人の手を觸れしめず。さしおさふ。にぎる。「證據をおさふ」「財産をおさふ」 七ふさぐ。掩ふ。

おさへ 押【名】一おさふること。 二ささへ。ふせぎ。 萬葉「筑紫の國はあたまもるおさへの城（キ）ぞと」 三おもし。おし。「紙のおさへ」 四行列又は隊伍の終りに附きて取締をなす人。しんがり。 百日會我「御家人、ささを打拂ひ、海野の太郎は、おさへを乘って」 五念を推すこと。 六宴席などにて、最後に出す物。 七さされし盃を押返して、更に飲ましむること。 長町女腹切「さっきの押の盃はいつの世に戻ること」

おけふそく 脇息（ケフソク）に同じ。 八おさへぎ（押木）の略。 九おさへもの（押物）の略。

おさへーぎ 押木【名】ささへにする木。物を押しつくる木。おさへ。

おさへーさす 押刺す【動四他】頭髮をおさへて、櫛をさす。〔古語〕 萬葉「大和の黃楊（ツゲ）の小櫛をおさへさす」

おさへーじろ 押城【名】敵の要衝の地境に築き、敵の侵入を押へ、外衞とする城。

おさへーぜい 押勢【名】味方の散亂を阻止するため、戰線の後方に配置する軍勢。

おさへーだち 押立【名】物を押へて立つこと。つかまりだち。（少し生長したる赤子のさまにいふ） 取替「やうやうおさへだちほどなるが、美しきも、目のみとどまりて」

おさへつきーのみ 押突鑿【名】鑿の一種。長くして、扁く薄く、常に鉋（カン）の押へを削り、追入鑿を用ひがたき幅狹きところに用ふ。うすのみ。

おさへーつく 押附く【動下二他】おしつく（押附く）に同じ。

おさへーのぢん 抑陣【名】昔、近衞の兵が禁中を警（ケイ）むるために、承明門の傍に屯せし所。「おそば。

おさへーば 押齒【名】やへば（八重齒）に同じ。

おさへーばしら 押柱【名】〔建〕だきばしら（抱柱）に同じ。

おさへーばん 押番【名】行列の最後に在りて一同を督する役、又その人。

おさへーもとゆひ 押元結【名】もとゆひの一種。男の未だ前髮のある頃に、頭の上より掛けて、左右へ分け、耳の後より下げて結ぶに用ひしもの。延寶の頃流行せり。

おさへーもの 押物【名】花鳥・山水などの作り物をしたる臺の上に、酒の肴を盛りたるもの。酒宴の最後に出す。おさへ。

おさまし 【形二】あさはかなり。あさまし。〔古語〕 相模集「かげ見きとのみ おさまし く言ひもらしける言の葉に」

おーさん 御饗【名】めしたきをんな。ぢょちゅう。おさんどん。下女。下婢。

おーさんごう 【名】『御散米（ゾサン）の訛』さんまい（散米）に同じ。

おさんじよーぶぎよう 御産所奉行【名】鎌倉及び室町幕府の職制の一。將軍家の簾中（レンチウ）の御産に就きての雜事を掌りしもの。

おさんーどん 御饗殿【名】おさん（御饗）に同じ。

おーさんーのーま 御三間【名】さんのま（三間）の敬稱。

おさらぎーときふさ 大佛時房【名】〔人〕ほうでうときふさ（北條時房）に同じ。

おーさらーば 【感】『お然（サ）らばの義、「お」は感動詞。さらばを見よ』別るる時のかけ聲。おさらばえ。さらば。〔俚語〕

おさらばを極(キ)める【句】別れ去る。〔俚語〕〔原遊廓の語〕

おさらばえ【感】前條に同じ。〔元祿頃の吉

おさらば-むすび おさらば結【名】ねこじやらし(猫じやらし)に同じ。

おさるこほろぎ 御猿蟋蟀【名】〔動〕おかまこほろぎ(御竈蟋蟀)を云ふ。〔東京の語〕

おさるまち 御申待【名】かうしんまち(庚申待)に同じ。醒醒笑「姥が詞に、おさるまちとて、人のとりを限りにお待ちある」

おし 壓【名】■壓(オ)すこと。おそふる。■ものを壓(オ)すに用ふるもの。おもし。おさへ。■人を威壓する力。おもし。「おしが強い」「おしが利(キ)く」■鼠などを捕る一種の裝置。おとし。拾遺はしたかの「おきゑにせんと構へたるおしあゆがすな鼠とるべく」

おし 押【名】■押すこと。おそぶる。■飽くまで我(ガ)をとほさんとすること。がまん。〔俚語〕「おし強し」■相撲(スマ)の手の一。押切(オシ)・押出(オシ)・押倒(オシ)の三つに分つ。各條を見よ。■〔商〕船荷をその實際の重量又は石數より幾分か少く見積ること。運賃の割引と同樣の結果を生ぜしむる目的にて行ふ。おしこく(押石)參照。■〔商〕したおし(下押)に同じ。

おし 啞・瘂【名】おふし(啞)に同じ。

おし 啞の一聲(ヒエ)【句】■啞の珍しく物言ふこと。■『鶯鶯(ジ)の一聲の意にいひかけ、「鶴の一聲」に對せしめたる語』平凡なる歌人などの、たまに秀逸なる歌を詠みいづる譬。〔諺語〕

啞の一聲、富貴の相(サウ)【句】啞の物言ふは珍しきによりて、富貴の相となすといふなるべし。〔諺語〕狂言(三人片端)「これは、いかなこと、おしが物言うた。さりながら、おしの一聲富貴の相と申す」

啞の問答【句】互に意思の疏通せぬ譬。〔諺語〕

啞の夢【句】心には知りながら、あきらかに說明しがたきことの譬。〔諺語〕

啞の旅行【句】外國語を知らずして、外國に旅行すること。〔諺語〕

おし 御師【名】■「祈(ライ)の師」に同じ。■伊勢の神宮及びその他の有名なる神社における身分低き神職。親元日記、寛正六年二月四日、春日御師(刑部少輔師淳)」

おし 磯【名】いそ(磯)に同じ。〔東國の古の方言〕萬葉「駿河の海おしべに生ふる濱つづらいましを頼み母にたがひぬ」

おし【感】『おお-しの略』鶯囀(ケイ)の聲。〔古語〕枕「足おとたかし。鶯囀など、おしといふ聲聞ゆ」

おし 押【接頭】動詞に添へて意を強むる語。「おし入る」「おし寄す」

おし 忍【名】〔地〕武藏國北埼玉郡にある町。中央なる忍城の址は、今は公園たり。郡役所を置く。松平(奥平)氏の舊藩地。

おし-あぐ 押開く【動下二他】■押して開く。

おし-あぐ 押上ぐ【動下二他】■身分を高くす。枕「同じ若さなれど、おしあげられたる人はえまじらで」

おし-あけ 押明【名】おしあがた(押明方)に同じ。右京大夫集「おきてゆく人の名殘やおしあけの月かげ白し道芝の露」

おし-あげ 押上【名】おしあげぽんぷ(押上喞筒)の略。

おしあげ-がた 押明方【名】あけがた(明方)に同じ。おしあけ。源氏「おしあけがたの月かげに」新古今「天の戸をおしあけがたの雲間より神代の月のかげぞ殘れる」

おしあげ-せん 押上錢【名】寛永銅錢の一種。元文四年下總國押上村にて鑄造せしもの。徑八分・重さ八分。

おしあげ-ぽんぷ 押上喞筒(英Force-pump)【名】低き所より汲上げたる水を、活塞の力によりて、更に押上げて、高き所に送るしかけの喞筒。消火用ポンプは、即ちこれを改良せるものなり。おしあげ。(吸上喞筒に對して)

おし-あつ 押當つ・推當つ【動下二他】『おし(押)は接頭語』■あつ(當つ)を強めていふ語。源氏「この御文を、顏におしあてて、しばしはつつめども」■おしはかる(推量る)に同じ。

おし-あて 推當【名】おしはかり(推量)に同じ。おしあてがひ。源氏「何故かと、おしあてにのたまふ」

おし-あてがひ 推宛行【名】前條に同じ。

おし-あな-かぜ おしあな風【名】東南の風。(肥前國平戸の方言)

おし-あはす 押合はす【動下二他】『おし(押)は接頭語』あはす(合はす)を強めていふ語。合併す。〔古語〕源氏「御方方の女房、おしあはせたる數しらず見えたり」

おし-あひ 押合・推合【名】■互に押すこと。■互に讓りあふこと。■こみあひ。雜沓(ザツ)。■〔商〕投機市場の相場に變動なきこと。

おしあひ-しんじ 押合神事【名】『神社の祭禮に群集の押しあふさまに似たるより、神事といふ』小供の遊戯の一。多くの者のうちの一人、「寄って來い、寄って來い」と唱へて、他の者を集め、「押してみよ、押してみよ」とて、己を十分に押さしめ、さて又、一同、口口に、「押合神事、押されて泣くな」など唱へ、人波打たせて押合ふもの。寒き日に暖氣を取るためなどに行ふ。

おし-あふ 押合ふ・推合ふ【動四他】■互に押す。■互に推擧す。互に讓る。

おし-あふぎ 押扇【名】能樂にて、開きたる扇を竪に面前に持ち、そのまま押して行くもの。

おし-あゆ 押鮎【名】乾して鹽壓(ンオ)にしたる鮎。昔、元旦の儀式に用ひたり。〔古語〕土佐「おしあゆの口をのみ吸ふ」

おし-しる 【名】『御汁(オ)の意』みそしる(味噌汁)に同じ。〔幼兒の語〕

おし-いた 押板【名】■板を張りたる床。■嵌込床(ケコ)の地板、又は書院の床の間。■書籍・祝などを載するに用ふる板の臺。■禁中・堂上家などにて、神佛の御影(エ)などを掲ぐるに用ひし、衝立(ツイ)樣の長方形なる板。■物を壓(オ)すに用ふる板。

押板當てて、重石(オモ)置く【句】いくへにも注意して壓倒する譬。〔諺語〕

おし-いだし 押出【名】■おしいだすこと。おしだし。■次條に同じ。〔古語〕中務內侍日記「紅葉がさねのおしいだし見ゆ」

おしいだし-ぎぬ 押出衣【名】女房などが、御簾のはづれより衣の袖を出すこと、又その衣。おしいだし。いだしぎぬ(出衣)參照。

おし-いだす 押出す【動四他】『おし(押)は接頭語』いだす(出す)を強めていふ語。おしいづ。

おし-いづ 押出づ【動下二自】『おし(押)は接頭語』いづ(出づ)を強めていふ語。枕「御簾(ス)の內に、女房、櫻の唐衣…など、いろいろ好もしく、あまた、小半蔀(コハジ)の御簾(ス)より押出でたるほど」

おし-いづ 押出づ【動下二他】おしいだす(押出す)に同じ。〔古語〕源氏「君をおしいで奉るに、曉ちかき月、くまなく出でて」

おし-いり 押入【名】『押して無理に戶內に入る義』がうたう(强盜)に同じ。おしこみ。

おし-いる 押入る【動四自】强ひて入る。無理にはひる。

おし-いる 押入る【動下二他】押遣りて入らしむ。おしこむ。

おし-いれ 押入【名】■家財を入れておく戶棚。■船の艤にて、一時は早く走れども、やがて速力のにぶくなること。へいき(舳いき)參照。

おし-うつる 推移る【動四自】時勢・境遇など移りかはる。推移(イチ)す。榮花「世の中、さながらおしうつりにたり」

おしうみいひとよあを-の-みこと 忍海飯豐青尊【名】〔人〕おしぬみのいひとよあをのみこと(忍海飯豐青尊)に同じ。

おし-うり 押賣【名】强制的に物を賣附くること、又その人。强賣。(押買に對して)

おし-おき 御仕置【名】■しおき(仕置)の敬稱。■死刑。死罪。〔江戶時代の語〕

おしおき-ば 御仕置場【名】しおきば(仕置場)の敬稱。

おしおき-ひやくかてう 御仕置百箇條【名】おさだめがき(御定書)を見よ。

おしおき-もの 御仕置者【名】處刑せらるる者。つみびと。罪人。冥途飛脚「の世中におしおき者の絕えぬも道理、この上は、忠兵衞も盜みせうより外はなし」

おし-おくり 押送【名】鮮魚を載せて、帆を

用ひず、風の順逆にかまはず、數艇の艪のみにて押送る船。おしきり。（かき送に對して）

おしおくり-ぶね 押送船【名】おしおくりをなす船。

おし-おし【感】警蹕の聲。おしを重ねていふもの。おうしい。〔古語〕

おし-おろす 押下す【動四他】一『おし（押）は接頭語』**おろす**（下す）を強めていふ語。狂言（鱧慰丁）殘を三つに切り、二つを下へおしおろし」二無理におろす。迫りて下らしむ。

おし-かがむ 押屈む【動下二他】壓してかがます。無理に屈せしむ。著聞「人人寄りて、おしかがめて舁き出だしにけり」

おし-かかる 押掛る。推凭る【動四自】倚りかかる。もたれかかる。源氏「勾欄におしかかりて、霜がれの前栽見たまふ」

おし-がき 押書【名】**はりがみ**（張紙）に同じ。

おし-かく 押角【名】角材の少しく圓みあるもの。

おし-かく 押掛く【動下二自】一進みて襲ふ。おしよす。二招かれざるに趨く。

おし-かけ 押掛【名】一おしかくること。二さんがい（三繋）に同じ。

おしかけ-きやく 押掛客【名】無理に一座に加はらんとして、招かれざるに趨く客。和合人「その樣に、おしかけ客の有るものかね。それや、さきも、その道執心でくるもんだから」

おしかけ-によばう 押掛女房【名】無理に妻たらんことを迫る女、又その迫りてなりたる妻。

おし-かすが 壓粕【名】『英 Press-cake』製糖の際、糖分の含める液を、壓濾機にて濾（こ）して殘りたる粕。專ら肥料とす。

おし-かた 押方【名】**おして**（押手）四に同じ。

おし-がた 押型【名】紙を彫刻物の上にあて、蠟墨にて、その彫刻の形を刷取りたるもの。

おし-かたづけ 押型附【名】線條・模樣の彫刻せる版木を織物に壓しつけて、種種の模樣を、打出（ダシ）のごとくに現はすもの。

おし-がひ 押買【名】買手が、强ひて賣主の貨物を買ふこと。（押賣に對して）堀川狂歌「押しとめん押賣おしがひとりどりの事もなくなる山崎の關」

おし-かへし 押返し【副】一くりかへし。〔古語〕新古今「おしかへし物を思ふはくるしきに知らず顏にて世をやすぎまし」二源氏却って。反對に。あべこべに。〔古語〕「たれうきものと、おしかへし怨みたまふ」

おし-かへす 押返す【動四他】一『おし（押）は接頭語』强ひてもどす。二ふたたび引返す。三くり返す。四こみあひて、甚しく押しあふ。

押返されず【句】負けず劣らず。「押しも押されもせず」參照。〔俚語〕浮世風呂「よそのおかみさんたちは、押しかへされねえ形（リヤ）で、お正月を遊ばすが」

おし-がみ 押紙【名】一書きおとしたる事又は疑問の事などを記して貼りつけたる紙。つけがみ。はりがみ。びら。附箋。著聞「こまかに御覽じて、ひが事ある所所、おしがみをして、その誤を、御自筆にて記しつけて、返し進せられたりけるを」三**すひとりがみ**（吸取紙）に同じ。

おし-から 押柄【名】押して行ふ風。押（オシ）の强きこと。わうへい。〔古語〕今昔「膽ふとく、おしからになんありける」

おしから-だつ 押柄立つ【動四自】物事を押して行ふ。〔古語〕宇治「三條中納言といふ人…心ばへかしこく、肝太く、おしからだちてなんおはしける」

おし-がり 押借【名】一强ひて借ること。無理に借ること。二**がうたう**（强盜）を云ふ。〔常陸國の方言〕

おし-しき 御敷【名】**しきゐ**（敷居）に同じ。〔女の語〕御伽名代紙衣「乳母出て、ちっと、おしきが高うござりませう」

おし-ぎ 押木【名】彫金師の彫金に用ふる木の臺。多くは櫻（サクラ）にて造り、机の形をなす。

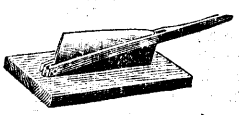
押木の玉縵（ヤウマカ）【句】古の髮飾の一。古代に押木といふものありて、その狀に造りたる臺に、玉を貫きて立てたる縵なるべしといふ。〔古語〕記「その妹の禮代（ヰヤ）として、押木の玉縵を持たしめて」

おじぎ 御辭儀【名】**じぎ**（辭儀）一二の敬語。

おじぎ-さう 押灸【名】灸點と按摩とを同時に行ふもの。

おじぎ-さう 御辭儀草【名】〔植〕『葉に觸るれば、ただちにしぼみて、御辭儀をなすが如くなるより名づく』**ねむりぐさ**（眠草）に同じ。

おし-きり 押切【名】一**わりいん**（割印）に同じ。二秣（マグサ）などを刻むに用ふる具。上より柄を壓下して押切るやうに造らる。三相撲（スマヒ）の手の押（オシ）の一。相手を一氣に土俵の外に押出すこと。四馬の髮を、二寸ほどの長さに、先端を揃へて切りたるもの。五**おしおくり**（押送）を云ふ。〔中國の方言〕



（二）りきしお

押切の印【句】**わりいん**（割印）に同じ。

おしきり-わやう 押切帳【名】金錢を渡すとき、受方より、たしかに受取りたる旨の證印を受くる帳簿。

おしきり-ばん 押切判【名】**わりいん**（割印）に同じ。

おし-きる 押切る【動四他】一押して、物を切斷つ。二『おし（押）は接頭語』**きる**（切る）を强めていふ語。狂言「布施無經」「十疋の布施をとって、眞中よりおしきり」三强ひて事をなす。强ひて言ひはる。四絕えず艪を押しつつ、波を切りて、船を進ましむ。

おし-くくみ 押含【名】おしくくむこと、又その物。〔古語〕金葉「子を捨てて侍りけるおしくくみに書きつけはべりける」

おし-くくむ 押含む【動四他】『おし（押）は接頭語』包む。くるむ。〔古語〕榮花「御ぞにおしくくみて、ゐておろしたてまつらせたまふ」

おし-くさ 女參【名】〔植〕**ごまのはぐさ**（玄參）に同じ。〔古語〕和名「玄參。本草云、玄參、一名重臺、於之久佐」

おし-くだす 押下す【動四他】押して下す。押して落す。源氏「平調におしくだし、しらべたまふ」

おし-くつろぐ 押寛ぐ【動下二他】『おし（押）は接頭語』**くつろぐ**（寛ぐ）を强めていふ語。國姓爺「劍拔持ちて、后の肌押しくつろげ、脇腹に押し當て、十文字に裂破れば」

おしくま-わらじ 忍熊皇子【名】〔人〕景行天皇の皇子。天皇の崩ずるにあたり、兄麝阪（オサカ）皇子とともに兵を擧げて、神功皇后に抗せしが、遂に利あらずして、近江國瀨田に入水して薨ず。

おし-くら 押競【名】次條に同じ。

おし-くらべ 押競【名】手足などを、互におしあひて、力をためす戲。おしくら。

おし-けつ 押消つ【動四他】威壓す。衰へしむ。壓服す。〔古語〕榮花「もとよりある車ども、おしけちて、立てならべ」

おし-こうぢ 押小路【名】一〔地〕京都市上京區の二條通と三條通との間にある道路。二姓氏の一。本姓は藤原氏。西三條家より分る。權大納言公音を祖とす。明治維新後、子爵を授けらる。

おし-こうぢ-どの 押小路殿【名】里內裡の一。京都押小路の南・室町の東に在りしもの。もと二條良實の邸宅なりしが、二條天皇の行幸ありしより、歷代しばしば行幸ありき。

おし-こうぢ-やき 押小路燒【名】明暦の頃より寶暦年間まで、京都の押小路邊にて製出せし陶器。

おし-こく 押石【名】〔商〕船荷を量る時の押（オシ）のために、その實際の重量又は石數と船荷證券記載の重量又は石數との間に生じたる差額。おしめ。

おし-こく 御四國【名】次條の略。

おしこく-まゐり 御四國參【名】**しこくまゐり**（四國參）の敬稱。御四國。

おし-ごと 押言・推言【名】一おしあてにいふことば。臆說。おしことのは。〔古語〕著聞「その事、正體なし、この人は、おしごとする人にこそ」二神異を信ぜずして言ひけすこと。

おし-ことのは 押言葉【名】前條一に同じ。〔古語〕著性集「旅に出でておしことの葉にいひしかどよしより思へ心くだけぬ」

おし-こみ 押込【名】一おしこむこと。強ひてはひること。二おしいれ。戸棚。三がうたう（強盗）に同じ。おしいり。

おし-こむ 押込む【動四自】一強ひて入込む。おしいる。二わりこむ。こみあふ。雜沓す。おしこる。〔古語〕紫式部日記「わた殿の戸口まで、隙もなく押込みてゐたれば」

おし-こむ 押込む【動四他】次條に同じ。

おし-こむ 押込む【動下二他】一押して入らしむ。強ひて入らしむ。入れ包む。おひこむ。おしいる。二心の中にをさめて、口に出さず。〔古語〕源氏「いはぬをもいふにまさると知りながらおしこめたるは苦しかりけり」三おしこめにす。監禁す。

おし-こめ 押込・押籠【名】一押込むること。二監禁。三〔法〕ちっきょ（蟄居）二に同じ。

おし-こる 押凝る【動四自】あつまる。集合す。おしこむ。〔古語〕榮花「あつまりて、扇をさしかくしつつおしこりて、みな居並（ナラ）みて」

おし-ごろ 啞ごろ【名】おふし（啞）に同じ。釋迦如來誕生會「前生で嘘つけば、啞ごろに生れる」

おし-さぐ 押下ぐ【動下二他】押して、下の方へやる。

おし-さん 御師樣【名】『御（オ）師匠（シショウ）樣（サン）の訛』おしょさん（御師匠樣）に同じ。〔江戸時代の小供の語〕浮世風呂「お師匠樣（サン）から下がると、毎日行きまあす」

おし-しづまる 押靜まる【動四自】『おし（押）は接頭語』しづまる（靜まる）を強めていふ語。凱陣入島「何れも大事の評議なれば、押靜まる」

おし-しづむ 押沈む【動下二他】一押してしづむ。押して沈ます。二おちぶれさす。〔古語〕源氏「しひて女御をおししづめたまふもつらきに」

おし-じやう 忍城【名】武藏國北埼玉（イキタマ）郡忍（オシ）町にありし城。戰國時代に、成田氏これに據りて、小田原の北條氏に屬し、天正十八年小田原城陷落の後、この城も陷り、德川時代には、松平家忠・同忠吉・同信綱・阿部忠秋を經て、松平（奥平）忠堯これを領し、明治維新に至れり。周圍二里半、池沼・深田等内外を守り、關東七名城の一に數へられたり。

おし-ずし 押鮨【名】方形の型（ワク）の中に飯を詰め、その上に魚肉・卵燒・色海苔などをのせて、上より押固め、それを適宜の大さに切りて作れる鮨。（にぎり鮨・ちらし鮨などに對して）

おし-する 押摩る・押磨る【動四他】『おし（押）は接頭語』する（磨る）を強めていふ語。源氏「硯おしすりて」

おし-ずる 推推【名】おしずりやう（押推量）の略。〔俚語〕かなほし「推量をおしずるとは、いらぬ重ねことばか」

おし-ずりやう 推推量【名】すりやう（推量）に同じ。〔俚語〕

おし-ぜみ 啞蟬【名】〔動〕おふしぜみ（啞蟬）に同じ。

おし-ぞめ 捺染【名】なっせん（捺染）に同じ。

おし-した 御下【名】最も下級なる役者。したまはり。いなりまち。「お下の若衆」

おし-だいこ 押太鼓【名】軍隊を進むる合圖として打鳴す陣太鼓。進軍の合圖たる太鼓。（引鐘に對して）

おしだいこ-やく 押太鼓役【名】江戸幕府の職制の一。軍陣に當りて陣太鼓を打鳴しもの。

おし-たがふ 押違ふ【動下二他】無理に違はす。〔古語〕行宗集「雨ふれば待ちしもせじな押したがへこよひは行かん袖笠をきて」

おし-だけ 啞竹【名】啞者が用事を辨ぜんとして、人を呼ぶ時に打叩く、二本の短き竹。狂言（三人片端）「啞竹二本、一尺二寸」

おし-だし 押出【名】一押していだすこと。おしいだし。二相撲（スマ）の手の押（オ）の一。相手の土俵際にて踏みこたへんとするを、なほ押して出すこと。三人中に出でたる時の姿。風采。〔俚語〕「おしだしの立派な人」

おし-だす 押出す【動四自】一下より高く出づ。二多人數うち揃ひて行く。大勢にて出懸く。〔俚語〕三多人數の中へ行く。四誰にも知れわたる。〔德川時代の俚語〕風俗文選「山といへば延暦寺にきはまり、寺といへば園城寺をさす。共におしだしたる靈場なり」

おし-したぢ 御下地【名】したぢ（下地）四の美稱。

おし-たつ 押立つ【動下二他】一物を押上げて立たしむ。二『おし（押）は接頭語』たつ（立つ）を強めていふ語。三無理にいでたす。〔古語〕榮華「待受け奉りて、おしたてて遊びて殿におはす」

おし-たつ 押立つ【動四自】一『おし（押）は接頭語』たつ（立つ）を強めていふ語。沙石集「不動、火炎の前におしたち」二あながちに爲す。強ひて行ふ。〔古語〕源氏「おしたちてあはあはしき御振舞はよもなど、いとよくいひなして」

おし-たて-もん 押立門【名】手輕く押立てて造れる門。ほったて門。今昔「檜垣（ヒガ）して押立門の家あり」

おし-だひ 壓鯛【名】鯛の肉を酢に漬けて壓したる食品。

おし-たふし 押倒【名】一おしたふすこと。二相撲（スマ）の手の押（オ）の一。相手の土俵際に踏みこたへんとするを、なほ押して倒すこと。三久雨の時、藁までも、一夜に灰の如く腐ること。〔俚語〕

おし-たふす 押倒す【動四他】押して倒す。つき倒す。枕「たちぬかづきたるは、おしたふしつべき心地こそすれ」

おし-たまる 押默る【動四自】『おし（押）は接頭語』だまる（默る）を強めていふ語。

おし-たる 押垂る【動下二他】『おし（押）は接頭語』たる（垂る）を強めていふ語。源氏「櫛おしたれてさしたる額つき」

おし-ちちろや 御七晝夜【名】『報恩講は七日の間行ふものなればいふ』ほうおんこう（報恩講）に同じ。〔眞宗信徒の語〕

おし-しちや 御七夜【名】一しちや（七夜）の敬稱。二『前條を見よ』ほうおんこう（報恩講）に同じ。〔眞宗信徒の語〕

おし-しちり 御七里【名】しちりびきやく（七里飛脚）の敬稱。〔德川時代の語〕

おし-つうし 【名】おきのどくさま（御氣毒樣）を云ふ。〔羽前國の方言〕

おし-つく 押附く【動下二他】一押して動かぬやうにす。おさへつく。二他人にかこつけ又は強ひてなさしむ。おっつける。

おし-っくら 押競【名】一おしくら（押競）の音便。〔俚語〕二密婬賣婦。〔俚語〕

おし-つけ 押附【名】一押附くること。二他人にかこつけ又は強ひてなさしむること。三「押附の板」の略。平道「二の矢を射たりければ、おしつけに、ちようと當りて」四近世の具足の背面。五軍船の右舷。

押附の板【句】鎧の背の上部、綿嚙（ワタガミ）と遊板（イタガ）との間にあり、胸板と同じ制なる板。つきかづき。よこいた。望光の板。おしつけ。

押附の金物【句】押附の板に打ちたる飾の金物。

おし-つけ 押附け【副】やがて。ほどなく。まもなく。おっつけ。浮世風呂「これやあ病氣だから、おしつけなほらあ」

おし-づけ 押漬【名】重石（シオモ）にて手輕に漬くること、又その漬物。しほし。

おし-づけ-がまし 押附がまし【形二】強ひてなさしむるさまなり。無理にあてがふさまなり。

おし-づけ-たくあん 壓漬澤庵【名】小供の遊戯の一。一人腹ばひとなりたる上に、多くの者折重なり、下なる者の堪へらるるまで壓附くるもの。

おし-つけ-わざ 押附業【名】強ひて爲さしむること。無理なるたのみ。

おし-つつむ 押包む【動四他】一『おし（押）は接頭語』つつむ（包む）を強めていふ語。源氏「おしつつみて、いだしつ」二しひて隱す。わざと祕密にす。

おし-つぶす 壓潰す【動四他】おしてつぶす。おしてくづす。

おし-づまり 御靜【名】眠ること の敬語。おやすみ。ぎょしん。

おし-つまる 押詰る【動四自】一きはまる。つまる。二歳の暮に近くなる。おしつめる。「今年もおしつまりて」

おし-つむ 押詰む【動下二他】一押して行きつまらす。蜻蛉「事…片端を堀におしつ

められて、物もいはでありー」 ㊁『おし(押)は接頭語』つむ(詰む)を強めていふ語。

おし-つんぼ 唖聾 【名】 唖は聾を兼ぬるよりいふ語。

おし-つめる 押詰める 【動下一自】 おしつまる(押詰る)㊁に同じ。 浮世風呂「暮におしつめて、人手はございませずね」

おし-づよし 押強 【形一】 我(オ)を張ること甚し。強情なり。押手が強い。

おし-て 押手・推手 【名】 ㊀押さふる人。押す人。 ㊁推擧する人。

おし-て 押して・推して 【副】 強ひて。あながちに。無理に。強情に。 源氏「おして、この國に越えきぬ」

おし-て 押手 【名】 ㊀古、掌に朱・曜などを塗りて、押して、後世の印のごとくせしこと。〔印〕 ㊁いん。印形。證印。〔印璽〕〔古語〕 ㊂琵琶・琴などの彈き方の一種。絃を押して音を發せしむるもの。〔古語〕 源氏「琵琶は、おして靜やかなるをよきにするものなるに」 ㊃射術にて、左の手。おしかた。(引手に對して)

「同じ。〔俚語〕

押手が強い 【句】 おしづよし(押強し)に同じ。

押手の文(ミ) 【句】 おしてふみ(押手文)に同じ。〔古語〕 紀荷「オシデノフミ」

押手の社 【句】 神社の社印ををさめおくところ。〔璽の社〕 東雅「諸の神社におしてのやしろといふもののあるは、その神社の寶璽を藏めし所なりといふなり。世に熊野牛王(ゴワウ)といふものの、鳥形の文あるは、古の鳥篆の體の如くにてあり、又、牛王といふも、「璽」字を分ちて牛王といふ、「米」字を分ちて八木といふが如し」

天(イ)の印(デン) 【句】 天(テ)のしるし。〔古語〕 散本「たなばたはあめのおしての八重霧に道踏みまどへまたや歸ると」

おし-て 壓手 【名】 游泳法の一。水に面して腹ばひとなり、兩手の掌を、指を揃へて下に向け、胸下に持來たして、左右こもども水を壓附くるもの。

おし-て-いれ 押手入 【名】 印形を入れおくもの。

おし-て-づくり 押手作 【名】 印形を造るを業とする人。

おし-て-ぶみ 押手文 【名】 印形のおしてある文書。おしてのふみ。〔古語〕 紀符貝、オシデブミ」

おし-てる 押照る 【動四自】 『おし(押)は接頭語』てる(照る)を強めていふ語。一説に、おしなべて照る。〔古語〕 萬葉「わが宿に月おしてれりほととぎす心あるこよひ來鳴きとよもせ」

おし-てる 押照る 【枕】 次條に同じ。紀「おしてるなにはの崎のならび濱並べむとこそそのこはありけめ」

おし-てる-や 押照るや 【枕】 おしてるは襲(ヤ)ひ立てるの約語にて、その地勢の波立つ處なるより、なには(難波)にかけていふ。おしてる。 萬葉「ただこえのこの道におしてるやなにはの海と名づけけらしも」

おしとど-としとど 【感】 拍子の詞。〔古語〕 續紀「葛城寺(カヅラギデラ)の前なるや、豐浦(トヨウラ)の寺の西なるや、おしとど、としとど、櫻井に白玉しづくや、好き玉しづくや、おしとど、としとど、しかせば國そ榮ゆる」

おし-とどむ 押止む 【動下二他】 押へ止む。強ひて制す。おしとむ。 源氏「御おくりに參りたまふまじやと、おしとどめさせて」

おし-とほす 押通す 【動四他】 ㊀押して、とほす。無理にとほす。 ㊁やりぬく。なし遂ぐ。おっとほす。

おし-とむ 押止む 【動下二他】 おしとどむ(押止む)に同じ。

おし-とめ 押止 【名】 琴・琵琶などを彈(ヒ)くに、左の手にて絃を押へ、右の手の爪にて彈きて止むること。

おし-とり 押取 【名】 強ひて奪ひ取ること。「強奪。

おし-とる 押取る 【動四他】 強ひて奪ひ取る。 詞花「親の處分(ブンク)を、故なく人におしとられけるを」

おし-な 【名】 『御(オ)信濃(シナ)の略。昔、信濃國の者、多く江戸に來りて、いやしき奉公などせしより名とす』しなのもの(信濃者)に同じ。〔德川時代の江戸の語〕

おし-なぶ 押靡ぶ 【動下二他】 『おし(押)は接頭語』なびかす(靡かす)を強めていふ語。〔古語〕 萬葉「吾が宿の尾花おしなべ露になほ手ふれわぎも子散らまくも見む」

おし-なぶ 押並ぶ 【動下二他】 ㊀おしならぶ(押並ぶ)に同じ。〔古語〕 ㊁すべて一樣になる。〔古語〕 萬葉「花の木ども散りはて、おしなべたる綠になりたる中にて」 ㊂普通にてあり世間なみにてあり。〔古語〕 源氏「世の中におしなべたらぬを選りとのへすぐりて」

おし-なべ-て 押並べて 【副】 ㊀一樣に。すべて。なべて。拾遺「さばへなすあらぶる神もおしなべて今日はなごしのはらへなりけり」 ㊁普通に。尋常に。なみに。

おし-なほす 押直す 【動四他】 『おし(押)は接頭語』なほす(直す)を強めていふ語。〔古語〕 源氏「わが力より、おしなほし引きつくろふべき所なく」

おし-なほる 押直る 【動四自】 『おし(押)は接頭語』正しく座に著く。なほる。

おし-なみ-に 【副】 おほよそに。普通に。〔古語〕 萬葉「山しろのいづみの小菅おしなみに妹が心はわが思はなくに」

おし-なむ 押靡む 【動四他】 『おし(押)は接頭語』なびく(靡く)を強めていふ語。〔古語〕 新古今「旅ねしてあかつき方の鹿の音に稻葉おしなみ秋風ぞ吹く」

おし-ならす 押均す 【動四他】 『おし(押)は接頭語』ならす(均す)を強めていふ語。

おし-ならぶ 押並ぶ 【動下二他】 『おし(押)は接頭語』無理に並ばしむ。おしなぶ。 謡曲(正尊)「辨慶おっつめ戰ひけるが、おしならべ、むずと組み」

おし-なる 押成る 【動四自】 おしきりてなる。無理になる。 保元「三年が内に九國を皆攻め落して、自ら總追捕使に押しなって」

おしぬみ-の-いひとよあを-の-みこと 忍海飯豐青尊 【名】 〔人〕市邊押羽(イチノベノ)皇子の女。一說には、その妹。忍海部の女王と稱す。億計(オ)・弘計(ヲ)二皇子の姊。二皇子互に皇位を讓りしかば、假に角刺(ツノサシ)宮に即位し、尋いで崩ず。年四十五。角刺帝ともいふ、扶桑略記と水鏡とには、天皇

歷代の一に數へ奉れり。飯豐天皇。

おしぬみ-の-つぬさし-の-みや 忍海角刺宮 【名】 忍海飯豐青尊の居られし宮。今の大和國南葛城(カヅラギ)郡忍海村大字忍海にありしもの。葛城(カヅラギ)忍海高木(タカギ)角刺宮。角刺宮。

おし-ね 晩稻 【名】 『晩(ソオ)稻(ネ)の約。をしね(小稻)の誤なりともいふ』おくて(奥手)㊁に同じ。〔古語〕

おし-ねぢ 押鎗 【名】 『英Set screw』機械を取扱ふ場合に、或物を或位置に固定せしむるに用ふる螺旋。

おし-ねる 【動四他】 押しひねる。〔古語〕 萬葉「燒太刀のたがみ押しねりしらま弓ゆぎとり負ひて」

おし-のく 押退く 【動下二他】 ㊀押して退かしむ。おしやる。 詞花「忍びたる男の、鳴りける衣を、かしがましとて、おしのけければ」 ㊁他人を物の數とも思はず。傍若無人に振舞ふ。 榮花「色ゆるされなどしたる人は、したりがほに思ひて、おしのけたるさまなり」 ㊂他人をして、その位置を失はしむ。排斥す。

おし-のごふ 押拭ふ 【動四他】 『おし(押)は接頭語』のごふ(拭ふ)を強めていふ語。 源氏「おしのごひたまへる御袖のにほひも」

おし-のび 御忍 【名】 ㊀しのび(忍) ㊁の敬稱。 ㊂次條の略。

おしのび-かご 御忍駕籠 【名】 江戸時代に、大名などのしのびあるきに用ひし駕籠。屋根は黑羅紗にて覆ひ、朕も棒も黑くしたり。おしのび。

おし-のぶ 押延ぶ 【動下二他】 おして延ばす。 枕「手のひらうちかへし、皺おしのべなどして」

おし-のり 押糊 【名】 そくひ(續飯)に同じ。

おし-ば 押羽 【名】 鳥の翼の根もとにある、產毛(ウブ)の如くきはめて短き羽毛。〔古語〕 字藝「翎。短羽、於之波」

おじ-はいりやう 御字拜領 【名】 いちじはいりやう(一字拜領)に同じ。

おし-ばうし 押帽子 【名】 古、犬飼の用ひし帽子。松皮帽子の類。 西宮記「押帽子、犬飼

所用也、見二縫殿式一」

おしはおり 押羽織【名】ぢんばおり（陣羽織）に同じ。

おしはかり 推量・推測【名】おしはかる。すゐそく。おしあて。あてずゐりやう。おしはかりごと。すゐりやう。想像。

おしはかりごと 推量事・推測事【名】前條に同じ。枕「人よりは少しにくしと思ふ人の、おしはかりごとうちし」

おしはかる 推量る・推測る【動四他】甲の物事をもて、乙の物事を想ひはかる。推量（スイリヤウ）す。推測（スイソク）す。おしあつ。源氏「瀧口のとのゐまうし、今こそとおしはかりたまふは、まだいたう更けぬにこそは」

おしはさむ 押挟む【動四他】押附けてはさむ。はさむ。蜻蛉「したすだれ、左右おしはさみたり」

おしはだぬぐ 押肌脱ぐ【動四自】『おし（押）は接頭語』はだぬぐ（肌脱ぐ）を強めていふ語。〔古語〕太平記「自害せんと思召して、既におしはだぬがせたまひたりけるが」阿闍梨二番「仕方ばかり、おしはだぬいで十文字」

おしはなつ 押放つ【動四他】押して放つ。放ち遣る。押しのく。〔古語〕源氏「はしたなくも、えおしはなちたまはず」

おしはふる 押羽振【動四他】おし振りあげて祭る。一説に、水底に放れてあり。〔古語〕紀「押羽振、オシハフル」

おしはらふ 押拂ふ【動四他】『おし（押）は接頭語』はらふ（拂ふ）。切捨つ。切放つ。〔古語〕紀「截、オシハフラ」

おしはる 押張る【動四他】『おし（押）は接頭語』はる（張る）を強めていふ語。源氏「すだれ、高く押張りて」我（ガ）をとほす。押通ほす。落窪「押張りて宣はんことを」

おしはるす 押晴す【動四他】『おし（押）は接頭語』はるす（晴す）を強めていふ語。〔古語〕祝詞「まそびの大御鏡の面（モオ）をおしはるして」

おしひき 押引【名】おしひくこと。定頼集「梓弓おしひきしつつ夜もすがらやといへどもいる人もなし」値（ヒタク）の高下につきて、おし問答をすること。〔俚語〕潮来婦語「何も、これが、値のおしひきをするぢやなし」

おしひく 押引く【動四他】押し又は引く。落窪「やり戸あくるに、いと難ければ…うちたたきおしひけど、内外（トウチ）に詰めてければ、ゆるぎだにせず」

おしひしぐ 押拉ぐ・壓拉ぐ【動四他】押してひしぐ。枕「よもぎの、風におしひしがれたるが」おさへつく。抑壓す。枕「きらきらしきなどは、え、さしも、おしひしがずかし」

おしひたす 押浸す【動四他】『おし（押）は接頭語』ひたす（浸す）を強めていふ語。ぬらす。源氏「おそろしき夢のさめたるここちして、汗におし浸して臥したまへり」

おしひたすらに 押一向に【副】ひたすらに（一向に）に同じ。（主に歌に「押浸す」に言ひかけて用ふ）〔古語〕後拾遺「さまざまに思ふ心はあるものをおしひたすらにぬるる袖かな」

おしひらく 押開く【動四他】おしやりて開く。紀「檜（ヒ）の板戸をおしひらき」

おしひらむ 押平む【動下二他】押して、ひらたくす。徒然「鼻をおしひらめて」

おしひろぐ 押擴ぐ【動下二他】力をこめてひろぐ。のばしひろぐ。擴張す。おつぴろげる。

おしひろむ 押弘む【動下二他】『おし（押）は接頭語』つとめてひろむ。つとめて世に知らす。

おしふさぬ 押總ぬ【動下二他】『おし（押）は接頭語』ふさぬ（總ぬ）を強めていふ語。愚管鈔「代代の移りゆく道理をば、心に浮ぶばかりは申しつ、それをまたおしふさねて」

おしふす 押伏す【動四自】『おし（押）は接頭語』ふす（伏す）を強めていふ語。〔古語〕紀「押伏、オシフシテ」

おしふす 押伏す【動下二他】押して伏させて君しむすばばあはざらめやも」

おしふち 押縁【名】板などのおさへに打附くる細長き竹又は木

おしぶみ 押文【名】張りつけたる文。〔古語〕續古事談「阿彌陀佛（堂）の柱に、押文あり」

おしぶや 御十夜【名】じふや（十夜）の敬稱。〔淨土宗信徒の語〕

おしべ 磯邊【名】いそべ（磯邊）に同じ。おすび。〔東國の古の方言〕萬葉「駿河の海おしべに生ふる濱つづらいましを頼み母にたがひぬ」

おしへす 押壓す【動四他】押附けて、薄くならしむ。押しひしぐ。押してつぶす。おつぺす。枕「蘆・えびぞめなどのさいでの、おしへされて」

おしへる 【動四自】高ぶらず。慎み深くあり。へりくだる。〔古語〕紀「節儉、オシヘリタマヘリ」

おしぼたん 押釦（英Push-button）【名】電鈴を鳴す電鍵。

おしほみみのみこと 忍穂耳尊【名】〔人〕まさやあかつかちはやびあめのおしほみみのみこと（正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊）に同じ。

おしほり・びき 押堀引【名】徳川時代に於ける免租法の一。水のために掘りくぼめられたる田畠の租を免ずること。

おしほね 忍穂井【名】伊勢大神宮の豐受（トヨ）宮に奉る御饌水（ミケミヅ）。社殿の西、百二十丈に在り。

おしま 莚【名】むしろ（莚）に同じ。〔古語〕倭字通例書「おしま、莚、註、俗にむしろと訓ず。史記席字、日本紀及び源氏、この訓あり」

おしまく 押捲く【動四他】押して捲く。捲く。源氏「ささやかにおしまきあはせたる反故（ホゴ）どもの」

おしまぐ 押曲ぐ【動下一他】押して曲ぐ。

おしまづ 【感】小供の水にむせたる時、呪（ナヒジ）に唱ふる語。

おしまづき 【名】『けふそく（脇息）に同じ。〔古語〕和名「几、於之萬都岐、今案、几屬有二扶息之名一、出所未詳」つく杰（机）を云ふ。〔女の語〕車の戸圓（キシ）。〔古語〕名護抄「軾、オシマヅキ、車ノトジキミ」

おしまつば 押松葉【名】干菓子（ワヒシ）の一。鹽竈（カマ）の如く押固めたるものに、松葉形の切目を入れ、別に薄く解きたる捕蜜（ミツ）を塗りて、乾固めたるもの。

おしまはし 押廻【名】重重しくして役に立つこと。「おしまはしが利く」穀物を積むに用ふる千石以上の大船。艫（ロ）の方、高く曲りて上れり。

おしまはす 押廻す【動四他】『おし（押）は接頭語』まはす（廻す）を強めていふ語。車などに乗りて、大げさに人人の家を訪ひあるく。

おしまひ 御仕舞【名】しまひ（仕舞）の敬稱。をはり。しまひ。〔俚語〕けしやう。おつくり。みじまひ（身仕舞）參照。

おしまろがす 押轉す【動四他】押してまろがす。くるくると卷く。〔古語〕源氏「ただあらかなるあづまぎぬどもをおしまろがして」

おしむく 押向く【動下二他】『おし（押）は接頭語』むく（向く）を強めていふ語。百日會記「祐經を兄共におしむけ」

おしめ 御濕【名】しめし（濕）を丁寧にいふ語。おむつ。〔東京の語〕

おしめ 押目【名】〔商〕相場が一時下落したること。〔取引所の語〕おしこく（押石）に同じ。

おしめかご 御濕籠【名】火の上に伏せ、濕（メ）れたるおしめをかけて乾すための籠。

おしめがひ 押目買【名】〔商〕押目の時機を見計らひて買入るること。

おしめし 御濕【名】さふきん（雑巾）を云ふ。〔越中國の方言〕

おしめ 御下【名】内侍の次に列する女官の敬稱。おすそ。

おしもぢり 押捩【名】犬追物（クヲモノ）遠笠懸（トホカケ）などにて、後の方を射ること。太平記「あひの鞭をうちて、押しもぢりに、はたと射る」

おしもどし 押戻【名】芝居にて、怨靈（ヰウリヤウ）・惡鬼などの花道へ荒れゆくを、荒事（アラゴト）の役出で來りて、舞臺の方へ戻すもの。

おしもどす 押戻す【動四他】押して、後方に歸らす。

おしもの 押物【名】得意の物事。たてもの。

おしもむ 押揉む【動四他】おしてもむ。おしする。「さすがに数珠(ズ)おしもみなどして」

おしもんだふ 押問答【名】互に言ひつのりて、是非いづれとも決しぬること。

おーしやうじ 御精進【名】次條の略。

おーしやうじもの 御精進物【名】しやうじんもの(精進物)を云ふ。〔女の語〕

おーしやうばん 御相伴【名】しやうばん(相伴)の敬稱。

おしやうばんしゆう 御相伴衆【名】しやうばんしゅう(相伴衆)の敬稱。

おーしやか 御釋迦【名】〔人〕しやか(釋迦)の敬稱。

御釋迦の誕生【句】■釋迦如來が生れ出でたること。俗に母なる摩耶夫人(マヤブ)の脇腹(ワキ)より生れたりと言傳ふ。「天上・天下(テン)唯我(ガ)獨尊」參照。■小供の裸體(カダ)になりてあるさまの形容。〔俚語〕「るもの。〔俚語〕

御釋迦の手【句】刀のつか絲のすれた

御釋迦の鼻糞【句】いり豆と霰(アラ)とにて製せる菓子。

おーしやか-さま 御釋迦樣【名】〔人〕しやか(釋迦)の敬稱。

おーしやく 御酌【名】■しやく(酌)の敬稱。■酌をする女。なかね。酌婦。■まひこ。はんぎよく。〔東京の語〕

おーしやぐじ 御石神【名】しやぐじ(石神)の敬稱。

おーしやこ 御蝦蛄【名】女の髪の結ひ方の一。江戸時代に、下層の者の間に行はれしもの。後頭部にて、毛髪の全體を束ぬ。

おしやしやんころ 【名】〔動〕かげろふの類にて、形小く、群をなし、絶えず左右の翼をうごかす蟲。〔伊勢國長島邊の方言〕

おしやな 【名】東南の風。袖中抄「たつみの風をばおしやなといふ。また伊勢こちといふ」「方言」

おーしやはへ 【名】東南より吹く風。〔九州の

おーしやぶり 御しやぶり【名】赤子のしやぶりて弄ぶ一種の玩具。形、啞鈴(アレ)に似て、木又はゴムにて造れるもの。

おーしやべり 御饒舌【名】言葉かず多きこと、又その人。

おーしやま 【名】人を憚らざる兒女。出過ぎたる兒女。〔東京の俚語〕

おしやーまず 【動變自】『仰せられますの意なる「おっしゃいます」の訛』おっしゃる。のたまふ。おほせらる。おしゃる。おしやんす。〔俚語〕俗曲「猫ちや猫ちやとおしやますけれど、猫が綾(リンボ)の浴衣(ユカタ)で來(ク)るものか」

おしやまーなべ おしやまず鍋【名】『前條に引用せる俗曲參照』猫の肉を鍋にて煮て食ふこと。〔俚語〕

おーしやん 御じやん【名】あてにせし事のはづること。〔俚語〕

おしやんーす 【動自】おしやまずに同じ。〔京都・大阪の語〕生玉心中「此の頃、天滿で姉御さんのおしやんす通り」

おじやーめ 【名】『おじやれの轉か』うかれめ。遊女。〔羽前國の方言〕

おーしやもじ 御杓文字【名】しやもじ(杓文字)の敬稱。〔女の語〕

おーしやらく 御洒落【名】■裝ひ飾ること。しやれること。おしやれ。〔主に女子にいふ〕〔東京の語〕■旅宿の下女。おじやれ。■うかれめ。遊女。〔陸奥國の方言〕

おしやらく-まめ おしやらく豆【名】〔植〕はっしようまめ(八升豆)に同じ。

おーしやり 御舍利【名】しやり(舍利)を見よ。

おーしやる 押遣る【動四他】■押して遣る。おしのく。源氏「上の衣おしやるまで」■押して進ましむ。

おーしやる 仰やる【動四自】仰せらる。のたまふ。おっしゃる。〔俚語〕俗語「あちら言ふとてこちらをおしやる」

おーじやる 【動四自】おぢやるを見よ。〔俚語〕おあん物語「寄手の大將は、田中兵部殿と申すでおじやる。石火矢をうつ時は、城の近所をふれまはりておじやった」

おーしやれ 御洒落【名】おしやらく(御洒落)

■に同じ、又その人。しやれもの。(主に女兒にいふ)〔俚語〕

おーじやれ 【名】『晩におぢやれ(御出で有れ)おぢやれ』と戯れいひしりいふとの説によれば、正しくは、おぢやれの假名なり』旅人に淫を鬻(ヒサ)ぐ旅店の下婢。めしもり。〔俚語〕

おーじよう-ごう 【名】怜悧なる小供。〔信濃國の方言〕「敬稱。

おーじようじ 御承仕【名】じようじ(承仕)の

おじようしん-ぶぎやう 御昇進奉行【名】室町幕府の職制の一。將軍宣下又は任大臣・任大將等の時、その事を沙汰せしもの。

おーしよく 御職【名】■同列中の頭だてるもの。■次條の略。「御職を張る」

おーしよく-ぢよらう 御職女郎【名】女郎のかしら。おしよく。〔東京の遊廓の語〕

おーしよす 押寄す【動下二自】押進みて來る。おしかく。よす。攻(セ)寄す。

おーしよす 押寄す【動下二他】『おし(押)は接頭語』よす(寄す)■を强めていふ語。引寄す。源氏「脇息をおしよせて」

おしよぼ-からげ おしよぼ紮【名】ぢんぢんばしより(ぢんぢん端折)に同じ。おちよぼからげ。傾城反魂香「大福帳をかたげて來(ク)るは、みやぢやないかと云ふ所へ、おしよぼからげの忙しげに」

おーしよらい 【名】〔動〕はたおり(機織)を云ふ。〔關東の方言〕

おーしるびと 御知人【名】しりびと(知人)の敬語。狂言(饗の目)「御親類中とも、お知人になりませぬほどに」

おーしーよる 押折る【動四他】おしをる(押折る)に同じ。〔三河國の方言〕

おしよろ 忍路【名】〔地〕後志國(シリ)十七郡の一。小樽支廳の管轄に屬す。俗曲(道分節)「おしよろ・高島及びもないが、せめて歌棄(ウタ)・磯谷(ヤ)まで」

おーしろい 御白・白粉【名】■婦人・俳優などの、顔の化粧(ケシ)に用ふる白き粉。多くは炭酸鉛を原料として造り、又、植物性のもあり。水おしろい・顔おしろい・襟おしろい・舞臺おしろいなど、種種あり。しろいもの。四季空のけしき、よべ見しにかはりて、花田の紙におしろい附けたる」■〔植〕次條の略。

おしろい-ぐさ 白粉草・紫茉莉【名】〔植〕紫茉莉(オシロイ)科に屬する多年生の草。高さ二三尺ばかり。莖は圓く節高くして、秋海棠(シウカイダウ)に似、葉は圓く色深綠にして、秋、枝の末ごとに小花むらがり咲き、その色は紅・黃・白など種種あり。實のうちに白色粉狀の胚乳(ハイ)あり。觀賞用に供せらる。おしろいばな。おしろい。

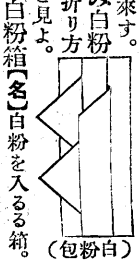
(おしろいさぐ)

おしろい-くさい 白粉臭い【形】あだっぽい。つやっぽい。〔俚語〕

おしろい-した 白粉下【名】おしろいを塗る時、附(キ)をよくするために、あらかじめ肌に塗りおく化粧水。

おしろい-ちゆうどく 白粉中毒【名】白粉に含める鉛分の毒にあてらること。皮膚又は內臟に異狀を來す。

おしろい-つつみ 白粉包【名】包の折り方の一。下の圖を見よ。



(包粉白)

おしろい-ばこ 白粉箱【名】白粉を入るる箱。

おしろい-ばな 白粉花・紫茉莉【名】〔植〕

おしろいぐさ (白粉草)に同じ。

おしろいばな-くわ 紫茉莉科【名】〔植〕顯花植物・雙子葉類・離瓣花區の一科。草木・灌木又は喬木。亞米利加洲に多し。しまつりくわ。

おしろがよひ-ぶね 御城通船【名】昔、大阪在番の武家が、城に通ふために乘りし船。しろがよひ。「沿岸に多し。

おしろで 【名】〔動〕鯽(チ)の一種。紀伊國の

おしろ-やく 御城役【名】江戸幕府時代に、諸侯の置きし役。土產の獻上又は御內書御泰書など交付の節、留守居家老等に代りて、その任に當りしもの。

おし-わく 押分く【動下二他】左右に押して開く。源氏「近江君、人人の中をおしわけて出でたまふ」

おし-わぐむ 押縮む【動四他】押しゆがめて輪を作る。〔古語〕 発題 文を小くおしわぐみて」

おし-わり 押割【名】■押して割ること。■次條の略。

おしわり-むぎ 押割麥【名】大麥をおしわりたるもの。おしわり。（ひきわり麥に對して）

おし-わる 押割る・壓割る【動四他】おしてわる。

おし-ゑ 押繪【名】花・鳥・人物などの形を厚紙にて製し、それぞれ繪樣に相當せる美しき布帛を貼りつけ、綿を入れて、高低をつけて、錦繪のごとくせるもの。衣裳繪。

おしゑ-ざいく 押繪細工【名】おしゑにて細工すること、又その細工物。

おし-をけ 押桶【名】■えなおけ（胞衣桶）に同じ。■うちまきをけ（打撒桶）に同じ。■つけものをけ（漬物桶）に同じ。

おし-をり 押折【名】白張（ハクチヤウ）の尻を引折りて、馬に乘ることなるべし。

おし-をる 押折る【動四他】おして折る。へし折る。おっぺしよる。おしよる。源氏「しちなども皆おしをられて、すずろなる車のどうに打ちかけたれば」

おす【名】いそ（磯）を云ふ。おし。**おすび**（磯邊）參照。〔東國の古の方言〕

おす 押す【動四他】■突きやる。突きつく。■強ひて事を爲す。■こらへて事を爲す。忍ぶ。■艪（ロ）にて船を進む。押しも押されもせず【句】自然に長所を具へて、ことさらに誇ることもなく、又、他人より壓倒せらるることもなし。「押返されず」參照。

おす 推す【動四他】■なずらふ。比べ考ふ。類推す。「推して知るべし」■推舉す。■尊び崇（アガ）む。推尊す。

おす 押す【動四自】敵を攻むるために進み近づく。

おす 壓す【動四他】■重みを加へて、上よりおさふ。壓（ツ）す。おしつく。■貼附く。榮花「瑠璃を紋におしなど」■印の文字などに墨又は印肉を塗り、その形を紙などにうつす。■捺印す。しひたぐ。虐待す。■わが勢を以て、他の勢を禦（セフ）ぐ。壓制す。

おすが【名】楊弓・大弓にて、錢を賭物（カケ）にする時、五錢をいふ隱語。一話一言「、かけものは…さて、錢の時は…五錢を於洲賀（オスガ）とし」

おすぎ-おたま 阿杉阿玉【名】伊勢參宮道の名物の一。今の宇治山田（ヤマダ）市の內宮と外宮との中間なる間（ヒア）の山といふところに、小屋がけの舞臺を設け、一人は三味線・胡弓（コキウ）を彈き、一人は踊りつつ參宮者に錢を乞ひし若き二人の女。これに錢を與ふる人人、錢を女の顏に當てんとすれど、二女は巧に避けしといふ。あひのやま間山參照。 戲遊笑覽 信節、按ずるに、小倉の歌に、お玉こがれて、とある歌を、あひの山にてうたひし故に、お杉お玉といひはやしたるにや。お杉といふも、さる類に、歌ありしなるべし」

お-すけ【名】己の嗜好にて、俳優の聲色（コワ）をまねぶもの。

おずし 悍し【形一】心こはし。剛情なり。わるがしこし。おずまし。おぞまし。おぞし。〔古語〕

おずみ-どよ 御涼所【名】京都の皇居內にある御殿の一。天皇の納涼したまひしところ。常御殿の北に當る。

おずずり-ぶぎやう 御硯奉行【名】武家時代の職制の一。將軍が諸家の邸に臨む時、諸家にて臨時に命じて、文臺上の器具を掌らしめしもの。

おすひ【名】上古、頸を隱すために、女の頭の上よりかぶりて、裾まで垂れたるきぬ。後世の衣被（ハキヤウ）の類。〔古語〕 記「おすひをもいまだ解かねば」

おす-び【名】いそ（磯邊）を云ふ。おしべ。〔東國の古の方言〕 萬葉「葛飾（カツカ）の眞間（マ）のてこながありしかばままのおすひに波もとどろに」

おすべ-どり 護田鳥【名】〔動〕おすめどり（護田鳥）に同じ。〔古語〕

お-すべり 御滑【名】■『おそべるを見よ』ふとん（蒲團）に同じ。■おろし（下）■に同じ。おさがり。

お-すまし 御澄【名】すまし氣どりてゐる人を嘲（ケヤ）りていふ語。

おずまし 悍し【形二】おずし（悍し）に同じ。〔古語〕 源氏「すこしおずましかるべき事を思ひよるなりけんかし」

お-すまひ 御住【名】德川時代に、將軍の女の三位以下の諸侯に嫁したるものの尊稱。（御守殿に對して）

おすみ-うむ（英Osmium）【名】金屬元素の一。通例、白金原鑛中に存し、青白色の結晶をなし、硝子よりも硬く、殆ど熔融し難し。オスミウム金屬は、電壓低き電燈の白熱線に用ひて効あり。

おすみうむ-でんとう オスミウム電燈（英Osmium lamp）【名】電球の一。オスミウムの細き條線を用ひたる白熱電燈。使用の電力甚だ少く大に有利なれども、その價高きを以て弘く行はれず。

おすめ-どり 護田鳥【名】〔動〕みぞごね（溝五位）に同じ。一說に、ばん（鷸）に同じ。うすべ。うすめ。おすべどり。〔古語〕 字鏡「護田鳥、於須女鳥」

お-すもじ 御す文字【名】『もじは文字にて接尾語』■すし（鮓）を云ふ。〔女の語〕■御推察。おんすもじ。〔女の語〕

お-すや 御須屋【名】すや（須屋）の敬稱。

おすらむ（英Osram）【名】『英語のオスミウム（Osmium）と、英語タングステン（Tungsten）の獨逸語なるウオルフラム（Wolfram）との二字を合せたる語』次條の略。

おすらむ-でんとう オスラム電燈（英Osram lamp）【名】電球の一。獨逸國アウエル（Auer）會社にて製造・發賣せるタングステンの電燈。

お-すわり 御据【名】■すわることの敬語。■すわりもち（据餅）を云ふ。〔女の語〕

お-すゑ 御末【名】■內裏又は室町將軍家にて、女が食膳を調ふる室。■德川時代の將軍家又は諸侯の下婢の、水仕（ミヅ）の業を執りなどせしもの。奧女中の下等なるもの。はした。（お次・お仲居・お側（ソバ）に對して）■室町幕府の格勤（カクキン）の侍（サムラヒ）の中にて、雜役・宿直を勤めしもの。將軍の膳部を同朋衆へ送達すること などをも勤めたり。御末男（ナム）。おはした。

おすゑ-がしら 御末頭【名】江戸幕府の御末の下婢の取締役たる女。

おすゑ-しゆう 御末衆【名】■御末の下婢たち。おはしたしゆう。■御末の侍たち。おはしたしゆう。御末の男。

御末の男【句】おすゑしゆう（御末衆）■に同じ。

おすゑ-ぼうこう 御末奉公【名】御末衆として奉公すること。 滕翠毛「さる御屋敷に御末奉公勤めし女」

おせあにやーしう 阿西亞尼亞洲（英Oceanic）【名】〔地〕『大洋洲の意』おおすとらりやしう（濠斯太剌利亞洲）に同じ。

おせ-おせ 押押【名】遣繰（クリ）の、月月・年年に重なりゆくこと。〔東京の俚語〕

おせおせ-とぼふし 押押小法師【名】小供の、二人して互に押しあふ遊戲。假名盛衰記「こなたの子も出て這ひまはり、うなづき合うて、よりこぞり、おせおせ小法師か、おないどし」

おせ-ぐく【貌】 押しひらめたるさま。〔古語〕字造「すしあゆの、おせぐくに、ひらかなるが、しり・頭ばかりおして」

おせ-ぐむ【動四自】 押しひらめたるさまに見ゆ。〔古語〕

お-せせ 御せせ【名】いらぬ世話。おせっかひ。〔德川時代の江戸の俚語〕 浮世床「いらぬおせせの赫燒やい」

お-せせり 御せせり【名】『齒の間に挾まれる物をせせる意』やうじ（楊枝）を云ふ。〔女の語〕

お-せち 御節【名】『御節供の略。せちく（節供）を見よ』正月および五節句などの日に用ふる副食物。牛蒡・人參・燒豆腐・里芋・切鰯（キリス）などを煮しめたるもの。御節振舞。御節供。

お-せちく 御節供【名】前條に同じ。〔じ。

おせち-ぶるまひ 御節振舞【名】前條に同じ。

お-せっかひ 御せっかい【名】おせせに同じ。〔德川時代の江戸の俚語〕

おせなが【貌】をせなが（小背長）を見よ。

おせ-ふき 音聲吹【名】絲竹の樂を奏すること。おんじやう。〔樂家の語〕

おせん

おーせん 御煎【名】せんべい(煎餅)に同じ。〔幼兒又は女の話〕

おーせん お仙【名】〔人〕安永の頃、江戸谷中(ヤナカ)の笠森神社の社頭にありし鉦(ガネ)屋といふ茶店の娘。有名なる美人にて、これを見んがために、わざわざ笠森神社へ參詣する者多かりし程にて、笠森お仙といへり。〔ぶ。

おーぜん 御膳【名】ぜん(膳)の敬語。おぜん

おーぜんぶ 御膳部【名】■前條に同じ。■貴族の膳部の事をつかさどる處、又その人。

おーせんぼふこう 御懺法講【名】せんぼふこう(懺法講)の敬稱。

おせらし 【形二】■おそろし(恐し)の訛。東海道名所記「猛に毛がおへて、おせらしや、おせらしや」■おとならし。〔關西の方言〕

おせる 【動四他】望み見る。ながむ。〔古語〕記「あめのうきはしに立たして、おせりて」

おぞ 鈍【名】おぞきこと。心の鈍きこと。〔古語〕萬葉「たはれをとわれは聞けるを宿かさずわれをかへせりおぞのたはれを」

おそ-あし 遲足【名】■ゆるゆると歩むこと。徐行。■體操にて、一分間に約七十歩の割合にて行進すること。(はや足に對して)

おそ-うし 遲牛【名】歩みの遲き牛。遲牛も淀、早牛も淀【句】『京都より淀まで行く牛に、歩みの早き牛と遲き牛とあれど、何れも淀に著きてその功を成すことは同じとの意』遲速の差はあれども、その結果はひとし。〔諺語〕狂言(牛馬分追っつかうぞ)「遲牛も淀、早牛も淀といふ、明日の今時

おそ-うち 遲打【名】乘物にて報知に行く使者の、さまで行路を急がぬこと。(はや打に對して)曾我會稽山「見たらば、なんの隱しましよ。早うちにも、遲うちにも、今朝からはこの乘物ばかり」

おそ-うま 遲馬【名】歩ののろき馬。駑馬。名義抄「駑、オソウマ」〔江國の方言〕

おそおーたい 【形】おそろし(怖し)を云ふ。〔遠

おそ-おひ 遲生【名】ひつぢ(稻)に同じ。

おぞおん (英Ozone)【名】おぞんに同じ。

おそがい

おーがい 【形】『恐れこはしの訛』おそろし(怖し)を云ふ。〔飛驒國・尾張國及び佐渡國の方言〕

おぞーがる 【動四他】怖ろしがる。こはがる。〔豐後國・若狹國の方言〕

おそかれはやかれ 遲かれ早かれ【句】おそし(遲し)の條下を見よ。

おそ-き 襲著【名】『襲(ヒツ)衣(キ)の略ならんといふ』うはぎ(上衣)に同じ かるべし。〔古語〕萬葉「たくぶすましらやま風のねなへども子ろらがおそきのあろこそえしも」

おそぐつ-の-ゑ おそぐつの繪【名】しゅんぐわ(春畫)に同じ。一說に、戯畫。〔古語〕著園「上手どもの書きてさぶらふおそぐつの繪などぞ御覽候へ、その物の寸法は、分に過ぎて、大きに書きて候ふこと、いかでか實にはさは候ふべき」

おぞーげ 怖氣を振ふ【句】おそろしがりて身ぶるひすゝぐそふるふ。おぞけだつ。

おぞけ-だつ 怖氣立つ【動四自】おそろしくなる。身の毛立つ。

おぞけ-づく 怖氣附く【動四自】おそろしがる。こはがる。

おそ-ざき 遲咲【名】時におくれて花の咲くこと。(はや咲に對して)

おそ-ざくら 遲櫻【名】おそざきの櫻。晩櫻。俳諧新選囃子「遲櫻人に待たれて咲きにけり」

おそし

おーそし 御祖師【名】そし(祖師)の敬稱。おそしさま。〔眞宗・日蓮宗などの話〕

おそし-さま 御祖師樣【名】前條に同じ。

おそし 遲し【形一】■早くなし。遠かならず。■鈍くなし。にぶし。のろし。船恒集「おそき馬はあしぶちならであふれども心のみこそさきにたちけれ」■おくれたり。時過ぎたり。

遲からう善からう【句】「早からう惡からう、遲からう善からう」を見よ。

遲かりし由良之助【句】『忠臣藏の判官切腹の場の科(フセリ)に本づく』物事の、或時機に後れて用をなさぬ時に言ふ語。〔俚語〕

遲かれ早かれ【句】遲きと早きとの相違はあれども、その内には。いづれ、そのうちに。おそはやも。いつしか。早晩。

遲き年【句】氣候のおくれたる年。〔古語〕拾遺「年いと遲き年にて、三月かみの十日ばかり、花さかりなり」

おぞし

おぞし 悍し【形一】■おずし(悍し)に同じ。〔古語〕拾遺「内の后、いとおぞく、心かしこくおはしたまふ」■わるがしこし。ずるし。五十年忌歌念佛「そちが今度のおぞい仕樣、魔法でもかなふまい。どうぞ思案はあるまいか」■怖ろし。〔出雲國松江の方言〕

おぞし 鈍し【形一】心鈍し。おぞまし。起「五情無主(カヅリグ)」

おーそそ 【名】『御裾(ソス)の轉』いんもん(陰門)を云ふ。〔關西の方言〕

おーそそ 【代】われら。おいら。〔飛驒國の方言〕

おそぢゑ 遲知慧【名】おくちゑ(奥智慧)に同じ。

おーそっ-さま 御祖師樣【名】おそしさま(御祖師樣)の訛。〔國の方言〕

おそっぺい 【名】おさゝ(御菜)を云ふ。〔甲斐國〕

おそ-なはる 遲なはる【動四自】おそくなる。延引す。拾遺「あしたに見て、ゆふべのおそなはるほどだに」

おーそなへ 御供【名】■そなへもち(供餅)の敬稱。■新佛への供物。〔と。

おそ-ねり 遲練【名】緩かに練りあるくこ

おそ-ば 遲齒【名】やへば(八重齒)に同じ。おさへば。和名「齲齒。蒼頡篇云、齲、齲齒、於曾波、齒重生也」

おーそば 御側【名】■主君などのそば。■主君の側に仕ふる人。おそばつき。おもとびと。近臣。近習。侍臣。(お来・お次・お仲居に對して)

おそば-とよう-とりつぎ 御側御用取次【名】江戸幕府の職制の一。御側衆の中にて、將軍に近侍して、御用部屋より上申する文書の取次などを掌りしもの。機密の政務にあづかるを以て、極めて權威あり。

おそば-とようにん 御側御用人【名】そばようにん(側用人)の敬稱。

おそばさ

おそば-さら-ず 御側不去【名】■主君の側を去らぬこと。■君寵の厚きこと、又その人。〔の敬稱。

おそば-しゅう 御側衆【名】そばしゅう(側衆)

おそば-づき 御側附【名】おそば(御側)(二)に同じ。

おそば-つづき 御側續【名】こなほし(小直衣)に同じ。

おーそばふ 【動下二自】そばふに同じ。いそばふ。おそばゆ。〔古語〕蜻蛉「おそばへて、あれおしこぼちてんと、腹立ちのしれば」

おそ-ばや 遲速【名】事をなすに、遲きやうにて早きこと。〔俚語〕

おそ-はやも 遲早も【副】今はともあれ。おそかれ、はやかれ。つひには。〔古語〕萬葉「おそはやもなをこそ待ためむかつをの椎のこやでのあひはたげはじ」

おそばゆ 【動下二自】おそばふに同じ。〔古語〕今昔「おそばえたる者の、口聞き、きらきらしく」

おそはる 魘る【動下二自】『もとおそふ(襲ふ)の受動形』夢の中に、鬼などのために苦しめらる。源氏「ものにおそはれたる心のなやましげなるを」

おそひ 襲【名】■おほひかぶする物。おほひ。〔古語〕枕「むしろばりの車のおそひ」■うはぎ(上著)に同じ。拾遺「御おそひは、いづれをかたてまつらん」

おそひ-ぎ 襲木【名】屏風のおそひとする木。〔古語〕〔同じ。

おそひ-の-ざ 襲座【名】ふきかへし(吹返)に

おそふ 壓ふ【動四他】おす(壓す)(二)に同じ。〔古語〕起「壓死、オソハレシス」

おそふ 襲ふ【動四他】『もと前條の語の意』■著たる上に、また著る。かさねぎす。■不意に攻めかく。襲擊す。■不意に訪問す。〔俚語〕■うけつぐ。承く。

おそ-ぶらふ 押そぶらふ【動四他】次條の延。〔古語〕記「少女の鳴(ナ)すや板戸をおそぶらひわが立たせれば」

おそ-ぶる 押そぶる【動四他】おす(押す)(一)に同じ。〔古語〕萬葉「たれぞこの屋の戸おそぶるにふなみにわがせをやりていはふこの戸を」

おそへご 御副子【名】古、禁中にて、節分の夜、土器に牛蒡を入れ、その上に小刀を添へて出だしし、その小刀。

おそべる 【動四自】『おすべり(御滑)の意か。ねそべる(寝そべる)参照』およる。おやすみになる。膝栗毛「もうおそべりなさいませ」

おそまき 遅蒔【名】一時に後れて、種子を蒔くこと。晩種。二期に後れて、事をなすこと。間(マ)にあはぬこと。三おそぢ系(遅知慧)二に同じ。

遅蒔の西瓜(クスザ)【句】おそまき(遅蒔)一の譬。〔俚語〕

遅蒔の唐辛【句】おそまき(遅蒔)二の譬。〔俚語〕

おそまし 悍し【形二】おずし(悍し)に同じ。〔古語〕 増鏡「いづくにも、守護といふものの、月代よりはおそましきをすゑたれば」

おそまし 鈍し【形二】おずし(鈍し)に同じ。

おぞむ 【動四自】一おそる(怖る)を云ふ。〔尾張國の方言〕 二眼が覺む。〔薩摩國・大隅國の方言〕

おぞん (英 Ozone)【名】〔化〕酸素と同素體なる一種の氣體。特種の臭氣あり、普通の酸素よりも作用更に激烈にして、殺菌・消毒の作用をなす。山野の空氣の清淨なるは、主としてこの物の作用によるといふ。又、一定量の酸素瓦斯に、電氣波にてエネルギイを加入すれば、化して同量のオゾンとなり、オゾン分解して酸素となる時は發熱す。即ち電力エネルギイとして入り、化學的エネルギイとして含有せられ、熱エネルギイとして出づるものなり。

おぞんけい オゾン計(英 Ozonometer)【名】空氣中に存するオゾンの多少を檢するに用ふるもの。

おそめ-がた 阿染形・於染形【名】『文政の末の頃、大阪にて、俳優嵐璃寛(ワリク)が「染模様妹背門松(セヤメモウヤウイモ)」の狂言に、處女お染に扮(タイ)ちし時用ひしよりいふ』麻の葉の紋形。

おそめ-ひさまつ-うきなのよみうり 阿染久松色讀販【名】鶴屋南北作の脚本。寶永七年、大阪東堀瓦屋橋通なる油屋新五郎の娘お染(二歳)、丁稚(デッチ)久松(十三歳)に守せられて、前の川邊の土手に遊びをる中、川に落ちて死にしより、久松已の不注意を悔いて縊死せしを、情死の趣に作りなししもの。

おそよか 【副】容貌うるはしきさま。嬋妍。〔古語〕 字鏡「嬋媛、美麗之貌。爾保不。又、宇留和志。又、於曾與加爾」

おそらく 恐らく【副】次條二に同じ。狂言「愚坊」「おそらく、その傘の一本や二十本は切折てお目にかけう」

おそらく-は 恐らくは【副】『恐るはの延。即ち四段活用のおそる(恐る)の連體形の變化』一氣づかふことは。「恐らくは失敗せん」二事によると。大概は。想像すれば。或は。おぼかたは。おそらく。

おそり 恐【名】おそれ(恐)に同じ。〔古語〕 土佐「海賊のおそりあり」

おそる 恐る・畏る・懼る・怖る【動四自】次條に同じ。〔古語〕 古今「かつは、人の耳におそり、かつは、歌のこころにはぢおもへど」

おそる 恐る・畏る・懼る・怖る【動下二自】一他の勢に勝ちがたしと思ひて、心弱くなる。こはくおもふ。おづ。ひるむ。二あやぶむ。氣づかふ。「失敗せんことをおそる」三勿體(モイタイ)なしと思ふ。たふとく思ふ。はばかる。いたみいる。

おそる・おそる 恐る恐る【副】おそれながら。おそれおそれ。こはごは。おぢおぢ。おづおづ。

おそれ 恐・畏・懼・怖【名】一恐ること。よわみ。おぢけ。おそり。恐怖。二あやぶむこと。氣づかふこと。うれへ。〔虞〕 三はばかること。いたみいること。勿體(モイタイ)なくおもふこと。恐懼。

おそれ-いる 恐入る【動四自】一甚だ恐る。かしこまる。二あやまちをさとりて謝す。三かたじけなく思ふ。いたみいる。「それは、おそれいる」

恐れ入谷(ヤイ)の鬼子母神(キジンモ)【句】『恐れ入るといふ語を、東京市下谷(シタ)區の入谷にある鬼子母神にかけていへる語』恐縮したる事をいふ。〔俚語〕

おそれ-おそれ 恐れ恐れ【副】おそるおそる。恐る恐る)に同じ。 蓍聞「大納言、あれは何ものぞと問ひければ、恐れ恐れ申しけるは」

おそれ-おほし 恐多し【形一】かたじけなはばかりあり。かしこし。たふとし。勿體(モイタイ)なし。ありがたし。

おそれ-がまし 恐がまし【形二】恐多きやうなり。 謡曲「藍染川」「それは恐れがましく候」

おそれ-ながら 乍恐【副】勿體(モイタイ)なけれど。かしこけれども。はばかりあれども。

おそれ-やま 恐山【名】〔地〕陸奥國下北(シモキタ)郡にある噴火山。頂上に火口湖あり、恐山湖と稱し、その水、正津(シヅ)川となりて津輕海峽に注ぐ。又、山中所所に溫泉湧出し、恐山湖畔の恐山溫泉最も有名なり。一名、宇曾利(リ)山。

おそれやま-こ 恐山湖【名】〔地〕前條を見よ。

おそれやま-をんせん 恐山溫泉【名】〔地〕おそれやま(恐山)を見よ。

おそろ 【名】さうめん(索麵)を云ふ。〔女の語〕

おそろし 恐し・怖し【形二】一恐るべくあり。こはし。 源氏「右近をおこしたまふ。これも、おそろしと思ひたるさまにて」二あやぶし。氣づかひなり。心配なり。三甚し。たいさうなり。おっそろしい。〔俚語〕

おそろし-がる 恐しがる・怖しがる【動四他】恐しと思ふ。こはくおもふ。あぶながる。あやぶみおもふ。

おだ 織田【名】姓氏の一。平重盛の子資盛(モスケ)の裔。資盛の子親眞、近江國に匿れ、後、越前國織田神社の祠官に養はれしが、その九世の孫常昌、管領斯波(シバ)氏に仕へて尾張國に遷り、常昌の十世の孫信長に至りて大いに著る。信長の子信雄(カツオ)の裔、出羽國村山郡天童(テン)及び丹波國氷上(ヒカ)郡柏原(カハラ)の領主として明治維新後、共に子爵を授けられ、信長の弟なる有樂(ウラク)の裔も、大和國芝村の領主として、同じく子爵を授けらる。

お-たあさん 【名】はは(母)を云ふ。〔攝津國・河内國及び和泉國の方言〕

お-だい 御臺【名】『だい(臺)を見よ』一ぜん(膳)を云ふ。〔女の語〕 二めし(飯)を云ふ。〔女の語〕

おだい-がひ 御臺匙【名】いひがひ(飯匙)に同じ。

おだい-ぐご 御臺供御【名】めし(飯)に同じ。

お-だいくわん 御代官【名】だいくわん(代官)の敬稱。

おだいくわん-まゐり 御代官參【名】だいくわんまゐり(代官參)の敬稱。

お-たいこ 御太鼓【名】一たいこもち(太鼓持)に同じ。〔俚語〕 二おたいこむすび(太鼓結)の略。

御太鼓を打つ【句】人の說に同ず。人の說に調子をあはす。相槌(アヒヅチ)を打つ。〔俚語〕

おたいこ-むすび 御太鼓結【名】女の帶の結び方の一。掛(ケ)を結び目の中に入れて、太鼓の胴のごとくに丸くせるもの。おたいこ。

お-たいし 御大師【名】〔人〕こうぼふだいし(弘法大師)の敬稱。〔眞言宗信徒の語〕

おだいし-さま 御大師樣【名】一〔人〕こうぼふだいし(弘法大師)の敬稱。〔眞言宗信徒の語〕 二知るべの家家を泊りまはりて、厄介になること。〔俚語〕

おだい-づけ 御内附【名】内裏樣風の附眉。狂言「鳥類子折」「額に、おだいづけと申すものを附けまする」

お-だいはう 御大方【名】貴族の母の敬稱。母堂。北堂。

おだい-びつ 御臺櫃【名】『おだい(御臺)を見よ』一めしびつ(飯櫃)に同じ。二ちぎばこ(千木箱)を云ふ。(京都・大阪の語)

お-だいみやう 御大名【名】一だいみやう(大名)の敬稱。二『その家の遺傳病として世人の避け嫌ふを、大名をその家筋(家格)のために避け憚る義に取りなしていへるもの』癲病(ライビ)の血統ある家。〔俚語〕

おだ-らく 織田有樂【名】〔人〕茶道有樂流の祖。信長の弟。通稱は源五郎、名は長益(ナガ)。秀吉に仕ふ。後、薙髮して有樂と號す。元和七年歿す。年七十(一說には七十五)。

おだうら

おだーうらくさい 織田有樂齋【名】〔人〕前條に同じ。

おーたがーさま 御多賀樣【名】たがじんじや(多賀神社)の敬稱。

御多賀樣の御庭【句】『多賀神社は、願(ガワ)を掛くる人、さまざまの樹木を獻納して祈るよりいふ』おたまじやくし御玉杓子(一)に同じ。

おたがーじやくし 御多賀杓子【名】『昔江國の多賀神社より、守(マモリ)として出したものなるよりいふ』おたまじやくし御玉杓子(一)に同じ。

おたがひーに 御互に【副】たがひに(互に)「の敬稱。

おーたから 御寶【名】一たからぶね(寶船)(二)に同じ。〔俚語〕三金錢。〔東京の女又は芝居者の語〕四他人の子をめでていふ稱。〔豐後國の方言〕

おたからーうり 御寶賣【名】寶船を賣る人。

おたぎ 愛宕【名】〔地〕山城國八郡の一。郡役所を田中町に置く。

おたぎーてら 愛宕寺【名】京都市下京區松原通(ドウヒヤウ)建仁寺町にある天台宗の寺。等覺山・念佛寺と號す。本尊は千手觀音。六道珍筆寺。愛宕念佛寺。「天狗の酒盛」參照。

おたぎーねんぶつじ 愛宕念佛寺【名】前條に同じ。

おたぎーのーてら 愛宕寺【名】おたぎてら(愛宕寺)に同じ。〔謠曲「熊野」〕「頼む命はしら(不知・白)玉のおたぎ(緒・愛宕)の寺もうち過ぎぬ」

おたぐら 【名】芝居の蔓(カツラ)の一。男の鬘(ヅラ)の一種にかたどれるもの。

おたーさん 阿多樣【名】おたふく(阿多福)(一)に同じ。おたやん。〔東京の語〕「飴の中からおたさんが飛んで出た」

おたし 【名】〔動〕たひ(鯛)を云ふ。〔女の語〕

おだし 穩し【形二】穩かなり。やはらかなり。おだひし。心又は擧動の上にいふ。〔古語〕源氏「あはれに長き御心のほどを、おだしきものに、うちとけ頼み聞えたまへる御ありさま」「の方言」

おだす 【動四他】小言(コゴト)を言ふ。〔上總國〕

おーたち 御立【名】一出立することの敬稱。二來客の歸ることの敬稱。三食物を强ふること。〔陸前國仙臺・伊勢國桑名および越後國の方言〕

おだちん

おーだちん 御駄賃【名】小供に與ふる小遣錢又は菓子などの類。おちん。〔京都の語〕

おだつ 煽つ【動下二他】勸め動かす。煽動(ドセウ)す。教唆(ケウ)す。そそのかす。さそひたつ。

おーたづね 御尋【名】たづぬることの敬稱。

おたづねーもの 御尋者【名】政府にて探偵中の罪人。〔俚語〕

おだて 煽【名】おだつること。教唆(ケウ)す。煽動(ドセウ)。

煽ごゝ春(ハル)には乘りたくない【句】煽てられても嬉しくは思はず。〔諺語〕

煽に乘る【句】煽てられて得意になる。

おだーとくのう 織田得能【名】〔人〕學僧。越前國福井の人。大小乘の藏奥を極む。遍羅(ムシヤ)に留學して、歸朝後、東京淺草宗恩寺の住職となり、明治四十四年卒す。年五十二。佛教大辭典・法華經講義等の著あり。

おだーながます 織田長益【名】〔人〕おだうらく(織田有樂)に同じ。

おたねーにんじん 御種人參【名】德川家光の時、その種子を取寄せて、日光に試植せし朝鮮人參。

おだーのぶかつ 織田信雄【名】〔人〕信長の次子。本名は具豐、小字は茶筌丸(チヤセン)。資性優柔不斷にして、父に似ず。信孝と權を爭ひ、秀吉と隙を構へ、家康に抗し、淀君と不和を生ず。寛永七年薨ず。年七十三。

おだーのぶたか 織田信孝【名】〔人〕信長の第三子。三七郎と稱す。資性剛勇、信雄(カツノブ)及び秀吉を除かんと謀り、計洩れて遂に成らず。天正十二年正法寺に自殺す。年二十六。

おだーのぶただ 織田信忠【名】〔人〕信長の嫡男。小字を奇妙丸又は三法師(サンボウ)と稱す。天正五年二弟信雄(カツノブ)・信孝(タカノブ)と共に紀伊を平げ、大和に松永久秀を討ち、左近衛權中將に進む。本能寺の變に際し、妙覺寺に自殺す。年二十六。

おだーのぶなが 織田信長【名】〔人〕武將。小字は吉法師。資性剛勇果斷にして、細節に拘らず。永祿三年今川義元を桶狹間(ヲケハザマ)に破りてより威名天下に鳴り、正親町天皇の勅を奉じて、海內を平らげ、天正十年京都本能寺に在りて、その臣明智光秀に弑せらる。年四十九。從一位・太政大臣を贈らる。

(がなぶのだお)

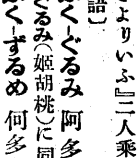
おたのみ

おーたのみ 御賴【名】一たのみ(賴)の敬語。二八朔(サクヒ)に、物品を將軍家に進上すること。〔足利時代の語〕「同じ。

おたのみーいうひつ 御賴右筆【名】次條に

おたのみーぶぎやう 御憑奉行【名】室町幕府の職制の一。幕府に諸家より進物ある時、返し物を賜ふことを沙汰せし奉行。おたのみいうひつ。

おーたばこぼん 御烟草盆【名】一たばこぼん(烟草盆)の敬稱。二『形、昔の烟草盆の弦(ヒ)に似たるよりいふ』少女の髪の結ひ方の一。左右の髪を横に雙方より合せて、その上にきれをかけたるもの。



(二んぼこばたお)

おたばふ 【動四他】聲をかけて呼ぶ。おとなふ。〔古語〕萬葉「いかほろに天雲いつぎ鹿沼(カヌマ)づく人ぞおたばふいざ寢しめとら」

おだひ 穩【貌】おだやかなるさま。平穩。おだひか。(心の上にいふ)〔古語〕續紀「心も安く、おだひにあらむと」

おーたび 御旅【名】一おいて(御出)(二)に同じ。卯月の紅葉、諸願の種を上町(マチ)の摩摩のおたびに二十二社」二江戸本所の御船藏前町にありし娼家。

おだひか 穩か【貌】おだひ(隱)に同じ。〔古語〕名義抄「雅、オダヒカ・ミヤビカ」

おだひし 穩し【形二】おだやかなり。おだし。〔古語〕續後紀「賢明はやくあらはれ、仁孝もかね厚くして、たのもしくおだひしくあり」

おたびし

おーたびしよ 御旅所【名】たびしよ(旅所)の敬稱。おたびどころ。壽門松「我れ等が宿は庭かけて七疊半、貧乏神のおたびしよといひさうな住居」

おたびーどころ 御旅所【名】前條に同じ。

おーたひら 御平【名】客の坐る時、足をくづすことの敬稱。「國の方言」

おたひらーかく 安坐【句】あぐらかく。〔加賀〕

おーたふく 阿多福【名】一おたふくめん(阿多福面)に同じ。二女を罵りていふ語。おかめ。おたふくづら。〔俚語〕

阿多福の火炎(ホノヒ)【句】『鼻低くして火燃えつかずとて、「鼻、火にならず」の意を、江戸の訛(ナマ)にて、同音に混じて言ひかけたるもの』「話にならず」の隱語。〔俚語〕

おたふくーあめ 阿多福飴【名】細長き飴の、横斷面ごとに、阿多福の繪のあらはるるやうにせるもの。〔俚語〕

おたふくーぐるま 阿多福車【名】『幅廣く醜きよりいふ』二人乘りの、幅廣き人力車。〔俚語〕

おたふくーぐるみ 阿多福胡桃【名】〔植〕

おたふくーずるめ 何多福鰯【名】鰯の一種。中央の軟骨を去り、肉を横に引延して、圓き形に製したるもの。

おたふくーそらまめ 阿多福蠶豆【名】そらまめの實の、よく實のりたるもの。おたふくまめ。〔俚語〕

おたふくーづら 阿多福面【名】おたふく(阿多福)(一)に同じ。〔俚語〕

おたふくーまめ 阿多福豆【名】おたふくそらまめ(阿多福蠶豆)に同じ。〔俚語〕

おたふくーめん 阿多福面【名】『禍分多しとの意』額高く、頰ふくらかに、鼻低き女の顏の假面(メン)。おかめ。三平二滿。おとぜ。おたさん。おたやん。おたふく。

おーだぶつ 御陀佛【名】『だぶつ(陀佛)を見よ』一死ぬること。〔俚語〕二失敗して、回復の見込立たざること。〔俚語〕

おたま

おたま 阿玉【名】おすぎおたま、阿杉阿玉）を見よ。柳樽「江戸者で無けりやお玉が痛がらず」

おたま 御玉【名】一おたまじやくし（御玉杓子）（一）の略。二（動）おたまじやくし（御玉杓子）（一）の略。三けいらん（雞卵）を云ふ。（女の語）四『たまおち（玉落）を見よ』ふち（扶持）に同じ。（武士の語）

おたまいなり 阿玉稲荷【名】次條を見よ。

おたまがいけ 阿玉池【名】（地）江戸神田松枝（エダ）町にありし池。お玉といふ女の投身せしところにて、後、その靈を祭りて、阿玉稲荷社といふ。きよくちぎんしや（玉池吟社）參照。

おたまじやくし 御玉杓子【名】一『おたがじやくし（御多賀杓子）の轉訛』しやもじの小きもの。おたま。おたがじやくし。（東京の語）二（動）『形の杓子に似たるより、轉じていふ』蛙の子の未だ尾を脫せざるもの。おたま。蝌斗・蝌蚪）三『形の似たるより、轉じていふ』歐文に、感嘆の意を示すに用ふる符號、即ち！。（俚語）

於玉杓子が蛙になる【句】天性の拙き者は、すぐれたる進歩なき譬。（諺語）

おたまや 御靈屋【名】貴人の靈を祀れるところ。靈廟。

おだん 御團【名】聖天（ショウテン）の供物に用ふる菓子。延命袋の形にて餡（アン）の入りたる餅を、油にて揚げたるもの。

おたんちん 【名】のろま。まぬけ。ばか。（東京の俚語）

おたんてら 【名】おべんちやらを云ふ。（信濃國の方言）

おため 御爲【名】一爲（ノ）になることの敬語。（俚語）二主人に奉公だすること。三おうつり（御移）を云ふ。（京都・大阪の語）

おためおえき 御爲御益【名】一『御を冠らせたるは、女の名に擬したるもの』主人の利益をはかりて、從僕などを苦しむる役人。

おためがほ 御爲顏【名】表面のみは、人のためになるやうなる風を裝ひて、內心は、然らざること。（俚語）春花五大力「たのみに思ふまはしの彌助づらも、三五兵衛と馴れあひにて、おためがほにて、心の底は、おん身のあだと存じ候」

おためごかし 御爲ごかし【名】表面のみは、人のためになるやうに言ひなして、その實、害をなすこと。（俚語）

おためもの 御爲者【名】主人のために御爲ごかしの振舞をなす者。

おだやか 穩か【形】一無事なるさま。やすらか。しづか。のどやか。安穩（アンオン）。平穩（ヘイオン）。二心のおちつきたるさま。言葉のしづかに丁寧なるさま。

おたやん 阿多樣【名】おたさん（阿多樣）（一）を云ふ。（京都・大阪の語）「餡の中から、おたやんが、飛び出た」

おたらひ 御盥【名】一たらひ（盥）の敬稱。二女の髮の結ひ方の一。頭の毛を輪にして、その穴に簪（カンザシ）を通し、殘りたる毛を、その簪にぐるぐると卷きたるもの。

（二）ひらたお

おたらひ 【名】『おけ接頭語、たらひはためらひの略』ためらふこと。躊躇。（信濃國の方言）

おだれ 【名】ひさし（庇）を云ふ。（甲斐國の方言）

おち 落【名】一（植）あぶらな（油菜）に同じ。二落つること。三落ちもること。脫落。四てぬかり。おちど。あら。「人のおちをひらふ」四結局の勝利。「おちを取る」五茶番狂言・落語などの結末。六楊弓の賭弓（カケユミ）などにて、二人づつ組合せを定むるに、人數の奇數なるために、餘りたる一人。二人分の役に當らしむるを定とす。七花合せにて、落つるために出す石。おり。

落の話【句】おとしばなし（落話）に同じ。

おち 御乳【名】一貴人の乳母。おちのひと。二貴族の兒女の養育に當つる女。（おさしと區別していふ）丹波與作「泣きたまへば、御乳も、今はあぐみて」

御乳の人【句】おち（御乳）に同じ。おんちのひと。丹波與作「必ずおいてもらはうと、御乳の人の不機嫌さ」

おち

御乳の人の乳のあがりたる如し【句】全く役立たぬやうになりたる人又は物の譬。（諺語）

おぢ 祖父【名】おほち（祖父）の略。

おちあがる 落擧がる【動四自】或は落ち或は擧がる。著聞「はくの石飛び出でて、おちあがること鞠（マリ）の如し」

おちあし 落足【名】一戰に負けて逃げゆく足どり。二戰に負けて逃げゆく時。三水の引きぎはになること。平家「河內路へや廻るべき、水の落足をや待つべき」

おちあな 落穴・陷穽【名】おとしあな（陷穽）に同じ。

おちあひ 落合【名】一共に同じ處にて出であふこと。二二すぢの川の流の出合ふところ。

おちあひ 落合【名】（地）『備中川と高田川との會流點にあるよりいふ』美作國眞庭（マニワ）郡にある町。舊名、垂水（ミタル）。

おちあひなほあき 落合直亮【名】（人）國學者。武藏國南多摩郡の人。直文の養父。明治維新の際國事に奔走す。鹽釜・淺間等の宮司たり。明治二十七年歿す。年六十七。

おちあひなほぶみ 落合直文【名】（人）國文學者。萩の屋主人と號す。仙臺藩の國老鮎貝太郎兵衛の次男。落合直亮に養はる。東京大學文學部古典科に學び、第一高等學校教授となり、率先して國文・國語の改新を圖り、又、短歌の革新を唱道せり。明治三十六年歿す。年四十二。ことばの泉・家庭教育歷史讀本・新撰日本外史・大鏡詳解等の著あり。

おちあひめをと 落合夫婦【名】野合の夫婦。できあひふうふ。河內名所鑑「星や水におちあひめをと天の川（一志）」

おちあひやき 落合燒【名】伯耆國會見（ヒ）郡落合村より製出する粗製の陶器。同村の人松浦助六が寬政の頃創めしもの。

おちあふ 落合ふ【動四自】一共に同じ處にて出合ふ。互に同じ處に會す。二二すぢの川が流れあふ。三承諾す。うべなふ。

おちあふる 落溢る【動下二自】零落す。おちぶる。（古語）源氏「かくまでおちあぶるべききはとは思ひたまへざりしを」

おちあゆ 落鮎【名】さびあゆ（錆鮎）に同じ。

おちい 御乳【名】『おち（御乳）の延言』うば（乳母）に同じ。

おちいたじき 落板敷【名】隣接せる部分よりも一段低く構へたる板敷。

おちいり 落入【名】芝居にて、手負・病者に扮（フン）したる者の絕息するしぐさ。

おちいる 落入る・陷る【動四自】一くぼくなる。深くなる。源氏「まかはは、いたく黑みおちいりて」二落ちて中に入る。おちこむ。はまる。おぼる。源氏「棹さしはづして、おちいりはべりにけり」三破られて取らる。陷落す。「城陷る」四命絕ゆ。死ぬ。五人のはかりごとに欺かる。「術計におちいる」「逃げて隱る。

おちうす 落失す【動下二自】戰に負けて、便（ビン）戰に負けて、私かに逃げて行く人。おちびと。

おちうど 落人【名】『おちびと（落人）の音同じ。（諺語）

落人は草木にも心おく【句】次條に同じ。

落人は薄（キス）の穗にも恐る【句】落ちゆく者は、心おちつかぬため、つまらぬ物事にも驚く。落武者は薄の穗にも怖づ。落人は草木にも心おく。（諺語）

おちうなぎ 落鰻【名】秋季に流に從ひて下る鰻。くだりうなぎ。

おちうを 落魚【名】死にたる魚。

おちえん 落緣【名】座敷より一段低きところにある緣。

おちおち 落落【副】落ちつきて。安心して。「おちおち寢られぬ」

おぢおぢ 【名】（動）あさびさり（惡飄）を云ふ。（關東の方言）

おぢおぢ 怖怖【副】怖ぢながら。おそれつつ。おそるおそる。おづおづ。

おちかかる 落掛る【動四自】落ちんとす。竹取「神は落掛るやうにひらめきかかる」

おちがきのや 落柿舍【名】らくしやの（落柿舍）に同じ。

おちかさなる 落重なる【動四自】落ちたるものの上に、更に落ちて重なる。謠曲

（敎盛「馬の上にてひっ組んで、波うちぎはに落ちかさなって」

おち-かしこむ 怖畏む【動四自】おそれつつしむ。おちかしこまる。起「幟然改容、オヂカシコミテ」

おち-がた 落方【名】一落つる頃。（花又は城などの）甚「西は白く、東は紅梅にて、少しおちがたになりたれど」二物事、末がたになりて、衰へ初むる頃。

おち-かひ 落買【名】落髪（ガチ）を買ひあるく者。

おち-がみ 落髪【名】解く時に抜けおつる髪。おちげ。ぬけげ。拾遺「あさなあさなけづればつもるおちがみのみだれてものを思ふころかな」

おち-き 御直【名】ぢき（直）の敬語。直接。曾我「曾我畠山「この度の狩にも、假屋奉行・夜まはり、おちきの御用承り」

おちき 【名】たんき（短氣）を云ふ。〔羽前國の方言〕

おちき-しゅう 御直衆【名】直參（ヂキ）の人の敬稱。曾我扇八景「御直衆か、陪臣か、暗くて面は見えねども」

おちく 怖く【動下二自】おそろしくなる。おぞけづく。畏縮（ヰシク）す。おづ。

おち-くさ 落草【名】鷹が鳥を追ひて落したる草原。〔古語〕風雅「御かりするかた山かげの落草にかくれもあへず立つきぎすかな」

おち-ぐち 落口【名】一落ちはじむること。（木の葉などの）二水の流れ落つる處。三無靈の籤（クジ）又は入札などにあたる人。

おち-ぐび 落首【名】一首を斬ること。うちくび。斬首。二首を下に傾くること。

おちくぼ 落窪【名】家のうちの床の一段落ちこみ低くなれること、又そのところ。おちま。〔古語〕蜻蛉「寢殿のはなちいでの、又、一間なるおちくぼなる所の、二間なるになん住ませたまうける。おちくぼの君と云へとのたまへば、人人も然いふ」

おちくぼ-ものがたり 落窪物語・落久保物語【名】〔書〕平安朝時代に成れる小說。繼子（ママ）いぢめの話を骨子とせるもの。作者詳かならず。四卷。

おちくぼものがたり-たいせい 落窪物語大成【名】〔書〕落窪物語の註釋を集めて大成せるもの。四卷。中村秋香の著。

おちくぼものがたり-ちゆうしやく 落窪物語註釋【名】〔書〕落窪物語を註釋せるもの。二册あるのみにて、その註釋、物語の全部に及ばず。橘千蔭（ヂチカ）・村田春海（ハル）の合著。

おちくぼものがたり-とうしよ 落窪物語頭書【名】〔書〕賀茂眞淵の落窪物語の講說に、頭書を加へたるもの。四卷。信夫茉「一次條の略。

おち-ぐり 落栗【名】一落ちたる栗の實。

おちぐり-いろ 落栗色【名】一濃き紅の黑ばめる染色。おちぐり。二裏（ネガヘ）の色目の一。表は黑みある蘇芳・裏は香色（イカウ）。一說に、表は濃き紅・裏は香色。おちぐり。

おちげ 落毛【名】おちがみ（落髪）に同じ。蜻蛉「御ぐしをかきなでて見たまへば、おちげもなくめでたし」

おち-け 怖氣【名】恐ろしと思ふ心。恐怖心。「おちけが附く」

おちけ-だつ 怖氣立つ【動四自】恐ろしく思はる。心中萬年草「申し申しと呼びかくるあいといふのも、おちけだち」

おち-ご 御兒・御稚兒【名】一ちご（兒）二の敬稱。

おちごなり 御兒成・御稚兒成【名】祭禮又は法樂などの時に、おちごの、列を作りて練行くこと。狂言「酢茎「清水寺には、おちごなりとやら、喝食（カツシキ）なりとやらあるといふが」

おち-こぼれ 落零【名】一落ちて散らばれる物。二他人の收めたるあとに、取りのこして殘れるもの。あまりもの。遺利。

落零れは沙彌（シヤ）のもの【句】和尙の利得の餘は、沙彌の有に歸す。〔諺語〕

おち-こみ 落込【名】一落込むこと。二船の舵の、落込床（オトシゴ）にあふ部分。おちつまり。

おち-こむ 落込む【動四自】一おちいる。はまる。二くぼくなる。陷沒す。三目然と已が手に入る。「金がおちこむ」

おち-ころび 落轉【名】一落ちてころぶこと。二落つると、ころぶと。三不運なる目に會ふこと。おちめ。おちぶれ。失意。

おちごわげ 御稚兒髷【名】ちごわ（稚兒輪）に同じ。

おち-さま 落樣【名】落つる時。落ちんとする際。おちしな。芭蕉「おちざまに水こぼしゆく椿かな」

おち-しな 落しな【名】前條に同じ。

おち-しひ 落椎【名】落ちたる椎の實。謠曲（通小町）「拾ふ木の實は何何ぞ…嵐に脆（モロ）き落椎」

おち-しほ 落潮【名】ひきしほ（引潮）に同じ。

おち-ぜい 落勢【名】負けて逃げゆく軍勢。

おち-そふ 落添ふ【動四自】おち加はる。蕉「涙川我が涙さへおちそひて君が袂ぞ淵と見えける」

おち-ち 御乳【名】一ち（乳）を丁寧にいふ語。二うば（乳母）を云ふ。〔東京の語〕

おち-つき 落著【名】一おちつくこと、又その態度。二旅宿などに行きつきて食する物。〔古語〕新六「あづま路のうまやうまやのおちつきに人もすすめぬ君がわりなさ」三据ゑたる器物のすわりぐあひ。四〔商〕相場の劇變後、人氣のしづまること。〔取引所の語〕

おち-つき-どころ 落著所【名】おちつく所。ぬつくべき所。

おち-つき-はらふ 落着拂ふ【動四自】きはめて平氣にかまふ。沈著にす。〔俚語〕

おち-つく 落著く【動四自】一居どころ定まる。勤務の場所定まる。居著く。廣松「わが君具し奉りて、里にぞいそぎおちつきにける」二事又は心が穩かになる。安まる。しづまる。をさまる。三沈著にす。輕率ならず。四調和又は配合よろしく見ゆ。五決著す。歸著す。六〔商〕相場の變動なきやうになる。〔取引所の語〕

おち-つく 落著く【動下二他】おちつかしむ。安む。定む。しづむ。「心をおちつけて」

おち-つまり 落詰【名】おちこみ（落込）三に同じ。

おち-つまる 落詰る【動四自】落ちて、物の間にはさまる。字遊「あがるくひの中におちつまりて、え働かぬ男あり」

おち-ど 落度【名】をちど（越度）三の訛。

おち-とどまる 落留まる【動四自】落散りて、あとに殘りとどまる。おちとまる。

おち-とまる 落留まる【動四自】一前條に同じ。源氏「おちとまれる御指貫（ヌキシ）・帶など、つとめて奉れり」二殘りて長く傳はる。源氏「驛（ウマ）の長（サ）に櫛とらする人もありけるを、まして、おちとまりぬべくなんおぼえける」

おち-なし 怯し【形一】『怖（オヂ）甚（ナ）しの義』怯づること甚し。〔古語〕紀「懦弱、オヂナシ」「條下を見よ。

おち-の-ひと 御乳の人【句】おち（御乳）の遠方の地まで逃ぐ。

おち-の-ぶ 落延ぶ【動上二自】戰に負けて、

おち-ば 落葉【名】一落つる木の葉、又、落ちてある木の葉。らくえふ。二『木の葉の落ち散れるに譬へていふ』おとしだね（落胤）に同じ。〔古語〕源氏「朝臣や、さやうのおちばをだに拾へ」三おちばいろ（落葉色）の略。四謠曲の源氏ものの一。雲井雁（モカリ）の落葉宮に對する嫉妬心の、死後にもなほ殘れる事を作れるもの。一名、陀羅尼（ダラ）落葉。五謠曲の源氏ものの一。北國の僧、都に上らんとて山城國小野（ノ）に來り、源氏物語にある落葉宮の亡靈にあふことを作れるもの。

落葉の衣【句】おちばごろも（落葉衣）に同じ。

おちば-いろ 落葉色【名】枯れたる落葉の色。褐色に黃赤を帶びたる染色。ちや。かばちや。おちば。

おちば-ごろも 落葉衣【名】木の葉の、衣の上に散りかゝること。一說に、仙人などが落葉を集め綴りて衣とせるもの。落葉の衣。〔古語〕後撰「秋の夜の月の影こそ木の間よりおちば衣と身にこうつりけれ」

おちば-ぶね 落葉船【名】水に落ちたる葉を船と見なしていふ語。日本振袖始「嵐こぎ行く落葉船」

おぢ-ひす 怖ぢひす【動四自】恐れひそむ。

〔古語〕起恐懾、オヂヒス」

おちーびと 落人【名】おちうど(落人)に同じ。

おちーびと 御乳人【名】おち(御乳)を云ふ。〔徳川時代の大阪の語〕

おちーふし 落伏【名】鷹よりのがれたる鳥の、草中に落ちて伏してゐること。

おちーふだ 落札【名】入札に當りたるふだ。らくさつ。

おちーぶる 落ちぶる【動下二自】■『おちあぶる(落溢る)の略』貧しくなる。さすらふ。零落す。衰ふ。九董「落ちぶれて關寺譚ふ頭巾かな」■品格下る。いやしく見ゆ。「落。

おちーぶれ【名】おちぶるること。落魄。零

おちーぼ 落穂【名】おち散りたる稲の穂。伊勢「うちわびておちぼひろふときみませばわれも田づらにゆかましものを」

おちぼーしふ 落穂集【名】〔書〕天文十一年より元和元年までの徳川氏の事を記せるもの。數本ありて詳略ひとしからねど、史籍集覽に收めたるものは、十卷。大道寺重祐の撰。

おちま 落間【名】■家の内にある床(ゆか)の一段低きところ。おちくぼ。■きりおとし(切落)に同じ。〔京都・大阪の語〕■芝居の二重舞臺の下の、柴垣・手水鉢などを置くところ。

おちまふ 落舞ふ【動四自】水、高きより落ちて、うづまきあがる。重之集「最上川おちまふ瀧の白絲は山のまゆよりくるにぞありける」

おちーむしや 落武者【名】戰に負けて逃ぐる武者。

落武者は薄(すすき)の穂に怖づ【句】「落人(おちうど)は薄の穂にも恐る」に同じ。〔諺語〕

おーちん 御賃【名】おだちん(御駄賃)に同じ。〔京都・大阪の語〕

おーちんこ【名】いんきやう(陰莖)を云ふ。〔小供の語〕

おちめ 落目【名】■おちぶれかかること。零落せんとする運命。〔俚語〕■(商)商品の量目が、送狀記載の額より減じてあること。買主の損失に歸するを常とす。

落目に祟(たた)り目【句】「弱り目に祟り目」に同じ。〔諺語〕

おちーもの 落物【名】路などに落ちてある物。遺失物。

おーちや 御茶【名】■ちや(茶)の敬稱。■ちやかすことの敬稱。■かうまんちき(高慢ちき)に同じ。

御茶を濁す【句】言譯(いひわけ)ばかりの事をなす。當座逃れの事をなす。

御茶を挽く【句】『客なくて隙なる者は、葉茶を臼にかけて粉にする業をせしよりいふ』娼妓又は藝妓・幇間(たいこ)などが、客なきをいふ。

おーちや【動自】御出であれ。どざれ。きたれ。狂言(伯母が酒)「重ねておちや」

おーちやう 御孃【名】■おちやうさま(御孃樣)に同じ。■他人の妻。〔上總國の方言〕

おーちやうき 御定器【名】『ちやうき(定器)を見よ』わん(椀)を云ふ。〔女の語〕

おちやうーぐち 御錠口【名】徳川時代の幕府及び大名の間取に、表と奥との界に設けたる出入口。杉戸にて仕切り、時を定めて、内外より大なる錠を卸(おろ)す。上(じよう)の御錠口。

おちやうぐちーしゆう 御錠口衆【名】江戸幕府の職制の一。御錠口に詰めて、將軍の命を年寄(としより)に通じ、又、晝夜の時間を御座の間に通ずることを掌りしもの。

おちやうぐちーすけ 御錠口助【名】江戸幕府の職制の一。御錠口衆を補助せしもの。

おちやうぐちーづめ 御錠口詰【名】御錠口衆の頭。御表よりの使を詰所に待たせ置き、將軍又は簾中(れんちう)の前に伺候して、親しく御用件を陳べ、答を承けて、使に通ずることを得る特權を有したり。

おちやうーさま 御孃樣【名】身分ある家の娘の敬稱。おちやう。おちやうさん。〔俚語〕

おちやうーさん 御孃樣【名】前條に同じ。

おちやーかた 御茶方【名】茶道のことを掌るもの。狂言(通圓)「お茶方の、あはれはかなき湯の中に」

おちやーこ 御茶子【名】劇場又は茶屋などの女中を云ふ。〔大阪の方言〕

おちやーこしやう 御茶小姓【名】御茶の給仕をなす小姓。

おちやーしよ 御茶所【名】ちやしよ(茶所)の敬稱。おちやや。おちやどころ。「語」

おーちやちやら【名】おべんちやらに同じ。〔俚語〕

おちやつぴい【名】しやべりすぐる小娘を罵りていふ語。〔俚語〕浮世床「おちやつぴいのおてんば娘」

おーちやつぼ 御茶壺【名】■ちやつぼ(茶壺)の敬稱。■江戸時代に、舊暦四月頃、將軍飲料の葉茶を山城國宇治まで受取りにゆきし時の茶壺。羽二重に包みて、駕籠に据ゑ、茶坊主・士・宰領等十數人これに附添ふ。

おちやーどころ 御茶所【名】■おちやしよ(御茶所)に同じ。■茶を賣る家。茶屋。〔關西の方言〕

おちやない【名】『落ちは無いの意』古、京都にて、西郊常盤(ときわ)より出でて、頭の上に袋を乘せて、脫毛(だつもう)を買ひあるき、髢(かもじ)に造りて賣りし女。かづらひねり。

おーちやのこ 御茶子【名】■ちやのこ(茶子)の敬稱。〔關西の方言〕■物事をなすに、たやすきこと。おちやのこさいさい。朝めしまへ。〔俚語〕浮世床「この位な事は、おちやのこだ」

おちやのこーさいさい 御茶子さいさい【名】前條(■)に同じ。〔俚語〕

おちやーのーつぼね 御茶局【名】〔人〕徳川家康の侍女。名は須知。武田信玄の臣飯田久右衛門の女。奥向の政令を掌る。大阪の役起るや、家康の命を含み、淀君の侍女大藏局に說き、遂に和を媾ずるに至らしむ。秀忠の女東福門院入内の時、從ひて京都に入り、從一位に敍せらる。薙髪後、雲光院と稱す。寛永十四年歿す。年八十三。

おちやーのーみづ 御茶水【名】■昔、徳川將軍の茶事に用ひし水。次條參照。■〔地〕次條の略。

おちやのみづーかは 御茶水川【名】〔地〕東京の神田川を、駿河臺と昌平坂との邊にて呼ぶ稱。斷崖壁立、樹木水をおほひて風景甚だ佳、詩人は小赤壁といふ。今、高く一橋を架し、御茶の水橋といふ。昔、この崖岸の下に寒泉湧出し、徳川將軍の御茶の水に供せられたり。御茶の水。

おちやのゆーぶぎやう 御茶湯奉行【名】武家時代の職制の一。將軍の諸家に臨む時、諸家にて臨時に命じて、將軍に參らする茶の事を取扱はしめしもの。

おちやーひき 御茶挽【名】御茶を挽きたる藝・娼妓。「御茶を挽く」參照。

おーちやびん 御茶瓶【名】少女の髮の結ひ方の一。前髮を高く前に押出し、後の髷と合はせて、その形、茶瓶の手の如くにしたるもの。ちやびん。

おちやびん-つき 御茶瓶附【名】妻を連れて遊廓をひやかす男。〔遊廓の語〕

おちやーまめ 御茶豆【名】豆茶(ちやめ)にする大豆。大豆中の最も下等なるもの。

御茶豆にもならぬ【句】何の効果も無き譬。〔俚語〕

おーちやや 御茶屋【名】■貴人の茶室の建物。蕪村「花火せよ淀の御茶屋の夕月夜」■おちやしよ(御茶所)に同じ。■ちやや(茶屋)を親しみていふ稱。

おーちやる【動四自】『御出でなさるの訛。おじやると書くは誤なり』■有らる。居たまふ。どざる。おりやる。〔俚語〕■出かけらる。來たまふ。行きたまふ。どざる。〔俚語〕俗語「琉球へおちやるなら草鞋(わらじ)はいておちやれ、琉球は石はらこいし(小石・戀し)原」

おーちやれ【名】おじやれを見よ。

おーちやうーべい【名】おべんちやらを云ふ。〔信濃國の方言〕

おーちよくろ 御直廬【名】■ちよくろ(直廬)の敬稱。■次條の略。

おちよくろーのーやく 御直廬役【名】おものぶぎやう(御物奉行)に同じ。

おちよてい【名】たきぎ(薪)を云ふ。〔甲斐國の方言〕

おちよーぶね 御千代船【名】『俚言集覽に、「ぼちやぼちやのお千代」といふより、この名目ありといへり』ふなまんぢゆう(船饅頭)に同じ。柳樽「おちよぶね沖まで漕ぐはなじみなり」「の語」

おーちよぼ【名】十五六歳までの下婢。〔京都の語〕

おちよぼーからげ おちよぼ紮【名】ぢんぢん

ぼしをり（ちんぢん端折）を云ふ。おしよぼからげ。〔大阪の語〕

おちよぼぐち おちよぼ口【名】女・小供などの口の、小くかはゆらしきもの。〔俚語〕

おぢよろ 御女郎【名】はなよめ（花嫁）を云ふ。〔伊豆國の方言〕

おちーねる 落居る【動上一自】一心鎮まる。安心す。〔おとし据うに對して〕〔古語〕源氏「御心おちねたまひぬ」二信ずる。うけがふ。道理ありと思ふ。〔古語〕大鏡「おちねぬことも侍りけり」

おつ 乙【名】一十干の一。きのと。二第二位。次位。下。次。（甲に對して）三〔音〕樂器の音調の、下げて低くするもの。（甲（カ）に對して）四能（ガ）の小鼓の、「ポ」と打つ打方。

乙の節【句】旗竿の節を下の方より數へて、二つ目・四つ目等、すべて偶數にあたるもの。（甲の節に對して）

おつ 落つ・墜つ・墮つ【動上二自】一重みのために、急に低き方へ移動す。さがる。おる。降（フ）る。散る。二はまる。おちいる。「謀におつ」三わるくなる。劣る。四衰ふ。落目になる。おちぶる。源氏「何事につけても、末になればおちゆくけぢめこそ、易くはべるめれ」五無くなる。去る。除く。減ず。「風おつ」「癘（リヤク）おつ」「評判おつ」「力おつ」六負けて逃ぐ。「城よりおつ」七死ぬ。斃る。「命おつ」「鳥おつ」八歸す。わがものになる。「入札がおつ」九おちつく。「腑におつ」十きまる。決著す。歸著す。「重罪におつ」十一ちつる。映ず。「夕陽水におつ」新古今「冬がれの森の朽葉の霜の上におちたる月の影の寒けさ」十二落第す。合格せず。十三列より離る。落伍す。十四城など滅さる。おちいる。陷落す。十五洩る。脱落す。〔古語〕萬葉「山ごしの風を時じみ寒（ス）る夜おちず家なる妹をかけてしぬびつ」十六罪に伏す。白狀す。今昔「あながちに問ひければ、つひに落ちていはく」十七墮落す。古今「名にめでてをれるばかりぞをみなへし吾おちにきと人にかたるな」十八精進（シヤウジン）を止む。土佐「舟君、せちみす。精進物（モノ）なければ、午の時より後に、楫取の昨日釣りたりし鯛に、錢なければ、米（ネ）をとりかけて、おちられぬ」十九〔商〕簿記にて、半期決算の際、彼我の勘定が正しく符合す。廿締められて、一時假死す。

おつ 【貌】普通とは異なるさま。奇妙。奇態。おつりき。風がはり。妙。異（イ）。へん。〔俚語〕『其れはおつだ』浮世風呂「此の女の詞、おつに訛るなり」膝栗毛「おつな手つきをして、おめえ、何をする」

おづ 怖づ【動上二他】ひるむ。おそる。おどろく。起「恐驚、オヂヒシ」

おつ 【感】にはかに驚きたる時又は氣の附く時などに發する聲。

おつ 押【接頭】おし（押）の訛。「おっ取る」「おっ立つ」

おついう 乙由【名】〔人〕なかがはおついう（中川乙由）を見よ。

おつう 乙【副】奇妙に。奇態に。〔俚語〕

おづ-おづ 怖づ怖づ【副】恐れつつ。怖る怖る。おそれながら。おぢおぢ。卷懸「流罪の身ともならばいかがせんとて、おづおづ申す」

おっ-かあ 【名】『お（御）・か（母）の訛』一はは（母）を云ふ。〔關東の方言〕二『父がその子の前にて妻を呼ぶに用ふるに本づく』つま（妻）を云ふ。〔關東の方言〕

おっ-かかる 押掛る【動四自】一物によりかかる。二なんなんとす。殆んど近づく。天の網島「三十に押っ掛かり、勘太郎・おすゑといふ六つと四つの子の親」

おっ-かき 燠搔【名】『おきかき（燠搔）の音便』ふのう（十能）を云ふ。〔關西の方言〕

おっ-かく 追掛く【動下二他】おひかく（追掛く）の訛。謠曲「敦盛」「うしろより、熊谷次郎直實、のがさじとおっかけたり」

おっ-かけ 追掛【名】一追ひかくること。〔俚語〕二ひき續きて事を爲すこと。〔俚語〕三辻待（マチ）をして客をひくこと。〔人力車夫の語〕

おっ-かけ-おっかけ 追掛追掛【副】一おひかけおひかけて。〔俚語〕二ひきつづきひきつづきて。おっかけひっかけ。〔俚語〕

おっかけ-ずり 追掛摺【名】『おひかけずり（追掛摺）の訛』おひずり（追摺）に同じ。〔俚語〕

おっかけ-つぎ 追掛繼【名】〔建〕木材の繼手（ツギ）の一。横面より栓（セン）を打込みて締めつくるもの。胴栓（ドウセン）。

おっかけ-ひっかけ 【副】おっかけおっかけ（追掛追掛）に同じ。

おっ-かじめる 押かじめる【動下一他】『おっ（押）は接頭語』いぢめる。虐待す。かっかじめる。〔東京の俚語〕浮世風呂「いんにやさ。おまへまでが、おっかじめるこたあねえはな」

おっかご-の-き おつかご木【名】〔植〕ぬるぜ（白膠木）を云ふ。〔上野國・信濃國の方言〕

おっ-かない 【形】『おお恐（ヒ）甚（ナ）しの訛。「おお」は感嘆詞』おそろし。こはし。〔關東の方言〕「と。〔俚語〕

おっかな-びっくり 【名】怖る怖る事をなすこと。

おっ-かぶせ 令押被【名】『おっ（押）は接頭語』ごまかして、つまらぬ物をおしつくること。僞物を巧みに賣りつくること。〔俚語〕萬葉千紅「財の源、禍の湊と題せしは、學而第一のおっかぶせなり」

おっ-つかひ 御使【名】つかひ（使）の敬稱。御使者。狂言（ごちはやれ）「愚僧にも參るやうにと、お使でござったほどに」

おつかひばん 御使番【名】つかひばん（使番）の敬稱。

おっ-かぶさる 押被さる【動四自】『おっ（押）は接頭語』かぶさる（被さる）を强めていふ語。浮世風呂「つむりの上へ、髻がおっかぶさって居りましたが」

おっ-かぶせる 押被せる【動下一他】『おっ（押）は接頭語』かぶす（被す）一二三四を强めていふ語。〔東京の俚語〕

おっ-かへす 押返す【動四他】『おっ（押）は接頭語』かへす（返す）を强めていふ語。

おっ-がみ おつ髪【名】『怖しき髪の義かといふ。又、小（ヲ）攝（ツカ）の義といふ說によれば、をの假名なり』頭髪の、久しく剃らずして、長く延びたるもの。著聞「髪おつがみなる法師」

おっ-つき 御附【名】侍り居る人。侍人。

おっ-つぎ 御次【名】一貴人の居間の次の室。二上記の室に仕ふる下婢。佛具・膳部道具などの事を掌る。（お末・お側・お仲居に對して）

おつき-あふぎ 御月扇【名】黄、御繪所の家家より、月ごとに調進して、禁裏に納めたる扇。

おっきな 【句】おほきな。大いなる。膝栗毛「とてものことに、おっきなもんで、お積りにしましょぢやないか」

おっ-く 【名】くすり（藥）に同じ。〔小供の語〕

おっ-くだす 追下す【動四他】おひくだす（追下す）の訛。謠曲（春屋天狗）「驕れる平家を、西海に追っくだし」

おっ-くふ 億劫【名】おくふ（億劫）の訛。

おっ-つくり 御作【名】けしやう。みじまひ。粉飾。〔俚語〕

おっ-くりやる 【動四他】『おっ（押）は接頭語』くりやる（異りやる）を强めていふ語。

おっ-つけ 御汁【名】一麵類（ルイ）のつけしる。二味噌汁。おみおつけ。

おっ-つげ 御告【名】一つげ（告）の敬稱。二神佛の託宣。示現。狂言（六人僧）「後世（セ）を願へ」とあるお告げであらうぞ」

おっこ 【名】〔植〕いちゐ（一位）を云ふ。〔アイヌの語〕

おっこち 落っこち【名】『おっこちる の假體言』男女の、ひそかに通ずること。私通。〔東京の俚語〕

おっこち-しぼり おっこち絞【名】天保年間に流行せししぼりぞめ。藍・鼠などの色地の所所に、花形などを、紅・紺などにて染め出したるもの。

おっこちる 落っこちる【動上一自】おっ（落つ）に同じ。〔東京の俚語〕

おっこつ-たいけん 乙骨耐軒【名】〔人〕江戸の儒者。名は寛、字は栗甫。彦四郎と稱す。學問該博、小說・院本に至るまで通ぜざるなく、殊に詩を能くし、甲府徽典（キテン）館の學頭となり、後、監察となる。嘉永六年歿す。年五十四。

おっことす 落っことす【動四他】おとす（落す）に同じ。〔東京の俚語〕

おっ-とふ 億劫【名】おくふ（億劫）の訛。

おっ-さぐ 押下ぐ【動下二他】『おっ（押）は接頭語』さぐ（下ぐ）を強めていふ語。おしおろす。 謠曲（鳥追船）「主をおっさげて、下人に使ふべきいはればしあるか」

おっ-さまに 追様に【副】おひざまに（追様に）の訛。 平家「心少しおとし据ゑて、追様にこそ參り候はめ」

おっ-さん【名】Ⅰ『御師さんの訛』僧侶を親しみて呼ぶ稱。（關西の方言）Ⅱ『おぢさんの訛』老人を親しみて呼ぶ稱。おやっさん。（關西の方言）

おっ-しやる 仰しやる【動四他】おほせらる。のたまふ。おしやる。（俚語）

おっ-しゆ-がふかく 乙種合格【名】徴兵檢査に合格したる場合の、甲種のに比ぶれば、體質やや劣れるもの。丙・丁・戊の三種は不合格とす。

おっ-しゆ-こくさいとうろくぼ 乙種國債登錄簿【名】國債登錄簿の一種。別に示せる取扱店に備へ置きて、證券を發行したる國債を登錄するもの。（甲種國債登錄簿に對して）

おっ-しゆ-しやうげふがくかう 乙種商業學校【名】商業學校の程度やや低きもの。修業年限は三個年、入學資格は十二歳以上とす。（甲種商業學校に對して）

おっ-しゆ-しやうせんがくかう 乙種商船學校【名】商船學校の程度やや低きもの。修業年限は二個年以内。（甲種商船學校に對して）

おっ-しゆ-のうげふがくかう 乙種農業學校【名】農業學校の程度やや低きもの。修業年限も入學資格も乙種商業學校と同一。（甲種農業學校に對して）

おっ-しよ-さん 御師匠様【名】『御（オ）師匠（シショウ）様（サン）の訛』手習師匠又は藝道の師匠の敬稱。

おっ-すがふ 追縋ふ【動四他】おひすがふ（追縋ふ）の訛。 蟬丸「打ちかけ打ちかけ、息をもつかず遁ぐる敵におっすがひ」

おっ-そろしい 恐しい・怖しい【形】おそろし（恐し）Ⅱの訛。

おっ-だい 乙第【名】Ⅰしもやしき。（甲第に對して）Ⅱ支那にて、進士に及第したる者のうち、成績のやや劣れるもの。（甲第に對して）

おっ-たくる 押たくる【動四他】『おっ（押）は接頭語』ひったくる。强奪す。 吉野忠信「いざこの記念おったくって」

おっ-たつ 押立つ【動四自】『おっ（押）は接頭語』たつ（立つ）を强めていふ語。（俚語）

おっ-たつ 押立つ【動下二他】『おっ（押）は接頭語』たつ（立つ）を强めていふ語。（俚語）

おっ-たつ 追立つ【動下二他】おひたつ（追立つ）の訛。

おっ-たて 追立【名】おひたて（追立）の訛。

おっ-たて 【名】しもばしら（霜柱）を云ふ。（信濃國の方言）

おっ-たて-じり 押立尻【名】尻の落附かぬすわりかた。（俚語）

おっ-たて-じる 追立汁【名】にはか造りの汁。 雙生隅田川「手際は古今唐（カラ）の物、敵は糠味噌・追っ立汁」

おっ-たて-だるき 押立棰【名】（建）神社・佛閣などの切妻（キツマ）の上部にある棰。地棰（ヂルキヅ）及び飛簷棰（ヒエンダルキ）に比して、勾配急なり。枝外棰（シダルキ）。

おっ-たまげる 押魂消る【動下一自】『おっ（押）は接頭語』たまげる（魂消る）を强めていふ語。ぶったまげる。（俚語）

おっ-ち【名】おし（啞）を云ふ。（東京附近の方言）

おっ-ちぬ 押死ぬ【動奈變自】『おっ（押）は接頭語』しぬ（死ぬ）を强めていふ語。

おっ-ちよこ-ちよい【名】輕輕しきこと。おちつかぬこと。ちよこざい。（俚語）

おっ-つくねる 押揑ねる【動下一他】ともかくもまとまりを附く。無理に落著せしむ。（俚語）

おっつ-がみ【名】おつがみ（おつ髪）の誤か。「枝におろす柳が髪やおっつがみ」

おっ-つく 追附く【動四自】おひつく（追附くの）訛。

おっ-つけ 押附【名】花合せにて、仲間の者が、みな落ちて、ただ一人殘りたるとき、落ちたる人の落貧（ナヂ）を受取りて、引くことをやむること。

おっ-つけ 追附【副】Ⅰ間もなく。遠からず。おって。 浮世風呂「おっつけなほりまさあなあ」Ⅱすぐ。ぢき。

おっ-つける 押附ける【動下一他】おしつく（押附くの）の訛。

おっ-つめる 追詰める【動下一他】おひつむ（追詰む）の訛。

おっ-て 追手【名】おひて（追手）Ⅱの音便。

おっ-て 追而【副】『追ひての音便』Ⅰおっつけ（追附）Ⅱに同じ。Ⅱなほなほ（尙尙）に同じ。（手紙などに用ふ）

おって-がき 追書【名】なほなほがき（尙尙書）に同じ。

おっと【名】おと（音）の便。 狂言（柿山伏）「やい、そこな者、柿をくて恥かしくば、御免なれと云うて、おっとせでいね」

おっと【名】（動）おっとせい（膃肭臍）の略。

おっと【名】『次條の語意の轉じたるもの、即ち盃に注（ツ）ぐ時、溢れんとするに氣附きて止（ヤ）むる意』さけ（酒）を云ふ。（東京附近の小供の話）

おっと【感】急に心附きて動作を中止し、又は他に轉ずる時などに發する聲。

おっと由兵衛、革（カワ）の巾著【句】『よしと受合ふ意を由兵衛といふ人の名の由にいひかけて、承諾の意を示し、腰に下ぐる革の巾著の破損の恐なきを、氣づかひに及ばずといふ意を示すに用ひたるなり』わが引受けたる上は、心配に及ばず。（俚語）

おっと-きた【感】『きたは來たの意、即ち待受けたの意』引受くる意の掛聲。よしきた。おいきた。（俚語）

おっとせい 膃肭臍・膃肭獸【名】（動）『もとアイヌ語。但しその幼時に限りての名稱。成長したるものは、ウネウ又はネプと呼び、老大なるをオンネプと呼ぶ』鰭脚（キキ）類に屬する哺乳動物。身體長く、頭部は小く圓く、眼大きく、脣薄く、上脣に剛く疎らなる鬚あり。牡は七八尺に達すれども、牝はその半ばに過ぎず。體色は年齢によりて一樣ならざれども、十分成長せるものは、紫褐色を呈す。北海に產し、十月末、潮流と共に、我が國近海に來る。肉は食用及び藥用に供せられ、毛皮は大いに珍重せらる。おっと。かいくじん。

（いせとっお）

おっとせい-ゆ 膃肭臍油【名】膃肭臍の肋骨脂（ロクシ）を桶に入れ、自然にとけ出づる液油を採集したるもの。惡臭あり、燈用に供せらる。

おっ-とつ【貌】落附きたるさま。おとなし

おっ-とほし 押通【名】おっとほすこと。ぶっとほし。「通す」の訛。

おっ-とほす 押通す【動四他】おしとほす（押通す）の訛。

おっと-まかせ【感】まっかせに同じ。（俚語）

天の網島「△商人が、畫中に寢た振を見せては、また機嫌が惡からう。△おっとまかせと、むっくと起き」

おっ-とり 押取【副】その儘にて。即座に。（俚語）「の方言」

おっ-とり【副】ゆるゆる。ゆうゆう。（駿河國）

おっ-とり【貌】おほっとりの略。（俚語）

おっとり-がたな 押取刀【名】にはかなる場合に、急ぎて手に取る刀。

おっ-とりかへす 押取返す【動四他】『おっ（押）は接頭語』とりかへす（取返す）を强めていふ語。

おっ-とりこむ 押取籠む【動下二他】『おっ（押）は接頭語』とりこむ（取籠む）を强めていふ語。おっとりまはす。

おっ-とりそへる 押取添へる【動下一他】『おっ（押）は接頭語』とりそふ（取添ふ）を强めていふ語。

おっ-とりなほす 押取直す【動四他】『おっ（押）は接頭語』とりなほす（取直す）を强めていふ語。 狂言（じせんた）「尺八をおっとりなほし」

おっ-とりのぶ 押取延ぶ【動下二他】『おっ（押）は接頭語』とりのぶ（取延ぶ）を强めていふ語。 謠曲（鐵輪）「大太刀を櫛長におっ取りのべて」

おつとり

おっ-とりまく 押取巻く【動四他】『おっ(押)は接頭語』とりまく(取巻く)を一層強めていふ語。

おっ-とりまはす 押取廻す【動四他】おっとりこむ(押取籠む)に同じ。傾城酒呑童子「十人ばかり、むらむらと、手ん手に割木提げ提げおっとりまはす」

おっ-とる 押取る【動四他】『おっ(押)は接頭語』とる(取る)を強めていふ語。謠曲(安宅)「金剛杖をおっ取って散散に打擲す」

おっ-とれらいと 《英Oltrelite》【名】(鑛)『佛國アルダンヌ(Ardennes)山脈中のオトレス(Oltres)等に多く產するよりいふ』等斜晶系に屬する鑛物。成分は含水鐵礬土(バン)の硅酸化合物。雲母(ウンモ)に似て、色は暗灰・綠灰等をなす。

おっ-ぱい 【名】『一杯(パイ)の訛』ちち(乳)を云ふ。(幼兒の語)

おっ-ぱしる 押走る【動四自】『おっ(押)は接頭語』はしる(走る)を一段強めていふ語。うっぱしる。つっぱしる。

おっ-ぱなす 押離す【動四他】『おっ(押)は接頭語』はなす(離す)を一段強めていふ語。追ひやる。放ちやる。

おっ-ぱめる 押塡める【動下一他】『おっ(押)は接頭語』はむ(塡む)を強めていふ語。

おっ-ぱらふ 追拂ふ・逐拂ふ【動四他】おひはらふ(追拂ふ)の訛。

おっ-ぴらく 押開く【動下二自】『おっ(押)は接頭語』ひらく(開く)を強めていふ語。雪女五枚羽子板「一夜押っぴらけて、四方の春空のかんばせ、にこやか、ふくやか」

おっ-ぴらく 押開く【動四他】『おっ(押)は接頭語』ひらく(開く)を強めていふ語。あく。

おっ-ぴろげる 押擴げる【動下一他】おしひろぐ(押擴ぐ)の訛。

おっぷ 【名】とうふ(豆腐)を云ふ。(幼兒の語)

おっ-ぷせる 押伏せる【動下一他】おしふせる(押伏せる)の訛。

おっ-ぺし-あんどん 押壓行燈【名】ちゃうちん(提灯)を云ふ。(常陸國の方言)

おっ-ぺしよる 押壓折る【動四他】一氣に押附けて折る。へしをる。(俚語)

おっぺす

おっ-ぺす 押壓す【動四他】おしへす(押壓す)の訛。

おっ-べ-だて 御つべ立【名】『つべとは、尻のことにて、尻を立てて禮拜するゆゑにいふ』十一月二十八日即ち親鸞(シンラン)上人の命日に、東本願寺に禮拜すること。

おっ-つぼ 御壺【名】一つぼ(壺)の敬語。二壺に入れて膳に載せたる食物。おもに、あへものを盛る。三禁中の局(ツボネ)の敬稱。

おっぽ-じ 乙寶寺【名】越後國北蒲原(カンバラ)郡乙(オツ)村に在る眞言宗智山派の寺。行基菩薩の開基と傳ふ。本尊は乙大日(ダイニチ)。

おっ-つぼね 御局【名】宮中の典侍・權典侍・掌侍・權掌侍・命婦・權命婦などの稱。おつぼや(御部屋)(二)參照。

おっつぼ-の-めしつぎ 御壺召次【名】院の御所の庭の雜事をつとめ、歌の會の時、御硯の水を供すること等をつとめし役。

おっぽり-だす 押投出す【動四他】一投げいだす。おっぽる。(俚語)二妻を離緣す。(俚語)

おっ-ぽる 押投る【動四他】『おっ(押)は接頭語』ほうる(投る)を強めていふ語。(俚語)

おっぽろ-がみ おっぽろ髮【名】亂れ垂れたる髮。井筒業平河內通「廣國が一子幸若丸、あけて八つのおっぽろ髮」

おっ-つま 御摘【名】つまみぐひ(摘食)を云ふ。(女の語)

おっ-つむ 御頭【名】つむり(頭)を云ふ。(小供語)

おつむ-てんてん 御頭手ん手ん【名】赤子が、兩手にて、わが頭を輕く打つ戲れ。つむりてんてん。(俚語)

おつめ-しゆ 御詰衆【名】一室町時代に、將軍の幼稚なる間、殿中の宿衞を命ぜられたる侍。二德川時代に、雁間(ガンマ)詰の諸侯の中にて、將軍の近侍を命ぜられたるもの。藩翰譜「おつめしゆの列に加、らる」

おっ-つめた 御冷【名】おひや(御冷)に同じ。(女の語)

おっ-つもり 御積【名】つもり(積)四の敬稱。

おっ-や 乙夜【名】いつや(乙夜)に同じ。

おっ-つゆ 御汁【名】しる(汁)を丁寧にいふ語。(女の語)

おつりき

おつ-りき 【貌】おつに同じ。(俚語)

おつる-うめ 落梅【名】支那の落梅(ラクバイ)の曲。謠曲(蟻)「うたへや、うたへ、折る柳、落つる梅」

おっ-て 御手【感】相撲(スマウ)の時のかけ聲。おてつ。狂言(飛越新發意)「やあ、お手、まゐったの」

おっ-てい 淤泥【名】どろ。泥土。

おてい-さま 御父樣【名】ちち(父)の敬稱。(京都の公卿及び坊官・眞宗の寺院などの家族の語)

おっ-ていり 御出入【名】でいり(出入)三の敬稱。狂言(居猪)「誰殿と申して、おていり致すお方がござる」

おっ-てうど 【名】おてうど(御調度)の訛。

おてうし-たて 御銚子立【名】臺所にて、銚子・提子(ヒサゲ)を載せおく四本足の臺。

おてうし-ひさげ-ぶぎやう 御銚子提奉行【名】武家時代の職制の一。將軍の諸侯の家に臨む時、その諸家にて臨時に命じて、銚子などの事を掌らしめしもの。

おっ-てうしもの 御調子者【名】てうしもの(調子者)を見よ。

おっ-てうち 御手打【名】てうち(手打)二三の敬稱。「おてうちの蕎麥」蕪村「おてうちの夫婦なりしを衣がへ」

おっ-てうづ 【名】おてうど(御調度)の訛。

おっ-てうづ 御手水【名】てうづ(手水)の敬稱。

おてうづ-の-ま 御手水間【名】清涼殿の西廂(ヒサシノ)にありて、天皇の每朝御手水を召されし所。

おてうづ-ぶぎやう 御手水奉行【名】武家時代の職制の一。將軍の諸侯の家に臨む時、その諸侯にて臨時に命じて、御手水のことを掌らしめしもの。

おっ-てうづ-やく 御手水役【名】武家時代に、主君に御手水を參らすことをつとめし役。大鷹鈍「主人の、矢とあらば、御てうど持ちて參り候と申附くべし」

おてき

おっ-てき 御敵【名】『てき(敵)二を見よ』二遊女の對方(カタヒ)。三いろ。まぶ。情夫。(京都・大阪の語)

おっ-てき 御出來【名】しゆもつ(贓物)を云ふ。できもの。(小供の語)

おて-ぐみ 御手組【名】將軍の手づから番組を作ることなるべし。次條參照。

御手組の犬追物(フモノ)【句】將軍家の催す犬追物。

おっ-てこ 御でこ【名】高く張出でたる額つき、又その人。「稱。

おっ-てだま 御手玉【名】てだま(手玉)二の敬

おてっ 【感】おて(御手)に同じ。狂言(鞍掌)「行司を召され、心得た。おてっ」

おっ-てつけ 御手附【名】一てつけ(手附)の敬稱。二歌ガルタ遊びの時、過ちて、他人の牌(ハイ)に手を觸ること、又その罰として引取るべき牌。

おてっ-つ 【感】おてっを強めていふ語。狂言(文相撲)「行司をせえ、畏まってござる。おてっつ」

おっ-てて 【名】乳母の夫。春門松「お乳(チ)が肩ぐま、おててが日傘、肩で風切る山崎に」

おっ-ててこ 【貌】てこてこに同じ。(俚語)

おっ-ててこ 御木偶【名】一享保・元文の頃行はれし見世物の人形。笊(ザル)などを伏せて、明くる度ごとに、さまざまに變化せしめしもの。二次條の略。

おってこ-しばゐ 御木偶芝居【名】一おってこを用ひて興行せし人形芝居。おってこ。二『もとおってこの人形芝居より變化せしものなるよりいふ』江戸の芝居の、三座以外のもの。小き芝居。緞帳(ドンチヤウ)芝居。おってこ。芝居。(俚語)

おっ-てなが 御手長【名】宮中の女官の、御膳を御次の間まで持行きて、御宮仕の人に渡すことを掌りしもの。「敬稱。

おっ-てのうち 御手內【名】てのうち(手內)の

おっ-てのもの 御手物【名】てのもの(手物)の敬稱。(俚語)「じ。

おっ-てまし 御出座【名】いてまし(出座)に同

おっ-てまへ 御手前【名】てまへ(手前)四の敬稱。(多くは茶ノ湯にいふ)

おてまへ 御手前【代】同輩に對する第二人稱。そなた。きみ。てまへ(手前)參照。〔室町時代以後の語〕

おてまり 御手鞠【名】てまりあそび(手鞠遊)の敬稱。

おでん 御田【名】『田は田樂の略』一きのめでんがく(木芽田樂)に同じ。〔俚語〕二蒟蒻(コンニャク)芋・はんぺんなどを煮こみにした食品。〔俚語〕

おでん-かんざけ 御田燗酒【名】蒟蒻のおでんと燗酒と、又それを賣る商人。

おてんこ 【名】そでなし(袖無)を云ふ。〔京都の語〕

おてんしゅ-ばん 御天守番【名】てんしゅばん(天守番)の敬稱。

おてんす 御殿司【名】社殿の事を掌る僧。「社僧。

おてんたら 【名】おべんちゃらを云ふ。〔信濃國の方言〕「〔俚語〕

おてん-つく 【名】おてんば(御轉婆)に同じ。

おてんと-さま 御天道樣【名】てんたう(天道)一二三の敬稱。〔俚語〕

御天道樣に石【句】『天に向ひて石を投ぐれば、天に當らずして、落ちて己が身に當るに譬へていふ』みづから禍を招くこと。〔諺語〕

おてんば 御轉婆【名】女の出過ぎもの。身だしなみのなき女。なまいきなる女。おてんつく。いたづらむすめ。

おてもと 御手元【名】一てもと(手許)の敬稱。二はし(箸)を云ふ。〔豐前國・豐後國の方言〕

おてら 御寺【名】一てら(寺)の敬稱。二寺の住職の敬稱。おてらしゅう。おてらさま。三僧侶の敬稱。おてらしゅう。おてらさま。『冥途飛脚』「鎌田村の御道場へ、京のお寺の御くだり、毎日のお讃談」四『寺にては、檀家よりの贈物に對して、返禮するに及ばざるよりいふ』他より物を貰ひたるに對して、返禮せぬこと。もらひばなし。〔俚語〕「に同じ。

おてら-さま 御寺樣【名】おてら(御寺)一二三

おてら-しゅう 御寺衆【名】前條に同じ。

おてら-すりこぎ 御寺擂木【名】『寺院にては、味噌をすること多くして、擂木のすりへらされてあるより譬へていふ』一世なれて圓滑なる人。(善きにも惡しきにも云ふ)〔俚語〕二よく物の減ること。〔俚語〕

おと 音【名】一物の振動によりて起り、空氣を傳はりて耳に聞ゆるもの。こゑ。ね。音聲。二音づれ。たより。おとさた。〔古語〕後撰「この花咲きなん時、必ず消息せんと云ひけるを、おとなく侍りければ」

音に聞く【句】評判に聞く。人づてに聞く。金葉「おとにきく高師のはまのあだ波はかけじや袖のぬれもこそすれ」

おと 弟・乙【名】一おとうと(弟)に同じ。(兄(セ)に對して) 女殺油地獄「おとのおでんめは、二つ子」二いもうと(妹)に同じ。傾城反魂香「乙の姫君いてふの前は」

弟待つ雪【句】「友待つ雪」に同じ。

おと 乙【名】一おとこ(乙子)の略。二能の(ケ)の假面(ケ)の一。女に用ふ。

乙は血の緒【句】末子は殊に愛らしきものなること。〔諺語〕

おと 乙〔接頭〕一次なる・末のなどの意。「おと子」「おと矢」二『末の子は殊に愛せらるるものなるよりいふ』愛らしき・美しきなどの意。〔古語〕「おと嫁」「おと姫」「おと棚機」

おと 於菟【名】〔動〕一『左傳の宣公四年の條に「楚人謂二乳穀一、謂二虎於菟一」とあり』とも虎の異名。二ねこ(猫)の異名。

おと 大門【名】大なる出入口。(小門(ガド)に對して)〔古語〕萬葉「ともし火の明石のおとに入らむ日や漕ぎわかれなむ家のあたり見ず」

おと-あはせ 音合【名】地震・雷などの時、雉の鳴くこと。〔俚語〕

おと-いもうと 弟妹・乙妹【名】次の妹。幼き妹。名義抄「小妹、オトイモウト」

おとう 【名】かはや(厠)を云ふ。〔女の語〕

おと-とう 御父【名】ちち(父)の敬稱。〔小供の語〕

おと-うかし 弟猾【名】〔人〕兄猾(エウカシ)の弟。兄と共に倭(ヤマト)の菟田縣(ウダガタ)の酋長。神武天皇の東征したまふや、兄猾は兵を擧げて抗し、弟猾は降服して、謀略最も勉め、平定の功を奏せしめ、その功により縣主(カタシ)に任ぜらる。

おとう-さま 御父樣【名】ちち(父)の敬稱。

おとう-さん 御父樣【名】前條の音便。

おとう-づき 弟月【名】おとづき(弟月)の延。おとどづき。

おと-うと 弟【名】『おとひと(弟人)の音便』あとより生れたる同胞の男。おとと。おと。おとひと。(上古は同胞の女にもいひて、いもうと(妹)にも用ひたり) 紀寛喜「そのおとうと玉依姫をとどめて」

おとうと-ご 學の弟【句】門人。弟子(シデ)。

おとうと-ご 弟御【名】前條の敬稱。

おとうと-でし 弟弟子【名】同じ師匠のもとに後より來りし弟子。おととでし。(あに弟子に對して)「弟。義弟。

おとうと-ぶん 弟分【名】かりに定めたる弟。

おとうと-よめ 弟嫁【名】弟の妻。おとよめ。おととよめ。(兄嫁に對して)

おとう-ゑ 御頭會【名】『年頭の法會の意』毎年正月十三日に甲斐國身延山(サンノウ)にて行ふ法會。

おど-おど 【副】『おどは怖づ又は驚くの意』恐をいだきて、心の落ちつかぬさま。

おど-か 【名】〔動〕『とかは、たうか(稻荷)の訛』きつね(狐)に同じ。子守歌(京都の)「せどの柿の木のその下で、おとかに、ちよいとつままれて」

おどかし 嚇【名】おどかすこと。おどし。

おどかす 嚇かす・威かす【動四他】おどす(威す)に同じ。

おと-がね 音金【名】矢を射るとき、響の出づるために、弓の末弭(ハズ)の少し下にて、あひうちに當るところの弦の中に包みたる銅又は鉛。

おとがひ 頤【名】一下のあぎと。口の下のところ。あご。あぎ。字音「おとがひのしたを、とりかかりて食ひて」二わるくち。あくたい。〔俚語〕 謠門松「蹈まれてさへ、あの頤、人を蹈んだら、どう有ろ」

頤が落ちる【句】一寒氣のために、わなかるるを誇張していふ語。枕「寒きことといとわりなく、おとがひなども皆落ちぬべきを」二味の旨きことを誇張していふ語。あごがおちる。おとがひがはなる。〔俚語〕 狂言(柿山伏)「さても、さても、うまい柿ぢや。おとがひが落ちるやうぢや」三多辯なる譬。

頤が離る【句】前條三に同じ。 狂言(柿賣)「おとがひの離るるほど甘うござる」

頤で使ふ【句】「頤(コ)で使ふ」に同じ。

頤で蠅を逐ふ【句】甚しく瘦(セ)衰へて、元氣銷(セ)す。(多くは空腹又は好色の結果などにいふ)あごで蠅を逐ふ。 狂言(牛馬)「牛と申すものに田をすかせ、よねを作り、供御(クゴ)を參上申して、その上にこそ、駒くらべも、やぶさめも、入りませうずれ。何も參らずば、おとがひで蠅を逐ふでござらう」

頤の雫【句】「頤(ガ)の雫」に同じ。

頤をきく【句】次條に同じ。〔俚語〕 雜八卦柱曆「まだおとがひをききをるかと、頬げた三つ・四つくらはせて」

頤を叩く【句】ものいふ。廣言す。しゃべる。おとがひをきく。〔俚語〕 膝栗毛「こなさん、えらひ頤をたたかんすな」

頤を解く【句】『かい(解)頤の訓讀』甚しく笑ふ。おとがひをはなつ。あごをはづす。あごの掛金を外す。

頤を放つ【句】前條に同じ。 字音「諸人、おとがひをはなちて笑ひたるに」

頤を養ふ【句】口すぎをなす。餬口をなす。 豐年隅田川「頤養ふありがたしと、鬼が島でも、龍宮でも、遣る所へ、なぜ行かぬ」

おとがひ-づきん 頤頭巾【名】あごに掛くるやうに作りたる頭巾。御高祖(オコ)頭巾の類。 紅梅千句「袷のさきよりとがる秋風(安聲)、冬ちかし頤頭巾こしらへて(正聲)」

おとき 御齋【名】とき(齋)の敬稱。

おとき 音木【名】ひき放ちたる弓の、鳴る音の好き者。

おとぎ 御伽【名】一とぎ(伽)の敬稱。二せふ(妾)に同じ。〔俚語〕

おとぎき 音聞【名】Ⅰ音聲の響き聞ゆること。〔古語〕 躬恒集「いづこなる山にあるらんかりがねのおとぎき高くきこゆなるかな」 Ⅱ世のきこえ。うはさ。評判。〔古語〕 源氏「世の音ぎきも、あはつけきわざなれば」

おときき-やま 音聞山【名】〔地〕尾張國愛知郡彌富(いやと)村にある山。南に熱田の海見えて、景色佳し。 夫木「聲ばかり音きき山のほととぎす姿ゆかしきものにぞありける」

おとぎ-ごしやう 御伽小姓【名】幼主の遊び相手となる幼き小姓。 丹波與作「お伽小姓の頑是なし、十二三なが、手をそろへ」

おとぎ-ざうし 御伽草紙【名】〔書〕文正草子・鉢かづき等の如き、室町時代の草紙ども二十三種を集めたるもの。撰者詳かならず。二十三卷。一名、御伽文庫。

おとぎ-しばゐ 御伽芝居【名】御伽話の筋を芝居に仕組み、小供に觀せしむるもの。

おとぎ-しゆう 御伽衆【名】豐臣時代の職制の一。君側に近侍して、話相手を勤めしもの。

おとぎ-なし【形二】いとけなし(幼し)に同じ。〔古語〕 起「幼而、オトキナクテ」

おとぎ-ばうず 御齋坊主【名】境家の法會に赴き、御齋の供養を受くることを勤むる、位置ひくき僧侶。

おとぎ-ばなし 御齋話【名】僧侶が、齋(とき)即ち食物に關する話をすること。

おとぎ-ばなし 御伽話【名】Ⅰ人のつれづれを慰むる話。 Ⅱ傳說・口碑などに基づきて、幼兒を樂しましむるためにする話。かちかち山・桃太郎の類。童話。

おとぎ-ばふこ 御伽逗子・御伽婢子【名】天兒(カヤ)の一種。長さ一尺餘、頭部を白き帛にて包み、黑き絲を髮とし、前右に分けて、前方に垂したるもの。

おとぎばふこ 御伽婢子【名】〔書〕淺井了意の作れる假名草子。十三卷。

おとぎ-ぶんこ 御伽文庫【名】〔書〕おとぎざうし御伽草紙)に同じ。

おとぎ-ぼうこう 御伽奉公【名】妾のつとめをすること。〔俚語〕

おとぎり-さう 弟切草・小連翹【名】〔植〕金絲桃(ヒペリカム)科に屬する多年生の草。山野に自生す。高さ二三尺ばかり。葉は楡に似て狹く長し。夏・秋の頃、莖の末及び葉腋に、五瓣・黃色の花開き、秋、莢を結ぶ。種子は金瘡を治すといふ。おとぎりす。あぜむらさき。

おとぎり-す【名】〔植〕前條に同じ。

おとぎり-やなぎ おとぎり柳【名】〔植〕こりやなぎ(行李柳)に同じ。

おーどく 諚く【動下二自】Ⅰ『おほどく(大解く)の略』心にとりしまりなし。大らかにあり。〔古語〕 源氏「何事にも、あるに從ひて、心を立つる方もなく、おどけたる人こそ」 Ⅱしやれをいふ。滑稽をいふ。冗談をいふ。

おとくに 乙訓【名】〔地〕山城國八郡の一。郡役所を向日(むかひ)町に置く。

おとくに-がは 乙訓川【名】〔地〕山城國乙訓郡にある川。大枝山(オホエヤマ)より發して東南に流れ、向日岡(むかひをか)の西より南向し、淀川に合す。長さ約三里。

おとくに-じ 乙訓寺【名】山城國乙訓郡乙訓村今里にある眞言宗の寺。大慈山と號す。聖德太子の創建。本尊は弘法大師彫刻の神佛合體の像。一名、法皇寺。

おとくに-じんじや 乙訓神社【名】山城國乙訓郡乙訓村井ノ内(ウチ)にある式内の古社。祭神は火雷(ホノイカヅチ)神。別稱、角宮(ツノミヤ)。

おとくに-の-みや 弟國宮【名】繼體天皇のおはせし宮。その址は、今の山城國乙訓(トヲクニ)郡大原野村大字上羽(カミハ)より乙訓村大字井ノ内(ウチ)に亘れる邊なるべしとも、乙訓村今里の東なる明星野(ミヤウジ)なるべしともいふ。

おーどけ【名】おどくること。たはぶれ。しやれ。滑稽。

おどけ-うた おごけ歌【名】滑稽なる歌。ざれうた。俳諧歌。

おどけ-がほ おごけ顏【名】おどけたる顏つき。滑稽なるかほつき。

おどけ-ぐち おごけ口【名】おどけたる物言ひ。おどけたる話。じようだん。おどけごと。ざれごと。

おどけ-ごと おごけ言【名】前條に同じ。

おどけ-ごと おごけ事【名】おどけたる所作。滑稽なる所作。

おどけしばゐ おごけ芝居【名】おどけたる狂言を演ずる芝居。にはかしばゐ。

おどけばらず おごけ坊主【名】おどけをいふ坊主。滑稽坊主。

おどけ-ばなし おごけ話【名】おどけたる話。滑稽なる話。

おどけ-もの おごけ者【名】おどけをいふ人。滑稽をいふ人。 醒睡笑「おどけもの、緣を行きちがふとて、口を吸ふ」

おどけものばらひ おごけ者拂【名】無用の者を放逐すること。あはうばらひ。 甲陽軍鑑「輕薄にして役に立たざる者を、おどけ者拂ひになされ」 「同じ。

おどけ-ゑ おごけ繪【名】ざれ繪(戲繪)に

おと-ご 乙子・乙兒・弟子【名】Ⅰ末に生れたる子。すゑこ。末子(バツシ)。おと。 Ⅱおとづき(乙子月)の略。

乙子の祝【句】德川時代の年中行事の一。おとどのついたちの祝。

乙子の朔日(ツイタチ)【句】陰曆十二月一日、即ち乙子の餅を食ふ日。 風俗文選「許六、四季變「今朝からは、師走(シハス)とかや、乙子の朔日とて、節季候の來初むる日なり」

乙子の朔日の祝【句】「乙子の祝」に同じ。前條參照。

乙子の光は七光(カナヒ)【句】末子は、親の寵愛ことに深きものにて、家内にて並ぶ者なし。〔諺語〕 「同じ。

弟子の餅【句】かはひたりもち(川浸餅)に同じ。おともじ。〔俚語〕 Ⅱ織田信長が柴田勝家に贈りたる釜。

おと-づき 乙子月【名】『末子を乙子といふよりいふ』陰曆十二月の稱。おとづき。おとど。(太郎月に對して) 「同じ。

おとご-どうし 乙護童子【名】〔佛〕次條に

おと-ごぜ 乙御前・弟御前【名】Ⅰおたふく(阿多福)に同じ。おともじ。〔俚語〕 Ⅱ織

おとご-づき 乙子月【名】『末子を乙子といふよりいふ』陰曆十二月の稱。おとづき。おとど。(太郎月に對して) 「同じ。

おとご-どうし 乙護童子【名】〔佛〕『乙は若き意』法力に役使せられ、又は佛法を守護するために現示する童形の鬼神。乙護童子。保元「傳教大師の役使されし乙護法」

おと-ごほふ 乙護法【名】〔佛〕

おと-さた 音沙汰【名】たより。おとづれ。おんしん。おと。

おとし 落【名】Ⅰおとすこと。落下。 Ⅱ木製の火鉢の、灰を入るる所を、銅又はブリキなどにて製したる部分。おとしがけ。 Ⅲ鳥・獸などを陷れて捕ふる穴又は仕掛。 Ⅳ戶の棧(サン)に作りつけて、閉づる時、敲居の孔に差込む具。 Ⅴ落語などの終局の仕組。おち。〔俚語〕 Ⅵおとしぐち(落釘)の略。 Ⅶ著の略。 Ⅷおとしぐち(落釘)の略。 Ⅸ諧曲の節の、一段下げて謠ふところ。 Ⅹ寄席(ヨセ)の客の、中入後に來れるもの。その木戶錢は、下足番の收入となる定めなり。

落(オト)の話【句】おとしばなし(落話)に同じ。

おとし 戚・嚇【名】Ⅰおどかし(嚇)に同じ。 Ⅱかがし(案山子)Ⅲに同じ。

おとし 緘【名】をとし(緘)を見よ。

おとし-あな 落穴・陷穴・陷穽・穽・阱【名】Ⅰ人又は獸などを欺き誘ひて落し入るる穴。おとし。 Ⅱ他人を欺き苦しむる計略。「おとしあなに落す」

おとし-あみ 落網【名】魚類を陷(オチイ)れてすくひ捕ふる仕掛の網。種類多し。

おとしあみゐぎよげふ 落網類漁業【名】定置漁業の一。落網・上網・垣網等を、土俵又は碇などにて、一定の水面に敷設して行ふもの。

おとし-いも 葉芋【名】すりいもを、吸物の汁におとしいれたる食品。

おとし-いる 落入る・陷る【動下二他】Ⅰ誘ひて落す。 源氏「この川におとしいれたまひてよ」 Ⅱ城などを攻落す。 Ⅲたばかりて、仲間に引入る。 Ⅳ强ひて苦しましむ。わざと罪にす。

おとしいれ-の-おほくち 落入大口【名】おほくちはかま(大口袴)に同じ。

おとし-おび 落帶【名】琵琶の一部の名目。磯を張る革。らくたい。

おとし-がけ 落懸【名】Ⅰ車などにて、坂などを下りかくる處。一說に、落崖の意にて、

落つるがごとくなる懸屋(カケヤ)。〔古語〕源氏「おとしがけの高き所に見つけて、引入れたまふ」 ㊁欄間(ランマ)などの下に添ふる雲形などの彫物、又は書院窓の上の横木。

おとしがけ 落掛【名】男の髪の結ひ方の一。元結(モトヰ)を、普通のよりは、少し根に近く掛けて結ふもの。元祿頃、専ら行はれたり。若風俗「おとしがけのはね元結」

おとしがま 落鎌【名】〔建〕鎌繼(カマツギ)の一種。上より直角に落して組立つるもの。

おとしがみ 落紙【名】厠にて用ふる紙。

おとしき 弟磯城【名】〔人〕大和國の磯城(キシ)にありし酋長。兄磯城(キシ)の弟。神武天皇の東征したまふや、兄磯城は王師に抗せしも、弟磯城はたやすく歸順す。帝、東征の功を奏したまひて後、弟磯城の功を賞して、磯城の縣主(アガタヌシ)となす。

おとしぎんちやく 落巾著【名】紐を附けて、襟にかけ、落つる事のなきやうに造りたる巾著。おとし。

おとしくぎ 落釘【名】ぬひくぎ(縫釘)に同じ。おとし。

おとしぐさ 威種・嚇種【名】人を威(オド)す種(ネタ)。〔古語〕源氏「たださるべき折のおとしぐさにせんとぞ思ひける」

おとしげ 威毛【名】をとしげ(絨毛)を見よ。

おとしご 落子【名】おとしだね(落胤)に同じ。源平布引瀧「父は源氏なれども、母は平家の何がしが娘と、九郎助の物がたり、一家・一門ひろい平家、もし清盛がおとしごかも知れず」

おとしこみ・どこ 落込床【名】船の艫の溝。舵の落込(コミ)と合ふところ。

おとしさし 落差【名】刀を、鎺(リジ)さがりにさすこと。「漠」㊁に同じ。

おとしじゆう 乙侍從【名】〔人〕さがみ(相模)

おとしすう 落据う【動下二他】心を鎮まらしむ。(落ち居るに對して) 平家「心すこしおとしすべて」

おとしたて 落立【名】妻戸(ドマ)などの、上より落して立つるやうに造りたるもの。新六「あひ見ての後のつらさのなかつまどおせども明かぬおとしだてかな」

おとしだな 落棚【名】四十八棚の一。座敷・書院などの脇に取附くるもの。おとしちがひだな。

おとしだね 落胤【名】私通して設けたる子。(專ら貴人のにいふ) おとしご。らくいん。らくいんだね。源氏「孫王のひがみたりしみこのおとしだねなり」

おとしたね 落種【名】鳥などの啄(ツイ)み來りて落したる植物の種子。守武「撫子や夏野の原のおとしだね」

おとしたまご 落難卵・落玉子【名】吸物の汁の煮えたる中に、なま卵を割りて落し入れたる食品。熟せぬうちに食す。

おとしちがひだな 落違棚【名】おとしだな(落棚)に同じ。

おとしつく 落著く【動下二他】おちつかしむ。靜かにす。しづむ。しづまらしむ。冥途飛脚「とっくと心をおとしつけ」

おどしつく 威附く・嚇附く【動下二他】『つく(附く)は接尾語』殊更に勢をつけておどす。威嚇す。

おどしてっぱう 威鐵砲【名】鳥獣を威して逐拂ふに用ふる鐵砲。〔江戸時代の語〕

おとしてんじやう 落天井【名】他よりも一段低く下げて造りたる天井。茶室・數寄屋(ヤスキ)に在りては、勝手に屬する處にて、道具疊の上に設く。

おどしのめす 威しのめす・嚇しのめす【動四他】しかる(叱る)を云ふ。〔下野國の方言〕

おとしは 落羽【名】鷹の、峯・谷などを飛びわたりゆくこと。(鷹狩の語)

おとしばなし 落話【名】話の末に至り、他の事に可笑しく言ひかけて笑はしむる滑稽なる話。おちの話。おとしの話。らくご。

おとしばら 落しばら【名】女の鬢の作り方の一。鬢差(ビンサシ)を入れずして、小くふくらめて結ふこと。おとしばらけ。茶釜。

おとしばらけ 落しばら毛【名】前條に同じ。

おとしぶた 落蓋【名】匣(ハコ)の蓋(フタ)の、上緣にかからずして、その中に落込むやうに作れるもの。さしぶた。

おとしぶみ 落文・落書【名】㊀人の上などのあらはに言ひたきことを書きて、人目に觸るる處に、わざとおとし置くもの。らくしよ。賴政集「おとしぶみや見し、それは、我がしたりしなりと」 ㊁陰曆五月頃、山城國の比叡山中などにて、木の葉の、古の結文(ムスビフミ)に似たる形に横に捻かれたるもの。(俳諧の語) ㊂(動)鞘翅(シヨウ)類に屬する栗の害蟲。成蟲は、翅鞘及び前胸の翅鞘に接する部は赤褐色を呈し、他は黑色。頭は長く、眼は割合に大きく、年二回の發生をなす。〔栗象蟲〕

おとしぼり 落堀【名】用水の殘りたるを落すために設けたる堀。

おとしまく 落幕【名】芝居などにて、吊(ツ)りてある絲を切りおとすやうに設けたる幕。(ひき幕に對して)

おとしみづ 落水【名】稻のみのりて後、これを刈る前に、不用になりたる水を、田より流し去ること、又その水。 凡童「辛うじて山田みのりぬおとし水」

おとしむ 落しむ・貶む【動下二他】見さく。いやしむ。さげすむ。憎み侮る。金葉「怪しきも嬉しかりけりおとしむるそのことのはにかかると思へば」

おとしめごと 貶言【名】おとしめて言ふ語。源氏「あひなき御おとしめごとになん」

おとしめざま 貶樣【名】おとしむるやうなること。源氏「人の上をなん告げ、おとしめざまのことといふ人をば、いとほしきものにしたまへば」

おとしもの 落物【名】心附かず道路などに落したる金錢又は物品。遺失物。

おとしもの 落者【名】罪ある者などを、他國又は寺院などへ逃がしやること。

おとしや 落矢【名】㊀上差(カミザシ)の矢。 ㊁おろしや(下矢)に同じ。盛衰記「櫓(ヤグラ)より、おとし矢に、散散に射る」

おとしれ 落れ【名】『餅を落して入るる義か』しるこもち(汁粉餅)を云ふ。〔薩摩國の方言〕

おとしゑ 落餌【名】鷹などに、上より落し與ふる餌。

おとす 落す【動四他】㊀遺失す。落ちさす。 ㊁もらす。脱落せしむ。 ㊂忘はず失ふ。後撰「言はでしのびけるを、いかなるをりにかありけん、あたりに書きておとしける」 ㊃誘ひ入る。おとしいる。「謀におとす」 ㊄わが物とす。手に入る。「入札をおとす」 ㊅攻めて取る。おとしいる。「城をおとす」 ㊆損じへらす。無くす。失ふ。除く。「力をおとす」 ㊇逃げ走らしむ。「賊をおとす」 ㊈劣らしむ。低くす。下ぐ。わるくす。源氏「元服、南殿にてありし儀式の、よそほしかりし御ひびきに、おとさせたまはず」 ㊉見下ぐ。おとしむ。枕「いみじう言ひおとし」 ㊋定まらしむ。歸著せしむ。

おとす 威す・嚇す【動四他】㊀恐れしむ。驚かしむ。おびやかす。おどかす。 ㊁おどろかす(驚かす)㊁を見よ。枕「うちねぶりてゐたるを、おどすとて」

おとたちばなひめ 弟橘媛【名】〔人〕日本武尊の妾。忍山宿禰(オシヤマスクネ)の女。尊の東征に當り、上總國に赴く海上にて、風濤大いに起りし際、尊に代りて海に投じて歿す。

おとたなばた 乙棚機【名】うるはしきたなばたつめ。愛らしき機織女。〔古語〕記「あめなるやおとたなばたのうながせる玉のみすまる」

おとだより 音便【名】おとづれ(訪)に同じ。

おとづき 弟月【名】おとどづき(乙子月)に同じ。

おとさん 【名】父うへ。ととさま。おとう。〔俚語〕「さん」は敬稱

おとつづみ 弟鼓【名】こつづみ(小鼓)に同じ。(兄鼓(カツ)對して)〔方言〕

おとつん 【名】ちち(父)を云ふ。〔播磨國の語〕

おとづる 訪る【動四自】次條に同じ。〔古語〕宇治「司のかみに奉りて、おとづり奉らんと思ひて」

おとづる 訪る【動下二自】みづから行き又は音信にて見舞ふ。訪問す。とぶらふ。尋ぬ。おとなふ。

おとづれ 訪【名】おとづること。とぶらひ。みまひ。おとなひ。たより。おとだより。訪問。音信。消息。

おとづれすつ 訪捨つ【動下二他】おとづ

れたるままにて、語らひもせず。〔古語〕新拾遺「まきの屋に冬こそぬれとばかりをおとづれすてて行く時雨かな」

おと-と 弟【名】■おとうと(弟)に同じ。■年齢の劣りてあること、又その人。〔古語〕 桜鏡「女一人、十よばかりにて、男二人、一つ・二つがおととにてなん」 「國の方言」

おー-と 【名】ちち(父)を云ふ。〔周防國・長門語〕 桜鏡「おとどの上の瓦砕けて」

おー-とど 大殿【名】貴人の居宅の敬稱。〔古語〕

おとど 大臣【名】『前條の轉、即ち立派なる家に住へる人の意』■大臣・公卿などの敬稱。〔古語〕 落窪「おとどのたまふ事ありとて」 桜鏡 ■ふじん(婦人)の尊稱。〔古語〕 桜鏡「かの殿の御乳母(トノ)長門のおとど」 一の大臣【句】さだいじん(左大臣)の異稱。一の上(カミ)。〔古語〕 濱松「一の后の御父、一のおとど」

おとと-い 【名】次條に同じ。 平家「京中に聞えたる…妓王・妓女とて、おととといあり」

おとと-え 弟兄【名】はらから。きやうだい。おととい。同胞。〔古語〕

おとど-がね 大臣兼【名】おとどとなるべき人。大臣の候補者。〔古語〕 榮花「今日・明日のおとどがねにておはするが」

おとと-ぐさ 弟草【名】〔植〕『他の花におくれて咲くよりいふ』きく(菊)の異名。

おとと-けし 偉し【形一】たけし。いかめし。たくまし。〔古語〕

おとと-でし 弟弟子【名】おとうとでし(弟弟子)に同じ。 頌城反魂香「身は貧なり、かたはなり。弟弟子に土佐を名のらせ」

おとど-まち 大殿町【名】身分高き人の邸宅の建ちならびたる町。〔古語〕 桜鏡「それはおとどまちなれば、板屋なく、ある限り檜皮(ヒハ)なり」

おとと-むすめ 弟娘【名】妹の娘。いもうと。(姉娘に對して) 枕詞花「おととむすめの十一二ばかりなるが」

おとど-や 大臣屋・乙殿屋【名】古の五月の騎射の時、馬場の左右にありて、中將と少將との著座せし場所。 「同じ。

おとと-よめ 弟嫁【名】おとうとよめ(弟嫁)に

おと-どろ 【名】おとづれ(訪)に同じといふ。〔古語〕 萬葉「伊勢の海ゆ鳴きくるたづのおとどろも君が聞えばわれ戀ひめやも」

おとな 【名】■一族の長。部落の長。〔古語〕■かしら。をさ。〔古語〕 枕「所のおとな」■譜代(ナミ)の老人。家老。■諸大名に仕ふる下臈(ナミ)の女官。〔江戸時代の語〕

おとな 大人【名】■身分ある人。■十分に生長したる人。一人前になりたる人。 源氏「姫君も、おとなになりておはします」■元服の濟みたる人。 桜鏡「御年十二と申しける二月(キサラギ)に御裳(モ)奉る。程なくおとなになり出でたまふ」 大人は目恥(ハヂ)、下衆(スヂ)は口恥(クチヂ)【句】身分ある人は、美しき物を見るとき、慾念を生じて恥辱を招き、下賤なる者は、食物のため又は惡口・雜言のために恥辱を招く。〔諺語〕

おとな 乙名【名】昔、琉球にて、名主(シナヌ)のごとき役を務めしもの。

おとな 【貌】小供のおとなしきさま。(愛しほめていふ) 〔俚語〕

おとな-おとなし 大人大人し【形二】いかにも大人のやうなり。おとなびたり。〔古語〕 源氏「おとなおとなしき人に、かく似げなきふるまひをして」

おとな-くさい 大人臭い【形】少年にて、大人のごとき擧動あり。〔俚語〕

おとな-くれる 【動下一自】大人らしくなる。ませる。〔俚語〕 槍樫三「ちとお休みとさし出だす薄茶茶碗の音羽山、おとなくれたる振(ツ)を見て」

おとなくろし 【形二】大人らし。ねびたり。

おとなげなし 大人氣無し【形一】大人らしくなし。大人にして、小供に似たる擧動あり。

おとな-どころ 大人心【名】大人らしき心。おちつきたる心。〔古語〕 狭衣「かかる御おとな心を、美しう思ひきこえたまへば」

おとな-し 大人し【形二】■大人らし。聞きわけあり。(小供にいふ) ■頭だちたり。〔古語〕 字造「おとなしき郎等」■性質溫順なり。すなほなり。

おとなし 音無【名】(地)おとなしがは(音無川)(一)を見よ。

おとなし-うら 音無浦【名】(地)陸中國氣仙(ケセン)郡廣田灣の東北隅にある浦。

おとなし-がは 音無川【名】(地)■紀伊國熊野川の上流の稱。本宮(ホングウ)村附近を古く音無の里と言ひしより名づく。 夫木「はるばるとさかしき峰を分け過ぎて音無川を今日見つるかな」■若狹國遠敷(ワニウ)郡にある川。根來(ネゴロ)の山中より發し、遠敷村の南を過ぎて北川に合す。長さ二里半。古よりこの水は大和國奈良東大寺なる二月堂の閼伽(カ)井に通ずと云ふ。■東京市下谷區根岸町を流るる根岸川の別稱。

おとなし-さま 大人樣【名】おとなしき有樣。大人の樣子。 夕霧阿波鳴渡「聞及びしよりおとなしさま」

おとなしの-たき 音無瀧【名】〔地〕山城國愛宕(ウイガ)郡來迎院(ライガ)村なる來迎院の東にある瀑。高さ十六丈・幅五尺餘。 祠花「こひわびてひとりふせやに夜もすがら落つるなみだやおとなしのたき」

おとなし-む 大人染む【動四自】おとなくさくなる。おとなび。

おとなし-やか 大人しやか【貌】いかにもおとなしきさま。すなほ。

おとなせ-がは 音無瀨川【名】(地)丹波國天田(タカ)郡にある川。和知(ナ)川と六人部(むと)川とが、福知山町の東にて合せるもの。福知山より東北に向ふこと十里にして、由良(ラ)港に注ぐ。別稱、福智川・大芋(オモ)川・大雲(オク)川。

おとなだつ 大人だつ【動四自】■大人らしくなる。おとなぶ。おとなめく。おとなづく。〔古語〕■頭だつ。老成めく。〔古語〕 枕「受領など、おとなだちたる人は」

おとなづく 大人附く【動四自】前條(一)に同じ。〔古語〕 名義抄「長、オトナヅク」

おとななみ 大人並【名】小供ながら凡てが大人と同一なること。

おとなはつかし 大人恥し【形二】大人よりもまさらんさまなり。一代男「世の介、十二より、聲も變りて、おとなはづかしく」〔古語〕 源氏「きぬのおとなひ、はらはらとして」

おとなひ-びと 【名】おとづれ(訪)に同じ。

おとなふ 人【名】おとなふ人。尋ぬる人。見舞ふ人。〔古語〕

おと-なふ 音なふ【動四自】■音立つ。ひびく。〔古語〕 紀喧響、オトナヒ」■おとづる(訪る)に同じ。 源氏「このあたりに、おとなふをりあらん」

おとな-ぶ 大人ぶ【動上二自】おとなだつ(大人だつ)(一)に同じ。〔古語〕 源氏「御年のほどよりは、おとなび」

おとな-ぶる 大人振る【動四自】■大人らしき風をなす。■大人たることを誇る。

おとな-めく 大人めく【動四自】おとなだつ(大人だつ)に同じ。

おとな-やく 大人役【名】一人前の大人のなすべき役。 緋縅綸卯月紅葉「年はいかねど、男を持てば、大人役」

おとな-をむな 大人女【名】家事をとりまかなふ老女。〔古語〕 住吉「侍從はおとなをむなにて、よろづに大事の人にて」

おと-にい 弟兄【名】きやうだい。はらから。〔播磨國の方言〕

おと-に-のみ 音にのみ【枕】音にのみ聞くといふ意を、きく(菊)にかけていふ。 古今「おとにのみきくのしら露よるはおきひるは思ひにあへずけぬべし」

おと-ね 乙子【名】月の最後の子の日。〔古語〕 桜鏡「きさいの宮の賀、正月二十七日にいでくるおとねになんつかまつりたまひける」 「(大殿油)に同じ。

おとの-あぶら 大殿油【名】おほとのあぶら

おとの-ごもる 大殿隱る【動四自】おほとのごもる(大殿隱る)に同じ。〔古語〕

おとは-の-たき 音羽瀑【名】(地)■山城國比叡山にある瀑。高さ二丈・幅一間。■山城國京都清水寺の境内にある小き瀑。

おとは-やき 音羽燒【名】おとはやまやき(音羽山燒)同じ。 生玉心中「錦手・乾山・音羽燒の、皿の、鉢の、茶碗のと」

おとは-やま 音羽山【名】(地)山城國宇治

郡にある山。連亙一里、近江國との堺をなして、笠取（カサトリ）山に連る。清水寺（キヨミズデラ）は、その京都市に面する麓にあり。古今「秋風の吹きにし日よりおとはやま峯の梢も色づきにけり」

おとはやま-やき 音羽山燒 【名】きよみづやき（清水燒）を見よ。

おと-ひ 弟日 【名】おとうと（弟）に同じかるべしといふ。〔古語〕 萬葉「霰うつあられ松原すみの江のおとひをとめとみれどあかぬかも」

おと-ひと 弟人 【名】『劣（ケ）人（ヒト）の義』おとうと（弟）に同じ。おと。〔古語〕 紀「友子、コノカミオトヒト」

おと-ひめ 弟姫 【名】妹にあたる姫。次の姫。おとひめぎみ。（兄姫（エヒメ）に對して）〔古語〕 紀「覺束（オボツカ）なくてりにてる顏はたれぞとふまでに光りとほれる君がおとひめ」

おと-ひめ 乙姫 【名】『弟姫の意』龍宮（リウグウ）に住めりといふ仙女。

おとひめ-ぎみ 弟姫君 【名】おとひめ（弟姫）に同じ。〔古語〕 榮花「源帥ときこえしが御おと姫君をとりて養ひ奉りたまひしなり」

おとひめ-の-かんざし 乙姫簪 【名】〔植〕あまも（大葉藻）に同じかるべし。〔古語〕

おと-ほし 御通 【名】さる（笊）を云ふ。〔女の語〕

おと-ぼし 御點 【名】らふそく（蠟燭）を云ふ。〔女の語〕

おと-ぼね 頤骨 【名】こゑ。音聲。〔俚語〕手習草「くやしや無念とのしる聲、おとぼね立てなど、宿禰が下著・褄さき、口へおしこみ、ねぢ伏せ」

おと-ぼり 御通 【名】 一 通りたまふこと。御通行。 二 貴人の前に召出さること。おめぼどり。おめみえ。〔武家時代の語〕 三 狂言「雁かりがね」「この度はおとぼりを下さるほどに」

御通の盃（ツキ） 【句】貴人の前に召出されて、手づから御酒を賜はること。おとぼり。〔武家時代の語〕

おと-まさり 弟優 【名】弟又は妹にして、兄又は姉にまされること。〔古語〕 榮穗「藏人の少將の、おとまさりになりわかれぬべかめるかな」

おとまし 疎し 【形二】うとまし（疎し）の轉。おあん物語「おとましや、おとましや」

おと-み 【名】『弟（ケ）見（ミ）の義』乳呑兒（チノミ）ある母の、乙兒（オト）を再胎せること。

おとみ-ご おとみ兒 【名】母がおとみとなりて、乳に離（カ）れたる兒。

おとみ-づはり おとみ惡阻 【名】母がおとみとなりたるとき、さきに生れたる乳呑兒（チノミ）が、母の乳に離れて起す病氣。

おと-みみ 音耳 【名】音に聞くこと。〔古語〕 大和「ここ・かしこと尋ぬれど、おとみみにも聞えず」

おと-みや 弟宮 【名】一宮（イチヤ）に對して、それ以下の皇子。〔古語〕 榮花「あるがなかのおとみやは、三條の入道、一品の宮の御子にし奉らせたまひし」

おと-むすこ 弟息子・乙息子 【名】長男に對して、それ以下のむすこ。 曾我五人兄弟「某は故河津が乙息子」

おと-むすめ 弟娘・乙娘 【名】長女に對して、それ以下のむすめ。〔古語〕 催馬樂「我門」「あやめの郡の大領のまな姫といへおとむすめとこそいはめ」

お-どん 己等 【代】『おいどん（己等）を見よ』おのれども。われら。〔豐後國の方言〕

お-とめ 乙女 【名】をとめ（少女）を見よ。

お-とめば 御留場 【名】『諸人の狩獵を禁止せる場所の意』德川時代に、將軍の鷹狩する場所。〔古語〕

お-とも 【名】わが船より先に立ちて漕ぐ船。

お-とも 御供 【名】 一 ともびと。從者。 二 素人（シロウト）より物を買ふとき、聊かなる品は無代價にて、主（モノ）なる品に添へて持ゆくこと。〔古物商などの語〕

おとも-ぐら 御供鞍 【名】供奉する人の乘る鞍ならんといふ。〔古語〕

お-とも-じ 乙文字 【名】『もじ（文字）は接尾語』 **おとじぜ**（乙御前）に同じ。

おとも-しゆう 御供衆 【名】室町幕府の職制の一。將軍に侍して、食膳の事を扱ひ、外出には鞍（クラ）を護りしもの。細川・山名・畠山・大館・武田・赤松・伊勢・富樫（シトガ）等の諸氏これに補せらる。その資格は、相伴衆（シヤウバンシユウ）・國持衆・外樣衆（シトサマシユウ）に次ぎたり。

おとも-おより 御供女郎 【名】他人の妻。〔肥前國の方言〕

お-とや 乙矢・弟矢 【名】一手に二本持てる矢の、二番目に射るもの。（は矢に對して）著聞「おとやにて、又後の串を射てけり」

おとやまつみ-の-かみ 於菟山津見神 【名】伊弉諾（イザナギ）尊のその子迦具土（カグツチ）神を斬りたまひし時、胸より生れたまへりといふ神。

お-とよ 弟嫁 【名】おとうとよめ（弟嫁）に同じ。〔古語〕 和名「娣嫜。爾雅云、長婦謂二幼婦一爲二娣嫜一。於斗與女」

お-とよめ 乙嫁 【名】うつくしき嫁。若き嫁。〔古語〕 催馬樂「葦垣」「とどけるこの家この家のおとよめ親にまうよこしけらしも」

おとより-さん 【名】しぞく（士族）を云ふ。〔肥河國の方言〕

おとらしや 【名】癩（イラ）病患者。〔大和國の方言〕

おとり 劣 【名】劣ること。下。次。 榮穗「わらはのたけ、すこし、これはおとりなる」

おとりか-がた 御取箇方 【名】とりかがた（取箇方）の敬稱。

おとりか-ちやう 御取箇帳 【名】とりかちやう（取箇帳）の敬稱。

おとり-げ 劣氣 【名】劣りたる樣子。〔古語〕 榮花「いみじうをかしく見えたり。これに、又、殿の上の御方、おとりげなし」

お-とりこし 御取越 【名】いんじやうゑ（引上會）に同じ。 芭蕉「水鼻に誠見せけりおとりこし」

おとり-さま 御酉樣 【名】とりのまち（酉町）の「敬稱。

おとり-ざま 劣樣・劣方 【名】劣りたるかた。

お-とりすゑ 御取据 【名】大なる土器に肴を据ゑて出すこと。かはらけもの。鉢の物。

おとり-ばら 劣腹 【名】身分ひくき母の生みたる子。妾腹。〔古語〕 源氏「中のおとりばらに、女出て來たまふべし」

おとる 劣る 【動四自】 一 品下る。したなり。劣なり。（まさるに對して） 土佐「この人人の心ざしは、この海にもおとらざるべし」 二 減（ヘ）る。費ゆ。〔古語〕 紀「損費、オトリツヒユル」

おどれ 己 【代】『おのれ（己）の轉』同等以下に對していふ第二人稱。おのれ。汝。〔畿内の方言〕

おどろ 棘 【名】『おほどろを見よ』 一 雜草雜木・荊棘（ライバ）のむらがりて生じたる處。〔古語〕 增鏡「おくやまのおどろが下もふみわけて道ある世ぞと人に知らせん」 二 物事のみだれたること。「髮をおどろに振りみだし」 三 しば（柴）を云ふ。〔丹波國・但馬國の方言〕

おどろが軒 【句】荊棘（ライバ）などの生ひしげれる軒。〔古語〕 夫木「深き夜をとふ人もがな岡のべのおどろが軒にほふ橘」

おどろの冠 【句】『英 The crown of thorns. 新約全書の馬太（イタ）傳第二十七章と約翰（ヨハネ）傳第十九章とに出づ』 一 『ロオマの兵士が、キリストを捕へて十字架に懸くる前、その衣を剝ぎて紫袍を著せ、荊棘（ライバ）にて編める冠を戴かしめ、右の手には葦を持たせ、ことさらにその前に跪きて、「ユダヤ人の王安かれ」と曰ひて嘲弄せし故事。 二 小人に憎まれて惡名を蒙ること。

おどろの道 【句】 一 おどろの中のいぶせき道。〔古語〕 續後撰「いにしへのおどろのみちの言の葉をけふこそ神のしるしとは見れ」 二 きよくろ（棘路）の直譯。〔古語〕 新拾遺「位山おどろの道も程とほし花の外なる峯の椎柴」

おどろ-おどろ 【貌】おどろおどろしき音の形容。〔古語〕

おどろ-おどろし 【形二】おどろくべきさまなり。仰山なり。すごし。恐ろし。〔古語〕 源氏「おどろおどろしき聖ことば、見はてしがな」

おどろかし 驚 【名】 一 おどろかすこと。おどかし。 二 かがし（案山子）に同じ。おどし。とりおどし。〔古語〕 後撰「小山田のおどろかしにもこさりしをいとひたぶるにげし君かな」

おどろかし 驚かし 【形二】驚くべきさましたり。おどろおどろし。〔古語〕 榮穗「おどろかしき聲出でて、おどろきたまひて」

おどろかす 驚かす【動四他】一驚くやうにす。おどかす。おどす。風雅「忘れんと思ふはおのが心にて誰がおどろかす涙なるらん」二氣の附くやうにす。注意を與ふ。〔古語〕續世繼「御返事もなくて、なほ笛吹かせたまひて入らせたまひにけるを、急ぎて御返事申せと侍りつるものをと思ひて、おどろかし申しければ」三目ざめしむ。おどす。〔古語〕榮花「御ふすまを引きかけて大とのどもりたる：ややとおどろかし奉らせたまへば、何心もなく見上げさせたまへるに」

おどろき 驚【名】驚くこと。たまげること。驚き、桃の樹、山椒（サン）の樹【句】『驚きの「き」を木の意にとりなしていふ』物事に驚きたる時にいふ語。〔俚語〕

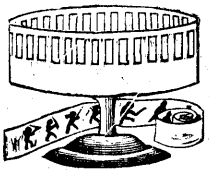
おどろき-あし 驚足【名】『物に驚きたる足つきに見ゆるよりいふ』大股に歩くこと。

おどろき-いる 驚入る【動四自】『いる（入る）は接尾語』強く驚く。眞實に驚く。狂言〔蹇祈「さても、さても、奇特千萬、おどろき入りましてござる」

おどろき-うま 驚馬【名】はねうま。あがりうま。駻馬。〔古語〕落葉「おどろきうまのやうに、手なふれたまひそ」

おどろき-がほ 驚顔【名】驚きたる顏つき。驚きたるさま。義忠百首「さよの浦に波のしらむを明けぬとやおどろきがほに千鳥たつなり」

おどろき-ばん 驚盤【名】中央の支點にて支へられたる圓盤の周圍に、物の順次に活動・變化する姿を忍がける紙を入れ、その圓盤を旋（カ）らしつつ、圓盤の周圍の孔より覗ひ見れば、恰もその忍がける物の活動するごとくに見ゆるもの。活動寫眞の先驅をなせるものなり。きやうばん。



（んばきろどお）

おどろく 驚く・駭く・愕く【動四自】一意外なる事にあひて、心さわぐ。びっくりす。たまげる。二目ざむ。〔古語〕紀「癌之、オドロキテ」

おどろし【形二】おどろくべし。仰山な!。すさまじ。〔古語〕續紀「おどろしきことわざなせそ」

おどろしい【形】おそろし（恐し）に同じ。〔畿内・北陸・四國などの方言〕

おどろふ 衰ふ【動下二自】『おとる（劣る）の意』勢おとりゆく。次第によわる。衰弱す。衰微す。萬葉「わがよはひしおとろへぬれば白たへの袖のなれにし君をしぞ思ふ」

おとろへ 衰【名】おとろふること。衰弱。衰微。芭蕉「おとろへや齒にくひあてし海苔（ノ）の砂」

おとろん【名】『踊れ踊れの意より出づといふ說によれば、をとろんを正しとす』つりあひにんぎやう（釣合人形）に同じ。

おと-をぢ 叔父【名】『弟（オト）小父（ヲヂ）の義』父母の弟。（えをぢに對して）〔古語〕紀「叔父、オトヲヂ」

おな【名】新婦の稱。おなあ。狂言〔水論宴「やあ、おなか、足をとれ」

おな-あ【名】前條に同じ。狂言〔岡太夫聟「この仕やうを、おなあが存じて居ります」

おな-いぎ 御内儀【名】『ないぎ（内儀）を見よ』他人の妻。〔京都の語〕

おな-いどし 同年【名】『おなじとしの音便』年齡の同じきこと。〔俚語〕

おな-か 御中【名】一食事。〔女の語〕二はら（腹）を云ふ。〔女の語〕三室町時代の武家の奥向に奉仕せる女中の、御中居（カオナ）より上に位せしもの。中萬（チユウ）。

おな-か-がら 御中頭【名】前條の御中のかしら。中萬（チユウ）頭。

おな-か-ごころ 御中心【名】はらごころ（腹工合）に同じ。

おなか-だち 御中立【名】御中頭の下に屬する女中。中萬（チユウ）だち。

おな-がれ 御流【名】『ながれ（流）を見よ』

おな-じ 同・仝【名】同じくあるさま。同一。

おなじ 同・仝【接頭】同一なる意。（名詞に添へて用ふ）「同じ年」「同じ事」

おなじく 同じく【接】ならびに。何れも。籠曲（經政「青山といふ琵琶を、亡者のために手向けつつ、おなじく絲竹の聲も、佛事をなし添へて」

おなじく-は 同じくは【副】次條の轉。

おなじく-ば 同じくば【副】おなじことならば。むしろ。いっそ。六蛙「をるからに我が名は立ちぬ女郎花いざおなじくば花ながら見ん」

おなじ-こと 同事【名】おなじきさまなる事。炭俵「野菜」「雲かすみどこまでゆくもおなじこと」

おなじ-に 同じに【副】おなじく。ひとしく。同樣に。おんなじに。「稱。

おなじみ 御馴染【名】なじみ（馴染）一の敬

おなじみ-がひ 御馴染甲斐【名】なじみたる理由。馴れそめたる緣。

おなつ-こだよろ お夏小女郎【名】〔動〕しろこ（白子）を云ふ。〔伊勢國山田の方言〕

おな-っちよ【感】『お行きなされよの意』人の歸りゆくを、送るときに發する聲。さやうなら。おなんちよも。〔信濃國の方言〕

おな-て 御無【名】一はうき（箒）を云ふ。〔女の語〕二おさすり（御摩）一に同じ。〔俚語〕

おな-へ 阿鍋【名】下女。下婢。

がれ頂戴」三貴人より賜はる不用の物。おさがり。四計畫したる事の行はれずに止むこと。〔俚語〕

おな-かね 御中居【名】德川氏及び諸侯の大奥に仕へて、御膳所に於ける獻立（ダテ）一切を掌りし女。中萬（チユウ）と御末（オスエ）との間に位す。（お次・お末・お側（ソバ）に對して）

おな-ごら【副】ねんごろ。懇懃（ギン）。〔信濃國の方言〕

おなじ 同じ・仝じ【形二】彼れと此れと異ならず。昔のさまと今のさまと變らず。ひとし。おやじ。萬葉「天ざかるひなとしあれば、そこにも同じ心ぞ」

同じ事は一つ事【句】幾たび言換へても異なる筈無し。〔諺語〕

おなじ 同・仝【貌】同じくあるさま。同一。

おなじ 同・仝【接頭】同一なる意。（名詞に添へて用ふ）「同じ年」「同じ事」

おなじく 同じく【接】ならびに。何れも。籠曲（經政「青山といふ琵琶を、亡者のために手向けつつ、おなじく絲竹の聲も、佛事をなし添へて」

おなじく-は 同じくは【副】次條の轉。

おなじく-ば 同じくば【副】おなじことならば。むしろ。いっそ。六蛙「をるからに我が名は立ちぬ女郎花いざおなじくば花ながら見ん」

おなじ-こと 同事【名】おなじきさまなる事。炭俵「野菜」「雲かすみどこまでゆくもおなじこと」

おなじ-に 同じに【副】おなじく。ひとしく。同樣に。おんなじに。「稱。

おなじみ 御馴染【名】なじみ（馴染）一の敬

おなじみ-がひ 御馴染甲斐【名】なじみたる理由。馴れそめたる緣。

おなつ-こだよろ お夏小女郎【名】〔動〕しろこ（白子）を云ふ。〔伊勢國山田の方言〕

おな-っちよ【感】『お行きなされよの意』人の歸りゆくを、送るときに發する聲。さやうなら。おなんちよも。〔信濃國の方言〕

おな-て 御無【名】一はうき（箒）を云ふ。〔女の語〕二おさすり（御摩）一に同じ。〔俚語〕

おな-へ 阿鍋【名】下女。下婢。

おなべ【名】よなべ（夜鍋）に同じ。おんなべ。油糟「戸を立てぬれば赤くこそあれ（といふ句）におなべする宿に夜光の玉もがな」

おなほし【名】〔動〕ふな（鮒）を云ふ。〔女の語〕

おなま 御鱠【名】なます（鱠）をいふ。〔女の語〕

おなま【名】〔建〕完全にて、疵の無きもの。

おなま 御生【名】なまいき（生意氣）を云ふ。〔女の語〕

おなんちよも【感】おなっちよに同じ。〔信濃國の方言〕

おなんど 御納戸【名】一なんど（納戸）の敬稱。二江戸城大奥の一部。衣服を脫替へ、化粧などを施すための部屋。三おなんどやく（御納戸役）の略。四おなんどいろ（御納戸色）の略。

おなんど-いろ 御納戸色【名】染色の一。鼠色がかりたる藍色。おなんど。

おなんど-かた 御納戸方【名】次條に同じ。

おなんど-やく 御納戸役【名】なんどやく（納戸役）の敬稱。おなんど。おなんどかた。

おなめ【名】めかけ（妾）を云ふ。〔陸奥國南部の方言〕

おなや 御納屋【名】一江戸時代に、日本橋の魚問屋が、幕府の役人より、臨時に魚類の上納を命ぜられしこと。〔俚語〕二勘定の仕拂を得ざること。〔東京日本橋の魚河岸にて用ふる語〕

おなら 御なら【名】『ならを見よ』へ（屁）を云ふ。〔女の語〕櫻筑波「そよと春べに匂ひぬるかな（といふ句）いにしへのおならの京の八重ざくら」

おなり 御成【名】宮方・攝家・將軍等のごとき貴人の出で行くこと又は來ることの敬稱。おはれ。〔室町時代以後の語〕

おなり-ぎり 御成切【名】碁石（ゴイ）ほどの大きさに平たく造りたる猪子（ヰノコ）の餅。

おなり-そうぶぎやう 御成總奉行【名】足利時代の職制の一。將軍が諸侯の第に臨むに當り、諸侯が臨時に命じて、當日の萬事を總監せしめしもの。

おなり―には 御成庭【名】中に垣などを設けざる庭。怪しき輩の隠れて不敬を働くことなきやう、宮方・摂家などの出入する場所に用ひられたり。「の通路。

おなりーみち 御成道【名】貴人の御成の時

おに 鬼【名】一人のたましひ。亡魂。亡靈。〔古語〕 和名「人神曰レ鬼、於邇。或説云、於邇者隱音之訛也、鬼物隱而不レ欲レ顯レ形、故以稱也。四聲字苑云、鬼、人死神鬼也」 二 姿を現し、又は人に祟りをなす亡靈。幽靈。ものの。 三〔佛〕地獄にある獄卒。人類の形をなし、口は耳の邊まで裂けて、鋭き牙を有し、頭に牛角生え、裸體にて腰に虎の皮をまとひ、相貌獰惡にして、怪力ありと想像せらる。らせつ。夜叉(ヤシ)。 四 小供のおにごとの遊に、相手を捕ふる番に當れるもの。 五 勇猛なる人、又は怖しき人、又は殘忍なる人を怖れて云ふ稱。〔俚語〕 六 借金とり。債鬼。 七『中古、朝廷にて、正月御藥を供する時、藥子(クスリコ)、鬼間(オニノマ)より進出でて、まづ嘗(ナ)試みしよりいふ。又、藥子には、童女を採用するより小供の字を充つといふ』食物の毒味。おにとり。

〔小兒〕**おにくひ**(鬼食)・**おにとりやく**(鬼取役)・**おにのみ**(鬼飲)・**おになめ**(鬼嘗)・**おにやく**(鬼役)・參照。 甲陽軍鑑「御一家衆・家老衆、惣じて大身衆振舞の時、必ず亭主おにを仕る、尤なり」

鬼が出るか、蛇(ジャ)が出るか【句】次條の意を强みていふ語。〔諺語〕「先(サキ)が先なら鬼にも蛇(ジャ)にも、又は神にも佛にも」參照。

鬼が出るか、佛が出るか【句】いかなる運命に出あふべきか測られずして、心がかりなる譬。〔諺語〕

鬼が問ふ【句】來世にて、鬼が質問す。男色大鑑「草津の姥が餅、清見寺の膏藥とは、地獄にて鬼が問ふ」

鬼が笑ふ【句】『支那、宋の劉伯龍、その位、九卿郡守を經て、而も常に貧窮なるを歎きしが、ある日、慨然として、商業を營まんと思ひしに、たまたま傍に一の鬼あり、掌(ショウ)を撫でて大に笑ひしかば、伯龍、歎じて、貧窮まことに命あり、鬼に笑はるといひて、遂に止みきといふ故事より轉じていふ』自己の壽命の無常なるを知らずして、來年の計畫を語る人を嘲りていふ語。「を見よ。

鬼千匹【句】「小姑(コジウト)一人は鬼千匹」

鬼ごっこ【句】馴れ親しみがたき意の譬。〔諺語〕

鬼ごも組みさう【句】一 いかにも强さうなる譬。 二 人情を知らぬ譬。

鬼に金棒【句】『たださへ勇猛なる鬼に、金棒をも持たしむる意』强きが上に强きを加ふる譬。〔諺語〕 吾吟我集「軒にふく瓦をとめてさす釘や手づよく見ゆる見ぬ鬼に金棒」

鬼に膽を取らる【句】甚しく怖れてあるさまの譬。〔諺語〕 宇治今は逃ぐともよも逃がさじと覺えければ、鬼に膽とられたるやうにて、共に行く」

鬼に瘤(コブ)を取らる【句】『宇治拾遺物語にある瘤取(トリ)の話に本づく』偶然なる幸福を得る譬。〔諺語〕

鬼に法衣(コロモ)【句】一 惡人が善人の如く見せて、やさしげに振舞ふ譬。狼に法衣(モロ)。〔諺語〕 二 剛きものと優(ヤサ)しきものとの似つかはしからぬさまの譬。〔諺語〕

鬼に煎餅【句】『鬼は人をも取りて食ふほどのもの、煎餅はきはめて脆(モロ)きものなるよりいふ』容易に盡し去ることの譬。鬼の煎餅。〔諺語〕

鬼の皮【句】三月三日に食する草餅。〔古語〕 塵添壒嚢抄「三月三日の草餅は、鬼の皮とて食するなり」

鬼の寒念佛【句】「鬼の念佛」二 に同じ。

鬼の起證(キヨウ)【句】一 書體の固苦しきさまの譬。〔諺語〕 二 猛き者の終に屈服したる譬。〔諺語〕

鬼の衣(キヌ)【句】死人の著物。〔古語〕 字鏡集「嬰、オニノキヌ」

鬼の首を取る【句】その物を獲たるは、非常なる功名なる譬。〔諺語〕

鬼の霍亂(クワク)【句】平生極めて壯健なる人のたまたま病にかかる譬。〔諺語〕

鬼の來(コ)ぬ間(マ)に洗濯【句】「鬼の居ぬ間に洗濯」に同じ。〔諺語〕

鬼の煎餅【句】「鬼に煎餅」に同じ。〔諺語〕

鬼の空念佛(ハツネブツ)【句】「鬼の念佛」二 に「同じ。〔諺語〕

鬼の立てたる石の戸も、情(ナサケ)に開(ア)く【句】如何なる惡人も、人情には勝ちがたき譬。〔諺語〕 淨瑠璃十二段「鬼の立てたる石の戸も、なさけにあくるものを、ましてや、人と生れきて」

鬼の女房に鬼神(シンジン)【句】次條の略。

鬼の女房に鬼神(シンジン)がなる【句】猛き男が猛き妻を得る譬。鬼の女房に鬼神。〔諺語〕

鬼の念佛【句】一 慓悍なる者の、心にもなき慈悲をよそふ譬。鬼の空念佛。〔諺語〕 二 大津繪の中にて、鬼が衣を著、足駄をはき、背に傘を斜に負へるさまを描けるもの。俗に、これを壁に貼りおけば、小供の夜泣のまじなひになるといひ習はせり。鬼の寒念佛。

鬼の腸(ハラワタ)【句】七月七日に食する索麵(サクメン)。〔古語〕 塵添壒嚢抄「七月七日、索麵、鬼腸(オニノハラワタ)とて、食レ之」

鬼の洞念佛(ホラネブツ)【句】毎年七月七日より同十五日まで、京都八瀬川の西の山中にある洞穴内に、村中の兒女集りて、鉦をたたき、彌陀(ダ)の名號を唱ふること。先祖を祭るなりといふ。洞は高さ約二丈、深さ三丈。昔、酒顚童子この洞に住みたりと言傳ふ。

鬼の眉【句】九月九日の酒に浸す菊の花。〔古語〕 塵添壒嚢抄「九月九日の菊の花は、かの鬼の眉とて、酒に入れて飲レ之、萬病を去りて命長し」

鬼の目にも涙【句】慓悍なる者も、人情を解して、涙を流す譬。〔諺語〕 後撰夷曲集「たてかねし竈を見たら地獄なる鬼の目にもや涙流さん」

鬼の目にも見遺(ノコ)し【句】注意または觀察の緻密なる人にも、時には遺漏ある譬。〔諺語〕

鬼の居ぬ間に洗濯【句】憚る人の居らぬ間に、安心して遊び、又は我が思ふままに事をなす譬。鬼の留守に洗濯。〔語〕 鬼の來ぬ間に洗濯。〔諺語〕

鬼の留守に洗濯【句】前條に同じ。〔諺語〕

鬼は外(ソト)、福は內【句】節分の夜の豆まきの時に唱ふる語。惡鬼は退散せよ、福は來れと云ふ意。〔諺語〕

鬼も十七【句】次條の略。〔諺語〕

鬼も十七、山茶(チャ)も煮ばな【句】「鬼も十八、番茶も出ばな」に同じ。〔諺語〕

鬼も十八【句】次條の略。 鶉衣「鬼も十八のあだし心より、楊貴妃の枕にしのびて、鐘馗(シヨウキ)といへる髭男に逐はれ」

鬼も十八、番茶も出ばな【句】番茶も出ばなの際には香よく、鬼の如き怖しげなるものにても、十八といふ年ごろには美しく見ゆるに、まして女子の年ごろなるは美しきものなり。鬼も十七。鬼も十八。鬼も十七山茶も煮ばな。〔諺語〕

鬼を欺く【句】力つよく又は容貌猛惡にて、鬼かと思はる。

鬼を酢に指(サ)して食ふ【句】恐るべき物を、何とも思はず。 盛衰記「形勢は、鬼を酢に指して食はんずる景氣なり」

鬼居る門(カド)【句】きもん(鬼門)に同じ。

千匹の鬼【句】「小姑(コジウト)一人は鬼千匹」を見よ。

おに 鬼【接頭】一 暴く恐しき・殘忍なるなどの意。「おに武者」「おに婆婆」 二 厭ふべき形の意。「おに薊(アザミ)」「おに百合(ユリ)」

おにーあさ 鬼麻【名】〔植〕いらくさ(刺草)に同じ。

おにーあざみ 鬼薊【名】〔植〕やはずあざみ(矢筈薊)に同じ。 芭蕉「花は賤(ザ)の目にも見えけりおにあざみ」

おにーあさり 鬼淺蜊【名】〔動〕蠣鰒(ボイン)類に屬する軟體動物。殼は普通の淺蜊よりも短く、質厚く、齒三ケ所にあり。表面は淡褐色にして、內面は白し。我が國中部の海中に產す。

おにーあそび 鬼遊【名】おにごと(鬼事)二 に同じ。

おにーあは 鬼粟【名】〔植〕おほあは(大粟)に

おにあふ

おに-あふぎ 鬼扇【名】能(ノウ)にて、鬼の持つ扇。赤地に一輪牡丹などを畫く。

おに-いた 鬼板【名】家の棟の兩端、鬼瓦のあるべき處におほひて飾となす板。鬼面を附けたるも、附けざるもあり。左右の下方にある飾をひれといひ、渦卷(マキヅ)・波・若葉・雲などの形を用ふ。

おにおに

おに-おにし 鬼鬼し【形二】鬼の如くおそろし。無情にして、心强し。慈悲心なし。おにし。源氏「おにおにしう侍るさがなもの」

おに-おろし 鬼下【名】わさびおろしに似て、齒のあらきもの。

おに-かうべ 鬼首【名】〔地〕陸前國玉造(クマツ)郡にある村。名馬の產地にて、又、五箇の溫泉を有し、浴客少なからず。

おに-かげ 鬼鹿毛【名】■武田信玄の乘馬。■俗說にて、小栗判官の乘馬。

おに-かさご 鬼鯽【名】〔動〕硬鰭(カウ)類に屬する魚。形、かさごに似て、長さ一尺餘、多くの棘と觸絲とを有す。我が國及び支那の近海に產す。

おに-がしま 鬼島【名】■鬼の住めりといふ想像上の島。■〔地〕伊豆國青ゲ島の別稱。

おに-がじやう 鬼城【名】〔地〕『昔、鬼の住みきといふ故事によりていふ』紀伊國南牟婁(ムロ)郡木本(キモト)町の海岸にある岩窟。おにのいはや。牟婁のいはや。

おにがじやう-やま 鬼城山【名】〔地〕■丹波國由良(ユラ)川の上流なる和知(ワチ)川と、その支流なる上林(カンバ)川との北方にある山。高さ一七〇〇尺に過ぎざれども、古來要害の地として知らる。謠曲「花月」「伯耆には大山(ダイ)、丹後・丹波の境なる鬼ゲ城山と聞きしは、天狗よりもおそろしや」■伊豫國にある山。宇和島の東南なる峰の主なるもの。高さ二六一〇尺。

おに-がしら 鬼頭【名】おほがしら(大頭)(一)に同じ。〔古語〕名義抄「纛、オニガシラ・カミガキ」

おに-がた 鬼形【名】鬼の形。

鬼形の幡(ハン)【句】鬼の形を畫ける幡。

おに-かぢのは 鬼梶葉【名】紋所の一。下の圖を見よ。

（はのぢかにお）

おに-がに 鬼蟹【名】〔動〕へいけがに(平家蟹)に同じ。

おに-がはら 鬼瓦【名】■屋根の棟の兩端の飾に著く大なる瓦。鬼の假面(メン)などの形に造ること普通にして、惡魔降伏のためといふ。一說に、河伯(カハク)の形をあらはせるものにて、火防(ヒセ)のためにするなりと。おにいた(鬼板)參照。■桃の木へ雀吐出すおにがはら」■紋所の一。

おにがは

鬼瓦にも化粧【句】醜き姿の者も、化粧次第にて美しくなる。〔諺語〕毛吹草「朝霧はおにがはらにも化粧かな」

おにがはらだい 鬼瓦臺【名】鬼瓦の下の臺。瓦にて積めり。

おに-がみ 鬼神【名】荒く恐しき神。きじん。源氏「おにがみも荒だつまじき御けはひなれば」

おに-がや 鬼榧【名】〔植〕いぬがや(犬榧)に同じ。

おにがら-やき 鬼殼燒【名】鰕(エビ)を、殼の附きたるまま、附燒(ツケヤキ)にしたる食品。〔料理の語〕

おに-ぎ 鬼木【名】おにうちぎ(鬼打木)(一)に同じ。

おに-きしん 鬼鬼神【名】きしん(鬼神)を强めていふ語。

おに-きた 鬼北【名】二月に吹く風。鬼門(ムモ)即ち東北の方より吹くをいふならんといふ。〔畿內・中國の船人の語〕

おに-きり 鬼切【名】源家累代の名劍の一。俗に、多田滿仲の戶隱山にて鬼を斬るに用ひしより名を得たりといふ。おにまる(鬼丸)參照。

おに-く 御肉【名】〔植〕列當(ハマウ)科に屬する高山自生の寄生植物。莖は肉質にて、高さ六七寸。葉は鱗片狀をなし、色は莖葉ともに黃褐色。六月ごろ脣形の花簇(ムラ)り開く。强壯劑に用ひらる。きむらたけ。

おに-ぐこ 鬼枸杞【名】〔植〕枸杞の一種。葉小く、刺(ゲ)多く、果實は細長くして、味にがし。いぬぐこ。

おに-ぐさ 鬼草【名】〔植〕紅色藻類に屬する海藻。常に岩石に平臥して生ず。體は深紫色又は紅紫色にして、形やや扁く、その幅一分乃至一分五厘、兩緣銳く、中央少しく隆起し、不規則に小數の枝を分つ。外海の岩石に生ず。

おに-くひ 鬼喰【名】『おに(鬼)(七)參照』飲食物の毒見。おになめ。四季物語「鬼喰をさせて、宮內の神をしてまゐらすれば」

おにぐる

おに-ぐるみ 鬼胡桃・山胡桃【名】〔植〕胡桃(クル)科に屬する山地自生の喬木。高さ五六丈に及び、樹皮深裂し、葉は奇數羽狀複葉にて、夏日、花開く。種子は食ふべく、樹皮は染色用に供し、材は建築・器具に供す。おぐるみ。

おに-くわんざう 鬼萱草【名】〔植〕やぶかんざう(藪萱草)に同じ。

おに-げし 鬼罌粟【名】〔植〕罌粟(ビ)科に屬する多年生の草。高さ二三尺。莖に粗毛あり。葉は分裂して羽狀をなし、長さ一尺ばかり、鋸齒あり。五月頃、濃赤色の大形の花開く。小アジヤ及ペルシヤの原產。

おに-げら 鬼啄木鳥【名】〔動〕おほあかげら(大赤啄木鳥)に同じ。

おに-ご 鬼子【名】■親を害する如き獰惡なる性質の子。莖、親に似ぬ子はおにご」■鬼のごときさましたる子。

おに-ごころ 鬼心【名】鬼の如き殘忍なる心。落窪「天が下の鬼心の人も、え憎み奉らじ」〔俚語〕

おに-ごっこ 鬼事【名】おにごと(鬼事)(二)に同じ。

おに-ごと 鬼事【名】■能(ノウ)の鬼・惡魔などを、仕手(シテ)に仕組みたるもの。例へば「土蜘蛛」「羅生門(ラシヤウモン)」などの類。■小供の遊戲の一。一人が鬼となり、他の者どもを追ひて捕へんとし、捕へられたる者は代りて鬼となりて、また他を捕へんとすること。おにわたし。おにごっこ。おにごっこ。おにおに。むかへぼ。つかまへぼ。つかまへ。おにあそび。おにんぶくろ。

おに-ごのみ 鬼好【名】おにころし(鬼殺)(一)を云ふ。(下野國日光の方言)

おに-こぶし 鬼拳【名】〔動〕腹足(フクソク)類に屬する軟體動物。殼は堅き紡錘(スイ)形をなし、螺塔(ラタウ)は體層よりも短く、螺肋(ラロク)上に銳く大なる刺狀の結節あり。表皮は淡褐色、口內は帶白色。

おに-こんぶ 鬼昆布【名】〔植〕褐藻類に屬する昆布。北海道及び千島に產す。根は絲狀にして、七回乃至九回分枝し、莖は長さ二三寸、葉は大にして丈餘に達す。いたこんぶ。

おにごろ

おに-ごろ【名】〔植〕おきなぐさ（翁草）を云ふ。〔越中國の方言〕

おに-ごろし 鬼殺【名】一最も強きこと、又その人。〔俚語〕二酒精（アルコル）分の強き酒。おによけ。おにごのみ。〔東國の方言〕 俳諧新選「嘯山」「挙入や笈に用意の鬼ころし」 三氣の強き、下等なる烟草。

おに-さくざ 鬼作左【名】〔人〕『性質極めて頑固なりしよりいふ』德川氏三河三奉行の一人なりし本多作左衞門重次の綽名（ナアダ）。 落穂雜「この三人の心ひとしからず。當時、賤しき者どもの諺に、ほとけ高力・鬼作左・どちへんなしの三郎兵衞といひしなり」

おに-ささえ 鬼蟒螺【名】〔動〕ささえの一種。普通のよりは形長くして、末尖り、角ふとし。

おに-さだめ 鬼定【名】鬼事（二）の鬼となるべき人を定むること。

おに-さへぎ 鬼障木【名】正月、門松のもと又は戸外に、罍にて一年十二個月の數に擬したる十二本の横筋を引きたる割木を數多く立つるもの。伊勢神宮邊の風俗にて、魔障（マヤウ）を防ぐ意なるべしといふ。おにおさへぎ。

おに-にし 御西【名】西本願寺及びその宗派の寺の敬稱。（お東に對して）〔眞宗信徒の語〕

おに-にし 鬼石【名】〔地〕上野國多野（タノ）郡にある町。神名（カナ）川の左岸。南甘樂（カンラク）及び秩父（チチ）への通路に當る山驛。

おに-にし 鬼し【形二】おにおにし（鬼鬼し）に同じ。〔古語〕

おに-しだ 鬼羊齒・海蝦青【名】〔植〕水龍骨（ポウラン）科に屬する多年生の草。海濱に生ず。葉は雉子の尾に似て闊く大く厚く、光澤あり、冬も凋（シボ）まず。秋、葉の背に圓き子囊群を著く。おにやぶそつて。

おに-しばり 黄瑞香【名】〔植〕瑞香（ヤウヂ）科に屬する落葉灌木。幹の高さ三四尺。花は新葉と共に春咲き、その形、瑞香の花に似て淡黄色。實は楕圓形にて、夏熟して赤色となる時、葉は皆落つ。本邦各地の山野に自生し、又、觀賞用として栽培す。樹皮は製紙の原料となる。毒性を含む。ばうず。こせう。なつばうず。

おに-しぼ 鬼縮【名】〔動〕蠶の一種。形、赤熟（ヒカ）に似てやや細長く、絲は細くして美なれども、飼育容易ならず。

おに-しぼり 鬼絞【名】粗く括りたる大形のしぼり染。

おに-すぎばら 鬼杉原【名】次條の略。

おに-すぎばらがみ 鬼杉原紙【名】杉原紙の一種。判は大中（ナオカ）に同じく、色は不鮮明。すきこみ。おにすぎはら。十帖紙。

おに-すげ 鬼菅【名】〔植〕みくりすげ（三稜菅）に同じ。

おに-すすべ 鬼すすべ【名】〔植〕ほこりたけ（馬勃）に同じ。

おに-すだれ 鬼簾【名】江戸吉原仲町（ナカチウ）の引手茶屋に年中吊（ルツ）せる簾。

おに-ぜきしやう 鬼石菖【名】〔植〕石菖の一種。葉のきはめて闊きもの。

おに-せんべい 鬼煎餅【名】鬼の面の如く醜くふくれたる煎餅。

おに-ぜんまい 鬼薇【名】〔植〕一薇（マヰ）科に屬する多年生の草。山野に自生し、嫩葉（ワカ）は普通の薇のごとくなれども、成長すれば高さ二尺乃至七尺・幅五寸乃至八寸に達す。二こもちしだ（子持羊齒）に同じ。

おに-ぜり 鬼芹【名】〔植〕きんぽうげ（毛茛）に同じ。

おに-ぞろへ 鬼揃【名】能（カノ）の替の形（カタ）の一。「紅葉狩」の曲の前の女連・後にすべて鬼になりて出で、脇（キヤ）なる惟茂（コレモ）と戰ふやうに仕組めるもの。

おに-たがらし 鬼田芥【名】〔植〕きんぽうげ（毛茛）に同じ。

おに-たちばな 鬼橘【名】〔植〕ゆ（柚）に同じ。

おに-たて 鬼蓼【名】〔植〕おほけたて（大毛蓼）に同じ。

おに-だひ 鬼鯛【名】〔動〕たひのむこげんぼち（鯛肛源八）に同じ。

おに-だまり 鬼曾【名】むないた（胸板）（二）に同じ。

おに-たらし 御多羅枝【名】おんたらし（御執）の訛。〔古語〕下學集「御多羅枝、オニタラシ」

おにづた

おに-づた 鬼蔦【名】一〔植〕蔦の一種。葉闊くして、五岐あり。二紋所の一。下の圖を見よ。

おに-つつじ 鬼躑躅【名】〔植〕れんげつつじ（蓮華躑躅）に同じ。

おに-つら 鬼貫【名】〔人〕ひらいづみおにつら（平泉鬼貫）を見よ。

おに-つら-き 鬼貫忌【名】八月二日に、平泉（ヒライ）鬼貫のために修する忌。

おに-つら-だういん 鬼貫導引【名】俳人鬼貫の、大阪にありて渡世のために始めし小供の導引。足より上へ揉（モ）上ぐるもの。

おに-つら-やま 鬼面山【名】〔地〕岩代國信夫（シノ）郡土湯（ユツ）村の西にある山。安達嶽と吾妻山との間に聳ゆ。高さ四二九〇尺。

おに-と 鬼斗【名】〔建〕隅肘木（ヅミヒヂ）などの上にある斗形（カタ）。他の斗形と同じ見通しに置かるるゆゑ、斗繰（クリ）は特別の形をなす。いがと。きくと。すみと。

おに-どころ 鬼野老【名】〔植〕えびどころ（江戸野老）に同じ。

おに-どの 鬼殿【名】一妖怪の住める家。二平安時代に、京都の三條の南・西洞院（ニシノトヰン）の東にありし邸宅。藤原朝成（ナリモ）が、同伊尹（ケタ）と參議の職を競ひ望みて勝たず、大納言たらんとしてなほ容れられざりしより、憤死して生靈（ヤウ）となりし處と言傳へられ、伊尹の子孫は、この家に入らざりきといふ。增鏡「鬼殿などは、斯くやありけんと、おそろし」

おに-とり 鬼取【名】おに（鬼）七に同じ。

おに-とり-やく 鬼取役【名】『おに（鬼）七を見よ』武家にて、尊長に供する飲食物の毒味をせし役。德川時代には、膳奉行ともいへり。

おに-なづな 鬼薺【名】〔植〕なづなの一種。普通のよりは大なるもの。

おに-なめ 鬼嘗・御煮嘗【名】貴人に供ふる食膳の毒味をすること。おに（鬼）七參照。

おに-の-いはや 鬼窟【名】〔地〕おにがじやう（鬼城）（二）に同じ。

おにのう

おに-のう 鬼能【名】「藤戸」・「山姥」の曲の如く鬼を脚色せる能。常に四番目に演ずるを以て、四番物ともいふ。

おに-の-くるま 鬼車【名】〔動〕『格物論に、胡蝶一名鬼車とあるよりいふ』てふ（蝶）の異名。

おに-の-げし 鬼野芥子・續斷【名】〔植〕菊科に屬する一年生の草。高さ二三尺、葉は下部のもの倒卵形又は篦形にして葉柄あり、上部のものは楕圓形又は披針形、共に齒牙緣をなす。夏より秋にかけて、淡黄色の花を開く。

おに-の-こ 鬼子【名】〔動〕『枕草子に「蓑蟲いとあはれなり。鬼の生みければ、親に似て、これもおそろしき心地ぞあらんとて…」とあり』みのむし（蓑蟲）に同じ。

おに-の-さら 鬼皿【名】一おにごと（鬼事）（二）を云ふ。〔常陸國の方言〕二小供の遊戯の一。多くの者、左右の手を寄集めて數へて行ふものといふ。

おに-の-しこぐさ 鬼醜草【名】〔植〕しをん（紫苑）に同じといふ。〔古語〕

おに-の-つぶて 鬼礫【名】〔鑛〕いはつぼ（岩壺）（二）に同じ。

おに-の-ま 鬼間【名】清涼殿の身舍（モヤ）より西南の角、殿上の間より北に當れる一室。壁に白澤王の鬼を斬る畫あり。

おに-の-ままこ 鬼纏子【名】能（カノ）の狂言の一。

おに-の-まゆはき 鬼眉掃【名】〔植〕やはずあざみ（矢筈薊）に同じ。「參照。

おに-の-み 鬼飲【名】酒の毒味。おに（鬼）七

おに-の-やがら 鬼矢幹・天麻・赤箭【名】〔植〕蘭（ラン）科に屬する一年生の草。山野の朽木に寄生す。高さ四五尺に及び、圓柱形にして淡黄赤色、節ごとに黑色の小薄皮あり。初出の際は、この皮相抱きて筍（ケウ）のごとし。黄赤色にして、黄蕊を有する花を開く。その形、玄參（ハンジヤウ）に似て大なり。根は乾して漢藥とす。おにやがら。かみのやがら。ぬすびとのあし。 和名續斷、波美、一云、於邇乃夜加良」「續斷の字、この草に當つるは、正しからず、鬼野芥子（ヤケシ）といふ

ものなりといふ）

おにば 鬼齒【名】牙の如く外に向ひて生じたる八重齒。

おにばしり 鬼走【名】社寺などにて、牛王（ごわう）の祭の時に行ふ、鬼を追ふわざ。東鑑「十四日修正經、今日結願鬼走」

おにばす 鬼蓮・芡【名】〔植〕睡蓮（ばすい）科に屬する多年生の水草。暖地の池・澤に生ず。葉も莖も蓮に似て刺（とげ）あり。夏の末、花梗出でて、四瓣・四層の紫色なる花を開き、花の下に毬ありて、中に無患子（むくろじ）に似たる實あり。種子は藥用とし、地下莖・種子・嫩（わか）き葉柄を食用とす。この草生ずれば、同じ池の蓮花は、みな損はるといふ。みづふぶき。みづぶき。いばらばす。

おにばば 鬼婆【名】おにおにしき老婆。無慈悲なる老婆。おにばばあ。

おにばばあ 鬼婆婆【名】前條の訛。

おにはーやき 御庭燒【名】えいらくやき（永樂燒）□を見よ。「同じ。

おにーばり【名】〔植〕せんだんぐさ（栴檀草）に

おにーび 鬼火【名】暗夜に沼澤・墓地などより燃えいづる青き火。原因は沼氣（きゃく）なりとも、燐火水素なりともいへど、共に臆說たるに止まり、未だ化學上正確なる說明を得ず。いうれいび。きつねび。いんくわ。鬼火（きくわ）。和名抄「燐、於邇比、鬼火也。人及牛馬兵死者血所化也」

おにーびし 鬼菱【名】〔植〕菱科に屬する一年生の水草。池・沼等に生じ、水底の根より細長き莖を生ず。葉は水面に浮び、菱狀卵形にして、尋常葉の外に、櫛狀に細裂せる沈生葉あり。葉腋に白色・四瓣の花を著け、四箇の棘ある堅き閉果を結ぶ。

おにーひとくち 鬼一口【名】『伊勢物語に「鬼ひとくちに食ひてけり」とあるに本づく』極めて些細なる、たやすき事がら。小町踊・謠曲「目に見えぬ鬼ひとくちか秋の風」

おにーひのき 鬼檜木【名】〔植〕あすはひのき（翌檜）に同じ。

おにーひばり 鬼雲雀【名】〔動〕おほひばり（大雲雀）に同じ。

おにーぶし 鬼節【名】鰹節（かつぶし）の一。銚子節又は仙臺節などの粗製品。あらぶし。

おにーふすべ 鬼燻【名】〔植〕ほこりだけ（埃茸）に同じ。「同じ。

おにーへご 鬼柳欅【名】〔植〕へご（柳欅）に

おにーぼし 鬼星【名】きしゆく（鬼宿）に同じ。

おにーほほづき 鬼酸醬【名】〔植〕いがほほづき（刺酸醬）に同じ。

おにーぼると 鬼ボルト《英 Anchor bolt 又は King bolt 又は Rag-bolt》【名】土木にて、下部太くして、拔けいづるを防ぐために逆目（めかう）を附けたるボルト。長さは短き方にて、形狀一樣ならず。

おにーまひ 鬼舞【名】おにやらひ（鬼遣）□に同じ。〔古語〕字鏡集「儺、オニマヒ・オニヤラヒ」

おにーまる 鬼丸【名】『獅嚙（しし）火鉢の鬼に似たる脚の獅子を斬りたるによりて名づけたりといふ』名越（なごし）尾張守高家累代の重寶なりとも、北條氏累代の重寶にて、後、新田義貞の手に渡れりともいふ。おにきり（鬼切）參照。「げ石。

おにーみかげ 鬼御影【名】〔鑛〕粗質のみか

おにーみそ 鬼味噌【名】□鹽氣多くして、味からき燒味噌。□外見は强さうにて、その實弱き人を嘲りていふ語。よわむし。よわみそ。太平記「唐橋や鹽の小路の燒けしこそ桃井（もゝい）殿は鬼味噌をすれ」

おにーみつば 鬼三葉【名】〔植〕うまのみつば（馬三葉）に同じ。

おにーむし 鬼蟲【名】〔動〕□かぶとむし（兜蟲）を云ふ。〔東北の方言〕□こがねむし（黃金蟲）を云ふ。〔陸奥國の方言〕

おにーむしや 鬼武者【名】きはめてたけき武者。あらむしや。

おにーむすめ 鬼娘【名】□無慈悲なる娘。□醜惡なる容貌の娘。

おにーん-ぶくろ 鬼袋【名】おにごと（鬼事）□に同じ。〔古語〕「り。

おにーもぢ 鬼綟【名】粗く綾りたるもぢず

おにーもつ 御荷物【名】□にもつ（荷物）の敬稱。□劇場にて、邪魔になる物。□伎倆も人氣も無きに拘らず、情實にて雇入れたる俳優。□有りて困る物。厄介もの。

おにーもみぢ【名】〔植〕槭樹（もみぢ）科に屬する落葉喬木。我が國にては本州及び九州の山地に自生す。葉は對生・圓形、五裂にして、上面平滑、葉脚は心臟形、各裂片は鋭頭にして粗き鋸齒あり。花は淡黃色にして、春、葉に先きだちて開く。おほばな。

おにーやがら 鬼矢幹【名】〔植〕おにのやがら（鬼矢幹）に同じ。

おにーやく 鬼役【名】□鬼飲（おにの）鬼管（おにく）の役をする人。□他人に憎まるる役目。

おにやく-なし 鬼役無【名】圍碁・將棋・弓などの勝負に、一度も勝たぬこと。〔備後國福山の方言〕

おにーやけ 御若氣【名】□にやけ（若氣）を見よ。□かうもん（肛門）の異名。

おにーやぶそてつ 鬼藪蘇鐵・海蝦青【名】〔植〕おにしだ（鬼羊齒）に同じ。

おにーやんま 鬼蜻蛉【名】〔動〕やんまの一種。普通のよりは大なるもの。

おにーやらひ 鬼遣・追儺【名】□古、禁中にて、十二月晦日（つごもり）の夜、人を疫病の鬼に扮裝せさせて、これを驅りやらひし式。なやらひ。つゐな。おにまひ。はうさうし（方相氏）參照。□後世、民間にて、節分の夜に、大豆を炒り、鬼打豆と呼びて「福は內、鬼はそと」と呼びつつ、戶障子に打附けて蒔くこと、古の追儺の遺風なり。まめうち。まめまき。おにうち。

（一）ひらやにお

おにーゆり 鬼百合・卷丹【名】〔植〕百合の一種。多く山野に生じ、葉も莖も姫百合（ひめゆり）に似て、大く長く、花は秋開き、六瓣・帶黃赤色にして黑き斑點あり。觀賞用に供せらるる。鱗莖は食用又は澱粉製造用に用ひらる。いぬゆり。おきなゆり。

おにーよけ 鬼除【名】おにとろし（鬼殺）□に同じ。

おにーわかめ 鬼若布【名】〔植〕褐色藻類に屬する海藻。北海道・樺太に產す。根は硬く、絲狀にして、數回分岐し、縱橫相交錯して、圓錐形の塊をなす。莖はやや圓柱形にして、倒卵形又は長楕圓形の小葉を夥しく密生す。葉は非常に長く、四五十尋のものもあり、質薄くして柔軟なり。

おにーわく 鬼枠【名】木挽（きびき）が木を挽割る時に、材を斜に立て掛くる枕桁（まくらげた）。

おにわく-どう【名】〔動〕蝦蟇（がま）の一種。普通のよりは大なるもの。「同じ。

おにーわたし 鬼渡【名】おにごと（鬼事）□に

おにーわらは 鬼童【名】鬼の如き姿をしたる童。〔古語〕枕「御使にいきたりけるおにわらはは、臺盤所のとじといふものの供なりけるを」

おにーわらび 鬼蕨【名】〔植〕おほかぐま（狗脊）に同じ。字鏡「母泉、鬼和良比」

おにをどり 鬼踊【名】鬼のをどり、又、鬼に扮（ふん）ちて踊ること。生玉心中「罪業の程思はれて、呵責おそろし、鬼踊の、寺の藪垣物凄く」

おーぬくもり 御溫【名】密室にこもりて、神・佛に祈禱（きとう）すること。

おーぬし 御主【代】同輩以下の人に用ふる第二人稱。おまへ。おのし。ぬし。〔俚語〕

おーぬめり【名】〔動〕なまこ（海鼠）を云ふ。〔女の語〕

おーね-の-こ おねの子【名】おほねらの子。

おーねば 御根葉【名】〔植〕穎割（かびわり）の大きくなりたるもの。〔大阪の語〕

おーねば 御粘【名】□にぬき（煮拔）□を云ふ。〔女の語〕□飯の煮えたる時、釜のそとに溢れ出づる汁。〔女の語〕

おーねむ 御睡【名】小供のねむたがること。〔俚語〕

おーね-ら【名】〔動〕おほねらに同じ。

おーねり 御邃・御練【名】□ねりもの（練物）の敬稱。□極めてゆるやかに道を歩むこと。〔俚語〕□寺院にて、法樂のために行ふ行道（ぎやうだう）の儀式。

おの【名】おもと（表）に同じ。おのと。おも。〔古語〕萬葉「針袋とりあげ前に置きかへさへばおのともおのや裏も縫ぎたり」

おの己【名】おのれ（己）に同じ。（但し助詞「が」を伴ふ領格の場合又は熟語の形にのみ用ふ）竹取「かくいやしきおのがもとに、しばしおはしつるなり」

己が色色【句】次條に同じ。 續古今「雲しきて降る春雨はわかねども秋の垣根はおのがいろいろ」

己が樣樣【句】こころごころに。おもひおもひに。それぞれに。己が色色。己が品品。

己がじし【句】れめいめいに。そぞれに。おのおの。こころごころに。〔古語〕拾遺「秋風のよもの山よりおのがじし吹きて散りぬるもみぢかなしも」

己が品品【句】「己が樣樣」に同じ。風雅「法の雨はあまねくそそぐものなれどうるふ草木はおのがしなじな」

己が丈度（ケカバ）【句】己の手の親指と人さし指とを擴げたる長さを五寸とし、又その人さし指の中の節と上の節との間を一寸として、長さをはかること。

己が散りぢり【句】おのおのちりぢりに。〔古今「秋の紅葉と人人はおのがちりぢりわかれなば」

己がごち【句】おのが友人。わが同志。〔古語〕拾遺「おのがどち、隱したる手どもあらはして」

己が向き向き【句】各自の心のままに。思ひ思ひに。萬葉「はふ蔦のおのがむきむきあま雲のわかれしゆけば」

己が世世【句】夫婦離別して、各自に世を渡ること。〔古語〕伊勢「己が世世になりにければ、疎くなりにけり」

己も世【句】おのが世。〔古語〕萬葉「人ごとをしげみこちたみ己も世にいまだ渡らぬ朝川渡る」

おの【感】うたがひ怪しむ時に發する聲。おんの。やあ。〔古語〕字鏡「吁、疑怪之辭也。於乃」

おの-おの 各【代】『己（オ）己（オ）の義』第二人稱又は第三人稱の複數。その人人かたがた。きみたち。

おの-おの 各【副】おのれおのれ。それぞれ皆。たがひに。めいめい。おのもおのも。

おの-がじし 己がじし【句】おの（己）の條下を見よ。

おの-がたたかばかり 己が丈度【句】おの「下を見よ。

おの-がごち 己がごち【句】おの（己）の條下を見よ。

おのがれ 己【代】おのれ（己）に同じ。

おのころ-じま 淤能碁呂島・磯馭盧島【名】〔地〕『おのづから凝（こ）りて成れる島といふ意』太古、伊弉諾（ナギ）・伊弉冊（ナミ）二神の天降りたまひて、國土を產み成したまひし時に、まづ經營したまひし島。今の淡路國の西南又は西北にある小島なりなどといへど、詳かに知りがたし。記「おしてるや難波の崎ゆいでたちてわが國見ればあはしまおのころじまあぢまさの島も見ゆ」

おの-のさ 御主【代】おぬし（御主）の轉。おのし。〔三河國の方言〕

おの-さま 己樣【代】第二人稱。あなた。おぬし。おまへさま。おのさ。〔德川時代の俚語〕卯月の紅葉「いや、我れよりもおのさまの蜜なでつけて」

おの-さん 己樣【代】前條の音便。

おの-のし 御主【代】おぬし（御主）の轉。〔俚語〕浮世風呂「そして、おのしは、御手習にいったちやあねえか」

おの-じな 於字名【名】女子の普通の名。即ち假名二字の名にて、その上に敬語の意なる「お」を添へて呼ぶもの。例へば、お花・お鈴・おくま等の類。（源氏名に對して）

おのせ【名】いしなご（石投）を云ふ。〔伊勢國の方言〕

おの-づから 自ら【副】『己づからの意。づからは接尾語』他の力をからずして。もとより。自然に。偶然に。おのづと。 源氏「あながちにおまへさらずもてなさせたまひしだに、おのづから輕きかたにも見えしを」 **■**もしも。萬一。おのづと。

おの-づと 自ら【副】前條に同じ。〔俚語〕

おの-づま 己妻【名】自身の妻。わが妻。〔古語〕萬葉「おのづまを人の里におきおほほしく見つつぞ來ぬるこの道のあひだ」

おの-のぼり 御上【名】京都へ上ること、又その人の敬稱。おのぼりさん。（おさがりに對して）

おのぼり-さん 御上樣【名】■前條に同じ。**■**京都見物に來る田舍者を卑（ヤ）しめていふ稱。〔京都の俚語〕

おの-ぼる 己惚る【動下二自】うぬぼる（己惚る）に同じ。

おのぼれ 己惚【名】うぬぼれ（己惚）に同じ。

おのぼれ-かがみ 己惚鏡【名】うぬぼれかがみ（己惚鏡）に同じ。

おのみ【名】料理にて、雉子（キ）の首のみ燒きて、肴に出すこと。

おの-も-おの-も 各【副】おのおの（各）に同じ。〔古語〕續紀「おのもおのも、さだかに明（カ）く清き心をもちて」「見よ。

おの-も-よ 己も世【句】おの（己）の條下を見よ。

おの-ら 己等【代】おのれら（己等）に同じ。われら。〔古語〕拾遺「女なるおのらだにこそ、すぢのたえ候ふことは思ひぬべし」

おの-れ 己【名】その人自身。その物みづから。自分。 飼花「風をいたみ岩うつ波のおのれのみ碎けて物をおもふ頃かな」

己達せんと欲して、人を達せしむ【句】『論語の雍也篇に「夫仁者、己欲レ立而立レ人、己欲レ達而達レ人」とあるに本づく』仁者は、他人と自己との間に差別をおかず、わが事を遂げんと欲して、他をも助けて遂げしむ。〔諺語〕

己に克（カ）ちて禮に復（カ）る【句】『論語の顏淵篇に「顏淵問レ仁、子曰克レ己復レ禮爲レ仁」とあるに本づく』私欲を棄て、天理に歸す。克己復禮（コクキフク）。〔諺語〕

己に如かざる者を友とする勿れ【句】『論語の學而篇と子罕篇とに「子曰…無レ友不レ如レ己者」とあるに本づく。但し子罕篇には「無」を「毋」に作れり』己より劣れる者を友として交はるは、修養の道にあらず。〔諺語〕

己の欲せざる所は人に施す勿れ【句】『論語の顏淵篇と衞靈公篇とに「己所レ不レ欲勿レ施二於人一」とあるに本づく』わが欲せぬことは、他人もまた欲せぬことなれば、他人におよぼすな。〔諺語〕

己を屈す【句】『孔叢子に「屈レ己則制二於人一、抗レ志則不二愧於道一」とあるに本づく』わが信ずるところを抑へて、他人に從ふ。

己を知る者の爲に死す【句】『漢書の司馬遷傳に「士爲二知レ己者一死、女爲二悅レ己者一容」とあるに本づく』士たる者は、わが精神を理解してくるる人のためには、一命をも棄つ。〔諺語〕

己を枉（マ）ぐ【句】『孟子の萬章上篇に「未レ聞二枉レ己而正レ人者一也」とあるに本づく』我が守る所を棄つ。

己を虛（ム）しうす【句】『漢書の五行志に「周既克レ殷、以二箕子一歸、武王親虛レ己而問焉」とあるに本づく』私情を全く捨てて、道に從ひ又は他人に從ふ。

己を悅ぶ者の爲に容（カタチ）す【句】『「己を知る者の爲に死す」の條を見よ』女は、己を愛してくるる人のために、容姿を調ふ。〔諺語〕

おの-れ 己【代】■第一人稱。われ。おのが。おの。**■**同等以下の人に用ふる第二人稱。なんぢ。うぬ。おのがれ。おの。 拾遺「など、おのれは、みそか男して、人と文かよはし」

おの-れ 己【副】おのれと（己と）に同じ。〔古語〕源氏「松の木の、おのれ起きかへり」

おの-れ 己【感】物事に激して、みづから勵ます時に發する聲。おのれくそ。〔俚語〕

おの-れ-おひ 己生【名】自然に生出でたもの。自生。

おの-れ-がほ 己顏【名】われはがほ（我顏）に同じ。〔古語〕袋成女集「松が枝萩の葉むけにうちなびきおのれがほなる風のおとかな」「なにくそ。〔俚語〕

おの-れ-くそ 己糞【感】おのれ（己）に同じ。

おの-れ-と 己と【副】われと。おのづから。おのづと。おのれ。〔古語〕新孩拾遺「昨日まで人にまたれし涼しさをおのれと急ぐ秋のはつかぜ」

おのれめ 己奴【代】おのれ(己)[一]を卑しめ罵りていふ語。うぬめ。狂言(花子)「おのれめは、何してここにゐるぞ」

おのれやれ 己やれ【感】他人に對し殘念なる事をなしたる時に發する聲。生駒萬頭語「それとも知らず別れたれど、どうやらお聲が氣にかかり、戻って聞けば、やっぱりその人、おのれやれ追ひつかうと、跡追うて來たれば」

おのれら 己等【代】[一]第一人稱の複數。われら。われわれ。おのら。狭衣「さるものから、おのれらをもおぼしうとみ」[二]同等以下の人に用ふる第二人稱の複數。なんぢら。おのら。うぬら。

おは 御葉【名】な(菜)の敬語。(女の語)

おば【名】『おばの略』[一]父母の母。祖母。(古語) 源氏「かの御おばの北のかた」[二]老いたる女。老婆。おばあ。

おばあ【名】前條[二]に同じ。(俚語)

おばあ【名】(動)えそ(鱈)を云ふ。(土佐國の方言)

おばある(英Ocel)【名】(鐵)たんぱくせき(蛋白石)に同じ。

おばいけ【名】鯨の身と尾との間の肉。おばけ。おばやき。

おーはい-はい【名】『はいは服從・應答の聲』他人に詔ひて、みだりに服從すること、又その人。(東京の俚語)

おーばう 御坊【名】[一]他人の子の敬稱。(東京の語)[二]世事に通ぜず、小供らしきこと、又その人。(東京の俚語)[三]『坊は坊主の略』僧の稱。どばう。おんばう。

おーばうず 御坊主【名】ばうず(坊主)[四]の敬稱。

おば-おとご 祖母おとご【名】『ははおとご(母おとど)を見よ』おばさま。おばぎみ。(古語) 源氏「あないとほしや、おばおとどの上ないたうかろめたまひそ」

おばがしら【名】(植)おきなぐさ(翁草)[一]に同じ。

おはかせ 音博士【名】おんはかせ(音博士)

おはからひ-かた 御計方【名】室町幕府の職制の一。諸家よりの獻上物の返禮方を調査することを掌りしもの。おはからひのしゅう。「同じ。

おはからひ-のしゅう 御計衆【名】前條に

おーはぎ 御萩【名】はぎのもち(萩餅)に同じ。(女の語)

おはぎ【名】(植)『うはぎの轉』よめな(嫁菜)に同じ。(古語) 和名「齊蒿。七卷食經云、齊蒿菜。一名、莪蒿、於波岐。崔禹曰、狀似二艾草一而香、作レ羹食レ之」

おばきたのかた 祖母北方【名】或人には祖母にあたり、他の人には北の方にあたる人。(古語) 榮花「おばきたのかた、取り放ちて、枇杷殿にてぞ養ひ奉りたまひける」

おーはぐろ 御齒黑・鐵醬【名】はぐろ(齒黑)に同じ。(女の語)

おはぐろ-おや 御齒黑親【名】古、男女の始めての齒黑めの際、親族又は知己の中なる福德の女子のこれを掌りし者。かれおや。えぼしおや(烏帽子親)參照。薩摩歌「おや果てなされた母樣のおはぐろ親にならせられ、おれとは兄弟同然に」

おはぐろ-つぼ 御齒黑壺【名】おはぐろを容れおく壺。かねつぼ。

おはぐろ-どぶ 御齒黑溝【名】(地)東京新吉原の遊廓のうしろにある溝。古は遊女も齒黑(ハグ)を施し、そのあとの汁を、この溝に捨てしと名づけたり。

おはぐろ-とんぼ 御齒黑蜻蛉・總【名】(動)蜻蛉の一種。山中の小川に多く、翅は黑くして薄く弱く、靜止の際には直立す。かねつけとんぼ。くろやんま。

おはぐろ-ばな 御齒黑花【名】(植)うまのすずくさ(馬兜鈴)に同じ。

おはぐろ-びしやく 御齒黑柄杓【名】貴、御齒黑壺より御齒黑を汲出すに用ひし小き柄杓。

おーばけ 御化【名】[一]ばけもの。へんげ。(女の語)[二]書籍の表題(ダイ)を改めて、恰も新刊書の如く見せかけて公にすること。(本屋の語)[三]おばけごよみ(御化暦)の略。[四](動)おばけがひ(御化貝)の略。

おばけ【名】おばいけを云ふ。(肥前國の方言)

おばけ-がひ 御化貝【名】(動)やどかり(寄居蟲)に同じ。

おばけ-ごよみ 御化暦【名】伊勢神宮司廳より發行する正式の暦の外に、民間にて祕密に出版する略暦。おばけ。(俚語)

おーはこ【名】その人の最も得意とする遊藝。えて。

おば-こ【名】(植)おほこ(車前)の訛。

おば-こ 祖母子【名】女の髮の結ひ方の一。左右二つの小き輪を造りて、笄(カイ)を横に貫く。多くは老女の結ふもの。おばこむすび。

(こばお)

おばこ-むすび 祖母子結【名】おばこ(祖母子)に同じ。

おはさうず 御座さうず【動佐變自】おはします(御座す)に同じ。(古語) 源氏「うちひそみて泣きおはさうず」

おはさふ 御座さふ【動四自】おはす(御座す)の延語。(古語) 大鏡「昔物語して、このおはさふ人人に…聞かせ奉らん」

おーはじき 御彈【名】小供の遊戲の一。石はじき[二]の類。小石の外、貝殼・木の實などをも用ふ。

おば-しぎ 祖母鷸【名】(動)うばしぎ(姥鷸)に同じ。

おーはした 御半下【名】おす(御末)に同じ。

おはした-しゅう 御半下衆【名】おすゑしゅう。御末衆)に同じ。

おはし-どころ 御座所【名】貴人の居るところ。おはしましどころ。おましどころ。おまし。(古語) 狭衣「この殿のおはしどころも、わざともなきさまにもてなし」

おばしま 欄【名】てすり(手摺)に同じ。(古語) 和名「軒檻。漢書注云、軒檻、上板也、於波之萬、殿上欄也」

おはし-まさふ 御座しまさふ【動四自】おはします(御座す)の延。(古語) 榮華「君たち、數をつくしておはしまさふ」

おはしまし-どころ 御座所【名】おはしどころ(御座所)に同じ。狭衣「一品宮のおはしましどころ」

おはしまし-よし 御座善し【形一】おはしますに都合よし。(古語) 榮花「皇后の宮の御かたは、疾くおはしましよかるべきをせさせたまへれば」

おはします 御座す【動四自】『ますは接尾語』おはす(御座す)を、一層丁寧にいふ語。おはします。おまします。まします。

おはします 御座す【助動】おはす(御座す)に同じ。源氏「何事もおぼしめしわかれず、こもりおはします」

おはし-もの 監物【名】けんもつ(監物)の異名。(古語)

おーはしり-しゅう 御走衆【名】はしりしゅう(走衆)の敬稱。

おはす 御座す【動四自】次條に同じ。宇治「させる能(タ)もおはさねば」

おはす 御座す【動佐變自】あり(有り・在り)。をり(居り)。きたる(來る)・さる(去る)の敬語。おはします。蜻蛉「おん前を歩みわたりて、西ざまにおはするを」

おはす 御座す【助動】他人の動作をあらはす動詞に添へて敬意を示す語。たまふ。おはします。(古語) 源氏「おとどいとおかしと、ほの聞きおはす」

おはた-ざし 御旗差【名】はたさし(旗差)の敬稱。

おはた-ざひ 御旗副【名】はたざひ(旗副)の敬稱。

おはち 御八【名】はち(八)を見よ。

おーはち 御鉢【名】めしばち。めしびつ。(女の語)

御鉢が廻(ヤ)る【句】順番が我が身の上にまはり來る。(俚語) 浮世床「おれが番か、ありがたい、やっとのことでお鉢が廻って來た」

おはちれう 御鉢料【名】寺院の供米(イマ)。

おはつ 御初【名】はつ(初)の敬稱。

おーはつ-づけ 御葉漬【名】なづけ(菜漬)を云ふ。(女の語)

おはつ-てんじん 阿初天神【名】『曾根崎の遊女お初の情死ありしよりいふ。そねざきしんぢゅう(曾根崎心中)を見よ』そねざきてんじん(曾根崎天神)の俗稱。

おはつてんじん-き 阿初天神記【名】そねざきしんぢゅう(曾根崎心中)を見よ。

おはなことばん 御花小判【名】柳の枝に、繭玉(ダマ)などと共に吊(ツル)せる玩具の小判。

おはなごま 阿花獨樂【名】獨樂の一種。木にて六面又は八面に作り、その各面に繪を書き、別に各面に相當せる繪の札を一人一枚づつに配りおき、さてその獨樂をまはして、止まりたる時、上面に現はれたる繪に相當せる札を持てる者を勝と定めしもの。元祿の頃流行せしといふ。

おはなし 御放【名】德川時代に流行せし富籤(ブクジ)の一種。賭博に近かりしもの。

おはなしうり 御放賣【名】おはなしを賣りあるきし人。寛天見聞記「けんとくうり・札うり・おはなしうり」

おはなしーしゆう 御話衆【名】あんざいしゆう(安西衆)に同じ。

おはなばたけ 御花畑【名】高山の頂に近き所に、雜草混生し、夏の頃、一時にその花開きて、美觀を呈する處。北地に進むに從ひて、平地にもこの現象を呈す。又、火山にありては、全くこれを缺くことあり。

おはね 御跳【名】はね(跳)【三】を見よ。

おはふ 追はふ【動下二他】おふ(追ふ)に同じ。おはゆ。河原逢引「惜しいところを取逃して、これまでおはへて來た」

おはま 御濱【名】〔動〕はまぐり(蛤)を云ふ。〔女の語〕「(濱離宮)に同じ。

おはまごてん 御濱御殿【名】はまりきゆう(濱離宮)に同じ。

おはまり 御嵌【名】『はまる(嵌る)を見よ』【一】深く心をこむること。執著(シウチク)。薩摩歌「いかいおはまり」【二】だまさるること。〔俚語〕御伽名代紙「今、世間に、たぶらかされし事を、おはまりといふ」

おはむき 御齒向【名】へつらふこと。おせじ。きげんとり。浮世風呂「この本を造るからの、おいらも役者にしてくんねえなと、合卷(カツク)の繪草子を、おはむきに遣る」

おばーむし 祖母蟲【名】〔動〕いはいそめ(岩磯目)に同じ。

おはん【代】第二人稱の敬稱。おまへさん。あなたさま。〔薩摩國の方言〕

おーばんし 御飯子【名】めしたきをんな(飯焚女)を云ふ。〔甲斐國の方言〕

おはもじ 御は文字【名】『ははぢ(恥)の略。もじ(文字)は接尾語』はづかしきこと。おはもじさま。〔女の語〕

おはもじーさま 御は文字樣【名】前條に同じ。〔女の語〕

おーはやう 御早う【感】『「御早く」の音便。御早く御座るの略』【一】朝、人に逢ひたる時の挨拶(アイサツ)にいふ語。【二】會合などに、後れて來たる人が、早く集れる人に對していふ語。「言」

おばやき【名】おばいけを云ふ。〔豐後國の方〕

おはやし 御囃子【名】はやしかた(囃子方)の敬稱。「休息すべき樂屋の室。

おはやしーべや 御囃子部屋【名】囃子方の

おはゆ 追はゆ【動下二他】おはふ(追はふ)の訛。會根崎心中「心も夏の夜のならひ、命おはゆる雞の聲」

おはら 御腹【名】貴人を生みたる女。

おはら ひらたく作りたる一種の盃。

おはら 大原【名】〔地〕おほはら(大原)【三】に同じ。

おはらぎ 大原木【名】【一】山城國の大原女の賣る薪。おほはらぎ。おほはらめ(大原女)参照。【二】能(ノウ)の狂言の小舞の一。

おーはらーご【名】おこらご(御子良子)の訛。類聚名物考「おこらご…俗には、おはらごともいふなり」

おはらーごかう 大原御幸【名】謠曲の一。平家の一門西海に滅亡の際、建禮門院、源氏の武士に甲斐なき命を救はれて、再び都に上らせたまひ、遂に出家して、山城國の大原(オハラ)に籠りたまひしが、後、白河法皇の御幸ありて、昔の御物語に及ぶ事を作りしもの。

おはらーざし 大原志【名】『大原神社へと志す意ならんといふ』丹波國の大原神社の祭禮。五月二十八日に行はる。甘酒を供物とし、又、賽人に饗す。甘酒祭。

おはらーじんじや 大原神社【名】丹波國天田郡川合村大字大原に鎮坐せる神社。祭神は伊弉册(イザナ)尊。養蠶の神とす。

おーはらひ 御祓【名】【一】神社・佛閣などより厄拂のために出す札。【二】七月三十一日・八月一日の兩日に攝津の住吉神社にて行ふ大祓祭。【三】おはらひばこ(御祓箱)【一】の略。鬢筑波「風の神のおはらひなれや扇子箱」

おはらひ 御拂【名】【一】はらひ(拂)【一】に同じ。〔女の語〕【二】賞拂ふことの敬稱。

おはらひーくじ 御祓籤【名】籤をとりて、神慮を伺ぶこと。

おはらひーざし 御祓差【名】次條に同じ。

おはらひーたて 御祓立【名】はらひたて(祓立)の敬稱。おはらひざし。おはらへたて。

おはらひーだんご 御祓團子【名】神社の祓除の際などに、その附近にて賣る團子。

おはらひーばこ 御祓箱【名】【一】祓の御符(フ)を容るる箱。おはらひ。【二】『御拂の意を言ひかけたる語』召使ひたる人を追出すこと。解雇。解職。〔俚語〕【三】たいま(大麻)【三】に同じ。

おはらひーもの 御拂物【名】【一】はらひもの(拂物)の敬稱。【二】追放すべき人。

おはらへーたて 御祓立【名】おはらひたて(御祓立)に同じ。

おはらーみこ 大原巫【名】あづさみこ(梓巫)を云ふ。〔京都の語〕「に同じ。

おはらめ 大原女【名】おほはらめ(大原女)

おはり 御針【名】【一】裁縫のわざ。はりしごと。【二】裁縫のわざに雇はるる女。

おはり 御鍼【名】はり(鍼)【一】【二】の敬稱。

おはりーこ 御針子【名】裁縫のわざを習ふ女の子。

おはる 生はる【動四自】おふ(生ふ)に同じ。〔古語〕萬葉「あはをろのをろ田におはるたはみづら引かばぬるぬるあをとな絶え」

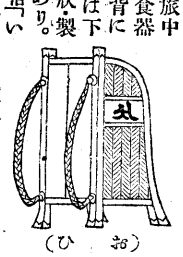
おはれ 御晴【名】【一】はれぎ(晴著)の敬稱。浮世風呂「田婢(ヤマダシ)の湯具(ユモ)から、令室(レイシツ)の絹布(ハ)へも移る」【二】おなり(御成)に同じ。古寫本節用集「御晴、公方御出」

おはれーかかる 負はれ掛かる【動四自】もたれかかる。寄りかかる。狂言・正動方角「ひつそうてといへば、おはれかかるやうにしをる」

おばーをば 從祖母【名】じゆうそぼ(從祖母)に同じ。〔古語〕名義抄「從祖母、オバヲバ」

おひ 追【名】おひせん(追錢)の意。御伽名代紙「齋(キ)・非時せしは、盜人におひぞかし」

おひ 笈【名】『おひ(負)の意』修驗者・行脚僧(ヤウジヤ)などの、旅中に、書籍・衣服・食器などを入れて背に負ふ箱。多くは下に脚あり、形狀製作さまざまあり。おひずり。宇治「いかがせんと思ひて、おひうちおろして、内に入りてけり」



おひ【名】〔植〕ばいも(貝母)に同じ。

おび 帶【名】【一】衣服の上を、腰のあたりにて結ぶもの。帛・布・革・うち紐などにて造る。男帶・身帶の別ありて、女帶は幅ひろく、男帶は狹し。【二】帶のごとく物を卷きまとはせたる物。【三】はらおび(腹帶)【一】の略。【四】〔數〕『英Belt』一つの球を二つの平行せる平面にて切りたるとき、その間にある球面の部分。

帶に短し、襷(キス)に長し【句】物事の、彼に用ふるには過ぎ、此に用ふるには足らず、何れの役にもたぬ譬。〔諺語〕

帶の祝【句】懷胎せる女の腹帶を締むる祝。著帶。

帶紐を解く【句】【一】「帶を緩くす」に同じ。大鏡「翁らが賤しきやどりも、帶紐を解きて、かどをだにささで、安らかに延び臥したれば」【二】次條【一】に同じ。

帶を解く【句】【一】はだをゆるす。同衾す。〔俚語〕【二】次條の語に同じ。〔俚語〕

帶を緩(ヌ)くす【句】氣遣ふこと無くなりて安心する譬。帶紐をとく。帶を解く。〔俚語〕

おび 飫肥【名】〔地〕日向國南那珂郡にある町。郡役所を置く。町の西の山腹に飫肥城址あり。伊東氏の舊城地。

おひーあがる 生上がる【動四自】生えのぼる。榮花「前栽(センザイ)・うゑ木ども、心にまかせておひあがり」

おびーあげ 帶揚【名】婦人が帶の結び目のさがらぬために結ぶ紐。種種あり。その帶の結び目の下に當る處には、結び目のふく

らむやうに、箱又は紙などを入れおく。せおひあげ。しよひあげ。

おーびい【名】『御比丘尼の略』びくに（比丘尼）を云ふ。〔周防國・長門國の方言〕

おーひいーさま 御姫様【名】『おひめさま（御姫様）の音便。〔俚語〕

おーひいーさま 御日様【名】おひさま（御日様）に同じ。〔女・小供の語〕

おーひいだす 逐出す【動四他】逐ひて外へ出す。おひだす。まくりだす。おんだす。おひいづ。

おーひいづ 逐出づ【動下二他】前條に同じ。〔古語〕

おーひいづ 生出づ【動下二自】一うまれいづ。草木はえ出づ。後拾遺「かすが野の雪のみつむと見しかども生ひいづるものは若菜なりけり」二生長す。發生す。おひたつ。〔古語〕源氏「若宮など、おひいでたまはば、さるべき序もありなん」

おーひいて 生出【名】生ひ出づること。おひたち。〔古語〕狭衣「ねぢけがましさおひいでなどを」

おーいれーのみ 追入鑿【名】鑿の一種。平鑿と同一の用途に用ひられ、形もこれに似て、甲薄く、鑿身と首の長さとを短くす。

おーいる 逐入る【動下二他】逐ひて内に入らしむ。紀「催入、オヒイレ」

おーうし 笈牛【名】河川工事に於ける一種の構造物。雑木・丸太・蛇籠（カゴ）などを結びて、水の溢出を防ぐもの。

おーうち 追討・追撃【名】逃ぐる敵を追ひかけて撃つこと。つゐげき。尾撃。追討（クヂ）。追撃（ゲキ）。

おーうつ 追討つ・追撃つ【動四他】一おうちをなす。追討（クヂ）す。追撃（ゲキ）す。尾撃す。二おひはなつ。おひいだす。放逐す。〔古語〕落葉「やがておひうたんと思ひしものを、使ひよしとのたまひて」

おーうら 帯占【名】古、常陸の國にて、二つの帯に、男女の名を別別に記し、神前にて禰宜（ネギ）に結ばせ、結び方によりて、その縁の吉凶を占ひしもの。「る人。

おーうり 帯賣【名】帯を賣るを職業とす

おーひえ 御冷【名】よご（夜著）を云ふ。つめた。〔女の語〕懸入卦柱暦「そなたの寢卷のおひえも貸して」「こと。

おーびえ 怯【名】おびゆること。おびえたる

おびえーどき 怯鬨・怯鯨波【名】おびえながらも、鬨の聲を揚ぐること。甲陽軍鑑「おびえ鯨波をつくり、あわてて立ちのき」

おーひかくる 追後る【動下二自】追ひかけて、及ばず。平家「頼朝、馬ねぶりして、父におひおくれたり」

おーひーおとし 追落【名】一追ひおとすこと。二おひはぎ（追剝）二に同じ。三圍碁にて、目多き石の、敵に追はれて、活路の無きこと。四おひこみ（追込）五に同じ。

おびーおとし 帯落【名】柔術にて、相手の前帯を取り、我が左足を相手の横に出し、我が左腕を相手の胸の前に當てて、相手の兩足を浮上らせて、後に倒す手。

おひーおとす 追落す【動四他】一追ひ迫りて落す。追拂ふ。「敵をおひおとす」二追ひかけて奪ひ取る。おひはぐ。盛衰記「朝夕、山だちして、年貢・正税おひおとし」三おひこむ（追込む）三に同じ。

おひーおひ 追追【副】次條に同じ。

おひおひーに 追追に【副】しだいしだいに。だんだんに。おひおひ。漸次に。源氏「おひおひに、内の事どもはしてん」

おひーおよぶ 追及ぶ【動四自】おひつく（追附）に同じ。

おひーかく 追掛く【動下二他】後より追ひゆく。おっかける。

おひかけ 追掛【名】一追ひかくること。おっかけ。二男女の間にて、相手の已に對して包み隠せる事を知らんために、知らぬ事をもよく知りたるやうに言ひかけて、返答を試むる謀略。〔昔の遊廓の語〕

おびーかけ 帯掛【名】徳川時代に、奥女中などの用ひし一種の帯留（ハナビ）。

おひかけーぶり 追鰛鰤【名】關西にて、歳末の魚市に間（マ）に合せんため、漁地より早船にて送り來る鰤。「に行ふこと。

おひかけーろく 追賭祿【名】まけず劣らず

おひーかさぬ 負累ぬ【動下二他】前前より金錢・物品を借りて、未だ返さず。東鑑「負二累件米一之輩、兼怖二譴責一」

おーひがし 御東【名】東本願寺及びその宗派の寺の敬稱。（御西に對して）〔眞宗信徒の語〕

おひーかぜ 追風【名】一背後より吹來る風。おひて。順風。新後拾遺「山人の歸るつま木のおひ風につもれど輕き花の白ゆき」二起居につけ、衣の動くによりておこる風。徒然「女房のおひかぜ」

おひーかた 負方【名】おひめ。かり。ふさい。借金。借財。

おひーがち 追勝【名】まうけがち（儲勝）を見よ。

おひーがね 追鐘【名】しきりに鐘を打鳴らすこと。

おひーがね 追金【名】おひせん（追錢）に同じ。

おひーがね 負金【名】をりがね（折金）に同じ。

おびーかね 帯金【名】一物に、帯狀に纏（モ）ひつけたる金具。二刀を腰に佩ぶるとき、緒を貫くために、刀の鞘に附けたる環（クワン）。

おひーかは 追川【名】（動）はえ（鮠）に同じ。

おびーかは 帯革【名】一革にて製したる帯。かはおび。和名「鞍、字亦作レ鞍、皮帯鞍也。揚氏漢語抄云、腰帯之革、未レ著二鈴具一爲レ鞍也」二器械用の調革（ガハベ）。

おびーかは 帯側【名】女の帯の半面に用ふる織物。おびぢ。

おひーかはる 生更る【動四自】かはりて生ゆ。はえかはる。生ひかくる。萬葉「少女らが後のしるしとつげをぐし生ひかはりおひて靡きけらしも」

おひーかひをけ 被貝桶【名】『おびは（被）の略』貝おほひに用ふる貝桶。婚禮の道具として、貝片方づつ一つ入れたる貝桶と區別するために特に名づく。

おひーかへす 逐返す【動四他】逐立てて返らしむ。おひもどす。「じ。

おひかへり 生歸【名】をりかね（折金）に同

おひかへる 生返る【動四自】おひかはる（生更る）に同じ。〔古語〕新千載「君が引く子の日の數をかぞふれば繪にかく松のおひかへるまで」

おびーがみ 帯紙【名】一物に卷きつけて引締むるなどの用をなす細長き紙。二たいし（帯紙）に同じ。

おひーからし 追枯【名】役に立たぬやうになるまで、はげしく追ひつかふこと。夢「大津馬のおひからし」

おーひき 御引【名】ひきもの（引出物）に同じ。〔女の語〕

おひーき 負木【名】慶長以前の頃、窮籠の無かりしため、婦女の、足をかけて人の背に負はれし木。

おひきーずり 御引摺【名】一著物の裾長く、歩むに引きずること、又そのやうに仕立てたる衣服。二女の立働くに無精（ナマケ）なること、又その女。三ひきずり（引摺）三の敬稱。〔俚語〕

おーひきなほし 御引直衣【名】ひきなほし（引直衣）の敬稱。おさげなほし。

おびーぎは 帯際【名】帯の結び際。栞北「御おびぎは、けざやかに見えたるなど、さまざま御目にとまり」

おひーぎり 追切【名】おひざまに斬ること。追ひかけながら斬ること。

おひーく 追來【動加變自】後より追ひかけて來る。萬葉「とりつづき追ひくるものはもものさにせめよりきたる」

おびく 誘く【動四他】をびく（誘く）を見よ。

おひーくづす 追崩す【動四他】追擊して、散亂せしむ。

おひーくび 追首【名】逃ぐる敵を追ひて斬る首。

おびーくひ 帯食【名】『口に帯を啣（クワ）まするより名づく』支那古代の鎧の胸先に附けたる鬼面の形。雅樂の太平樂などの裝束には、この甲を用ふ。

おびーくらげ 帯水母【名】（動）櫛水母（クシクラゲ）類に屬する腔腸（カクチヤウ）動物。扁平・帯狀にして透明、長さ三四尺あり、海上に浮動す。

おひーくる 追繰る【動四他】順次に後へ繰る。女殺油地獄「卯月なかばの初暑さ、末の閨に追ひ繰りて」「郭」に同じ。

おびーぐるわ 帯郭・帯廓【名】つけぐるわ（附郭）に同じ。

おーひげ 御髭【名】一ひげ（髭）の敬稱。二髭をはやしをる人を輕侮していふ稱。なまず。〔俚語〕三官吏は多く髭を生（ハヤ）しを

るよりいふ』くわんり（官吏）に同じ。なまず。〔俚語〕

御髭の塵【句】次條の略。

御髭の塵を取る【句】次條に同じ。

御髭の塵を拂ふ【句】媚びへつらふ。御髭の塵。御髭の塵を取る。〔俚語〕

御髭を讀む【句】人の弱點を知る。人を籠絡す。人をだましこむ。はなげをよむ。〔俚語〕

おひげなで 御髭撫【名】能（タ）にて、翁の時、面箱持の狂言師が、仕手（デシ）の前に面箱を据ゑ、中より翁を出して、その背を撫づる儀式。

おひ-ごえ 追肥【名】〔農〕原肥（ゲンピ）の補として、前に一度肥料を施し、更に肥料を施すこと、又その二度目の肥料。

おひこし-ぶね 追越船【名】『英 Overtaking vessel』他の船を追越さんとする船。海上衝突豫防法にては、その船は、他船の航路を避けて、衝突を豫防する義務あるものとせらる。

おひ-こす 追越す【動四他】あとより進み來りて、先になる。おひぬく。

おひ-こす 負越す【動四他】人を背負ひて、川などを渉り越す。狂言（ごぶかっちり）「今のほどおひこしたに、足のまめな。なぜに、又そちらへいかしやったぞ」

おひ-こみ 追込【名】一おひこむこと。二『人數を限らずに、次次に追込むゆゑにいふ』芝居の、最も低き價にて見物しうべき場所。おほいりば。おひこみば。たちみ。おほむかふ。三料理店などにて、室を分たずに、多くの客を入るる室。四下等なる密淫賣婦。風俗文選「おひこみ・辻ぎみのたぐひは、匂ひ曾て定らず」五花合せを四人以上にて行ふときに、上の三人出づと定まれば、下の一人の役札を出る三人が買ひて、落ちしむること。その賣るべき役札には、それぞれの價あり、又、その價として拂ふ石を、追込賃又は追込料といふ。もし賣るべき役札なきときは、無料にて落つるなり。おひおとし。

おひこみ-ちん 追込賃【名】おひこみ（追込）に同じ。

おひこみ-ば 追込場【名】おひこみ（追込）三

おひこみ-れう 追込料【名】おひこみ（追込）五を見よ。

おひ-こむ 追籠む【動下二他】罪人などを、家にこもり居らしむ。おしこむ。〔古語〕榮花「有國を、官（ツカサ）・位も取らせたまひて、おひこめさせたまひてしを」

おひ-こむ 追込む【動四他】一追ひて入らしむ。二病を內攻せしむ。浮世床「我慢して、ふんだてるがいいぜ。おひこむと、骨がらみだせ」三花合せにて、役札を買ひて、下の者を落ちしむ。おひおとす。〔俚語〕

おひ-こめ 追籠【名】罪人を、家に籠りをらしむること。

おひ-とる 生凝る【動四自】おひしげる。繁茂す。〔古語〕蜻蛉「かた岸に、木どもおひこりて、いとこぐらかりたる」

おひ-ざかな 追肴【名】追加して出す肴。

おひ-さがり 生下【名】女の髮の毛の切端のさがりたること。紫式部日記「髮…おひさがりの末より、一尺ばかり餘りたまへり」

おひ-さき 生先【名】生ひたちてゆくさき。生長する末。おひすゑ。源氏「人にまさりたるおひさき、しるく見えたまふ」

生先有り【句】生ひさき久しくて、行く末頼もし。榮花「今ひき植ゑさせたまひつる小木の、行末はるかに、おひさきありて、たのもしき若枝多く」

生先少し【句】行く末の頼み少し。

生先無し【句】行く末の頼みなし。枕「おひさきなく、まめやかにえせ幸など見てゐたらん人は」

おひさち-もの 負幸物【名】出雲國の國造（コクゾウ）の新任せる時、賜はるを例とせし物。〔古語〕

おひ-ひ-さま 御日樣【名】たいやう（太陽）を云ふ。おひいさま。〔女小供の語〕

おひざま-に 追樣に【副】あとにつづきて。あとを追ひて。平治「縅したてたる鎧五十領、おひざまに遣されたり」

おびざん 帶棧【名】〔建〕戸の腰に取附けたる横棧。

おびざん-ど 帶棧戸【名】〔建〕帶棧を取附けたる戸。おびど。

おひざ-もと 御膝下【名】一貴人のそば。二天皇又は將軍のおはします都會の地。轂（コク）の下（モト）。

おひし 大石【名】『大石（オホシ）の約』大なる石。〔古語〕記「伊勢の海のおひしにはひもとほろふ」

おひ-じき 追敷【名】〔商〕おひしようこきん（追證據金）に同じ。

おひじき-ぎん 追敷銀【名】〔商〕前條に同じ。

おびし-ぎは 帶仕際【名】帶を締むるところのきはは。

おひ-しく 追及く【動四自】おひつく（追附く）に同じ。〔古語〕記「伊邪那美（イザナミ）の命を…かの追ひしきしによりて、道敷（チシ）の大神と申すともいへり」

おひ-しく 生敷く【動四自】生ひつづく。繁りはびこる。〔古語〕萬葉「我がせこに我がこふらくは夏草の刈拂へども生ひしくがごと」

おひ-しげとう 追重籐【名】重籐の弓の、籐の捲き樣の一種。

おひ-しげる 生茂る【動四自】草木生えてしげる。長茂す。古今「戀ふれどもあふ夜のなきは忘れぐさ夢路にさへや生ひしげるらん」

おび-した 帶下【名】一衣服のうちにて、帶を締むる部分。二帶を締むるところより足までの距離。（袴の丈などにいふ）

おひ-しば 負柴【名】能（タ）の小道具の一。背負ふ薪・萩の枯枝を集めて作り、又、曲によりては櫻・菊などを折添ふることあり。

おび-しばり 帶縛【名】腰・腹の左右にて、帶のあたる部分。よわごし。和名「腰、於比之波利、腰左右、虛肉處也」

おび-じめ 帶締【名】女の帶のおさへとして、帶の上より結ぶ丸紐（クワン）の紐。帶留（ドメ）と同樣にて、金具の無きもの。

おび-じやう 飫肥城【名】日向國南那珂郡飫肥町にある城。文明の頃、島津忠廉（カネヒク）の有となり、四世忠親に至り、文祿の頃、伊東義祐に取らる。天正五年義祐豐後に走りし後は、島津氏の領となりしが、天正十五年伊東祐兵（スケタケ）これに封ぜられ、子孫相傳へて明治維新に至る。

おひ-しよう 追證【名】〔商〕次條の略。

おひ-しようこきん 追證據金【名】〔商〕株式會社組織の取引所に於て、相場の高低に應じ、本證據金の追加として徵收する證據金。おひじき。おひしよう。

おひしよう-ぜめ 追證攻【名】〔商〕取引所にて、買占または賣崩（カヒクヅシ）より生ずる違約の損害に備へ、なほその弊を救ふために追證金を徵收すること。

おびしろ-はだか 帶代裸【名】婦女子の、細帶を卷きたるばかりにて、見ぐるしき姿。ほそおびすがた。おびどけひろげ。〔俚語〕

おひ-すがふ 追次ふ【動四自】次條に同じ。〔古語〕源氏「人しれず思ひたまへ志したるを、かういふさいはひ人の腹の后がねこそ、また追ひすがひぬれ」

おひ-すがる 追縋る【動四自】一追ひつきて、すがる。おひすがふ。二こばまれたるを、强ひてたのむ。おひすがふ。

おひ-すつ 追棄つ【動下二他】追拂ひてふりすつ。宇治「聟をば、しうと、やがて追棄てけるとぞ」

おひ-すまひ 追相撲【名】相撲（スマヒ）の節會に擬しき勝負ある時、翌日召して、更に相撲せしむること。

おひ-ずり 負籠【名】おひ（笈）に同じ。

おひ-ずり 笈摺【名】巡禮者などの著物の上に著くる、袖の無き一種のうすき衣。笈を負ふ時、背の摺るるを防ぐためのものにて、形、羽織に類し、背は左・中・右の三部の布より成り、左・右は赤にて中央の白きは兩親あるもの、その反對なるは兩親無きをあらはす。おひずる。

おひ-ずり 追摺【名】印刷物などを、豫定の數にては不足なるため、引續き多く印刷すること、又そのもの。ましずり。おっかけずり。

おひ-ずる 笈摺【名】おひずり（笈摺）に同じ。

おひ-すゑ 生末【名】おひさき（生先）に同じ。〔古語〕拾遺「子日するをしほの野べの小

松原はるかに見ゆる千世の追ひす系」

おひ-せむ 追逼む【動下二自】おひてせまる。宇治「きつね、身を投げて逃ぐれども、おひせめられて、え逃げず」

おひ-せん 追錢【名】一旦拂ひし上に、更に餘分に支拂ふ錢。追加の金。おひがね。おひ。 盗人に追錢」

おひ-ぜん 追膳【名】式の膳の時、飯をかきわけて、汁をかけて食すること。 下學集「追膳、オヒセン」 「同じ。

おひ-そだち 生育【名】おひたち(生立)(二)に

おひ-そはる 生添はる【動四自】生長して、高さ增す。〔古語〕 榮花「おひそはるゆくすゑ遠き姫松とこだかき蔭と結びつるかな」

おびそへ-の-たち 帶添太刀【名】こだち(小太刀)に同じ。

おひ-そや 負征矢【名】箙(ヤナビ)に插して負ひたる征矢(ヤ)。鏃(ヤジリ)は丸根なるを式とす。(空穗に附くる征矢と區別していふ)

おひ-たき 追炊【名】飯を炊きて、尙ほ不足なるより、更に炊くこと。〔俚語〕

おひ-だし 追出・逐出【名】(一)逐出すこと。放逐。勘當。〔俚語〕「おひだしをくふ」(二)見物の終りたる時、見物人を出す合圖(ケヒ)に打つ鐘または太鼓。 小町題、入相もおひだしとなる花見かな」 光廣細職人歌合「鑄物師。まれに來る人をもはやくおひだしの鐘もいもじの怨めしきかな」(三)〔數〕〔英Elimination〕二箇以上の方程式より、未知數の一部を含まざる新しき方程式を作り出すこと。例へば $x+z=y, 2x+y=3$ より、減法によりて、$y=1$ を得る類。

おひだし-ぐすり 追出藥・逐出藥【名】內攻せる病などを發せしむる藥。

おひ-だす 追出す・逐出す【動四他】(一)おひいだす(逐出す)に同じ。(二)逐出藥にて、內攻せる病を發散せしむ。

おびただし 夥し【形二】(一)盛んに多し。甚し。いかめしく多し。 宇治「ただ寂心を殺せといひて、とりわきて泣くことおびただし」(二)甚し。非常なり。いみじ。 榮華「おびただしくめでたし」

おひ-たち 生立【名】(一)おひ立つこと。おひそだち。生長。(二)系統。履歷。

おひ-たつ 生立つ【動四自】生ひて延びゆく。生長す。おひなる。(おほし立つに對して) 源氏「かのなでしこのおひたつありさま、聞かせまほしけれど」

おひ-たつ 追立つ・逐立つ【動下二他】逐ひて去らしむ。逐拂ふ。おひだす。まくり立つ。まくし立つ。おったてる。

おひ-たて 追立・逐立【名】(一)逐立つること。(二)たちだて(店立)に同じ。(三)からすきの後方に出でたる柄の如きもの。犂梢。 和漢三才圖會「耒梢、於比太天、後如レ柄而喬者也」 追立の官人(クワン)【句】次條に同じ。 追立の使【句】流人を追立てて、配所に赴かしむる使。追立の官人。 保元「檢非違使惟繁・資能二人、追立の使にて」

おひ-たむ 生留む【動下二他】おひとむ(生留む)に同じ。〔古語〕 萬葉「あすかの川のみをはやみおひためがたき岩まくら苔むすまでに」

おひ-ぢ 追乳【名】旗に文字を書くに、乳(チ)を、向ひて左の方にすること。(にげ乳に對して)

おひ-ぢ 帶地【名】おびかは(帶鞦)に同じ。

おひ-ちらかす 逐散らかす【動四他】次條に同じ。

おひ-ちらす 逐散らす【動四他】逐ひて亂れ散らしむ。おひちらかす。

おひ-つ 御櫃【名】めしびつ(飯櫃)に同じ。〔女の語〕

おひ-つかひ 追使・逐使【名】おひつかふこと、又そのおひつかはる人。驅使。

おひ-つかふ 追使ふ・逐使ふ【動四他】雇人などを容赦なく使役す。驅使す。おひまはす。

おひ-つき 追附【名】追附くこと。

おひ-つぎ 追繼【名】あとより足し加ふること。添附。追加。

おひつき-くび 追附頸【名】逃ぐる敵に追附きて斬りたる首。 甲陽軍鑑「逃ぐる敵といへども、切りあらで辛勞仕り、取りたる頸は、追附頸とは申せども」

おひ-つく 追著く【動四自】追ひて及ぶ。おひおよぶ。おひしく。おっつく。おふ。 伊勢集「奈良坂のあたりにぞおひつきておこせたりける」

おひ-つぐ 追繼ぐ【動四自】あとより繼ぎ足す。 伊勢「おひつぎて言ひやりける」

おび-つづく 佩續く【動下二他】絕えず身に附けて放さず。 萬葉「はりぶくろおびつづけながら里ごとにてらさひあるけど人もとがめず」

おひ-づな 追綱【名】諸侯の曳馬に用ふる、紫色の組緒の太き綱。おひなは。

おひ-つむ 追詰む【動下二他】追ひて、逃ぐる方なきまでに攻む。おっつめる。

おひ-て 追手【名】(一)敵兵・罪人などを追ひかくる人。おって。(二)船の追風(カゼ)。順風。 夫木「しばしともいふかひぞなき沖かけておひての風に出づる船人」 追手に帆を揚ぐ【句】「得手に帆を揚ぐ」に同じ。〔諺語〕

おひてがほ 追手顏【名】追手の如き顏つき。追手らしき樣子。 謠曲、清經「柳が浦の秋風の、追手がほなる跡の波」

おひ-ひと 御人【名】(一)客人の敬稱。御來客。(二)おっかひ(御使)に同じ。 狂言、鬼わたし「宿坊からお人がござりました」

おひと 首【名】『大(オホ)人(ヒト)の略』上古の姓(カバネ)の一。後、連(ムラジ)に入る。おうと。おぶと。 「の略。

おび-と 帶戶【名】〔建〕おびさんと(帶棧戶)

おび-とき 帶解【名】(一)帶を解きたるままにあること。「おびときの祝」(二)小供の始めて帶を用ふる祝の儀式。小供を吉方(ホウ)に向はせて、はじめて附紐なき衣服を著せ、帶を結ばしめて祝す。男兒は五歲乃至九歲、女兒は七歲の十一月に行ふ。おびとき。ひもおとし。ひもなほし。おびなほし。

おびとき-すがた 帶解姿【名】帶を解きてしだらなく打解けたる姿。おびときばらひ。

おびとき-ばらひ 帶解拂【名】前條に同じ。

おびとけ-おざう 帶解地藏【名】大和國添上(カフノ)郡帶解村字今市の帶解寺にある地藏菩薩。文德天皇の后染殿皇后、この地藏に祈りて淸和天皇の御安產ありしかば、帶解の稱を奉りたまへり。

おびとけ-ひろげ 帶解披【名】おびしろはだか(帶代裸)に同じ。 優劇琴「おびとけひろげ。離騷の昌披を訓ぜり」 「じ。〔古語〕

おひ-ととのふ 生調ふ【動四自】次條に同

おひ-ととのほる 生調ほる【動四自】生長して、身體よく備はる。身體十分に發達す。〔古語〕 源氏「はたちばかりになりたまふままに、おひととのほりて、いとあたらしくめでたし」

おひ-とどむ 追留む【動下二他】追ひつめて留まらしむ。おひとむ。

おひ-とむ 追留む【動下二他】前條に同じ。

おひ-とむ 生留む【動下二他】生じたるままに殘し置く。おひたむ。〔古語〕 夫木「濱なとる荒磯のをのしき波におひとめがたき春の若草」

おひ-とめ 追留【名】追ひつめて留まらしむること。追留むること。

おび-とめ 帶留【名】(一)帶の上に締(シ)めて、その帶の解けざるやうにするもの。男・女によりて、その製を異にす。おびかけ。

おびじめ 帶締(帶締)參照。(二)をりがね(折金)に同じ。

おひと-よし 御人好【名】おこころよし。「好人物。〔俚語〕

おひ-とり 追鳥【名】おひとりがり(追鳥狩)の略。 謠曲、善知鳥「身の苦しさも悲しさも、忘れ草の追鳥、高繩をさしひく汐の」

おび-とり 帶取【名】次條に同じ。

おびとり-がは 帶取革【名】太刀を腰に帶ぶるとき、足緒(アシ)に結びつくるに用ふる緒。組緒(クミ)。革又は織物などにて造る。おびとり。

おひとり-がり 追鳥狩【名】春の頃、鳥を勢子(セ)に追立てさせて、馬上より、弓または銃にて狩ること。江戶幕府にては、年中行事の一とせり。おひとり。 東鑑「於二武藏國人間野、有二追鳥狩一」

おひ-ひな 御雛【名】ひな(雛)(二)の敬稱。

おひ-ながす 負流す【動四他】負ひたるままにて、下方に傾く。 吉野忠信「尻籠(コシ)の矢、笠下がりに負ひ流し」

おひなげ

おひなげ 負投【名】しょひなげ（背負投）に同じ。

おひな-さま 御雛様【名】一ひな（雛）に同じ。〔女・小供の語〕二容貌美しくしておとなしき女の譬。〔俚語〕

おひなは 負縄【名】物を縛（バ）りて背負ふための縄。狂言（来世）「おひなはがござる。負うて参りましょ」

おひ-なは 追縄【名】一おひづな（追綱）に同じ。二野馬を捕ふるに用ふる縄。かけなは。

おび-なほし 帯直【名】おびとき（帯解）に同じ。〔古語〕

おひ-なほり 生直【名】生直ること。〔古語〕

おひ-なほる 生直る【動四自】世にあはずして零落せし人が、好運に向ふ。〔古語〕相撲「片山の柏のくぼてさしながらおひなほる見る栄えともがな」

おひなむ 負並む【動下二他】二つの物を並べて、背に負ふ。〔古語〕萬葉「まそ鏡にあきつひれおひなめもちて馬かへわがせ」

おひなる 御畫成る【動四自】おひんなる（御畫成る）に同じ。

おひ-なる 生成る【動四自】おひたつ（生立つ）に同じ。〔古語〕奈良「かの袖君の、よくおひなりたまひつるを、いかで内に参らせてしがな」

おひ-に 負荷【名】背に負へる荷物。内地にても、田舎にはこの風習あれど、最も盛んに行はるるは朝鮮なり。

おひ-にがす 追逃す【動四他】一追ひはらひてにがす。にがしやる。のがれしむ。二捕へんとして、誤って逃げらる。

おひ-ぬく 追抜く【動四他】おひこす（追越す）に同じ。手習鑑「古き弟子ども、おひぬき、あっぱれ手書きになるべしと」

おひ-ねがひ 追願【名】あとより加ふるねがひ。更に添ふるねがひ。つぬぐわん。浮世風呂「追願をなすって、もう二三日お泊めなさいました」

おひ-ねり 御捻【名】かみひねり（紙捻）に同じ。

おひ-のく 逐退く・追退く【動下二他】逐ひて退かしむ。おひしりぞく。

おび-のこ 帯鋸【名】機械鋸（キカイノコギリ）の一種。刃薄く長く、輪状をなし、常に回轉せしめて木材を切るに用ふ。

おひのこ

おひ-の-こぶみ 笈小文【名】〔書〕松尾芭蕉自記の文集。今傳はらず。同名にて、乙州の作なるは、現存す。其角「芭蕉翁、はての年は、堅田のゆかり、伊賀のしるべ、思の外になりぬるをわびて、宇津の山より、人人に申し遣す。おきずてにおひのこぶみや年の暮」

おび-のぼる 生上る【動四自】おひたちて高くなる。生長す。〔古語〕源氏「蓬は、軒をあらそひておひのぼる」

おひ-の-よ 生世【名】生ひゆく世。生ひ来りし世。〔古語〕奈良「おひの世にちをのみ知れるみどりごの松のもちひをいとど「の翼の姿。

おひば 追羽【名】鷹が小鳥を追ひゆく時

おひ-はぎ 追剝【名】一おひはぎこと。二やまだち。がうたう。ひはぎ。おひおとし。

おひはぎ-はら 追剝原【名】追剝のあらはれて通行人をなやます原。

追剝原へ螢狩【句】求めて、危きに近づく譬。〔諺語〕

おひ-はぐ 追剝ぐ【動四他】人を途中に劫（オビ）かして、衣服その他の所持品を剝（ギ）奪ふ。おひはぎをなす。

おひ-はご 追羽子【名】おひばね（追羽根）に同じ。

おび-ばさみ 帯挟【名】ねっけ（根附）に同じ。

おひ-はしらかす 追走らかす【動四他】次條に同じ。狂言（吃）「又しても、又しても、男をおひばしらかして」

おひ-はしらす 追走らす【動四他】追ひて逃走せしむ。おひはしらかす。

おひ-はなす 追放す【動四他】一次條に同じ。二放したるままになしおく。放して、自由にせしむ。おっぱなす。狂言（文相撲）「廣い野原へ追放しておかうまで」

おひ-はなつ 追放つ【動四他】うちに置かぬやうにす。放逐す。おひだす。おひはらふ。おひはなす。

おひ-ばね 追羽根【名】二人向ひあひて、一つの羽子を、羽子板にて、交互に突きて

おひばら

は送りやり、突きては送りやりすること。おひはご。やりはご。およばね。

おひ-ばら 追腹【名】主君の死を悲しみ、その跡を追ひて切腹すること。切腹して殉死すること。丹波與作「千三百石まで御とりたて、追腹ほどの御恩の家」

おひ-はらひ 追拂【名】おひはらふこと。つねはう。

おひ-ばらひ 追拂【名】一且支拂ひたる上に、なほ支拂ふこと。二〔法〕支拂を免除せられ、又は支拂義務の不明なるがために、支拂はざりしものを、後に至りて支拂ふこと。

おひ-はらふ 追拂ふ【動四他】おひ退く。放逐す。おひはなつ。おひこがす。おっぱらふ。おふ。源氏「かしがましう、おひはらひて」

おび-ひき 帯引【名】一昔行はれし戯の一種。四人以上の人の集まりて、紙を撚（ヨ）りて、各自の帯の端に結びつけ、おのおのその紙の端を引試み、もし雙方とも、相手方のを引當てたる時は、互にその帯を取換ふること。二遊戯の一種。二人にて一つの帯の両端を引きあひて、力の優劣を競ふもの。

おびひろ 帯廣【名〕〔地〕十勝國河西（カサイ）郡にある町。十勝・幸内（サイナイ）の二川北に會流し、釧路（クシロ）及び旭川に連絡する鐵道あり、水陸の便に富み、商業殷賑なり。河西支廳を置く。

おひ-ひろがる 生殖がる【動四自】生れ生れて數多くなる。蕃殖す。

おび-ふう 帯封【名】原稿・新聞・雑誌などを郵便物として差出すとき、帯紙（ガミ）にて巻きて、開封（ヒラフウ）にすること。

おひ-ふき 追吹【名】笛などの吹き方の一。陵王等の觀序に、且つ吹き且つ止むものなりといふ。

おび-ぶくろ 佩袋・帯袋【名】糒（ホシイ）などを入れて、腰に帯ぶる袋。和名「膳、於比不久路、嚢之可レ帯也」

おひ-ふす 追伏す【動下二他】追ひつめて逃ぐる所なきやうにす。著聞「逃げんには、いかにも追ひふせられぬべし」

おひ-まくる 追捲る【動四他】烈しく追ひて逃げ走らす。はげしく追拂ふ。

おひ-まさり 生優【名】生ひたつままによくなること。生長するに從ひてよくなること。〔古語〕大和「見るたびに、やうやら好くなりゆく。ことのほかにおひまさりして見えければ」

おひ-まさる 生優る【動四自】生長するに隨ひて、姿・容貌など美しくなりゆく。〔古語〕源氏「こよなうこそおひまさりて見えたまひしか」

おひまし-ほしよう 追増保證【名】〔法〕法律の規定に從ひて保證を立てたる後、訴訟進行中、保證金額に不足を生じたるため、前保證金額を補充するために立つる保證。

おひ-まどはす 追惑はす【動四他】追ひて見失ふ。行方不明になる。〔古語〕源氏「おひまどはして、なのめに思ひなしつべくばたばかりのすさびにても過きぬべきことを」

おひまく

おひ-まはし 追廻【名】一追ひまはすこと。二四方に竹を附けて、二人して、魚を追ひまはして捕ふる漁網。三芝居の囃子（シャ）の一。相手の逃げまはるを追ひかくる立廻（タチマワリ）の場合などに用ふるもの。太鼓と三味線とを用ひて賑かなり。四將棋にて、二度以上、敵の駒（主に王）を追ひて捕へんとすること。

おひ-まはす 追廻す【動四他】一あちら、こちらに追ひてゆく。おんまはす。二おひつかふ（追使ふ）に同じ。

おひみ 生實【名〕〔地〕下總國千葉郡生實濱野（ハマノ）村に屬し、南・北に分れて、共に村内の大字たる地。森川氏の舊藩地。もと「小弓（ヨウ）」又は「御弓」と書けり。即ち小弓御所の舊跡地。あしかがよしあき（足利義明）參照。

おひむすび-もじ 帯結文字【名】平假名の「や」の字の異稱。やのじ（やの字）參照。

おひんなる 御畫成る【動四自】『御（オ）畫（ヒ）になるの音便』目覺めて起きたまふ。おひなる。おひる。おきなる。（およんなるに對して）

おひめ

おひ-め 追目【名】續けざまに負くる運命に出會ふこと。まけめになること。

おひ-め 負目【名】借受けたる金錢を返すべき義務。かりおひもの。負債。借財。

おひめさま-しごと 御姫樣仕事【名】脆弱（ゼイジャク）なる細工。〔俚語〕

おひめさま-お 御姫樣地【名】下地に姫糊（ヒメノリ）と砥粉（コト）とを塗りたる、下等なる漆器。〔俚語〕

おひ-もち 追持【名】まうけがち（儲勝）を見よ。

おひ-もつ 負持つ【動四他】■背負ひ又は擔ひて持つ。■姓名を冒す。名のる。〔古語〕萬葉「大伴の遠つかむおやのその名を負ひ持て」

おひ-もどす 逐戻す【動四他】おひかへす（透返す）に同じ。俳諧新選（太祇）「追ひもどす坊主が手にも葵かな」

おひ-もの 追物【名】おふもの（追物）に同じ。

おひ-もの 負物【名】■背に負ふ物。■おひめ（負目）に同じ。

おび-もの 佩物【名】■身に佩（オ）ぶる物。おむもの。おふもの。おんもの。おもの。■古の禮服著用の時の一種の裝飾。組絲にて、玉を貫きたるもの。乳の下のあたりより垂れて、歩むごとに鳴るやうに作らる。ぎよくはい。おむもの。おんもの。おもの。〔珮〕

おひもの-い 追物射【名】おんものい（追物射）に同じ。平家「木曾は、これを見て、すは平家は落つるは…おひものいにこそ射たりけれ」

おひ-や 御冷【名】■みづ（水）を云ふ。おひやし。おつめた。〔女の語〕■たいともち（太鼓持）に同じ。色道大鑑「おひや昔の太鼓もちの名なり」

おひ-やう 大鮃【名】〔動〕軟鱗（ナン）類に屬する魚。體長三尺餘。頭部扁く、眼大にして、全身暗褐色。北海に產す。

おひ-やかす【動四他】おひやかすに同じ。〔甲斐國の方言〕

おびやかす 劫かす・脅かす【動四他】おびゆるやうにす。おどす。おそれしむ。おびやす。源氏「狐はさこそは人をおびやかせど、ことにもあらぬやつといふさま、いと馴れたり」

おひ-やくど 御百度【名】ひやくどまゐり（百度參）に同じ。小町踊（參）「御百度をしぐれもするや神路山」

御百度を踏む【句】■御百度を行ふ。■同じ人を、幾度も訪問す。

おひ-やし 御冷【名】■おひや（御冷）に同じ。〔女の語〕■能（ノ）の狂言の一。

おびやす 劫す・脅す【動四他】おびやかす（劫かす）に同じ。〔古語〕字鏡「懾、於比也須」

おひ-やらかす【動四他】ひやかす。愚弄す。からかふ。おひやる。〔俚語〕

おひ-やる【動四他】■前條に同じ。〔俚語〕■へつらふ。おべっかをいふ。〔俚語〕

おひ-やる 追遣る【動四他】おひはらふ。おひのく。おひだす。伊勢「この女を、外へおひやらんとす」

おひゆ 怯ゆ【動下二自】■おそれ驚く。源氏「人人おびえ騷ぎて」■夢におそはれて驚く。■小供、睡眠中に驚き泣く。

おひ-ゆく 生行く【動四自】漸次生ふ。生育す。源氏「はかりなき千尋の底のみるふさの生ひゆく末は我れのみぞ見る」

おひ-ゆく 追行く【動四他】追ひかけてゆく。あとを追ひて行く。萬葉「わかせこが跡ふみもとめおひゆかば木の闕守いとどめてむかも」

おひよう【名】〔植〕楡（ユ）科に屬する落葉喬木。我が國北部の山野に自生す。幹は高さ一丈に達し、葉は倒卵形にして、淺き缺刻あり。夏季、葉腋（エキ）に黃綠色の花を開く。皮は强靱にして用途ひろし。〔アイヌ語〕

おひより 御日和【名】江戸時代に、長雨つづきの時、紙切を結びたる破傘（ハサミ）をさして、「御天氣快晴、御日和御祈禱」といひつつ錢を乞ひあるきし乞食。

おひ-よる 追倚る【動四自】順（ガシク）ひ依る。よりすがる。たよる。〔古語〕續後紀「佛にも神にも申し上ぐることの葉は、此の國のもとつ言葉におひよりて、もろこしの言葉をからず」

おひら 御平【名】■ひらわん（平椀）を云ふ。〔女の語〕■「御平の長芋」の略。■（動）たひ（鯛）を云ふ。〔女の語〕

御平の長芋【句】『平椀の中に入れたる長芋の、見かけのみよくて美味ならざるよりいふ』容貌の美しくして愚かなる人の譬。御平。

おひらき 御開【名】■祝事などの酒宴の終ることをいふ忌詞（イミコ）。■俳句・川柳・笠附（カサ）などの會。

おひ-ひる 御畫【名】■ひる（畫）の敬稱。■ひるめし（畫飯）の敬稱。

おひ-ひる【動四自】おひんなる（御畫成る）に同じ。（およるに對して）〔古語〕中務內侍日記「おひるよりさきにと、急ぎまゐりたれば」

おひる【動下二自】こまかき事を氣にかけず。ぼんやりとす。〔古語〕源氏「女御の、あまりやはらかに、おびれたまへる」

おひ-ひろざしき 御廣座敷【名】ひろざしき（廣座敷）の敬稱。

おひ-ひろしき 御廣敷【名】ひろしき（廣敷）の敬稱。

おひ-ひろひ 御拾【名】貴人の歩行の敬稱。

おひ-わけ 追分【名】■街道の、左右二路に分るるところ。岐路。■次條の署。

おひわけ-ぶし 追分節【名】こむろぶし（小室節）に同じ。おひわけ。

おひわけ-ぶし 追分繪【名】おほつぶ（大津繪）に同じ。

おひ-わた 追綿【名】二番船にて來る綿。早綿の後に著くもの。

おひ-ををる 生撓る【動四自】生ひしげる。〔古語〕萬葉「うちはしにおひををる川藻ぞ枯るれば生ゆる」

おふ 追ふ・逐ふ【動四他】■あとにつきて急ぎゆく。伊勢「しりにたちておひゆけど、えおひつかで」■おひつく（追附く）に同じ。〔古語〕源氏「御車かくるほどにおひて」■目的地を定めて追みゆく。〔古語〕土佐「曉に舟出して、室津をおふ」■過去に遡（ソカ）る。■過去に倣ひて、事を行ふ。次第次第に引續きて行ふ。「必ずしも前例を追はず」「年月をおひて」

おふ 逐ふ・追ふ【動四他】■退（ノ）け去らしむ。逐ひはらふ。■馳す。「馬をおふ」

おふ 覆ふ【動四他】おほふ（覆ふ）に同じ。〔古語〕記槻（ツキ）が枝（エ）はほつえはあめをおへり」

おふ 負ふ【動四自】相應（オウ）す。〔古語〕新古「秋草の咲きみだれたる花ざかりわが身に負はぬ宿にもあるかな」

おふ 負ふ【動四他】■背に戴す。せおふ。■身に引受く。源氏「人にいたづらになしつるかごとおひぬべきは、いとからきなり」■名を引受く。なのる。萬葉「大伴の遠つかむおやのその名をば大來目ぬしとおひもちて」

負うた子に教へられて淺瀨を渡る【句】時としては、己れより劣れる者より教を受くることある譬。〔諺語〕

負ふ子よりも抱く子【句】手近きものより先きにする譬。〔諺語〕

おふ 生ふ【動上二自】生ずばゆ。なりいづ。生長す。おはる。古今「住よしとあまはつぐともながゐすな人忘草おふといふなり」

おふ 大【接頭】おほ（大）に同じ。〔古語〕「おふ魚（ウ）よし」「おふ楮（ジモ）」

おふ 帶ぶ【動四他】次條に同じ。萬葉「みもろの神のおばせるはつせ川みをしたえずばわれわすれめや」

おふ 帶ぶ【動上二他】■腰の邊に下ぐ。■身につけて持つ。〔佩ぶ〕■たもつ。含む。「赤色をおぶ」■身に引受く。「官職をおぶ」■めぐらす。「川を帶び、山を負ふ」

おふ-ぶう 御湯【名】飲料又は沐浴に用ふる湯。おふぶう。〔東京の女・小供の語〕

おふ-おふ 追追ふ【副】あとをおひながら。あとを追ふが如くに。狂忠百首「うちはやめ風したさまへ逃ぐるまにおふおふ雪のふりもつむかな」

おふく 御福【名】■■〔動〕『鼠は大黑天の使にて、家にその多きは福ありといふ義』

ねずみ（鼠）の異名。〔俚語〕■操（アヤツリ）人形の頭の名目の一。「妹脊山」の淨瑠璃における「豆腐の御用」などに用ふ。■おたふく（阿多福）に同じ。〔俚語〕■頂戴物などの敬稱。狂言（鞍馬參）「多聞天よりお福を下されてござる」

おふくむ

おふく-むかで 御福蜈蚣【名】はつとらまむり（初寅參）を見よ。

おふくむかへ 御福迎【名】ふくむかへ（福迎）の敬稱。

おふくゆ 御福湯【名】だいこくゆ（大黑湯）に同し。

おふくら-ぐさ おふくら草【名】〔植〕ぐんけいさう（辨慶草）を云ふ。〔關東の方言〕

おふくろ 御袋【名】■はは（母）に同じ。■老いたる女。〔豐後國の方言〕

おふくろ-ちやし 御袋茶師【名】宇治の茶師の、紅葉山・日光等へ進獻する茶を扱ひしもの。〔江戸時代の語〕

おふく-わけ 御福分【名】ふくわけ（福分）の「敬稱。

おふけ-なし 負氣無し【形一】おほけなし（大氣無し）に同じ。〔古語〕

おふけ-やき 御深燒【名】次條に同じ。

おふけね-やき 御深井燒【名】もと尾張國名古屋の城中にて燒きし陶器。今は同國東春日井郡瀨戸村にて製す。おふけやき。

おふさる 負さる【動四自】■負はる。おぶつさる。〔俚語〕■たよる。依賴す。〔俚語〕

おふし 啞【名】『おふす（瘂す）の假體言』生れながらに、言語を發すること能はざる不具者。おし。いはず。啞者（ヤシ）。

おふし-ぜみ 啞蟬【名】聲を出さぬ蟬、即ち雌の蟬。おしぜみ。

おふし-ひさご おふし匏【名】『おふすを見よ』古、游泳するとき、溺（オボ）れぬために、脇に狹みて、身を輕く浮かするに用ひしひさご。〔古語〕起全匏、オフシヒサゴ」

おふし-みづ 御五倍子水【名】おはぐろ（御齒黑）を云ふ。〔女の語〕

おふし-もと 大楛【名】『おふ（大）を見よ』大なるしもと。一說に、生ひたるしもと。〔古語〕萬葉「おふしもとこのもと山のましはにものらぬいもが名かたに出でむかも」

おふしや-まつり 御奉射祭【名】信濃國南安曇（アヅミ）郡東穗高（ホタカ）村なる穗高神社の祭禮。毎年三月十七日に行ふ。

おぶしよん（英Option）【名】〔商〕次條の略。

おぶしよん-とりひき オプション取引（英Option dealing）【名】〔商〕歐洲の取引所にて行はるる特權附定期取引。即ち賣方若しくは買方が、相場の變動によりて生ずる危險を避くる方法として、相手方に一定の打歩（ウチ）を支拂ひて、その契約を解除し得る權利を豫約するもの。〔取引所の語〕

おふす

おふす 瘂す【動四自】機能缺けて、口語ること能はず。おふしになる。〔古語〕

おふす 負す【動下二他】おほす（負す）に同じ。〔古語〕萬葉「しほ船のへこそ白波にはしくもおふせたまほかおもはへなくに」

おふす 【動四自】水中に身を浮ぶ。〔古語〕和名抄浮、於布須」

おふす 生す【動四他】おほす（生す）に同じ。

おふせ 仰【名】おほせ（仰）に同じ。

おふだ 御符【名】祈禱のふだ。どふう。

おふだ-しゆう 御札衆【名】鎌倉幕府にて、昵近を許されたる小侍所の番衆。

おふつみやう 御佛名【名】ぶつみやう（佛名）の敬稱。

おふつみやう-ゑ 御佛名會【名】ぶつみやう（佛名）■の敬稱。

おぶっさる 負さる【動四自】おぶさる（負さる）に同じ。〔俚語〕

おふ-て 追手【名】■『敵を表より追込みて、裏にて搦むる義といふ』敵の城砦の正面より向ふ本隊。（からめ手に對して）■城砦の表門。おほて。（からめ手に對して）■將棊の手の一。王將を追ふこと。

おぶと 首【名】おびと（首）に同じ。〔古語〕起「首」、オブト」

おふな おふなあふなを見よ。

おぶふ 【副】あふなあふなを見よ。

おぶふ 負ふ【動四他】おふ（負ふ）の訛。おぶる。〔東京の語〕

おぶはうこ云へば抱からう【句】同情を表して少しく補助せんとすれば、その親切に狂（ク）れて、あつかましくもなほ一層の親切を望む。〔俚語〕

おぶぶ 御湯【名】おふうに同じ。〔東京の女・小供の語〕

おふみ 御文【名】■てがみ（手紙）の敬稱。■〔佛〕ごぶんしやう（御文章）■に同じ。〔眞宗大谷派の語〕

おふみ-さま 御文樣【名】〔佛〕ごぶんしやう（御文章）■の敬稱。〔眞宗大谷派の語〕

おふんど

おふ-んど 追人【名】はうさうし（方相氏）に同じ。

おふ-もの 追物【名】走る獸を馬上より追ひかけ射ること。犬追物・牛追物などあり。おんもの。おひもの。

おふ-もの 佩物【名】おびもの（佩物）■に同じ。〔古語〕

おふもの-い 追物射【名】射藝の一。馬上にて、獸を追廻はして射ること。おひものい。おんものい。平家「落ちゆく源氏を、おふものいに射て行くに」

おふ-やだい 負矢臺【名】古、軍陣に背負行きし矢臺。矢二百本を差す箱にして、栗色又は黑塗とせり。

おぶらあと（獨Oblat）【名】澱粉と護謨末とにて薄く煎餅のやうに造り、飲みにくき粉藥などを包みて嚥下するに便するもの。

おぶる 負る【動他】おふ（負ふ）の訛。おぶふ。〔東京の語〕

おふれ 御觸【名】ふれ（觸）の敬稱。

おふを 大魚【名】大なる魚。〔古語〕

おふを-よし 大魚哉【枕】おふをよは、大きなる魚よと呼びかくる意、しは助辭にて、鮪（シビ）は大魚なるより、しびにかけていふ。記「おふをよししびつくあまよしがあればうらこほしけむ」

おへ 御家【名】おいへ（御家）の略。〔畿內の語〕「斐國の方言」

おへいし 御林【名】はやし（林）を云ふ。〔甲

おへいりん-さう-もと 【名】日の入り時刻。〔甲斐國の方言〕

おへぎ 御折【名】へぎいた（折板）を云ふ。〔西國の方言〕

おへこ 御幣子【名】神社の氏子。〔山城國紫野の今宮の語〕

御幣子の曼陀羅（ダラ）【句】神に仕ふる者の曼陀羅を拜むが如く、似つかはしからぬ意。〔俚語〕

おへこ 【名】■をへこの訛。■ふんどし（犢鼻褌）に同じ。〔俚語〕

おへ-や 御部屋【名】■主人の居る室。（召使より敬ひていふ稱）■宮中の御服掛・御膳掛・雜仕（ゾウシ）などの稱。御局（ミツボネ）の下に屬す。■貴人の妾。おへやさま。四隱居したる人。（今の主人の召使より敬ひていふ稱）五他人の妻。〔播磨國の方言〕六遊女屋の主人。（遊女より云ふ稱）

おへや-さま 御部屋樣【名】おへや（御部屋）■に同じ。

おへや-しゆう 御部屋衆【名】足利時代に、夜ごとに將軍の寢所に宿直せし者。將軍の同族の者、これを勤む。

おへや-びな 御部屋雛【名】『御殿女中などの賄ひ來り、己が部屋に飾りて、心を慰むる料とせしよりいふ』まめびな（豆雛）に同じ。

おへさま

おへさま-がほ 御家樣顏【名】主婦めきたる顏つき。女房氣取。重井筒「連れだち內に入りければ、女は亭主と座を組みて、おへさまがほして居たりける」

おへ-さん 御家樣【名】おいへさん（御家樣）の略。〔攝津國の方言〕

おへ-たい 【形】冷かなり。つめたし。〔東京の小供の語〕童謠「雪やこんこん、おべたい氷」

おへ-つか 【名】へつらひて、物を言ふこと。〔俚語〕

おへ-ない 【形】■手に乘らず。制しがたし。■だめなり。かひなし。おへん。〔備前國・備中國及び美作國の方言〕

おへ-ん 【形】前條■に同じ。〔備前國・備中國・美作國の方言〕

おへ-べん 御辨【名】べんたう（辯當）を云ふ。〔小供の語〕

おへ-べん 御便【名】■べんじよ（便所）を云ふ。〔關西の女・小供の語〕■ぢうべん（小便）を云ふ。〔關西の小供の語〕

おへ-べんこう 御辯口【名】口まへの上手なること。〔俚語〕

おへ-べんこう 【名】女の陰部。〔奧州の方言〕

おへ-べんちやら 【名】口さきばかり巧にいひて實意のなきこと、又その人。おちやちやら。おちやら。おてんたら。おちようべい。〔俚語〕

おへ-べん 御便【名】■べんじよ（便所）を云ふ。〔小供の語〕

おへ-べん 御便【名】■べんじよ（便所）を云ふ。〔關西の女・小供の語〕■ぢうべん（小便）を云ふ。〔關西の小供の語〕

おへ-べんこう 御辯口【名】口まへの上手なること。〔俚語〕

おへ-べんこう 【名】女の陰部。〔奧州の方言〕

おへ-べんちやら 【名】口さきばかり巧にいひて實意のなきこと、又その人。おちやちやら。おちやら。おてんたら。おちようべい。〔俚語〕

おへ-へや 御部屋【名】■主人の居る室。（召使より敬ひていふ稱）■宮中の御服掛・御膳掛・雜仕（ゾウシ）などの稱。御局（ミツボネ）の下に屬す。■貴人の妾。おへやさま。四隱居したる人。（今の主人の召使より敬ひていふ稱）五他人の妻。〔播磨國の方言〕六遊女屋の主人。（遊女より云ふ稱）

おへ-へや-さま 御部屋樣【名】おへや（御部屋）■に同じ。

おへ-へや-しゆう 御部屋衆【名】足利時代に、夜ごとに將軍の寢所に宿直せし者。將軍の同族の者、これを勤む。

おへ-へや-びな 御部屋雛【名】『御殿女中などの賄ひ來り、己が部屋に飾りて、心を慰むる料とせしよりいふ』まめびな（豆雛）に同じ。

おへら【名】しゃべる人を罵りていふ稱。〔奥州の方言〕

おぺら《英Opera》【名】演劇に似て、歌ふことを主とし、音樂に適合するやうに仕組めるもの。演劇者みづから唄ひ且つ舞ふ。十六世紀に伊太利に起り、獨逸のワグネル(Wagner)に至りて面目を一新せり。我が國の能樂はこれに近し。歌劇。樂劇。〔俚語〕

おへらかす【動四他】おひやらかす。嘲笑す。

おぺら-ぐらす《英Opera-glass》【名】小形の雙眼鏡。遠距離を見るに適せずして、主にオペラ見物の時に用ふ。

おぺら-ばっぐ《英Opera-bag》【名】オペラなどの觀覽に赴く時に携ふる手提(ヂサ)の袋。羽二重(ハブ)などにて造り、形は多く方形又は長方形をなす。

おぺら-はっと《英Opera-hat》【名】シルクハットに似て、山を壘み得る一種の禮帽。多くはオペラ見物用又は夜會用とす。壘帽子。

おへら-まき【名】せんべい(煎餅)を云ふ。〔羽後國秋田の方言〕

おべりすく 方尖塔《英Obelisk》【名】『もとギリシヤ人の呼びし名にて、魚を燒くに用ふる鐵串の意』太古、エジプトにて、神社の門前に二本一對に立てし四角の石柱。何れも一本の石材を用ひ、長きは十間に餘れり。

（くすりべお）

おほ 大【名】〔地〕信濃國北安曇(キタアヅ)郡にある町。中古、仁科(ニシ)氏の領地。舊稱、仁科。

おほ 飫富【名】〔地〕大和國磯城(シキ)郡多村及び平野村の南部一帶の地の古稱。

おほ 多・太・意富・於保【名】姓氏の一。神武天皇の皇子神八井耳(カンヤ)命より出づ。姓(カバネ)は朝臣(アソ)と宿禰(スクネ)と臣(オミ)との三あり。前記大和國の飫富(オホ)に住みて氏に名づけしもの。

おほ 凡【貌】おろそか。なほざり。一とほり。〔古語〕『蕪萊海路にいでて吹く風もおほには吹かず』

おほ 大【接頭】Ⅰ形又は度の大なる意。おふ。おほき。「おほ船」「おほいそぎ」「おほ目」「おほ味」Ⅱ尊敬の意。おほみ。おほん。おん。お。「おほ殿」「おほまつりごと」Ⅲ甚だしき意。『盛衰記』七月九日午の刻、大地震なり」

おほ-あかげら 大赤啄木鳥【名】〔動〕啄木鳥の一種。あかげらに酷似して、すこし大きく、腰のあたり白し。

おほ-あがたぬし 大縣主【名】大なる縣をつかさどる縣主。一說に、縣主にて權勢あるものの稱なること、例へば臣(オミ)に大臣(オホオミ)あり、連(ムラ)に大連(オホムラ)あると同じ類。〔古語〕

おほ-あかとき 大曉【名】あかつき(曉)に同じ。〔古語〕『字鏡』昕、於保阿加止支」

おほ-あきなひ 大商【名】さかんなる商法。

おほ-あきんど 大商人【名】さかんなる商法家。てびろく商賣をする人。豪商。

おほ-あくじよう 大惡尉【名】能(ノ)の假面(ノ)の一。眼を張り、口を開き、鼻を怒らせたる尉。「玉井(タマヰ)」「氷室(ヒムロ)」等の曲の後仕手(シテ)に用ふ。

おほ-あくび 大欠【名】甚だしきあくび。丹波與謝「侍でもない者に心をつくして、氣が盡きたと、おほあくびして居たりけり」

おほ-あぐら 大胡床【名】威張りてあぐらをかくこと。たかあぐら。

おほ-あざ 大字【名】市町村制施行後に市町村制の下に入りたる、施行前の町名又は村名。(小字に對して)

おほあさ-じんじや 大麻神社【名】讃岐國仲多度(ナカタド)郡麻野(アサ)村にある式内の古社。祭神は天太玉(アダタマ)命及び彦火瓊瓊杵(ヒコホノニニギ)尊。

おほあさ-だいみやうじん 大麻大明神【名】次條の俗稱。

おほあさひこ-じんじや 大麻比古神社【名】阿波國板野郡坂東村大麻山の南麓に鎮坐せる國幣中社。祭神は大麻比古命。もと同國の一ノ宮と稱せられたり。

おほあさひこ-の-みこと 大麻比古命【名】『麻・楮などを植附けたる功德に本づける名なるべしといふ』あめのひわしのかみ(天日鷲命神)に同じ。一說に、天日鷲命の子なるつくひみのみこと(津咋見命)に同じ。

おほ-あし 大足【名】Ⅰ大なる足。Ⅱ足と足との間をひろくして歩むこと。おほまた。闊歩。〔俚語〕

おほ-あしらひ 大接遇【名】おほやうにあしらふこと。おほかたに待遇すること。横柄につきあふこと。諸國物語古參の人をもおほあしらひにする故」

おほ-あせ 大汗【名】多く出づる汗。

おほ-あたま 大頭【名】Ⅰ大なるあたま。Ⅱ〔人〕きよどころう(巨頭公)に同じ。柳樽「兄弟のしまひ仕事におほ頭」Ⅲ衆人の上に立つ者。かしら。首領。巨魁。〔俚語〕

おほ-あたり 大當【名】物事の甚だ首尾よきこと。物事の都合よく成功すること。

おほ-あぢ 大味【名】食物の味のこまやかならぬこと。

おほ-あぢさゐ 大紫陽花【名】〔植〕紫陽花の一種。幹は太く、葉は厚く幅闊くして、稀に鋸齒あり。殆ど毛茸を有せず。額狀花の萼片は斜方形にして、中央花は額草より大きく、藍紫色を呈す。

おほ-あつあつ 大熱熱【名】甚だしく熱心なること。ひどく熱中すること。〔俚語〕

おほ-あづき 大小豆【名】〔植〕ひねあづき(日根小豆)に同じ。

おほ-あつもの 大羹【名】あつもの(羹)の敬稱。〔古語〕

おほ-あな 大穴【名】Ⅰ大なる穴。Ⅱ大なる損耗。大なる過失。〔俚語〕

おほ-あなぐり 大穴探【名】甚だしく探ること。〔古語〕『蕪萊「世には、おほあなぐりといひつくるも、いとゆゆし」

おほあなむぢ-のかみ 大己貴神【名】おほくにぬしのかみ(大國主神)に同じ。

おほ-あに 大兄【名】第一の兄。長兄。伯兄。

おほ-あにい 大兄【名】あにきかぶ(兄貴株)に同じ。〔俚語〕

おほ-あね 大姉【名】第一の姉。『蕪萊「おほあねは、尼になりにき」

おほ-あねえ 大姉【名】あねえかぶ(姉株)に同じ。〔俚語〕

おほ-あは 大粟・粱【名】〔植〕粟の一種。穗大きく、毛長く、實の粒の粗なるもの。おにあは。けあは。

おほ-あふぎ 大扇【名】昔、天皇出御の時、御顏をおほふために、左右の女官が差しかけし長き柄の扇。さしば。「じ。

おほ-あへ 大饗【名】だいきやう(大饗)に同

おほ-あま 大尼【名】年とりたる尼。源氏「かの大尼ぎみも」

おほ-あまどころ 大萎豬【名】〔植〕百萎豬(コアマドコロ)の變種。形の大なるもの。

おほあま-の-わうじ 大海人皇子【名】〔人〕天武天皇の御即位以前の御名。

おほ-あみ 大網【名】大なる網。ひろき網。

おほあみ 大網【名】Ⅰ〔地〕上總國山武(サン)郡にある町。鐵道房總線と東金(トガネ)線との分岐點たる一驛。米津氏の舊領地。Ⅱ姓氏の一。豐城入彦(トヨキイ)命六世の孫なる下毛野君(シモツケノキミ)・奈良弟眞若君(ナラノオトマワカノキミ)の裔。姓(カバネ)は公(キミ)。

おほ-あみがさたけ 大網笠茸【名】〔植〕子囊菌(シノウキン)類に屬する菌類。本邦にては、稀に森林又は濕地に自生す。高さ一尺・徑五六寸。頭部は球形にして、表面には不正多角形のくぼみありて、胞子を生ず。柄部は黃色にして、太く長し。

おほ-あむどの 【名】だいどくでん(大極殿)に同じ。一說に、大安殿(オホヤスドノ)の訓讀の誤りなるべしと。〔古語〕紀、大極殿、オホアムドノ」

おほ-あめ 大雨【名】甚しく降る雨。强雨。

おほ-あや 大綾【名】大紋の綾。一說に、帛の文(アヤ)の大なるもの。〔古語〕『蕪萊「紫のおほあやのころも」

おほあやつび-のかみ 大綾津日神【名】おほまがつびのかみ(大禍津日神)に同じ。

おほあら-いそざき 大洗磯崎【名】〔地〕いそざき(磯崎)Ⅰに同じ。

おほあらいそざき-じんじや 大洗磯前神社【名】常陸國東茨城(ハビガシイ)郡磯濱(ハイマ)町に鎮坐せる式内の古社。今は國幣中社たり。祭神は大巳貴(オホナ)命。

おほ-あらき 大荒城【名】あらき(荒城)の敬稱。〔古語〕萬葉「大君のみことかしこみ大荒城の時にはあらねど雲がくります」

おほあらき-の-もり 大荒木森【名】〔地〕山城國久世(クゼ)郡に在りし森。古今「おほあらきの森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」 「轉詞。

おほ-あらは 大童【名】おほわらは(大童)の

おほあらひ 大洗【名】〔地〕常陸國東茨城(ヒタガイ)郡磯濱(ハマ)町の海濱。

おほあらひ-ざき 大洗崎【名】〔地〕常陸國東茨城(ヒタガイ)郡磯濱(ハマ)町の東にある岬。燈臺を置く。海水浴場あり。此より下總國犬吠崎に至る海面を鹿島灘と云ひ、二十里の沙濱白く鉤狀の一線を展ぶ。岡の上に大洗磯前神社あり。

おほ-あらめ 大荒目【名】鎧の、大なる小札(ネザ)を、絲目を太く粗く綴りたるもの。普通の鎧より厚く重きゆゑ、强力の勇士著用せり。保元「白き唐綾を以て縅したる大荒目の鎧」 「ど。

おほ-あららぎ【名】〔植〕はくか(薄荷)に同

おほ-あり 大蟻【名】〔動〕蟻の一種。色黑く、形大にして、胸背部は赤褐色を呈し、松の根に巢くひてこれを害す。和名大蟻。爾雅集註云、蚍蜉、一名、馬蟻、於保阿利、大蟻也」

おほ-ありくひ 大食蟻【名】〔動〕蟻食の一種。普通のよりは大にして六尺に達す。細長き舌を長く伸ばし出して蟻を舐(サ)食ふ。齒は不完全。爪鋭く攀緣に適す。南米に產す。

おほ-あれ 大荒【名】■いたくあること。■勢はげしき暴風雨。

おほい 大【接頭】『おほき(大)の音便』同じ官のうちの高き方の意。おほき。(すないに對して)〔古語〕「大納言(オホイモノマウ)」

おほい 正【接頭】『大の字の意』同じ位のうちの高き方の意。おほき。しやう。(ひろいに對して)〔古語〕「正一位(ハツイチヒト)」

おほい-いくさのきみ 大將【名】たいしやう(大將)に同じ。〔古語〕紀「大將、オホイイクサノキミ」

おほい-うちのしるす-つかさ 大内記【名】だいないき(大内記)に同じ。(少内記(ノスナイクチサ)に對して)〔古語〕

おほい-おほいきさい-の-みや 太皇太后宮【名】たいくわうたいこうぐう(太皇太后宮)に同じ。〔古語〕

おほい-おほともひ 大辨【名】さだいべん(左大辨)又はうだいべん(右大辨)に同じ。(中辨(ナカトモヒオ)・少辨(ホトモヒモ)に對して)〔古語〕

おほい-おろしもの-の-つかさ 大監物【名】だいけんもつ(大監物)に同じ。(少監物(スセイオロシモノツカサ)に對して)〔古語〕

おほい-かぎ-の-つかさ 大主鑰【名】だいしゅやく(大主鑰)に同じ。(少主鑰(ノスナイカギツカサ)に對して)〔古語〕

おほい-かしはで-の-つかさ 大膳職【名】だいぜんしき(大膳職)に同じ。〔古語〕

おほ-いき 大息【名】歎息する時つくいき。ふといき。ためいき。といき。

おほい-ぎみ 大君【名】第一の姉君。大姉君。おほいこ。〔古語〕榮花「よしちか中納言は、かの一條大納言のおほいぎみの御をぢにて」 「大戰爭。

おほ-いくさ 大軍【名】はげしきたたかひ。

おほ-いくら-の-つかさ 大藏省【名】おほくらしやう(大藏省)に同じ。〔古語〕

おほ-いこ 大子【名】おほいぎみ(大君)に同じ。〔古語〕 大和「おほいこは、きさいの宮に、少將の御(ヨ)といひてさぶらひけり」

おほい-ことわるつかさ 大判事【名】だいはんじ(大判事)に同じ。(少判事(スナイコトワルカサ)に對して)〔古語〕

おほい-さうくわん 大主典【名】主典(サウク)の官中にありて上位にある方即ち大典・大錄・大疏・大屬・大志の稱。おほきふみびと。

おほ-いし 大石【名】■大なる石。(小石に對して) 紀「伊勢の海の大石にやいはひもとへるへただみの」 ■切箔(ハク)の一種。砂子(スナ)に用ふ。

おほいし 大石【名】■〔地〕近江國栗太(モト)郡に屬する村。勢多川に沿ひ、山城國綴喜(キツ)郡に接す。■姓氏の一。中世、前記の大石村に在りて、佐佐木氏に屬したり。大石良雄はその裔なりといふ。

おほ-いしうち 大石打【名】鷹の尾羽の中にて、左右の最端に在る羽。矢羽に用ふるに適す。

おほいし-き 大石忌【名】三月二十日(昔は舊曆の二月四日)京都祇園町の茶屋萬亭にて修する大石良雄等四十七義士の忌。

おほいしだ 大石田【名】〔地〕羽前國北村山郡にある町。最上(モガ)川の左岸。尾花澤町の西約一里。鐵道奥羽線の一驛。

おほいし-ちびき 大石千引【名】〔人〕國學者。名は貞見。野乃舍と號す。江戸の人。橘千蔭の門人。和歌に長ず。榮花物語抄・大鏡觀短抄等の著あり。天保五年歿す。年六十五。

おほいし-のぶきよ 大石信清【名】〔人〕四十七義士の一人。淺野長矩に仕へて馬廻たり。通稱は瀨左衞門。元祿十六年二月四日死を賜はる。年二十七。

おほいし-まとら 大石眞虎【名】〔人〕畫家。舊姓は小泉、通稱は衞門七、後に壽太郎。輒の舍と號す。名古屋の人。畫を月樵に學び、有職畫に長じ、大極殿朝賀圖によつて有名となる。粗荒國風・百人一首一夕話圖等の著あり。天保四年歿す。年四十二。

おほいし-よしかね 大石良金【名】〔人〕大石良雄の嫡子。四十七義士の一人。通稱は主稅(チカラ)。復讎の日、裏門口の頭となる。元祿十六年二月四日松山藩邸に死を賜はる。年十六。 「條を見よ。

おほいし-よしたか 大石良雄【名】〔人〕淺野長矩(ナガノリ)の國老。赤穗四十七士の領袖。內藏助(クラノスケ)と稱す。元祿十四年三月主君長矩死を賜はり國除せらるゝや、千辛萬苦して、遂に同志の士四十七人と同十五年十二月十四日の夜、吉良(キラ)義央(ヨシカシ)の邸に讎を報じ、細川邸に拘せられ、明年二月四日死を賜はる。年四十五。一說に、良雄は、正しくは「よしたか」と訓むと。

おほい-しるすつかさ 大外記【名】だいげき(大外記)に同じ。(少外記(スナイシル)に對して)〔古語〕 和名「大外記、於保伊之流須豆加佐」

おほい-すけ 大次官【名】次官(ジカン)の官の中にて高き方のもの、即ち大輔・大副・大弼・大貳等の類。〔古語〕

おほい-すず-の-つかさ 大主鈴【名】だいしゅれい(大主鈴)に同じ。(少主鈴(ノスナイスズツカサ)に對して)〔古語〕

おほいそ 大磯【名】〔地〕相模國中郡にある町。舊東海道五十三驛の一。今は小磯・高麗(コマ)の兩村をも合す。北に高麗寺山を負ひ、南は海に臨む。風景佳麗。遊覽・避寒・海水浴等に適す。別莊多く、又、鳴立澤の古蹟あり。

おほ-いそぎ 大急【名】極めて急ぐこと。至急。火急。

おほいた 大分【名】〔地〕『いたはきた(分)の音便』■四十三縣の一。豐後國全部及び豐前國の下毛(ゲモ)・宇佐二郡を管轄す。古名「おほきた」、また古は「碩田」と書けり。縣廳を大分市に置く。■豐後國十郡の一。郡役所を大分市に置く。■豐後國にある市。もとの西大分町と荏隈(クマ)豐府(ホフ)の二村とを併せたるもの。北は海に臨み、東は大分川に沿ふ。大給(オキ)氏の舊城地。土地の者は「おいた」と呼ぶ。舊稱府內。

おほ-いた 大板【名】茶道の風呂の敷板の、大なる方のもの。はんいた。

おほ-いた-がは 大分川【名】〔地〕豐後國大分郡にある川。九住(クチ)山に發し、初め朽網(クタ)川と云ひ、透內(ツウナイ)川及び七瀨川を容れ、大分市の東北に到りて海に注ぐ。長さ十五里。下流を堂尻(ダジリ)川といふ。

おほ-いたくみ 大工【名】たいこう(大工)に同じ。(少工(クナイ)に對して)

おほ-いただり 大虎杖【名】〔植〕いぬいたどり(犬虎杖)に同じ。

おほいた-ひとつおき 大板一置【名】茶道にて、風呂を大板に据ゑて、道具疊の中央に置くこと。なかおき。

おほ-いたぶき 大板葺【名】〔建〕幅一尺ほどにて、長さ棟より軒に達する板を駢列して、その板の接合する上には、目板を打附けたる家根。井戸屋形・木戸門等に用ふ。

おほ-いちざ 大一座【名】大勢の客人の、酒もりの席などに集まりゐること。柳樽「お

ほいちざ多藝なやつは油むし」

おほいちびめ-の-かみ 大市姫神【名】大山津見神の御子。商業を護りたまふといふ。

おほいづみ 大泉【名】（地）しやうない（庄内）の古稱。

おほいと 大絲【名】つむぎ（紬）に同じ。〔古語〕名義抄「紬、紐絶ツムギ・オホイト・ツグ・ヌキツ」

おほいとかけ 大絲掛【名】（動）腹足（フクソク）類に屬する軟體動物。絲掛貝の類にて、それよりも大きく、産出稀なるを以て、價貴し。「見よ。

おほい-ときべ 大解部【名】ときべ（解部）を

おほい-どの 大殿【名】おほいまうちぎみ（大臣）に同じ。〔古語〕源氏「おほいどのの君、いとをかしげにかしづかれたる人とは」

おほい-とのしるす-つかさ 大外記【名】だいげき（大外記）に同じ。（少外記（ルスイノトノシ）に對して）〔古語〕

おほ-いなご 大稻子【名】（動）だいみやうばった（大名蝗蝗）に同じ。

おほい-に 大いに【副】『おほきに（大きに）の音便』甚しく。たくさんに。いたく。

おほ-いぬ 大犬【名】【一】（動）大なる犬。【二】（動）おほかみ（狼）を云ふ。〔陸前國仙臺の方言〕【三】（天）星座の一。南天に在り。

おほ-いぬたで 大犬蓼・大馬蓼【名】（植）蓼（タデ）科に屬する一年生の草。高さ四五尺に及び、分枝多く、節高く、紅色を帶ぶ。葉は披針狀にして尖り、晩秋の頃、淡紅色の小花、穗狀に密生す。我が國各地の原野に自生す。

おほ-いぬふぐり 大犬睾丸【名】（植）玄參（ハシドイグサ）科に屬する一年生の草。歐洲の原產。近年輸入せられたる野生の雜草なれども、雅趣あり。莖は高さ四五寸。三月ごろより六月ごろまで、四瓣・鮮青色の花開く。

おほ-いはーやま 大岩山【名】（地）近江國伊香（カイ）郡木之本（モノモト）村大字黑田にある山。天正十一年賤（ヅ）ガ嶽合戰の際、佐久間信盛の中川清秀を襲ひしところ。

おほ-いはらん 大岩蘭【名】（植）うちやうらん（うちやう蘭）に同じ。

おほい-まうちぎみ 大臣【名】だいじん（大臣）に同じ。〔古語〕古今「東三條の左のおほいまうちぎみ」

おほい-まちぎみ 大臣【名】前條の略。〔古語〕紀「大臣、オホイマチギミ」

おほいまつりごと-の-おほいまうちぎみ 太政大臣【名】次條の音便。〔古語〕

おほいまつりごと-の-おほまへつぎみ 太政大臣【名】だいじやうだいじん（太政大臣）に同じ。〔古語〕

おほい-まつりごと-の-つかさ 太政官【名】だじやうくわん（太政官）に同じ。〔古語〕和名「太政官、於保伊萬豆理古止乃官」

おほい-まつりごとびと 大判官【名】判官（ジヨウ）の官の中にて高き方、即ち大祐・大亟・大允・大尉・大忠・大監の稱。おほきまつりごとびと。〔古語〕

おほいみ-まつり 大忌祭【名】大和國廣瀨の神（水神）を主とし、龍田の風神と六（ツム）の御縣（ガタ）の神とを祭りて、淫雨の災なく五穀の豐熟ならんことを祈る祭式。

おほい-みやつこ 大領【名】だいりやう（大領）に同じ。（少領（スナイレ）に對して）〔古語〕

おほい-ものまうす-つかさ 大納言【名】だいなごん（大納言）に同じ。（中納言（ナカノモノマウスツカサ）・少納言（スナイモノマウスツカサ）に對して）〔古語〕

おほ-いり 大入【名】【一】興行場に、見物人の多くあること。【二】おほいりば（大入場）の略。

おほ-いり-かんばん 大入看板【名】昔、芝居の看板の、「大入」の二字を記して、表に釣出ししもの。普通は盃の形に造り、大入盃と呼びたり。

おほ-いり-さかづき 大入盃【名】前條を見よ。

おほ-いり-ば 大入場【名】おひこみ（追込）【二】に同じ。

おほ-いり-ふだ 大入札【名】昔、芝居にて「大入」の二字を記して、當的（マト）の下に貼附し紙片。

おほ-うしろ 大後【名】射藝にて、大前の次に位する射手。四角（カドツ）の一。（大まへ・關の前・關のうしろに對して）

おほ-うす-の-みこと 大碓命【名】（人）やまとたけるのみこと（日本武尊）の御名。

おほ-うた 大歌【名】『おほ（大）は敬稱』古、宮中の大歌所にて採用せられたる歌、又それを奏する人。（小歌に對して）

おほうた-どころ 大歌所【名】古、大內裡圖書寮の東、掃部寮（カモン）の西、上西門の內に在りて、諸國の風俗歌（フウゾク）及び神樂・催馬樂（サイバラ）などの歌曲を掌り、大嘗會・新嘗會などに、舞姫・參入の時、初音を奏する等の事を職とせし官衙。毎年陰曆十月二十一日に開き、翌年正月十六日閉づる例にて、その開始の日を、大歌始と呼べり。

おほうた-はじめ 大歌始【名】前條を見よ。太平記「十月は、興福寺の維摩會（マユエ）、くらべ馬のまけ方の獻物・大歌はじめあり」

おほ-うち 大內【名】『おほ（大）は敬稱』みかど。禁中。皇居。だいり。千載「二條院の御時、おほうちにおはしまして」

おほうち 大內【名】姓氏の一。本姓は多多良（タタラ）氏。百濟王餘璋の後。餘璋の太子琳聖、推古天皇の十九年周防國多多良濱に上陸して、大內縣に居り、その子孫、姓多多良臣を賜はり、壽永中、大內介と稱して武家に列せりといふ。足利氏の世、大いに榮え、義隆に至りて滅亡す。

おほ-うぢ 大氏【名】同じ一族中の宗族、即ち本家。上古、一族中唯一のものにて、天皇に直隷し、數多の小氏を統率し、何れも家人・奴婢（ヒ）ありき。例へば物部氏は大氏にて、その分家なる物部飛鳥（カヅ）氏・物部石上（カミノ）氏は小氏なりし類。〔古語〕

おほうちうど 大內人【名】おほうちびと（大內人）の音便。

おほうち-がた 大內方【名】宮中方。（武家方に對して）淀鯉出世龍門「大內がたより御稱詮索」

おほうち-かり 大內刈【名】柔道の投業

おほ-うちぎ 大袿【名】ゆきたけを大きく仕立てたる袿。かづけ物として用ひしものにて、貴ひたる者、これを常の袿に仕立てなほして著用せり。（小袿に對して）雅亮卷抄「おほうちぎ一領といふは、ひとへならで、ただ二つ重ねたるをいふなり」

おほうち-ぎり 大內桐【名】【一】五七の桐の模樣。丹波奧作「おほうちぎり、覆ひかけたるはさみ箱」【二】名物ぎれの一。金地などに紋金の桐唐草あるもの。大內義隆の明（ミン）國に依囑して織らしめしものといふ。

おほうちびし 大內菱〔參照〕

おほうち-しゆご 大內守護【名】禁闕を守護する職。はじめは公家（クケ）の武勇ある者これに任ぜられしが、後には武家の家人（ケニン）の職となれり。

おほうち-そだち 大內育【名】上品に生長したること。孕常盤「おほうちそだちにかしづきて、若紫のをさなだち、和歌の道・文字の道、繪も美しう花むすび、天性琴の妙を得て」

おほ-うちは 大團扇【名】大なるうちは。其角「小町聲。腰かけてあふぐなるべきおほうちは」

おほうち-びし 大內菱【名】【一】菱の花のかたちせる染模樣。元祿ごろ流行せり。一代女「大內菱の中はば帶」【二】名物ぎれの一。金地などに、紋金にて、大さ三寸ほどの二重菱の內に、牡丹を織出せるもの。大內家の織らせたるものといふ。おほうちぎり（大內桐）【二】參照。

おほうち-びと 大內人【名】大神宮等の大社にて、供御（クゴ）の物などを掌る神官。おほうちうど。おほうちんど。

おほうち-びな 大內雛【名】だいりびな（內裏雛）に同じ。芭蕉「大內びな人形天皇の頃かとよ」

おほうち-ぼん 大內本【名】大內義隆の發行せし書籍。紙を明（ミン）國にやり、かの國の版を借りて、印刷せしめたるものと、我が國にて印刷せしめしものとの二種あり。山口本。

おほうち-むへん 大內無邊【名】（人）槍術家。出羽の人。無邊流槍術の祖。

おほうち-んど 大內人【名】おほうちびと（大內人）の音便。「長大なるもの。

おほ-うちもの 大打物【名】武器の打物の

おほ-うちやぎやうばん 大內夜行番【名】夜中巡廻して、禁裡を警めし職。

おほうち-やま 大内山【名】一〔地〕山城國葛野（カドノ）郡の東南部にある山。仁和寺の北嶺なり。大和「白雲の九重にたつ峯なればおほうちやまといふにぞありける」二『上記の歌の意より轉用せられしものといふ』禁中。おほうち。新拾遺「いまはまた霞へだてて思ふかな大内山の春のあけぼの」

おほうちやま-の-みささぎ 大内山陵【名】宇多天皇の御陵。山城國葛野（カドノ）郡仁和寺の北にあり。土人は宇多塚と呼ぶ。

おほうち-よしおき 大内義興【名】〔人〕武將。姓は多多良氏、小字は龜童丸。將軍足利義稙（ヨシタネ）を翼戴して功あり、管領に補せられ、永正十六年兵を朝鮮全羅道に遣し、武を見（ケン）す。享祿元年歿す。年五十二。

おほうち-よしたか 大内義隆【名】〔人〕武將。義興の長子。小字は龜童丸。享祿十七年從二位兵部卿に累遷す。性暗弱にして武事を怠り、賞罰黜陟（チュウチ）、悉く私意に出で、將士離散す。享祿二十年老臣陶（スエ）晴賢に、山口に圍まれ、子義尊と共に、長門國深川の大寧寺に自殺す。年四十五。

おほうち-よしひろ 大内義弘【名】〔人〕武將。小字は法師また孫太郎。後、薙髪して、有繋と號す。將軍足利義滿に仕へて軍功あり、防・長・豐諸州の守護となる。南北兩朝の統一に歸せるは、實に義弘の力に因る。應永六年義滿の意に忤（カ）ひて征討せられ、和泉國堺浦の城に戰死す。年四十六。

おほ-うつぼかづら 大靫葛【名】〔植〕靫葛の一種。食蟲植物の最たるもの。熱帶地に生ず。瓶子の長さ一尺五六寸、瓶口の直徑三寸餘に及び、瓶内廣闊なるを以て、よく鳥類・鼠等をも溺死せしむといふ。

おほ-うなばら 大海原【名】ひろびろとしたる海原。おほうみのはら。

おほ-うばら 【名】〔植〕さるとりいばら（藜芦）に同じ。〔古語〕和名「拔葵、佐流止利。一云、於保宇波良」

おほ-うへ 大上【名】貴人の母。おほきたのかた。おほかた。おほおかた。かだいはう。〔古語〕源氏「おほうへ嘆きたまふ」

おほ-うま 大馬【名】大なる馬。藝「大馬も八斗、小馬も八斗」

おほ-うまじるし 大馬標・大馬印【名】大なる馬印。（小馬標に對して）

おほ-うみ 大海【名】一おほきなる海。おほきうみ。大洋。二かいぶ（海賦）に同じ。〔古語〕榮花「裳は、皆ちずり、おほうみなり」大海を手で堰（セ）く【句】人力の及びがたきことの譬。大川を手で堰く。水水を手で堰く。〔諺語〕

おほうみ-の-はら 大海原【名】おほうなばら（大海原）に同じ。〔古語〕參考「こひせじとみそぎの船もこぎよらばおほうみのはらにときやはなたん」

おほ-うら 大裏【名】〔文〕連句の懷紙の最後の頁、即ち名殘の裏。

おほうら-じやう 大浦城【名】陸奥國中津輕郡大浦村大字賀田にある城。信濃守光信の始めて築きしものにて、津輕爲信これに據りて祖業を恢復せり。

おほ-うりかへて 大瓜槌【名】〔植〕うりはだかへて（瓜膚槌）に同じ。

おほ-うを 大魚〔動〕【名】十一月の頃、三四尺より五六尺までになりたる鰤（ブリ）。〔筑前國・上總國の方言〕

おほえ 大江【名】〔地〕一攝津國にありし地。上古の淀川の河口に臨みし處にして、今の大阪市天滿橋南詰八軒屋の邊に當るといふ。**おほえどの**（大江殿）參照。後拾遺「渡邊（ワタナベ）やおほえの岸に宿りして雲居に見ゆる生駒（イコマ）山かな」二姓氏の一。神別にして、土師（ハニシ）氏の支族。姓（カバネ）は朝臣（アソン）。もと「大枝」と書けり。音人（オトヒト）以來、菅原氏と相並びて、文學の家となり、各、大學の東西曹を保ちて、子弟を教育せり。その末分れて長井・那波・毛利・海東・水谷・上田・北小路の諸氏となれり。

おほ-え 大兄【名】おほあに。長兄。

おほ-え 大枝【名】大なる枝。おほえだ。〔古語〕三代實錄「大えをこえて走りこえて」

おぼえ 覺【名】一おぼゆること。わすれぬこと。記憶。二技術などに熟したる自信。源氏「世の中に、物のおぼえある人人」三『思はれの意』他人の、我れに對する感情。寵遇。信用。人望。「君のおぼえ」四世のきこえ。評判。源氏「ねぢけがましき覺えだになくば」

覺高し【句】人望多し。信用多し。〔古語〕「いとおぼえたかき身」

腕に覺あり【句】經驗あり。技倆あり。素養あり。〔俚語〕

おぼえ-あかす 覺明す【動四他】思ひつつ夜を明す。〔古語〕榮花「こよなうのどかになりぬるも、覺束なく、よろづおぼえあかさせたまふ」

おぼえ-あさつな 大江朝綱【名】〔人〕書家。音人の孫。學問淵博、詞賦典麗にして、又、書法を好くし、小野道風と並び稱せらる。村上天皇の勅を奉じて、新國史坤元祿を撰む。天德元年歿す。年七十二。

おぼえ-おとんど 大江音人【名】〔人〕文學者。阿保親王の子。大江本主に養はれてその家を繼ぐ。博學・能文。清和天皇の侍讀となり、從三位・檢非違使別當たり。世に江相公と稱せらる。その師菅原是善と共に、勅を奉じて群籍要覽・貞觀格式等を選定す。元慶元年薨ず。年六十七。

おぼえ-がき 覺書【名】一心覺えのために、書附けておくこと、又その書附。備忘錄。二『英 Memorandum』一種の外交文書。相手國に對して、自國の意見・希望を陳述するためのもの。條約の性質を有するもの又は本條約の文意を補足・解釋せるものあれど、形式は正式の條約よりも簡單なり。

おぼえ-きんより 大江公資【名】〔人〕歌人。清公の子。兵部大輔に任ぜらる。長久元年歿す。

おぼえ-ぐさ 覺草【名】鷹狩の時に、鳥の落ちたりと思はるるあたり。〔古語〕

おぼえ-とれとき 大江維時【名】〔人〕文學者。大江千古の子、音人の孫。文章博士より中納言に進む。世に江納言と稱せらる。博覽・强記にして經史に精通す。應和三年薨ず。年七十六。

おぼえ-ず 不覺【副】われしらず。しらずしらずに。いつしか。おもほえず。偶然。源氏「おぼえず、神佛の現れたまへらんやうなりし御心ばへに」

おぼえ-せいわん 大江青灣【名】〔人〕浪華の人。名は渦、字は清卿。茶事に精通し、性淡泊にして交遊汎く、大に秀吉の寵遇を得、青灣の號は豐公の賜ふところといふ。

おぼえ-たかちか 大江擧周【名】〔人〕學者。匡衡（ヒラヒラ）の長子。長和四年東宮學士となり、大學頭に累遷す。

おぼえ-ちさと 大江千里【名】〔人〕歌人。音人の子。延喜三年兵部大丞に任ぜらる。父の業を繼ぎて文學に名高く、殊に歌に巧みにして、詠歌多し。

おぼえ-ちやう 覺帳【名】覺えがきの帳簿。てびかへ。手帳。

おぼ-えど 大江戸【名】〔地〕江戸の美稱。一茶「大江戸はおめずおくせずかきつばた」

おぼえ-どの 大江殿【名】昔、攝津國大江にありて、齋宮（イツキノミヤ）の、伊勢より歸りたまふをりの旅宿たりし處。源氏「大江殿といひける所は、いたく荒れて、松ばかりぞしるしなりける」

おぼえ-の-さか 大江坂【名】〔地〕**おほえやま**、大江山（二）を見よ。

おぼえ-の-せき 大江關【名】〔地〕王朝時代に、京都よりの山陰街道の要衝なる大江の坂に設けられし關。白鳳八年に置かる。

おぼえ-の-みささぎ 大枝陵【名】光仁天皇の皇后高野新笠の御陵。山城國乙訓（オトクニ）郡大枝村大字沓掛（クツカケ）にあり。

おぼえ-の-わうじ 大兄皇子【名】〔人〕用明天皇の御即位前の御名。

おぼ-えびかづら 大葡萄【名】〔植〕ぶだう（葡萄）に同じ。〔古語〕

おぼえ-ひろもと 大江廣元【名】〔人〕源頼朝の臣。廣く書史に渉り、又、朝章を暗んじ、政治に通じ、籌略あり。兵馬の權、頼朝に歸し、天下に號令するを得しは、實にその功にして、頼朝の薨後、北條氏にも信任せらる。嘉祿元年歿す。年七十八。

おぼえ-まさひら 大江匡衡【名】〔人〕文學者。重光の子。學を祖父維時に受けて、詩歌を能くし、文章博士に進み、侍讀を兼ね、侍從に累進す。長和元年歿す。六十一。

江吏部集の著あり。

おほえまさふさ 大江匡房【名】〔人〕文學者。經史に通じ制度・典禮に精しく、又、和歌・詩文に巧みなり。後三條天皇の信任を得、累進して大藏卿となる。天永二年薨ず。年七十一。

おほえ-もちとき 大江以言【名】〔人〕文學者。仲宗の子。文章博士。從三位に進む。秀文麗句、一世に名高く、紀齋名(ナリキ)及び從姪匡衡(ヒラヒラ)と並び稱せらる。寛弘七年歿す。年五十六。

おほえ-やま 大江山【名】[一]〔地〕山城國と丹波國との境にある山。その坂路を大江の坂といひ、後、訛りて老坂(サカ)といへり。〔大枝山〕 金葉「おほえ山生野(イク)の道の遠ければまだふみもみず天の橋立」 [二]〔地〕丹波國與謝(ヨサ)郡にある山。丹後國加佐(カサ)郡に跨り、丹後國にては千丈ゲ嶽と呼ぶ。昔、酒呑童子の住みきといふ處。 [三]謠曲の一。源頼光の一行、山伏となりて、大江山の酒呑(シユテン)童子のすみかに欺き入り、遂にこれを退治することを作りしもの。古名、酒呑童子。

おほ-えり 大襟【名】小袖を著るに、前を廣くあくること。

おほ-おかた 大御方【名】**おだいはう**(御大方)に同じ。

おほ-おく 大奥【名】江戸幕府營中の一部。御寢所(ミネヤドコロ)の居所にして、又、將軍の休息所たりし處。ここに仕ふる者は女に限られたり。**おく**(奥)[三]參照。

おほ-おとぎり 大小連翹【名】〔植〕金絲桃(ヒペリカム)科に屬する山野自生の草。高さ二三尺に達し、葉は披針形にて對生し、夏、莖頂に五瓣黄色の花を咲く。

おほ-おとし 大落【名】淨瑠璃の節の落節(ヒツシ)の一。

おほ-おにばす 大鬼蓮【名】〔植〕睡蓮(ヒツジ)科に屬する多年生の水草。鬼蓮に似て刺を有し、葉は質堅强にして大きく、四五歲の小供を載せて水に浮ぶに足るといふ。南米アマゾン河の上流に自生す。花は直徑六七寸、中心は鮮紅色・周圍は雪白色。土人はその果實を食用とす。

おほ-おとと 太弟【名】『だいてい(太弟)の誤訓』天皇の御弟。〔古語〕

おほ-おば 大祖母【名】**おほおほば**(大祖母)に同じ。〔古語〕 和名「曾祖母。爾雅云、祖父之母爲二曾祖母一、於保於波」

おほ-おび 大帶【名】しん(紳)に同じ。

おほ-おぼ【貌】おぼおぼしきさま。おぼろげ。不明。〔古語〕 源氏「その夜泣きたまひしさまあやしきまでことずくなに、おぼおぼとのみものしたまひて」

おほ-おぼし【形二】『おほぼ(朧)の意』 [一]おぼろげなり。分明ならず。はれやかならず。おぼし。おぼつかなし。〔古語〕 源氏「雪やうやうつもり、星の光におぼおぼしきを」 [二]意思疏通せず。そばそばし。うとうとし。おほぼし。〔古語〕 源氏「おぼおぼしくもてなさせたまふには」

おほ-おほぢ 大祖父【名】おほぢの父。ひぢぢ。曾祖父。〔古語〕 和名「曾祖父。爾雅云、祖父之父爲二曾祖父一、於保於保知」

おほ-おほぢ-をぢ【名】おほおほぢの兄弟。族父。〔古語〕 和名「族父。爾雅云、父之從祖昆弟、爲二族父一、於保於奉知乎知」

おほ-おほば 大祖母【名】おほぢの母。ひばば。曾祖母。おほおば。〔古語〕

おほ-おみ 大臣【名】上古の臣(オミ)姓の頭領たる人。皇別に屬し、大連(オホムラジ)と並びて朝政を執りしこと、後世の左・右大臣の如くなりき。〔古語〕

おほ-および 大指【名】**おやゆび**(親指)に同じ。〔古語〕 和名「拇。國語注云、拇、於保於與比、大指也」

おほ-おろし 大卸【名】次條の略。

おほ-おろしうり 大卸賣【名】多量の商品を卸賣すること、又はその人。おほおろし。

おほが 繅車【名】**いとよりぐるま**(絲繰車)に同じ。〔古語〕 和名「繅車。唐韵云、繅、訓二久流一。漢語抄云、繅車、於保賀、絡レ繭取レ絲也」

おほ-が 大鋸【名】大なるのこぎり。おが。かがり。がんぎ。

おほ-がう 大神主【名】**おほかんぬし**(大神主)に同じ。〔古語〕

おほ-がうし 大格子【名】辨慶縞(ベンケマ)の大形なるもの。大形の格子縞。(小格子に

對して)

おほ-かうず【名】〔植〕**とろろあふひ**(黄蜀葵)に同じ。

おほかうち 大河内【名】姓氏の一。清和源氏の支族。源頼政の後。治承四年の宇治橋の合戰後、頼政の孫顯綱、母に隨ひて遁れ、三河國額田(ヌカタ)郡大河内に住みて氏とす。德川時代に至り、家康の命にて、松平正次の後を承けて、松平姓を冒せり。いはゆる長澤の松平にて、正綱の子信綱(實は正綱の兄久綱の子)の後は、三河國吉田の藩主、信綱の次子信興の後は上野國高崎の藩主、正綱の子正信の後は上總國大多喜(タキ)の藩主として明治維新に至る。後、いづれも大河内姓に復し、同じく子爵を授けらる。

おほ-かうもり 大蝙蝠【名】〔動〕翼手(ヨクシユ)類に屬する哺乳動物。普通のよりは非常に大きく、翼を張れば四尺に及ぶ。尾を飛膜にて連綴せざると、爪を食指にも有するとはその特異の點なり。我が國にては琉球・小笠原島に多し。おほかはほり。

おほ-かがみ 大鏡【名】〔書〕三鏡の一。文德天皇より後一條天皇まで十四代・百七十五年間の帝王・大臣などの事を和文にして記せるもの。八卷。藤原爲業の著といふ。世繼物語。

おほかがみくわんたんせう 大鏡觀短抄【名】〔書〕大鏡を註釋せるもの。十二卷。大石千引の著。

おほ-がかり 大掛【名】大仕掛なる工事。

おほ-がき 大垣【名】居宅の周圍の大なる垣根。〔古語〕 源氏「ものはかなげなる小柴をおほがきにて」

おほがき 大垣【名】〔地〕美濃國にある市。西北に揖斐(イビ)川・西に杭瀨(クイセ)川あり。鐵道東海道本線の一驛。養老線の起點。戸田氏の舊城地。岐阜縣の管下に屬す。大垣城址あり。

おほがき-じやう 大垣城【名】美濃國大垣町の中央にありし城。天文の頃、土岐氏の臣宮川吉左衞門安定の築造せしもの。後、齋藤氏の臣竹越道鎭・織田信長の臣氏家直元、又、池田信輝・同輝政・三好秀次・木下秀長・加藤光泰・一柳直末・羽柴秀勝・伊東祐盛等居り、關ゲ原の役には西軍これに古據

し、德川氏の世には、石川康道・松平忠長・岡部正盡・松平定綱を經て、戸田氏に至り、明治維新に至るまで、その子孫世襲せり。維新後廢城となり、天守閣のみ存し、廓内は公園となれり。

おほ-かく 大角【名】[一]〔建〕大なる角材。 [二]ぜに百三十二文。〔昔の芝居者の隱語〕

おほ-かぐま 狗脊【名】〔植〕水龍骨(ポリポディウム)科に屬する多年生の草。强長なる地下根莖を有し、葉柄は一尺乃至一尺五寸。葉身は羽狀複葉、各小葉は楕圓狀・披針形、長さ一二尺・幅五六寸。支脈上に子囊群を生じ、實葉・裸葉共に同形なり。我が國山地の濕地に自生す。いぬわらび。おにわらび。

おほかさ 大嵩【名】大なるかさ。おほがら。魁偉。

おほ-がさ 大傘【名】柄長くしてさしかざすやうにしたる大なる傘。〔古語〕 落窪「おほがさを、ひきかたぶけて」

おほ-かさじるし 大笠標【名】笠標の最も大なるもの。(中笠標・小笠標に對して) 太平記「由井濱の浦風に濃き紅の大笠標を吹きそらせ」

おほ-かし 大樫【名】〔植〕**あかがし**(赤樫)に同じ。

おほ-かし 大柏・大槲【名】〔植〕次條[一]に同じ。

おほ-かしは 大柏・大槲【名】 [一]〔植〕かしはの變種。葉は槲に似て、長さ一尺に及び、重鋸齒のもの多し。我が國の山地に自生す。おほかし。 [二]紋所の一。謠曲(伏木曾我)「大柏の水干」

おほ-かしはで-の-つかさ 大膳職【名】**だいぜんしき**(大膳職)に同じ。〔古語〕 和名「大膳職、於保加之波天乃豆加佐」

おほ-がしら 大頭【名】[一]古、御即位・御禊(ギヤウソ)などの時に立てし一種の旗。竿の先頭に、馬の尾又は墨染の苧(ヲ)を束ね垂らして飾としたるもの。おにがしら。節(フシ)の旗。だう。〔蘇・節〕 榮花「おほがしらなどひて、例のおそろしげに筋ふとき髮よりかけて」 [二]大群の長。(小頭に對して)〔武家時代の語〕 [三]**くせまひ**(曲舞)に同じ。

おほ-かず 大數【名】およその數。あらましのかず。大數(タイスウ)。〔古語〕

おほかぜ 大風【名】強き風。あらき風。大風に灰を撒く【句】とりとめもなき大言を吐き、又は行の放埒にして謹直ならぬ譬。〔諺語〕

大風の後【句】次條に同じ。

大風の後のやう【句】極めて騒がしかりし後の、極めて靜かになれる譬。大風の後。大風の吹いた後。大水の後のやう。〔諺語〕

大風の吹いた後【句】前條に同じ。

おほかた 大方【名】一半ば以上。殆ど大部分。大概。後拾遺「櫻ばなにほふなごりにおほかたの春さへをしくおもほゆるかな」二おほうへ(大上)に同じ。〔古語〕

おほかた 大方【副】一半ば以上は。殆ど。大部分は。多くは。大概。二おほよそ。あらまし。ひととほり。たぶん。おほかたに。

おほ-がた 大形【名】一形の大なるもの。おほぶり。(小形に對して)二模樣の形の大なるもの。(中形に對して)三ごんべゑ(權兵衛)を見よ。

おほがた 大縣【名】〔地〕河内國の舊郡の一。明治二十九年、中河内郡の一部となる。

おほかた-さま 大方樣【名】次條に同じ。

おほかた-どの 大方殿【名】おほかた(大方)を一層敬ひていふ語。おほかたさま。太平記「大方殿は、自害して火に入らせたまふべき由」

おほ-がたな 大刀【名】一普通のより大なる腰刀。平家「大刀を拔出して」二普通のより大なる鍔刀(ツバガ)。

おほかた-なし 大方なし【形一】一方ならず。甚し。なみなみならず。

おほかた-に 大方に【副】【名】おほかた(大方)に同じ。源氏「大かたに花ゐ姿を見ましかば露も心のおかれましやは」

おほ-かたぬぎ 大肩脫【名】おほはだぬぎ(大肌脫)に同じ。盛衰記「みな甲冑を脫ぎすて、大肩脫になり、楯の面に進み出でて」

おほかた-はちらう-がた 大方八郎潟【名】〔地〕羽後國の八郎潟の別稱。

おほ-かたびら 大帷子【名】一古、汗とりとして用ひたる帷子。形は單衣(ヒトヘ)に似て、總體に小く且つ短く、春冬は白、夏は紅、老人は香ぞめを用ひたり。又、中古は夏のみ用ひしが、後には、衣紋を强く支へしむるために、四季共に用ふるに至り、又、單(ヒトヘ)・袖(ソデ)・下襲(シタガサネ)を略して、この帷子に單・下襲の襟を附け、或は單の襟・袖のみを附けて用ひしこともありき。〔古語〕二武家にて、白き布にて仕立て、糊をこはく附け、單の直垂(ヒタレ)の下に重ねて著用せしもの。「眉の一種。

おほかた-まゆ 大肩眉【名】幼兒に附くるもの。

おほ-かたり 大騙【名】一大仕掛のかたり。二人を罵りていふ語。

おほ-がっしき 大喝食【名】能(ノウ)の假面(ノウ)の一。喝食の老年なるものにして、「自然居士」・「東岸居士」などの曲に用ふ。

おほかて 大粮【名】諸寮・諸司・諸衞等の俸給・食料など。(平安時代の語)

大粮の申文(アクシ)【句】諸寮・諸司・諸衞等より大粮を請求する申文。十月に行はる。

おほ-がな 大假名【名】大きく書きたる假名文字。著聞「おほがなの、いまいましげなるにて」

おほ-がに 大蟹【名】〔動〕かざめ(蝤蛑)を云ふ。(東京の語)

おほかにつり 大蟹釣【名】〔植〕禾本(ホクノ)科に屬する多年生の草。莖の高さ三四尺。葉は細長く、初夏、七六寸の疎なる穗を抽く。小穗は纖細なる花梗を有し、苞は平滑にして薄く、七八分の芒を有す。歐洲の原產にて、牧草として佳なり。

おほ-がね 大鐘【名】つりがね(釣鐘)に同じ。〔古語〕墓花「おほがねを撞きて」

おほ-がね 大金【名】多額の金。たいきん。

おほ-がね 大矩・大曲【名】三角定規の大形なるもの。一方の長さ二間に及ぶもあり。繩張をなす時などに用ふ。

おほがね-まうけ 大金儲【名】多額の金をまうくること。莫大なる利益。

おほがね-まつり 大鐘祭【名】鎌倉の圓覺寺にて、その鐘に對して、六十一年目の秋ごとに行ふ祭事。

おほがね-もち 大金持【名】多額の金を所藏すること、又その人。財產家。金滿家。

おほが-のぶさだ 大賀信貞【名】〔人〕貿易商人。博多三傑の一人。通稱は惣右衞門。幼にして南洋の阿媽港(カマウ)に航し、留まること數年、歸來、專ら商業に從事す。福岡藩の財政を整めて功あり。薙髮後、閑鷗齋宗伯と號す。寛文五年死す。年五十六。

おほ-かは 大革【名】おほつづみ(大鼓)に同じ。

おほ-かは 大川【名】一大なる川。たいが。二〔地〕隅田川の東京市兩國橋附近を流るる部分。三〔地〕淀川の大阪市を流るる部分。四〔地〕岩代國南會津(アイヅ)の荒海(アライ)山中より發し、若松市の西を過ぎて、阿賀ノ川に合す。長さ二十三里弱。五〔地〕備中國高梁(タカハシ)川の別稱。六〔地〕丹後國由良(ユラ)川の別稱。七〔地〕越後國岩船郡の北部にある川。鮭を產す。

大川を手で堰く【句】「大海を手で堰く」に同じ。〔諺語〕

おほかは 大川【名】〔地〕一讃岐國七郡の一。郡役所を長尾村に置く。二筑後國三潴(ミヅ)郡にある町。筑後川の東岸。通稱は若津港。三三河國渥美(アツミ)郡二川(カハク)町の別稱。

おほかは-いちご 大川莓【名】〔植〕きいちご(木莓)を云ふ。〔備後國の方言〕

おほかは-ぐち 大川口【名】大なる川の、海に接するところ。おほかはじり。

おほかは-じんじや 大川神社【名】丹後國加佐(カサ)郡岡田下(シタガ)村大字大川の微光山の麓に鎭坐せる鄕社。式内の古社にて、祭神は保食(ウケモチ)神。相殿に閼象女(ハヤメ)神以下四神を合祀す。

おほかは-じり 大川尻【名】一おほかはぐち(大川口)に同じ。二〔地〕平安京の時、入京の水路たりし三國(ミクニ)川即ち今の神崎川の河口にありし要津。今の攝津國河邊郡尼が崎町と小田村との間に當る。

おほかは-だけ 大川嶽【名】〔地〕北海道渡島(ワシ)國茅場郡にある噴火山。

おほかはち 大川内【名】〔地〕肥前國西松浦(マツウラ)郡にある村。有田町と一嶺を隔てて、同じく陶業地たり。

おほかはち-がま 大川内窯【名】おほかはちやき(大川内燒)に同じ。

おほかはち-じやう 大川内城【名】伊勢國飯南(イイナミ)郡大河内村にありし城。國司北畠氏ここに城きて、子孫に傳へ、永祿の末、終に廢城となる。

おほかはち-やき 大川内燒【名】享保年間、肥前國大川内にて、藩主鍋島氏が作らしめたる陶器。初めは、主として藩より幕府への進物に供し、贈答しまずして良品を製せしめ、公窯の章として、碗又は皿の高臺に、青色の櫛の齒の形を描きしかば、一名を櫛手(クシ)とも稱す。大川内窯。

おほ-かはほり 大蝙蝠【名】〔動〕おほかうもり(大蝙蝠)に同じ。

おほかは-みづ 大川水【名】大川の水。大河の流。おほかは。彌太「吉野なる大川水のよそほひは代代にもさらに絕えじとぞおもふ」

おほかは-よど 大川淀【名】大川の淀むところ。〔古語〕萬葉「今しくは見めやと思ひしみよしぬの大川よどを今日見つるかも」

おほ-がはら 大河原【名】大なる河原。記「腰なづむ大かはらの植草」

おほがはら 大河原【名】〔地〕陸前國柴田郡にある町。鐵道東北本線の一驛。

おほ-がひ 大貝【名】一大なる貝。二『貝の字に似て字畫の多きよりいふ』項・順・頗・頗などの漢字の右にある頁の字。(小貝に對して)

おほ-がひ 大峽【名】大山と大山との間。(小峽(ヒガ)に對して)〔古語〕祝詞「奥山の大峽・小峽に立てる木を」

おほ-がひき 大鋸引【名】大鋸にて、材木をひく人。大鋸にて挽(ヒ)く木挽。

おほ-かぶき 大歌舞伎【名】おほしばゐ(大芝居)に同じ。

おほ-かぶら 大鏑【名】鏑矢の、鏑(ギブ)の大なるもの。保元「御曹司、くだんの大鏑を以てひやうと射たまふ」

おほ-かぶろ 大禿【名】大なる禿鼠(カブヤ)。

おほかべ

おほ-かべ 大壁【名】全體を壁土にて塗りたるもの。土藏の壁の如き、これなり。

おほ-がへし 大返【名】軍勢の、全部引きかへすこと。總體に立ちもどること。そうがへし。

おほかへて 大楓【名】〔植〕おほつたもみぢ（大蔦楓）に同じ。

おほ-がま 大鎌【名】西洋にて牧草を刈るに用ふる大なる鎌。刃の長さ、我が國在來の鎌の數倍にて、柄に雙・單の別あれども、いづれも兩手に執りて、立ちながら刈る。

おほ-かまり 大かまり【名】多人數にて行ふ忍びの斥候。

おほかみ

おほ-かみ 大神【名】おほみかみ（大御神）に同じ。起「大神、オホカミ」

おほ-かみ 大嚙【名】粗くかむこと。空穂「やい米は、大かみにこそはかめ」

おほ-かみ 狼【名】〔動〕『大神の義といふ』食肉類に屬する獸。形、犬に似て、耳小く、口大く、眼鋭く、前肢に五爪、後肢に四爪あり、深山に棲み、性、獰猛にして肉食をなし、人をも害す。但し我が國にて狼といふは、豺（イヌ）のことにて、眞の狼は產せず。

（みかほお）

狼に衣（モノ）【句】■「鬼に法衣」〔諺語〕□に同じ。■衣服の大きくして身に添はぬ譬。〔諺語〕

狼の祭【句】『獺祭魚（イタウサ）の故事などに本づきて言出せるものならん』九月頃、狼、その殺したる獸を陳ねて、天を祭るといふこと。

おほかみ-ぐさ 狼草【名】〔植〕うらじろ（裏白）を云ふ。〔播磨國の方言〕

おほかみ-だふし 狼倒【名】〔植〕ちやんばぎく（博落廻）を云ふ。〔安藝國の方言〕

おほがみ-の-まつり 大神祭【名】古、四月と十二月との上の卯の日に行はれ、大物主神を祀りし祭。太平記「四月には、大神の祭、廣瀨・龍田の祭あり」

おほかみ-もの 狼物【名】ひとくひおほかみ（人喰狼）□に同じ。〔俚語〕

おほかみやまじんじや 大神山神社【名】伯耆國西伯（ハクヒ）郡大高村大字尾高にある國幣小社。延喜式には「おほむわのやま神社」と訓（ヨ）めり。祭神は大己貴（オオナモチ）神。

おほかみれん 狼連【名】『送狼（オクリオ）の隙あれば躍りかからんとするに譬ふ』女藝人に對して、猥らなる心を懷きつつ附きまとふ人。おくりおほかみ。〔俚語〕

おほかむつみ-の-みこと 意富加牟豆美命【名】神代の時、伊弉諾（イザナギ）尊に追はれたまひし時、黃泉津平坂（ヨモツヒラサカ）の桃の木に賜ひし名。

おほ-がん 大雁【名】〔動〕かもめ（鷗）を云ふ。〔肥前國の方言〕

おほ-がんだう 大强盜【名】■おほぬすびと。大盜。臣賊。■人を罵りていふ語。

おほ-かんぬし 大神主【名】上古、伊勢神宮に奉仕せし神官の、禰宜（ネギ）の上にありしもの。おほがう。

おほ-かめ 狼【名】〔動〕おほかみ（狼）の訛。〔關東の方言〕

おほかめ-の-き 狼牙【名】〔植〕忍冬（ハスカヅラ）の一種。原野に自生し、葉は廣楕圓形又は圓狀心形をなす。嫩葉は食用となる。むしかり。かめのき。

おほかめ-もの 狼者【名】おほかみもの（狼者）の訛。

おほが-もとまさ 大神基政【名】〔人〕源平時代の笛の名人。惟季の養子。父の業を繼ぎて、吹笛を巧みにし、堀河・鳥羽兩天皇の笛の師範となる。保延四年歿す。年六十。

おほ-から 意富加羅【名】〔地〕みまな（任那）に同じ。〔古語〕

おほ-がら 大柄【名】■普通よりも長大なる體格。（小柄に對して）■普通より大なる縞柄。（小柄に對して）

おほ-がら 大辛【名】七いろ唐がらしの、味の極めてからきもの。（中辛・小辛に對して）

おほから-あふひ 大柄葵【名】〔植〕たちあふひ（蜀葵）に同じ。

おほ-がらう 大家老【名】たいらう（大老）に同じ。

おほがら

おほ-がらし 大芥子【名】〔植〕十字花科に屬する一二年生の草。高さ三四尺。葉は倒卵形又は長楕圓形にして大きく、不齊の鋸齒あり。春夏の候、黃色の十字形花、總狀花序をなして開く。若き莖と葉とは食用に供せらる。いせな。おほばがらし。かきな。たかな。ばせうな。

おほ-がり 大雁【名】〔動〕ひしくひ（菱喰）に同じ。〔古語〕

おほかりまた 大雁股【名】鏃（ヤジリ）の一種。雁股の大なるもの。

おほ-き 大【接頭】■おほいなる・すぐれたる等の意。〔古語〕「おほきひじり」■おほい（大）に同じ。（少（イスチ）に對して）〔古語〕「おほきおとど」「おほきまうちぎみ」

おほき 正【接頭】『大の意』おほい（正）に同じ。（從（イヒ）に對して）〔古語〕古今「おほきみつの位」

おほき 大木【名】大いなる木。たいぼく。〔諺語〕

おほぎ。

大木に蟬【句】大・小の懸隔の甚しき譬。

大木の下に小木（ギ）育つ【句】大きなるものの庇陰によりて、小きものの發達する譬。〔諺語〕

立寄らば大木の陰【句】勢力のある所に身を寄すれば、便宜多し。〔諺語〕

おほ-ぎ 大木【名】前條に同じ。（小木（ギ）に對して）〔古語〕著聞「男の、かたぬぎて、たつぎふりかたげて、大ぎを伐りたるあり」

おほき-いちふきん 大木一分金【名】一分金の一種。面に一分の二字、背には丸の中に大木の二字を分ちて印す。重さ九分弱。

おほき-うみ 大海【名】おほみ（大海）□に同じ。〔古語〕萬葉「おほきうみのみなそこ深くおもひつつ」

おほき-おとど 太政大臣【名】だいじやうだいじん（太政大臣）に同じ。〔古語〕伊勢「おほきおとどの榮花のさかり」

おほき-おほいきさい-の-みや 太皇太后宮【名】たいくわうたいこうぐう（太皇太后宮）に同じ。〔古語〕

おほき-おほいきさいのみや-の-つかさ 太皇太后宮職【名】たいくわうたいごうぐうしき（太皇太后宮職）に同じ。〔古語〕

おほきお

おほき-おほいどの 【名】次條に同じ。〔古語〕源氏「おほきおほいどのの君たち」

おほき-おほいまうちぎみ 太政大臣【名】だいじやうだいじん（太政大臣）に同じ。〔古語〕伊勢「おほきおほいまうちぎみと聞こゆるおはしけり」

おほき-おまへ 大御前【名】家柄よき人の母の敬稱。おほかた。おほきたのかた。おほうへ。〔古語〕

おほき-おみ 大臣【名】だいじん（大臣）に同じ。〔古語〕起「大臣、オホキオミ」

おほ-ぎさい 大后【名】おほきさき（大后）の音便。〔古語〕

おほ-きさい-の-みや 皇太后宮【名】くわうたいごうぐう（皇太后宮）に同じ。〔古語〕

おほきさいのみや-の-つかさ 皇太后宮職【名】くわうたいごうぐうしき（皇太后宮職）に同じ。〔古語〕

おほ-きさき 大后【名】■くわうごう（皇后）に同じ。きさき（后）參照。〔古語〕■くわうたいごう（皇太后）に同じ。〔古語〕

おほきし 大きし【形一】『連體形と已然形とは用例無し』■長さ・分量など、すぐれたり。ふとし。いかめし。したたかなり。おほけし。■度量ひろし。人物重みあり。■年長なり。■甚し。

おほき-たかたふ 大木喬任【名】〔人〕伯爵。佐賀藩士。初名民平。明治元年徵士として出仕し、東京府大參事・敎部卿を經て司法大臣・文部大臣・元老院議長・樞密院議長に歷任し、明治三十六年薨ず。年六十九。

おほき-たくみ 大匠【名】工匠の長。おほたくみ。〔古語〕起「大匠、オホキタクミ」

おほ-きたのかた 大北方【名】おほうへ（大上）に同じ。〔古語〕榮花「おほきたのかたの、世をいみじきものに覺えたるも」

おほ-きたのまんどころ 大北政所【名】おほまんどころ（大政所）に同じ。〔古語〕增鏡「前坊の御母代（ムバ）の永嘉門院・近衞おほきたのまんどころなど、やんごとなきかぎり、うちつづき隱れたまひぬれば」

おほ-きっさき 大切先【名】刀の切先の大

なること、又その刀。長町女腹切「娘が望む道具ぢやと、大切先のだんびら物、身ばかり買うて去なれたは、後家鞘に極まった」

おほ-きど 大城門・大城戸【名】大なる城門。狂言(文藏)「おほきど開かせ切って出づる」

おほ-きど 大木戸【名】一徳川時代に、都邑の出入口に設けし簡略なる關門。きど(木戸)参照。奥の細道「道、縦横に踏みて、伊達の大木戸を越す」二芝居の事務員の職名。

おほき-に 大きに【副】甚だ。したたかに。おほいに。おほけに。

大きに御世話(ワセ)【名】せわ(世話)の條下を見よ。

おほ-きば 【名】〔植〕あをき(青木)一に同じ。

おほ-ばち 大樹蜂【名】〔動〕膜翅(シヽク)類に屬する昆蟲。體長一寸ばかり、圓筒狀をなして、體色上半は黑く、下半は淡黃、翅は暗黃色をなす。幼蟲は松・杉等を害す。

おほき-ひじり 大聖【名】すぐれたるひじり。大聖人。〔古語〕萬葉「酒の名をひじりとおほせしいにしへの大きひじりのことのよろしさ」

おほき-ふみびと 大主典【名】おほいさうくわん(大主典)に同じ。〔古語〕

おほき-まうちぎみ 【名】『おほきまへつぎみ(大臣)の音便』だいじん(大臣)に同じ。〔古語〕

おほきまち 正親町【名】姓氏の一。本姓は藤原氏。洞院(ホライン)公守の次子實明を祖とす。もと羽林家。明治維新後、伯爵を授けらる。又、その別家には男爵を授けられたり。

おほきまち-げんじ 正親町源氏【名】正親町天皇より分れ出でたる源氏、即ち廣幡(ヒロハタ)家。

おほきまち-てんわう 正親町天皇【名】(人)第百〇七代の天皇。御名は方仁(ヒヒト)、後奈良天皇の皇子。御母は贈皇太后藤原榮子。在位二十九年(紀元二二一八—二二四六年)。文祿二年崩ず。壽七十五。

おほきまち-の-つかさ 正親司【名】おほきみのつかさ(正親司)に同じ。

おほきまち-の-みや 正親町宮【名】(人)よしひとしんわう(義仁親王)に同じ。

おほきまつりごと-の-おほまちぎみ 太政大臣【名】だじやうだいじん(太政大臣)に同じ。〔古語〕紀「太政大臣、オホキマツリゴトノオホマチギミ」

おほきまつりごとびと 大判官【名】おほいまつりごとびと(大判官)に同じ。〔古語〕

おほきまへつぎみ 大臣【名】『大き前つ君の意』だいじん(大臣)に同じ。おほいまうちぎみ。おほいまちぎみ。〔古語〕紀「大臣、オホキマヘツギミ」

おほ-きみ 大君【名】一天皇。帝王。きみ。おほぎみ。萬葉「やすみししわがおほきみの」二親王及び諸王。後には、專ら諸王の稱。〔古語〕祝詞「王(オホキミ)・臣(オミ)たち」

大君の風【句】『宋玉の風の賦に「楚襄王遊二蘭臺之宮一、宋玉・景差侍。有レ風颯然而至、王乃披レ襟而當レ之曰、快哉此風、寡人所下與二庶人一共上者邪。宋玉對曰、此獨大王之風耳、庶人安得而共レ之」とあるに本づく』天皇の占有したまふ風。夫木「仰ぎけるわが大君の風なればたれも涼しき宮の内かな」

おほ-ぎみ 大君【名】一前條一に同じ。二主君。當主。(わか君に對して)

おほきみ-すがた 大君姿【名】衣冠束帶の人人の中に、直衣姿(スガタ)の打解けたる樣にて打交れること。〔古語〕源氏「しどけなきおほきみすがた」

おほきみ-づかさ 正親司【名】おほきみのつかさ(正親司)に同じ。〔古語〕

おほきみ-の 大君の【枕】天皇は、常に衣笠(キガサ)をささせたまふより、みかさ(御笠)にかけていふ。萬葉「おほきみのみかさの山のおびにせる細谷川の音のさやけさ」

おほきみ-の-かみ 正親正【名】正親司(オホキミ)(ザカ)の長官。王氏の五位、これに任ぜらるる定にて、その下に正親佑(オホキミノスケ)・正親史(オホキミノフミヒト)あれど、道常任ぜざるを例とせり。おほきんだちのかみ。

おほきみ-の-たいふ 正親大夫【名】正五位に敍せられたる正親司の長官。〔古語〕

おほきみ-の-つかさ 正親司【名】古、宮内省に屬して、皇族方の名籍を掌り、その年祿・時服を賜ふことなどを扱ひし役所。おほきみづかさ。おほきんだちのつかさ。おほきみ。おほぎまちのつかさ。

おほき-みやつこ 大領【名】たいりやう(大領)に同じ。〔古語〕紀「大領、オホキミヤツコ」

おほきみ-をんな 王女【名】ひめみこ。女王。王女(ヨウ)。〔古語〕源氏「ふるおほきみ女の敎へきこえければ、ひがごとにもやと、つつましくて」

おほきんだち-の-かみ 正親正【名】おほきみのかみ(正親正)に同じ。〔古語〕

おほきんだち-の-つかさ 正親司【名】おほきみづかさ(正親司)に同じ。〔古語〕和名「正親司、於保岐無太知乃司」

おほ-ぎも 大膽【名】膽の大なること。だいたん。

おほ-ぎもいり 大肝煎【名】おほどやうや(大庄屋)に同じ。

おほき-ものまをすつかさ 大納言【名】だいなごん(大納言)に同じ。〔古語〕紀「大納言、オホキモノマヲスツカサ」

おほ-ぎやう 大形【名・副】一大仕掛。大規模。おほげさ。二實際以上に言立つること。ぎやうさん。たいさう。おほげさ。

おほき-やか 大やか【貌】おほいなる樣。したたか。

おほ-ぎよく 大玉【名】〔商〕常に取引所に登記せらるる賣買者の賣買額の多數なること。

おほ-ぎり 大切【名】一大きく物を切分つこと、又その切分けたるもの。二芝居の狂言の最後の幕。おほづめ。三芝居のその日の最後の狂言。大團圓。四物事の終局。大尾。

おほ-ぎりふ 大切生【名】矢羽の切生の大がらなるもの。(小切生に對して)

おほく 多く【副】たいがい。おほかた。あらまし。たぶん。おほかた。おほくは。

おほ-ぐくり 大括【名】全部のまとめ。そうぐくり。總括。大成。集成。

おほ-ぐけ 大絎【名】一くけ針の長きもの。二針目を粗く絎けること、又その粗く絎けたるもの。

おほくさ 大草【名】姓氏の一。室町幕府の料理を掌りし家。おほくさりう(大草流)参照。

おほくさか-の-わうじ 大草香皇子【名】〔人〕仁德天皇の第五子。皇子の妹幡梭姫(ヒハタサ)の事を以て、安康天皇に殺さる。後、その子眉輪(マヨワ)王、讎を復して殺さる。

おほぐさ-しやうべゑ 大草庄兵衛【名】〔人〕砲術家。初め三島流の兵法及び砲術を學び、遂に一家をなす。求玄流砲術の祖。天保十二年江戸に歿す。年六十。

おほ-くさそてつ 大草蘇鐵【名】〔植〕水龍骨(クヒン)科に屬する多年生の草。葉は高さ二三尺に達し、葉柄の若き部分は、淡褐色の鱗片を有す。葉身は二回羽狀に分裂し、小裂片は小鋸齒あり。子囊は別に生じたる羽狀の葉と共に生じ、熟すれば黑褐色を呈す。我が國所在の山野に自生す。

おほくさ-りう 大草流【名】室町幕府の大草氏の料理法。大草三郎左衛門を祖とす。

おほ-ぐそく 大具足【名】弓・矢・鎧など、すべて武具の大なるもの。

おほ-くち 大口【名】一おほくちのはかま(大口袴)の略。枕「おほくち、長さよりは口ひろければ、袴いとあぢきなし」二茶道にて、釜仕掛の時、釜又は水指に水を入るるに用ふる器。薄茶を立つる時、水指に用ふることあり。

おほ-ぐち 大口【名】一口を大きく開くこと。二自慢ばなし又は猥褻(ワイセツ)なる話。

おほくち-かれひ 大口鰈【名】〔動〕ひらめ(比目魚)に同じ。

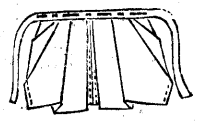
おほくち-じやう 大口城【名】薩摩國伊佐(サ)郡大口村にありし城。安藝判官平基盛の後なる牛屎(クヅ)氏累代の城地たりしが、後、島津氏の有に歸し、島津義久の臣新納忠元、これに據りて、秀吉の軍を禦げり。

おほくち-そう 大口僧【名】能(ノウ)にて、大口を著けて出づる僧の脇。「實盛」・「道成寺(ジヤウ)」・「鉢木(ハチノキ)」などの曲における脇のごときものにて、すべて資格ある僧なり。

おほくち-の 大口の【枕】狼の口は大なるより、狼の古言なるまがみにかけていふ。

萬葉「おほくちのまがみの原にふる雪はいたくなふりそ家もあらなくに」

おほくち-の-はかま 大口袴【名】『袴の口廣く大なるよりいふ』『束帯の時、表袴（ウヘノハカマ）の下に著用せし袴。紅の生絹（キギヌ）・平絹・張絹等にて裾の口大く廣く仕立てたるもの。老人は多く白色を用ひたり。武家時代にも、直垂（ヒタレ）・水干の下に用ひられ、今も能裝束に用ひらるれど、形はそれぞれ少しづつ異なり。落入（オトシ）の大口。おほくち。おほくちばかま。**あかおほくち**、赤大口）。**うしろばりおほくち**（後張大口）。**まへばりおほくち**（前張大口）参照。和名「大口袴、於保久知乃八賀萬、一云、表袴」


（まかはのちぐほお）

おほくちばかま 大口袴【名】**おほくちのはかま**（大口袴）に同じ。

おほぐちやげうう 大口屋曉雨【名】〔人〕十八大通の一人。通稱は治兵衛。曉雨又は十雨と號し、老後曉翁と號す。江戸藏前の札差（サツサ）。武事を好み、義俠を以て任ず。寶曆の頃、その名江戸に鳴る。

おほくづれ 大崩【名】一とほりならぬ敗北。大敗。論曲「朝長は、都、おほくづれにて、膝の口を射させ」

おほくに 大國【名】〔地〕山城國にありし里。拾遺「年もよしこがひもえたりおほくにのさとにのもしくおもほゆるかな」

おほくに-たかまさ 大國隆正【名】〔人〕**のぐちたかまさ**（野野口隆正）を見よ。

おほくにたま-じんじや 大國魂神社【名】武藏國北多摩郡府中町に鎮坐せる官幣小社。祭神は大國魂神。景行天皇の四十一年に創建。一名、六所（ロクショ）宮。

おほくにたま-の-かみ 大國魂神・大國玉神【名】次條に同じ。

おほくにぬし-の-かみ 大國主神【名】神代に出雲の主たりし神。素盞男（スサノヲ）尊の御子とも、その六世の孫とも傳へらる。神代に少彦名（ヒコナ）大神と力を戮せて、天下を經營したまひ、また禁厭・醫藥などの道を教へたまひしが、つひに國土を天孫瓊瓊杵（ニニギ）尊に讓りて、杵築（キヅキ）の地に退きたまへり。今の出雲大社これなり。大穴牟遲（オホナムチ）神・葦原色男（シコヲ）神・八千矛（ヤチホコ）神・宇都志國玉（ウツシクニタマ）神・大物主（オホモノヌシ）神・國作大己貴（クニナクリオホナムチ）命・八千戈（ヤチホコ）神・大國魂（オホクニタマ）神・顯國玉（ウツシクニタマ）神など、異名多し。

おほくに-みたま-の-かみ 大國御魂神【名】大年（トシ）神の子。萬葉「やまとなるおほくにみたま久方のあまのみそらゆあまがけり見わたしたまひ」

おほく は 多くは【副】**おほく**（多く）に同じ。源氏「陰陽師なども、おほくは、女のらうとのみうらなひ申しければ」

おほくばう 大公方【名】**おほごしよ**（大御所）に同じ。

おほくはがた 大鍬形【名】〔動〕甲蟲類に屬する昆蟲。くはがた蟲に似て、大形なるもの。

おほくは-じやう 大桑城【名】美濃國の守護土岐氏の屬城。美濃國山縣（ヤマガタ）郡大桑村に、その址あり。もと、承久の亂に、遙見（ハルミ）又太郎功によりてこの地を得たりしを、土岐氏の修築せしもの。

おほくび 大領【名】袍・狩衣などの盤領（クリビ）の前襟。〔古語〕和名「袵、於保久比、衣前襟也」

おほぐひ 大食【名】**おほものぐひ**（大物食）に同じ。おほぐらひ。

おほくぼ 大久保【名】〔地〕武藏國豐多摩郡にある村。東京市牛込區の西南。鐵道中央本線の一驛。もと蹴躅（ツツジ）の名所。〔地〕播磨國明石郡にある村。鐵道山陽線の一驛。梅の名所。〔地〕越中國上新川（カミニヒ）郡にある町。附近に神通（ジンヅウ）川あり。〔姓氏の一。藤原道兼の後裔宇都宮朝綱八代の孫泰藤より出づ。大久保と稱せしは、三河國大久保に住せしによるとも、紀伊國大窪某の姓を繼ぎ、後文字を改めしものともいふ。代代德川氏に仕へて功多く、子孫の主なるもの、相摸國小田原・下野國烏山・相摸國愛甲郡荻野山中の三藩主に分れたり、明治維新後、いづれも子爵を授けらる。

おほくぼ-いちをう 大久保一翁【名】〔人〕德川氏の臣。名は忠寛、志摩守、又、右近衛將監と稱し、石泉と號す。德川氏十一代より十五代を經て、明治政府に歷任し、東京府知事・元老院議官たり。清廉を以て聞え、子爵を授けらる。明治二十一年薨ず。年七十二。

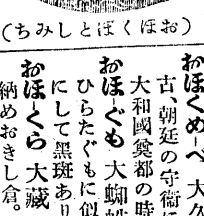
おほくぼ-しぶつ 大窪詩佛【名】〔人〕詩人。常陸國の人。名は行、字は天民、通稱は柳太郎。詩聖堂・瘦梅等の別號あり、晩年薙髮して溪庵道白と號す。山本北山及び市川寬齋の門人。草書をも能くし、奇行に富む。天保八年歿す。年七十一。

おほくぼ-ただちか 大久保忠鄰【名】〔人〕德川氏の臣。忠世の長子。本名は忠泰。新十郎と稱す。幼にして德川家康に養はれ、家康・秀忠に仕へて軍功あり、又、政務を輔佐し威望日に高かりしが、本多正信・馬場忠時の嫉忌を受け、遂に讒に遇ふ。後、秀忠意解けて召せども應ぜず。寬永五年配所に歿す。年七十六。

おほくぼ-ただのり 大久保忠教【名】〔人〕德川氏の臣。通稱は彦左衛門。烏山藩主たりし大久家の祖忠爲の弟。家康に仕へ、戰功擧げて數ふべからず、常に大議に參與し、秀忠・家光の三代に仕ふ。勤儉にして、好みて浪人を養ひ、奇行に富む。寬永十六年歿す。年八十。

おほくぼ-ただよ 大久保忠世【名】〔人〕德川氏の臣。通稱は七郎右衛門。忠鄰（タダチカ）の父。家康に仕ふ。幼にして勇武、十八歲の時、蟹江城を攻めて功あり、七本槍の一人と稱せられ、後、戰功を累ねて小田原に封ぜらる。文祿二年歿す。年六十三。

おほくぼ-としみち 大久保利通【名】〔人〕明治維新の功臣。鹿兒島の藩士。小字は正助。後、一藏と改む。甲東と號す。國事に盡瘁して維新の基を建つ。維新後、藩籍奉還の事に努む。參議・大藏卿に任じ、後、歐米を巡廻し、歸りて內務卿に任ぜらる。征韓論起るに及び、その非を辨じ、征臺の役、全權辨理大使として清國に赴き、西南の役また功あり。十一年五月十四日、兇徒島田一郎等のために、東京赤坂紀尾井町に害せらる。年四十八。


（ちみしとぼくほお）

おほくぼ-ながやす 大久保長安【名】〔人〕德川氏の臣。猿樂師金春（コハル）喜然の子。字は藤十郎。大藏大輔と稱す。甲斐國の人。武田勝頼に仕へて士籍に入り、猿樂を以て德川家康に仕へしが、後、家康の命により、金銀司となりて、伊豆國の金銀を採掘す。大久保忠鄰（タダチカ）に屬せしめられ、つひに大久保姓を稱す。慶長十八年歿す。

おほくぼ-はるの 大久保春野【名】〔人〕陸軍大將。男爵。遠江國の人。佛國に學び、陸軍戶山學校長・參謀長・師團長・駐韓軍司令官等に歷任す。日露戰役に勳功あり。大正四年薨ず。年七十。

おほくぼ-ひこざゑもん 大久保彦左衛門【名】〔人〕**おほくぼただのり**（大久保忠教）を見よ。

おほくぼ-ふぢ 大久保藤【名】紋所の一。上藤（フヂ）の內に、大の字を現はしたるもの。

おほくま 大隈【名】〔地〕筑前國嘉穗（カホ）郡にある町。九州鐵道若松線の一驛。大隈城址あり。

おほくま-じやう 大隈城【名】筑前國嘉穗（カホ）郡大隈町に在りし城。戰國の時、秋月氏の居りしところ。黑田長政入國後、修築して、家臣後藤基次を居らしめしが、基次逐轉のち、毀たる。

おほくめ-の-かみ 大久米神・大來目神【名】〔人〕上代の武將。天穗津大久米（クメ）命（ツオホ）の子孫。神武天皇東征の先導をつとめて功あり。大來目部の遠祖。

おほくめ-べ 大久米部・大來目部【名】上古、朝廷の守衛に當りし兵士。神武天皇の大和國橿都の時より始まれり。

おほ-ぐも 大蜘蛛【名】〔動〕蜘蛛の一種。ひらたぐもに似て太く、扁からず。色黃褐にして黑斑あり。毛多くして、脚甚だ長し。

おほくら 大藏【名】〔古、政府の財用を納めおきし倉。雄略帝の朝に、宮の側に建て、秦（ハタ）氏の民をして掌らしめられたり。

さんざう(三藏)參照。〔三〕大なる倉庫。〔大倉〕

おほくら 大藏【名】〔一〕姓氏の一。坂上(サカノ)・文(ヤ)氏等と同じく阿知使臣(アチノオミ)の裔。姓(カバネ)は、はじめは朝臣(アソ)と宿禰(スクネ)と忌寸(キミ)とあり。壬申の亂・藤原純友の亂・刀伊(イ)の賊入寇の時等に功あり、子孫、太宰府の官吏となりて、その地方に繁榮し、秋月・原田・岩門の諸氏に分る。〔二〕能(ノ)の狂言師の家がらの一。あきづき秋月參照。

おほくら-きやう 大藏卿【名】〔一〕古の大藏省の長官。おほくらのかみ。〔二〕今の大藏大臣の、明治十八年官制改革以前の稱。〔三〕淨瑠璃「鬼一法眼三略ノ卷(ヘンリヤクノマキ)」の一齣。

おほくら-じくわん 大藏次官【名】各省次官の一。大藏大臣を佐け、大藏省の事務を執り、その各部局の事務を監督する者。勅任官とす。

おほくら-しやう 大藏省【名】〔一〕古の八省の一。諸國より納むる調庸の物を收め出納の事を掌りし役所。おほくらのつかさ。〔二〕各省の一。大藏大臣の統轄の下に、租稅の徵收及び政府一切の出納國債・造幣等のことを掌り、大臣官房の外、主計局・主稅局・關稅局・理財局・國債局の五局これに屬し、又、造幣局・專賣局・釀造試驗所・稅關稅務監督局・稅務署等の官署をも管轄す。現行の官制は明治三十一年の發布。

おほくらしやうしやうきんだくわんしようけん 大藏省正金兌換證券【名】次條〔二〕に同じ。

おほくらしやう-しようけん 大藏省證券【名】〔一〕爲換座三井組の名義にて、明治四年一月より同八年五月まで發行・流通した十圓・五圓・壹圓の三種の兌換紙幣。官省札增發の高と二分金外出との豫防を目的とせしもの。〔二〕英Treasury bill政府が、或會計年度内に、收入と支出との償はざる場合に、その資金の融通を計るため發行する一種の公債。無記名利息附にして、發行年度の歲入を以て償還す。大藏省正金兌換證券。

おほくら-しやうれい 大藏省令【名】大藏大臣の發する省令。

おほくら-だいじん 大藏大臣【名】〔一〕各省大臣の一。政府の財務を統轄し、會計・出納・租稅・貨幣・預金・保管物及び銀行に關する事務を管理し、府縣郡市町村及び公共組合の財務を監督する者。〔二〕金錢出納の役。會計掛。〔俚語〕「省の次官。

おほくら-たいふ 大藏大輔【名】〔人〕大藏省の次官。

おほくら-のいけ 巨椋池【名】〔地〕おぐらのいけ(巨椋池)に同じ。

おほくら-のかみ 大藏卿【名】おほくらきやう(大藏卿)〔一〕に同じ。〔古語〕

おほくら-のつかさ 大藏省【名】おほくらしやう(大藏省)〔一〕に同じ。〔古語〕和名「大藏省、於保久良乃都加佐」

おほくら-は 大藏派【名】おほくらりう(大藏流)〔三〕に同じ。「じ。

おほ-ぐらひ 大食【名】おほぐひ(大食)に同

おほくらひめ-のかみ 大倉姫神【名】たかひめのかみ(高姫神)に同じ。

おほくらみ-じやう 大倉見城【名】若狹國三方(ミカタ)郡十(ト)村大字井崎にあり城。中世、武田氏の將熊谷氏の居りしところ。天正年中、熊谷直之、秀次に仕へ、五萬石を食みしが、秀次の敗北と共に滅ぶ。

おほくら-やま 大倉山【名】〔地〕近江國にありといふ山。拾遺「みつぎつむ おほくら山はときはにて色もかはらず萬代やへん」

おほくら-よしゆき 大倉善行【名】〔人〕文學者。清和天皇の勅を蒙り、御書を校定し、書を講じ、又、東宮の侍講となる。世人、これを榮として、地仙といふ。藤原時平、仲平・平惟範・紀長谷雄、三統理平等、みなこれに業を受く。延喜元年、時平等と、勅を奉じて、三代實錄を撰む。

おほくら-りう 大藏流【名】〔一〕能(ノ)の太鼓の一派。大藏源右衞門を祖とす。〔二〕能(ノ)の小鼓の一派。大藏宗全を祖とす。宗全は伊勢國津の人にして、太鼓を能くし、太鼓の大藏道智參宮の際、その太鼓の技倆を認め伴ひ歸りしも、後、小鼓に轉じたり。今は大倉の字に改む。「大倉流」〔三〕能(ノ)の狂言の一派。大藏彌右衞門道林を祖とす。三代目彌右衞門の時、德川五代將軍に召出されてより有名となれり。道林、堺少林寺

の稻荷を信ぜしより、狐、老翁と化して、狐の所作を敎へて去れりと言傳へ、狐の所作を巧みに。「同じ。

おほ-ぐり 大栗【名】たんばぐり(丹波栗)に

おほ-くりげ 大栗毛【名】太くたくましき栗毛の馬。

おほ-ぐるま 大車【名】〔一〕大なる車。〔二〕〔植〕菊科に屬する多年生の草。をぐるまの類。太き根を有し、これより多數の莖生ず。高さ三四尺、葉は廣楕圓形をなし、裏に毛茸を生ず。莖頂に一又は數箇の黃色の花を開く。歐洲の原產。〔土木香〕

おほ-ぐれ 大ぐれ【名】體格などの大なること。だいひやう。今宮心中「それは愚痴ぢやぞや。格好こそは大ぐれなれ、昨日・今日の前髮を」

おほぐれ 【名】乞食の一種。弊衣を著、木魚を叩き、或は四五文の錢を竹串に插して振り鳴らしなどし、讀經に眞似ておどけながら錢を乞ひあるきしもの。

おほ-ぐろ 大黑【名】甚しく黑きこと。「おほぐろの馬」「鈴)に同じ。

おほ-ぐろばな 【名】〔植〕うまのすずくさ(馬兜

おほ-くわじ 大火事【名】大きなる火事。たいくわ。

おほ-けいづ 大系圖【名】〔一〕古、氏の嫡流が、氏の分家よりの生死その他の異動の報知に接し、一一、系圖中に記入して、他日の證とせしもの。門閥姓氏を重んじたる時代には、缺くべからざりし物にて、從つて、分家にはその備無かりしなり。又、北條・足利氏以後、一族互に爭ひ、本家と分家との別混雜するに及びて廢絕せり。かの洞院家の尊卑分脈の如きは、この一なり。〔二〕〔書〕尊卑分脈にもとづき、諸家の系譜を增補集成せる書。三十卷。京師の西道智(明曆年中の人)の編といふ。轉寫の誤、重複の處ありて、識者は取らず。卷首には、新編纂圖本朝尊卑分脈系譜雜類とあり。

おほ-げさ 大袈裟【名】〔一〕大なる袈裟。伊勢大輔集、大袈裟縫はせしに」〔二〕大きく袈裟がけに斬りつくること。春花五大力「源五兵衞、待てと、かかる。ふり返つて、ひと太刀斬る。これもしかけにて、おほげさになり、ばつたり倒れる。片うで落ちる」〔三〕おほぎやう(大形)に同じ。

おほけし 大けし【形一】大きなり。おほきし。〔古語〕記「うはなりがなこはさばいちさかき實のおほけくをこきだひるね」

おほ-けたて 大毛蓼・莊草【名】〔植〕蓼(タデ)科に屬する一年生の草。高さ六七尺、葉は烟草に似て、互生し、柔にして、毛長し。秋、穗狀をなして、深紅色の花開く。いぬたで。おにたで。

おほげつ-ひめ-のかみ 大宜都姫神・大氣都比賣神【名】とゆけひめのかみ(豐受姫神)に同じ。

おほけ-に 【副】おほきに(大きに)の轉。宇治「あなおほけなることないひそ」、

おほけ-なし 【形一】〔一〕『大氣(ケオキ)甚(ナ)しの義』身に不相應なり。一說には、負氣無しの義』身に不し。〔古語〕過分なり。大膽なり。あふけなし。源氏「人にうなづかるべきふるまひはせじと思ふものを、まして、おほけなき事と思ひわびて」

おほ-げば 大下馬【名】下馬の標に置く大なる木又は石。

おほ-けみ 大檢見【名】檢見の一。代官の檢見。(小檢見に對して)〔德川時代の語〕

おほこ 【名】〔一〕『うぶこ(初子)の轉か』世ごころづかぬ男女(主に女にいふ)〔俚語〕〔二〕鯔(ナ)の子。〔東京の語〕

おほご 大胡【名】〔地〕上野國勢多(セタ)郡にある町。元の大胡・茂木・瀧窪三村を合せたるもの。大胡城成社あり。

おほこ-ぎ おほこ氣【名】おぼこなる心。無邪氣。

おほ-ござぶね 大御座船【名】ござふね(御「座船)の敬稱。

おほ-ごし 大腰【名】〔一〕大なる腰。〔二〕相撲(スマヒ)の手の一。竹齋物語「すまひの手には、…大ごし・もとつめ・むかうつき」〔三〕女の裝束に用ふる裳の紐の一種。長さ二尺五寸・幅四寸六分を制とす。(引腰に對して)

おほ-ごしやう 大小姓【名】奧小姓・小姓組等の總稱。(小小姓に對して)

おほ-ごしゆ 大御酒【名】おほさけ（大酒）に同じ。狂言「茶壺」「路次にて大御酒にたべゑひ、道とも存ぜずふせってござれば」

おほ-ごしよ 大御所【名】■隠退したる将軍の居所の敬稱。（鎌倉時代の話）東鑑「江馬殿折節被レ候二大御所一（菖蒲下將軍御遺跡、當時尼御臺所御座）仍五郎以下輩奔參御坐」■隠退したる舊將軍の敬稱。大公方（オホクボウ）（小御所に對して）（室町時代以後の語）明德記「大御所、尊氏將軍御代を被レ召て既に六十年」

おほ-ごしよ-さま 大御所樣【名】（人）とくがはいへなり（徳川家齊）を見よ。

おほ-ごしよさまじだい 大御所樣時代【名】徳川家齊の時代。即ち文化・文政の江戸の最も全盛なりし時代。

おほ-ごすん 大五寸【名】長さ二寸一二分「の釘。

おほ-ごち-あみ 大五智網【名】漁網の一種。いしくりあみ。

おほ-ごと 大事【名】重大なる事。ほおきなる事がら。大事件。

おほ-ことおしを-の-かみ 大事忍男神【名】伊弉諾（イザナギ）神の御子。

おほこ-にんぎやう おほこ人形【名】伊勢國山田・津の邊にて鬢（ビン）ぐ、兒童の立姿なる人形。粗製なれど雅致あり。

おほ-ごばん 大御番【名】江戸幕府の職制の一。平時は要地の城塞の守備に當り、戰時には先鋒となりしもの。

おほ-ごはや 大小早【名】和船の一種。帆四五反乃至六七反を張る軍船。

おほ-こぶね 大古船【名】古び廢れたる船。

おほ-こぼし 大こぼし【名】（植）『こぼしはこぶし（辛夷）の轉ならん』はくもくれん（白木蘭）に同じ。

おほ-こぼり-の-みや 大郡宮【名】孝德天皇のおはせし宮。今の大阪市安國寺阪の邊。小野宮。

おほ-こぼり-の-みやつこ 大領【名】たいりやう（大領）に同じ。（少領（ノチニセウコホリ））に對して）（古語）

おほ-こぼろぎ 大蟋蟀【名】（動）えんまこほろぎ（閻魔蟋蟀）に同じ。

おほこ-むすこ おほこ息子【名】小供氣の失せぬむすこ。うぶなる息子。

おほこ-むすめ おほこ娘【名】小供氣の失せぬ娘。うぶなる娘。處女。少女。

おほ-こめくさ 大米草【名】（植）玄參（ハマウツボ）科に屬する草。高さ四五寸に達し、葉は缺刻ありて厚く、對生す。三月の頃、葉腋に白花を開く。むしくさ。

おほ-こめつつじ 大こめ躑躅【名】（植）こめつつじの變種。その枝やや長く、夏、白色にて四裂或は五裂せる花を著く。

おほ-ごもり 大籠【名】大勢の參籠。多人數のおこもり。狂言「鞍馬參」「いつとはいひながら、夜前も大ごもりであったなあ」

おほ-ごれんおゆう 大御簾中【名】家柄よき人の母。おほかた。おほきたのかた。

おほ-ごゑ 大聲【名】高き聲。大なる聲。大聲（タイセイ）。續古事談「おほごゑを放ちてのたまはく」

おほ-さ 【名】小き人形。（加賀國金澤の方言）

おほ-さいう 大左右【名】能樂にて、左右の形（ガタ）の大なるもの。即ち左手を上げ、右手を下げ、地謠座の左へ行き、足拍子を左にて一つして、體を廻しざまに、左手を下げ、右手を上げて、脇正面に至る動作。

おほ-さいばり 大前張【名】神樂歌の歌曲の一種。宮人・難波潟・木綿志天（シユウ）・前張・階香取（ドウナウ）・井奈野（ヰナノ）・脇母古（ワキモコ）の七曲あり。（小前張に對して）

おほ-さいゐん 大齋院【名】（人）村上天皇の女選子内親王の稱。花山天皇以下五代の齋院たり。長元八年薨ず。

おほ-ざう 大ざう【名】おほぞう（大ぞう）に同じ。（古語）

おほ-ざうば 大相場【名】（商）相場の變動「の大なるもの。

おほ-さか 大阪【名】（地）『阪の字、もと坂とも書きしを、坂を分解すれば土に反（ツ）るといふ意になりて、死の意に通ずるより、阪の字に定めたりといふ』■攝津國にある市。東京・京都と共に帝國三大都市の一。淀川下流の南北に亙る。東・西・南・北の四區に分ち、東海道・關西・南海・西成・阪鶴等の諸鐵道線ここに集中し、關西地方の商工業の中心たり。大阪府廳のある處。■攝津國の大阪市及び東成（ヒガシナリ）・西成・三島（ミシマ）・豐能（トヨノ）の三郡と和泉・河内の二國とを管轄する府。府廳を大阪市西區江子島（エノコジマ）町に置く。

おほ-さか-あさづけ 大阪淺漬【名】淺漬の一種。細き大根を莖と共に鹽漬とし、重き壓石をかけたるもの。一夜を經れば食すべく、大阪にて多く行はる。普通の淺漬とは異なりて、麴を交へ用ふることなし。

おほ-さか-いちばきん 大阪壹分金【名】徳川時代の通貨の一。慶長四年豐臣秀頼の大阪にて鑄造・發行せしめしもの。長方形にして、表面に一分・裏面に光次の文字と花押とあり。大阪方金。

おほ-さか-がうし 大阪格子【名】横棧を太くして五本となし、棧と棧との間に、取りは づし得るやうに、横長の小障子をはめたる障子。小障子は、竪に細く子を打ち、これに紙を張る。店と奥との間又は茶ノ間と臺所との界などに用ふ。おほかしやうじ（大阪障子）參照。

おほ-さか-かねぶぎやう 大阪金奉行【名】江戸幕府の職制の一。勘定奉行に屬し、大阪に住して、大阪城に收納する金銀の出納を掌りしもの。

おほ-さか-かばん 大阪加番【名】徳川時代に、大阪城の中里・中小里・青屋口・雁木（ガンギ）阪の四門を守護せしもの。諸侯の役にて、八個月ごとに交代して勤む。老中の所管「物」を見よ。

おほ-さか-がはら 大阪瓦【名】やぐらもの（櫓たり。

おほ-さか-きりづけ 大阪切漬【名】蕪と大根とを等分に、莖と葉とを合せて刻み込み、鹽を入れてよく揉合せ、強く押漬けたる漬物。十餘日を經たる後、醤油をかけて喰ふ。大阪にて多く行はる。土地の人は、「くき」又「くもじ」といふ。

おほ-さか-ぐそくぶぎやう 大阪具足奉行【名】江戸幕府の職制の一。大阪定番の支配に屬し、大阪城中に在番して、城中備附の甲冑の檢査及びその製作を監せしもの。

おほ-さか-くらぶぎやう 大阪藏奉行【名】江戸幕府の職制の一。大阪城に收むる米穀の出納・倉廩の監守等を掌りしもの。はじめ大阪町奉行の管下、後、勘定奉行の管下に轉じ、定員二人となり、手代・同心・藏番・小揚（ヤア）等の吏員、これに屬したり。

おほ-さか-ごえ 大阪越【名】（地）おほさかやま（大阪山）を見よ。平家「阿波と讃岐の境なる大阪越といふ山を、夜もすがらこそ越されけれ」

おほ-さか-ごばう 大阪御坊【名】いしやまごばう（石山御坊）に同じ。

おほ-さか-さいばん 大阪在番【名】江戸幕府の職制の一。大阪城の警衛の鍵鑰を預かりて、守衛を掌り、又、加番と共に、大阪の市街及び近傍の社寺を巡視せしもの。二員あり、一番組より上阪して、毎年八月に交替す。老中の所管たり。

おほ-さか-さいもん 大阪祭文【名】歌祭文の一派といへど、別に特徴なし。只田舍廻りの祭文語の勝手に名附けたるもの。（江戸祭文に對して）

おほ-さか-ざうへいれう 大阪造幣寮【名】ざうへいきよく（造幣局）の舊稱。

おほ-さかしなが-の-みささぎ 大阪磯長陵【名】孝德天皇の御陵。一名鷲陵。河内國南河内郡山田村にあり。

おほ-さか-じやう 大阪城【名】大阪市東區馬場町にある城。石山本願寺の舊地にして、一に金城と號す。天正十一年豐臣秀吉の築きしもの。周圍一里餘。今は、第四師團の本營となる。城内の建物、多くは毀たれたれども、石壘高く、濠渠深く、人をして規模の壯大なるに驚かしむ。

おほ-さか-しやうじ 大阪障子【名】略式なる大阪格子。横棧の上に、ただちに細き格子を竪に釘附にし、これに紙を張るがゆゑに、取外すこと能はず。用途は大阪格子に同じ。

おほさか-じやうだい 大阪城代【名】江戸幕府の職制の一。大阪城内に駐劄して、市中の訴訟を裁判し、警備を嚴にし、兼ねて大阪以西の諸國を監せしもの。一萬石以上の大名中より補せられ、この職より所司代に進むを例とせり。

おほさか-じやうばん 大阪城番【名】次條「に同じ。

おほさか-ぢやうばん 大阪定番【名】江戸幕府の職制の一。大阪の京橋(キヤウバシ)口と玉造(タマツクリ)口との二箇所の守備を掌りしもの。二・三萬石の大名これに任じ、老中の所管たり。大阪城番。

おほ-さかづき 大盃【名】一たいはい(大盃)に同じ。二次條の略。

おほさかづき-しゆせんの-つはもの 大盃酒戰兵【名】武田氏の遺臣馬場三郎兵衛が原才助と僞名して、足輕となり、井伊掃部頭(カモン)の相手となりて、大盃を傾け、つひにその本名を見あらはされて、戰場の物語をなすといふ筋の芝居狂言。河竹新七の作。大盃。

おほさか-づけ 大阪漬【名】おほさかあさづけ(大阪淺漬)及びおほさかきりづけ(大阪切漬)の總稱。

おほさか-つち 大阪土【名】『この土を用ひて壁を塗ること、大阪より始まるよりいふ』黃色に赤色の交じりたる上塗土。

おほさか-てつぱうぶぎやう 大阪鐵砲奉行【名】江戸幕府の職制の一。大阪定番の支配に屬す。定員は三人或は二人。大阪に在りて、城中所藏の鐵砲・彈藥等のことを掌りしもの。

おほさか-ど 大阪戸【名】漆喰(シツクヒ)塗の土藏の引戸。

おほさか-なでしこ 大阪撫子【名】(植)いせなでしこ(伊勢撫子)に同じ。

おほさか-にはか 大阪俄【名】にはかしばゐ(俄芝居)に同じ。

おほさか-はうきん 大阪方金【名】『形の長方形なるよりいふ』おほさかいちぶきん(大阪壹分金)に同じ。

おほさか-はそんぶぎやう 大阪破損奉行【名】江戸幕府の職制の一。大阪定番の支配に屬し、大坂城の修理を掌りしもの。定員四人。

おほさか-ぶき 大阪葺【名】(建)幅一尺ほどの板を棟より軒に架し、板間には目板を打附けたる屋根。井戸屋形・木戸門などに用ふ。

おほさか-ふなて 大阪船手【名】江戸幕府の職制の一。大阪に住し、大阪の官船を掌りて、警備に任じ、兼ねて商船などを檢す。老中の所管たり。

おほさか-ぶね 大阪船【名】大阪より仕立てて出す廻船。荷船なり。

おほさか-まちぶぎやう 大阪町奉行【名】江戸幕府の職制の一。大阪に在りて、城代・定番と議して、市務一般を執り、訴訟を決し、兼ねて攝・河・泉・播四ケ國に於ける幕府領地の租稅徵收を掌りたり。定員二人、一時は三人に增加して、堺奉行を兼ねしめしことあり。老中の所管たり。

おほさか-もち 大阪冬青【名】(植)そよご(冬青)に同じ。

おほさか-もの 大阪物【名】慶長以後の大阪の刀工の作れる刀劍。

おほさか-やま 大阪山【名】(地)阿波國板野郡にある山。山中に讃岐國に達する道路あり、これを大阪越といふ。文治元年源義經これを越えて屋島に到れり。一名、中山。

おほさか-ゆみぶぎやう 大阪弓奉行【名】江戸幕府の職制の一。大阪定番の支配に屬す。三人又は二人ありて、城中備附の弓箭のことを掌りしもの。

おほ-さき 大崎【名】一大なる崎。大なる岬。二(地)近江國高島郡に在る岬。即ち大崎山の山脚の琵琶湖の突出せるところ。

おほ-さき 大崎【名】(地)武藏國荏原(エバラ)郡にある町。もとの谷山(ヤツマ)・桐ケ谷(キリガヤ)・居木橋の諸村を合す。鐵道山手線の一驛。大字桐ケ谷に火葬場あり。

おほ-さき 大先【名】さきおふ髯の長きもの。(小先に對して)(古語) 枕「上達部(チカンダチ)のさきども、殿上人のはみじかければ、大さき・小さきと聞きつけて騷ぐ」

おほ-さき かみしま 大崎上島【名】(地)安藝國の東南方にある島。周回十二里弱。豐田郡に屬す。

おほさき-しもしま 大崎下島【名】(地)安藝國の東南方にある島。周回五里半。豐田郡に屬す。一名、大長(オヨチ)島。古稱、御手洗(ミタラヒ)島。

おほさき-ながしま 大崎長島【名】(地)安藝國長島(ナガシマ)の別稱。

おほさく 思さく・謂さく【副】おもひたまふには。(古語) 紀「謂、オボサク」

おほ-さくらさう 大櫻草【名】(植)櫻草科に屬する多年生の草。我が國の特產。高山に自生す。高さ一尺に達し、夏、深紫色の花を開く。

おほ-さけ 大酒【名】たいしゆ(大酒)に同じ。

おほざけ-のみ 大酒飲【名】酒を多く飲むこと、又その人。暴飲家。

おほ-さざい 大鷦鷯【名】(動)『大なるみそさざいの義』かやくぐり(茅潛)に同じ。

おほさざきの-すめらみこと 大鷦鷯天皇【名】(人)にんぎやくてんわう(仁德天皇)に同じ。

おほ-さつ 大札【名】價格一圓以上即ち一兩・五兩・十兩・一圓・五圓・十圓・百圓の紙幣。(小札に對して)

おほ-ざつぱ 大ざつぱ【名】一綴密ならぬこと。あらあらしきこと。おほづかみ。(俚語) 二小事にかかはらぬ性質。おほたば。らいらく。(俚語)

おほざつま 大薩摩【名】おほざつまぶし(大薩摩節)の略。

おほざつま-しゆぜん-だいふ 大薩摩主膳大夫【名】(人)大薩摩節の祖。通稱は市村善藏。薩摩左內の門弟。淨瑠璃節を善くし、遂に一機軸を出す。寬保・享保年間の人。

おほざつま-ぶし 大薩摩節【名】俗曲の一種。慶安年中に薩摩淨雲語り初む。寬保・延享の間大に江戸に行れしが、後衰へ、今は江戸長唄の範圍に屬して、劇場の荒事の場面に用ひらるるのみ。おほざつま。

おほざと 大里【名】(地)武藏國二十郡の一。もとの幡羅(ハラ)・男衾(ヲブスマ)・榛澤(ハンザワ)の三郡を併せたるもの。郡役所を熊谷町に置く。

おほ-ざと 邑・阝【名】『大邑の義』邪・郎・邸などの漢字の右にある阝の字、即ち邑の字を略して書けるもの。おほざる。(こざとに對して)

おほ-さは 【貌】たくさん。どっさり。じふぶん。「ん。(俚語)

おほ-さは 大澤【名】大なる澤。

おほ-さは 大澤【名】(地)武藏國南埼玉(ナムサイタマ)郡にある町。元荒川の北岸。一橋を以て越ケ谷(ガヤ)町に接す。

おほ-さび 大鍼【名】烏帽子(エボシ)の鍼の大小不整にて、岩石の面に似たるもの。(横さび・柳さび等に對して)

おほ-さぶらひ 大侍【名】うちさぶらひ(內侍)に同じからんといふ。著聞「三浦の介義村、もとよりさぶらひて、おほさぶらひの座上に候ひけり」

おほ-さんざし 大山查子・羊机子【名】(植)薔薇科に屬する落葉灌木。山查子に似て葉の大なるもの。

おほ-さんずん 大三寸【名】松材の七寸角を十六割にせるもの。長さ九尺又は二間。ろっぽんさんずん。

おほ-さんせう 大山椒【名】一(植)からすさんせう(烏山椒)に同じ。二切箔(ハキガ)の一種。最も粗くして、一分四方ほどのもの。砂子(スナ)に用ふ。

おほ-さんおゆう 大三重【名】淨瑠璃の曲節の一。節を長く持つ三重。土佐・加賀・義太夫節など五段物の中、初段の中入に限る。一名、眞(シン)の三重。

おほ-さや 大鞘【名】(商)取引所にて、鞘(サヤ)の大なるもの。さや(鞘)參照。

おほ-ざる 邑・阝【名】おほざと(邑)に同じ。(こざるに對して)「じ。

おほ-ざる 大申【名】かのえさる(庚申)に同

おほ-さるこやなぎ 山柳【名】(植)楊柳(ヤナギ)科に屬する落葉灌木。葉は互生し、長さ四五寸に達し、長楕圓形。葉脚は圓形にして、先端は鋭頭、緣邊に微鋸齒を有す。秋葉腋に大なる蕾を出し、早春、黃赤色の雄花と綠色の雌花とを生ず。各地の山地に生ず。やまねこやなぎ。

おほ-し 【名】(植)『しは羊蹄菜(シ)の意』だいわう(大黃)に同じ。(古語) 和名「大黃、於保之」

おほ-し 大師【名】五節の舞を敎ふる人。

おほし

おほし 多し【形一】かずあり。たくさんなり。あまたなり。少からず。

おほし 凡【副】おほそ（凡）に同じ。〔古語〕源氏「おほし、かいもとあるじ、甚だひざうにはべりたうぶ」

おぼし 思【名】思ひたまふこと。おぼしめし。〔古語〕榮花「ただにもあらぬ御身にて、人人聞ゆれど、おぼしのままになりたまひぬるも、ことわりに見えたまふ」

おぼし 思し・覺し【形二】おもはれてあり。おもはし。〔古語〕源氏「しうとおぼしき人は、暇をしけれど、見ゆべくもかまへず」

おぼしあつかふ 思扱ふ【動四他】おもひあつかふ（思扱ふ）の敬語。〔古語〕榮花「中宮は、宮宮の御事をおぼし扱ひなどして」

おぼしあまる 思餘る【動四自】おもひあまる（思餘る）の敬語。〔古語〕榮花「所所に御祈をせさせたまふ。おぼしあまりては」

おぼしいたる 思至る【動四自】おもひいたる（思至る）の敬語。〔古語〕榮花「かくおぼし至らぬくまなく、哀にめでたき御心のほど、世のためしになりぬべし」

おぼしいとなむ 思營む【動四他】おもひいとなむ（思營む）の敬語。〔古語〕榮花「菊・紅葉をおぼしいとなみて、目も及ばずめでたし」

おぼしいる 思入る【動四他】おもひいる（思入る）の敬語。おぼしめしいる。〔古語〕榮花「御輿に乘らせたまふ程の御氣色ゆかしきまで、おぼしいらせたまふ」

おぼしいる 思入る【動下二他】おもひいる（思入る）の敬語。〔古語〕榮花「中宮は、よろづまだ若うおはしまして、何事もおぼしいれぬ御ありさまなれど」

おぼしうづもる 思埋もる【動下二自】思ひくじけたまふ。〔古語〕源氏「物もいはで、おぼしうづもれたまふらん」

おぼしうつろふ 思移ろふ【動四自】思ひ移りたまふ。〔古語〕

おぼしえらぶ 思擇ぶ【動四他】心に決めて擇びたまふ。〔古語〕

おぼしおきつ 思掟つ【動下二他】おもひおきつ（思掟つ）の敬語。〔古語〕榮花「よろづに、あべいことおぼしおきてければ」

おぼしおこす

おぼしおこす 思起す【動四他】おもひおこす（思起す）の敬語。〔古語〕

おぼしおとす 思貶す【動四他】おもひおとす（思貶す）の敬語。〔古語〕

おぼしおどろく 思驚く【動四自】心の中にて驚きたまふ。〔古語〕

おほしか 大鹿・麋【名】〔動〕偶蹄（テイ）類に屬する獸。形、鹿に似て大きく、毛に斑なくして、牡は青黑色、牝は褐色。角は概ね牡にのみ生じ、毎年脫けかはりて、その度ごとに枝を增し、老成後は毎年同形の角生じ、その枝は末の方にむらがり分る。和名「麋。四聲字苑云、麋、漢語抄云、於保之可、似レ鹿而大、毛不レ斑、以二冬至一解角者也」

おほしかうち 凡河内・凡川内【名】姓氏の一。姓（カバネ）は忌寸（イミキ）。神別にして、天津彦根（アマツヒコネ）命の裔。攝津國に貫するものと、河内國に貫するものとの二家あり。

おほしかうち-みつね 大凡河内躬恒【名】〔人〕歌人。宇多・醍醐の兩朝に歷事して、和泉大掾に至る。紀貫之・壬生（ミブ）忠岑（ツラネ）等と並び稱せらる。古今和歌集の撰者の一人。「照る月を弓張としもいふことは山の端さしていれ（入れ・射れ）ばなりけり」の歌、叡感に入りて、御衣を賜はる。

おほしかけ 大仕掛【名】しかけの大なること。おほがかり。

おぼしき

おぼしかしづく 思傳く【動四自】おもひかしづく（思傳く）の敬語。〔古語〕

おぼしかたむ 思固む【動下二他】おもひかたむ（思固む）の敬語。〔古語〕狹衣「かへすがへすおぼしかたむれど」

おぼしかはる 思變る【動四自】おもひかはる（思變る）の敬語。〔古語〕

おぼしかへりみる 思顧る【動下二他】格別に眷顧を垂れたまふ。〔古語〕榮花「わが御方に心よせある人などを、心ことにおぼしかへりみ、はぐくませたまへり」

おぼしかまふ 思構ふ【動下二他】おもひかまふ（思構ふ）の敬語。〔古語〕榮花「女御殿に劣らぬさまの事をなどおぼし構へて」

おほしきあみ 大敷網【名】敷網の一種。垣網又は返しとて、魚の通路を要する部と、袋網又は魚取とて、魚を集めとらふる袋狀の部とより成れるもの。

おぼしきざす 思萌す【動四自】思ひきざしたまふ。思ひそめたまふ。〔古語〕

おほしきし 大色紙【名】色紙の大なるもの。竪六寸四分・幅五寸六分。

おぼしくす 思屈す【動佐變自】おもひくす（思屈す）の敬語。〔古語〕榮花「院の近うおはしまさぬを、いみじうおぼしくしたる御氣色どもも」

おぼしくたす 思腐す【動四他】おもひくたす（思腐す）の敬語。〔古語〕源氏「數ならぬ身ながらも、おぼしくたしける御心ばへのほども」

おぼしくらむ 思暗む【動四自】心のかきくるるやうに思ひたまふ。〔古語〕榮花「東宮・殿ばらの御誦經、みな有り。東宮は、盡きもせず思しめさるるにも、今日いとどおぼしくらませたまふ」

おほしこ 大四五【名】船の荷轎（サヒ）の押縁（オシヂ）の名目。

おぼしこころざす 思志す【動四自】思ひこころざしたまふ。〔古語〕

おぼしこのむ 思好む【動四他】思ひこのみたまふ。心から好みたまふ。〔古語〕

おぼしさわぐ 思騷ぐ【動四自】おもひさわぐ（思騷ぐ）の敬語。〔古語〕

おほしじし 大獅子【名】能（ノ）の謂の形の名目。「石橋（シャクケウ）」の曲にて、白頭の獅子と赤頭の獅子と二つ出づるもの。

おぼししづむ 思鎭む【動下二他】おもひしづむ（思鎭む）の敬語。〔古語〕源氏「いとかうしも人に見えじとおぼししづむれど、さらにえ忍びあへさせたまはず」

おぼししむ 思染む【動四自】おもひしむ（思染む）の敬語。〔古語〕

おぼししめる 思濕る【動四自】おもひしめる（思濕る）の敬語。〔古語〕榮花「よろづにおぼししめりたるを、御乳母（メノト）たちも、いかがと見奉る」

おぼしし 思知【動四他】おもひしし（思知）の敬語。おぼしめしし。〔古語〕榮花「よろづに、今はおぼししりはてて、哀に思召しなげく」

おぼししをる

おぼししをる 思萎る【動下二自】おもひしをる（思萎る）の敬語。〔古語〕榮花「今はかくぞかしと思しめすに、むげにおぼししをれさせたまへれば」

おほしだい 大時代【名】〔一〕次條の略。〔二〕物事の古色を帶び、澁味あるもの。新しき流行を趁はぬ傾向。

おほしだい-きやうげん 大時代狂言【名】芝居の時代狂言の中にて、古の義太夫本に據るもの。「太閤記」・「千本櫻」・「先代萩」の如き類。大時代。

おぼしたつ 生立つ【動下二他】そだてあぐ。やしなひたつ。（生ひたつに對して）〔古語〕源氏「とりわきて、おほしたてたてまつりたまへれば」

おぼしたつ 思立つ【動四他】おもひたつ（思つ）の敬語。〔古語〕

おぼしたとうじらう 大下藤次郎【名】〔人〕畫家。初め洋畫を學び、明治三十五年歐洲に遊學し、歸來專ら水彩畫を描く。講習所を開き、雜誌を出だして、水彩畫の普及に努力せしが、明治四十四年歿す。年四十二。

おぼしたふ 思堪ふ【動下二自】心にこらへたまふ。〔古語〕榮花「大納言殿いとわづらはしく、おぼしたへで、さりとも、おのづからと思しけり」

おぼしたゆ 思絕ゆ【動下二他】おもひたゆ（思絕ゆ）の敬語。〔古語〕榮花「その方には、むげにおぼしたえはてぬるにつけても」

おぼしたゆたふ 思したゆたふ【動四自】思ひたゆたひたまふ。〔古語〕

おぼしたゆむ 思弛む【動四自】おもひたゆむ（思弛む）に同じ。〔古語〕榮花「さりとも、けしうはおはしまさじなど、思したゆめど」

おほしだれ 【名】〔植〕おほばやなぎ（大葉柳）に同じ。

おぼしつく 思附く【動四自】おもひつく（思附く）の敬語。〔古語〕榮花「殿の内にも、はかなくおぼしつきなどして、上もうちとけたる御氣色なく」

おぼし-つつむ 思包む【動四他】おもひつつむ(思包む)の敬語。〔古語〕

おぼし-つよる 思強る【動四自】おもひつよる(思強る)の敬語。〔古語〕

おぼし-とる 思取る【動四自】おもひとる(思取る)の敬語。〔古語〕 榮花「妻子珍寶及び王位も、かくおぼしとりたるなりけり」

おぼし-ながす 思流す【動四他】おもひながす(思流す)の敬語。〔古語〕

おぼし-なぐさむ 思慰む【動下二他】おもひなぐさむ(思慰む)の敬語。〔古語〕

おぼし-なげく 思嘆く【動四自】おもひなげく(思嘆く)の敬語。〔古語〕 源氏「おぼしなげきおはしますを聞きたまふに」

おぼし-なずらふ 思準ふ【動下二自】おもひなずらふ(思準ふ)の敬語。〔古語〕

おぼし-なびく 思靡く【動四自】おもひなびく(思靡く)の敬語。〔古語〕

おぼし-なほる 思直る【動四他】おもひなほる(思直る)の敬語。〔古語〕 榮花「明け暮れ聞ゆれど、今はおぼしなほるべき樣も見えず」

おぼし-ならふ 思習ふ【動四自】おもひならふ(思習ふ)の敬語。〔古語〕

おぼし-なる 思成る【動四自】おもひなる(思成る)の敬語。〔古語〕

おぼし-のたまふ 思宣ふ【動四自】思ひたまひてのたまふ。〔古語〕 源氏「いみじうつらしとぞおぼしのたまはせける」

おぼし-のどむ 思和む【動下二他】おもひのどむ(思和む)の敬語。〔古語〕

おぼし-の-やま 多師山【名】〔地〕近江國栗太(クリタ)郡にありといふ山。 散木「いかばかり涙のしぐれいろなればなげきおほしの山をそむらん」

おぼし-ばん 大四半【名】旗の一種。四半(シバン)の大なるもの。

おぼし-ばね 大芝居【名】一徳川時代に、幕府より興行を公許せられし劇場。江戸にては中村・市村・森田の三座に限られたり。(小芝居に對して) 二芝居にて、大仕掛の狂言を演ずること。すぐれたる俳優の技藝。おほかぶき。

おぼ-しほ 大潮【名】一個月中の朔(陰曆の一日)と望(陰曆の十五日)との上潮(アガヒ)。この時は太陽・月・地球の三つが一直線上に來るが故に常の上潮よりも高くなる。(小潮に對して) 堀太「おぼしほや淡路のせとに吹きわけにのぼりくだりの片帆かくらん」

おぼ-しぼ 大皺・大絞【名】一烏帽子(エボシ)のしぼの疎く大なるもの。 二おぼしぼさんとめ大絞棧留)の略。

おぼしぼ-かは 大皺革【名】しぼの粗く大なる革。

おぼしぼ-さんとめ 大紋棧留【名】さんとめ革の絞(ボシ)の粗く大なるもの。おほしぼ。

おぼしほ-ちゆうさい 大鹽中齋【名】〔人〕次條に同じ。

おぼしほ-へいはちらう 大鹽平八郎【名】〔人〕大阪の與力。名は後素、字は子起。中齋と號す。王陽明の學を奉じ、吏務に熟達す。職を辭するの後、帷を下して諸生を教ふ。天保八年の饑饉に、奉行に救濟を請ひて、顧みられず、よりて憤然家財を盡して窮民を救ひ、遂に黨を組みて、大阪城を攻めんとし、事敗れて、養子格太郎と共に焚死す。年四十四。古本大學刮目・洗心洞劄記等の著あり。

おぼ-しま 大島【名】一大なる島。(小島に對して) 二大隅國大島より產する砂糖。 三おぼしまつむぎ(大島紬)の略。 四〔地〕伊豆七島中の最も大なる島。南北三里餘・東西二里餘・周回十里二十六町。噴火山あり。南岸に波浮(ハフ)港あり。保元元年源爲朝ここに流さる。東京府の管轄に屬す。古名、伊豆ケ島。 五〔地〕紀伊國東牟婁(ムロ)郡の東南にある島。周回四里餘。串本(クシモト)に向ひて良港あり、東端の樫野崎に燈臺を置く。附近風濤の難多く、明治二十三年土耳古軍艦エルトグロオ號この沖に沈沒し、島上に遭難者の墓あり。 六〔地〕筑前國宗像(ムナカタ)郡神湊(カミナト)村の西北海中にある島。周回三里十四町。古稱、宗像ノ中津島。 七〔地〕大隅國大島列島中の最も大なる島。東西十九里・南北五里・周回七十四里。北岸に名瀬(ナゼ)港あり、大島島廳を置く。西南岸に近接して加計麻呂(カケロ)島あり、その間に屈曲せる海峽を大島海峽と稱す。海峽に面して數灣あり、名瀬灣はその一。大島紬の產地として知らる。古稱、奄美島(アマミ)。又、小琉球島。 八〔地〕周防國玖珂(クガ)郡の東南にある島。面積七方里。四邊に二十餘の小き屬島を有す。全島を以て一郡とし、大島郡と稱す。古稱、大多麻流別(オホタマル)。

おぼしま 大島【名】〔地〕一大隅五郡の一。薩摩國坊岬(バウザキ)の南方に散在せる群島より成る。 二おぼしまれったう(大島列島)參照。 三周防國六郡の一。大島以下の島嶼より成る。郡役所を久賀町に置く。前條八參照。 四武藏國南葛飾(ツシカ)郡にある町。南は天神川を挾みて東京市深川區に、北は南竪(ケテ)川を挾みて綿戸(ガド)町に接す。

おぼしま-いっき 大島逸記【名】〔人〕おほしまふよう(大島芙蓉)に同じ。

おぼしま-かいけふ 大島海峽【名】〔地〕おほしま(大島)七を見よ。

おぼしま-がすり 大島絣【名】大島紬の絣なるもの。 **おぼしまつむぎ**(大島紬)參照。

おぼし-まぎらはす 思紛はす【動四自】他の事に思ひまぎらしたまふ。〔古語〕 榮花「あやしう人わろき御心いできぬべきを、おぼしまぎらはして、西の對におはして」

おぼし-まぎる 思紛る【動下二自】他の事に思ひまぎれたまふ。〔古語〕 榮花「この御心ちのいとわりなくて、おぼしまぎれぬさまなり」

おぼしま-さんざゑもん 大島三左衛門【名】〔人〕さいがうたかもり(西郷隆盛)を見よ。

おぼしま-すぢ 大縞條【名】大なる縞の筋ある獸類の毛色。

おぼしま-つむぎ 大島紬【名】大隅國大島より產出する紬。手工にて紡ぎし絲を、土產の草根と泥土とにて褐色に染め、これを織上ぐるまでは、多くの時日を要するを以てその價高し、多く絣(カス)として出す。おほしま。

おぼしま-の 大島の【枕】一島は浦近きより、うら(浦)にかけていふ。源氏「船人は誰を繰ふとか大島のうらかなしげに聲の聞こゆる」 二淡路島を一名大島と呼ぶより、鳴門と同意なるなると(鳴ると)にかけていふ。後撰「人知れず思ふ心は大島の鳴るとはなしになげくころかな」

おぼしま-ばんろく 大島伴六【名】〔人〕大島流の槍術の祖。名は吉綱。はじめ加藤清正に仕へ、後、紀伊侯頼宣に仕ふ。

おぼしま-ふうつう 大島風通【名】風通織の織方に依りて、縞絲を表裏に現はし、絣(カス)織のごとき文(ヤ)を現はせる織物。大島紬に似て、多くは絹・綿交織とす。

おぼしま-ふよう 大島芙蓉【名】〔人〕京都の儒者。本姓は高、名は孟彪、通稱は逸記又は近藤齋宮(キイ)。甲斐國の人。儒を以て業とし、兼ねて繪畫・篆刻に長ず。畫は元明の名家に私淑して、一家の風格を出だせり。著書多し。天明四年歿す。年六十三。

おぼしま-りう 大島流【名】槍術の一派。大島伴六を祖とす。

おぼしま-れうた 大島蓼太【名】〔人〕俳人。本姓は吉田。通稱は平八、空靡居士・振振亭・陽喬の號あり。信濃國の人。江戸に住す。雪中庵第三世。白隱禪師に參して悟道に入る。著書多し。天明七年歿す。年七十。

おぼしま-れったう 大島列島【名】〔地〕大隅國熊毛(クマケ)郡種子(ネ)・屋久(ヤク)二島の西南、海上三百海里に亘りて星列して、沖繩島に接近する群島の總稱。その主たるものを大別して、硫黃島・寶七島・大島の三とし、爾餘の小島を附屬せしむ。群島全部を一群とし、大隅國に屬して、大島郡と稱す。大島廳を大島に置く。ゆわうがしま(硫黃島)・たからしちたう(寶七島)・おほしま(大島)・きかいがしま(鬼界が島)參照。

おぼし-むすぼる 思結ぼる【動下二自】おもひむすぼる(思結ぼる)の敬語。〔古語〕 榮花「かたのみならず、おのづからおぼしむすぼるる事なきにしもあらじかし」

おぼし-むせぶ 思咽ぶ【動四自】おもひむせぶ(思咽ぶ)の敬語。〔古語〕 榮花「いみじき世の中を、妬うわりなくおぼしむせびたり」

おぼし-むつかる 思しむつかる【動四自】

心の内にてむつかりたまふ。〔古語〕 榮花「本意なしとおぼしむつかりて、出でさせたまふ」

おほ-しんぶん 大新聞【名】明治の初年に、紙面大にして、政治問題を主とし、社説ありて插繪なく、振假名もなく、小説も掲載せざりし新聞。當時の「東京日日新聞」「郵便報知新聞」「朝野新聞」「毎日新聞」「曙新聞」の如き類。(小新聞に對して)

おほし-めし 思召・御思召【名】おぼしめすこと。御かんがへ。

おほしめし-いる 思召入る【動下二自】おもひいる(思入る)の敬語。おぼしいる。〔古語〕 榮花「女院は、月日のゆくもしらせたまはず、思しめしいらせたまへり」

おほしめし-かふ 思召替ふ【動下二他】おもひかふ(思替ふ)の敬語。〔古語〕 雪女五枚羽子板「御譜代忠功の斯波の武術、笛一本におぼしめしかへらればや」

おほしめしくづほる 思召しくづほる【動下二自】おもひくづほる(思ひくづほる)の敬語。〔古語〕 榮花「この宮の御事を、いみじうおぼしめしくづほれさせたまひつるつづきなれば」

おほしめし-さます 思召醒す【動四他】おもひさます(思醒す)の敬語。〔古語〕 榮花「殿は、日に添へても、おぼしめしさまさせたまふことなく」

おほしめし-しる 思召知る【動四他】おもひしる(思知る)の敬語。おぼしする。〔古語〕 榮花「年月のことおぼしめししられて、あはれにおぼしめさる」

おほしめし-つき 思召附【名】おもひつき(思附)の敬語。御伽名代紙衣「こりやたまらぬ、且那のおぼしめしつき」

おほし-めす 思召す・御思召す【動四他】『おもほしめす(思召す)の約』思ひたまふ。〔古語〕 拾「神もうれしとおぼしめすらんかし」

おほ-しやう 大莊【名】莊園の大なるもの。

おほ-しやうぎ 大象棋【名】象棋の一種。實物詳かならず。 古紀「康治元年九月十二日、參二新院一、於二御前一、與二師中朝臣一、指二大象棋一、余負」

おほ-しやうご 大鉦鼓【名】鉦鼓の大なるもの。 能樂の時に用ふ。

おほ-しやうじやう 大猩猩【名】〔動〕ごりらに同じ。

おほ-じやうや 大庄屋【名】多くの庄屋の上に立ちて、廣き區域を支配する庄屋。帶刀を許され、格式を與へられて、子孫世襲せり。大きもいり。大總代。大横目。檢斷。

おほ-じやうらふ 大上臈【名】禁中の女官の最上位に立つもの。攝家の女これに任ぜられきといふ。又、幕府にても、僭して、この名稱を用ひたり。

おほ-しやくなげ 大石楠【名】〔植〕つくしやくなげ(筑紫石楠)に同じ。

おほ-しやすらふ 思休らふ【動四自】おもひやすらふ(思休らふ)の敬語。〔古語〕 榮花「いかにせましと、おぼしやすらはせたまふ」

おほ-しやる 思遣る【動四自】おもひやる(思遣る)の敬語。〔古語〕 源氏「いとあはれにおぼしやる」

おほ-しよる 思寄る【動四自】おもひよる(思寄る)の敬語。〔古語〕 榮花「かの折の御名殘にやと、おぼしもよらぬに、去年のこの頃の御心ちぞせさせたまひける」

おほ-しらびそ 大白檜曾【名】〔植〕あをもりとどまつ(青松椴松)に同じ。

おほ-しらべ 大白檜【名】〔植〕前條に同じ。

おほ-しわかる 思分る【動下二自】おもひわかる(思分る)の敬語。〔古語〕 榮花「何事もおぼしわかるるほどに、いかでともかくもと思しめさる」

おほ-しわきまふ 思辨ふ【動下二他】思ひわきまへたまふ。〔古語〕

おほ-しわく 思分く【動下二他】おもひわく(思分く)の敬語。〔古語〕 榮花「三位殿は、おぼしわくるかたなう、水もるまじげにて、過させたまふほどに」

おほ-しわする 思忘る【動下二他】おもひわする(思忘る)の敬語。〔古語〕

おほ-しわたる 思渡る【動四他】おもひわたる(思渡る)の敬語。〔古語〕 榮花「たはやすく參りたまはぬを、いとあやしうのみおぼしわたる」

おほし-をこたる 思怠る【動四他】思ひをこたりたまふ。〔古語〕

おほす 生す【動四他】生長せしむ。やしなふ。おふす。〔古語〕 萬葉「山吹は撫でつつおほさむありつつも君きましつつかざしたりけり」

おほす 負す【動下二他】一『もとおふ(負ふ)の使役形の轉』背おはしむ。〔古語〕 萬葉「ゆぎとりおほせ」 二かこつく。かつく。うけもたす。〔古語〕 古今「木づたへばおのが羽風に散る花をたれにおほせてここら鳴くらん」 三借金せしむ。金をからしむ。〔古語〕 字鏡「債、於保須」

おほす 課す【動下二他】『もと前條の語の意』一罪過の償又は貢物を出さんことを命ず。〔古語〕 紀「科、オホスルニ」 二割當てて爲さしむ。〔古語〕 三相應ならしむ。似合はす。〔古語〕 榮花「ただ人におほせたるほどなり」

おほす 仰す【動下二他】『もとおほす(負す)の意』言附けたまふ。命じたまふ。

おほす 果す【動下二他】遂ぐ。はたす。 萬代山ふかみさびしきやどのあるじとはなりおほせたる身にもあるかな」

おほず 大洲【名】〔地〕伊豫國喜多郡にある町。肱(ヒヂ)川に跨る。大洲城址あり。加藤氏の舊城地。舊稱、大津。

おほぼす 思す【動四他】『おもほす(思ほす)の約』おもふ(思ふ)の敬語。〔古語〕

相思す【句】互に親しく思ひたまふ。 榮花「心うく、あひおぼさぬなりけり」

おほすか 大須賀【名】姓氏の一。桓武平氏より出づ。千葉氏の支流。千葉常胤の四男四郎胤信の下總國香取(カトリ)郡大須賀に城きて居りしより氏とす。胤信の裔康高、三河國に住し、德川家譜代の臣となり、松平の稱號を賜はる。その歿後、外孫榊原康政の子忠政家を繼ぎ、忠政の子忠次、また榊原家を繼ぎしため家絶ゆ。

おほすぎごけ 大杉苔【名】〔植〕苔蘚類に屬する隱花植物。地下に假根を有し、地上に寸餘の細莖を出し、細き葉を密生す。雄

器・雌器株を異にす。我が國各地の山地に自生す。

おほすくわんおん 大須觀音【名】しんぶくじ(眞福寺)に同じ。

おほ-すけ 大介【名】一中世以後、年給として闕國を賜はりたる公卿の推擧によりて、その國の守に任ぜられ、受領として國衙に政務を執るものが、國府・廳宣等の公文書に自署する場合に「守」に代へて用ひし稱。例へば、右衛門權佐兼大介藤原朝臣などの類。 二祖先以來一地方に土著して、檢斷の職を執りし者「三浦の大介」

おほ-すけがう 大助鄕【名】すけがう(助鄕)を見よ。〔德川時代の語〕

おほ-すげかづら 大菅葛【名】〔植〕さねかづら(南五味子)に同じ。

おほす-じやう 大洲城【名】伊豫國大洲にありし城。鎌倉時代に、宇都宮氏これを賜はり、戰國時代に宗野氏の領有に歸し、又、長曾我部これを奪ひ、後、戸田勝隆・藤堂高虎・脇阪安治を經て、元和二年以來加藤氏の城地となれり。

おほ-すず 大鈴【名】たく(鐸)に同じ。

おほ-すぢ 大筋【名】あらまし。大略。

おほ-すっぱ 大透波【名】おほぬすびと。大どろぼう。すっぱ(透波)參照。 狂言(六地藏)「まかり出でたる者は、都に住居するおほすっぱでござる」

おほ-すべらかし 大垂髮【名】女の髮に髢(シカモ)を加へて、背後に長く垂れさげたるもの。

おほすみ 大隅【名】〔地〕西海道十二國の一。九州の一。別に種子(ネ)・屋久(クヤ)・大島(オホシマ)・熊毛(クマケ)・肝屬(キモ)・姶羅(アラ)・噌唹(ソ)の列島これに屬す。姶良(アラ)郡、全國、鹿兒島縣の管轄に屬す。上古は襲(ソ)の國と云ひて日向國に屬せしが、和銅六年に分立せり。その南岸と種子・硫黄等の諸島との間にある海峽を、大隅海峽と云ふ。

おほすみあか 大隅赤【名】黑棚に飾る大なるすみあか。長さ九寸・幅七寸・高さ七寸五分。

おほすみ-かいけふ 大隅海峽【名】〔地〕おほすみ(大隅)を見よ。

おほすみしやうはちまん 大隅正八幡 【名】かごしまじんぐう(鹿兒島神宮)の異稱。

おほすみのみや 大隅宮 【名】應神天皇の難波に行幸の時の宮居。攝津國西成(ナニワ)郡大道(ダイダウ)村大字西大道の邊はその跡なりといふ。一説に、大阪城一帶の丘陵地。

おほすみれ 大菫 【名】〔植〕えぞすみれ(蝦夷菫)に同じ。

おほすやき 大すやき 【名】鏃(ヤジリ)のさきの、鑿(ミ)の如く尖れるもの。

おほすり 大掏摸 【名】人を罵る語。どうずり。いけどうずり。

おほすゐぎう 大水牛 【名】黑田長政の用ひし兜の鍬。

おほすゑつみのかみ 大陶祇神 【名】おほやまつみのかみ(大山祇神)に同じ。

おほせ 仰 【名】 ㊀おほすること。御命令。おふせ。 竹取「おのおのおほせ承りて、まかり出でぬ」 ㊁おことば。おはなし。

おほせ 【名】夏の初めの晴天に吹く南風。〔船人の語〕

おほせあぐ 仰上ぐ 【動下二他】まうしあぐ(申上ぐ)に同じ。 狂言 雁かりがね「上へは…宜しう仰上げられて下されませえ」

おほせい 大勢 【名】 ㊀多くの軍勢。たいぜい。たぜい。 ㊁あまたの人。たにんず。たいぜい。

大勢に手無し 【句】時勢には敵しがたし。〔諺語〕 駿臺雜話「世話に、大勢に手無しといふやうに、世の風俗には勝ち難し」

おほせいだす 仰出だす 【動自他】おほせを下す。

仰出され候ふ事 【句】天皇より仰出されたるおきて。勅令。法律。(明治元年以後六年頃まで、法律の末に用ひたれり)

おほせいで 仰出 【名】おほせいだされたること。おさしづ。御沙汰。

おほせいろうだな 大西樓棚 【名】四十八棚の一。床間(ハヤ)書院などの脇に設くるもの。おほはしだな。

おほせがき 仰書 【名】うちむかひぶみ(打向文)に同じ。おほせぶみ。 狭衣「例の中納言のすけのおほせがきばかりにて、かひなきも、常のことにて」

おほせかく 仰掛く 【動下二他】いひかく(言掛く)の敬語。 枕「おほせかくべき事もぞ侍る」

おほせかた 負方 【名】かしぬし。債權者。〔德川時代の語〕 渡世身持談藝「妻子の物まで、おほせ方へつぎたて」

おほせざき 大關 【名】 ㊀『關所の長の意。すべての敵手をせきとむるよりいふ』相撲(スマ)の最上位にあるもの。三役の一。せき。せきとり。ほて。 ㊁〔植〕稻の一種。莖强くして風に倒れざる良種。

おほせざき 大關 【名】姓氏の一。本姓は多治比(タヂヒ)とも平氏とも又齋藤の流ともいふ。肥後守高清の裔。世世下野國に居り、豐臣秀吉に臨ひて、本領那須郡黑羽(クロバネ)城に居り、關ヶ原の役には德川氏に屬し、子孫相承けてその地に居り、明治維新後、子儁を授けらる。

おほせざきおもだか 大關澤瀉 【名】紋所の一。普通の澤瀉に折線の連續より成る圓狀の圖あるもの。

おほせざきやま 大關山 【名】〔地〕 ㊀陸前國柴田郡川崎村にある山。有耶無耶(ムヤヤ)の關のありしといふ處。 ㊁肥後國菅北(ヤタベ)郡にある山。佐敷(サシキ)川の水源をなし、南戰爭の古戰場。

おほせごと 仰言 【名】おほせの詞。命令。 源氏「さぶらひつれど、おほせごともなし」

おほせざき 大瀨崎・大瀨岬 【名】〔地〕 ㊀肥後國南松浦(マツウラ)郡玉之浦に屬する岬。福江(エク)島の西南角。燈臺及び無線電信局の設あり。 ㊁伊豆半島の西北角。

おほせたい 大世帶 【名】大いなるくらしむき。手廣き生計。 生玉心中「つとめの者の風はない。何程の大世帶も、捌きかねまい女房ぢやと」

おほせせっき 大節季 【名】一年のをはりに近き日。歲末。せっき。 一代女「おほせせっきに、一門から」

おほせつく 仰附く 【動下二他】いひつく(言附く)の敬語。 保元「尋ねまゐらすべき由、播磨守に仰せ附けらる」

おほせっぱ 大切羽 【名】切羽の一。鍔より少し小くして、鍔形なるもの。(小切羽に對して)

おほせなぎ 【名】ためいき(溜息)なるべし。 三河物語「汗を握りて、おほせなぎをつきて居たる處へ」 「同じ。

おほせぶみ 仰文 【名】おほせがき(仰書)に

おほせぜみ 大蟬 【名】〔動〕くまぜみ(熊蟬)を云ふ。(近江國の方言)

おほせんじ 大宣旨 【名】太政官より被官の諸司又は寺社などに下しし公文書。大臣宣し、辨官草し、太政官符と太政官牒との代用をなすもの。(小宣旨に對して)

おほせんなり 大千成 【名】〔植〕 ㊀茄(ナス)科に屬する一年生の草。莖の高さ四五尺。葉は卵形・缺刻狀にして、齒牙を有す。花は、夏日、葉腋に開き、淡青色なり。南米の原產。今は廣く庭園に栽培せらる。 ㊁ぶだうほづき(葡萄酸漿)に同じ。

おほせんぶり 大千振 【名】〔植〕せんぶり(一)の大なるもの。莖の高さ七八寸。

おほぜり 大芹 【名】 ㊀〔植〕たうき(當歸)に同じ。 ㊁催馬樂(サイバラ)の律の曲の一。古、踏歌にこれを歌へり。

おほそ 大細 【名】 ㊀おび(帶)を云ふ。〔女の語〕 ㊁〔動〕いわし(鰮)を云ふ。〔女の語〕

おほぞら 【貌】『おほぞら(大空)の誤とも訛ともいふ。一説に、あふさわの訛』おもてむきなるさま。一説に、しまりなくなほざりなるさま。おほざら。〔古語〕 源氏「せちに隱したまふべきなどは、かやうにおほぞらなる御廚子(ズシ)などに打ちおき散らしたまふべくもあらず」

おほそうだい 大總代 【名】おほじやうや(大庄屋)に同じ。

おほそうりやう 大總領 【名】本家の總領。

おほそこ 大底 【名】荷船又は大なる早船などの底の外面。

おほそこいた 大底板 【名】船の大底を包む板。つつみいた(包板)參照。

おほそこくぎ 大底釘 【名】包釘(クギ)の大なるもの。船の大底に打つ。

おほそで 大袖 【名】 ㊀廣く仕立てたる袖。 ㊁袖口大きく、御即位・大嘗會などの大祀の時、小袖の上に著る服。天皇のは、袞龍(コンリ)の御衣といふ。 ㊂大鎧の袖。(靈神・小袖に對して)

おほそとがり 大外刈 【名】柔道の投業(ナゲワザ)の一。相手が、主に一脚にて體を支ふる時、その股を、我が股にて外より拂ひ倒すもの。

おほぞなへ 大備 【名】戰陣の大なる陣立。

おほぞら 大空 【名】そら。あまつそら。みそら。てん。虛空。 古今「おほぞらは戀しき人のかたみかはものおもふごとにながめらるらん」

おほぞら 【貌】なみたいていなほざりなるこのつね。おほぞう參照。 奈良「身はかくおほぞらなる所の、心を心にまかせたまはぬなれば」

おほぞらたき 大空瀑 【名】〔地〕陸中國稗貫(ヌキ)郡豐澤村にある瀑。二條に分れ、七層に落つ。高さ二十五丈、幅一間。

おほそり 大反 【名】刀のそりの大なること、又その物。

おほそりさげ 大剃下 【名】ひどく剃下げたる奴頭(ヤツカウ)なるべし。

おほそれ 大外 【名】大なる放蕩者。だいそれもの。

おほた 太田 【名】 ㊀〔地〕上野國新田郡にある町。新田山の南麓。古刹太光院(一名新田寺)あり。郡役所を置く。新田山一名金山(カナヤマ)は新田義重より義貞までの居城地。 ㊁〔地〕常陸國久慈(ジ)郡にある町。鐵道水戸線の終點。古刹法然寺あり。附近の瑞龍山は舊藩主德川氏の菩提所、また西山(ニシヤマ)は德川光圀の隱栖地。 ㊂〔地〕美濃國加茂郡にある町。中山道の一驛。木曾川に沿ひ、川をこの附近にて太田川と稱す。對岸なる可兒(カニ)郡土田(ヅチ)町との間に渡船あり。郡役所を置く。 ㊃姓氏の一。清和源氏の分流。源頼政六世の孫資國(クニ)、丹波國太田を領して氏とす。一説には、資國五世の孫資清の武藏國太田の地頭たりしに本づくと。資清の子は即ち道灌にして、父子共に鎌倉管領扇ヶ谷(アフギヤツ)上杉の

家老となり、道灌の子孫は、北條氏・里見氏・佐竹氏等に屬し、徳川氏入國の後、またその臣となり、上總國松尾の藩主たり。明治維新後、子爵を授けらる。

おほた 大田【名】〔地〕■石見國安濃（ヤスノ）郡にある町。三瓶（サン）川の谿谷を占む。郡役所を置く。小笠原彈正の居りし所。■長門國美禰（ミネ）郡にある村。大津街道の要地。郡中第一の繁華の地。

おほ-だい 大臺【名】金一分に價する酒肴の臺の物。〔徳川時代の遊廓の語〕

おほだいがはら-やま 大臺原山【名】〔地〕大和國南部の東境にある山。紀伊山脈中の一峯にして、大和國吉野郡と伊勢國多氣（タケ）郡と紀伊國牟婁（ムロ）郡とに跨る。高さ五五六〇尺。別稱、三國嶽。

おほ-だいくわん 大代官【名】武家時代の職制の一。郡代・郡奉行の類。はじめは主として非違・檢斷を掌り、後、年貢收納・公事（クジ）など、國内の事務一切を扱ふに至れり。（小代官に對して）

おほ-だいこ 大太鼓【名】■舞樂に用ふる太鼓の一種。高さ二丈に及び、立ちながら打つ。だたいこ。■洋樂に用ふる太鼓の一種。■芝居などの囃子（ハヤシ）に用ふる太鼓の一種。〔俚語〕

おほ-たいづ【副】ほぼ。大づもり。大略。

おほ-だうぐ 大道具【名】■舞臺面を飾るに用ふる芝居の道具。即ち岩組・立木・門口・船などの類。（小道具に對して）■次條に同じ。

おほだうぐ-かた 大道具方【名】芝居にて、舞臺の飾附を受持つ者。おほだうぐ。

おほだうぐ-づけ 大道具附【名】芝居にて、大道具の圖案を示せる帳簿。狂言決定の後、作者より營業部を經て、大道具方の棟梁に交付して設計せしむ。

おほ-たか 大高【名】■こしだか（腰高）に同じ。丹波與作「大高に、お菓子さまざまぶんかうに盛り入れ」■おほたかだんし（大高檀紙）の略。〔大鷹〕

おほたか 大高【名】〔地〕尾張國知多（チタ）郡にある町。鐵道東海道線の一驛。日本武尊の妃宮簀媛（ミヤズ）を祀れる火上姉子（ホノカミ）神社及び大高城址あり。桶峽間（オケハザマ）の古戰場も南一里半にあり。

おほ-たか 大鷹【名】■大いなる鷹。伊勢「大たかの鷹がひにて」■鷹の雌。雄よりも大にして、鷹狩は、鶴・雁・鴨・鷺・雉又は兎などを捕ふるに用ひられ、これを大鷹狩といふ。だいたか。せう（兄鷹）參照。

おほたか-がみ 大高紙・大鷹紙【名】おほたかだんし（大高檀紙）に同じ。

おほたか-がり 大鷹狩【名】おほたか（大鷹）■を見よ。寶之集「大鷹狩。霜がれの草葉ををしと思へばや冬野の田をば人のかるらん」

おほたがき-れんげつ 大田垣蓮月【名】〔人〕女流歌人。名は誠。京都の人。男女四人の子及び夫みな歿せしより、尼となりて蓮月と號す。書をも能くし、又、手づから陶器を製す。家集あり。明治十八年歿す。年八十五。

おほたか-げんご 大高源吾【名】〔人〕おほたかただを（大高忠雄）に同じ。

おほたかさか-しざん 大高阪芝山【名】〔人〕儒者。名は季明、通稱は清助。芝山はその號。別に喬松子と號す。土佐國の人。正程朱の學を奉じ、兼ねて詩文を善くす。正德二年江戸に歿す。

おほたか-じんじや 大高神社【名】陸前國柴田郡金ケ瀬に鎮坐せる神社。祭神は日本武尊。

おほたか-じやう 大高城【名】尾張國知多（タ）郡大高町にありし城。もと織田氏の屬城たりしが、徳川家康、今川義元の將として信長の兵と戰ひ、後、和するに及び家康に歸す。

おほたか-ただを 大高忠雄【名】〔人〕赤穗四十七士の一人。通稱は源吾。子葉と號す。長矩の死後、姓名を脇屋新兵衛と變ず。俳諧を善くし、又、茶事を好む。吉良邸に出入する茶師羽倉齋に依りて、敵狀を探り、仇討の謀に資す。元祿十六年死を賜はる。年三十二。

おほたか-だんし 大高檀紙・大鷹檀紙【名】備中・越前等より產する一種の紙。堅一尺七寸餘・横二尺二寸餘にして、地白く、厚く、横に皺あり。おほたかがみ。おほたか。おほちぢみ。檀紙（小高・中高に對して）

おほた-がは 太田川【名】〔地〕■遠江國にある川。天龍川の東において、ほぼこれと並行す。周智（スチ）郡春野山に發し、森町を經て磐田（ダイ）郡に入り、敷地（シキヂ）川及び原谷（ハラヤ）川を容れ、福島村大字福田（フクダ）の間より海に注ぐ。長さ十六里。■木曾川の美濃國加茂郡太田町附近を流るる部分の稱。

おほた-がは 太田川【名】〔地〕■安藝國の中央部を南流する國内第一の大川。國の西部なる燒山（ヤキ）に發し、下流は廣島市を貫流して海に入る。長さ二十四里。一名、可部（カベ）川・八木（ヤキ）川。■備前國世羅（セラ）郡にある川。蘆田（ダ）川の上流。長さ約九里。〔に同じ。（古語）〕

おほだから 大寶【名】おほみたから（大御寶）

おほ-たき 御火燒・御火焚【名】諸國の神社にて、毎年十一月中に、日を定めて、庭火を燒く儀式。藪村「御火燒や霜うつくしき京の町」

おほたき 大多喜【名】〔地〕上總國夷隅（イスミ）郡にある町。夷隅川上流の山地。大河内氏の舊城地。

おほたき 大瀧【名】〔地〕近江國犬上（イヌカミ）郡にある村。犬上川の水源。歌枕たり。藤盛草「布さらす鼈の里の數添へて卯の花咲ける大瀧の山」

おほ-たき 大瀑【名】〔地〕■甲斐國東山梨郡山（ヤマ）村にある瀑。高さ四十四丈・幅五間。■越後國中頸城（ヒキクビ）郡口村の山中にある瀑。高さ九十六丈・幅三間二尺。■陸前國名取（ナトリ）郡馬場村にある瀑。高さ十丈・幅三間。秋保（ボイ）瀑。■大和國吉野郡下北山村にある瀑。釋迦嶽に發し、下流は前鬼（キヂ）川に入る。高さ七十二丈・幅一丈。〔は（夷隅川）に同じ。〕

おほたき-がは 大多喜川【名】〔地〕いすみがは（夷隅川）に同じ。

おほたきね-がは 大瀧根川【名】〔地〕磐城國田村郡にある川。大竹山に發し、赤沼の附近より阿武隈（クマ）川に入る。長さ十里。

おほたきね-やま 大瀧根山【名】〔地〕磐城國の田村・雙葉（ハタ）の二郡に跨れる山。阿武隈（クマ）山脈中の一高峰。高さ三七二〇尺。

おほた-きんじやう 太田錦城【名】〔人〕儒者。加賀國大聖寺（ダイシヨウジ）の人。皆川淇園・山本北山に學び、加賀侯に仕ふ。學問該博、考據紀密、最も經術に長じ、講說雄辯、聽者をして倦むを覺えしめず。文政八年江戸に歿す。年六十一。

おほ-たくみ 大匠【名】匠の長。後世の造宮長官・造寺長官の如きもの。〔古語〕記「大匠をぢなみこそすみかたぶけれ」

おほ-たけ 大嶽【名】大なる山嶽。〔古語〕堀文「比叡の山そのおほたけはかくれねどなほ水のみは流れてぞふる」

おほ-だけ 大竹【名】■たけ高く大きなる竹。狂言「酢はじかみ」「いかいおほだけでおちやるの。皆、からたけでおちやる」■〔植〕はちく（淡竹）に同じ。和名抄「篠竹。唐韻云、篠、漢語抄云、淡竹、於保太介、竹名也」

おほたけ-さん 大嶽山【名】〔地〕武藏國西多摩郡にある郡中第一の高山。小佛（コトボケ）山脈の一高峰。高さ三八九七尺。

おほたけ-げんざう 太田源藏【名】〔人〕俠客。江戸本所の人。擊劍を善くし、膂力人に過ぎ、黨を組みて本所組といひ、一時江戸に鳴りしが、事に坐して玄界島に流さる。

おほ-だこ 大蛸【名】■〔動〕大なる蛸。■地がためなどに用ふる蛸（タコ）の大なるもの。

おほた-ぜんさい 太田全齋【名】〔人〕備後國福山の藩士。名は方、通稱は八郎。全齋はその號。音韻の學に精しく、前人未發の說多し。文化・文政頃の人。

おほ-たたらがみ 大疊紙【名】厚き檀紙に箔など散らしたる紙。詠草・鼻紙その他の料とす。

おほただらくわん 太田道灌【名】〔人〕武將。初名は資長、後、上杉持朝の諱字を賜はりて持資と稱す。道灌は雜髮後の稱。築城・兵馬の法に熟す。今の江戸城は、その築造せしところ。又、川越・岩槻（イワツキ）・鉢形等

の諸城を築營す。兵馬の間、讀書を廢せず、數萬卷の書を館中に藏め、又、和歌を詠じ叢景集の著あり。文明十八年その主定正に謀殺せらる。年五十五。

おほたたねこーのみこと 太田田根子命・意富多泥古命・大直禰古命 【名】大物主(オホモノヌシ)命の五世の孫。三輪君等の祖。一說に、大物主命の子、母は活玉依(イクタマヨリ)姫。

おほたーたん 大田覃 【名】〔人〕おほたなんぼ(太田南畝)に同じ。

おほだち 大太刀 【名】一大なる刀。起、おほだちをたれはきたちて拔かずとも末はたしても逢はむとぞ思ふ」 二佩刀より甚だ長く、戰場に出づる時、背に負ひ又は肩に擔ひて持ちゆきし刀。近古の長太刀なりともいふ。

おほだちーつかひ 大太刀使 【名】巧みに大太刀を使ふ者。 謠曲(烏帽子折)「熊坂も大太刀使の曲者なれば」

おほーたちまはり 大立廻 【名】立廻の、特にはげしきもの。おほまはり。

おほーたつ 大立 【名】船の艫(モ)に立つる鳥居の如きもの。鳥居だつ。たつき(立木)參照。

おほだて 大館 【名】〔地〕羽後國北秋田郡にある町。長木(ナガ)川・米白(ショビ)川の間なる山中の高原を占む。津輕・鹿角(カヅノ)の兩路に當り、要害の稱あり。鐵道奥羽線の一驛。大館城址あり。秋田藩主の支族佐竹氏の舊城地。

おほーたて 大蓼 【名】〔植〕蓼(タデ)科に屬する一年生の草。かはだてに似て、莖・葉ともに綠色。夏の初めに花を開く。各地に栽培せられ、刺身のつま又は蓼あへ等に賞用せらる。

おほーだて 大立 【名】芝居にて行ふたての、多人數にてはげしく行ふもの。

おほたてーあげ 大立擧 【名】臑當(スネ)の、立擧の部分を高く大くし、外側は殊に長く股を覆ふやうに造れるもの。 太平記「大立擧の臑當を、脇楯の下まで引籠め」

おほーたてもの 大立物 【名】兜の前だてのの、特に大なるもの。

おほーだてもの 大立者 【名】一芝居にて、一座の中にて技倆最もすぐれたる名題役者。 二その社會にて推重せらるる人物。

おほたーなんぼ 太田南畝 【名】〔人〕雜學者。名は覃、字は子耕、通稱は初め直次郎、後に七左衞門と改む。狂文・狂歌に巧みにして、滑稽詼諧、實に意表に出づ。初め四方赤良(アカラ)、又、四方山人と號せしが、世人四方山人の文字を誤りて蜀山人と讀みしより、蜀山と改む。又、杏花園・晩樓山人・右楠齋等の別號あり。文政六年歿す。年七十五。著書甚だ多く、近時全集の活刷出づ。

(ぼんなたほお)

おほーたに 大谷 【名】〔地〕一京都東山華頂山の西麓にある谷。僧法然初めて此に淨土宗を開き、後、此に寂し、又、僧親鸞寂して、その遺骸を鳥邊野(ベノ)の北に葬りしが、文永九年吉水の北に改葬し、慶長八年今の西大谷に移し、承和二年更に吉水の南に改葬せるを、今の東大谷の廟所とす。 二近江國大津市の一部。逢阪山阪路の中途にあり、山城國との國境に近し。鐵道東海道線の一驛。

おほたにーくわうしよう 大谷光勝 【名】〔人〕東本願寺第二十一世の法主。伯爵。嚴如と號す。明治維新後、宗徒を督勵して國事に盡力し、同二十七年寂す。年七十八。

おほたにーくわうそん 大谷光尊 【名】〔人〕西本願寺第二十一世の法主。伯爵。廣如の第六子。明如と號す。教家子弟の教養に努む。明治三十五年寂す。年五十四。

おほたにーは 大谷派 【名】〔佛〕眞宗の一派。本山は京都市烏丸通り七條上常葉町にあり。大谷派本願寺と云ひ、俗に東本願寺と云ふ。本願寺第十一世顯如の嫡子教如が、德川家康より今の地に六町四方の地を寄せられ、新に一寺を建立して、本願寺の支派を開きたるに初まる。末寺一萬。東派。おひがし。 〔名〕前條を見よ。

おほたにはーほんぐわんじ 大谷派本願寺

おほたにーひろゑもん 大谷廣右衞門 【名】〔人〕大阪の俳優。初代は、俳號を幡風と稱す。江戸敵役の祖。享保五年歿す。年六十六。家門六代に至る。

おほたにーよしたか 大谷吉隆 【名】〔人〕武將。豐後の人。兼ねて畫をよくす。豐臣秀吉に仕へ、五萬石を食む。關ゲ原の役に、三成に加擔し、戰敗るるに及んで、從者をして首を刎ねしむ。年四十二。

おほたにわたり 大谷渡 【名】〔植〕水龍骨(ホウ)科に屬する一年生の羊齒植物。地下莖より、無柄にしてやや芭蕉に似たる長さ三尺ほどの常綠葉叢生す。曖國の陰地に自生す。たにわたし。 「に同じ。

おほたにーゑ 大谷繪 【名】おほつゑ(大津繪)

おほたーのーたき 大田瀑 【名】〔地〕播磨國神崎(カンザキ)郡寺前(マエダ)村にある國內第一の大瀑。高さ三十四丈二尺、幅三間餘。小田原川の水源たり。

おほーたば 大把 【名】一一つに束ねたる物の多量なること。おほつか。(小把に對して) 二細事に拘らぬこと。おほげさ。おほざっぱ。〔俚語〕 御伽名代紙衣「頭から、おほたばに出らるれば」

おほーたはけ 大痴 【名】おほばか(大馬鹿)に同じ。 出世景遷「さむらひ嘗生・おほたはけと、おほつ吐いてぞ申しける」

おほたはら 大田原 【名】〔地〕一下野國那須郡にある町。那須野の一部。郡役所を置く。大田原氏の舊城地。町の東に大田原城址あり。 二姓氏の一。丹治(ヒヂ)氏の支族。武藏國七黨の一にして、同國大俵の地に住して、大俵を氏とし、後、大田原の字に改む。那須家に仕へ、その滅亡後、豐臣秀吉の小田原征伐に會して下野國大田原を領し、關ゲ原の役には東軍に屬し、爾來大田原城主たり。明治維新後、子爵を授けらる。 「同じ。

おほたーひ 大鯛 【名】〔動〕まだひ、眞鯛に

おほたーぶさ 大髻 【名】男子の髮の髻を大きく結ひたること、又その男子。 國姓爺合戰「若衆でたちに態をかへ、撫つけ髮での大たぶさ、翡翠の大づとふっさりと」

おほたーぶみ 大田文 【名】全國の田文を集成せるもの。田地の目錄、即ち民部省の圖帳に類するもの 太平記「武藏前司入道、日本國の大田文を作りて、庄鄕を分ちて」

おほたまーいし 大玉石 【名】次條に同じ。

おほたまーじやり 大玉砂利 【名】直徑五寸ほどの砂利。大玉石。

おほたるわけ 大多麻流別 【名】〔地〕おほしま(大島)八の古稱。

おほーだんな 大檀那・大旦那 【名】一布施物等を多く喜捨する檀越。 二おやだんな(親旦那)に同じ。(若旦那に對して)

おほたーもちすけ 太田持資 【名】〔人〕おほたどうくわん(太田道灌)に同じ。

おほたーやき 太田燒 【名】武藏國久良岐郡太田村(今は横濱市の一部となる)にて製する陶器。横濱の商人鈴木保兵衞が、明治四年京都清水の陶工宮川香山を聘したるに起因す。一名を眞葛燒(マクズ)と稱するは、保兵衞が京都眞葛原の出身者なるに由る。

おほーたら 食茱萸 【名】〔植〕からすさんせう(烏山椒)に同じ。〔古語〕 和名「食茱萸、於保太良」

おほたらしひこーおししろわけーのーすめらみこと 大足彥忍代別天皇 【名】〔人〕けいかうてんわう(景行天皇)に同じ。

おほたるーのーたき 大垂瀑 【名】〔地〕遠江國榛原(ハイバラ)郡五和(ゴワ)村にある瀑。二條に分れて落ち、下流は大井川に入る。

おほち 邑智 【名】〔地〕石見國六郡の一。郡役所を川本村に置く。

おほーぢ 祖父 【名】一一大父(オホチ)の約。父母の父。ぢぢ。 おほてて。おぢ。〔古語〕 源氏「春宮のおほぢおとどなど」 二老翁。老翁。ぢぢい。 謠曲・通盛「姥も賴もしや、おほぢは言ふに及ばず」 三狂言に用ふる假面(ノウ)の一。「腰折」・「酒講式」・「枕物狂」の仕手などのごとき老翁に扮(ダイ)つ者の著くるもの。

おほぢ 大路 【名】一幅の廣き道路。大道。おほみち。(こう路に對して) 落選「一條のおほぢに、うちぐひ打たせたまへれば」 二催馬樂(サイバラ)の律の曲の一。

おほーち 【名】釣針にむかひて、善からぬ物

を釣れとの意にていふ、まじなひの語。〔古語〕 記「この鉤をその兄にたまはむ時に、のりたまはむさまは、この鉤はおぼち」

おほぢかた 祖父方 【名】 祖父又は外祖父の身うち。〔古語〕 伊勢「御おほぢ方なりける翁」

おほちがた 邑知潟 【名】〔地〕能登國羽咋(ハクイ)郡の平原中にある小湖。海灣の口の泥土に塞がれて生じたるもの。東北より西南に延び、周回三里二十町。長澤・飯山(イヤマ)の二川これに注ぐ。湖口は二十餘町の渠となり、羽咋川と合して海に入る。別稱、千路潟(ガタ)・羽咋(ハクイ)の海。

おほちがひ-たからぶね 大蓮寶船 【名】〔書〕芝全交の作れる黄表紙。

おほぢが-ふぐり 蠦蛸 【名】〔動〕『祖父(チオホ)の陰囊(フグリ)の意』蟾蜍(ヒキガエル)の卵塊。秋の末、樹の枝に著き、はじめ唾の如く、後凝りて黒褐色となる。おほぢふぐり。あしまき。あしがらみ。〔古語〕 和名「蠦蛸。一名蟾蜍、於保知加不久利 蟾蜍子也」

おほ-ちから 大稅 【名】 しやうぜい(正稅)に同じ。〔古語〕 紀「稅、オホチカラ」

おほぢ-ご 祖父御 【名】 おほぢ(祖父)の敬稱。狂言武悪「おほぢごさまから、お使に參りましたのに」

おほ-ちぢみ 大縮 【名】 おほたかだん(大高)

おほぢ-づら 大路面 【名】 大路に沿ひたる方。おほぢのかたはら。路傍。 發心集「京へ出でける道に、大路づらなる井の側に」

おほぢ-とうせん 大地東川 【名】〔人〕儒者。室鳩巣の外甥。名は昌、字は士愈。大應公世子たりし時、侍讀となり、優遇を蒙る。寶曆年間歿す。年六十。

おほぢ-ふぐり 蠦蛸 【名】〔動〕おほぢがふぐり(蠦蛸)に同じ。〔古語〕

おほ-ちや 大茶 【名】 多くの茶汁。 狂言(通圓)「大茶を立てんと」

おほちやう-じま 大長島 【名】〔地〕おほさきしもじま(大崎下島)に同じ。

おほ-ちやく 【名】 わうちやく(横著)に同じ。狂言(佛師)「おほちやくもの、やるまいぞ、やるまいぞ」

おほ-ぢやのゆ 大茶湯 【名】 大仕掛なる茶の湯。「北野の大茶湯」參照。

おほ-ちやぼ 大ちやぼ 【名】 主に木綿物を縫ふに用ふる一種の針。

おほ-ちやや 大茶屋 【名】 料理屋又は芝居茶屋の内にて、格式の高きもの。(小茶屋に對して)

おほ-ぢやゆ 大重 【名】 三ど入より大なる「土器。

おほ-ちらし 大散 【名】 染形の、大形の紋を散らしたるもの。

おほぢ-をぢ 從祖父 【名】 じゆうそふ(從祖父)に同じ。〔古語〕 和名「從祖父。爾雅云、父之伯父・叔父爲從祖父、於保知乎遲」

おほ-つ 大津 【名】 一大なる津。 二『わうど(黄土)の訛』粘土・蠣灰・漆喰(カビ)に種種の色を加へて、壁の上塗に用ふるもの。 三おほつかべ(大津壁)の略。

おほつ 大津 【名】〔地〕 一長門國五郡の一。郡役所を深川村に置く。 二近江國にある市。滋賀郡の西南隅、蓬坂山の北麓、琵琶湖の南岸。滋賀縣廳及滋賀郡役所を置く。鐵道東海道線の一驛。附近に弘文天皇陵・三井寺・大津城址・滋賀大津宮の址・唐崎關寺の址・近松寺、その他名勝古蹟多し。その湖濱を、古來打出(デチ)の濱と稱す。萬葉「わが命まさきくあらば又も見む滋賀の大津に寄する白波」 三肥後國菊池郡にある町。阿蘇山の山口に當る。西南役の戰場。土俗、多くオホツと濁りて呼ぶ。 四常陸國多賀郡にある町。海に臨み、里根(ネ)川の細流に跨る。水戸藩時代は此に砲臺を設けたり。 五おほず(大洲)の舊稱。

おほつ 大唾 【名】 多くのつば。 田世景蔭「さむらひ寄生、大だはけと、おほつ吐いてぞ申しける」

おほづ 大都 【名】 おほよその處。おほかた。「たの見こみ。

おほ-つうじ 大通詞 【名】 和蘭人との通辯の役をつとめし官吏の長。〔德川時代の語〕

おほ-つうじ 大通事 【名】 德川時代に、支那人との通事をつとめし役人の長。

おほ-つうま 大津馬 【名】 近江國大津の驛にて用ふる駄馬。〔德川時代の語〕 狂「大津馬の追ひからし」

おほ-つか 大束 【名】 一おほたば(大束)(一)に同じ。 建武年中行事「硯の筥の申文を藏人に、紙ひねり召して、大つかに結びて、これを出す」 二『大束に結ぶよりいふ』中古時代の朝廷の公事(ジ)の文書。

おほ-つか 大栂 【名】 はんし(半紙)を云ふ。〔奥州の方言〕

おぼ-つか 覺束 【貌】 おぼつかなし(覺束無)の略。〔古語〕 拾遺「かくのたまはするもおぼつかながら、夢のやうになん、さもやありけんとばかりおぼえ侍る」

おぼつ-がき 大津垣 【名】 掘立柱に、割竹を縦に並べて作れる、粗末なる竹垣。てうせんやらい。

おぼつかくすを 大塚楠緒 【名】〔人〕女流小説家。土佐國の人大塚正男の女。文學博士保治を迎へて夫とす。文筆に親み、明治四十三年歿す。年三十六。

おほ-つかさ 大學寮 【名】 だいがくれう(大學寮)に同じ。

おほ-つかさ-さうご 大塚蒼梧 【名】〔人〕有職家。名は嘉樹、字は子敏、通稱は市郎左衛門。江戸の人。律令・性理の學に精しく、其名、四方に聞ゆ。享和三年歿す。年七十三。

おほつか-たざう 大塚太藏 【名】〔人〕繪絣の始祖。筑前國御井(ミヰ)郡津福村の人。絣(クワス)を織るを以て業とす。

おぼつか-な 覺束無 【貌】 『おぼつかなし(覺束無し)の略』 おぼつかなきさま。おぼつか。 土佐「おぼつかな今日は子の日かあまならば海松をだに曳かましものを」

おぼつかな-がる 覺束無がる 【動四他】 おぼつかなく思ふ。 源氏「上のおぼつかながり嘆ききこえたまふ御けしきも」

おぼつか-なし 覺束無し 【形一】 一たしかならず。分明ならず。 萬葉「吾されば木がくれおほき夕月夜おぼつかなしも山陰にして」 二こころぼそし。こころもとなし。まちどほし。 拾穗「おぼつかなさを、年ごろ思ひなげきつるは」

おぼつかな-み 【名】 おぼつかなきこと。(多くはなみを浪の意を含めて歌などに用ふ)大和「見も見ずもたれと知りてか戀ひらるるおぼつかなみの今日のながめや」

おほ-づかひ 大使 【名】 たいし(大使)(一)に同じ。〔古語〕 記「御調のおほづかひ」

おほつ-かべ 大津壁 【名】 大津(二)を上塗としたる壁。その色淡黄なるを普通とす。

おほつ-がみ 大津紙 【名】『大津壁に似たるよりいふ』はさろんの俗稱。

おほ-づかみ 大摑 【名】 一多くつかみ取ること。 二大體を見て、こまかなる所をさしおくこと。おほざっぱ。

おほ-つぎ 大繼 【名】 和船の船底外板の一部。その船尾の方は、中樅(ナカ)と重ねて繼合はす。

おほつき-げんたく 大槻玄澤 【名】〔人〕仙臺侯の侍醫。名は茂質、字は子煥、磐水と號す。建部清菴に師事して醫を修め、江戸に出でて杉田玄白・前野良澤に就き、醫學及び蘭學を修め、尋いで良崎に遊學して醫術及び蘭學を研鑽し、幕府の賞賜を被る。重訂解體新書・蘭學階梯・環海異聞等著書多し。文政十年歿す。年七十一。

おほつき-ばんけい 大槻磐溪 【名】〔人〕儒者。仙臺藩に仕ふ。名は清崇、字は士廣、通稱は平次、磐溪はその號。玄澤の第二子。昌平黌に學び、能筆にして、詞藻豐富、又、夙に西洋の砲術を講じて、蘊奥を究む。嘉永年間、米艦の浦賀に來れるとき、建議して開港説を主張す。明治戊辰に、事に坐して一旦獄に入り、後、文酒を友とし、騷壇の將を以て鳴る。明治十一年歿す。年七十八。

おほつき-ばんすゐ 大槻磐水 【名】〔人〕おほつきげんたく(大槻玄澤)を見よ。

おほつき-ばんり 大槻磐里 【名】〔人〕蘭醫。玄澤の長子。名は茂楨、字は子節、通稱玄幹。磐里はその號。江戸に居る。夙に家學を修め、且つ長崎に遊びて、蘭學を中野柳圃に受け、幕命を以て洋書を譯解し、父子共に職を天文臺に奉ず。天保八年歿す。年五十三。醫術・蘭學の著書多し。

おほつ-きやはん 大津脚絆 【名】 脚絆の一種。近江國大津にて製出し、京・阪地方に行る。普通には白木綿・淺葱(ギサ)木綿又は雲

齊木綿を用ひて造る。

おほつくし 大盡【名】だいじん（大盡）に同じ。〔徳川時代の遊廓の語〕

おほつげ 大黄楊【名】〔植〕いぬつげ（犬黄楊）に同じ。

おほつごもり 大晦【名】一年の最終の日。十二月の晦日。おほみそか。おほとし。除日。歳除。

おほつむ（英Opossom）【名】〔動〕『もと西印度土人の語』有袋類に屬する獸。北米に産す。形、鼠（ねずみ）に似、尾長くして、一部は毛無く、把持の用をなす。皮裘は通常缺き、幼兒を尾にて捲きて、背上に負ふ。

（むさっぽお）

おほつ-せきだ 大津雪駄【名】雪駄の一種。近江國大津にて製出するもの。

おほつ-だいくわん 大津代官【名】江戸幕府の職制の一。近江國大津の檢斷及び近郷の土貢收納を掌りしもの。

おほつ-つたもみぢ 【名】〔植〕槭樹（かへで）科に屬する落葉喬木。幹の高さ五六丈達す。葉は五乃至七に淺裂し、鋭頭・全緣。四五月頃、淡黄色の花、繖房花序に排列して開き、翅果を結ぶ。本邦各地の山地に自生す。いたやかへで。いぬいたや。いたや。おほかへで。つたもみぢ。きぶねもみぢ。ときはかへで。

（ぢみもたつほお）

おほつ-つち 大地【名】『廣大なるよりいふ』地面。陸地。大地（だいち）。〔古語〕萬葉「大土もとれば盡くれど世の中に盡きせぬものは戀にしありけり」

おほ-つち 大土【名】四季の土用中、庚午より戊寅までに當る九日間。（小土に對して）

おほつち 大槌【名】〔地〕陸中國上閉伊（かへい）郡にある町。もとの大槌・小槌・安灣・吉里吉里（きりきり）の諸村を合せたるもの。大槌川（一名金澤川）と小槌川とに跨り、大槌灣に臨む。風景佳麗。奥州濱街道の一驛。

おほつち 茶【名】〔植〕をちへし（男郎花）に同じ。おほどち。〔古語〕和名「茶。爾雅注云、茶、於保都知、若葉之可食也」

おほつち-つかさ 大地官【名】土地を守り掌る官の長。〔古語〕起「大地官、オホツチツカサ」「神の御子。

おほつち-の-かみ 大土神【名】大年（おほとし）

おほつちわん 大槌灣【名】〔地〕陸中國上閉伊（かへい）郡釜石港の北、御箱崎と野島崎との間より四海里灣入せる海灣。灣内南岸に鵜住居（うのすい）村、北岸に大槌町あり。大槌・小槌・栗林の諸川これに注ぐ。

おほ-づつ 大筒【名】一たいはう（大砲）に同じ。二酒を入るる大なる竹の筒。

おほづつ-ぐみ 大筒組【名】江戸幕府の職制の一。老中の支配に屬し、大砲に關する事を掌りしもの。

おほづつ-てっぱう-やく 大筒鐵砲役【名】江戸幕府の職制の一。火矢・狼烟等の製造及び發射法の教授を掌りしもの。おほづつやく。

おほ-つづみ 大鼓【名】つづみの一種。大形にして、左の膝の上に横たへて打つもの。おほかは。えつづみ。おほどう。（小鼓に對して）和名「大鼓、於保豆豆美。一云、四乃豆豆美、即建鼓也」

おほ-づつみ 大包【名】大なる包み物。「御菓子參らする中に、えもいはず大きなるおほづつみに、赤き綱をつけて、引出したり」

おほづつ-やく 大筒役【名】おほづつてっぱうやく（大筒鐵砲役）に同じ。

おほ-っとり 【貌】人の性質のおほやうなるさま。おほまか。おっとり。〔俚語〕

おほ-つな 茶【名】〔植〕『おほつちの誤か』をとこへし（男郎花）に同じ。

おほ-づな 大綱【名】一大なるつな。二たいか（大綱）に同じ。

おほつなきり 大綱切【名】船戰の際、敵の引綱・碇綱などを切るに用ふる武器。大匙刀の類。

おほつ-ねりぬき 大津練貫【名】近江國大津なる大練寺（だいれんじ）の清水。續つれづれ草「一とせ、大津の大練寺に參りたりしに、主の僧語られしは、當寺の清水は、昔より傳はりて、大津ねりぬきと庭訓にも載せたるは、この名水の事なり」

おほつ-の-みや 大津宮【名】しがのおほつのみや（滋賀大津宮）に同じ。

おほつ-の-わうじ 大津皇子【名】〔人〕天武天皇の皇子。御母は皇妃大田皇女。博覽强記にして、武を好む。新羅の僧行心の言を信じて、天皇の崩後叛を謀り、事發覺して死を賜はる。御年二十四。

おほ-つばめ 大燕【名】〔動〕あまどり（雨鳥）を云ふ。〔關東の方言〕

おほ-つはもの 大兵【名】大勢の軍兵。大兵（だいひょう）。〔古語〕起「元戎、オホツハモノ」

おほ-っ-ばら 大腹【名】ふとっぱら。大膽。大腹中（だいふくちゅう）。〔俚語〕「ら」の訛。

おほ-っ-びら 大っぴら【貌】おほびら（大びら）に同じ。

おほつ-ぶくろ 大津袋【名】『千利休、近江國大津に滯在中、米の麻袋を見て、その形に摸して造りはじめしものなるよりいふとぞ』茶道にて、棗（なつめ）などを包むに用ふる一種の袋。こめぶくろ。

おほ-っ-ぺら 大っぺら【貌】おほまか。おほやう。〔俚語〕

おほっぽ 【貌】うぼっぽに同じ。〔俚語〕浮世風呂「それでも、生れ立ちの惡い野郎なら、おぼっぽで遊び歩いて、今だに役にも立つめえが」

おほ-つぼ 大壺【名】一大なる壺。二しゅびん（泉瓶）に同じ。〔虎頭〕〔古語〕雅裴抄「大臣のそんざのをりは、おほつぼをおき」

おほつぼ-ひろひで 大坪廣秀【名】〔人〕次條を見よ。

おほつぼ-よしひで 大坪慶秀【名】〔人〕大坪流馬術の祖。上總國の人。式部大輔又は左京亮と稱し、薙髮して道禪と號す。足利義滿及び義持に仕ふ。慶秀、一に廣秀にも作る。

おほつぼりう 大坪流【名】馬術の流儀の一。大坪慶秀より始まりしもの。

おほつ-ま 大津間【名】座敷の廣さの量りかたの一。長さ六尺一寸・幅三尺五分の疊を敷けるもの。轉大津などに行はる。（京間・江戸間等に對して）

おほつまぐろ 大妻黑【名】矢の羽の上半に大なる黑斑あるもの。

おほつ-ます 大津枡【名】近江國三井寺の所領中にて、年貢を納むるに用ひし枡。

おほつ-またべい 大津又平【名】〔人〕またべい（又平）を見よ。

おほつ-まつり 大津祭【名】しのみやまつり（四宮祭）に同じ。

おほ-つまど 大妻戸【名】大なる妻戸。

おほ-づめ 大詰【名】一おほぎり（大切）二に同じ。三だいべん（大便）を云ふ。〔小詰に對して〕〔盜賊の隱語〕

大詰の木【句】芝居にて、大詰の時に入るる拍子木。

おほづめ-かんばん 大詰看板【名】芝居の看板の一種。一番目狂言の大詰のさまを示せる繪看板。

おほ-づもり 大積【名】凡その見つもり。

おほつ-ゑ 大津繪【名】一寛永頃より近江國大津の追分・大谷の邊にて賣出したる繪。泰書の如き紙に墨・丹・綠などの彩料を以て描きたる竪の一枚繪にて、もとは佛畫なりしが、漸く變じて戲畫となり、その畫題は鬼の念佛・藤娘（ふぢむすめ）・奴の槍持等を主としたり。地名に因りて、追分繪とも大谷繪とも云ふ。二清元又は長唄に合せて演ずる一種の踊。三次條の略。

おほつゑぶし 大津繪節【名】俗謡の節の一。調子は二上りにて、文句の中に大津繪の戲畫の畫題を詠み連ねたるを元唄とし、替唄も尠からず。おほつゑ。

おほ-て 大手【名】一おふて（追手）を見よ。盛衰記「西にはおほて賣めかかる…東には搦手待請けたり」二（商）取引所におけ多數の賣買。三おほてすぢ（大手筋）の略。

おほ-で 大手【名】兩手を左右に廣く張り、

又は威張って歩む時などに、両手を左右に振動かすこと。〔俚語〕「おほてを振ぐ」「おほてを振る」

おほていり 大出入【名】大なる爭ひ。大喧嘩。大訴訟。〔俚語〕

おほてーすぢ 大手筋【名】〔商〕取引所にて、常に巨額の賣買をなす有力なる相場師。おほて。

おほてっぱう 大鐵砲【名】たいはう（大砲）に同じ。

おほーてて 大父【名】おほぢ（祖父）に同じ。〔古語〕「桑花」やや、おほててがおはしたりけるを知らで、今まで來ざりけるは、しれたりけるわざかな」

おほーてまり 大手毬【名】〔植〕忍冬（スヒカ）科に屬する落葉灌木。幹の高さ數尺。葉は心臟形に近くして鋸齒あり、對生し、裏面の葉脈上に毛茸あり。花は夏の初に開き、白色にて、やや球狀に密聚せる織形花序をなす。觀賞用として栽培せらる。てまりばな。〔小手毬に對して〕

おほーてんじん 大天神【名】能樂の神佛面の一。「金札」・「藍染川」の曲の後仕手（ノシテ）の門。

おほてーもん 大手門【名】城の正門。大手などに用ふ。

おほーでら 大寺【名】一大なる寺。二だいじ。あんじ（大安寺）に同じ。

おほーでり 大照【名】おほひでり（大旱）に同じ。

おほーと 【名】『おもと（御許）の轉』貴人の坐りゐる場所。おもと。**おほとくすし**（侍醫）。おほとびと（侍從）參照。〔古語〕紀「幕下、オホト」

おほーど 大戸【名】一家の表口などにある大きなる戸。二には（庭）を云ふ。〔駿河國靜岡の方言〕

おほーど 大門【名】大なる海峽。おど。〔古語〕

おほーどう 大胴【名】おほつづみ（大鼓）に同じ。「摺（スリ）」に同じ。

おほどう-さき 大胴先【名】「馬手（メテ）」の草

おほーどか 【貌】おほやう。のどやか。ゆるやか。おほのか。おほらか。おほぬさ。〔古語〕源氏「ただおほどかに、ものしたまふをぞ、うしろやすう」

おほときん 大兜巾【名】能樂の裝束の一。天狗の頭に戴く金襴裝の大なる兜巾。「鞍馬天狗」・「善界（イザカ）」・「車僧（クルマ）」などの曲に用ふ。

おほーとく 【動四自】次條に同じ。〔古語〕源氏「人のさま、いとらうたげに、おほどきたれば」

おほーとく 【動下二自】大どかにてあり。とりしまらず。おほやうにてあり。おほどる。おどく。〔古語〕源氏「いとわかやかにおほどけたる心地す」

おほーとくすし 侍醫【名】おもとくすし（侍醫）に同じ。〔古語〕「代國の方言」

おほーとぐち 大戸口【名】家の出入口。〔岩

おほーとこ 大床【名】一大なる床。二棺を覆ふ石造の具。載棺〔古語〕和名「棺、於保土古、周棺者也」

おほーどこ 大所【名】次條の略。➡「大になるとも、おほどこの犬になれ」

おほーどころ 大所【名】身代の大なる家。おほどこ。「戸野老」に同じ。

おほーどころ 大野老【名】〔植〕えどどころ（江戸野老）に同じ。

おほーどーさき 大門崎【名】〔地〕筑前國糸島（シマ）郡芥屋（ケヤ）村の西北にある岬。玄武岩より成る。一名、芥屋の大門。

おほーとーさき 大戸崎【名】〔地〕肥後國天草上島（アマクサ）の東北角。柳瀬戸（ハナセト）の東口南角。

おほーとし 大年・大歳【名】一ぐわんねん（元年）に同じ。〔古語〕紀「元年、オホトシ」二おほつごもり（大晦）に同じ。（小年に對して）夫木「三島野に神のみかたを引きすゑてからぬ日もなしおほとしのにへ」

おほーとしこし 大年越・大歳越【名】としこし（年越）二に同じ。

おほとしこし-の-かみ 大年神【名】素盞男（スサ）尊の御子。穀物を守りたまふ。

おほとしみおや-の-じんじや 大歳御祖神社【名】駿河國靜岡市宮ヶ崎町賤機（シハタ）山の麓なる淺間（セン）神社と同境に鎮坐せる國幣小社。祭神は大歳御祖命。

おほーとしより 大年寄【名】たいらう（大老）に同じ。

おほとた 大ごた【名】〔商〕どたを見よ。

おほーどち 茶【名】〔植〕をちこへし（男郎花）に同じ。おほつち。〔古語〕字鏡「茶、於保止知」

おほどち-な 茶菜【名】〔植〕前條に同じ。〔古語〕

おほどなぶら 大殿油・御殿油【名】『おほとのあぶら（大殿油）の約』大殿に點じたる燈火。おほとのあぶら。おとのあぶら。おんとなぶら。〔古語〕源氏「おほとなぶら、近くて、文どもなど見たまふついで」

おほーどねり 大舍人【名】大舍人寮の官人にて、行幸に供奉し、警衛・驅使などの事を掌りしもの。定員は左・右寮各八百人。

おほーどねり-あや 大舍人綾【名】承久の變後、織部司衰ふるに當り、大舍人町の工人の織りし綾〔鎌倉時代の語〕

おほーどねり-の-つかさ 大舍人寮【名】次條に同じ。〔古語〕和名「大舍人寮、於保止禰利乃豆加佐」

おほーどねり-れう 大舍人寮【名】古、中務（ナカツカサ）省に屬して、大舍人の名帳及びその分番・宿直等の事を掌りし役所。美福門院の東北、雅樂寮の西に在り。頭（カミ）一人・助（スケ）一人・允（ジョウ）大少一人づつ・屬（サカン）大少一人づつの四部官の外、大舍人・使部・直丁等の職員ありき。左・右に分れたりしが、大同三年合同して一寮とせり。おほどねりのつかさ。

おほーとの 大殿【名】一中古の寢殿造（シンデン）りにおける寢殿、即ち正殿。〔古語〕紀「正寢、オホトノ」萬葉「大宮はここと聞けども大殿はここといへども」二大臣の敬稱。おとど。〔古語〕源氏「おほとのの御心、いとほしければ、まかでたまへり」三大臣もしくは貴族の當主の父の敬稱。保元「おほとのは、頭殿（カウノ）の御承りにて、昨日曉斬られさせたまひ候」四貴人の當主。（世子に對して）丹波與作「そんならま一度、大との樣御袋樣と御さかづき」

おほとの-あぶら 大殿油【名】おほとなぶら（大殿油）に同じ。〔古語〕枕「高つきにまゐりたるおほとの油なれば」

おほとの-ごもり 大殿隱【名】おほとのごもること。おんとのごもり。〔古語〕落窪「なぞのおほとのごもりぞ」

おほとの-ごもる 大殿隱る【動四自】寢（イ）ねたまふ。おんとのごもる。おとのごもる。〔古語〕枕「今は明けぬるに、かくおほとのごもるべきことかは」

おほとの-ぢ-の-かみ 大斗能地神・大戸之道尊【名】天地開闢の時、大斗能辨（オホト）神と共に成り出でたまひし男神。おほとむぢの神。

おほとの-べ-の-かみ 大斗能辨神・大苫邊尊【名】天地開闢の時、大斗能地神と共に成り出でたまひし女神。おほとむべの神。

おほとの-ほがひ 大殿祭【名】神今食（ジンジキ）・新嘗祭・大嘗祭の前後又は皇居の移遷等の場合に、屋船久久遲（クヒヂ）命・屋船豐宇氣姫（ユケヒメ）命・大宮賣（オホミヤ）命を祭りて、宮殿の災異を祓はるる祭。

おほーとのゐ 大宿直【名】次條の略。伊勢大輔集「右大殿もおぼすことあるなるに、おほとのゐに候ひたまふ」

おほとのゐ-どころ 大宿直所【名】大內裏を守護する者の詰めし所。主殿寮（ツカモリ）と梨本曹司との間に在り。おほとのゐ。

おほーとびで 大飛出【名】能樂の鬼畜面の一。飛出の一種。「加茂」・「嵐山」・「江ノ島」などの曲の後仕手（ノシテ）などに用ふ。

おほとーびと 侍從【名】おもとびと（侍從）に同じ。〔古語〕大寶令「侍從、オホトビト」

おほどひわけ-の-かみ 大戸日別神【名】伊弉諾（ナギ）尊の御子。

おほーどほり 大通【名】市中の廣き路。おほぢ。だいだう。ほんどほり。

おほとまどひこ-の-かみ 大戸惑子神【名】大山祇（オホヤマツミ）神第七の御子。

おほとまどひめ-の-かみ 大戸惑女神【名】大山祇（オホヤマツミ）神の御子。

おほどまり 大泊【名】〔地〕樺太の首都。もとのコルサコフ（Korsakov）とポロアントマリ（大泊）との兩市街を合せたるもの。亞庭（アテ）灣に臨む。大泊支廳・兵營等を置く。明治三十八年七月、樺太征討軍此に上陸して、露國守備兵を北走せしめし處。コルサコフのアイヌ名は九森古丹（クシコン）。

おほとむち

おほとむち-の-かみ 大富道神【名】おほとのぢのかみ（大戸能地神）に同じ。

おほとむべ-の-かみ 大富邊神【名】おほとのべのかみ（大斗能辨神）に同じ。

おほ-とん 大とん【名】〔商〕おほびけ（大引）〔一〕に同じ。〔取引所の語〕

おほとも 大伴【名】姓氏の一。神別にして、高皇産靈（タカミむすび）神五世の孫天押日（アメノオシヒ）命の裔。姓（カバネ）は朝臣（アソン）と宿禰（スクネ）と連（むらじ）とあり。神武天皇以來、久米（クメ）・物部（モノベ）の二氏と共に、武事を以て朝廷に仕へ、淳和天皇の時、天皇の諱を避けて、伴（ともと）と稱へ、平安朝の初期に至りて衰微す。

おほとも 大友【名】〔一〕姓氏の一。姓（カバネ）は史（フビト）。神別か皇別か蕃別か詳かならず。〔二〕姓氏の一。蕃別にして、漢人より出づ。姓（カバネ）は村主（スグリ）。〔三〕姓氏の一。武家時代の九州北部の豪族。

おほ-ども 大供【名】二十歳前後の男を嘲りていふ語。〔小供に對して〕〔俚語〕

おほともうぢやす 大友氏泰【名】〔人〕武將。貞宗の第二子。初め脇屋義助に從ひ、足利尊氏と山崎に戰ひしが、後、降服して式部丞となり、屢九州に南軍を討つ。

おほとも-かなむら 大伴金村【名】〔人〕武將。大伴談（カタリ）の子。仁賢・武烈・繼體・安閑・宣化・欽明の六朝に歷事し、五朝の大連（オホムラジ）となり、忠貞の譽高かりしも、晩年、韓土の事を處するに失計多かりしより、群臣に斥けられたり。

おほとも-くろぬし 大友黑主【名】〔人〕歌人。六歌仙の一人。近江國大友の人。世世、大友に居り、因りて氏とす。世に滋賀黑主と稱す。貞觀・延喜頃の人。鄕人祠を郡中に建てて祀り、黑主明神と稱す。

おほとも さだむね 大友貞宗【名】〔人〕武將。親時の子。家を繼ぎ、豐後の守護たり。後、足利尊氏に從ひ、諸所に戰へり。

おほとも-さてひこ 大伴狹手彥【名】〔人〕武將。宣化天皇の二年新羅を伐ち、任那を鎭め、百濟を救ふ。欽明天皇の二十三年大將軍となり、六に高麗を破る。ひれふるやま（領巾振山）參照。

おほとも-するがまろ 大友駿河麻呂【名】〔人〕武將且つ歌人。天平年中、越前の守となる。橘宗貟麻呂の亂に坐して貶せられしが後、召還せられて出雲・肥後守となり、累進して陸奥按察使となる。寶龜七年歿す。

おほともそうりん 大友宗麟【名】〔人〕おほともよしげ（大友義鎭）に同じ。

おほともたかのり 大伴高德【名】〔人〕天文家。百濟の人。白猪奈世の後裔。百濟の僧觀勒に從ひて天文・遁甲の術を學び、大に得るところあり、天文博士となる。

おほとも-たびと 大伴旅人【名】〔人〕武將且つ歌人。大納言安麻呂の長子。元明天皇に仕へ、西隅の土賊を擊ちて殊功あり、大納言に拜せらる。天平三年薨ず。年六十七。

おほとも-ちかよ 大友親世【名】〔人〕武將。氏時の第二子。應永三年事に坐して、足利義滿に幽せられしが、翌年免されて九州に歸り、菊地氏と戰ふこと數十回、遂にこれを滅し、豐・筑・肥を合せ、九州探題と稱す。晩年、入道して高祖といふ。

おほともの 大伴の【枕】地名のみつ（三津）・たかし（高師）にかけていふ。前者は攝津國にあり、後者は河內國にあり、この二國は大伴氏の所領なりしによるならんといふ。萬葉「おほとものみつとはいはじあかねさし照れる月夜にただあへりとも」同「おほとものたかしの濱の松が根をまきてしぬれど家ししぬばゆ」

おほとも-の-わうじ 大友皇子【名】〔人〕弘文天皇の御即位前の御名。

おほともひ 辨【名】べんくわん（辨官）に同じ。〔古語〕和名「大辨、於保伊於保止毛比」同「中辨、奈加乃於保止毛比」

おほともひ-の-つかさ 辨官【名】べんくわん（辨官）に同じ。〔古語〕「起「大辨、オホトモヒノツカサ」

おほとも-べ 大伴部【名】大伴連に屬する部兵。〔古語〕

おほとも-もん 大伴門【名】すざくもん（朱雀門）に同じ。

おほとも-やかもち 大伴家持【名】〔人〕武將且つ歌人。大納言旅人（トビト）の子。光仁・桓武の兩朝に仕へて、軍事を掌り、持節征東將軍となる。和歌を善くす。萬葉集二十卷中の大部分は、その撰ぶ所ならんといふ。

おほとも-よしあき 大友義鑑【名】〔人〕おほともよしのり（大友義鑑）を見よ。

おほともよしのり 大友義鑑【名】〔人〕武將。義鎭の嫡子。小字は五郎。天文二十年菊地氏を討ちて肥後を併せ、尋いで筑前の秋月氏を滅し、兵を豐前に出して城をその長子義統（ムネミ）に讓り、豐後の丹生島（ジニマ）に築きて移り、髮を削りて三非齋宗麟と號す。天正十五年歿す。年五十八。

おほとも-よしのり 大友義鑑【名】〔人〕武將。九州の探題。入道して宗玄と號す。隣國を掠奪して、その名を四方に轟かし、船舶を西洋に遣りて交易し、珍寶・奇品得るところ多く、本邦に耶蘇教の行はるるはこの時代より創まる。天文十九年家督相續の事に關して、その臣に殺さる。年四十九。一に「よしあき」と訓ず。

おほともよしむね 大友義統【名】〔人〕武將。義鎭の長子。五郎と稱す。後、吉統と改む。入道の後、宗嚴と號す。天正七年父の讓を受けて家督す。筑前・肥前を攻めて一時振ふ。關ヶ原の戰に、西軍に屬し、豐後國石立（クシタ）城に據りしが、黑田孝高（ヨシタカ）に破られ、遂に常陸に流さる。慶長十年歿す。年四十九。

おほともわけ-の-みこと 大鞆別尊【名】〔人〕おうじんてんわう（應神天皇）に同じ。

おほとら-ばち 大虎蜂【名】〔動〕蜜蜂の一種。丸形にして赤黃の軟毛を密生す。我が國にては普通の種類に屬す。

おほ-とり 大鳥【名】〔一〕鶴・鳳・鳳・鸛（カウ）などすべて形の大なる鳥の總稱。〔古語〕〔二〕『鵬は、鳳と音も同じく意も相通ずる文字なれども、莊子にては特別の意義を附して、想像上の鳥とせり』支那の莊子逍遙遊篇に見えたる鵬（ホウ）といふ鳥。大鳥の尾より小鳥の頭（コケイ）となるとも牛後となる勿れ」に同じ。〔諺語〕

おほとり 大鳥【名】〔一〕〔地〕和泉國の舊郡の一。明治二十九年泉郡と合して泉北（ホクク）郡となる。〔二〕姓氏の一。神別にして、姓（カバネ）は連（むらじ）。大中臣（オホナカトミ）と同じく天兒屋根（アメノコヤネ）命の裔。

おほ-とり 大取【名】多量に物を取ること。大取せうより小取（コドリ）しろ【句】一時に食り取るは、却て後日の損を招く。〔諺語〕

おほとり-あゆみ 大鳥步【名】大またに步むこと。ゆくりゆくりと步み出でたる有樣は」

おほ-とりうち 大鳥打【名】とりうち（鳥打）を見よ。

おほ-とりげ 大鳥毛【名】鷹の羽を栗の毛毬（ガ）のごとき形に大きく作りて、馬じるし又は槍の鞘とせるもの。其色「丹羽左京かうのとの、ゆゆしかりける參觀を。黑牡丹ねるやねりそのおほとりげ」

おほとり-けいすけ 大鳥圭介【名】〔人〕男爵。樞密顧問官。舊幕府の臣。播磨國赤穗の人。維新の際、榎本武揚等と函館に脫走し、軍敗れて歸順す。日清戰爭破裂の際、朝鮮公使として折衝に力む。明治四十四年薨ず。年七十九。

おほとり-じんじや 大鳥神社【名】和泉國泉北（ホクク）郡鳳（オホトリ）村大字大鳥に鎭坐せる官幣大社。當國の一宮。祭神は大鳥連（オホトリむらじ）の祖、天兒屋根（アメノコヤネ）命なりとも、日本武尊なりともいふ。

おほとり-じやう 大鳥城・鵬城【名】岩代國信夫（シノブ）郡飯阪（イヒザカ）町にある城。治承年中、藤原秀衡の族、佐藤基治（繼信・忠信の父）の據住せしところ。俗稱、丸山城。

おほ-とりとまらず 大鳥不止【名】〔植〕へびのぼらず（蛇不登）に同じ。

おほとり-の 大鳥の【枕】鳥といふ緣より、はがへ（羽交）にかけていふ。萬葉「おほとりのはがへの山にわが戀ふる妹はいますと」

おほ-とる 【動四自】ひろがり亂る。〔古語〕萬葉「葛花にはひおほどれるくそかづら斷ゆることなく宮づかへせむ」

おほ-とる 【動下二自】〔一〕前條に同じ。〔古

語」源氏「髪のすその、にはかにおほどれたるやうに」■おほどくに同じ。〔古語〕源氏「おほどれたる聲して」

おほどろどろ 大ごろごろ【名】『どろどろは雛子の音』芝居の雛子(ハヤ)の一。どろどろの更にはげしきもの。幽靈の現るる時などに用ふ。

おほな 大名【名】廣きとなへ。總名。(小名に對して)〔古語〕

おほな-おほな 【副】おふなおふなに同じ。〔古語〕

おほ-なか 大中【名】杉原紙の一種。縱は一尺八分・横は一尺五寸のもの。

おほ-なかぐろ 大中黑【名】■切生(キリ)の一種。上下白くして、中ほどの大部分が黑色なるもの。■紋所の一。中黑の、中央の線の太きもの。ひとつひきりやう。太平聖「大中黑と二つ引兩と二つの旌を入れかへ入れかへ、東西に靡き」

おほ-なかぐろ 大中黑【名】■切生(キリ)の一種。上下白くして、中ほどの大部分が黑色なるもの。

おほ-なかごろ 大中白【名】切生(キリ)の一種。上下黑くして、中ほどの大部分が白色なるもの。

大中白の矢【句】大中白の羽にて矧(ハ)ぎたる矢。

おほなかとみ 大中臣【名】なかとみ(中臣)を見よ。

おほなかとみよしのぶ 大中臣能宣【名】〔人〕歌人。梨壺五人の一。祭主賴基の子。後撰集の撰者。正四位上・神祇大副に至る。正暦二年卒す。年七十。

おほ-ながれ 大流【名】『おほ(大)は敬意の接頭語。ながれ(流)を見よ』貴人の飲殘して銚子の中に入れ、臣下などに賜ふ酒。

おほ-なげだし 大投出【名】縫針の一種。最も太く長きもの。雜巾針。

おほなご 凡子【名】貴族ならぬ普通の人の子。〔古語〕

おほ-なし 大無【名】著物の仕立方の一。筒袖の類なるべしといふ。世間手代氣質「大男、紺のおほなしに、紺の股引」

おほ-なだい 大名題【名】■芝居の脚本の總體の標題。(小名題に對して)■大名題を記したる芝居の看板。なだいかんばん。

一枚看板。

おほ-なづな 大薺【名】〔植〕ぐんばいなづな〔軍配薺〕に同じ。

おほ-なでつけ 大撫附【名】總髮をなでつけて、後に垂れたるものなるべしといふ。

おほ-なほし 大直【名】■大形の美濃紙。■土藏の壁の上塗に砂漆喰(シツ)を塗ること。

おほ-なほび 大直日【名】■なほらひ(直會)に同じ。〔古語〕■次條の略。

おほなほび-の-かみ 大直日神【名】天照大御神の和魂(ニギミタマ)の大神。凶事を直して吉事となしたまふといふ。おほなほび。

おほ-なほみ 大直日【名】なほらひ(直會)に同じ。〔古語〕神樂「みや人のしでは榮ゆるおほなほみいざわがともに神さかもどれ」

おほ-なみ 大波【名】大なる波。高く寄せくる波。(小波に對して)

おほなみ-の-いけ 大浪池【名】〔地〕大隅國姶良(アヒ)郡牧園(マキソ)村にある池。霧島山中の火山湖。東西三百間・南北二百間。その形甚だ奇、土人種種の神異を傳ふ。

おほなむち-の-みこと 大己貴命・大穴牟遲命【名】おほくにぬしのかみ(大國主神)に同じ。

おほ-なんど 大納戸【名】■大なる納戸。■(特に)江戸城中に在りし一室。長持・箪笥その他の諸器具及び諸侯よりの獻上物の臺・雜物等を納む。(小納戸に對して)

おほ-なんぶ 大南部【名】〔地〕陸中國盛岡の別稱。

おほ-なめ 大滑・大屬脊【名】はだつけ(膚「附」)に同じ。

おほ-なめ 大嘗【名】次條の略。〔古語〕

おほなめ-まつり 大嘗祭【名】だいじやうゑ(大嘗會)に同じ。

おほなもち-の-みこと 大名持命【名】おほくにぬしのかみ(大國主神)に同じ。

おほ-なら 大栢【名】〔植〕殼斗(カク)科に屬する落葉灌木。各地の山中に自生す。幹の高さ數丈。葉は大にして倒卵形、粗き鋸齒を有し、葉柄あり。雌雄同株にて、春季に花を開く。のいしなら。みづなら。まなら。

おほ-なり 大成【名】果實の數多くみのること。

おほ-にし 大西【名】十一月・十二月の頃に吹く風。(畿内中國の船人の語)

おほにし-さうざん 大西操山【名】〔人〕おほにしはじめ(大西祝)に同じ。

おほにし-じやう 大西城【名】いけだじやう(池田城)に同じ。

おほにし-じやうせい 大西淨清【名】〔人〕鑄物工。茶の湯の釜を製するに妙を得たり。天保二年歿す。

おほにし-ちんねん 大西椿年【名】〔人〕畫家。通稱は行之助、字は大壽、運霞堂楚南と號す。江戸の人。幕府米倉の吏として淺草藏前に住む。畫を初め渡邊南岳に學び、後、谷文晁に從へり。筆致輕淡、特に魚介に長ず。嘉永四年歿す。年六十。

おほにし-は 大西派【名】大西閑齋の創めたる茶道の一派。もと石州派より出づ。

おほにし-はじめ 大西祝【名】〔人〕哲學者。文學博士。本姓は木全(ダキマ)。操山と號す。岡山の人。同藩大西氏の家を繼ぐ。東京帝國大學卒業後、大學院に入り、傍ら早稻田專門學校に教授す。後、獨逸に留學し、歸朝後、京都理工科大學講師となり、文科大學の創立事務を囑託せられ、明治三十三年歿す。年三十七。「大西全集」七冊あり。

おほ-にだて-どの 大二條殿【名】〔人〕ふぢはらのりみち(藤原敎通)に同じ。

おほ-には 大庭【名】家の前面の廣き庭。おほば。(多くは禁中の紫宸殿の前のにいふ)(小庭に對して)

おほ-にふだち-どの 大入道殿【名】〔人〕おほはらかねいへ(藤原兼家)に同じ。

おほ-にへ 大贄【名】太古、山海の國國より朝廷に貢獻せし方物。〔古語〕

おほ-にへ 大嘗【名】『にへは贄の義』■だいじやうゑ(大嘗會)に同じ。〔古語〕■つと。あらまき。苞苴。〔古語〕和名「苞苴、於保邇倍。俗云、阿良萬岐、裹二魚肉一也」

おほ-にへ-まつり 大嘗祭【名】だいじやうゑ(大嘗會)に同じ。

おほ-にもつ 大荷物【名】■大なる荷物。■貨車にて運送する貨物。(小荷物に對して)

おほ-にら 大韮【名】〔植〕韮の一種。葉の

おほ-にれ 大楡【名】〔植〕はるにれ(春楡)に同じ。

おほ-ぬ 大野【名】おほの(大野)に同じ。〔古語〕

おほぬ 大野【名】〔地〕越中國にありし原野。今の高岡市より放生津(ハウジヅ)邊まで亘りしものならんといふ。おほぬぢ(大野路)參照。

おほ-ぬき 大貫【名】〔建〕大なる貫(キス)。杉材にて、長さ二間・幅四寸・厚さ一寸。

おほぬき 大貫【名】〔地〕常陸國東茨城(シヒイバラキ)郡にある町。木卸(ロシオ)川の小流を挾んで磯濱町に接す。海に臨む。

おほ-ぬきて 大抜手【名】水泳術の一。水を蹴つつ、手にて水を切りて進むもの。

おほ-ぬけ 大抜【名】錢六十四文の稱。(小抜に對して)〔昔の芝居茶屋の隱語〕

おほ-ぬさ 大幣【名】■大串に附けたる幣帛(ヌサ)。祓の時に用ふ。一說に、ぬさ(幣)の美稱。〔大麻〕〔古語〕■『枕詞おほぬさの(大幣の)より轉じていふ』引く手數多(アマタ)なること。人望のすぐれたること。〔古語〕大和「おほぬさとなりぬる人の悲しきはよるせともなき鹿ぞ鳴くなる」

おほ-ぬさ 【貌】おほやう。おほまか。おほどか。おほのさ。〔古語〕古今「われをのみ思ふといはばあるべきをいでや心は大ぬさにして」

おほぬさ-の 大幣の【枕】大幣は、大祓の果てたる時、人人つどひ引取りて、その身を撫づる事あるより、ひく(引く)にかけていふ。古今「おほぬさの引く手あまたになりぬれば思へどえこそたのまざりけれ」

おほ-ぬすびと 大盜人【名】■大仕掛の盜賊。■人を罵る語。竹取「かぐや姫てふ大ぬすびとのやつが」

おほぬぢ 大野路【名】〔地〕大野(オホヌ)の道路。おほぬ(大野)參照。萬葉「おほぬぢは繁道(シヂ)のもりぢしげくとも君しかよはば路は廣けむ」

おほ-ぬま 大沼【名】■大なる沼。■〔地〕羽前國あかぎこ(赤城湖)の俗稱。■〔地〕羽前國西村山郡大沼村に在る沼。周回凡そ十五町。中に數多の浮島あり、風の吹くにつれ

て浮游す。別稱、浮島潟。 四〔地〕おんねぬま（恩根沼）の別稱。

おほぬま 大沼【名】〔地〕岩代國十郡の一。郡役所を高田町に置く。

おほぬま-ちんざん 大沼枕山【名】〔人〕江戸の詩人。名は厚、通稱は捨吉、字は子壽。枕山はその號、又、黑黑堂と號す。菊池五山の門人。明治二十四年歿す。年七十四。

おほぬ-ろ 大野【名】『ろは接尾語』**おほの**（大野）に同じ。〔古語〕萬葉「面かたの忘れむしだは おほぬろにたなびく雲を見つつ忍ばむ」

おほね 大根【名】一〔植〕だいこん（大根）に同じ。〔古語〕 草「うるひつきのおほね」 二事物のおこり。もと。 三太き矢の根。

おほね 大禰【名】上古の官職。大臣（オホオミ）と宿禰（スクネ）との中間に位せしもの。〔古語〕

おほね-むし 蝗【名】〔動〕いなむし（稻蟲）に同じ。〔古語〕 和名「蝗、於保禰无之」

おほね-ねら【名】〔動〕大鼠。おねら。 風俗文選「大ねら・小ねら、はた廿日鼠と名のり」

おほ-ほの【名】おもの（御物）〔日〕に同じ。〔古語〕 紀「飯、オモノ」

おほ-ほの 大野【名】一大なる野。廣き野。おほぬ。おほぬろ。 源氏「女郎花咲ける大野をふせぎつつ心せばくやしめを結ふらん」 二〔地〕大和國宇陀（ウダ）郡内牧村大字内牧にある原野。

おほの 大野【名】一〔地〕越前國八郡の一。郡役所を大野町に置く。 二〔地〕飛騨國三郡の一。郡役所を高山町に置く。 三〔地〕豐後國十郡の一。郡役所を三重町に置く。 四〔地〕美濃國の舊郡の一。明治二十九年その大部分を池田郡と合せて揖斐（イビ）郡とし、その餘を本巢（モト）郡に合す。 五〔地〕尾張國知多郡にある町。伊勢灣に臨み、汽船各地と交通す。海水浴場として知らる。 六〔地〕越前國大野郡にある町。附近に大野城址及び大山城址あり。土井氏の舊藩地。 七〔地〕しもかないは（下金石）を見よ。 八〔地〕筑前國筑紫郡の御笠（ミカサ）川に跨れる村。附近の大野山（四天王寺山）に大野城址あり。九州鐵道の一驛。 九〔地〕三河國八名（ヤナ）郡にある町。蓬萊寺山の東南。 十姓氏の一。皇別にして、姓（カバネ）は朝臣（アソン）。豐城入彥（トヨキイリヒコ）命四世の孫、大荒田別（オホアラタワケ）命の裔。

おほ-のあざみ 大野薊【名】〔植〕野薊の變種。各地の山野に自生す。莖の高さ數尺。葉は長楕圓形にして、羽狀に深裂す。花は、夏、淡紫色にて、頭狀花序に排列して開く。

おほの-あづまびと 大野東人【名】〔人〕武將。大野果安（ハタヤス）の子。陸奥鎭守府將軍となり、蝦夷を討ちて功あり。天平十一年藤原廣嗣の叛せるとき、大將軍となりて討伐し、その功を以て從三位に敍せらる。天平十四年薨ず。

おほ-のうら 大浦【名】〔地〕伊勢國にありといふ海岸。 夫木「おほのうらに片枝さしおほひなる梨のなりもならずもかねてかたらはん」

おほ-のか 大のか【貌】おほどか（大どか）に同じ。〔古語〕 宇治「あさましうおほのかにも言ふものかな」

おほ-のがひ 大野貝【名】〔動〕瓣鰓（ベンサイ）類に屬する軟體動物。殼は楕圓形をなし、長さ二三寸、表面は暗灰色にして、內面は白く、後端狹く、常に口を開きて長水管を出す。我が國各地の沿海河口に產す。

おほ-のき 大軒【名】〔建〕二軒（ハタキ）屋根の、地垂木（ムダキ）ある方。（小軒に對して）

おほの-くらうべゑ 大野九郎兵衛【名】〔人〕淺野長矩の臣。貪慾にして、貨を惜しみ、義を知らず。同士、復仇を圖るに當り、事に託して避け、大に世人に憎まる。終るところを知らず。

おほ-のさ【貌】おほぬさに同じ。〔古語〕 懷竹抄「むかしの譜は、おほのさにて、末代の人、心得がたし」

おほ-の-じぜまろ 多自然麿【名】〔人〕歌舞中興の祖、又、唐樂に通ず。眞觀中、外從五位下・右近衛將監兼甲斐守に任ぜらる。仁和二年歿す。

おほの-しやちく 大野洒竹【名】〔人〕俳人。名は豐太。肥後國の人。醫學士。大野病院長たり。夙に俳句を好み、遂に俳名は醫名を掩ふに至る。大正二年歿す。年四十四。

おほの-せっさい 大野拙齋【名】〔人〕越中國の儒者。名は鼎、字は國寶、通稱は十郎。京師に至りて名家に出入し、造詣深く、諸侯召せども應ぜず。文政十三年歿す。年五十九。

おほの-でめは 大野出目派【名】〔美〕『是閑、後に大野出目と稱せしよりいふ』假面（メン）の彫刻家の一派。是閑の系統に屬するもの。

おほ-のはら 大野原【名】〔地〕駿河國駿東郡にある原。東西三里餘・南北一里餘。

おほの-はるなが 大野治長【名】〔人〕豐臣氏の臣。秀吉及び秀頼に仕ふ。修理大夫と稱す。柔弱遊惰にして、酒色に耽る。大阪冬の役に、東軍と和を結び、後又、再興を謀りて成らず、元和元年歿す。治長は、「治良」とも書く。

おほ-のみ 大飲【名】酒を多量に飲む人。

おほ-のみこみ 大呑込【名】十分に聽入ること。よく合點すること。〔俚語〕

おほのみなと-じんじや 大野湊神社【名】加賀國石川郡大野町（もとの下金石（シモカナイシ）町）に鎭坐せる縣社。祭神は速秋津彥（ハヤアキツヒコ）神。

おほ-の-やすまろ 太安麻呂【名】〔人〕學者。神武天皇の皇子神八井耳（カンヤヰミミ）命の後裔。文武天皇の朝、從四位上・民部卿に拜せらる。博學にして、古典に通じ、能く文を屬す。和銅四年文武天皇の勅を奉じて、古事記三卷を撰み、養老七年歿す。

おほの-ゆきひこ 大野幸彥【名】〔人〕畫家。薩摩國の人。明治の初年、工部省美術學校に入りて、洋畫をサンジョバニイに學ぶ。後に美術會と名づくる洋畫家の團體を設け、また美術學校を起ししが、機運未だ熟せずして振はざりき。門下に知名の畫家多く出づ。

おほば 大婆【名】〔人〕烈婦。今川氏の臣河村善右衛門の妻。後、家康に召されて、秀忠の乳母となる。その子罪あり、秀忠これを宥さんとせしに、大婆遮りて曰く、大法は曲ぐべけんやと。

おほ-ば 大場【名】一廣大なる場所。賑かなる市街。おほばしよ。 世間子息形氣「見知らぬ他國の大場に住居し」 二花合せにて、はじめ場札を撒きたるとき、桐又は雨の二十ものとを除きて、その他の二十ものが、場札の中に出づること。落實（ナガシ）などに相違あり。（小場（ハバ）・絕場（ハバ）に對して）

おほ-ば 大庭【名】おほには（大庭）の略。〔古語〕 紀「庭、オホバ」

おほば 大庭【名】一〔地〕美作國の舊郡の一。明治三十三年眞島（マシ）郡と合せて、眞庭（マニ）郡とせり。 二〔地〕相摸國高座（カウザ）郡明治村の大字。茅ゲ崎（チガサキ）停車場の北なる丘上。 三姓氏の字。鎌倉權五郎景政の裔。前記相摸國大庭を、景政、伊勢御領に寄進して大庭御廚（リヤク）と呼び、子孫その下司職を奉じて、大庭を氏とするに至れるなり。

おほば 祖母【名】『大（オホ）母（ハハ）の約』父母の母。ばば。祖母（ハハ）。〔古語〕

おほ-ば 大葉【名】一植物のその種類中にて、特に大なる葉の生ずるもの。「大葉馬の鈴草」「大葉草ふぢ」 二〔植〕ふき（蕗）に同じ。

おほ-ばか 大馬鹿【名】一甚しきばか。おほたはけ。 二人を罵る語。おほたはけ。

おほば-かげちか 大庭景親【名】〔人〕武將。通稱は平三郎。相摸國の人。平氏に屬して、源頼朝を石橋山に討つ。後、軍利あらずして降り、つひに斬らる。

おほば-がし 大葉樫【名】〔植〕あかがし（赤樫）に同じ。

おほ-はかせ 大博士【名】みやうぎやうはかせ（明經博士）に同じ。 夏山雜話「四道の博士、この外、天文・陰陽醫道等、博士あれども、うちまかせては、博士とばかりいへば、明經博士のことなり、これを大博士といふ。清原氏の大博士になりたるを、傳博士といふ。左傳を宗とする故なり。中原氏の大博士になりたるを、禮博士といふ。禮記を宗とする故なり」

おほば-がらし 大葉芥【名】〔植〕おほがらし（大芥）に同じ。

おほばかり-の-つるぎ 大葉刈劍【名】味鋤高日子根（アヂスキタカヒコネ）神の持ちし劍。

おほば-こ 大葉子・車前【名】〔植〕車前科

に屬する多年生の草。春の初め、宿根より生ず。葉は長さ三四寸の長楕圓形。花は莖の頭に穗の狀をなして開く。葉は食用となり、種子は藥用に供せらる。又、葉を蛙の死骸に覆へば蘇生すとて、蛙葉（ルクビ）ともいふ。おんばこ。しかみおほばこ。

おほばこ-くわ 車前科【名】〔植〕顯花植物・雙子葉類・合瓣花區に屬する一科。一年生又は多年生の草。溫帶地方に廣く分布す。我が國には車前の類を產するのみ。

おほばこ-のかみ 車前神【名】車前（バオホコ）は、その葉を蛙の死骸に覆ひおけば蘇生すといふより、神に見たてていふ語。〔古語〕「蟾蜍おほばこの神のたすけやなかりけんちざりしことをおもひかへるは」

おほはざま 大迫【名】〔地〕陸中國稗貫（ヒエヌキ）郡にある町。釜石街道の一驛。稗貫川に臨む。大迫城址あり。

おほ-はし 大橋【名】大なる橋。（小橋に對して）萬葉「かたしは川のさ丹塗（ニヌ）の大橋のへゆ」

おほはし-しげまさ 大橋重政【名】〔人〕大橋流書法の祖。通稱は長左衞門。江戸の人。書法を建部傳內に受け、又、尊純法親王に學び、和樣の書をよくし、德川氏の祐筆役となる。寛文十二年歿す。年五十五。

おほはし-じゆんざう 大橋順藏【名】〔人〕

おほはしとつあん（大橋訥庵）に同じ。

おほはしだな 大橋棚【名】**おほせいろうだな**（大西樓棚）に同じ。

おほはし-とつあん 大橋訥庵【名】〔人〕儒者。名は正順、字は周道、通稱は順藏。訥菴はその號。江戸の人。宇都宮藩に仕ふ。慷慨憂國の士。嘉永年間ペルリ來りしとき、攘夷の說を唱導し、幕府の忌諱に觸れて獄に投ぜられ、後、宇都宮の藩邸に幽せらる。文久二年歿す。年四十八。

おほ-ばしよ 大場所【名】**一**廣大なる場所。おほば。**二**ほんばしよ（本場所）に同じ。**三**普通より大なる場合。

おほはし-りう 大橋流【名】和樣の書家の一派。大橋重政及びその子隆慶より起りしもの。

おほはず 大笞【名】無賴。なげやり。〔德川時代の俚語〕

おほはず-もの 大笞者【名】大はずなる人。〔德川時代の俚語〕傾城色三味線「朝未明に、宿をあけて、釜の下の塵も灰も無いやうにしまうて立ちのきける。さやうのおほはず者とも知らず、眞實と思ひ入り」

おほ-はだ 大肌【名】**おほはだぬぎ**（大肌脫）の略。絵本太閤記「鎧ぬぎすて、おほはだになり」

大肌を脫ぐ【句】全部肌を脫（ス）ぐ。

おほはた-じんじや 大幡神社【名】佐渡國佐渡郡外海府（ソトカ）村に鎭坐せる縣社。祭神は大若子（クオホコ）命。

おほはだぬぎ 大肌脫【名】著物を脫ぎて、からだの上部殘らずをあらはすこと。おほかたぬぎ。おほはだ。（俚語）

おほ-ばち 大蜂【名】〔動〕すずめばち（雀蜂）に同じ。

おほはつせ-わかたけ-の-すめらみこと 大泊瀨幼武天皇【名】〔人〕ゆうりやくてんわう（雄略天皇）に同じ。

おほば-つめくさ 大葉詰草【名】〔植〕いはつめくさ（岩詰草）に同じ。

おほばな 大花【名】〔植〕その種類中にて一種特別に大なる花の開くもの。「大花の伊豫かづら」「大花の草牡丹」

おほ-ばなれ 大放【名】〔商〕取引所にて、直段の暴騰又は暴落すること。

おほば-の-まき 大葉槇【名】〔植〕いぬまき（犬槇）に同じ。

おほ-はば 大幅【名】布帛の幅の、木綿幅の二倍なるもの。（中幅・小幅に對して）

おほ-はふり 大祝【名】神職の一。多くの祝を有して各階級を分てる中にて、最も上位にあるもの。

おほ-はま 大濱【名】〔地〕**一**和泉國堺市の海岸にある濱。遊覽・海水浴等に適す。酒樓多し。一名、茅渟（スブ）濱。**二**伊豫國越智（ヲチ）郡近見村にある濱。來嶋（シクル）海峽の隘口。**三**陸奧國東津輕郡油川村の海岸にある濱。

おほはま 大濱【名】〔地〕**一**肥後國玉名郡にある町。菊池川の河口。**二**三河國碧海郡にある町。海に臨み、その海灣を衣ゲ浦といふ。濱船各地と交通す。海水浴場あり。

おほば-みねばり 大葉みねばり【名】〔植〕**一**樺木（ハンノキ）科に屬する落葉喬木。各地の山地に自生す。高さ三丈に及ぶ。樹皮は灰色にして黑色の斑點あり、臭氣を出す。葉は廣卵・銳頭、葉脚はやや心臟形・不整の鋸齒を有す。花は綠褐色にして、雌雄同株、葇荑（ジウテイ）花序に排列し、春の頃開く。よぐそみねばり。**二**やしやぶし に同じ。

おほ-ばん 大鷸・背頂【名】〔動〕涉禽（キヤウ）類に屬する鳥。形大きく、體色黑く、頭の毛は短くして白く、脚と趾とは靑黑く、水邊にありて魚介などを食とす。

おほ-ばん 大判・大板【名】**一**大判金と大判銀との總稱。**二**江戸幕府發行の金貨の一。慶長大判金・元祿大判金・享保大判金・天保大判金・安政大判金などの類。發行の年代によりて種種の名目あり。楕圓形にして、量目は大抵四十四匁一分、表面に十兩後藤の四字と花押とを黑漆にて記す。貴族の儀式・獻上等に用ひしものにして、日常通用せしものにあらず。その一枚は小判十枚にあたるを普通とす。おほばんきん。（小判に對して）**三**紙の通常のより寸法の大なるもの。

おほ-ばん 大番【名】『番は守護の意、大はその職責の重んずべきものなる意』**一**鎌倉時代に、諸國より交替上京して、禁中の護衞と洛中の警護とに任ぜし武士。おほばんやく。**二**おほばんぐみ（大番組）の略。

おほ-ばん-がしら 大番頭【名】大番組の一隊の長たるもの。**二**に同じ。

おほ-ばん-きん 大判金【名】**おほばん**（大判）

おほ-ばん-ぎん 大判銀【名】江戸幕府發行の大判の銀貨。卽ち南鐐大判銀・桐大判銀・橘姫大判銀・大閤葛大判銀などの類。

おほ-ばん-ぐみ 大番組【名】江戸幕府の職制の一。江戸・二條（京都）・大阪の三大城を守りし兵士。江戸にては、府內の巡警をも掌りたり。十二組ありて、常備にて交替す。大番。

おほ-ばん-くみがしら 大番組頭【名】江戸幕府の職制の一。大番頭を佐けて、番衆を率ゐ、その組の大番衆の布告・進達などのことを掌りしもの。

おほ-はんげ 大半夏【名】〔植〕天南星（ナンシヤウ）科に屬する多年生の草。地下の塊莖より葉を叢生す。葉は大形にして二裂せり。初夏、雌雄同株の白花、肉穗花序に排列して咲く。各地に自生す。有毒植物なり。

おほ-ばんし 大半紙【名】大判の半紙。土佐國より產す。

おほ-ばん-しゆう 大番衆【名】鎌倉時代の「大番の人人。

おほ-ばん-せき 大番席【名】江戸幕府の職制の一。扶持高二千石未滿より祿米二百俵までの旗本（ハタモト）。

おほ-ばん-づめ 大判詰【名】江戸幕府の時、幕府使用の茶を詰むる茶壺一箇に就き、茶師に大判一枚づつを賜ひしこと。

おほ-ばん-やく 大番役【名】**おほばん**（大番）**一**に同じ。著聞「大番役に上りし時のことなり」

おほ-ばやなぎ 大葉柳【名】〔植〕楊柳（ヤナギ）科に屬する落葉喬木。葉は長楕圓形にて、鋸齒を有す。花は黃綠色にして、五月頃、葇荑（ジウテイ）花序をなす。我が國北部の河畔に自生す。おほしだれ。

おほ-はやま 大葉山【名】〔地〕紀伊國にある山。萬葉「おほばやまかすみたなびく小夜ふけてわが船はてむとまり知らずも」

おほ-はやり 大流行【名】流行の甚しきこと。だいりうかう。

おほ-はら 大原【名】**一**〔地〕出雲國六郡の一。郡役所を大東（ダイトウ）町に置く。**二**〔地〕上總國夷隅（イスミ）郡にある町。鐵道房總線の一驛。**三**〔地〕山城國愛宕（オタギ）郡にある村。八瀨村の北にありて、八瀨・大原と連稱せらる。四面に山を負ふ。後鳥羽天皇の御陵あり。又光寂院・來迎院・三千院・勝林院等の古刹、その他名所多く、大宇小野（ヲノ）には文德天皇・惟喬（コレ）親王の遺跡あり。歌枕たり。一名、小原（ヲハラ）。小大君集「大原や炭のかしらのなはゆるせこのめに涙うかぶといふなり」**四**〔地〕甲斐國北都留（ツルキ）郡にある村。その大宇猿橋（ケウ）に、我が國三大奇

橋の一なる猿橋(ケエン)あり。鐵道中央本線の一驛。郡役所を置く。町の東南に北上(ガハ)井(イケガハ)郡にある町。五(地)陸中國東磐山脈中の一高峯室根山屹立す。六(地)おほはらの(大原野)を見よ。古今「大原や小鹽(ホシ)の松もけふこそは神代のことも思ひ出づらめ」七姓氏の一。姓(カバネ)は眞人(マヒト)。皇別にして、敏達天皇の孫百濟王(クダラノコニキシ)より出づ。八姓氏の一。本姓は宇多源氏。庭田の分家。權大納言庭田重條の猶子(實は修理權大夫葛岡宣之の第四子)顯榮を祖とす。重德に至りて、明治維新の大業を贊けて功あり、伯爵を授けらる。

大原の雜魚寢(ネザコ)【句】山城國大原にて、毎年節分の夜、江文(エブミ)大明神の拜殿に、郷内の老若男女うち集(ツド)ひて參籠通夜せし風俗。

大原の三寂(サンジャク)【句】山城國大原に住ひし藤原爲業(法名、寂念)・同顯業(法名、寂然)・同爲經(法名、寂超)の兄弟三人。

おほはらーがた 大原形【名】抔の形の一。

おほはらーぎ 大原木【名】おはらぎ(大原木)の同じ。

おほはらーさんみ 大原三位【名】(人)次條

おほはらーしげのり 大原重德【名】(人)勘王家。中納言重尹の子。從三位・參議に至り、文久三年六月勅を奉じて江戸に使し、幕府の弊政を改め、維新後、參與に任ぜられて、新政に參す。世に大原三位として知らる。明治十四年薨ず。年七十八。

おほはらーじふにもんだふしふ 大原十二問答集【名】(書)おほはらだんぎききがきせう(大原談義聞書抄)に同じ。

おほはらーずみ 大原炭【名】山城國愛宕(オタギ)郡大原より出だす炭。

おほーはらたつ 大腹立つ【動四自】甚しく腹立つ。「人人とりこみて、いみじく笑ひけるよと、おほはらだちて」

おほはらーだんぎ 大原談義【名】(佛)淨土宗の祖師法然が、叡山の座主顯眞僧正の請に應じ、弟子三十餘人と共に山城國愛宕(オタギ)郡大原の勝林院丈六堂にて、各宗の學僧永辨・明遍・證眞・智海・貞慶等二百餘人と教理に就きて論難問答し、遂に法然等の勝となりし事蹟。大原問答。

おほはらだんぎ-ききがきせう 大原談義聞書抄【名】(書)大原談義を筆記したるもの。一卷。安居院(アゴ)聖覺の著と傳ふ。一名、大原十二問答集、又は略して大原問答と云ふ。この書の眞僞詳かならず。

おほはらの-にしのみささぎ 大原西陵【名】建禮門院の墓。山城國愛宕(オタギ)郡大原村の寂光院にあり。

おほはらの 大原野【名】(地)山城國乙訓(オトクニ)郡にある村。村の南。西に大原山あり。一名小鹽(ホシ)山といふ。古は、單に大原ともいへり。大原野とは大原の野邊の意なるべし。

大原野の祭【句】山城國大原野神社の官祭。毎年二月上卯日及び十一月中子日に行はれたり。今は四月八日と定む。

おほはらの-しんじや 大原野神社【名】山城國乙訓(オトクニ)郡大原野村大字大原野に鎮坐せる官幣中社。祭神は大和國の春日神社に同じ。藤原氏の氏神にて、春日神社の遠きを煩ひて、嘉祥三年(一説、延曆遷都の時)、ここに移し祀れり。二十二社の一。

おほはらの-にしのみねのへ-のみささぎ 大原野西嶺上陵【名】淳和天皇の御陵。山城國乙訓(オトクニ)郡大原野村大字大原野勝持寺の西嶺即ち大原山の頂にあり。一名、大原山陵。

おほはらの-みささぎ 大原陵【名】一順德天皇の御陵。山城國愛宕(オタギ)郡大原村大字勝林院に在り。天皇佐渡國にて崩ぜられ、遺骨をここに藏め奉れるなり。二おはらほだのみさぎ(大原法華堂陵)に同じ。

おほ-ばらひ 大祓【名】次條に同じ。

おほ-ばらへ 大祓【名】昔、六月と十二月との晦日に、親王はじめ群臣を朱雀門に會して行ひし神事。臣民一同の罪穢を祓ふために、今も宮中・各神社にて行ふ。又、大嘗祭・大神宮奉幣・齋王卜定又は疫病災變等の際にも、臨時に行はれしことあり。おほばらひ。おほばらへ・まつり。みそぎばらへ。六月行ふものは、特に夏祓(ナツバラヒ)・六月祓(ミナヅキ)ノ祓・夏越(ナツコシ)ノ祓ともいへり。

大祓の詞【句】大祓の時に讀上ぐる祝詞(トノリ)。古は中臣(ナカトミ)氏これを讀みしより、中臣の詞とも中臣の祭文とも云へり。今も、各神社にて、神官これを讀む。大祓の使【句】大嘗祭の年の八月上旬に、五畿・七道に派遣せられ、諸國の境界にて、諸の穢惡を祓ひ除きし使。

おほばらへ-かい 大祓解【名】(書)大祓の詞を片假名にて註せるもの。森川安範の著。漢土の例なども多く引用せり。

おほばらへのことば-ごしやく 大祓詞後釋【名】(書)大祓の詞につき、賀茂眞淵の祝詞考の說を本とし、その考の及ばざる點又は誤を正して註解せるもの。本居宣長の撰。附錄に、他の祝詞の内に思ひよれることどもを記せり。

おほばらへ-まつり 大祓祭【名】一みそぎまつり(御禊祭)に同じ。二おはらへ(大祓)に同じ。

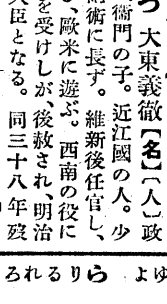
おほはら-ほだら-の-みささぎ 大原法華堂陵【名】後鳥羽天皇の御陵。山城國愛宕(オタギ)郡大原村にあり。天皇隱岐國にて崩ぜられしを、ここに法華堂を建てて、遺骨を藏め奉れるなり。但し法華堂は、今存せず。大原陵。

おほ-はらまき 大腹卷【名】鎧の腹卷の、大形にこしらへたるもの。盛衰記「大はらまきに、左右の小手さし」

おほはら-まもり 大原眞守【名】(人)鍛工。伯耆國の人。嵯峨天皇の命を受けて、御刀を作る。又、平氏代代の重寶なる拔丸(マスミ)も、この人の作なり。

おほはら-みこ 大原巫【名】あづさみこ(梓巫)を云ふ。(京都の語)

おほはら-め 大原女【名】山城國愛宕(オタギ)郡大原村地方より出づる婦女。薪又は花などを頭に載せ、日毎に京都市中を賣りあるく。おはらめ。おほはら(大原)三參照。



(めらはほお)

おほはら-もんだふ 大原問答【名】一おほはらだんぎ(大原談義)に同じ。二(書)おほはらだんぎきがきせう(大原談義聞書抄)に同じ。

おほはらーやすつな 大原安綱【名】(人)大原鍛工の祖。左馬頭大五郎太夫と稱す。伯耆國の人。弘仁頃の人。

おほはら-やま 大原山【名】(地)おほはらの(大原野)を見よ。後拾遺「姫小松おほはら山のたねなれば千とせはただにまかせてを見ん」

おほはらやま-の-みささぎ 大原山陵【名】おほはらのにしのみねのへのみささぎ(大原野西嶺上陵)に同じ。

おほ-はるしやぎく 大波斯菊【名】(植)『はるしやぎく(波斯菊)を見よ』こすもすに同じ。

おほ-ひ 苜蓿【名】(植)うまごやし(苜蓿)に同じ。おほひのみ。和名「苜蓿。蘇敬曰、苜蓿、於保比、莖葉根、並寒者也」

おほひ 被・覆【名】おほふもの。おほふこと。源氏「物のおほひ・しき物・しとねなどのはしどもに」

おほひ 大飯【名】(地)若狹國の三郡の一。郡役所を高瀨村に置く。

おほひ-あみ 被網【名】水底に投下し、魚類を被ひて捕る網。主として投網なり。

おほひえ 大比叡【名】(地)山城國比叡山の峯の高き方。(小比叡に對して)

おほひえ-じんじや 大日吉神社【名】近江國滋賀郡坂本村に鎮坐せる官幣大社。祭神は大物主(オオモノヌシ)神。

おほひ-がさ 覆笠【名】かぶりがさ(被笠)に同じかるべしといふ。(古語) 夫木「世を捨てぬ人のさまかはおほひがさかけぬばかりはかごとなれども」

おほひがしぎてつ 大東義徹【名】(人)政治家。小西新左衛門の子。近江國の人。少時武を好み、砲術に長ず。維新後任官し、岩倉具視に從ひ、歐米に遊ぶ。西南の役に西郷に與し、罪を受けしが、後赦され、明治三十一年司法大臣となる。同三十八年歿す。年六十四。

おほひ-がひ 覆貝【名】貝おほひに用ふる「貝」。

おほひ-がみ 覆髮【名】馬の額髮。

おほ-ひき 大引【名】大なるひき合せ紙。

おほ-びき 大蟾蜍【名】〔動〕ひきがへる（蟾蜍）を云ふ。〔上野國の方言〕

おほ-びき 大引【名】家の床板（イタカ）を支ふるために、その下に渡す横木。をびき。

おほ-ひきだし 大引出【名】箪笥（タンス）などの、大なるひきだし。天の網島「おほひきだしの錠あけて」

おほ-ひきめ 大蓁目【名】鰺（リヤウ）の一種。蓁目の長大なるもの。（小蓁目に對して）

おほ-ひきりやう 大引兩【名】ひきりやう（引兩）を見よ。「しの略儀なるもの。

おほ-ひきわたし 大引渡【名】膳部の引渡

おほ-ひげ 大髭【名】長くして多き髭。字音「大ひげをさげて、のけざまに伏して倒れたり」

おほ-びけ 大引【名】■〔商〕取引所の立會（アヒ）の終り。おほとん ■〔商〕おほびけね（大引値段）の略。■夜の一二時頃、即ち店を閉づる時刻。（中引に對して）（東京の遊廓の語）

おほびけ-さうば 大引相場【名】〔商〕次條に同じ。

おほびけ-ねだん 大引値段【名】〔商〕立會（アヒ）の最後の時の直段。寄附（ヨリツキ）のみにて賣買起らざる場合には、當日の寄附直段は大引直段となる。おほびけ。おほびけさうば。〔取引所の語〕

おほひこ-の-みこと 大彦命【名】〔人〕孝元天皇の皇子。母は鬱色謎（ウツシ）皇后。崇神帝の十年將軍の印綬を受く。所謂四道將軍の一。武埴安彦（ヤスヒコ）の叛するや、皇子彦國葺（ヒコクク）命と共にこれを誅す。

おほ-びさし 大庇【名】ひろびさし（廣廂）に同じ。

おほ-ひざまづき 大跪【名】小膝を突くに對して、正しく跪くこと。盛衰記「大ひざまづき小膝突、入日を返す合掌の手」

おほ-びし 大菱【名】刀の柄（カ）に柄絲（イト）を卷きあはせたる間に、大なる菱形の目を作るもの。（小菱に對して）

おほ-ひじり 大聖【名】德行共に著しく秀でたる高僧。

おほ-びたひ 大額【名】男子の作額（ビタヒ）の一種。鬢を小く取りて、額を廣く作りたるもの。色道大鑑「額は、大びたひに百會（ヒヒエ）の穴までとりあげ、角を錐先の如く尖らせて拔き上ぐること」

おほひ-づかさ 大炊寮【名】おほひれう（大炊寮）に同じ。竹取「おほひづかさの飯かしぐ屋の棟の」

おほ-ひっしき 大引敷【名】大なるひっ敷。

おほ-ひでり 大旱【名】甚しき日でり。おほでり。

おほ-ひと 大仁【名】〔地〕伊豆國田方（タガタ）郡田中村の大字。鐵道駿豆線の終點。南一に里して修善寺（シュゼン）温泉に至る。

おほ-ひど 大炊戸【名】〔地〕おほねど（大井戸）に同じ。

おほ-どの 大炊殿【名】邸宅の一部にて、飯を炊ぐ所。〔古語〕源氏「うしろの方なるおほひどのと思しき屋に移し奉りて」

おほ-びね 大陳【名】ひね（陳）■を見よ。

おほ-ひ-の-かみ 大炊頭【名】大炊寮の長官下に助（スケ）・允（ジヨウ）・屬（サカン）あり。

おほ-ひ-の-つかさ 大炊寮【名】おほひれう（大炊寮）に同じ。

おほ-ひ-の-み【名】〔植〕うまごやし（苜蓿）に同じ。

おほ-ひ-の-みかど 大炊帝【名】〔人〕じゅんにんてんわう（淳仁天皇）に同じ。謠曲「檜垣」「これは、おほひのみかどに仕へ奉る臣下なり」

おほ-ひ-の-みかど 大炊御門【名】■〔人〕前條に同じ。■姓氏の一。花山院家と同祖にて舊清華。藤原師實の三男經實を祖とす。明治維新後、侯爵を授けらる。

おほひのみかど-つねむね 大炊御門經宗【名】〔人〕朝臣。經實の子。平治の亂の後、元舅を以て親任せらる。朝權に私し、平治二年阿波に流されしが、後召還せられ、左大臣に至る。時の人呼んで阿波の大臣といふ。文治五年薨ず。年七十一。

おほ-ひ-の-もん 大炊門【名】いくほうもん（郁芳門）に同じ。

おほ-ひば 覆羽【名】鳥の翅を廣げて覆ふこと。〔古語〕萬葉「あまとぶやかりの翼の覆羽のいづこ洩りてか霜のふりけむ」

おほ-ひばり 大雲雀【名】〔動〕雲雀の一種。形貌・羽色など、通常のに異ならず、ただ體軀の大なるのみ。遠く千島以北に棲む。おにひばり。

おほ-ひ-べ 大炊部【名】大炊寮の下官。

おほ-ひぼ 大紐【名】太くて大なる紐。丹波興作「こい紅のおほひぼを、たかだかと結びしは、さかりの牡丹に異ならず」

おほひみかど-さいゐん 大炊御門齋院【名】〔人〕しきこないしんわう（式子内親王）に同じ。

おほひみかど-の-みや 大炊御門宮【名】〔人〕これあきらしんわう（惟明親王）に同じ。

おほ-ひ-みす 覆御簾【名】格子の外に懸くる御簾なりといふ。〔古語〕

おほ-ひんがし 大東【名】正しく東にあたるところ。まひがし。正東。〔古語〕字音「江冠者が家の大ひんがしにある、いもじが妻」

おほ-ひめ 大姫【名】姉の姫。〔古語〕

おほ-ひめぎみ 大姫君【名】前條の敬語。〔古語〕榮花「おほひめぎみを、いかで内に參らせ奉らんとおぼす」

おほ-ひめごぜん 大姫御前【名】前條に同じ。〔古語〕字音「大ひめごぜんの紅は奉りたると語りければ」

おほ-ひ-もの 被物【名】うはおほひ（上被）に同じ。〔古語〕

おほ-びやうし 大拍子【名】芝居の囃子（ハヤシ）の一種。大太鼓の音を加ふるものにて、宮地・神事の場に用ふ。

おほ-ひ-やき 大樋燒【名】加賀國金澤市より製出する赤黃色の陶器。天和の頃、京都の陶工樂（ラク）長左衞門の市内大樋町に開窯して、茶器を製せしに始まり、今は一般の陶器を製出す。

おほ-びやくえ 大白衣【名】鎧の下に著る白き小袖。平治「大白衣にて、這ふ這ふ仁和寺へまゐり」

おほ-びやくしやう 大百姓【名】多く田畑などを所有する百姓。豪農。冥途飛脚「もとは大和新口（ニノクチ）村勝木孫右衞門といふ大百姓の一人子」

おほ-びやくにち 大百日【名】芝居の髮（カミ）の一種。百日かづらの、髮長くして立ちて、惡相を現はせるもの。

おほ-ひら 大平【名】■おほひらわん（大平椀）の略。■芋・蓮根・蒟蒻（コンニヤク）などに鳥肉を加へて、汁多く煮たる食品。

おほ-びら 大平【貌】憚り隱すことなきさま。おほっぴら。公然。〔俚語〕

おほひら-がは 大平川【名】〔地〕三河國額田（ヌカタ）郡にある川。本宮（ホングウ）山の谷より發し、矢作（ヤハギ）川に入る。長さ約九里。

おほひら-こばん 大平小判【名】金銀尙古品の一種。表に「太平」の二字の極印あり。他の小判と異なりて、形、横楕なり。

おほ-ひらた 大平田【名】ひらたぶね（平田船）を見よ。

おほひら-づくり 大平作【名】魚類の切り方の一。皮部を切去り、庖丁を寢せ加減にして作ること。

おほひら-やま 大平山【名】〔地〕下野國栃木（キトチ）町の西約一里にある山。高さ一三〇尺。元治元年武田耕雲齋等の兵を擧げし地。一名、太平山（ヤマ）。

おほひらやま-じんじや 大平山神社【名】下野國大平山の中腹に鎭坐せる縣社。祭神は瓊瓊杵（ニニギ）尊。

おほひら-わん 大平椀【名】大なる平椀。二の膳に据ふ。おほひら。

おほ-びる 大蒜【名】〔植〕にんにく（忍辱）に同じ。〔古語〕和名「大蒜、本草云、葫、於保比流、味辛溫、除風者也」

おほひるめむち-の-かみ 大日孁貴神【名】あまてらすおほみかみ（天照大御神）に同じ。

おほ-ひれ 大領巾【名】東遊（アヅマアソビ）の曲名。建武年中行事「おほひれ反しうたひて、輕にかへりて、勸杯・御神樂などあり」

おほ-ひれう 大炊寮【名】古、宮内省に屬して、御料田の米粟を以て禁中の食に供すること、及び諸司の食料を分給すること等を掌りし役所。頭（カミ）・助（スケ）・允（ジヨウ）・屬（サカン）の四部官以下の職員を置かれたり。おほひのつかさ。おほづかさ。

おほ-ひろ 大廣【名】■奉書紙の一種。縱一尺四寸餘・横一尺九寸餘なるもの。三束を一行李とす。■おあがりすぎはら（御上杉

原）に同じ。

おほ-びろま 大廣間【名】一特に廣大なる廣間 二江戸城中の廣大なる座敷。國持大名・御三家の庶流及び表大名四位以上の者の登城の時、詰めしところ。又、大奥にもありたり。

おほふ 覆ふ・被ふ・蔽ふ・掩ふ【動四他】一上よりかけふさぐ。遮りかくす。おふ。おほほる。二かぶす。かうむらす。きす。おふ。三遍くつつむ。壓倒す。「名聲、四海をおほふ」四庇護す。かばふ。五包み隱す。隱蔽す。

おほぶ 大府【名】〔地〕尾張國知多（チタ）郡にある村。鐵道東海道本線と武豐（トヨク）線との分岐點たる一驛。

おほ-ぶう 大風【貌】たかぶりたるさま。おほへい。尊大。倨傲。〔俚語〕

おほ-ぶえ 太笛【名】大なる笛。東鑑「右近將監多好レ節、調二進和琴・太笛等一」

おほ-ぶか 大深【名】さんどがさ（三度笠）に同じ。

おほ-ふかし 大蒸【名】薩摩芋のふかしたるもの。ふかしいも。〔寛政頃の話〕

おほ-ふく 大服・大福【名】次條の略。蝶夢「大服や茶筌の下の淡路島」

おほふく-ちや 大服茶・大福茶【名】元旦に、祝儀として、茶を立てて飲むこと。多量に立つるより大服といふを、大福の義に取りて祝ふ。黑豆・山椒などを入れて飲めば、年中の惡鬼を拂ふ効ありと傳ふ。おほふく。

おほ-ふくちゆう 大腹中【名】心の、ひろき

おほ-ふくみ 大含【名】謠曲の含み節の一種。大に含むもの。「み。〔古語〕」

おほ-ぶくろ 大袋【名】ひきおひ。やりこ

おほ-ぶさ 大總【名】一大なるふさ。二あつぶさ（厚總）に同じ。

おほ-ふだ 大札【名】一大なる札。二芝居などの入場券の、終日見物し得べきもの。又、大人の入場券。（小札に對して）三芝居の興行上の一切の出納（ダシヰ）をつかさどる人。即ち興行主の代理者たるもの。

おほ-ぶた 大蓋【名】茶の湯に用ふる釜の蓋の四寸以上のもの。

おほ-ふて 大筆【名】穗さきの太くして長き筆。大字を書くに用ふ。（小筆に對して）

おほ-ぶと 大太【名】をぶと（緒太）の訛。狂言（菊花）「私の居ましたあたりには、おほぶとの金剛がござった」

おほふと-ぼっち 大太ぼっち【名】〔人〕ゆりわか（百合若）に同じ。紫の一本「おほふとぼっちは、百合若のことなり」

おほふな 大船【名】〔地〕相摸國鎌倉郡小坂（コザカ）村の大字。鐵道東海道本線と横須賀線との分岐點たる一驛。古は「粟船」又は「青船」と書きたり。

おほふなつ 大船津【名】〔地〕常陸國鹿島（カシマ）郡豐津村の大字。北浦に臨む。鹿島神宮參詣の船客の上陸地。神宮まで十餘町。

おほふなと-わん 大船渡灣・大船戸灣【名】〔地〕陸前國氣仙（ケセン）郡にある海灣。廣田灣の東北にあたり、尾崎・猿頭（サルガシラ）の間より彎入す。灣内廣く、盛（サカリ）町・赤崎・大船渡・末崎（サキザキ）の諸村これに據る。山岳四面を圍み、碇泊に適す。又、珊瑚・清水以下數箇の島あり。風景に富む。

おほ-ぶね 大船【名】大なる船。大船（タイセン）。（小船に對して）

大船に乘ったやう【句】他の保護・助勢などをたのみにして、心を安んずる譬。親船（オヤブネ）に乘ったやう。〔諺語〕

おほぶね-の 大船の【枕】一大船は、容易に沈むことなく、たのみに思はるるものなるより、たのむ（頼む）にかけていふ。萬葉「おほぶねのおもひたのみてあまつみづあふぎて待つに」二楫取（トカヂ）の意にて、かじりにかけていふ。萬葉「おほぶねのかとりの海に碇おろしいかなる人かものおもはざらむ」三船の泊るところを津（ツ）といふより、つにかけていふ。萬葉「おほぶねのつもりがうらにのらむとはまさしに知りてわが二人ねし」四大船は重くして速かならぬより、ゆくらゆくら・たゆたふ・ゆたにかけていふ。萬葉「おほぶねのゆくらゆくらに思ひつつ」同「ゆふづつのかゆきかくゆき大船のたゆたふ見れば」同「うなばらのみちにのれれやわが戀ひをりて大船のゆたにあるらむ人の子ゆゑに」五海を渡るといふ意にて、わたりにかけていふ。萬葉「おほふねのわたりの山のもみぢばの散りのまがひに」

おほ-ふばこ 大文箱【名】名筆の文などを入れて、黑棚に飾る箱。長さ一尺二寸・幅三寸・高さ二寸六分。

おほ-ぶり 大風【名】おほがた（大形）に同じ。（小風（コブリ）に對して）

おほ-ぶり 大降【名】雨・雪などの甚しく降ること。（小降に對して）

おほ-ふりそで 大振袖【名】大きく仕立てたる振袖。御所樫「大振袖の伊達模樣」

おほ-ふるまひ 大振舞【名】盛大なる馳走。おほみあるじ。大饗宴。

おほ-ぶろしき 大風呂敷【名】一大なる風呂敷。二自分の生活・事業などを大げさに吹聽すること。〔俚語〕

大風呂敷を擴（ヒロ）ぐ【句】大言をなす。「じ。〔古語〕」

おほ-べ 大嘗【名】だいじやうゑ（大嘗會）に同じ。

おほ-へい 大柄【名】わうへい（横柄）に同じ。

おほ-べし 大癍・大壓【名】一次條の略。二能樂の囃子（ハヤシ）の一。大べしみを著けたる役者の舞臺にあらはるる時に用ふ。

おほ-べしみ 大癍見・大壓面【名】能樂の鬼畜面の一。「鞍馬天狗」・「善界（ゼンガイ）」等の曲に用ふ。おほべし。

おほ-べったう 大別當【名】一院の廳の長官。大臣・公卿・清華など任ぜらる。王朝時代の末に、院の別當を分ちて、執事・執權とせしが、後に大別當を置くこととせり。二鎌倉の鶴岡八幡宮寺にありし社僧。

おほ-へび 大蛇【名】大なる蛇。をろち。だいじゃ。

おほ-べひめ-の-かみ 大戸姫神【名】おきつひめのかみ（奥津姫神）に同じ。

おほ-へや 大部屋【名】一大なる部屋。ひろま。二芝居の樂屋の三階に在る廣き部屋。演劇の稽古を行ひ、又は下級の俳優の雜居する處。三下等なる俳優。

おほ-ほま 大間【名】一廣き間。ひろま。二ふ時の聲。ほほ。

おほ-ぼうしよ 大奉書【名】奉書紙の大判なるもの。縱は一尺三寸・横は一尺八寸。四東又は五東を一行李とす。

おほ-ぼし 大星【名】鹿の皮の夏毛の、星のあざやかに大なるもの。おほまだら。

おほ-ぼし【形二】おほぼぼしに同じ。〔古語〕萬葉「かすが山朝ゐる雲のおほぼしく知らぬ人にもこふるものから」

おほ-ぼす 溺ほす【動四他】溺れしむ。おぼほるやうにす。おぼほらす。〔古語〕紀「灌溺、オボホス」

おほ-ぼす 思ほす【動四他】おもほす（思ほす）に同じ。〔古語〕源氏「あかずあはれなるものにおぼして」

おほ-ほそみ 大ほそみ【名】〔植〕うらしまさう（浦島草）に同じ。〔古語〕和名「虎掌。陶隱居曰、虎掌、於保保曾美、四畔有二圓牙一、如レ看二虎掌一、故以名レ之」

おほ-ぼっかい 【貌】おほまか（大まか）に同じ。「いぶつ。」〔俚語〕

おほ-ぼとけ 大佛【名】大なる佛の像。だ

おほ-ぼねをる 大骨折る【句】ほね（骨）の「對して」條下を見よ。

おほ-ほん 大本【名】大形の書籍。（小本に

おほ-ぼやし 大ぼやし【名】大きくしてしまりなきこと、又その物。

おほ-ぼゆ 思ほゆ【動下二他】おもほゆ（思ほゆ）に同じ。〔古語〕風雅「そことなき恨ぞ常におぼほゆるいかにぞ人のあらずなるころ」

おほ-ぼらす 溺ほらす【動四他】おぼらす（溺らす）に同じ。〔古語〕

おほ-ほる 覆ほる【動四他】おほふ（覆ふ）に同じ。〔古語〕

おぼ-ほる 溺ほる【動下二自】一おぼる（溺る）に同じ。〔古語〕起「沒溺、オボホル」二おぼほしくなる。本心を失ふ。耽る。〔古語〕源氏「世を思ひ知らぬやうにおぼほれたまふなんいとつらき」名義抄「妣、オボホル・ネタム・フケル」

おほ-ま 大間【名】一廣き間。ひろま。二

きやうま（京間）に同じ。 ㊂おほまがき（大間書）の略。

おほま-あらこ 大目麁籠【名】目のあらき籠。めかご。〔古語〕紀「大目麁籠、オホマアラコ」

おほ-まうけ 大儲【名】大なる利益。巨利。

おほ-まうちぎみ 大臣【名】だいじん（大臣）に同じ。〔古語〕

おほ-まか 大まか【貌】細かに考へぬさま。おろそか。おほやう。おほざっぱ。おほぼっかい。〔俚語〕

おほま-がき 大間書【名】除目（ジモク）の時に、闕官を書き立てたる文書。闕官の行下の間を明けおきて、任官後、執筆人の追書附記するを待つ。おほま。

おほ-まがき 大籬【名】遊女屋の大みせ。かかへの遊女は、太夫のみにて、張見世をせず、店には竹簾をおろせり。江戸時代には、仲の町ばりとて、毎夕仲の町の引手茶屋に出張りて客を待てり。おほみせ。そうまがき。（まじり・小格子に對して）

おほ-まがつび-の-かみ 大禍津日神【名】天照大御神の荒御魂。禍事（マガゴト）をせさせたまふといふ。おほやびこのかみ。おほあやつびのかみ。

おほ-まが-とき 大禍時【名】夕方の薄暗くなれる時。たそがれ。おほまどき。おほまんがとき。薄暮。〔古語〕

おほ-まがり 大曲【名】道路などの大きく屈曲するところ。

おほまがり 大曲【名】〔地〕羽後國仙北（ホクセン）郡にある町。もとの大曲・飯田・戸蒔・東川諸村を合せたるもの。郡役所を置く。鐵道奥羽線の一驛。水陸交通の便に由り、貨物の集散地として殷賑なり。

おほ-まき 大卷【名】海中の砂底にある貝を、網にて捕ること。

おほ-まく 大幕【名】㊀大なる幕。今茸「布大幕を二重ばかり引廻はし」 ㊁とまく（外幕）に同じ。

おほ-ま-さき 大間崎【名】〔地〕陸奥國下北郡にある岬。下北半島の西北角。津輕海峽東口の南岸。本洲の最北端をなし、海上十浬にして渡島（マシ）國潮首（シホ）崎に對す。附近に錨地無し。

おほまし-どころ 御座所【名】おはします ところ。おましどころ。〔古語〕空穂「少將、み寺に行きて、おほましどころとらす」

おほ-ます 大座す【動四自】います。おはします。〔古語〕

おほ-まじめ 大眞面目【名】甚しくまじめなること。きまじめ。

おほ-ます 大枡【名】枡の一種。大きくして、その一升ますは、通常の枡の三升にあたり、田舍にて田畑に何升蒔などといふは、すべてこの枡を用ふ。

伊勢の大枡【句】伊勢國外宮子良館（コラウチ）にて、御饌米を量るに用ひし大きなる枡。二種あり、一は長さ一尺三分・廣さ八寸五分・深さ四寸九分、他は長さ二寸四分半・廣さ八寸九分・深さ一寸四分。

おほ-また 大胯【名】足を廣く開くこと。おほあし。〔小胯に對して〕

おほ-またぎ 大跨【名】おほまたにまたぐこと。雙生隅田川「大八文字の大またぎ」

おほ-まだら 大斑【名】おほぼし（大星）に同じ。

おほ-まちぎみ 大臣【名】おほまうちぎみ（大臣）の略。〔古語〕紀「大臣、オホマチギミ」

おほまつりごと-の-おほまつぎみ 太政大臣【名】だいじやうだいじん（太政大臣）に同じ。〔古語〕和名「太政大臣、於保萬豆利古止乃於保萬豆岐美」

おほまつりごと-の-おほまへつぎみ 太政大臣【名】前條に同じ。〔古語〕名義抄「大政大臣、オホマツリゴトノオホマヘツギミ」

おほまつりごと-びと 太政人・參議【名】さんぎ（參議）に同じ。〔古語〕和名「參議、於保萬豆利古止比止」

おほ-まち 大町【名】〔地〕信濃國北安曇（クキ）郡にある町。郡役所を置く。仁科氏の居住地。舊稱、仁科（ニシナ）。

おほ-まと 大的【名】歩射（ブシ）に用ふる的の一種。檜の薄板にて作り、圓くして徑五尺二寸、輪を三重に表はせるもの。（小的に對して）

おほ-まどき 大禍時【名】おほまがとき（大禍時）に同じ。〔古語〕

おほ-まなこ-やま 大眞子山【名】〔地〕日光山彙に屬する死火山。男體山（ナンタイ）の北にあり。高さ七八七〇尺。

おほ-まはし 大回・大囘【名】㊀おほまはり（大回）㊁に同じ。 ㊂船にて、遠方の地に荷物を運び送ること。 ㊃おほわたしくわん（大渡鑑）に同じ。 ㊄まへかけづな（前掛綱）に同じ。 ㊅（文）俳諧の十八體切の一。發句の第二の句を除きて、第一句と第三句との意味連絡し、又、第三句より第一句にかへりても連絡するもの。（小回に對して）

おほ-まはし-なは 大回繩【名】おほわたし（大渡）に同じ。

おほ-まはり 大回・大囘【名】㊀道などを、遠くまはりて行くこと。おほまはし。迂回。 ㊁能樂の型の一種。小廻り・中廻り・小廻りと、順次に三回續けて舞臺を回るもの。おほめぐり（大回）參照。 ㊂おほだちまはり（大立回）に同じ。

おほ-まへ 大前【名】㊀神佛又は貴人の前。おんまへ。みまへ。 ㊁射藝にて、最初に位する射手。四角（シカド）の一。（大うしろ？闕の前・闕のうしろに對して）

おほ-まへつぎみ 大臣【名】だいじん（大臣）の古稱。

おほまま 大間間【名】〔地〕上野國山田郡にある町。渡良瀬（ワタラセ）川の右岸なる高原地。下野國足尾町への通路。製絲業地。鐵道兩毛線の一驛。

おほまんが-とき 大禍時【名】おほまがとき（大禍時）に同じ。〔古語〕

おほ-まんぢゆう 大饅頭【名】㊀大なる饅頭。 ㊁次條の略。

おほまんぢゆう-じころ 大饅頭鏗・大饅頭鞠【名】兜の鏗の、饅頭形に圓く高く盛りあげて作れるもの。（小饅頭鏗に對して）

おほ-まんどころ 大政所【名】㊀擬政關・白の母の尊稱。大北の政所。 ㊁おほじやうや（大莊屋）を云ふ。〔四國の方言〕 ㊂（人）『秀吉の關白となりしより尊びていふ』豐臣秀吉の母。氏名詳かならず。一說に、名は仲なりと。又、美濃國鍛冶關兼貞の女とも、尾張國愛知郡御器所（ゴキ）村の人ともいふ。同郡中村の木下彌右衞門に嫁して瑞龍院（秀次・秀保・秀勝の母・日秀尼及び秀吉を生み、後、同村の竹阿彌に再嫁して、秀俊及び南明院（德川家康の室）を生む。文祿二年薨ず。

おほ-まめ 大豆【名】〔植〕だいづ（大豆）に同じ。

おほ-まゆ 大眉【名】眉を、まゆずみにて、太く作りなしたるもの。太平記「齡二八ばかりなる小兒の、おほまゆに、鐵漿黑（カネグロ）なり」

おほまるくわうせん 大丸鑛泉【名】〔地〕下野國那須（ナス）郡那須七湯の一。泉質は酸性泉に屬し、皮膚病に効あり。

おほ-まるり 大參【名】大勢の參り。多人數の參詣。狂言「成上物」「今日は清水へ大參りでござる程に」

おほ-み 大使主【名】使主（オミ）の中の頭だてるもの。〔古語〕紀「大使主、オホミ」

おほ-み 大忌【名】大嘗會・五節會などの時、ト定に合はざりしもの、即ち小忌（ヲミ）以外の人。小忌衣（ヒモヒ）を著くることなく、天皇沐浴の後は、大嘗宮にも廻立殿（クワイリウ）にも入ることを得ぬ定なりといふ。〔古語〕新撰「山の井の色をかさぬるこよひだにおほみの袖やかはらざるらん」

大忌の御湯（オユ）【名】大嘗祭の時、天皇のまづ一度めさるる御湯。

おほ-み 大身【名】㊀おほみみ（大御身）に同じ。〔古語〕紀「玉體、オホミ」 ㊁素槍（リヤリ）の刃わたりの、長大なるもの。「おほみの槍」

おほ-み 大御【接頭】尊敬の意。おほ。おみ。おほん。おん。おほむ。〔古語〕「おほみ酒（キ）」「おほみあかし」

おほ-み-あかし 大御燈明【名】神前佛前などに獻るともしび。おみあかし。みあかし。〔古語〕源氏「おほみあかしの事など、ここにてしくはへなどするほどに、日暮れぬ」

おほみ-あそび 大御遊【名】あそび（遊）の敬語。源氏「月はなやかにさし出づるほどに、おほみあそび始まりて」

おほみ-あへ 大御饗【名】一天皇のきこしめす御食物。二禁中にて、群臣に宴を賜ふこと。〔古語〕

おほみ-あるじ 大御饗【名】おほぶるまひ(大振舞)に同じ。〔古語〕 叅考「紀の守におほみあるじの事ども、男方・女方おまし所しつらふ」

おほみ-いづ 大御稜威【名】天皇陛下の御威德。いつ(稜威)參照。

おほみ-うた 大御歌【名】一天皇の御歌。御製。二神樂歌(カグラ・風俗歌(フゾク))をうたふことなるべし。〔古語〕 叅考「おほみうたつかうまつるべき殿上人の、ただ今の上手ども」

おほみ-おや 大御祖【名】天皇の御先祖。皇祖。〔古語〕 起「皇祖、オホミオヤ」

おほみ-みか 大甕【名】大なるかめ。大なるみか。〔古語〕

おほみ-かど 大御門【名】一かど(門)の尊稱。 萬葉「青かぐ山は日のたての大御門に春山としみさび立てり」 二おほみや(大宮)に同じ。〔古語〕 萬葉「あらたへの藤井が原に大御門創めたまひて」 三そうもん(總門)に同じ。

おほみ-かはし 大三河志【名】〔書〕天文十一年の德川家康の出生より、元和二年の薨去及び贈位の事に至る七十六年間の事を記せるもの。松平頼寛の撰。

おほ-みがはり 大身替【名】かたがはり(片身替)を見よ。

おほみ-かみ 大御神【名】かみ(神)の敬稱。おほかみ。 萬葉「あめつちの大御神たち」

おほみ-かむこ 大御巫【名】神祇官の八神につかうまつる巫女。おほみかむのこ。〔古語〕 祝詞「大御巫、オホミカムコ」

おほみ-かむのこ 大御巫【名】前條に同じ。〔古語〕

おほみ-き 大御酒【名】さけ(酒)の敬稱。おみき。〔古語〕

おほ-みくさ 【名】〔植〕はしりどころ(貫宿)に同じ。

おほみ-け 大御食【名】天皇のきこしめす食物。〔古語〕 萬葉「ゆふ川の神もおほみけにつかへまつると」

おほみけつ-かみ 大御食津神【名】五穀その他の食物を初めて生ぜしめしといふ神。「に同じ。

おほみ-こころ 大御心【名】えいりよ(叡慮)

おほみ-こと 大御言【名】天皇のおんことば。みことのり。おほむこと。おほむことのり。おほむみこと。敕旨。〔古語〕 萬葉「おほみことといただきもちて」

おほみことも-ち-の-おほきまつりごとびと 太宰大監【名】太宰府の職員。二人ありて、府内を糺判し、非違を察し、文案を新署する等の事務を執りしもの。〔古語〕

おほみことも-ち-の-つかさ 太宰府【名】『大御言持の司の意、即ち天皇の御詔を我が身に帶持して任國に赴き、その國を治むる意』ださいふ(太宰府)に同じ。〔古語〕

おほ-みしま 大三島【名】〔地〕伊豫國第一の大島。越智(オチ)郡に屬す。周回約十五里。

おほみしま-じんじや 大三島神社【名】伊豫國大三島宮ノ浦にある國幣中社。祭神は大山祇(オホヤマツミ)神。中世、河野氏と越智(オチ)氏とはその祖神なりとの故を以て、大いに尊崇し、同國の一宮たりき。大山積神社。三島大明神。「語」

おほ-みしるし 【名】きよし(御璽)に同じ。〔古

おほ-みせ 大店【名】一構も大きく、賣買額の大なる商店。二おほまがき(大籬)に同じ。

おほみぞ 大溝【名】〔地〕近江國高島郡にある町。琵琶湖に臨める小灣を勝野津と云ふ。大溝城址あり。分部(ワケベ)氏の舊藩地。一名、勝野(カツノ)。 萬葉「いづこにか我は宿らむ高島の勝野の原にこの日暮れなば」

おほみそか 大三十日・大晦日【名】おほつごもり(大晦日)に同じ。

おほみ-だ 大御田【名】しんでん(神田)に同じ。〔古語〕 新古今「おほみ田のうるほふばかりせきかけてるぜきに落せ河かみの神」

おほ-みたいどころ 大御臺所【名】先代の御臺所。

おほみ-だう 大御堂【名】みだう(御堂)の尊稱。 榮花「來年の大御堂の供養の事を、今より思しめしたり」

おほみ-たから 大御寶【名】『天皇の御寶として愛護せらるる意』たみ。國民。おほたから。おほむたから。おほんたから。〔古語〕 起「百姓、オホミタカラ」

おほみち 大道【名】一おほぢ(大路)に同じ。(小道に對して)〔古語〕 和名「大路、於保美知」 二多くの道のり。 平假名盛衰記「さて、あるいたは。けふは、おほみち。そちもくたびれ、おりや、なほの事」 三三十六町を一里として計りたる道のり。(小道に對して)

おほ-みづ 大水【名】暴雨などのために、湖・河などの水漲れて溢れて、陸地を浸すこと。こうずゐ。たいすゐ。 和泉式部物語「おほみづのきしつきたるにくらぶれば深き心はなほぞまされる」

おほ-みづ-の-かみ 大水神【名】おほやまつみのかみ(大山祇神)に同じ。

おほ-みて 大御手【名】天皇の御手。〔古語〕 萬葉「おほみ身に太刀とりおばし大御手に弓とりもたし」

おほ-みと 大御床【名】天皇の御寢所。〔古語〕 起「大牀、オホミト」

おほ-みなと 大港・大湊【名】大なる湊。大津。

おほみなと 大湊【名】〔地〕一伊勢國度會(ワタラヒ)郡にある町。宮川(カハヤ)口の埠頭。港口東に開き、古來南伊勢の良港。造船所あり。二陸奥國下北(シモキタ)郡にある村。下北半島の南岸。青森灣の一部大湊灣に臨む。灣は、一名安渡(アド)灣ともいひ、蘆崎の沙洲を中にして內外の別あり、海軍要港部・同修理工場・同望樓を設く。「を見よ。

おほみなと-わん 大湊灣【名】〔地〕前條二

おほみね 大峰・大峯【名】〔地〕大和國吉野郡にある山。吉野山の高峰にて、吉野村の東南に聳ゆ。山脈重疊して紀伊國熊野に及ぶ。山中に金峰(キン)神社あり。明治の初年までは神佛混淆して、金峰山寺又は藏王(ザウ)權現堂と稱せり。白鳳年間、役小角(エンノオヅノ)の創建と傳ふ。古來修驗者の苦修錬行する處。おほみねさん。かねのみたけ。みねがだけ。金峰山(キンブ)。山上嶽(サンジヤウガタケ)。拾玉「わが山を持たぬ身ならばさし越えて大峰までも行かましものを」

おほみねいり 大峰入【名】大和國大峰に入りて、修驗者・山伏が修行すること。單に峯入りともいふ。多く陰曆四月に行はれど、秋季にもあり。春は大和路より入りて紀路に出づ。これを順の峰入といひ、秋はその反對にて、これを逆の峰入といふ。

おほみねさん 大峰山【名】〔地〕おほみね(大峯)に同じ。

おほみねせんだつ 大峰先達【名】度度大和國の大峰に登りて苦修錬行の功ある人の敬稱。

おほ-みふね 大御船【名】天皇又は皇后の召したまふ船。 起「なには人鈴船とらせ腰なづみその船とらせおほみふねとれ」

おほ-みま 大御馬【名】天皇の召したまふ馬。〔古語〕 萬葉「大御馬の口おしとどめ」

おほ-みま 大御身【名】おほみみ(大御身)に同じ。〔古語〕 延喜式「御體、於保美麻」

おほみまつりごと-の-つかさ 【名】だいやうくわん(太政官)に同じ。〔古語〕 拾芥抄「太政官、オホミマツリゴトノツカサ」

おほ-みみ 大御身【名】天皇の御身體。おほみ。おほみま。おほんみ。玉體。〔古語〕 萬葉「おほみみに大刀とりおばしおほみ手に弓とりもたし」

おほ-みみ 大耳【名】一大なる耳。二ゆるかせに聞くこと。おほまかにして、仔細なる事に行きわたらぬこと。 蘆「大名は大耳」

おほ-みめぐみ 大御恵【名】天皇の御めぐみ。 續後紀「とがあれどなだめたまひつ、聾ひなきおほみめぐみの、げに廣くおはしませば」

おほ-みもの 大御物【名】高貴の方の食物の敬稱。おもの。おほむもの。供御(クゴ)。〔古語〕 起「供御、オホミモノ」

おほ-みや 大宮【名】一皇居又は神殿。お

ほみかど。〔古語〕六帖「百敷のおほみやながら八十島を見る心地する秋の夜の月」 ㊁太皇太后又は皇太后。おほきさき。中宮を宮といふに對して〔古語〕 叡壓「上も、心しづかにも物したまはじ、大宮も、いとおほけなくおはすれば」 ㊂はほみや（母宮）に同じ。（若宮に對して）〔古語〕 榮花「大宮のおもの、例の沈の折敷（キヲシ）に何くれどもならんかし。若宮の御前の小き御臺六つ」 ㊃能（ウ）にて、宮殿に擬したる作り物。四本の柱ありて、屋根を附けたるもの。（小宮に對して） ㊄比叡山山王の二十一社の一。 ㊅止土濃（ドシノ）とやらんも、あの坂本の内にて候ふか」 ㊆催馬樂（サイバラ）の呂の曲の一。 ㊇神樂歌の曲の一。

おほみや 大宮【名】㊀〔地〕常陸國那珂（カナ）郡にある町。久慈（クジ）川の西岸。邊垂神社あり。一名、邊垂（ヘタリ）。 ㊁〔地〕駿河國富士郡にある町。富士裾野の西端。もとの大宮・黑田・星山・沼久保諸村を合せたるもの。甲州街道の一驛。淺間（セン）神社あり。此より富士山に登る路を表口と云ふ。 ㊂〔地〕武藏國秩父（チチ）郡にある町。式内の古社秩父神社あり。秩父絹を產す。 ㊃〔地〕武藏國北足立（ヤウタリ）郡にある町。もとの大宮・高畠・上手宿・天沼の諸村を合せたるもの。鐵道東北本線と高崎線との分岐點たる一驛。官幣大社氷川神社あり。 ㊄姓氏の一。本姓は藤原。西園寺（サイヲン）の分家。西園寺公益の次子季光を祖とす。明治維新後、子爵を授けらる。

おほみや-くにもり 大宮國盛【名】〔人〕備前國大宮の刀工。大宮鍛冶の祖。仁治頃の人。

おほみや-どころ 大宮御所【名】京都上京區御所の東南、櫻町仙洞御所の北に接してありし御所。寛永中、幕府が東福門院のために營み、長廊を架して、仙洞に通ぜり。後、火災に罹り、再建後は常御殿となり、明治維新後、撤毀せられたり。

おほみや-ごよみ 大宮曆【名】戰國時代に、朝廷の頒曆の事廢れし時、武藏國大宮にて私に作りて用ひし曆。三島曆・會津曆など

の類。

おほ-みやすどころ 大御息所【名】次條に「同じ。〔古語〕

おほ-みやすんどころ 大宮御息所【名】父帝の御息所。おほみやすどころ。〔古語〕伊勢「おほみやすんどころも、染殿のきさきなり」

おほみや-だいしやうこく 大宮大相國【名】〔人〕ふぢはらこれみち（藤原伊通）に同じ。

おほ-みやつかさ 大宮司【名】だいぐうじ（大宮司）に同じ。

おほみやづかへ 大宮仕【名】皇居造營の事に從事し奉ること。〔古語〕 萬葉「藤原のおほみやづかへあれ繼げや少女がともはしき召さるかも」

おほみや-づくり 大宮造【名】神社又は皇居の造營。 謠曲（鉢木）「同じく當國伏見の里に、大宮造あるべきとの勅諚を蒙り」

おほみや-どころ 大宮所【名】內裏のある所。皇居。〔古語〕 萬葉「たたなめていづみの川のみをたえず仕へまつらむ大宮所」

おほみやのめ-の-かみ 大宮賣神【名】うずめのみこと（釧女命）に同じ。

おほ-みやばしら 大宮柱【名】みやばしら（宮柱）の敬稱。〔古語〕 新後撰「跡たれて神は幾代をまもるらんおほみやばしら今も朽ちせず」

おほみやはちまん-じんじや 大宮八幡神社【名】播磨國美囊（ミ）郡三木（キ）町に鎭坐せる村社。祭神は天照大神及び外八神。

おほみや-びと 大宮人【名】禁中に仕ふる人。くものうへびと。公卿。〔古語〕 源氏「いつとなくおほみやびとのこひしきに櫻かざしてけふもきにけり」

おほみやびめ-の-かみ 大宮姬神【名】うずめのみこと（釧女命）に同じ。

おほみやり 大身槍【名】刃わたりの長大なる素槍（リスヤ）。大身の槍。

おほ-みゆき 大行幸【名】みゆき（行幸）に同じ。〔古語〕 伊勢「三條のおほみゆきせし時」

おほみ-よ 大御世【名】天皇の御治世の尊稱。聖代。 萬葉「かけまくもあやにかしこしすめろぎの大御世に」

おほ-みら 薤【名】〔植〕らっきよう（薤）に同じ。〔古語〕 和名「薤、オホミラ」

おほ-みる 御見る【動上一他】みる（見る）の敬語。みそなはす。〔古語〕 紀「望、オホミテ」

おほ-みるくさ 大海人草・茸唐子【名】〔植〕ほしりどころ（莫宿）に同じ。 和名「茸唐子、於保美流久佐」

おほみわ 大神【名】姓氏の一。神別にして、姓（カバネ）は朝臣（アソン）。大國主命の裔。

おほみわ-じんじや 大神神社・大三輪神社【名】大和國磯城（キ）郡三輪町に鎭坐せる官幣大社。祭神は大物主（オホモノヌシ）神。二十二社の一。

おほみわ-の-かみ 大三輪神【名】おほものぬしのかみ（大物主神）に同じ。

おほみわ-まつり 大神祭【名】大和國大神神社の祭禮。古は四月及び十二月の上の卯日（卯の日三回ある時は中の卯の日）に行はれ、今は四月九日。

おほみわやま-じんじや 大神山神社【名】伯耆國西伯（ハキ）郡大高村大字尾高、即ち大山（ダイセン）の西北麓に鎭坐せる國幣小社。式內の古社。祭神は大穴牟遲（オホナモチ）神。

おほ-む 臣【名】おみ（臣）に同じ。〔古語〕 字鏡集「臣、オホム・ヤツガレ・キミ」

おほ-む 大御【接頭】おほみ（大神）の轉。おん。〔古語〕

おほ-むかし 大昔【名】遠きむかし。甚だ古き昔。太古。上古。（なか昔等に對して）

おほ-むかふ 大向【名】㊀芝居の、立見（ムケチ）をする場所。即ち向棧敷（ムカシキジ）のうしろの方。舞臺上の俳優より指していふ。「おほむかふの喝采を博す」 ㊁下等なる見物人。下等なる批評家。

おほ-むぎ 大麥【名】〔植〕禾本（カホク）科に屬する一年生又は二年生の草。苗も穗も小麥より大きく、穎果は四列に並びて芒あり。子粒は、飯或はこがしとなし、稈は帽子その他細工物に用ふるなど、需要極めて廣し。

おほむ-とと 大御言【名】おほみこと（大御言）の轉。〔古語〕 紀「密旨、オホムコト」

おほむこと-のり 大御言宣【名】前條に同じ。〔古語〕 紀「皇命、オホムコトノリ」

おほ-むしくひ 大蟲喰【名】〔動〕くわくこう（郭公）に同じ。

おほむし-じんじや 大蟲神社【名】越前國丹生（ニフ）郡大蟲村に鎭坐せる縣社。祭神は天津日高彥火火出見（ヒコホホデミカ）尊。相殿に豐玉姬（トヨタマヒメノ）命・水波賣（ハノメノ）命を配祀す。

おほむた 大牟田【名】〔地〕筑前國三池郡にある町。三池町の西約一里。海に臨む。九州鐵道の一驛。三池石炭の輸出港。

おほむたから 大御寶【名】おほみたから（大御寶）の轉。〔古語〕 紀「衆庶、オホムタカラ」

おほむながきうけ-の-つむじ 大鞅受旋毛【名】いんじゆ（印綬）㊁に同じ。〔古語〕

おほ-むね 大棟【名】〔建〕屋根の最も高き處にある水平の棟。日本・支那の宮殿・寺院等の建築には、その兩端に鴟尾（シ）を附く。（隅棟（スミ）・下棟（クダリ）等に對して）

おほ-むね 大旨【名】大よその趣意。主旨。大意。大旨（タイシ）。

おほ-むね 概・大率【副】『大旨の義』あらまし。おほよそ。おほかた。大概。大略。

おほむね-もん 大棟門【名】〔建〕屋根は一條の冠木（キカ）にて連なりたる切妻破風（ヤハフ）造にて、中央に二枚開の扉あり、その左右に更に一枚開の低き戸を附したる門。東京帝國大學の赤門はこれに屬す。

おほ-むべ 大嘗【名】『おほにへ（大嘗）の訛』

だいじやう 会（大嘗會）に同じ。〔古語〕

おほむべ-の-まつり 大嘗祭【名】だいじやう会（大嘗會）に同じ。

おほ-むま 御馬【名】しやが（車駕）に同じ。〔古語〕

おほむま-ぞひ 御馬副【名】ぎよしや（馭者）の敬稱。〔古語〕 紀「御者、オホムマゾヒ」

おほむ-みこと 大御御言【名】おほみこと（大御言）に同じ。〔古語〕 紀「國命、オホムミコト」

おほむ-もの 大御物【名】おほみもの（大御物）の轉。〔古語〕 紀「溫飯、オホムモノ」

おほ-むら 大村【名】大なる村。戶數の多き村。たいそん。

おほむら 大村【名】㊀〔地〕肥前國東彼杵

(ヒガシ)郡にある町。大村灣の東岸。九州鐵道長崎線の一驛。町の南に大村城址あり。郡役所を置く。大村氏の舊城地。**二**姓氏の一。神別にして、同名のもの二家あり、いづれも姓(カバネ)は直(アタヒ)。

おほむらごせう 大村胡椒【名】〔植〕あをもじ、青文字)に同じ。

おほむらじ 大連【名】上代の職名の一。連(ムラジ)姓の統領たる者。神別に屬し、大臣(オホオミ)と並びて、朝政を執りしこと、後世の左右大臣の如くなりき。

おほむらじんたらう 大村仁太郎【名】〔人〕獨逸語學者。江戸に生る。陸軍大學校第一高等學校及び學習院教授。獨逸協會學校長。獨逸語普及の功を以て獨逸皇帝より赤鷲三等勳章を授けらる。明治四十年歿す。年四十五。

おほむらますじらう 大村益次郎【名】〔人〕明治維新の功臣。周防國大村の人。はじめ村田藏六と稱し、漢學を廣瀬淡窓に、蘭學を緒方洪庵に學び、明治維新の際功を以て、兵部大輔となる。佛式の軍制を用ひんとして、守舊派の反對に遇ひ、明治二年刺客の手に斃る。年四十六。

おほむらわん 大村灣【名】〔地〕肥前國にある灣。東彼杵(ヒガシ)郡と西彼杵郡にて包まれ、針尾(ハリ)島、灣口を扼し、島の左右に狹き水道あり、西を針尾瀨戸と云ひ、東を早岐(ハイ)瀨戸と云ふ。この海と島原灣とは、諫早(イサハ)の地頸僅かに東西十五町を以て隔て、針尾島の外部は、別に佐世保灣をなす。眞珠を產す。一に鯛ノ浦・彼杵(キノ)海。

おほむろ 大室【名】大なるむろ。おほむろや。〔古語〕起「大室、オホムロ」

おほむろや 大室屋【名】前條に同じ。〔古語〕起「おさかのおほむろやに人さはに來入りをり」

おほん 御【名】『接頭語のおほん(御)の下にあるべき名詞を略していふ語』貴人の事物の尊稱。〔古語〕 源氏「對の上のおほんは、三種ある中に」

おほん 御【接頭】おほみ(大御)の音便。〔古語〕 源氏「源氏のおほん紅葉の賀の、うちおぼしでいられて」

おほん【感】**一**氣どりたる咳ばらひの聲。えへん。〔俚語〕 **二**他人の談話中に插みてひやかす聲。〔俚語〕

おほんかた 御方【名】おんかた(御方)に同じ。〔古語〕 榮花「殿も、うへも、おほんかたに渡らせたまひて」

おほんかみ 大神【名】かみ(神)の敬稱。おほみかみ。〔古語〕 伊勢「おほんかみ、げぎやうしたまひて」

おほんこと 御事【代】おんこと(御事)に同じ。〔古語〕 榮穢「昔、おほん事を思ひそめ」

おほんぞ 御衣【名】おほみぞ(大御衣)の音便。みぞ。〔古語〕

おほんたから 御寶【名】おほみたから(大御寶)の音便。〔古語〕 謠曲(梅)「人民(クオホン)もただ安らかに」

おほんべ 大嘗【名】『おほにへ(大贄)の訛』だいじやうゑ(大嘗會)に同じ。〔古語〕 古今「この歌は、承和のおほんべの吉備の國の歌」

おほんまへ 御前【名】おまへ(御前)に同じ。〔古語〕

おほんみ 御身【名】おんみ(御身)に同じ。おほみみ。〔古語〕 榮穢「あないみじや、などかかるおほんみとなりたまひつる」

おほんみこと 御御言【名】おほむみこと(大御御言)の音便。〔古語〕

おほめ 大目【名】**一**大なる目。(ほそ目に對して) **二**きびしき咎めだてをせぬこと。ゆるやか。寬大。「大目に見ておく」 **三**二百匁を一斤として數ふる目方。 **四**大體の目算。 **五**船具の一。河船の舵(カヂ)の一部。

おほめいげつ 大名月【名】〔植〕槭樹(カエデ)科に屬する落葉喬木。葉はやや圓形又は圓狀卵形。葉身は九乃至十一に分裂し、各裂片は三角形をなす。葉柄は葉身よりも短く、葉裏・葉柄・花梗みな毛茸あり。本邦各地の山地に自生す。

おほめかし 大めかし【名】甚しくめかすこと。いたく身を飾ること。〔俚語〕

おほめかし【形二】おぼろげなり。さだかならず。〔古語〕 源氏「女君、さばかりならんと心得たまへれど、おぼめかしくもてなしおはす」

おほめかす【動四他】おぼめくやうにす。おぼろにあらはす。〔古語〕 榮穢「おぼめかせもぞしたまふ」

おほめく【動四自】分明ならず。朦朧たり。〔古語〕 枕「それにや、かれにやなど、おぼめきゆかしがりたまふ」

おほめぐり 大回【動四他】廣くめぐりて行道(ギヤウダウ)すること。おほまはり(大回)參照。〔古語〕 榮花「こなた・かなたの御堂、おほめぐりにて」

おほめだま 大目玉【名】大いに叱らるること。〔俚語〕

おほめつけ 大目附【名】『めつけ(目附)を見よ』江戸幕府の職制の一。老中の配下に屬して、幕政の監察と諸大名の糺彈とを掌りしもの。おほよこめ。

おほめのこ 大女子【名】あねむすめ。長女。〔古語〕 起「大女、オホメノコ」

おほも 大藻【名】〔植〕あまも(大葉藻)**一**に同じ。

おほもく 大目【名】圍碁の布石の一。起手に於て、隅の星より一路高くするもの。たかもく。

おほもちあひ 大持合【名】〔商〕相場の變動大なるにあらざれども、一高一低し、上放れも下放れもなきこと。

おほもっかう 大奔【名】つりあげ(釣上)に同じ。〔芝居の語〕

おほもて 大持【名】**一**藝妓・娼妓などに、非常に歡待せらるること。〔俚語〕 **二**多くの人より大に歡待せらるること。〔俚語〕

おほもと 大本【名】第一のもと。根本。

おほもと 大許【名】皇居。內裏。〔古語〕起「皇居、オホモト」

おほもとゆひ 大元結【名】いれもとゆひ(入「元結」に同じ。

おほもの 大物【名】**一**大なる物。大量の物。(小物に對して) **二**杉原紙の一種。縱一尺一寸・橫一尺五寸。

おほものいみ 大物忌【名】禁中の人の物「忌」〔古語〕

おほものいみじんじや 大物忌神社【名】羽後國飽海(アク)郡吹浦(フク)村及び同郡蕨岡(ワラビ)村に鎭坐せる國幣中社。もと式內の古社にして、同國の一ノ宮。祭神は大物忌神とも、倉稻魂(トウカノ)神とも、大山祇(マヤマツミ)神ともいふ。欽明天皇の二十五年の創祀。世に羽黑山(ハグロ)權現といふ。

おほものぐひ 大物食【名】大食すること、又その人。おほぐらひ。おほぐひ。暴食。健啖。大食。〔俚語〕

おほものぬしのかみ 大物主神【名】おほくにぬしのかみ(大國主神)に同じ。

おほものみ 大物見【名】多人數より成る斥候。〔軍陣の語〕

おほもん 大門【名】**一**廣き屋敷などにある第一の門。おもてもん。正門。 **二**「昔、入口に大なる門のありしよりいふ』遊廓の入口。おほもんぐち。 **三**門松「太鼓は打たで大門に轟く馬の高いなき、井筒が許へ」

おほもんぐち 大門口【名】前條**二**に同じ。

おほもり 大森【名】大なる森。深林。〔古語〕 **一**「思百尋」もみぢするこやの大森見わたせば錦に見ける心地こそすれ」

おほもり 大森【名】〔地〕**一**武藏國荏原(エバラ)郡にある町。東京灣に臨む。鐵道東海道本線及び京濱電車の一驛。麥藁細工・海苔・果物を產す。 **二**下總國印旛(イバン)郡にある町。もとの大森・鹿黑・發作・龜成諸村を合せたるもの。手賀(テガ)沼に臨む。 **三**石見國邇摩(ニマ)郡にある町。銀山川の源。山吹城址あり。郡役所を置く。 **四**羽後國平鹿(ヒラカ)郡にある町。御物(オモ)川の西岸。城址あり。

おほもりえいしやう 大森英昌【名】〔人〕裝劍の彫工。通稱は與市。江戸の人。大森流の元祖。

おほもりくわうざん 大森鑛山【名】〔地〕

おほもりぎんざん 大森銀山【名】**一**に同じ。

おほもりざいく 大森細工【名】武藏國大森にて賣る麥藁細工。

おほもりしやうべゑ 大森庄兵衛【名】〔人〕大森流の笛曲の祖。天正中の人。

おほもりそうくん 大森宗勳【名】〔人〕尺八の名人。後陽成天皇の叡感に入りてより、名聲いよいよ高く、今なほ尺八を學ぶもの、この人を法とす。天正年間の人。

おほもり-はるとよ 大森治豐【名】〔人〕醫學博士。最上(モガ)の人。福岡に醫科大學の設立せらるるや教授兼學長たり。九州大學成るに及び、その名譽教授となる。明治四十五年卒す。

おほもり-りう 大森流【名】㊀裝劍の彫工の一派。大森英昌を祖とす。㊁笛曲の一派。大森庄兵衛を祖とす。森田流。庄兵衛流。

おほ-や 大家【名】㊀おもや(母屋)㊁に同じ。㊁いへぬし(家主)㊁に同じ。〔東京の語〕

おほ-や 大矢・大箭【名】通常の矢よりも長大なる矢。平家「齋藤別當、あざわらって、さ候へば、君は實盛を大矢とおぼしめされ候ひけるか」

おほ-やう 大樣【名】おほかた。あらまし。

おほ-やう 大樣【貌】こまかき事にかかはらず、又、注意の足らぬさま。ゆたか。おほらか。おほまか。俗曲(傀儡師)「三人もちし子だからの、總領息はおほやうにて、父の前でもふところ手、物をいふにも返辭せず」

おほやう-げ 大樣げ【貌】大樣らしきさま。おほやうらか。平家「おほやうげにておはしたれば」

おほやう-らか 大樣らか【貌】前條に同じ。〔古語〕愚秘抄「おほやうらかに書きなすべきなり」

おほ-やか 大やか【貌】したたか。おほやう。おほきやか。〔古語〕宇治「大やかなるを、腰についはさみたれば」

おほ-やかず 大矢數【名】通矢(シトホ)の、前日の暮より翌日の暮まで一晝夜を費して行ふもの。(小矢數に對して) 蕪村「大矢數弓師親子も參りたる」

おほ-やがら 大矢幹【名】〔植〕みくり(荆三稜)に同じ。

おほやぎふ 大柳生【名】〔地〕大和國添上(カフノ)郡にある町。式内の古社山口神社あり。柳生(ヤギ)氏の舊領地柳生村は東北に隣す。東方の山を隔てて月ケ瀬の勝地あり。

おほ-やけ 公【名】㊀大(オホ)家(ケ)の義」㊁皇居。〔古語〕㊂天子又は皇后。〔古語〕「おほやけの御けしき、惡しかりけり」㊃朝廷。政府。國家。㊄表だちたること。祕密ならぬこと。公然。公共。共有。(私に對して) 源氏「おほやけ・わたくしもの騷がしきほどに」㊅私なきこと。偏頗ならぬこと。公明。公平。

公にす【句】廣く世に示す。社會に問ふ。

公の後見(ウシロミ)【句】㊀朝政の輔佐。〔古語〕㊁攝政又は關白。〔古語〕

公の中に私【句】「公の私」㊀に同じ。十訓「おほやけのなかにわたくしと申すは、これなり」

公の使【句】おほやけづかひ(公使)に同じ。榮花「夜を晝になしておほやけの御使下りて」「を見よ。

公の法人【句】〔法〕はふじん(法人)條下

公の私【句】㊀公用中に私用をふくむこと。公の中に私。小町歌「資芳」「おほやけのわたくしごとに宿の月」㊁公平なるが中にも、私意の行はるる意。表むきはきびしきやうなれども、その中に寛大なるところある意。謠曲(後宴)「おほやけのわたくしといふ事の有れば、せめては、向ひの地までなりとも、なさけに乘せてたびたまへ」㊂公然の祕密。

おほやけ-おほやけ-し 公公し【形二】いかにも公(オホヤケ)し。おほやけし(公し)を見よ。〔古語〕源氏「才(ザエ)なども、おほやけおほやけしき方におくれず」

おほやけ-がた 公方【名】おほやけ事に關するかた。〔古語〕榮花「七壇の御修法(ホフズ)・長日の御修法、おほやけがた・宮がたと、おこなはせたまふ」

おほやけがた-さまに 公方樣に【副】然るべき朝廷の儀式に準じて。〔古語〕榮花「御法事、すべて、司司の人、皆ゐたちて、さるべきおほやけかたざまにしおきてせさせたまふ」

おほやけ-ごころ 公心【名】公平なること。私のまじらざる心。〔古語〕起「公平而、オホヤケゴコロアリテ」

おほやけ-ごと 公事【名】㊀朝廷の事。政務。公事(クジ)。源氏「おほやけごとをも、言ひあはせ」㊁表だたる事。源氏「くらつかさ・こくさう院など、おほやけごとに仕うまつれる」

おほやけ-ざた 公沙汰【名】表だたる事。表立ちて政府の沙汰となること。表むきの沙汰。公事沙汰(クジ)。おもてざた。おまへざた。公判。(わたくし沙汰に對して)

おほやけ-ざま 公樣【名】表立ちたるさま。おほやけなるかた。〔古語〕源氏「御息所(ドコロ)もおはせず、おほやけざまの宮づかへと思へり」

おほやけし 公し【形二】おほやけらし。おもてだたし。おほやけやけし。〔古語〕狭衣「いとおほやけしく、きらきらしき御ありさまなり」

おほやけ-づかひ 公使【名】朝廷よりの使者。公の使。〔古語〕更科「この男をたづぬるに、このみこと、おほやけづかひを召して」

おほやけ-どころ 公所【名】㊀朝廷の御領地。官有の所。〔古語〕源氏「物詣の人は常にぞ宿りたまふといへば、いとよかなり、おほやけどころなれど」㊁內裏。朝廷。官府。〔古語〕枕「おほやけどころに入りたちする男」

おほやけ-ばら 公腹【名】吾が身にかかはらぬ事なるに、おほやけ心より腹立つ。公憤。義憤。〔古語〕榮花「げに、さもありぬべき御ありさまのためしをおもふぞ、げにはおほやけばらたたれける」

公腹立つ【句】前條に同じ。

おほやけ-びと 公人【名】おほやけに仕ふるひと。官吏。〔古語〕源氏「公人を頼みたる人は無くやはある」

おほやけ-まつり 公祭【名】おほやけにて行ふまつり。〔古語〕大鏡「わが御ぞうに帝・后宮(キサキ)立ちたまふものならば、おほやけまつりになさんと誓ひ奉りて」

おほやけ-みやづかへ 公宮仕【名】內裏の女房に奉仕すること。みやづかへ。〔古語〕榮花「先帝の御時、おほやけみやづかへに出し立てたりければ」

おほやけ-むき 公向【名】おもて向。官邊。

おほやけ-もの 公物【名】公有又は官有の物。(わたくし物に對して)〔古語〕大鏡「今さらに私の物になりはべらば便なきこと、おほやけ物にて候ふべきなり」

おほやけ-やけ-し 公やけし【形二】おほやけし(公し)に同じ。〔古語〕源氏「公やけしき作法ばかりの事を、けふしたまひしに」

おほやけ-わざ 公業【名】㊀朝廷にてなすわざ。〔古語〕源氏「藤の花の宴…おほやけわざにて、あるじの宮のつかうまつりたまふにあらず」㊁公然と行ふわざ。

おほやしま 大八洲・大八島【名】〔地〕大日本國の古稱。即ち淡路洲・伊豫二名洲(ナヨシマ)・筑紫洲(ツクシマ)即ち今の四國・筑紫洲即ち今の九州・對馬洲・壹岐洲・隱岐洲・佐渡洲・大日本豐秋津洲(オホヤマトトヨアキツシマ)即ち今の本土を總稱せるもの。一說に、「や」の語、必ずしも八の意にあらず、多數の意にて、多島國の義ならんと。大八洲國。源氏「深き御うつくしみ、おほやしまに遍く」「に同じ。

おほやしま-ぐに 大八洲國【名】〔地〕前條

おほ-やしろ 大社【名】㊀いづものおほやしろ(出雲大社)に同じ。㊁謠曲の一。出雲大社にて、神有月の神事ある際、參り合ひて奇特を目擊することを作りしもの。かみありづき(神有月)參照。

おほやしろ-づくり 大社造【名】〔建〕神社の建築式の一。正面破風(ハフ)造にて、出入口と階段とは側面に設け、內部は一間の內を半分に仕切りて、その奧に神體を安置し、神座は階段の方に向はずして、側面に向ふもの。

おほやすみ-どの 大安殿【名】だいごくでん(大極殿)に同じ。おほあむどの。(小安殿に對して)〔古語〕

おほ-やすり 大鑢【名】西洋彫刻にて、元型を作るために用ふる大なる鑢。

おほ-やづか 大矢束【名】普通のより長大なる矢束。

おほやつびめ-の-かみ 大屋津姫神【名】月讀(ツキ)命の御子。おほやびめのかみ。

おほ-やね 大屋根【名】二階だての建物の上屋(ウハ)の屋根。(小屋根に對して)

おほ-やの-うらずみ 大屋裏住【名】〔人〕狂歌師。李綱(リコウ)の門人。通稱は久須美孫

兵衛。元、白河侯の藩士。江戸本町（ホンチ）二丁目に住し、白子屋孫左衛門と改名し、唐更紗の製造を業とす。奇行に富む。文化七年歿す。年七十七。

おほやの-さゑもんのじょう 大箭左衛門尉【名】〔人〕たひらむねもり（平宗盛）に同じ。

おほやの-しま 大矢野島【名】〔地〕肥後國の西天草群島の一。周回十五里餘。天草四郎時貞の生れし地。

おほ-やはず 大矢筈【名】芝居の鬘の一種。矢筈の大なるもの。

おほやびこ-の-かみ 大屋彦神【名】■大巳貴（オホナモチ）命の兄。素盞男（スサノヲ）命に從ひて新羅に行き、樹木の種子を播かんとせし、「土地瘠せて適せざるより、歸りて紀ノ國に播きたまへりと言傳ふ。いたけるの尊。

■**おほやがつひのかみ**（大禍津日神）に同じ。

おほやびめ-の-かみ 大屋姫神【名】おほやつひめのかみ（大屋津姫神）に同じ。

おほ-やぶ 大藪【名】大なる藪。

おほやぶ 大藪【名】〔地〕美濃國安八（アンパチ）郡にある町。長良（ナガラ）川の西岸。一方は車戸（クルマド）川に沿ふ。

おほ-やま 大山【名】■大なる山。高山。萬葉「み雪ふる越（コシ）の大山行きすぎていづれの日にか我が里を見む」■〔地〕相模國中（カナ）郡にある山。高さ四一二五尺。山上に阿夫利（アフリ）神社あり。一名、雨降山（アマフリ）。

おほやま 大山【名】〔地〕■相摸國中（カナ）郡大山の山中にある町。阿夫利（アフリ）神社の參詣者によりて賑ひ、挽物細工を產す。■羽前國西田川郡にある町。もとの大浦・友江・栃屋・菱津・中楯の諸村を合せたるもの。酒を產す。舊稱、大浦（尾浦とも書く）。

おほやま-いはほ 大山巖【名】〔人〕元帥、陸軍大將、公爵。舊鹿兒島藩士。幼名は彌助。戊辰の役各地に轉戰し、西南の役また功あり。明治十三年海軍卿となり、尋いで陸軍大臣となる。日清の役、第二軍司令官として出征し、日露の役、滿洲軍總司令官となりて偉勳を奏し、大勳位功一級に進む。晩年內大臣に親任せらる。大正五年薨ず。年七十五。國葬を以て葬らる。

おほやまかた 大山方【名】琵琶法師尙道六派の一。八坂方の祖城元の流を傳ふる嫡弟子に屬する流派。

おほやまくひ-の-かみ 大山咋神【名】大年（オホトシ）神の御子。母は天知迦流美豆（カヂカルミヅ）姫。一名、山末之大主（ヤマスヱノオホヌシ）神。一說に、建御雷（タケミカヅチ）神に同じと。

おほやまげんぷ 大山元孚【名】〔人〕裝劍の彫工。通稱は新左衛門。赤城軒と號す。水戸の人。人物の像に妙を得たり。

おほ-やまし 大山師【名】なみならぬ山師。

おほやま-じんじゃ 大山神社【名】あふりじんじゃ（阿夫利神社）に同じ。

おほやまだ-じんじゃ 大山田神社【名】信濃國下伊那（シモヒナ）郡下條（シタデウ）村に鎭坐せる神社。祭神は鎭西八郎爲朝の靈。

おほやま-つなよし 大山綱良【名】〔人〕舊鹿兒島藩士。初名は格之助。武術に精しく、戊辰の役、奧羽征討の參謀となりて軍功あり、後、鹿兒島縣の縣令となる。西南の役、賊軍にくみし、長崎に斬らる。

おほやまつみ-じんじゃ 大山祇神社【名】■おほやまじんじゃ（大三島神社）に同じ。〔大山積神社〕■佐渡國佐渡郡相川町に鎭坐せる縣社。祭神は大山祇命・木花開耶（コノハナサク）姫。慶長十年奉行大久保長安の鑛山の繁榮を祈りて勸請せるもの。

おほやまつみ-の-かみ 大山祇神・大山津見神・大山積神【名】伊弉諾（イザナギ）・伊弉冊（イザナミ）二神の御子。木花開耶（コノハナサク）姫の父。山を司りたまふといふ。一名、鴨建角身（カモタケツヌミ）命・三島溝樴耳（ミシマノミゾクヒミミ）命・大水神。おほみづのかみ。おほすゑつみのかみ。

おほやまと 大日本・大倭・大養德【名】〔地〕大日本國の古稱。（聖武天皇の御代の稱）起「大倭、オホヤマト」

おほやまと-くに-の-おほみや 大養德恭仁大宮【名】くにのみやと（恭仁都）を見よ。

おほやまと-じんじゃ 大和神社・大倭神社【名】大和國山邊（ヤマ）郡朝和（アサ）村大字新泉に鎭坐せる官幣大社。祭神は大國魂（オホクニタマ）神。舊稱、大國魂神社。

おほやまと-とよあきつしま 大日本豐秋津洲・大倭豐秋津島【名】〔地〕大日本の本土の古稱。起「大日本豐秋津島洲、オホヤマトトヨアキツシマ」

おほやまとねこ-ひこ-くにくる-の-すめらみこと 大日本根子彥國牽天皇【名】〔人〕かうげんてんわう（孝元天皇）に同じ。

おほやまとねこ-ひこ-ふとに-の-すめらみこと 大日本根子彥太瓊天皇【名】〔人〕かうれいてんわう（孝靈天皇）に同じ。

おほやまと-ひこ-すきとも-の-すめらみこと 大日本彥耜友天皇【名】〔人〕いきてんわう（懿德天皇）に同じ。

おほやまはこべ 大山繁縷【名】〔植〕石竹科に屬する草。山地に自生し、高さ二三尺。莖は柔軟、葉は對生し、披針形・鋭尖頭をなす。花は白色にして、七八月頃開く。

おほやままねり 大山參【名】相摸國中（カナ）郡なる大山神社に詣づること。六月二十八日より參詣するを初山（ハツヤマ）といひ、七月の盆中に登山するを盆山（ボンヤマ）といふ。

おほやま-もり 大山守【名】天皇御領の山林の管理人。〔古語〕萬葉「さざなみの大山守はたがためか山にしめ結ふ君もまさなくに」

おほやまもり-の-わうじ 大山守皇子【名】〔人〕應神天皇の皇子。菟道雅郎子（ウヂノワキイラツコ）皇子の異腹の御兄。雅郎子、皇太子となりたまふとき、恨みて不軌を計り、事發覺して謀殺せらる。

おほやまれんげ 大山蓮花・天女花【名】〔植〕木蘭（モクラン）科に屬する落葉喬木。山地に自生す。葉は廣倒卵形、表面は平滑、裏面には白毛密生し、春・夏の交、枝頭に白色の大なる花、下方を向きて開く。

おぼゆ 覺ゆ【動下二自】■『「思はゆ」（即ち「思はる」）の轉訛』思はる。感ず。〔古語〕伊勢「めづらかにやおぼえけん」■似る。あやかる。〔古語〕源氏「かたち・ありさま、あやしきまでぞおぼえたまへる」

おぼゆ 覺ゆ【動下二他】『前條の語より轉用せるもの』■忘れず。さとる。記憶す。源氏「あこが失せにしいもうとの顏はおぼゆや」■話す。語る。〔古語〕大鏡「いでおぼえたまへ、時時さるべき事のさしいらへ、繁樹もうちおぼえはべらんかし」

覺えたるぞ【句】汝より受けたるその怨は、記憶して忘れぬぞ。醒睡笑「餓鬼めぬ、おぼえたるぞ」

覺えてゐろ【句】今に復讐すべければ、その積りにて居よ。丹波與作「えゝ、胴慾な嬶（カカ）さま、おぼえてゐさっしやれ」

おぼ-ゆか 大床【名】■ひろびさし（廣廂）に同じ。〔武家時代の語〕太平記「これぞ皇居と覺えて、…衣冠正しくしたる人、三人・四人、大床に伺候して、警固の武士に、誰か候ふと尋ねられければ」■神社の濱緣（ハマエン）の上にある、主なる床。

おぼ-ゆき 大雪【名】甚だしく降る雪。萬葉「我が里に大雪ふれり大原のふりにし里に降らまくをのち」

おぼ-ゆな 大湯女【名】年たけたる湯女（ユナ）。（小湯女に對して）

おぼ-ゆび 大指【名】おやゆび（親指）（□）に同じ。おほおよび。〔古語〕

おぼ-ゆみ 大弓【名】■どきゅう（弩弓）に同じ。「弩」〔古語〕和名「弩、於保由美」■たいきゅう（大弓）に同じ。

おぼゆみ-の-し 弩師【名】どし（弩師）に同じ。〔古語〕三代實錄「弩師、オホユミノシ」

おぼ-ゆる 大緩【名】〔商〕相場にて、人氣の大に緩めること。

おぼ-ゆゑ 大湯坐【名】湯坐（ユエ）を大・小に分ちたる、その大の方。〔古語〕記「定二大湯坐・若湯坐一、オホユエ・ワカユエヲサダメテ」

おぼ-よぎ 大夜著【名】普通のより大きく仕立てたる夜著。（小夜著に對して）

おぼ-よこめ 大横目【名】■おめつけ（大目附）に同じ。■おほじゃうや（大庄屋）に同じ。

おぼよさみ-じんじゃ 大依羅神社【名】攝津國東成（ヒガシナリ）郡依羅（ヨサ）村大字庭井（ニハヰ）にある式內の古社。祭神は大巳貴（オホナモチ）神・月讀（ツクヨミ）命・垂仁天皇・五十飯（シヒ）宮。

おぼ-よせ 大寄【名】遊女又は藝人などを、大勢一所に集めて、賑かに遊ぶこと。

おぼ-よそ 凡・大凡【名】■物事の大體。あらまし。概略。■なほざり。おほやう。

萬葉「おほよそにわれし思はば人づまにありとふいもに戀ひつつあらめや」

おほよそ 凡・大凡【副】■すべて。おしなべて。およそ。■おほかた。たいてい。およそ。

おほよそ-ごろも おほよそ衣【名】『古語拾遺の歌に「みや人のおほよすがらにいさとほしゆきのよろしもおほよすがらに」とある「おほよすがら」といふ語を誤りたる語なりといふ』神樂人の著る衣。一説に、大裝ひ衣の意。〔古語〕夫木「霜の上に雪をかさねてみやびとのおほよそごろもさえあかしつつ」

おほよそ-びと 凡人【名】世上一般の人。常人。〔古語〕源氏「とやかくと、おほよそびとのおもはん心さへ、思ひめぐらさるるを」

おほよど 大淀【名】今の伊勢國多氣(タケ)郡大淀村の邊。その海邊よりは、二見(フタミ)浦・志摩ヶ浦の諸島及び尾張・三河等の海岬見渡されて、風景甚だ佳し。歌枕たり。新古今「おほよどの松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる波かな」

おほよどの 大淀の【枕】大淀にある瀬といふ意より、**おほせ**にかけていふ。順集「しら波のしらぬ身なればおほよどのおほせごとをばいかがたのまん」

おほよど-みちかぜ 大淀三千風【名】〔人〕俳人。名は部、字は友翰。無言堂と號す。伊勢國の人。毎日三千句を詠じ、これより三千風と號すといふ。終る所を知らず。

おほよび 大指【名】**おやゆび**(親指)の■に同じ。〔古語〕

おほよみ-やく 大算役【名】江戸時代に、銀座方にて、金銀貨幣の出來數を數ふることを掌りしもの。

おほ-よめ 大嫁【名】**あによめ**(兄嫁)に同じ。〔古語〕和名「姒婦。爾雅云、稚婦謂二長婦一僞二姒婦一、於保與女」

おほ-よもぎ 大艾・大蓬【名】〔植〕**いぶきよもぎ**(伊吹艾)に同じ。

おほ-よろひ 大鎧【名】■普通のより大きく造りたる鎧。平治「大鎧は著たり、馬は大きなり、乘りわづらふ」■古制の鎧。

(平安朝時代以後に出來たる胴丸(マルウ)・腹卷などと區別していふ)

おほ-ら 邑樂【名】〔地〕上野國十一郡の一。郡役所を館林(ウダテバ)町に置く。

おほ-らうか 大廊下【名】■幅廣く長き廊下。■德川時代の江戸城中の座敷の一。上・下の二室に分れ、襖には濱松・千鳥を畫き、三家・前田・島津などの大諸侯これに詰めたり。

おほ-らか 大らか【貌】ゆたか。たくさん。したたか。おほやう。おほどか。〔古語〕宇治「飯・酒・くだものどもなど、おほらかにしてたべ」

おほ-らかす 溺らかす【動四他】**おぼらす**(溺ぼらかす。おぼほらす。

おぼらす 溺らす【動四他】おぼれしむ。おぼらかす。

おほ-らんま 大欄間【名】芝居にて、御殿場などに、日覆(ヒオ)より釣下す大なる欄間。

おほ-り 御濠【名】城の濠の敬稱。

おほ-りうきう-じま 大琉球島【名】〔地〕**おきなはじま**(沖繩島)の別稱。

おほ-りんご 大林檎・苹果【名】〔植〕**たうりんご**(唐林檎)に同じ。

おほ-りんてん 大輪轉【名】『輪轉は、順次にめぐりて僞に敍せらるる義』古、正月の女敍位(ニヨヰ)の時、女司・主殿(モトノ)女官・御手水(オンテ)女官・掌縫女官・闈司(ツボネ)・主水(モヒトリ)・東豎(ワラハ)の敍留せられしこと。(小輪轉に對して)

お-ぼる 【動下二自】**おいぼる**(老耄る)の約。〔古語〕堀杰「歸りこんことも、おぼれておもほえず」

おぼる 溺る【動下二自】■水に沈む。浮び得ず。おぼほる。■深く迷ふ。はまる。ふける。惑溺す。源氏「胸ふたがりておぼしおぼるるを」

溺るるに及んで、船を呼ぶ【句】時機後れて、助かる見込なし。〔諺語〕

溺るる者は、藁をも摑む【句】危急の際には、平生顧みもせざりし物にも依頼す。〔諺語〕

よく泳ぐものは溺る【句】長所が、却って短所となりて、禍を招く。〔諺語〕

おほ-るすゐ 大留守居【名】江戸幕府の職制の一。將軍他出の時、江戸城に詰めし守衛。從四位に敍せられ、侍從に任ぜらる。元祿以後は缺職となる。るすゐがしら。

おほ-るり 大瑠璃【名】〔動〕燕雀(ツバメ)類に屬する鳥。山地に棲み、形は鶺鴒(セキレイ)よりもやや大きく、翼は三寸内外あり。雄は上面瑠璃色を呈し、喉・胸部は黑く、腹部は白く、雌は上面橄欖色を帶びたる茶褐色にして、腰部は黑褐色なり。きくおほるりびたき。竹林鳥。

おほるりびたき 大瑠璃鶲【名】〔動〕前條に同じ。

おぼれ-ぼれ 老耄【名】**おいぼれ**(老耄)の略。

おぼれ-じに 溺死【名】水に溺れて死ぬること。でぼし。

おほ-ろ 大櫓【名】櫓床(ロドコ)の間の二尺八寸ある船の櫓。四十挺だて以上の大船に用ひ、二人がかりにて押す。(小櫓に對して)

おほ-ろ 大爐【名】茶の湯に使用する爐の、通常のより三寸大なるもの、即ち一尺七寸四方なるもの。深さもこれに準ず。

おぼろ 朧【名】■海老(エビ)の皮を去り、揉(ス)りつぶして粉になし、味を附けて煮たる食品。■**おぼろどうふ**(朧豆腐)の略。**おぼろこぶ**(朧昆布)の略。■**おぼろまんちゆう**(朧饅頭)の略。

おぼろ 朧【貌】■薄く曇るさま。さだからぬさま。ぼんやり。朦朧。源氏「月、おぼろにさしいりて」■(特に)俳諧にて、春の夜のおぼろに見ゆるさま。

おぼろ-おぼろ 朧朧【貌】一面におぼろなるさま。

おほ-ろか 大ろか【貌】**おぼろげ**(朧氣)に同じ。〔古語〕萬葉「ますらをのゆくとふ道ぞおほろかに思ひてゆくなますらをのとも」

おぼろ-かげ 朧影【名】おぼろなるかげ。ほんのりしたるかげ。

おぼろ-かご 朧籠【名】ぼんやりしたる駕籠。(幽靈の乘れる時などにいふ)卯月潤色「手にもとられぬ朧駕籠、姿の山に肩かゆる」

おぼろ-ぎん 朧銀【名】銀製の器物の、表面を梨子地(ナシジ)にして、光澤を消したるもの。

おほ-ろく 大六【名】鈴蟲などを入るる籠の大なるもの。(小六に對して)

おほ-ろくろ 大轆轤【名】大形の轆轤事。しやち。

おぼろ-げ 朧氣【貌】■たしかならぬさま。不分明。おぼろか。■大よそ。一とほり。おぼろか。〔古語〕榮花「おぼろげにて思ひたつべきことになん侍らざりし」■『朧げならずの略といふ』一とほりならぬさま。おぼろか。〔古語〕土佐「おぼろげの願によりてにやあらん、風も吹かず、よき日出で來て」

おぼろ-こぶ 朧昆布【名】普通の昆布を薄く削りたるもの。薄雪昆布(コンブユキ)の類。吸物に用ふ。京都・大阪の名產。おぼろ。

おぼろ-ぞめ 朧染【名】寬文の頃、京都上京祐乘坊の辻子なりし紺屋新右衞門の創案せし染色。

おぼろ-づき 朧月【名】おぼろにかすめる月。春の月。朧月(ガツ)。

おぼろ-づきん 朧頭巾【名】頭巾の一。後砂金袋(作者不知)「めす笠はさながらおぼろづきんかな」

おぼろ-づきよ 朧月夜【名】おぼろなる月夜。おぼろづきの夜。春の夜。おぼろよ。おぼろづくよ。

おぼろづきよ-の-ないし 朧月夜内侍【名】源氏物語の中にありて、源氏の君と逢ぜし内侍。「月夜」に同じ。

おぼろ-づくよ 朧月夜【名】**おぼろづきよ**(朧月夜)に同じ。

おぼろ-どうふ 朧豆腐【名】椀に盛りて凝りかたまらせたる豆腐。おぼろ。

おぼろ-の-しみづ 朧清水【名】〔地〕『**おぼろ**(朧)は、**おはら**(大原)の訛ならんといふ』山城國愛宕(オタギ)郡大原の寂光院(ジヤクワウヰン)の東南にある小き泉。同國乙訓(オトクニ)郡の大原野にも同名の泉あるは、古歌によりて後人の附會せるものなるべし。後拾遺「水草ゐしおぼろのしみづ底すみて心に月の影は浮ぶや」

おぼろ-の-やま 朧山【名】〔地〕山城國にありといふ山。夫木「雉子(キギス)鳴くおぼろの山の櫻花かりにはあらでしばし見しかな」

おぼろ-はないろ 朧花色【名】ぼんやりしたる花色。今宮心中「死に場たづねて、露にしみづく帷子、肩と裾とはおぼろはないろ、腰に弘誓の舟に帆かけて」

おぼろ-ふじ 朧富士【名】徳川時代の編笠の形の一。色三味線「大小、よしやがかりにぼっこみ、朧富士といふ大あみ笠、ゆたかに著て」

おぼろ-ぶね 朧船【名】『朧は借字にて、水に溺れをる意なるべし』繋がずにうち捨てられて、水などにひたりてある、朽果てたる船。〔古語〕 奥竹集「なにはがたあしまの月のおぼろぶねかすみてみゆる春の曙」

おぼろ-まんぢゅう 朧饅頭【名】『中の餡のおぼろに見ゆる意』蒸饅頭の、うは皮をむきたるもの。おぼろ。「に同じ。

おぼろ-よ 朧夜【名】おぼろづきよ(朧月夜)

おぼろ-わ 大輪・輪【名】車の輪の外部の周圍にはむる金属製の輪。 和名「輪」於保和、車輪郭曲木也」 「脇差」に同じ。

おぼろ-わきざし 大脇差【名】ながわきざし(長

おぼろ-わざもの 大業物【名】刀劍の切味(キレ)のすぐれたるもの。

おぼろ-わし 大鷲・羌鷲【名】〔動〕鷲の一種。全體褐色にして、尾と羽とに白きところあり。脚は黄色、爪と嘴とは大くして鋭し。體の長さは二尺五寸以上、翼の長さ二尺に達す。本邦産中の最大なるもの。千島邊の海岸に棲み、海魚を捕へて食ふ。冬期、本州にも渡り來る。

おぼ-わた 大綿【名】〔動〕蚋(ヨブ)の、産卵期近づけるもの。〔東京の小供の語〕 童謡「大わた來(コ)い來い、飯(マヽ)食はせう、まんまがいやなら、魚(ト)食はせう」

おぼ-わた 大腸【名】だいちやう(大腸)に同じ。〔古語〕 字鏡「腥腸。六付之類、大腸也。於保和太」

おぼわだ 大和田【名】〔地〕㊀武藏國北足立(アキタチ)郡にある町。浦和(ウラワ)町の西南三里。㊁下總國千葉郡にある町。もとの大和田・宣田・高津・勝田の諸村を合せたるもの。佐倉町の西約三里。㊂攝津國西成(ニシナリ)郡神崎川の東岸にある濱。

おぼわだ 大輪田【名】〔地〕古、瀬戸内海の航路にありし港。今の攝津國兵庫港の地に相當す。今も和田岬の名殘れり。歌枕たり。一名、輪田。 萬葉「濱きよみ浦うるはしみ神世より千船のはつる大和田の濱」

おぼ-わだ 大曲【名】河・湖などの水の、陸地に深く入込みて、よどみたる處。〔古語〕 萬葉「ささなみの志賀のおほわだよどむともむかしの人にまたもあはめやも」

おぼ-わたし 大渡【名】㊀船の帆足をとる綱。おほまはしなは。㊁次條の略。

おぼ-わたしかけ 大渡懸【名】わたしかけ(渡懸)を見よ。盛衰記「内搦・外搦・大渡懸・小渡懸…さまざまにこそもみたりけれ」

おぼわたし-くわん 大渡鐶【名】帆の大渡の綱をとほす鐶。おほまはし。

おぼわだ-たけき 大和田建樹【名】〔人〕國學者。舊宇和島藩士。藩校及び廣島英語學校等に學び、東京大學古典科講師・高等師範學校教授等となり、後、著作に從事す。謡曲通解・鐵道唱歌などの著あり。明治四十四年歿す。年五十四。

おぼわだ-づくり 大和田造【名】おほわだぶね(大和田船)に同じ。

おぼわたつみ-じんじや 大海神社【名】攝津國東成(ヒガシナリ)郡に鎮坐せる式内の古社。

おぼわたつみ-の-かみ 大綿津見神・大海祇神【名】伊弉諾(イザナギ)・伊弉册(イザナミ)二神の御子。大海原を司りたまふといふ。

おぼ-わたばうし 大綿帽子【名】大形なる綿帽子。

おぼわだ-ぶね 大和田船【名】攝津國の大和田といふ地名によりて呼ぶ小舟。耕作と通船とに用ふ。その船側(ガワ)をすぐに通じて水押(ヘオ)に作り、上杷(ダイ)を戸立(トタテ)の外へ出して横艫(ヨコモ)にす。大和田づくり。

おぼ-わたり 大渡【名】〔地〕淀川の渡津の中にて、一日(ヒトヒ)・封戸(フ)と共に、史上に名あるものの一。古、宇治川の、巨椋(オグラ)湖に入り、今の淀城の南の邊にて、木津川と會せしその末流。

おぼ-わらは 大童【名】おとなの頭髪の、髻解けて、ばらばらになりたるもの。おほあらは。 平治「材木の上に跳ねおとされ、兜も落ちて、おほわらはになりたまふ」

おぼ-わらひ 大笑【名】㊀甚しく笑ふこと。たかわらひ。哄笑。㊁甚しく嘲り笑ふこと。甚しき物笑。

おぼわり-づた 大割蔦【名】紋所の一。下の圖を見よ。

(たづりわほお)

おぼ-ね 大蘭【名】〔植〕ふとね(太蘭)に同じ。 和名「莞。唐韵云、莞、漢語抄云、於保井、可二以爲レ席者也」

おぼね 大井【名】〔地〕㊀武藏國荏原(エバラ)郡にある町。北は品川町、南は大森町に接す。立合(アイ)川貫流す。工場多し。㊁美濃國惠那(エナ)郡にある町。木曾街道に當る。鐵道中央本線の一驛。

おぼね-がは 大井川【名】〔地〕㊀駿河國と遠江國との境にある川。源を甲斐・信濃の間なる白嶽・赤石二山脈の間に發し、駿河灣に入る。長さ三十一里。徳川時代に架橋・渡船を禁ぜられ、旅人は必ず人足を雇ひて渡れり。㊁山城國嵐山の下を流るる川。上流は丹波國の保津(ホヅ)川にて、下流は桂川となる。別稱、葛野(カドノ)川・戸難瀬(ヘナ)川。〔大堰川〕

おぼね-ぐさ 大蘭草【名】〔植〕ふとね(太蘭)に同じ。〔古語〕 萬葉「あふことはいならの沼のおぼねぐさよそにやこひむ袖はつくとも」

おぼね-ど 大井渡【名】〔地〕美濃國加茂郡太田町にある木曾川の渡(ワタ)。おほひど。

おぼね-の-つかさ 大炊寮【名】おほひのつかさ(大炊寮)の訛。 和名「大炊寮、於保爲乃豆加佐」

おぼ-ゑみ 黄精【名】〔植〕なるこゆり(鳴子百合)に同じ。〔古語〕 和名「黄精、於保惠美。一云、夜末惠美」 「(犬槐)に同じ。

おぼ-ゑんじゆ 大槐【名】〔植〕いぬゑんじゅ

おぼ-を 大緒【名】大なる組絲の緒。鬻の足を括るに用ふ。 和名「絛、於保乎、絲繩也」

おぼ-を 大峯【名】大なる峯。〔古語〕 堅「こもりくの初瀬の山のおほをにはたたりたてさををには」

おぼをか 大崗【名】姓氏の一。姓(カバネ)は忌寸(キイミ)。大和國添上(ソフノ)郡大崗郷の名を負へるならんといふ。

おぼをか 大岡【名】姓氏の一。藤原氏の分家。九條兼實の裔。その祖大岡忠勝、徳川氏に仕へて功あり、文祿三年歿せしが、子孫二家に分れ、一は三河國額田(ヌカタ)郡西大平の領主、一は武藏國岩槻(イワツキ)の領主となり、明治維新後、共に子爵を授けらる。忠相(スケタダ)は前者の祖。

おぼをか-しゅんぼく 大岡春卜【名】〔人〕畫家。名は愛翼。大阪の人。狩野風の畫を單獨に研究し、法眼に敍せらる。彩色刷の版畫を刊行して、浮世繪の先驅をなす。畫本手鑑・畫史會要・和漢名畫苑・丹青錦囊・畫功潛覽・籐畫便覽・明朝紫硯等の著あり。寶暦十三年六月歿す。年八十四。

おぼをか-ただすけ 大岡忠相【名】〔人〕徳川氏の臣。通稱は忠左衛門。忠眞の子。八代將軍吉宗に用ひられて、町奉行となり、裁斷流るるが如く、明奉行の譽高し。越前守に任じ、寛延元年大名の列に入る。寶暦元年卒す。年七十五。

おぼをか-たねまろ 大岡種麿【名】〔人〕畫家。惠尊とも云ふ。大岡男龍(ヲリヨク)五世の孫。佛畫を善くし、天皇より倭畫師(エヤシ)の稱を賜はり、神護景雲三年また忌寸(キイミ)の姓(カバネ)を賜はる。天智天皇時代の人。

おぼをか-ゑそん 大岡惠尊【名】〔人〕前條に同じ。

おぼをか-ゑちぜんのかみ 大岡越前守【名】〔人〕おほをかただすけ(大岡忠相)に同じ。

おぼをか-をたつ 大岡男龍【名】〔人〕本朝畫工の鼻祖。辰貴と稱す。武烈天皇時代の人。

おぼ-をけ 大桶【名】㊀大なる桶。㊁(特に)酒造用の大なる桶。おやをけ。ろくしやく。ろくしやくをけ。

おぼ-をそどり 大嘘鳥【名】〔動〕からす(烏)を罵りていふ語。〔古語〕 萬葉「烏とふおほをそどりのまさてにも來まさぬ君をころくとぞ鳴く」

おほ-をぢ 従祖父【名】祖父母の兄弟。〔古語〕「大なる男。」

おほ-をとこ 大男【名】體格の大なる男。長大男、總身(ソウシン)に智慧が廻(マハ)り兼ね【句】『もと川柳の句』體格のみ大にして、愚鈍なる男を嘲りていふ語。〔諺語〕大男の殿(ガリ)【句】體格のみ大にして、却りて人後に落つる譬。〔諺語〕

おほ-をどり 大踊【名】■多人數の踊。■徳川時代に、芝居にて、その日の狂言の終に、一座の俳優の擧り出でて行ひし舞踊。

おほ-をば 従祖母【名】祖父母の姉妹。〔古語〕「長大なる女。」

おほ-をんな 大女【名】體格の大なる女。

おま 馬【名】〔動〕うま(馬)の轉訛。 滕栗毛「次郎やい、にしがおまあ、だがおまだ」

おまい-ち【代】『御前達(オマヘ)の訛』同等以下の者に對する第二人稱の複數。 滕栗毛「お竹さん、おまいちのとこちやあ、みんな、これ、ようさして居るの」

おまかり-ます おまかり枡【名】伊勢神宮の子良館(コラウ)にて用ふる枡。 古今要覽稿「子良館の於麻加利枡。方四寸四分・深さ二寸あり、分積三萬八千七百二十分あり。今の京升五合九勺九撮有奇にあたる」

おま-く 御枕〔名〕まくら(枕)に同じ。〔幼兒の話〕

おま-け 御負【名】品物を賣るとき、その數量を普通以上に多くすること。

おまけ-に 御負に【副】『前條の語より轉じて用ふる語』その上に。それにつけくはへて。

おま-し 御座【名】天皇の御座所。おましどころ。 **おはしどころ**(御座所)參照。〔古語〕源氏「畫のおましに、ねざり出でおはします」

おまし-どころ 御座所【名】前條に同じ。〔古語〕源氏「よろしきおましどころにもとて」

おまし-ます 御座す【動四自】『おほします(御座す)に同じ。〔古語〕千載「みこにおましましける時」

おます【動四他】まゐらす。やる。おまらす。狂言(伯母酒)「はつ酒をおましたわいの」

おます【動下二他】前條に同じ。 狂言(胸突)「すきなやうにしておませう」

おま-す 御座す【動四自】■**おはす**(御座す)に同じ。〔古語〕■あります。ございます。〔大阪邊の語〕

おま-ち 御町【名】〔地〕吉原がよひする者の、吉原をさして呼ぶ語。町(チャ)。〔徳川時代の語〕

おまち-ぐるひ 御町狂【名】吉原ぐるひ。傾城ぐるひ。〔徳川時代の俚語〕

おま-つり 御祭【名】■神社のまつりの敬稱。祭禮。■房事。〔俚語〕

おまつり-さわぎ 御祭騒【名】祭禮の時の如く、ただ輕佻に騒ぎまはること。〔俚語〕

おま-と 御的【名】まと(的)の敬語。

おまと-ぶぎやう 御的奉行【名】武家時代の職制の一。弓始の時、矢數の記錄を掌りしもの。〔の語〕

おま-な 御眞魚【名】まな(眞魚)の敬語。〔女の語〕

おま-なはじめ 御學始【名】『まなはじめ(學)の略』主上又は貴人の、始めて學問をせらるること。〔古語〕

おま-はし 御廻【名】すりばち(擂鉢)を云ふ。〔女の語〕

おま-はり 御廻【名】■飯の菜(オカズ)。おめぐり。〔女の語〕■犬に敎へてぐるぐるとまはらする藝。おめぐり。〔俚語〕■拳(ケン)にまけたる者の、一たび身體を廻轉して、また拳を打つこと。〔俚語〕

おま-はり 御巡【名】巡査。警吏。〔俚語〕

おまはり-さん 御巡樣【名】前條の敬語。〔俚語〕

おま-へ 御前【名】■神・佛又は貴人の前の敬稱。おんまへ。おほまへ。 源氏「あながちに、おまへさらずもてなさせたまひしほどに」■**おぶつ**(持佛)を云ふ。〔眞宗の語〕きのふはけふの物語「誓願寺へまゐり、おまへなる額(ガク)を見て」

御前の池【句】禁裏又は貴人の家にある池。 平家「御前の池の龜岡に鶴こそ群れゐて遊ぶなれ」

御前の山【句】禁裏又は貴人の家にある山。

おま-へ【代】■第二人稱の敬稱。そこ。そなた。〔古語〕 落窪「縫ひさしたるは、おまへ縫ひたまへ」■第二人稱の卑稱。そち。なんぢ。■第三人稱の敬稱。〔古語〕源氏「これは、おまへに參らせたまへ」

おま-へ-けいはく 御前輕薄【名】その人の前にて媚(コビ)へつらふこと。おまへつゐしよう。面媚。〔俚語〕

おま-へ-さき 御前崎・御厩崎【名】〔地〕遠江國榛原(ハイ)郡の西南端より東南に向ひて突出せる岬。伊豆國の石廊(ウイラ)崎と對して駿河灣の灣口を成す。燈臺の設あり。

おま-へ-さた 御前沙汰【名】おほやけざた(公沙汰)に同じ。 狂言(內沙汰)「こなたは口不調法なるほどに、御前沙汰では、負になりませう」

おま-へ-さま 御前樣【代】おまへ(御前)の敬稱。

おま-へ-さん 御前樣【代】■前條の訛。■下等社會の婦人がその良人を呼ぶ稱。〔關東の語〕

おま-へ-しゆう 御前衆【名】おまへぶぎやう(御前奉行)に同じ。

おま-へ-つゐしよう 御前追從【名】おまへいはく(御前輕薄)に同じ。〔俚語〕

おま-へ-の-はま 御前濱【名】〔地〕攝津國武庫(コ)郡西の宮の海岸。神功皇后、三韓より凱陣のとき、筑紫より著船したまひし處。一名、廣田(ヒロタ)濱。 長唄「いさぎよき光にまがふ塵なれやおまへの濱につもる白雪」

おま-へ-びと 御前人【名】貴人の傍に仕へる人。〔古語〕

おま-へ-ぶぎやう 御前奉行【名】ひろうぶぎやう(披露奉行)に同じ。

おま-へ-まち 御前町【名】神社などの前にある町。 天の網島「福德にあまみつ神の名をすぐに天神橋といきかよふ、所も神のおまへまち、營むわざも紙みせに」

おま-へ-みさんしゆう 御前未參衆【名】鎌倉時代の、政所(マンドコロ)・問注所(モンチウジヨ)の寄人(ヨリウド)の稱。

おま-へ-らふそく 御前蠟燭【名】かうぐわんじやうそく(願寺蠟燭)に同じ。〔眞宗の語〕

おまむき-さま 御眞向樣【名】『眞向に造り又は畫けるが常なるよりいふ』佛像又は佛畫。〔俚語〕一代女「あらけなき所作に、おまむきさまを動かし」

おま-ん 御饅【名】まんぢゆう(饅頭)の略。〔關西の語〕俗謠「紀州紀の川・荒川・粉川(ハガ)、おまん包むは竹の皮」

おま-ん-が-あめ 阿萬飴【名】『興作思へば照る日も曇る、關の小萬(コマン)が涙雨」といへる俗謠の語をもぢりて名づけたるなるべし』徳川時代の末に流行せし飴賣の一種。女裝して、女の聲色を使ひて呼賣りせしもの。〔俚語〕

おまん-が-どき【名】おほまがどき(大禍時)の訛。

おまん-が-べに おまんが紅【名】あまがべに(尼紅)の訛。

おまん-さあ【代】第二人稱。おまへさま。あなたさま。〔薩摩國の方言〕

おまん-ずし 阿滿鮓【名】徳川時代に、一時流行せしといふ鮓。 後は昔物語「おまん酢は、寶曆の頃よりとおぼゆ。京橋中橋おまんがべにといふより、居所の地によりておまん酢といひたるなるべし」

おま-まんぶ【名】まもりぶくろ(守袋)又はきんちやく(巾著)を云ふ。〔幼兒の語〕 浮世風呂「これは何、お守袋(ガン)」

おま-まんま 御飯【名】まんま(飯)を丁寧にいふ語。〔幼兒の語〕

おまんま-おくれ【名】『飯を與へよの意』こじき(乞食)を云ふ。〔東京の小供の語〕

おま-まもり 御守【名】まもりふだ(守札)に同じ。 狂言(入間川)「小袖は…そなたにおまらするでもおりやらぬぞ」

おま-まらす【動下二他】おますに同じ。

おま-り【名】だんご(團子)を云ふ。〔伊勢國の方言〕

おま-る 御虎子【名】まる(虎子)を丁寧にいふ語。

おま-ゐる 御參る【動四他】まゐる(參る)■の敬稱。 醒睡笑「そなたは、二粒づつおまゐれ。我は、一粒づつ賜はらん」

おー み 臣【名】『大身(オホミ)の義』■君に仕ふる人。けらい。臣下。臣(シン)。■上古の姓(カバネ)の一。大連(オホムラジ)の連(ムラジ)におけるがごとく、もと大臣(オホオミ)の職に選び出さるる名族なりしに、大化改新以後は、降りて第六等の姓となれり。

臣の子【句】臣の姓(カバネ)の人。おむのこ。〔古語〕起「大君の心をゆらみおみのこの八重のしば垣入りたたずあり」

臣の男(コヲト)【句】君に仕ふる年若き男。〔古語〕萬葉「ものふの臣のをとこは大君のまけのまにまに聞くとぶものぞ」

臣の少女(ヲトメ)【句】君に仕ふる年わかき女。〔古語〕起「みなそそぐおみのをとめの」

おーみ 使主【名】上古の姓(カバネ)の一。蕃人に賜ひしもの。前條の臣と同義にて、ただ蕃人に賜ふといふ點より書分けしものならんといふ。

おみ【名】〔植〕もみ(樅)に同じ。〔古語〕萬葉「ゆの上の木群(コヲ)を見ればおみの木も生ひつぎにけり」

おーみ【名】『おみそづの略』さふすね(雜炊)を云ふ。〔播磨國の方言〕

おーみ 御身【名】おんみ(御身)に同じ。

おーみ 御身【代】おんみ(御身)に同じ。

おーみ 大御・御神【接頭】おほみ(大御)の略。「おみ輿(ヨ)」「おみ足」「おみ圖」

おみーあかし 大御燈明【名】おほみあかし(大御燈明)に同じ。四谷怪談「どりや、おみあかしても上げようかと、…お袖佛壇へ、あかしをつけ」

おーみい【名】みそ(噌味)及びみそしる(味噌汁)を云ふ。〔關西の女の語〕

おみえ-くわん 御見鑑【名】うちこみくわん(打込鑑)に同じ。

おみ-おつけ【名】『おみ・おみい・おつけを見よ』みそしる(味噌汁)を云ふ。〔東京の語〕

おーみき 御神酒【名】さけ(酒)の敬稱。(主に神前に供ふるにいふ)

おみき-とくり 御神酒德利【名】神酒を入れて神前に供ふる德利。

御神酒德利のやう【句】『御神酒德利は左右一對のものを用ふるよりいふ』兄弟などの同一の服裝をなせるなどの譬。〔俚語〕

おーみくじ 御御圖【名】みくじ(御圖)の敬稱。

おーみこし 御神輿【名】みこし(神輿)の敬稱。

御神輿が動かない【句】次條に同じ。〔俚語〕

御神輿を据ゑる【句】すわりこみたるまま、容易に立たんとせず。〔俚語〕

おみ-さま 御身樣【代】おみ(御身)の敬稱。「お身樣も、ただ一人の子を敵になされうか」「云ふ。〔女の語〕

あなたさま。おまへさま。國姓爺後日合戰

おみ-すかし 大御透【名】かたびら(帷子)を云ふ。〔女の語〕

おーみそ 御味噌【名】Ⅰみそ(味噌)の敬稱。〔女の語〕Ⅱさふすね(雜炊)を云ふ。〔女の語〕

おーみそう 御味噌【名】さふすね(雜炊)を云ふ。〔女の語〕

おーみそうづ 御味噌水【名】さふすね(雜炊)に同じ。

おーみそづ 御味噌水【名】さふすね(雜炊)を云ふ。〔羽前國の方言〕

おみ-とり 【名】ひとへもの(單物)を云ふ。〔女の語〕

おみな 嫗【名】年老いたる女。老女。おむな。おうな。〔古語〕起「老婆、オミナ」

おーみなん 御末男【名】おすゑしゆう(御末衆)Ⅱに同じ。どみなん。

おみ-ぬぐひ 御身拭【名】山城國嵯峨の清涼寺の本尊なる釋迦の佛像を、寺僧等が、白き絹にて拭ふ祭。昔は陰曆三月十九日、今は陽曆四月十九日に行はる。太祇「御僧のその手嗅ぎたや御身拭」「見よ。

おーみの-こ 臣の子【句】おみ(臣)の條下を見よ。

おーみま 御三間【名】次條の略。

おみま-どてん 御三間御殿【名】京都の舊皇居内の陛下の御常殿の後方に在りて、間數三つある居室。天皇方遷(カタタ)の時、この間に移らせたまふ。「語」

おーみみ【名】さふすね(雜炊)を云ふ。〔女の

おーみや 御宮【名】みや(宮)の敬稱。

おーみや 御土產【名】おみやげ(御土產)を云ふ。〔女又は小供の語〕狂言「青物商「おっつけ下向いたしまして、めでたうおみやを進ぜませう」

おみやう-じ 陰陽師【名】おんやうじ(陰陽師)に同じ。〔古語〕

おーみやうにち 御明日【名】みやうにち(明日)の敬稱。〔陸前國の方言〕

おーみやげ 御土產【名】Ⅰみやげ(土產)の敬稱。Ⅱ花合せにて、さしにて引くときに、終りぎはになりて、親の手にある價の高き札を尾季(キ)に取らるること。Ⅲ他に赴きて、病に感染し來ること。〔俚語〕「御土產を背負って來(ク)る」

おみやげ-にんぎやう 御土產人形【名】德川時代に、江戸の役人・諸侯の家士等が、上洛して下向する時、贈物に對する謝禮として堂上方より贈られたる人形。鋸の木屑を糊にて堅め、形ぬきにして造り、多くは裸體の幼童に縮緬(チリメン)の頭巾及び金襴の腹掛を著けしむ、又、裸體ならぬもありき。

おみやげ-にんぎやう。おほうちにんぎやう。

おみや-ばん 御宮番【名】江戸幕府時代に、久能山(クノウ)の東照宮を警守せし役。

おみる【動四自】『酒をおみき(御神酒)といふより、その語をしひて動詞としたるもの』酒に醉ふ。〔東京の花柳社會の語〕

おむ 臣【名】おみ(臣)に同じ。〔古語〕名義抄「臣、オム」

臣(オム)の子【句】「臣(オム)の子」に同じ。〔古語〕起「臣、オムノコ」

おむ 面【名】おも(面)に同じ。おむひてり(面ひてり)參照。〔古語〕

おむ 臆【動下二自】氣おくれす。畏る。臆(クオ)す。辨内侍日記「おめたる鬼とて、人人笑はせたまふ」

臆めず臆せず【句】毫もおそれず。怖れずひるまず。

おむ-かさり【名】よめいり(嫁入)を云ふ。〔陸前國仙臺の方言〕

おむかし【形二】『面(モオ)向(ムカ)しの約にて、喜ばしく面白き時は、おのづから面のその方に向はるる意ならんといふ』をかし。好ましし。おもしろし。おもかし。〔古語〕起覺宴「いさをしのただしき道のおむかしさとてぞわが名もきみはたまひし」

おむかしみす【動佐變他】次條に同じ。〔古語〕起「欣感、オムカシミセム」

おむかしむ【動四他】おむかしと思ふ。うれしく思ふ。よろこぶ。うむかしむ。〔古語〕

おむかへ-ばうず 御迎坊主【名】式の時、葬寺より出棺を迎へに來る僧。むかへそう。

おーむし【名】みそ(味噌)を云ふ。〔女の語〕藤梨毛「四角にして連木(ギレン)でおむしすらんすなら、大かた擂鉢(バチ)も四角ちやあるわいな」

おーむしやる【動四他】おもしやるの訛。狂言「腐癡「お目にかからいで歸ったと、おむしやってたもう」

おーむす 御娘【名】『むすはむすめ(娘)の略』他人の娘を三人稱的にいふ語。〔俚語〕

おーむすめご 御娘御【名】むすめご(娘御)に同じ。〔俚語〕

おーむつ 御襁褓【名】むつき(襁褓)Ⅱを丁寧にいふ語。おしめ。〔關西の方言〕

おむな 嫗【名】おみな(嫗)の轉。〔古語〕卷雙「百歳になりはべるまで、このおむな・おきなの見たてまつりはべるに」

おむな-かづら 芎藭【名】〔植〕をんなかづら(芎藭)に同じ。〔古語〕和名芎藭。唐韵云、芎藭、於无奈加豆良、香草也。根云二芎藭一、苗云二蘼蕪一」「見よ。

おむ-のこ 臣の子【句】おむ(臣)の條下を見よ。

おむ-ひてり 面ひてり【名】おもほてり(面熱)に同じ。〔古語〕雲巢記「赫然、於無目天利シ天」

おむみらく 以爲【副】『おもみるの延』おもひみるには。かんがへみるには。おもへらく。〔古語〕將門記「以爲、字書曰、以爲者、於牟美良久」

おむ-もの 佩物【名】おびもの(佩物)に同じ。おんもの。おふもの。〔古語〕和名「玉珮。唐韵云、珮、與レ佩同、於无毛乃、玉佩也」

おむ-もの 追物【名】おふもの(追物)に同じ。〔古語〕和名「馳射、俗云二於无毛乃以流一」

おーむら 御紫【名】〔動〕いわし(鰯)の異名。〔德川時代の奥女中の語〕

おむれつ（英 Omelette 佛 Omelette）【名】西洋料理の一。鳥又は牛肉を細末にし、牛乳・玉葱などに交ぜあはせ、鹽・胡椒などにて味をつけ、別に脂にて燒きたる玉子の皮にて包めるもの。

おーむろ 御室【名】おむろもんぜき(御室門跡)Ⅱに同じ。

おむろ 御室【名】Ⅰ〔地〕今の山城國葛野（カドノ）郡花園村全部及び衣笠（キヌガサ）村の一部に亘りし地域。今は花園村の内、仁和寺所在地附近の字となれり。Ⅱ**おむろにんわじ**（御室仁和寺）の略。俗曲「嵯峨や御室の花ざかり」

おむろ-がき 御室柹【名】〔植〕柹の一種。その實熟すれば、皮黄にして自粉を帶び、つるがきに似たり。味美なり。京都御室の名産。嵯峨柹。「いふ散藥。

おむろ-つぶ【名】阿蘭陀より舶來したりと

おむろ-にんわじ 御室仁和寺【名】『**おむろ**（御室）Ⅰを見よ』**にんわじ**（仁和寺）に同じ。

おむろ-の-ごしよ 御室御所【名】**にんわじ**（仁和寺）に同じ。

おむろは 御室派【名】御室仁和寺を本山とする眞言宗の一派。

おむろまゐり 御室參【名】昔、京都にて、三月二十一日に、仁和寺に參詣せしこと。昔は、この日に限り、御殿及び御庭の櫻を諸人に觀覽せしめられしなり。

おむろ-もんぜき 御室門跡【名】『**おむろ**（御室）Ⅰを見よ』Ⅱ**にんわじ**（仁和寺）の敬稱。Ⅲ仁和寺の上首。親王の承けつぎたまふものと定まり、關白を一の人といふに擬（ナゾラ）へて、世一僧ともいへり。おむろ。

おむろ-やき 御室燒【名】京都の仁和寺邊より燒きて出す陶器。もと仁和寺門前の仁清（ニセイ）、即ち仁和寺清兵衛の燒初めしものにて、京燒の元祖。初め狩野探幽・同永眞などに繪を書かせて燒きたりといふ。にんせいやき。にんせい。

おん 恩【名】めぐみ。いつくしみ。源氏「野山をわけても、恩をばつかうまつらん」

恩に受く【句】「恩に著る」に同じ。傾城反魂香「葛城が遣手になって出て、うけ返答をしてたも、恩に受けうと」

恩に掛く【句】次條に同じ。

恩に著せる【句】嘗て恩を施したることを言ひたてて威張る。恩に掛く。

恩に著る【句】恩を受けし事のあるを、ありがたく思ひて、忘れず。恩に受く。恩を受く。春花五大力「申し、源五兵衛さま、一生の御恩に著ます程に、皆さんの手まへは、今お頼み申したやうに、譯のある體に見せて下さりませ」

恩の死（シ）はせねごも、義理の死（シ）はする【句】次條に同じ。〔諺語〕

恩の死（シ）はせねごも、情（ケサ）の死（シ）をする【句】報恩のためよりは、情愛のために死ぬる者の方が多し。〔諺語〕

恩の主（ヌシ）より情（ケサ）の主【句】恩人よりも、情愛深き人の方を嬉しく思ふが、人情の常なり。〔諺語〕

恩の腹は切らねど、情（ケサ）の腹は切る【句】報恩のためよりは、情愛のために死ぬる者の方が多し。〔諺語〕

恩を仇【句】次條の略。〔諺語〕

恩を仇で返す【句】恩人に對し、恩を報ぜずに、却て害を加ふ。〔諺語〕

恩を受く【句】Ⅰいつくしみを受く。Ⅱ恩に著る」に同じ。

恩を市（ウ）る【句】あらかじめ恩を施して自ら利せんとす。

恩を棄てて無爲（ム）に入る【句】〔佛〕**きおんにふむゐ**（棄恩入無爲）を見よ。

恩を結ぶ【句】恩を施して、人望を得。

おん 音【名】Ⅰこゑ。おと。ね。Ⅱ漢字のこゑ。水の字を「すゐ」とよむ類。字音。（訓に對して）Ⅲ（理）物體の振動の、聽覺に感ずるもの。おと。音響。**おんば**（音波）參照。Ⅳ（語）人の音聲の一氣に出づるもの。清音・濁音の類。Ⅴ**おんてう**（音調）に同じ。音ど政ど通ず【句】『禮記の樂記篇に「治世之音、安以樂、其政和。亂世之音、怨以怒、其政乖。亡國之音、哀以思、其民困。聲音之道、與レ政通」とあるに本づく』音樂および詩歌の音調は、その世の治亂と一致す。〔諺語〕

音の高低【句】〔理・音〕**おんてう**（音調）Ⅰを見よ。

音の强弱【句】〔理・音〕「音の强さ」に同じ。

音の速度【句】〔理・音〕音波の波及する速度。空中にては、攝氏十五度の時、一秒の間に約一千一百尺、水中にてはその四倍、固體の場合には十倍乃至十七八倍。

音の大小【句】〔理・音〕「音の强さ」に同じ。

音の長短【句】〔理・音〕**ひやうし**（拍子）Ⅰに同じ。

音の强さ【句】〔理・音〕**おんりやう**（音量）に同じ。

音の調和【句】〔理・音〕二個若くばそれ以上の音が同時に鳴りて、耳に快感を與ふる現象。

音の波及【句】〔理〕音波の周圍に傳はること。

音の反射【句】〔理〕音波の周圍に球狀をなして傳はる途中、障碍物に衝突して、投射角に等しき反射角を以て反射する現象。**はんきやう**（反響）參照。

おん 唵（梵Oṁ）【名】〔佛〕悉曇（シツタン）にて阿（a）・汙（u）・摩（ma）の三字を合せたる文字。印度教・佛教共にこの一字を印度最古の密語として尊重す。印度教にては、阿・汙・摩の三字を天地創造の神なる梵天と天地保護の神なる那羅延天と天地改造の神なる大自在天とに配し、佛教の眞言宗にては、前述の三神一體の德をこの一字に聚めたりとし、この一字を念誦すれば三神の加護を一身に得と云ひ、その他種種の功德を述ぶ。「ふこと。

おん 蔭【名】父祖の勳功によりて位階を賜

おん【感】唖者などのうめく聲。おお。

おん 御【接頭】『**おみ**（大御）の音便』尊敬の意。おほみ。おみ。お。源氏「北の方のおんおとうとなり」

御の字【句】ちようど宜しきこと。まさに相應すること。〔東京の俚語〕

おん-あい 恩愛【名】『愛の字、上の恩の字の韻に引かれてナイと發音す』Ⅰいつくしみ。なさけ。めぐみ。Ⅱ〔佛〕恩によりて引かるる愛情、即ち親子・夫婦・兄弟などの家族などに對する愛情。解脫（ゲダ）の障碍をなすこと多し。方言「人をはぐくめば、心恩愛につかはる」

おん-あびらうんけん 唵阿毘羅吽欠【感】〔佛〕**おん**（唵）と**あびらうんけん**（阿毘羅吽欠）とを見よ。

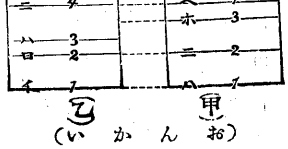
おん-あぼきや 唵阿牟伽（梵Oṁ amogha）【感】〔佛〕『阿牟伽は、不空（功德空しからざる意）と譯す』一種の呪詞。

おん-いる 御入る【動四自】あり。ござる。謠曲（八島）「旅人は都の人にて御入り候が」

おん-か 恩暇【名】休暇をたまはること。賜暇。

おん-が 御賀【名】天皇の寶算四十歲或は六十歲に滿たせたまふ時に、中宮・太上皇・太子・諸親王・大臣などより賀辭・賀物を上る儀。

おん-かい 音階【名】〔理・音〕『英 Music scale』ある原音と、そのオクテエブとの間の標準的樂音を、高低の順序に排列したるもの。樂曲を組織する材料又は基礎として用ふ。西洋音樂にては、一音階を七音に分ち、これに音名（その條を見よ）を附し、唱ふ時は、別に階名 DO, RE, MI, FA, SOL, LA, SI（イタリヤの聖頌歌 Ut queant laxis の頭字を取れるもの）を用ひ、我が國の初等唱歌教授法においては、アラビヤ數字を用ひ、我が國固有の數詞の稱呼を以て唱ふ。又、音階の種類に、全音階・長音階・短音階・半音階あり、又、音階中の主調音の音名に基きて、ハ調音・ト調音など呼ぶ。圖の甲はハ調長音階、乙はイ調短音階。



おん-かう 恩降【名】瑞祥・慶賀・疾病・災異等ある時に、特恩に依りて、全國の死囚の死を減等し、又は特に一二の罪を減等すること。

おん-かうぐすり 御河藥【名】**おんかはぐすり**（御河藥）に同じ。

おん-がく 音樂【名】Ⅰ〔音〕樂音の美術。聲樂と器樂とあり。いとたけ。Ⅱ（特に）笛・篳篥（ヒチリキ）などにて奏する樂。Ⅲ芝居の囃子（シヤ）の一。佛めきたるところ又は天人の出などに用ふるもの。

おん-がく 音學【名】■（語）おんゐんがく（音韻學）に同じ。■（理）おんきやうがく（音響學）に同じ。

おんがく-か 音樂家【名】音樂に巧みなる人。音樂師。音樂者。

おんがく-がくかう 音樂學校【名】音樂の理論と技術とを教授する學校。

おんがく-し 音樂師【名】おんがくか（音樂家）に同じ。

おんがく-しや 音樂者【名】おんがくか（音樂家）に同じ。

おんがく-たい 音樂隊【名】がくたい（樂隊）に同じ。

おんがく-だう 音樂堂【名】がくだう（樂堂）に同じ。

おんが-しま 恩賀島【名】（地）おきのしま（沖島）■に同じ。

おん-かた 御方【名】■貴人の居所。おほんかた。源氏「おのおの、十に餘りたまひて後は、御方異にて」■貴人の敬稱。

おんかたごしよ 御方御所【名】おかたごしよ（御方御所）に同じ。

おん-かはぐすり 御河藥【名】古、主上の沐浴の時に奉りし藥。白米なりとも、藜藥なりともいふ。おんかうぐすり。

おん-かふ 恩狎【名】なれしたしむこと。なじみ。

おんがへし 恩返【名】恩に報ゆること。恩を返すこと。はうおん。おんはうじ。

おん-がまし 恩がまし【形二】恩を施したるを誇るさまなり。きのふはけふの物語「われらに、寺を譲らうとて、恩がましく申されい候へども」

おんかん 恩簡【名】人からつかはされた手紙の敬稱。下學集「恩簡、オンカン」

おんがん 恩顔【名】いつくしみある御顔。謠曲（小袖曾我）「恩顔を拜せねば、御慰しさも一つ」

おん-ぎ 恩義・恩誼【名】めぐみ。おん。

おん-ぎ 音義【名】■音と意義と。■（語）一音ごとに有する意義。いちおんいちぎせつ（一音一義說）參照。

おん-ぎ 音木【名】（佛）佛具の一。讀經の時、緩急を調ふるために、句讀（クト）ごとに打鳴す拍子木のごときもの。割笏。

おん-がく 恩義學【名】（語）言語の音の意義につきて研究する學問。

おんぎ-せつ 音義說【名】（語）言語の聲音に、一つごとに各固有の意義ありといふ說。一音一義說。

おん-きふ 恩給【名】■めぐみて物をたまふこと。保元「恩給に申し替ふるとも、たとひ我が身を捨つるとも、いかでかこれを救はざらん」■戰役に出でて不具者となり、又は永く仕官したる功により、退官後も、政府より、終身、一定の金額を給與すること。

おんきふ-がく 恩給額【名】恩給の金高。（普通一ケ年に於ける金高にいふ）

おんきふ-きん 恩給金【名】恩給として支給せらるる金。

おんきふ-きよく 恩給局【名】內閣直屬の一局。恩給及び扶助料を受くべき資格又は權利の審査・裁定並に以上の支給に關する事を掌るところ。局長・審査官・屬の職員を置く。

おんきふきよく-しんさくわん 恩給局審査官【名】恩給局の職員の一。恩給局の事務を執る奏任官。

おんきふきよく-ちやう 恩給局長【名】恩給局の長官。總理大臣又は內閣書記官長の命を受けて、恩給局の事務を統轄し、所屬職員を監督する勅任官。

おんきふ-けん 恩給權【名】一定の條件を備へたる官吏が、退官の後、恩給を受くる權利。

おんきふ-しようしよ 恩給證書【名】恩給を受くる資格ある官吏に對して、國家より交付する證書。恩給局にて作製し、本屬廳を經て、本人居住地の地方廳より交付す。

おんきふせいきうしよ 恩給請求書【名】始めて恩給を受くる權利を得たる者が、恩給の支給を得んために差出す請求書。

おんきふ-ねんがく-けいさんしよ 恩給年額計算書【名】恩給の請求を受けたる各廳長官が、調査の上、請求の理由ありと認めたる時、その恩給の年額を算して、內閣總理大臣に差出す書面。

おんきふ-れい 恩給令【名】恩給に關する法律。

おん-きん 恩金【名】人よりなさけをかけて惠まれ又は貸されたる金。

おん-きやう 音響【名】音と、ひびきと。

おん-ぎやう 隱形【名】呪術によりて、我が身體を、相手の目に觸れぬやうにする術。隱身（オン）。太平記「蓋をあけたる櫃の中へ、御身を縮めて伏させたまひ、その上に、御經をひきかづきて、隱形の呪（ジユ）を御心のうちに唱へてぞおはしける」

おんきやう-がく 音響學【名】（理）物理學の一部。音響につきて研究するもの。音學。

おんきやう-き 音響器【名】『英Sounder』電信の通信に於て受信用に使用する器械。

おんぎやう-き 隱形鬼【名】（佛）形を隱して種種の禍などを現はすといふ鬼。

おんきやう-しんがう 音響信號【名】『英Sound signal』船舶の衝突を豫防するために、汽笛・號鐘・發砲などに依りて行はるる海上の信號。

おんきやう-そくていはふ 音響測定法【名】船舶が、濃霧又は暗夜のため、自己の位置を知ること能はざる時、汽笛・發砲等の方法を用ひ、その反響によりて附近の陸狀を知ること。

おんぎやう-やく 隱形藥【名】えいしんやく（鰯身藥）に同じ。

おん-きようじ 御凶事【名】■凶事の敬稱。■天皇の崩御。

おんきようじ-てんそう 御凶事傳奏【名】古、天皇崩御の時、御大葬につきての事を執奏せし者。

おん-ぎよく 音曲【名】■うたひもの（謠物）に同じ。■琴・三味線などの樂器に合せて謠ふうたひもの。

おんぎよく-し 音曲師【名】寄席（セキ）の藝人の淨瑠璃以外の俗曲を專門とするもの。

おんぎよく-ばなし 音曲話【名】話中に俗曲を插みて演ずる落語。

おんぎよく-むこ 音曲聟【名】能（ノウ）の狂言「の一。

おん-ぐう 恩遇【名】なさけをかけて待遇すること。厚遇。優遇。

おん-くん 音訓【名】■字音と字義と。■漢字の音と、我が國語にあてたる讀方と。

おん-くらべ 恩比【名】恩をくらべあふこと。薩摩歌「十月の宿こそ貸しはせね、恩くらべをして見たい」

おん-くわう 恩光【名】■植物が受くる春の日影。■君主の恩の譬。

おん-けい 恩惠【名】■めぐみ。いつくしみ。おん■（法）受くべき權利なくして與へらるる利益。贈與の如きはその一なり。■（哲）おんちよう（恩寵）■に同じ。

おんけい-きげん 恩惠期限【名】（法）『英Days of grace』恩惠として、已に期限の來れる債務の履行を猶豫する期限。例へば裁判官が事情を斟酌して、債務者の債務履行を猶豫せしむる期日、又は質屋が流（ナガ）期日を猶豫する類。手形の滿期日後支拂の猶豫をなす場合は、通常、恩惠日又は愛敬日（アイキ）と呼ぶ。猶豫期日。恩惠期日。

おんけい-きじつ 恩惠期日【名】（法）前條に同じ。

おんけい-び 恩惠日・恩敬日【名】（商）おんけいきげん（恩惠期限）を見よ。

おん-けごも 御食薦【名】大嘗祭の時、天皇の供物を載するための薦。

おん-けん 恩谷【名】おんこ（恩顧）に同じ。

おんけん 隱劍【名】『懷中に隱す劍の意』たんたう（短刀）に同じ。貞丈雜記「脇差は、もと、隱劍とて、長さ六七寸ばかり、鍔もなく、柄もまかず、懷中に隱して、脇にさす。即ち守刀なり」

おん-げん 恩言【名】いつくしみある言。はれみをかくる言。なさけある言。

おん-こ 恩顧【名】めぐみを蒙ること。あはれみ。なさけ。恩眷。十訓「不用のともがらには、恩顧ほどこし難し」

おんご【名】（植）いちね（一位）に同じ。（アイヌの語）

おん-ごと 御事【名】■ごと（事）の敬稱。大事。東鑑「宮、又、於二光明山鳥居前一有二御事一（御年三十云云）」■お人。おかた。おんかた。謠曲（加茂）「このあたりに見馴れ申さぬ御事

なり」

おん-こと 御事【代】第二人稱の敬稱。きみ。あなた。おこと。〔古語〕源氏「あけくれのながめにも、ただおんことをのみなん心苦しう思ひきこゆるに」

おん-こと 御事【接尾】こと(事)を見よ。

おんこま-の-げもん 御駒の解文【句】げもん(解文)の條下を見よ。

おん-ごん 慇懃【名】いんぎん(慇懃)[1]に同じ。謡曲「歌占」「釋迦大師の慇懃(ゴン)の教を忘れ」

おん-ころころ 唵呼嚕呼嚕・唵呼盧呼盧【感】〔佛〕次條の略。

おん-ころころ-せんだり-まとうぎ 唵呼嚕呼嚕旋茶利摩登祇・唵呼盧呼盧闍陀利摩登祇【感】〔佛〕『唵は(おん)(唵)を見よ。呼嚕呼嚕は不明。旋茶利(Candāli)は、四姓の外に在りて屠殺を業とする旋茶羅(Caṇḍāla)の女性、摩祇(Mātaṅgī)は、賤種の通稱の女性なるもの、男性は摩登伽(Mātaṅga)といふ』眞言宗にて、藥師如來に祈る眞言の呪文(ジュモン)に大小二種ある中の小の方。

おん-さ 音叉【名】『英Tuning fork』物理器械の一。良く鍛練したる鋼鐵の棒を曲げて、U字形としたるもの。これに脚を附け、共鳴によりて音を增大せしめんがために、木製の箱の上に立たしむ。その振動規則正しきがゆゑに、音響の振動數の標準として用ひらる。

おんざ 【名】恩にかけらるることならんといふ。〔徳川時代の語〕色三味線「七十に及んで、わけ知りといはるるは、誠に、おんざの初物なり」

おん-ざう 音聲【名】おんじやう(音聲)の約。〔古語〕桑花「塔の内の二世尊の出だしたまふところのおんざうども、思ひなされたまふこと限りなし」

おん-ざうし 御曹司【名】『ざうし(曹司)を見よ』堂上家又は武家などの子息の、いまだ部屋住(ズミ)なるものの敬稱。(源家嫡流の子息の上に最も多く用ひられたり)〔戰國時代以前の語〕

おんざうし-しまわたり 御曹司島渡【名】御伽噺の一。牛若丸の異國に渡り、その王女を娶りて歸國し、天下を平げし事を作れるもの。

おん-さき 御先【名】貴人の先に立ちて行く從者。おさき。前驅。

おん-さく 御幘【名】御幘冠(オンサクカン)に結び附くる白絹。次條參照。裴東拾「御神事の時は、御幘とて、白き絹を以て巾子(ジ)を結ばせたまふなり」

おんさく-の-かむり 御幘冠【名】天皇陛下の、神事の時に著けさせたまふ冠。無紋にして、平纓(ヒラエイ)を後より巾子(ジ)の上を引越し、前にて上へ折返して、白絹にて結ぶ。

おんざる 御座る【動四自】ござる(御座る)に同じ。おんじやる。滕翠毛「これでおんざります」

おん-し 蔭子【名】五位以上の人の子。蔭位を賜はるべき子。いんし。おんそん(蔭孫)參照。

おん-し 恩賜【名】君主などより賜はること、又その賜はりたる物。

おん-し 恩師【名】恩義を受けたる師匠。

おん-し 御主【代】『おぬし(御主)の音便』第二人稱。なんぢ。おまへ。きさま。〔駿河國の方言〕

おん-じ 音字【名】〔語〕『英Phonogram』一音ごとに一の文字ありて、文字そのものには意義なく、これを組合せて語となし文となすとき、はじめて意味を有するに至る文字。その中、我が國の假名の如く、子音と母音との綴音をただちに一字にて表はすものと、西洋の文字の如く、子音と母音とを別別に表はすものとあり。音標文字。(意字に對して)

おん-しう 恩讎【名】恩と、うらみと。恩人と、くゝひものと。飲食(インシク)。〔古語〕桑穆「百味を備へたるおんじきになりぬ」

おん-じき 飲食【名】『漢字の呉音』のみも

おんじき-よく 飲食欲【名】〔佛〕どよく(五欲)を見よ。

おんしざいだん-さいせいくわい 恩賜財團濟生會【名】施藥・救療の資として、明治天皇より下したまひし金員及びその利子を以て設立せられたる財團法人。これに總裁・會長各一人、副會長二人を置き、なほ顧問若干名を置きて、總裁の諮詢に應ぜしむ。

おん-しん 恩信【名】あはれみ深くまこと

おん-しん 音信【名】いんしん(音信)に同じ。

おん-しん 音信【助數】電報の語數の單位。和文電報にては、片假名又は數字十五字を一音信とし、これ以上は、五字を加ふるごとに一音信を增すものとし、濁音は二字に數へ、句讀(クトウ)點・括弧等の記號も一字づつに數ふ。

おん-しん 隱身【名】おんぎやう(隱形)に同じ。

おん-じん 恩人【名】おのれに恩を加へたる人。おのれを助けくれたる人。

おんしん-ふつう 音信不通【名】いんしんふつう(音信不通)に同じ。

おんしん-やく 隱身藥【名】えいしんやく(翳身藥)に同じ。

おん-しや 恩赦【名】天皇が、恩惠を以て、罪を赦し又は刑を減じたまふこと。恩免。しや(赦)參照。

おん-じやう 恩情【名】なさけある心。あはれむ心。れんみん。おんあい。

おん-しやう 恩賞【名】天皇の功をほめて物を惠み賜ふこと、又その物。

おん-しやう 恩奬【名】恩賞を賜ひて奬勵せらるること。

おん-じやう 恩聲【名】[1]おんせい(音聲)に同じ。おんざう。[2]次條の略。

おんじやう-がく 音聲樂【名】〔音〕雅樂に於ける管絃の樂の總稱。桑穆「三年掘れる谷に、天女音聲樂をして植ゑし木なり」

おんしやう-かた 恩賞方【名】おんしやうぶぎやう(恩賞奉行)に同じ。

おんじやう-にん 音聲人【名】音聲樂を奏する人。〔古語〕延喜式「内敎坊音聲人」

おんしやう-ぶぎやう 恩賞奉行【名】室町幕府の職制の一。評定衆・引付衆の中より選任せられ、將士の勳功を評し、恩賞の多寡を定むることを掌り、かねて社寺の寄進地等の事をも管せしもの。鎌倉時代の恩澤奉行に類して、管掌の範圍廣く、從って員數も十六七人以上に達したり。又、披露奉行の事に當る者もありしより、御前衆・御前奉行などともいへり。恩掌方。

おん-しやく 恩借【名】かたじけなく借り受くること、又その借りたる物。

おんしやく-きん 恩借金【名】恩借せる金。

おんしやく-けん 思赦權【名】〔法〕天皇の恩赦を行ひ得る憲法上の大權。

おんじやる 御座る【動四自】ござる(御座る)に同じ。おんざる。丹波與作「目だたぬやうに物かげへ寄って、ちよこちよこ濡れたがよくおんじやる」

おん-しゆ 隱首【名】無籍の人民が、自らその由を申し出づること。〔古語〕

おん-しゆ 恩主【名】恩を受けたる主人。

おん-じゆ 音儒【名】おんはかせ(音博士)の唐名。

おん-じゆ 飲酒【名】〔佛〕五戒の一。いんじゆ(飲酒)に同じ。

おんじゆく 御宿【名】〔地〕上總國夷隅(イスミ)郡にある町。勝浦町の東北二里。漁業地。

おん-じゆつ 恩恤・恩卹【名】めぐみあはれむこと。あはれみ。めぐみ。

おんじゆ-らく 飲酒樂【名】〔音〕雅樂における大食(タイキ)調の唐樂。

おん-じよ 恩敍【名】特別の恩遇を以て、位は陞りても、官は原官に留ること。じよりう(敍留)參照。〔古語〕

おん-しよく 音色【名】〔理・音〕『英Quantity of tone又はTimbre』調子は互に同じき音なれど、その發音體の種類につれ、振動狀態の同じからざるによりて生ずる差異。樂器の種類により、また男女・老少及び各個人により、互に獨得の音色ある類。ねいろ。

おん-しらず 恩不知【名】他人より恩をうけて、かたじけなしと思はぬこと。又その人。おんぬすびと。忘恩。

おんす 匁【名】(英Ounce)【名】[1]英・米兩國の衡目の單位。金量の時はポンドの十二分の一、常量の時は十六分の一。[2]英・米兩國の液體の容量の單位。ガロンの百六十分の一。北米にては百二十六分の一。

おん-すもじ 御す文字【名】おすもじ(御す

文字(二)に同じ。

おん-せい 音聲【名】人の口より發すること。おんじやう。おんざう。

おん-せう 恩詔【名】なさけあるみことのり。ありがたきみことのり。おんぜう。

おん-ぜう 恩詔【名】前條に同じ。〔古語〕

おん-せつ 隱截【名】國司が、ひそかに官物を盜むこと。〔古語〕

おん-ぜつ 音舌【名】こた(簧)に同じ。

おん-せん 陰錢【名】しせん(紙錢)に同じ。

おん-ぞ 御衣【名】(一)みぞ(御衣)に同じ。〔古語〕(二)よぎ。とのゐもの。〔古語〕五重(ヅ)の御衣【句】五色の絲にて模樣を織出したる衣服の敬稱。〔古語〕枕「えび染の五重の御衣に」

おん-そう 音奏【名】(一)禁中に於ける時の奏。問籍(モンセキ)。(二)ものの音を發すること。禁秘抄「公卿勅使、齋宮群行殊神事也、止二音奏一」

おん-ぞくかく 音續覺【名】〔哲〕『英Phonism』聽官には何等の刺戟なきに拘らず、他のある感官が刺戟を受けたるために音性の感覺を起すこと。視官より起るを視覺性音續覺といひ、觸官より起るを觸覺性音續覺といふ。

おん-そん 蔭孫【名】蔭位を賜はるべき孫。おんし(蔭子)參照。

おん-だ 御田【名】狂言の替間(アヒ)の一。

おん-たい 御大【名】『大は大將の略』一家の主人、又は一派の領袖。〔俚語〕

おん-たく 恩澤【名】めぐみ。おん。なさけ。おかげ。

おんたく-ぶぎやう 恩澤奉行【名】鎌倉幕府の職制の一。御家人の功勳を考へ、領地を賜ふことを掌りしもの。定員一人もしくは二人。勳功奉行。おんしやうぶぎやう(恩賞奉行)參照。

おん-たけ 御嶽【名】〔地〕おんたけさん(御嶽山)に同じ。俗謠「木曾のおんたけ夏でも寒い、袷やりたや足袋添へて」

おんたけ-けう 御嶽教【名】みたけけう(御嶽教)に同じ。

おんたけ-こう 御嶽講【名】美濃國の御嶽山に登山する人人の組織せる講中。

おんたけ-さん 御嶽山【名】〔地〕信濃飛驒の兩國に跨れる山。高さ一〇五〇〇尺餘。山頂には四時雪あり。夏期登山者の多きこと、富士山に讓らず。おんたけ。

おんたけ-じんじや 御嶽神社【名】みたけじんじや(御嶽神社)を見よ。

おんだし-いぬ 追出犬【名】路傍の犬を驅出して、犬追物(イヌオ)のごとくに射ること。東鑑「於二門前一射二追出犬一」

おんだし-もの 追出物【名】追出したる獸など。今川大雙紙「野山にて小牛又は犬などを…射ることあり、これをば追出物を射るなどと談るべし」

おん-たす 追出す【動四他】おひだす(追出す)の訛。

おんたのもそうぶぎやう 御憑奉行【名】室町幕府の職制の一。七月の晦日と八月の朔日及び三日とに、諸家より幕府に物を獻る式例ありしに對し、その返禮の物を取扱ひしもの。

おんたのも-ぶぎやう 御憑奉行【名】室町幕府の職制の一。諸家へ賜ふべき返禮物に關する御内書を調べしもの。

おん-たらし 御執・御弓【名】『たゆしは執らしの轉』大將の携ふる弓。おにたらし。平泰「たとひ千疋・萬疋にかへさせたまふべき御たらしなりと申すとも」

おんたらしの-そう 御弓奏【名】古、正月七日の白馬節會(ケフクエ)の時、十七日の射禮の料に兵部省より獻ぜし天皇の弓を、内辨の取次ぎて奏せし儀。公事根源「けふは兵部省より奉る御弓の奏ばかりを、内辨も奏問するなり」

おん-ち 隱地・陰地【名】隱蔽して、年貢を納めざる土地。

おん-ち 恩地【名】鎌倉時代に、將軍又は諸家の、その臣下に、代代の奉仕によりて與へし地。所領と同じく、賣買するを得ざる定なりき。

おんち-さこんたらう 恩地左近太郎【名】〔人〕楠氏四天王の一人。常に軍に從ひて殊功あり。正成の死後、正行を助けて、兵を擧げ、終る所を知らず。

おん-ちのひと 御乳人【名】おちのひと(御乳人)に同じ。謠曲「盛刈」「頼み奉り候ふ人の若子の、御乳人に御座候」

おん-ちゆう 隱忠【名】我が主君ならざる者に忠義だてをなすこと。

おん-ちよう 恩寵【名】(一)恩遇・寵愛。(二)〔基〕『英Grace』神の、功績なきものを愛し憐む德或は性質。又、神の性に基きて、信者の受くる德。神惠。恩惠。

おん-つう 音通【名】(一)〔語〕ある音が五十音圖の同じ行又は同じ列の間に轉換すること。「ひろふ(拾ふ)」が「ひらふ」となるが如きは、同じ行の轉換にて、縱の通(ヒヨ)といひ、「のく」(退く)が「どく」となるが如きは、同じ列の轉換にて、横の通(ヒヨ)といふ。(二)〔文〕俳諧にて、横井也有の「見えすくや魚の心もみづ(水)の月」のもとみ、又、蕪村の「身の闕の頭巾も通るつき(月)見かな」のるとつのごとく、五十音圖の同じ行又は同じ列の音の重なること。前者のごとく同じ行の音の重なるを、連聲(レンセイ)ともいふ。音通の親句(クシ)【名】〔文〕俳諧にて、五・七・五の各音節の頭に、五十音圖の同じ列の音を置けるもの。例へば太祇の句に「あらはなるかど(鶯)の寐ざまやなつ(夏)の月」の類。

おん-づまり おん詰【名】とどのつまり。おんづめ。おんのつまり。結局。終局。〔俚語〕

おん-づめ おん詰【名】前條に同じ。〔俚語〕

おん-て 隱田・陰田【名】おんでん(隱田)に同じ。

おん-てい 音程【名】〔理・音〕『英Musical interval』二つの樂音の間の振動數の比、即ち高さの隔り。長全音(9/8)・長半音(16/15)・短全音(10/9)・短半音(25/24)・八度音程(2/1)・五度音程(3/2)などの種類ありて、八度音程即ち一の音の振動數が他の音の振動數の二倍なるを、又オクテブともいふ。

おん-てう 音調【名】(一)〔理・音〕『英Tone』音の高低。發音體の振動數の多少に比例し、學術上には、一秒時間に二百五十六振動するものを、ハ調の一と定む。おんりつ。いんりつ。(二)口語の調子。音曲のふし。詩文の語路。

おん-て-ない 【句】おんでもないに同じ。〔足利時代の語〕狂言(しがり)「やい、そこな坊主、殺生をする事をして、佛のきらやるか。おんでないこと。いや、その仔細が、聞きたうおぢやる」

おん-てん 恩典【名】典禮によるめぐみ。

おん-てん 恩田【名】〔佛〕はちふくてん(八福田)を見よ。

おん-てん 隱田・陰田【名】官へ隱して、租稅などを納めずに、ひそかに耕作する田。かくしだ。いんでん。おんで。

おんでん-は 恩田派【名】〔佛〕ふじゆふせは(不受不施派)を見よ。

おんでん-びやくしやう 隱田百姓・陰田百姓【名】隱田を耕作する農夫。隱田百姓、作取(トリ)【句】みづから活計の道にたづさはることなく、安逸に生活する人の身の上の譬。〔俚語〕

おん-て-もない 【句】言ふまでもなし。勿論なり。おんでない。〔足利時代の語〕狂言(糞づくり)「片時(シン)も早う出ていね。おんでもない事、出ていかいで、何とせう」

おん-と 音吐【名】聲の出だしかた。こわづかひ。「音吐朗朗」

おん-と 音頭【名】(一)數人にて、奏樂又は唱歌をなすに、一人まづ奏し又は唱ひはじめて、調子を示すこと。おんどう。(二)音頭即ち唄に連れて、大勢一緒に踊ること。伊勢音頭・川崎音頭などの類。音頭を取る【句】(一)音頭取(オンドトリ)をなす。(二)首唱す。首唱者となる。

おん-と 我共【代】『おんども(我共)の略』第一人稱。われ。〔九州の方言〕

おん-と 音戸【名】〔地〕安藝國安藝郡にある町。音戸の瀨戸に臨む。

おん-どう 音頭【名】おんと(音頭)(一)に同じ。太閤記「石を綴子などにて包み、木やりのおんどうとり」

おん-どく 恩德【名】めぐみ。なさけ。おんたく。おんどく。

おん-どく 恩德【名】前條に同じ。〔古語〕

おん-どく 音讀【名】㊀漢字を、音のままに讀むこと。（訓讀に對して）㊁聲を出して書を讀むこと。（默讀に對して）

おんど-じま 音戸島【名】〔地〕安藝國倉橋島の別稱。

おんど-とり 音頭取【名】㊀數人にて歌ふ時、先づ發聲して、調子を示す人。發聲者。㊁物事の首唱者、又は指揮者。

おん-とな-ぶら 御殿油【名】おほとなぶら（大殿油）に同じ。〔古語〕蕃鈍、おんとなぶら參りて、少將の君臥したまひて」

おん-とな-ごもり 御殿隱【名】おほとのごもり（大殿隱）に同じ。〔古語〕

おん-とな-ごもる 御殿籠る【動四他】おほとのごもる（大殿籠る）に同じ。〔古語〕蜉花「御方たがへにおはしまして、おんとのごもりたるに」

おん-ど-の-せと 音戸瀨戸・隱戸瀨戸・隱渡瀨戸【名】〔地〕安藝國倉橋島即ち音戸島と安藝郡警固屋（ケゴヤ）村との間にある海峽。ほぼ西北に通じ、長さ約六町。安藝灘と吳灣との捷路なれども、幅は最狹部約四十六間、その中船を通ずべき部分は二十間に過ぎず。從つて、潮流急激にして、船行危險なり。平清盛の開鑿せしめし所と言傳ふ。俗謠「船頭かはいやおんどの瀨戸で」丈五尺の櫓がしわる」

おん-ども 我共【代】『己共（オオモ）の訛』第一人稱。われ。おのれ。おいどん。おんど。

おん-ど-ら 我共等【代】『己共等（オオレド）の訛』前條に同じ。〔九州の方言〕

おん-どり 音取【名】笛・篳篥（ヒチリキ）の合奏。

おん-な 嫗【名】おみな（嫗）の音便。〔古語〕

おん-な 今に、おんなをなん召す」

おん-ない 恩愛【名】おんあい（恩愛）を見よ。

おん-なかだち 御仲立【名】なかね（仲居）に同じ。

おん-なじ 同じ【貌】おなじ（同じ）の訛。俳諧新選（孤山）「なんぼいてもおんなじ事の枯野かな」

おん-なべ 【名】『おなべを見よ』よなべ（夜鍋）を云ふ。〔信濃國の方言〕

おん-なり 御成【名】おなり（御成）に同じ。〔足利時代の語〕

おん-ぬすびと 恩盜人【名】おんしらず（恩不知）に同じ。

おん-ぬりごめ 御塗籠【名】中古、內侍司（ナイシノカミ）の一部にて、劍・璽を安置せしところ。「同じ。ぬりごめ（塗籠）參照。

おん-ねこたん 恩禰古丹【名】〔地〕次條に同じ。

おん-ねこたん-たう 恩禰古丹島【名】〔地〕千島群島の一。幌筵（シムロ）島の西南。長さ二十四里・幅五里より十里まで。占守（シムユ）郡に屬す。

おん-ねぬま 恩根沼【名】〔地〕根室國根室郡にある沼。周回、七里。別稱、大沼。

おん-の 【感】おの（感）に同じ。〔古語〕名譽抄「咄、オンノ・ヤア」

おん-の-じ 御字【名】人又は物の上等なるもの。〔德川時代の語〕小獸總まくり「黑き羽織をかぶりたるを、兎のおんの字」

おん-の-つまり おんの詰【名】おんづまり（御詰）に同じ。

おん-ば 乳母【名】『御乳母（オオ）の音便』うば（乳母）に同じ。〔俚語〕

おん-ば 隱婆【名】さんば（產婆）に同じ。

おん-ば 音波【名】〔理〕『英Sound wave』音の媒介物が發音體の振動を受けて生ずる波。この波に疎密ありて、これが耳に入り鼓膜に觸るる時に、音の感覺生ず。

おん-ば 恩波【名】君恩の遍くゆきわたるを波に譬へていふ語。平家・家門繁昌のいにしへは、その恩波によりて私を顧みき」

おん-ばう 御坊【名】㊀僧の敬稱。ごばう。おばう。〔俚語〕㊁墓を守る者。はかばん。節用集大全「御坊、オンバウ。墓守之名」㊂火葬の時、屍を燒くを職とする卑しき者。おんばうやき。おんぼ。おんぼやき。〔隱坊〕〔俚語〕

御坊も燒賃（ヤキチン）【句】『御坊の死人を燒きて、その賃錢を得るに譬へていふ』いかなる卑しき職業にても、利益のためならば行ふ。いかなる仕事に對しても、報酬は有る筈なり。〔諺語〕

おん-はうじ 恩報【名】おんがへし（恩返）に同じ。

恩報じは出世の相（サウ）【句】恩を受けて忘れざるほどの心がけ善き人は、立身すべし。〔諺語〕

おんばう-やき 御坊燒【名】㊀おんばう（御坊）㊁に同じ。㊁魚などを、ぢか火にて燒くこと。〔俚語〕

おん-はかせ 音博士【名】大學寮の博士の一。漢音・吳音等を研究し、かねて素讀を諸生に授くることを掌りし人。こゑのはかせ。おはかせ。音儒。

おん-はかせ 御佩刀【名】みはかし（御佩刀）に同じ。

おん-ばこ 大葉子【名】〔植〕おほばこ（大葉子）の音便。

おん-はしらまつり 御柱祭【名】信濃國諏訪（スハ）郡下諏訪村にある諏訪神社にて寅及び申の年ごとに行ふ祭事。

おん-ばひがさ 御乳母日傘【名】おうばひがさ（御乳母日傘）に同じ。

おん-ばむし おんば蟲【名】〔動〕ちむし（地蟲）を云ふ。〔關東の方言〕

おん-びき おん蠶【名】〔動〕『青蠶（ヒキ）の訛か』かはづ（蛙）を云ふ。〔土佐國の方言〕

おん-びき 音引【名】漢字の字書の、字の音により引きうるやうに編纂せるもの。（畫引に對して）〔俚語〕

おん-びん 音便【名】〔語〕言語の發音の上にて、音の便宜に隨ひ、その音の變りて他の音に移ること、又その移りたる音。聲音學上よりいへば、原音中の或音の脫落によりて起る變化。「咲きて」を「咲いて」といふ類の伊音便、「早く」を「早う」といふ類の宇音便、「追ひつく」を「追っつく」といふ類の促呼音便、髮插しを「かんざし」（簪）といふ類の撥呼音便の四種あり。

おん-ぶ 【名】㊀背おはること。おぶさること。〔小供の語〕㊁人費を、他人に拂はしむること。〔東京の俚語〕

おん-ぶ 音部【名】〔音〕大譜表の上半と下半とを區別する名目。上半を高音部といひ、下半を低音部といふ。これに音名を配當すれば、圖の如く兩音部の中央の一線（加線として用ふ）上にあるを、「ハ」と定め、それより以上には、「ニ」・「ホ」・「ヘ」・「ト」・「イ」・「ロ」・「ハ」・「ニ」・「ホ」等と續き、以下にも「ロ」・「イ」・「ト」・「ヘ」・「ホ」・「ニ」・「ハ」・「ロ」・「イ」等と續く。高音部譜表の記號として用ふるを、高音部記號といひ、低音部のを、低音部記號といひ、合せて音部記號といひ、それぞれの譜表の首部に記す。又、高音部記號は譜表の第二線即ち「ト」音の占むるところに存するが故に、ト字記號ともいひ、低音部記號の位置は「ヘ」音の占むるところなるが故に、ヘ字記號ともいふ。

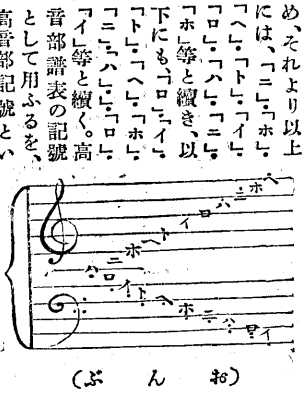
おん-ぷ 音符【名】〔音〕『英Note』譜表中の位置によりて音の高低を示すと同時に、その形によりて音の長短を示すに用ふる符號。𝅝（全音符）・𝅗𝅥（二分音符又は半音符）・♩（四分音符）・♪（八分音符）・♫（十六分音符）・𝅘𝅥𝅯（三十二分音符）・𝅘𝅥𝅰（單附點全音符）・𝅗𝅥.（單附點二分音符）・♩.（單附點四分音符）・♪.（單附點八分音符）・♫.（單附點三十二分音符）・𝅘𝅥𝅯𝅯（複附點全音符）など長短の差によりて、形種種あり。

おん-ぶ-きがう 音部記號【名】〔音〕『英Clef』

おん-ぶ 〔音部〕を見よ。

おん-ぶつ 恩物【名】『獨Gabe 英Gift 考案者の命じたる名目にして、幼兒に惠與せられたる恩賜品の意』幼稚園にて、感官の錬磨即ち精神遊戲の手段に供する具、又その作りたる物。積木（ツミキ）・豆細工・板ならべ・鐶ならべ・箸ならべ・粘土細工・縫取り・畫き方・紙織り・紙疊み・紙貼り・紙組み・繋ぎ方などあり、幼稚園を創設せるフレエベル（Fröbel）の考案に成る。

おん-ふね 御船【名】㊀貴人の乘る船の尊稱。みふね。㊁伊勢の兩宮の御遷座の際



に、御神體をかこみ覆ひ奉る船。

おんべ 御幣【名】おほにへ(大嘗)の音便。

おんーべい 御幣【名】ごへい(御幣)に同じ。

おんべうーもんじ 音標文字【名】おんじ(音字)に同じ。(象形文字に對して)

おんべーかつぎ 御幣擔【名】ごへいかつぎ(御幣擔)に同じ。

おんべーづかさ 織部司【名】おりべのつかさ(織部司)に同じ。

おんべーのーつかさ 織部司【名】おりべのつかさ(織部司)の音便。「に同じ。

おんへーもち 御幣持【名】ごへいもち(御幣持)

おんーぼ 御坊【名】〔おんぼう(御坊)〕に同じ。〔小供を云ふ。〔奥州の方言〕

おんーぼ 蔭補【名】祖父の官位に依りて、官位を受くること。おんね(蔭位)參照。

おんぼ 恩補【名】恩賞として職に補すること。「に同じ。

おんぼーやき 御坊燒【名】おんぼう(御坊)に同じ。

おんま 陰魔【名】〔佛〕『人間の眞性を損ひて菩提の智慧を妨ぐるよりいふ』うんま(陰魔)に同じ。

おんまつり 御祭【名】陰暦十一月二十七日に行ふ春日(カス)若宮の祭。崇德天皇の保延二年より行はる。

おんまはす 追廻す【動四他】おひまはす(追廻す)の訛。「追っかけおんまはす」

おんみ 御身【名】身體の敬稱。おみ。おほんみ。

おんーみ 御身【代】やや敬ひていふ第二人稱。おもと。ぬし。おみ。きみ。

おんみーさま 御身樣【代】前條の敬稱。あなたさま。

おんーみつ 隱密【名】〔隱してひそかに事をすること。いんみつ。祕密。〔かくしめつけ。しのびのめつけ。いんみつ。たんてい。〔德川時代の語〕〔〔佛〕說法の本意をあきらかに示さず、密に文内に隱すこと。

隱密の沙汰は高く言ふ【句】祕密にせんとすれば、却りて世間に知れわたる。〔諺語〕

おんべ

おんみやうーじ 陰陽師【名】おんやうじ(陰陽師)の音便。〔古語〕參考「おんみやうじ・かんなぎ」

おんみやうーれう 陰陽寮【名】おんやうれう(陰陽寮)に同じ。

おんむん 諺文【名】『漢字の朝鮮音』朝鮮の文字。種類は音字に屬し、梵字に摸して作れるものといふ。子音十四即ち ㄱ(k)・ㄴ(n)・ㄷ(t)・ㄹ(r)・ㅁ(m)・ㅂ(p)・ㅅ(s)・ㅇ(ㅋ(k)・ㅌ(th)・ㅊ(ch)・ㅎ(h)・ㄲ(kh)・ㄸ(th)・ㅃ(ph)と、母音十一即ち ㅏ(a)・ㅑ(ya)・ㅓ(ŏ)・ㅕ(yo)・ㅗ(o)・ㅛ(yo)・ㅜ(u)・ㅠ(yu)・ㅡ(eu)・ㅣ(i)・ㅡ(ä)とより成り、その二もしくは三を並記或は縱書して綴音を作る。もとは前記二十五字の外、ㅇ(v)・ㅇ(y)・ㅿ(n)の三音ありしが、今は用ひられず。李朝第四世の王世宗の創作に係ると言傳ふれども、詳かならず。うんむん。おんもん。

おんーめい 恩命【名】忝なきおほせ。ありがたき命令。

おんーめい 音名【名】〔音〕洋樂にて、譜表の位置を示すための名稱、即ち音階中の七音の名目。ハ・ニ・ホ・ヘ・ト・イ・ロ(又はC・D・E・F・G・A・B)を用ひて示し、これを基礎七音といひ、これより上にも下にも、この七つを反覆して用ふ。おんかい(音階)おんぶ(音部)參照。雅樂の宮・商・羽・角・徵(チ)・羽・嬰羽、又、尺八の「ハ」・「ヒ」・「リ」・「チ」・「ウ」・「レ」・「ツ」・「ロ」のごときも、音名といふを得べし。

おんめいーもん 陰明門【名】平安城の大内裏の内廓十二門の一。西面し、武德遊義の二門の間にあり、後涼殿の後に位せり。門内に右兵衛の陣ありき。

おんめん 恩免【名】おんしや(恩赦)に同じ。

おんも 【名】『おもて(表)の訛』家のそと。屋外。〔東京の幼兒の語〕

おんーもと 御許【名】おもと(御許)に同じ。

御許へ【句】書翰文の脇附(ワキヅケ)に用ふる語。「某樣おんもとへ」〔古語〕

おんーもの 佩物【名】おびもの(佩物)の音便。

おんーもの 追物【名】おむもの(追物)に同じ。

おんものーい 追物射・御物射・馳射【名】『おふものい(追物射)の音便』射藝の一。馬上にて獸をおひ廻して射ること。おひものい。盛衰記「起き上らんとするところを、おんものいにもするにて候ふ」

おんーもん 恩問【名】他人の訪問せられたるを敬ひていふ語。おたづね。

おんーもん 音問【名】音信にて安否を問ふこと。おとづれ。たより。消息。

おんもん 諺文【名】おんむん(諺文)に同じ。

おんーやう 陰陽【名】〔いんやう(陰陽)に同じ。〔天文・曆數・卜筮などによりて、人事の吉凶を卜する術。陰陽師の行ふ道。徒然「陰陽のとものがら」

おんやうーけ 陰陽家【名】次條に同じ。

おんやうーじ 陰陽師【名】陰陽寮に屬して、古筮・相地等の事を掌りし官人。おんみやうじ。おみやうじ。おんやうけ。いんやうか。ちらし。源氏「この國にかよひけるおんやうじ召してはらへさせたまふ」

陰陽師、身の上知らず【句】陰陽師は、人の吉凶のみを卜して、却りて我が身の上の事は知らず。占者(ウラナヒ)身の上知らず。〔諺語〕

おんやうじーぶみ 陰陽師文【名】陰陽道の書物。〔古語〕參考「くすしぶみ・おんやうじぶみ」

おんやうーせい 陰陽生【名】古、陰陽寮にて、陰陽を習ひし者。定員十人。

おんやうだう 陰陽道【名】陰陽寮の學科の一。占筮・相地等に關するもの。

おんやうーのーかみ 陰陽頭【名】うらのかみ(陰陽頭)に同じ。

おんやうーのーつかさ 陰陽寮【名】おんやうれう(陰陽寮)に同じ。 和名「陰陽寮、於辛夜乎乃豆加佐」

おんやうはかせ 陰陽博士【名】陰陽寮の官人。寮の學生に卜筮・天文・曆數などの事を教へしもの。定員一人。

おんやうれう 陰陽寮【名】古、中務(ナカツカサ)省に屬して、陰陽道に關する事を掌りし役所。頭(カミ)一人・助(スケ)一人・允(ジョウ)一人・屬(サクワン)大少各一人及び陰陽師六人・陰陽博士一人・陰陽生十人・曆博士一人・天文生十人・漏刻博士二人・守辰丁二十人の職員を置かれたり。うらのつかさ。おんみやうれう。おんやうのつかさ。

おんよう 音容【名】人の聲と、かたちと。いんよう。音貌。聲貌。

おんーよる 御寢【名】寢ねたまふこと。およること。およんなる參照。〔古語〕 辨内侍日記「夜もふけにしかば、御所も、おんよるにならせおはしまして」

おんら 己等【代】『おんはおれ(己)の音便』第一人稱。われ。おんども。〔大和國の方言〕

おんらい 恩賴【名】恩にあづかること。めぐみを受くること。「ゆ。

おんーらい 恩賚【名】たまもの。みたまのふ

おんり 【名】下(オ)りること。〔幼兒の語〕浮世風呂「さあ、下(オ)りしな」

おんーりつ 音律【名】〔理・音〕**おんてう**(音調)〔に同じ。

おんーりやう 音量【名】〔音〕樂音の大小即ち强弱。振幅の大小に正比例し、同一發音體にては距離の二乘に反比例し、又、空氣の密度の多少に正比例す。女子は男子に比して高音を發し得れども、音量は男子の方大なるがごとく、音の高低とは別なり。

おんりやうーけん 蔭涼軒【名】京都相國寺の塔中(タウチウ)の一。最も著名なりしものにて、鹿苑(ロクヲン)院の南に在りき。

おんりやうけんーにちろく 蔭涼軒日錄【名】〔書〕蔭涼軒の僧季瓊眞樂の記錄。記事永享七年より明應年間に亘り、當時の好史料たり。六十五卷。一名、季瓊日錄・永享日錄。

おんーろく 恩祿【名】主君よりたまはる祿。「御扶持。

おんーね 御井【名】〔神供を炊(カシ)ぐところ。〔みたらしにある井戸。

おんーね 恩威【名】恩と威光と。恩を施すと威を示すと。「恩威並び行はる」

おんーね 蔭位【名】『父祖の蔭によりて得る位の意』五位以上の者の子孫の賜はる位、即ち蔭子・蔭孫の賜はる位。おんぼ(蔭補)參照。

おんーねき 音域【名】〔音〕樂器又は人の發音し得る高低の限界内、即ちその振動の、

おんもん

おんよう

吾人の耳に音聲として響く限度。器樂にありては、最低音は一秒時に十六乃至三十四振動、最高音は三萬八千乃至四萬の振動、人聲は男女の性又は年齢等によりて高低の異同はあれど、その區域は極めて狭くして、二十三音度を領するに過ぎず。

おん-ねん 音韻【名】■漢字の音と韻と。こゑと、ひびきと。例へば「生存(ソンゾン)」の「セ」と「ソ」とは音「イ」と「ン」とは韻なるが如し。■〔語〕言語の外形を構成せる聲音。

おんねん-がく 音韻學【名】〔語〕■漢字の音韻を研究する學問。音學。■せいおんがく(聲音學)に同じ。

おん-め 御目【名】■め(目)の敬稱。■見ることの敬稱。■おめだま(御目玉)の略。

御目が行(イ)く【句】次條に同じ。

御目が參る【句】次條に同じ。狂言「文相撲」「御目見えをしやれ、御目が參ったら、當分に御げんざうであろ」

御目に入る【句】氣に入りたまふ。好しと思ひたまふ。狂言「文相撲」「御目見えをしやれ、御目に入ったら、そのまま御げんざうであろ」

御目にかかる【句】逢ひ奉る。對面す。

御目に掛く【句】■見せまゐらす。御覽に入る。■進呈す。まゐらす。御覽に入る。

御目に留(ト)る【句】「目に留る」の敬語。

御目にぶら下(サガ)る【句】「御目にかかる」を、戯れていふ語。〔俚語〕長町女腹切「太郎、内にか。四五日おめにぶらさがらぬ。えゝ珍しい、どっち風が吹いたぞ」

御目を貰ふ【名】こゝを言はる。叱らる。御目玉を頂戴す。〔俚語〕御伽名代紙衣「とても、おめもらふものなら、手をよう、女房ながら叱られてのけう」

おめ-あし 尫【名】『重足(アオモ)の義』足の腫るる一種の病。こゐあし。〔古語〕和名「尫、毛詩註云、腫足曰尫、足病也。辨色立成云、於寶阿志、此間云、古比。又卑濕之地、其人多尫」

おめいく 御影供【名】『大御影供(オヤクエ)の訛』陰曆十月十三日の日蓮上人の忌日。他宗の御影供(ミエ)といふにまぎるる故に、影を「めい」と變へていふ。おめいこう。お忌しき。

おめいこう 御命講【名】■みえいく(御影供)に同じ。〔眞宗の語〕■前條に同じ。〔日蓮宗の語〕芭蕉「おめいこう油のやうな酒五升」

おめ-おめ 阿容阿容【貌】『おめ(臆)を重ねたる語』恥をも知らぬさま。卑怯。のめのめ。盧藝記「烏帽子もとらず、もとどり放ち、おめおめと這ひ起きて」

おめ-おめし 【形二】おめおめとしてあり。〔古語〕梁花「あはあはしく人中に出で來て、かやうに物などきこゆる、いとおめおめしくあることなれども」〔語〕

おめ-めかし 【名】めかすこと、又その人。〔俚語〕

おめ-めかづら 【名】〔植〕あけび(通草)に同じ。〔古語〕字鏡「通草、於女葛」

おめ-がはり 面變【名】おもがはり(面變)に同じ。〔古の東國の方言〕萬葉「まけ柱ほめて造れる殿のごといませ母とじおめがはりせず」

おめ-めぐり 御回【名】■おかず。おさい。おまはり。〔古の女官、又京都・大阪の語〕■小供の鞠(ヤリ)をつきて、上に跳ねあがりたる鞠の地に落ちざる間に、身をまはして、更に落ちくる鞠をつくこと。■げっけい(月經)に同じ。〔女の語〕

おめ-ざ 御目覺【名】めざまし(目覺)■に同じ。〔女・小供の語〕

おめ-し 御召【名】■召すことの敬稱。河波藍「御めしの駒も、乘りかへも、己が故郷の北風に勇んで嘶ふ」■他人の衣服の敬語。■おめしちりめん(御召縮緬)の略。

おめしいだし 御召出【名】■召出すことの敬稱。おめしだし。■德川時代にて、藩士の家格の一。

おめしうま-あづかり 御召馬預【名】江戸幕府の職制の一。御馬預(オカリマア)と共に、若年寄の管下に屬し、將軍の乘馬の飼養・調習等を掌りしもの。諏訪部・村松兩氏の世職にして、西丸下の御廐内に住みたり。御馬別當。

おめし-おなんど 御召御納戸【名】おめしなんど(御召納戸)に同じ。

おめしかへ-ぶね 御召替船【名】將軍などの、お召替へに用ふる御座船。ござぶね(御座船)參照。

おめし-かん 御召艦【名】天皇陛下乘御の軍艦。天皇旗を掲げてこれを表示す。

おめし-ござふね 御召御座船【名】ござふね(御座船)の敬稱。

おめ-めしだし 御召出【名】■おめしいだし(御召出)に同じ。■室町及び江戸時代に、主人又は貴人の酒宴の席に召出だされて、御前にて酒盃を賜はること。

おめし-ちりめん 御召縮緬【名】『背貴人の著用せしものなるよりいふ』縮緬と同樣の織りかたにて、生絲(キイ)の代りに練絲を用ひたるもの。おめし。

おめし-なんど 御召納戸【名】御召縮緬(ヂチリメン)に御納戸鼠の染色をかけたるもの。おめしおなんど。

おめし-ねずみ 御召鼠【名】次條の略。

おめし-ねずみ 御召鼠【名】染色の一。紅氣を帶びたる濃き鼠色。おめしねず。

おめし-びな 御召雛【名】たかさごびな(高砂雛)に同じ。

おめし-ぶね 御召船【名】ござふね(御座船)「に同じ。

おめず-おくせ-ず 臆めず臆せず【句】おむ(臆む)の條下を見よ。

おめ-だま 御目玉【名】めだま(目玉)■の敬稱。〔俚語〕

御目玉を頂戴す【句】「御目を貰ふ」に同じ。〔俚語〕

おめ-つけ 御目附【名】めつけ(目附)の敬稱。

おめ-てたう 御目出糖【名】赤飯の代用として、祝儀の配物(ハクモノ)に用ふる一種の菓子。いり種に砂糖と紅とを加へ、甘納豆をまじへたるもの。

おめほ 思【動他】おもふ(思ふ)の已然形の訛。〔東國の古の方言〕萬葉「わろ旅は旅とおめほど戀にしてこめち痩すらむ我が身かなしも」

おめ-みえ 御目見【名】■貴人にまみゆること。謁見。■めみえ(目見)の敬稱。■俳優が、新に招かれたる芝居にて、始めて見物人の前に現れて技を演ずること。

おめみえ-いか 御目見以下【名】德川時代に、將軍直參の士の内にて、將軍にまみゆることを許されぬ者、即ち御家人(ゴケニン)。以下。(おめみえ以上に對して)

おめみえ-いし 御目見醫師【名】藩醫もしくば町醫師にて、特技を認められて、幕府の奥醫或は番醫となれるもの。

おめみえ-いじやう 御目見以上【名】德川時代に、將軍直參の士の内にて、將軍にまみゆることを得る者、即ち旗本(ハタモト)。以上。(おめみえ以下に對して)

おめみえ-きやうげん 御目見狂言【名】俳優が、新に招かれたる土地にて始めて演ずる狂言。

おめみえ-やしき 御目見屋敷【名】德川時代にて、江戸町内の四つ角の角屋敷。その持主は、名主と同じく、歲首に幕府に參賀し得る特典ありき。

おめ-むし 臆蟲【名】〔動〕わらぢむし(草鞋蟲)に同じ。えめむし。〔古語〕和名「臆蟲、一名、蛸嫉、於米牟之」

おめ-もじ 御目文字【名】『もじ(文字)は接尾語』御目にかかること。面會。〔女の語〕

おめらかす 【動四他】すべらす。ずらす。雅亮雙東抄「殿上人はおめらかして、五重も、三重も、紅葉がさねなどにしても出す」

おめる 【動四他】しかる(叱る)に同じ。〔尾張國・美濃國の方言〕續藤翠毛「奉公人を、がいにおめりよる報いで」

おめる 【動四自】くだる。したになる。建武中行平「二位の中納言は、大納言の未におめる。三位の宰相は、中納言の末におめるなり」

おも 面・面【名】■おもて(面)■に同じ。萬葉「さぬ山に打つやをのとの遠かどもねもとか子ろがおもに見えつつ」■表面。うはべ。源氏「あさぢは、庭のおもも見えずしげり」

面隠(カク)さる【句】はづかしさに、面(テオモ)を隠したくなる。〔古語〕萬葉「あひみればおもかくさるるものからにつぎて見まくの欲しき君かも」

おも 阿母【名】一はは(母)に同じ。〔古語〕起「於レ母亦兄、於レ吾亦兄、此云二於慕尼慕是・阿例尼慕是二」 二めのと(乳母)に同じ。〔古語〕萬葉「みどり児のためこそおもは求むといへ乳飲めや君がおも求むらむ」

おも【名】おもあどの略。

おも 重【貌】主として行ふさま。もっぱら。肝要。「蹶るのがおもだ」

おも-あし【名】『重足の義なるべし』くひす(踵)に同じ。

おも-あど【名】能(ノウ)の狂言にて、「あど」の主たる役。おも。

おも-あはせ 面合【名】物の表の方を内にして襲(カサ)ねあはすること。雅亮袋東抄「おもあはせにせで、うらあはせに畳みて」

おも-あら 面荒【名】馬などの顔の猛くあらあらしきこと。〔古語〕曾丹集「よそに見しおもあらの駒も草なれてなつくばかりに野はなりにけり」

おも-いれ 思入【副】おもひいれ(思入)の略。

おも-いれ 思入【名】一おもひいれ(思入)の略。二〔商〕おもはく(思惑)に同じ。

おもいれ-さんぢゆう 思入三重【名】芝居の囃子(ハヤシ)の一種。俳優が思入をなす時、幕を引く際の三味線の合方(カタヒ)。

おもいれ-し 思入師【名】おもはくし(思惑師)に同じ。

おも-もうし【名】もてなし。とりなし。〔徳川時代の語〕心中曾庚申「今日のおもうしも、麁相ほど御意に入る」

おも-おもし 重重し【形二】一甚だ重し。二甚だ厳重なり。三おちつきて威厳あり。(輕輕しに對して) 源氏「母みやすどころ、いとおもおもしく心ふかきさまに物しはべりしを」

おもがい 面繋・當面・鎌【名】『おもがき(面繋)の音便』馬具の一。馬の頭より轡に掛けて飾とする組緒。胸繋(ガイ)・尻繋(シガイ)と合せて三がい又は押掛(オシカケ)といふ。おもづら。おもがき・絡頭。

おもがい-だすけ 面繋助【名】たちぎき(立聞)二に同じ。

おも-がき 面繋【名】『面にかくるよりいふ』おもがい(面繋)に同じ。〔古語〕字鏡集「鞅、オモガキ・ムナガキ・ハルビ」

おも-がくし 面隠【名】おもがくすこと。恥。〔古語〕萬葉「玉がつまあはむといふはたれなるかあへる時さへおもがくしせず」

おも-がくす 面隠す【動四自】一恥ぢて、正面に向ひ得ず。〔古語〕二うはべをかくす。表面をおほふ。〔古語〕拾雪…おしなべて白きに、あやしきしづの屋も、おもがくして」

おも-がくれ 面隠【名】おもてのかくること。正面に向はぬこと。〔古語〕夫木「ねくたれの朝顔の花朝霧におもがくれして見せぬ君かな」

おも-かげ 面影【名】一顔のさま。かほつき。おもざし。文選「顔、オモカゲ」二今眼前に無き物の姿の、さながら眼前にある如くに思はるること。幻影。〔俳〕萬葉「遠かれば姿は見えず常のごと妹がゐまひはおもかげにして」三(文)俳諧の附合(ツケヒ)にて、古事の意味をそれとなく含ませて附くること。おもかげづけ。〔俳〕四香(カウ)の一。質は伽羅(キヤ)にて、蘭奢に似たる香を發し、火末は薄し。五古の名刀の一。太平記「長崎爲基が佩きたる太刀は、面影と名づけて、來(ライ)太郎國行が百日精進して、百貫にて、三尺三寸に打ちたる太刀なれば」

おも-かげ-ぐさ 面影草・俤草【名】〔植〕やまぶき(山吹)に同じ。

おも-かげ-づけ 面影附・俤附【名】〔文〕おもかげ(面影)三を見よ。

おも-かげ-やま 面影山・俤山【名】〔地〕因幡國にありといふ山。岩美(イハミ)郡面影村にある正蓮寺(シヤウレンジ)山に同じといふ。一説には、鳥取市にある城山なりと。六帖「わがせこがおもかげ山のさかさまにわれのみ戀ひて見ぬはねたしも」

おも-かし【形二】おむかしに同じ。〔古語〕字彙、偉慶、於毛加志。又字禮志」

おも-かた 面形【名】顔の形。おもざし。かほつき。〔古語〕萬葉「面形の忘れむしだは大ぬるにたなびく雲を見つつしぬばむ」

おも-かぢ 面舵【名】一船の舳を右へ向くる時の、舵の取りかた。(とり舵に對して)〔面機〕二船の右舷。

おも-がつ 面勝つ【動四自】面を合せて恥ぢず。物に向ひておそれず。〔古語〕記「與二伊卒加布神一面勝神」

おも-かに 面阡【名】おもくさに同じ。〔古語〕

おも-がはり 面變【名】おもざしのかはること。おめがはり。〔古語〕源氏「さとの名もむかしながらに見し人のおもがはりせるねやの月影」

おも-がへり 面がへり【名】能樂の三番叟の鈴の段の舞の内に、扇を片方に除けては面を切りて見廻す姿。

おも-がろし 面輕し【形一】静かなり。おとなし。あらあらしからず。〔古語〕

おもき 【名】丸木船の枻(ナ)の上の接(ハギ)。

おもき-づくり 重造【名】和船の造方の一種。ほくこくぶね(北國船)參照。

おも-ぎらひ 面嫌【名】小供の、見知らぬ人を見て泣くこと。人みしり。〔古語〕叢穏「をとこをば怖ぢず、おもぎらひもせず」

おも-くさ 【名】顔面に生ずる腫物。にきびの類。おもかに。〔古語〕字鏡集「阡、オモクサ・クロクサ」

おも-くす 重くす【動佐變他】おもんず(重ず)に同じ。徒然「詩歌に巧みに、絲竹にたへなるは、幽玄の道、君臣これを重くすといへども」

おも-くる 重くる【動下二自】おもくるしげに見ゆ。〔徳川時代の俚語〕一代女「常なる著物下がへに、綿をふくませ、その姿おもくれて」

おも-くるし 重苦し【形二】一押へつけられて苦し。二輕快なる趣なし。

おも-くろし 面黒し【形】おもしろし(面白し)に同じ。(戯(ザレ)ていふ) 花千句「霧はれて繪馬の鯰のおもくろし」

おも-ざし 面差【名】顔のやうす。おもかげ。かほつき。おもだち。面相。

おも-さま 思樣【副】おもふさま(思ふ樣)に同じ。〔俚語〕

おも-さるがく 面猿樂【名】種種の面相をして、人を笑はすること。〔古語〕行宗集「いかにせん橘食ひにまけぬればおもさるがくをするぞうたてき」

おも-し 重石【名】一物をおさへおく具。おし。おもり。二おもり(重)二に同じ。和名「權、波加利乃於毛之」 三人を制ししづむる勢。源氏「世のおもしとなりたまふべき」

おもし 重し【形一】一目方多し。輕からず。おもたし。うとし。後撰「秋萩の枝もとをになりゆくは白露おもくおけばなりけり」二貴し。身分高し。大切なり。重要なり。叢穏「徳いとかしこく、世におもく思はれ」三甚し。なみなみならず。重大なり。おもたし。源氏「おもき病を、あひたすけてなん參りてはべりし」四おちつきてあり。輕輕しからず。源氏「いみじうあだめいたる心ざまにて、そなたには重からぬを」五鬱してあり。ふさぎてあり。さわやかならず。おもたし。「氣がおもくて」「口おもし」

おもじ 重じ【形二】おもおもし(重重し)に同じ。〔古語〕續紀「聖(リジ)の天皇(スメ)が御世重ねて、おもじきし人の氏門(カバネ)と慈(グ)みたまひ上げたまひ來(ク)る家なり」

おも-しやる【動下二自】『御申しなさるの訛』言ひたまふ。仰せらる。おっしゃる。〔徳川時代の俚語〕御所櫻「昌俊の、わけておもしやる段段のことわり」

おも-しる 面知る【動四自】顔を見知る。〔古語〕萬葉「みづくきの岡のくずばを吹きかへしおもしる子らが見えぬころかも」

おも-しろ 面白【貌】おもしろきさま。新勅撰「なには潟あしまの氷けぬが上に雪ふりかさぬおもしろの身や」

面白狸(キツネ)の腹鼓(ハラツヅミ)【句】『おもしろし(面白し)のしろ(白)を、白き狸に言ひかけ、狸は腹鼓を打ちて獨り興ずるものなれば、樂しき意を示せり』興に入りて樂しき意。〔俚語〕「ろくおもふ。

おもしろ-がる 面白がる【動四他】おもし

おもしろ

おもしろし 面白し【形一】心浮きたつやうなり。喜ばし。感多し。興あり。伊勢「その澤に、かきつばたおもしろく咲きたり」

おもしろづく 面白盡【貌】面白みに任するさま。面白みのためにするさま。〔俚語〕

おもしろふ 【動四他】もてあそぶ。賞玩す。めづ。〔古語〕名謙抄「賞、オモシロフ・モテアソブ」

おもしろみ 面白味【名】『みは形容詞の語幹に附く接尾語、味は假借の文字』おもしろきあぢはひ。おもしろきこと。興味。

おもしろやま 面白山【名】〔地〕羽前國東村山郡と陸前國名取郡とに跨れる山。高さ四二九〇尺。

おもしろをかし 面白可笑し【形二】何となく心浮きたちて面白し。〔俚語〕狂言「目近大名」「さてもさても、おもしろをかしい事かな。太郎くわじや・二郎くわじやめが、都で、したたかだまされてうせて、はやし物してくる」

おもすみ 【名】やまのは（山端）に同じ。〔古語〕秘藏抄「おもすみにまだ出でやらぬ月影をなほたちかくす宵のむら雲」

おもぞる 面反る【動下二自】皮膚ただる。〔德川時代の俚語〕世間娘氣質「目のはたおもぞれて、よからぬ事」

おもたか 面高【名】顔を勢よく上ぐること。おもたかふだ（面高夫駄）參照。〔古語〕

おもだか 澤瀉【名】一〔植〕澤瀉科に屬する多年生の草。池・澤などに生じ、葉は慈姑（クワイ）に似て小く、夏、莖を出して、三瓣の白花開く。觀賞用として栽培せらる。なまゐ。はなぐわゐ。風雅「おもだかや下葉にまじるかきつばた草ふみわけてあさるしらさぎ」二紋所の一。おもだかの花と葉を配せるもの。種種あり。三鏃（ハヤジ）の一種。澤瀉の形せるもの。四源家の鎧の一。札（ネリ）は黑塗、總萌黃の絲にて澤瀉縅にし、耳絲は白きを用ふ。天曆中、源滿仲の左近士に命じて造らしめしものといふ。保元「重代相傳仕って候ふ月數・日數・源太がうぶぎぬ・八龍・澤瀉・楯無し・膝丸と申して、八領の鎧候ふが」

（おもだか一）

おもだか

おもだかくわ 澤瀉科【名】〔植〕顯花植物。單子葉類に屬する一科。草本にて、池・沼等に生じ、熱帶・溫帶の兩地方に分布す。さじおもだかくわ。たくしやくわ。

おもだかぐわゐ 澤瀉慈姑【名】おもだかの球莖。

おもだかずり 澤瀉摺【名】布に澤瀉の形を摺りて模樣とせるもの。

おもだかのまる 澤瀉丸【名】紋所の一。澤瀉の葉と花とをあしらひて圓くゑがけるもの。

おもだかふだ 面高夫駄【名】顔を勢よく上げたる驛路の荷馬。一說に、夫駄は斑毛（ブチ）の馬なりと。〔古語〕萬葉「おのれゆゑのらえてをれば蘆毛馬のおもたかふだに乘りて來べしや」

おもだかをどし 澤瀉縅【名】鎧の、色色の絲にて、上狹く下廣く、澤瀉の葉の形におどしたるもの。

おもたし 重たし【形一】一おもし（重し）一に同じ。〔俚語〕鬼貫「水鳥のおもたく見えて浮きにけり」二おもし（重し）三に同じ。用明天皇職人鑒「造りし罪のおもたきこと」

おもたせ 御持たせ【名】一『せは、敬語の助動詞』手づから携へて來て下された御贈り物。春花五大力「鯛のはま燒に、蛸のさくら煮、これは、きびしいおもたせぢや」二『せは、使役の助動詞』使に持たせて贈りきたれる品物の敬稱。

おもたせもの 御持たせ物【名】前條に同じ。

おもただし 面正し【名】面目あり。面目好し。おもておこしなり。〔古語〕枕「そこに入りゐて見るは、いとおもただし」

おもだち 面立【名】かほだち。かほつき。おもわ。おもざし。容貌。謠曲「土車」「さすが見馴れしおもだちを」

おもだつ 重立つ【動四自】主となる。かしらだつ。「おもだちたる人」

おもだて

おもだて 面立【名】おもだち（面立）に同じ。

おもたる 面足る【動四自】顔うるはしくととのふ。〔古語〕

おもだるき 主樞【名】おだるき（地樞）に同じ。

おもだるのかみ 面足神【名】天地の漸く成りたる時出でましたりといふ神。

おもちち 母父【名】母と父と。父母（ボフ）。〔古語〕萬葉「祖（オヤ）の名もつきゆくものとおもちちに子どもに語らひ」

おもちや 玩具【名】『もてあそびがもちやそびと轉じて、下略』小供のもてあそびもの。てあそび。玩具（ガング）。〔俚語〕

おもちやせんべい 手遊煎餅【名】小麥粉・砂糖・鷄卵を混ぜ、燒きあげて反（ソリ）をつけたる煎餅。一つごとに面に、風景・動物などの模樣あり。

おもちやや 玩具屋【名】小供の玩具を賣る家。〔俚語〕

おもちやゆみがしら 御持弓頭【名】江戸幕府の職制の一。將軍の弓を預かり、又、戰時、與力・同心を率ゐて、旗本を警衛することを掌りしもの。

おもつき 御物忌【名】もつき（物忌）の敬稱。

おもづく 面就く【動四自】目につく。一說に、その面に似つく意なりと。〔古語〕萬葉「あたらしきまだらの衣面づきてわれにおもほゆいまだきねども」

おもつせい 【名】十二月三十一日。大晦日。〔甲斐國の方言〕

おもつたい 重たい【形】おもたし（重たし）の訛。〔東京の俚語〕

おもづら 鞦頭【名】おもがい（面繋）に同じ。一說には、面繋とは別にて、馬の鼻の上にかけて、裝飾とし又牽くに便ならしめたるものなりと。鼻革。〔古語〕和名「鞦頭。唐韻云、鞦、楊氏漢語抄云、鞦頭、於毛都長。鞦頭也。羈、馬絡頭也、今案、馬絡頭、即鞦頭也」

おもづらひげ 鞦頭髭【名】ほほひげ（頰髭）に同じ。

おもて 表【名】一物の外側にあたる部分。そと。おも。（裏に對して）「疊のおもて」「織物のおもて」二家の入口に近きところ。（裏に對して）三建物の外。屋外。戶外。四客人などを請ずる座敷。（奥に對して）源氏「この西おもてにぞ、人のけはひする」五德川時代に、將軍の政を聽きし處。（中奥・奥・大奥に對して）六おほやけ。公然。「おもての沙汰」七うはべ。表面。陽。八しるし。記號。九芝居の木戶。（樂屋を奥といふに對して）十下駄に附くるたたみ。「おもてつきの下駄」十一相撲（スマヒ）・劍術などの手の正式なるも、又、茶の湯の流儀の正しきもの。（略式を裏といふに對して）十二船の舳又は艫。（普通には舳をいふ）十三「表の間（マ）」の略。十四おもてせんけ（表千家）の略。（裏に對して）十五（文）俳諧にて、懷紙の初折の表なる半面の見渡。百韻の懷紙には、四折とも表・裏はあれど、單に表とのみいふ時は、初折の表なり。

おもて

表に立つ【句】他人をさきに立て、おのれその後に從ふ。曾我「はるかに參らず候ひつる恥かしさに、十郎を表に立てて參り候ふ」「も近き間（マ）。

表の小間（マ）【句】和船の舳先（キサ）に最近き間（マ）。

表の敗（キシ）【句】おもてごき（表敗）に同じ。

表の能（ノウ）【句】能樂・田樂にて、現在の我が身のことを語り舞ふこと。例へば「鸚武小町」・「富士太鼓」の類。（陰の能に對して）

表の間（マ）【句】和船の表の小間（マ）と胴の間（マ）との間にある間（マ）。おもて。

表の眞向（マムキ）【句】なみせぎ（浪關）に同じ。

表弱し【句】表むきには弱し。

一の表【句】（文）懷紙の一の折の表。

おもて 面・面【名】一『表の意』二かほ。おも。おもや。おもわ。顏面。（心をうらといふに對して）源氏「中將の君、おもてのおひかはる心地して」三おもてがた（面形）の略』めん。假面。おもてがた。狂言「ねげがら」「餘念もなう寢てをる。…これに鬼のおもてが御坐るほどに、著させて、おきませう」四めんぼく。體面。名譽。（古語）紀「何以二面目一、ナニノオモテアリテカ」

面有り【句】めんぼくあり。ほまれなり。（古語）

面つれなし【句】平氣にて、薄情なり。

平造（ヒラヅクリ）おもてつれなう物をばのたまふものかな」

面に泥(ひぢ)を塗る【句】「顔に泥を塗るに同じ。

面に負く【句】相手を畏れて、心臆す。盛衰記「おもてにまけて、委しく言はぬこともぞある」

面の波【句】顔による皺(ワシ)。

面差かし【句】顔を合はするがはづかし。〔古語〕 桜題「御方のおとどや、かやうの事聞きたまふらんと思ふこそ、おもてはづかしけれ」 「恥かし。

面ほてる【句】顔あかくなる。赤面す。

面もふらず【句】一心に思ひつめて、脇見もせず。

面を犯す【句】その人の目前を憚らず諫めなどす。直諫す。

面を起す【句】■顔を上ぐ。あふむく。■ほまれとなる。榮譽を得。おもておこしをなす。(「面を伏す」に對して)〔古語〕蜻蛉「わがおもてをおこしつること」

面を墻(カキ)にす【句】『論語の陽貨篇に「人而不レ爲二周南・召南一、其猶二正面牆而立一也與」とあるに本づく』物の道理を見抜く力なき譬。〔諺語〕 千載「これを學び携はらざるは、面をかきにして立てらんがごとし」

面を越す【句】さきがけをなす。醴曲(巳)「礪波(トナ)山や倶利伽羅(カラ)・志保の合戰に於ても、分捕・高名のその數、誰におもてを越され、誰に劣る振舞のなき(無・ビ)世がたりに、名をばし思ふ心かな」

面を曝(サラ)す【句】■顔を衆人の前にあらはす。■表だたる恥辱を受く。恥をさらす。醴曲(千手)「東(マツ)のはてまでも、かやうに面をさらすこと、前世の報といひながら」

面を並ぶ【句】■互に顔を並ぶ。■同等の位置に並び立つ。肩を比(ナラ)ぶ。著聞「人こそあらめ、おもてを並べたる者に心うつして、ねたき目見するに」

面を伏す【句】■顔を伏す。うつむく。■面目を失ふ。名譽を損ふ。おもぶせとなる。(「面を起す」に對して)〔古語〕 桜題「みかど・后の御おもてをふすること、のたまふなれば」

おもて 重手【名】深き創(キズ)。いたで。ふかで。重創。重傷。

おもてあみ 表編【名】編方の一種。棒針(ボウバリ)を以て、表面より裏面へ引出し、目を作てつつ編むこと。

おもてあゆみ 表歩【名】和船の歩(ヒヅ)の船首にあるもの。(中挾・艫歩に對して)

おもていうひつ 表右筆【名】江戸幕府の職制の一。日記記註の任なれど、機密に預からず、故に奥右筆の如き權力なし。目記方・分限方・家督方の分課あり。おくいうひつ(奥右筆)參照。

おもていうひつくみがしら 表右筆組頭【名】江戸幕府の職制の一。表右筆の頭。

おもていなづま 表稲妻【名】稲妻形の模様の一。 「(憲越調)に同じ。

おもてうたこ 母調子【名】(音)いちこちてう

おもてうた 面歌・表歌【名】人に賞められて面目ある歌。〔古語〕 無名抄「これをなん、身にとりて面歌と思ひたまうる」

おもてうち 表打【名】■劍術にて、表より打込むこと。■劍道の達人。

おもておこし 面起【名】面目を施すこと。ほまれをあぐること。おもてだて。(おもて伏に對して)〔古語〕 仲文集「あが佛顔くらべせよ極樂のおもておこしをわれのみぞせん」

おもておもて 面面【名】おのおの。めいめい。〔古語〕 蜻蛉「おもておもてに、とざまかくざまに言ひなさるれど」

おもてからけ 表高家【名】江戸幕府の職制の一。高家なれども職任なく、ただ式日に登營するのみなりしもの。多くは幼年者又は事務の慣のものの職。

おもてかかり 表掛【名】表の構(カマヘ)。

おもてがき 表書【名】うはがき(上書)に同じ。

おもてがた 面形【名】おもて(面)■に同じ。〔古語〕 弊内侍日記「おもてがたして人に嚇せと仰せごとありしかば」

おもてがた 表方【名】芝居の營業部。

おもてがは 面革【名】にしきがは(錦革)に同じ。

おもてがは 表側【名】■道路に向ひたる方。■事物の表の方。(うら側に對して)

おもてがはら 表航【名】こなほし(小直)に同じ。

おもてがへ 表替【名】疊などの表の古くなりたるを、新しきに替ふること。 丹波與作「座敷は、この夏おもてがへ、寢道具ようて、酒ようて」

おもてがみ 表紙【名】らいし(禮紙)に同じ。

おもてかんばん 表看板【名】芝居の正面に掲ぐる看板、又これを保管する人。

おもてぎ 表木【名】船べりに添へて打附け、船脚を助くる木。 墨雞廻「江湖の水は、潮と違ひて、水力弱くして、船に物を積むに、重きに堪へず、よりて、船の傍に、丸木を挽割りたるを打添へて、船脚を助く。これを表木といふ」

おもてぐち 表口【名】家のおもての方の入口。(うら口に對して)

おもてぐみ 表組【名】琴の組歌(クミ)の一。

おもてけい 表藝【名】おもだちたる藝。例へば生花(イケバナ)は女のおもて藝なる類。

おもてござしやぎぶね 表御座將几船【名】十八九端帆の大船にて、引船に引かする將几船。

おもてござぶね 表御座船【名】水戰の時、武者奉行の乘る船。ござぶね(御座船)參照。

おもてごてん 表御殿【名】せいしん(正寢)に同じ。 「差に對して)

おもてざし 表指【名】刀に插す斧。(うら

おもてざしき 表座敷【名】家の表の方にある座敷。(うら座敷に對して)

おもてざた 表沙汰【名】■おほやけざた(公沙汰)に同じ。(うち沙汰に對して) ■おもてだつこと。おもてむき。

おもてざり 表去【名】〔文〕俳諧の去嫌(サリキラヒ)の一。懷紙半面の内に一つ出でたるものを、同じ面に再び用ひぬこと。

おもてし 表師【名】船の表の間(マ)にありて働く水夫。

おもてじき 表敷【名】和船の底板の前半部。おもてのしき。

おもてじとみ 表蔀【名】和船のからかいの、蔀に造りたるもの。

おもてしゆつぎよ 表出御【名】江戸幕府にて、將軍が、諸式日又は臨時の重大事件の時、白書院・黒書院若くば大廣間などの表の間に出御あること。將軍は、平生は奥にありて、老中の言上又は側用人(ヨウニン)・側衆の取次によりて、日日の政務を聽く例にて、表出御の際には、特に前日より公表せられ、各役所は勿論、市中までも一般に嚴肅を守りしなり。 「白きもの。

おもてしろ 面白【名】馬の面部の毛色の

おもてせんけ 表千家【名】せんげおもてりう(千家表流)に同じ。(裏千家に對して)

おもてだい 表臺【名】船の垣立(カキタテ)の臺。

おもてだい 重手代【名】重要なる位置にある手代。 世間子息形氣「おもてだいに言ひわたし、萬功に樣子をたづねらるるに」

おもてだいどころ 表臺所【名】江戸幕府の職制の一。庖廚を掌り、饗宴・賜饌などの事を扱ひしもの。

おもてだいどころがしら 表臺所頭【名】江戸幕府の職制の一。表臺所の長。

おもてだうぐ 面道具【名】■芝居の道具の、鼻・口・目などすべて面部に屬するもの。■その人の職業の何なるかを示すに足る道具。その職業に缺べからざる道具。例へば鋸・鉋などが大工の表道具なる類。

おもてだしやね 表出屋根【名】ふなやかた(船屋形)を見よ。

おもてだつ 表立つ【動四自】おほやけになる。おもてむきになる。表沙汰になる。

おもてだて 面立【名】おもておこし(面起)に同じ。〔古語〕 桜題「かかる御おもてだても見ずといはれ驕がれ」

おもてちやうもと 表帳元【名】芝居の入口に居て、帳場を預かる人。

おもてづかひ 面遣【名】能樂の型(カタ)の一。左右・上下などに假面(オモテ)を動かして見まはすこと。

おもてづかひ 表使【名】江戸幕府の奥女

中の職制の一。御廣敷（ごくしき）より表への用務を辨じ、年寄と中臈との意を含みて、御廣敷の諸役人と應接し、又、年寄の指圖を承けて、諸買物を掌り、代參に隨ふ等の事に當りしもの。

おもてつき 表附【名】下駄の、たたみおもての附きたるもの。

おもてつき 面付【名】將軍の政治上の公務を、殿中の雜務と區別していふなるべしといふ。一說に、面付は西侍の誤寫ならんかと。東鑑「御所中近習之輩者、可レ免二面付一公事」

おもてづき 表突・表刺【名】劍道にて、對手の咽喉部を、その左方より突くこと。

おもてづみ 表積【名】壁の表面用の煉瓦。（うら積に對して）

おもてつれなし 面つれなし【句】おもて（面）の條下を見よ。

おもてどほり 表通【名】町の主要なる通路。おほどほり。（うら通に對して）

おもてながや 表長屋【名】表どほりにある長屋。昔の大名屋敷に附屬せしものは、家中の中流以下の者住ひて、多くは海鼠壁（なまこ）なりき。（うら長屋に對して）

おもてにほん 表日本【名】（地）日本の本洲の地形上、中央山脈より東南西へ、恰も凸形をなして、太平洋に臨める一帶の地。（うら日本に對して）

おもてのかね 表の印【句】かね（印）の條下を見よ。

おもてのま 表の間【句】おもて（表）の條下を見よ。

おもてのまむき 表の眞向【句】おもて（表）の條下を見よ。

おもてのめ 表の目【句】め（目）の條下を見よ。

おもてばらず 表坊主【名】江戸幕府の職制の一。幕府の表向に使はれ、殿中の鋪設・給仕・掃除などを掌りし坊主。（おく坊主に對して）

おもてはこづくり 表箱造【名】和船の、舳先（へさき）を箱の如く角に造りたるもの。

おもてはつかし 面羞かし【句】おもて（面）の條下を見よ。

おもてはっく 表八句【名】（文）俳諧の百韻の式に於ける懷紙の初の折の表に記す八箇の句。おもてろく（表六句）參照。

おもてばんいし 表番醫師【名】江戸幕府の桔梗の間（ま）に宿直して、晝中不時の治療に備へしめられし醫師。三十人ありて、その内、一人づつ宿直す。

おもてはんでふ 表半疊【名】芝居の一座に附屬し、おもにそとむきの雜用を務むる男。舞臺の道具廻りの手傳をもなす。

おもてひばん 表火番【名】江戸幕府の職制の一。江戸城表向の火の番を掌りしもの。目附の支配に屬せり。

おもてぶせ 面伏【名】恥かしくて顏の合はせられぬこと。面目なきこと。おもぶせ。（面起（おもぶせ））に對して）〔古語〕源氏「うときに見えば、おもてぶせにや思はれんと、はばかりはぢて」「梁」を見よ。

おもてふなばり 表船梁【名】ふなばり（船梁）を見よ。

おもてほだな 表帆棚【名】船の帆棚の、舳（へ）にあるもの。

おもてまけ 面負【名】面前にておもねりへつらふこと。面從。

おもてむき 表向【名】一おもてだちたる方。おほやけだちたるかた。うはべ。公然。二おもてさた（面沙汰）に同じ。

おもてもん 表門【名】家の表の方にある門。正門。（うら門に對して）

おもてもん 表紋【名】ちやうもん（定紋）に同じ。（うら紋に對して）

おもてやぐら 表櫓【名】文化・文政の頃、江戸深川の仲町（なかまち）にありし一種の娼家。裏に住宅を構へて女郎を置き、表に店を構へしもの。（うら櫓に對して）

おもてやなぎ 表柳【名】あをやぎ（青柳）一に同じ。

おもてよわし 面弱し【形一】面前にては「弱し。面弱。

おもてる 面照る【動四自】一顏明るくなる。〔古語〕蜻蛉「さみだれやこぐらき宿のゆふされば おもてるまでもてらす螢か」二恥ぢて、顏赤らむ。〔古語〕字鏡集「赧、オモテル」

おもてろく 表六句【名】〔文〕俳諧の歌仙の式における初の折の表に記す六箇の句。おもてはっく（表八句）參照。

おもてゑし 表繪師【名】江戸幕府の時に、繪畫を以て、幕府に仕へし奥繪師の支流にて、同じく幕府の用を便ぜし者。家格は奥繪師より卑し。（奥繪師に對して）

おもと 萬年青【名】（植）百合（ゆり）科に屬する多年生の草。山林などの濕地に生ず。葉は叢生して、廣く長く、厚く硬く、その色は深綠にして冬も凋まず。夏、莖を出して、單瓣黃白色の花開き、赤色又は白色の實を結ぶ。その形は玉の如くにして、集りて穗の形をなす。變生のもの種種あり。多く盆栽とし、また庭などに植う。

おもと 御許【名】一御座所。おそば。おほと。〔古語〕紀「廳下、オモト」二宮女を親しみていふ語。〔古語〕源氏「若きおもとの侍るを、そらおぼれしてなん」

おもと 御許【代】一親愛の意の第二人稱。〔古語〕參考「政頼、娘ひとりかけん。おもとには、何をか賭けたまはんずる」二第三人稱の敬稱。〔古語〕源氏「おもとはこよひ上にやさぶらひたまひつる」

おもとくすし 侍醫【名】『御許醫師の意』貴人の許に侍る醫者。おほとくすし。〔古語〕紀「侍醫、オモトクスシ」

おもとじ 母刀自【名】はは（母）の敬稱。はとじ。〔古語〕萬葉「父君にあれはまなどぞおもとじにあれはまなどぞ」

おもとびと 侍者【名】『御許人の意』一貴人の側に近く仕ふる人。おほとびと。侍從。侍女。〔古語〕參考「やむごとなき上臈の、おもとびとなどさぶらふ」二次條の略。

おもとびとまちぎみ 侍從【名】『御許人前つ君の意』じじゆう（侍從）に同じ。〔古語〕和名「侍從、於毛止比止萬知岐美」

おもとびとめうちぎみ 侍從局【名】じじゆうきよく（侍從局）に同じ。〔古語〕和名「侍從局、於毛止比止女侍宇知岐美」

おもな 面無【貌】おもなきさま。〔古語〕源氏「おもなの人やと、すこし笑ひたまふ」

おもなが 面長【名】顏の形の、やや長きこと。〔古語〕

おもながめ 面眺【名】顏を、つくづくと見もてぶせなり。おもはゆし。（おも有りに對して）〔古語〕萬葉「蓉にあひてあしたおもなみなばりぬの萩は散りぬきもみぢはやつげ」二恥を恥と思はず。厚顏なり。あつかまし。〔古語〕竹取「かの鉢を捨てて、又言ひけるよりぞおもなき事をば、はぢをすつとはいひける」

おもならひ 重習【名】能樂・諧曲とも、一曲ごとに弟子より誓書を徵し、免狀を付與して教授するもの。一年に一曲以上は傳へず。

おもなる 面馴る【動下二自】一見馴る。かほなる。〔古語〕蜻蛉「あまたとしこゆる山べにいへゐして綱ひく駒もおもなれにけり」二馴れて、あつかましくなる。なれなれしくなる。〔古語〕枕「かくしてもてゆくに、おのづからおもなれぬべし」

おもなれ 面馴【名】おもなること。おもなれたること。〔古語〕新古今「年を經て住むべき宿の池水は星あひのかげもおもなれやせん」

おもに 重荷【名】一重量の多き荷物。二〔商〕『英 Dead weight』船舶の貨物の、重量にて、その運賃を計算するもの。容積四十才未滿にして一噸の重量を有する場合には、この方法に依り、四十才以上にして重量一噸未滿なる場合には、この法に依らずして、才貨噸即ち四十才一噸の計算にて運賃を定む。重量貨物。三能樂の小道具の一。背に負ふ荷物。「戀重荷」の曲に用ふ。四責任の重きこと。重任。後撰「數ならぬ身をおもにして吉野山高き嘆きをもひこりぬる」

おもに 重荷に小附（こつ）【句】堪へられぬ事の上に、更に他の事の添はりて、いよいよ堪ふべからざる體。痛い上に針。〔諺語〕

おもにあくじよう 重荷惡尉【名】能樂の假面（めん）の惡尉の一。「戀重荷」・「綾鼓」の後撰「年の數つまんとするおもにには いとどこづけをこりもそへなん」

おもに 重荷を下（おろ）す【句】重き責任のぞかる。

おもに 主に・重に【副】主として。むねと。もはら。

後仕手（ノシテ）に用ふ。重荷尉（ジヨウヰ）。

おも-にくし 面憎し【形一】つらにくし。はらだたし。〔古語〕 草「わらはより外は入るまじとおさへて、面憎きまでいへば」

おもに-じよう 重荷尉【名】おもにあくじよう（重荷悪尉）に同じ。

おも-ねる 阿る【動四自】『面練るの義』こびへつらふ。追従す。阿諛す。

お-もの 御物【名】一朝夕の御食物。めしあがりもの。おほの。どぜん。〔古語〕 字治 白米十石をおものにして」 二貴人の衣冠・刀剣など。どもつ。〔武家時代の語〕 三おものぶぎやう（御物奉行）の略。

赤き御物【句】あづきがゆ（小豆粥）に同じ。〔古語〕 四季物語「春くればあかきおものあつものめぐみに洩れぬ御代にあふなり」

おもの 佩物【名】おびもの（佩物）に同じ。〔古語〕 「敬称。

お-ものいみ 御物忌【名】ものいみ（物忌）の

おもの-がは 御物川・雄物川【名】〔地〕羽後國にある川。羽前・羽後兩國の境なる連山に源を發し、土崎（ツチザキ）港に至りて日本海に注ぐ。長さ三十八里。最上（モガミ）川・能代（ノシロ）川と共に、兩羽三大川の一。別稱、戸島川。

おもの-け 御物笥【名】御物（オモ）を容るる箱。〔古語〕 延喜式「御飯笥、オモノケ」

おものさた-しゆう 御物沙汰衆【名】鎌倉幕府の職制の一。將軍・御臺所（ドコロ）などの御物（オモ）を取扱ひしもの。

おもの-し 御物師【名】一宮中の裁縫師。 二一般の裁縫師。したてや。 世間手代氣質「おものしは、黒繻子の帶持って出て」

おもの-だい 御物臺【名】御物（オモ）を載する臺。

おもの-だな 御物棚【名】御物（オモ）を載する棚。ぜんだな。 草「みづし所のおものだなの」

おもの-ちやし 御物茶師【名】宇治の茶師にて、宮中及び將軍飲料の茶を掌りしもの。〔德川時代の語〕

おもの-づくり 御物作【名】刀剣の、將軍の佩ぶる料として作れるもの。〔足利時代の語〕「おものづくりの打刀」

おものなかもち-ぶぎやう 御物中持奉行【名】室町時代の職制の一。將軍の他出の時、衣冠・刀剣等を容れたる唐櫃をあづかることを掌りしもの。將軍參内の時は、その衣服を容れたる長櫃に添ひて行列に連なり、又、内裏の直廬（ヒキ）に候して、將軍の裝束の事に預かれり。直廬役。御物奉行。

おものながもち-ぶぎやう 御物長持奉行【名】前條に同じ。

おもの-の-はま 御膳濱【名】〔地〕近江國の琵琶湖の岸の一部。 拾遺「とどこほるときもあらじな近江なるおものの濱のあまのひつぎは」

おもの-ばし 御物橋【名】〔地〕羽後國御物川の上流にかかれる橋。長さ約一百間。

おもの-ぶぎやう 御物奉行【名】おものなかもちぶぎやう（御物中持奉行）に同じ。

おもの-やどり 御物宿【名】おものを納め置くところ。平安城の内裏なる紫宸殿の西の廂にあり。〔古語〕 榮花「さばかりひろき院・内の、ひまなく、女房の局にしわたしたるおものやどり」

御物宿の刀自（ジ）【句】おものやどりを掌る女官。〔古語〕 紫式部日記「おものやどりの刀自を呼出でたるに」

おも-はかり 思量【名】『おもはおもひの略』 おもんばかり。〔古語〕 名義抄「慮、オモハカリ・ウラオモフ」

おも-はかる 思量る【動四他】『おもはおもひの略』おもんばかる。〔古語〕 名義抄「恕、オモハカル・クム・ハカル」

おもはく 所思・思惑【名】一『次條の語より轉じたるもの。惑は假借の字』思ふところ。かんがへ。 草「打たれじと用意したるすまひ・おもはくどもも、おのおのをかしう見ゆるかな」 二意中の人。情婦。〔德川時代の俚語〕 關八州繋馬「波邊が妻、岩藤を始めとして、木幡・亂菊・おしやなの前、うち揃ふ四人づれ、言はねどしるき四天王のおもはくだち」 四〔商〕投機にて暴利を豫期すること。おもいれ。

おも-はく 思はく【動他】おもふ（思ふ）ことの義。〔古語〕 萬葉「おくれにし人を思はくしでの崎ゆふとりしでて行かむとぞ思ふ」

おもはく-がひ 所思買・思惑買【名】〔商〕暴利を得ることを豫期して、投機的に買込むこと。

おもはく-し 所思師・思惑師【名】〔商〕おもはく買をなす相場師。おもいれし。おもはくすぢ。 「前條に同じ。

おもはく-すぢ 所思筋・思惑筋【名】〔商〕おもはくちがひ 所思違・思惑違【名】おもひちがひ。考へちがひ。見當ちがひ。〔俚語〕 世間娘氣質「われ等とは、大分のおもはくちがひ」

おもはく-ばなし 所思話・思惑話【名】思ふところありてなす話。

おも-はし 思はし【形二】一思はれてあり。おしはかられてあり。おもほし。 二好ましと思はれてあり。氣にかなへり。 著聞「夜もすがらかたらひなぐさむに、おもはしきこと限りなし」

おも-ばしら 主柱【名】〔建〕主となる大なる柱。（そで柱などに對して）

おもはず 思はず【副】おもひがけなく。ふと。意外に。おもはずに。

おもはず-がほ 思はず顔【名】おもはずげなる顏つき。意外の樣子。〔古語〕

おもはず-しらず 思はず知らず【副】しらずしらずに。思ひがけなく。ふと。

おもはず-に 思はずに【副】おもはず（思はず）に同じ。〔古語〕 十訓「おもはずにあさましくて、こまごまと教へつる、いかにをこがましく思ひつらん」

おもはせ-びと 思はせ人【名】人になつき慕はるる人。望をかけらるる人。 思儘日記「中務の親王當代の宮にて、世のおもはせ人のもてなしたまふこと限りなし」

おもはせ-ぶり 思はせ振【名】たしかにはいはねど、それとなく、言語又は擧動にて、その意を示すこと。〔俚語〕

おも-はくそ 面黑子【名】顏に出來たるほくろ。〔古語〕 和名「黰、於毛波波久曾、面黑子也」

おもはふ 思はふ【動下二他】次條に同じ。一說に「思ひあふの約。〔古語〕 萬葉「しほぶねのへこそ白なみにはしくもおふせたまほかおもはへなくに」

おもはゆ 思はゆ【動下二自】『ゆは被役の意の助動詞るの轉』おもはる。おもはふ。おもほゆ。おぼゆ。〔古語〕 拾玉「わがこころ神と佛とおもはえてこの世の人のよそになりぬる」

おもはゆ 面映【貌】おもはゆきさま。 謠曲（定家）「おもなや、おもはゆの有樣やな」

おもはゆし 面映し【形二】恥かし。おもてぶせなり。おもなし。〔古語〕 盛衰記「あの顏に、物具（モノ）してあひ向はんこと、おもはゆしと思はれけん」

おも-ばる 面腫る【動下二自】顏腫（ハ）る。世間娘氣質「涙をこぼし…目のはたおもばれて好からぬことと」

おもひ 思【名】一おもふこと。かんがへ。 二おしはかり。推量。「おもひの外」「おもひのままに」 三案ずること。わづらふこと。うれひ。心配。 源氏「かぎりなき御おもひのみ、月日にそへてまさる」 四喪にこもること。も。いみ。もちゆう。忌中。〔古語〕 榮花「一とせ、失せたまひしぞかし。その御おもひにて、いみじく戀ひしのびたまひけるを」 五のぞみ。希望。 源氏「耳かしがましき川のわたりにて、靜かなるおもひにかなはぬ方もあれど」 六怨を晴したしと思ひつむること。怨念（ネン）。〔俚語〕「おもひが取附く」「おもひを晴らす」 七いつくしむこと。思ひ慕ふこと。 萬葉「まそ鏡清きつく夜のゆつりなばおもひは止まじ戀こそやまめ」 八難儀に思ふこと。いとはしく感ずること。〔俚語〕「水を汲むのが、おもひです」

思内に有れば、色外に形（ハヤ）る【句】心に思へる事は、隱さんとしても、おのづから顏色・行爲などにあらはる。〔諺語〕

思、半（ハカ）に過ぐ【句】『易經の繫辭に「知者觀二其彖辭一、則思過レ半耳」とあるに本づく』思考すれば、おのづから會得

せらるるところ多し。

思の家【句】〔佛〕『おもひ(思)のひを火の意にかけていふ』佛教にて、煩悩の斷ちがたき世の中の譬。くわたく(火宅)參照。〔古語〕 柏玉「あはれみの佛も人に身をかへておもひの家の世をや苦しむ」

思の色【句】『おもひ(思)のひを火の意にかけていふ』■紅の色。〔古語〕 古今「耳なしの山のくちなしえてしがなおもひの色の下ぞめにせん」 ■深く思ふ樣子。

思の霞【句】思の霧(ハ)れやらぬ譬。

思の絆(キヅナ)【句】「思の綱」に同じ。

思の烟(ケブリ)【句】『おもひ(思)のひを火の意にかけていふ』思ひこがるる烈しさを、火を燒きて立ちのぼる烟に譬へていふ。

「思。思の淵。

思の底【句】思の最も深きところ。深き思の丈(タケ)【句】心に思へる全體。思のありたけ。〔おもに男女の間にいふ〕〔俚語〕「人橋(ハシ)かけて、おもひのたけを知らす」

思の綱【句】思ふことありて自由にならぬ譬。心のきづな。思のきづな。情緒。

清輔集「たちがたきおもひのつなにつながりて引返さるることぞ悲しき」

思の露【句】■**なみだ**(涙)の異稱。袖の露〔古語〕 ■物思のしげきを露に譬へていふ。〔古語〕 風雅「おのおのおもひの露の光をみがきて、珠をつらね」

思の火【句】心中の苦悶を火にて燒かるるに譬へていふ。心火。 謠曲「天數」「孔子は鯉魚に別れて、思の火を胸に焚き」

思の淵【句】「思の底」に同じ。

思の外【句】かねて思ひゐたる所とは違ひてあるさま。豫想外。意外。案外。

源氏「絶ゆまじきすぢと頼みし玉かづら思のほかにかけ離れぬる」

思の道【句】思ひ入ることの深きを道に譬へていふ。〔古語〕 夫木「ゆく末のをだえの橋はきくもうし思の道のおくも知られて」

思の山【句】思のつもれるを山に譬へていふ。 夫木「あはれ我がおもひの山をきづきおかば富士の高根もふもとならまし」

思の闇(ヤミ)【句】ものおもひのために、心の活きを失ふこと。心のやみ。

思、邪(ジヤコ)**無し**【句】『詩經の魯頌駉篇及び論語の爲政篇に出でたる語』思念正しくして、邪惡の意無し。

思を懸く【句】■心配をかけさす。 謠曲「鳥追船」「自らが名をもくたし、母御におもひをかけ申すこと、よもあらじ」 ■心をその方に向はしむ。戀ひしたふ。

思を焚く【句】『おもひ(思)のひを火の意にかけていふ』胸の中をこがす。煩悶す。思を遣る【句】心配をはらす。氣をはらす。 千載「ながむればおもひやるべき方ぞなき春の限の夕ぐれの空」

おもひ御水【名】みもひ(御水)に同じ。〔古の女の話〕 赤染衛門集「冷やかなるおもひを汲みに、沖へまかるぞ」

おもひあかす【動四他】思ひつつ夜をあかす。(思暮すに對して) 源氏「夜もすがら、おもひあかしたまひて」

おもひあがる【動四自】思上る【動四自】心高くなる。自負す。おもひのぼる。〔古語〕 源氏「われはと思ひあがりたまへる御かたがた」

おもひあく【動四他】いやに思ふ。あく。〔古語〕 源氏「見るめにより人を思ひあき」

おもひあくがる【動下二自】うれしく思ひて、心うかる。〔古語〕

おもひあたる【動四自】なるほどと思ふ。思ひあはせらる。考へつく。考へあたる。

おもひあつ【動下二他】考へあつ。思ひつく。〔古語〕 源氏「いとしるくおもひあてられたまへる御そばめを」

おもひあつかふ【動四他】■心を盡して世話す。〔古語〕 源氏「よき君たちを聟にして思ひあつかひけるを」 ■いかにせば好からんかと迷ふ。思ひなやむ。〔古語〕 好忠集「のどかにて涼しかりけり夏の日もおもひあつかふこともなき身は」

おもひあつむ【動下二他】思集む思集む。いろいろに思ふ。さまざまに思ふ。種種工夫す。〔古語〕 源氏「ここらおもひあつめたまへるつらさも消えぬべし」

おもひあて【名】こころあて(心當)に同じ。〔古語〕 奈理「もしそれにやあらんと思ひあてに傳へ聞くやうなんめりし」

おもひあなづる【動四他】思侮る【動四他】心のうちにて侮る。内心にて輕んず。〔古語〕 源氏「いとすくすくしく心づきなしとおもひあなづる、伊豫のかたのみ思ひやられて」

おもひあはす【動下二他】かれとこれとを考へ合はす。かれとこれとを比較して思ひつく。 源氏「もののけもさ云ふなりしかと、思ひあはするに」

おもひあふ【動四自】■互に思ふ。 沙石集「男女のなからひ思ひあへるばかりを」 ■思はず考が一致す。 狂言(三人百姓)「これは思ひあうた事ぢや」

おもひあまり【名】思餘る思ひあまりのはてはては 玉葉「身のうきに思ひあまりのはてはては親さへつらきものにぞありける」

おもひあまる【動四自】堪へがたきほどに思ふ。度をこえて思ひなやむ。考が附かなくなる。おもひかぬ。 源氏「心ひとつにおもひあまる事など多かるを」

おもひあらたむ【動下二他】思改む思改む。變ず。おもひかへす。 源氏「さは、え、思ひあらたむまじき兵部卿の御うらみ、深さまさるめれば」

おもひありく【動四自】思ひありく思ひて過ごす。思ひつつあり。〔古語〕 源氏「聞きたまひて、あいなく物をおもひありきたまふ」

おもひあわつ【動下二自】思周章つ思周章つ。心にあわつ。 榮花「いかなるべき事にかと思ひあわてたり」

おもひいこふ【動四自】思息ふ【動四自】**おもひやすむ**(思息む)に同じ。〔古語〕 萬葉「人みなの思ひいこひてつれもなくありしあひだに」

おもひいそぐ【動四他】思急ぐ【動四他】心の中にて急ぐ。氣がせく。 源氏「わが方さまをのみ、おもひいそぐやうなるも」

おもひいだす【動四自】思出す【動四自】■忘れたる物事を再び思ふ。おもひつく。考へつく。思ひ出づ。 ■過去の事を思ひ浮ぶ。おもひだす。しのぶ。思ひ出づ。回想す。

おもひいたづく【動勞く【動四他】心配す。氣苦勞す。〔古語〕 源氏「さばかり上の思ひいたづききこえさせたまふものを」

おもひいたり【動至【名】思ひいたること。〔古語〕 源氏「あまたの人の、親になりたまふままに、おもひいたりふかく」

おもひいたる【動至る【動四自】心ゆきわたる。考へ及ぶ。〔古語〕 源氏「おもひいたらぬくまなき」

おもひいづ【動下二他】**おもひいだす**(思出す)に同じ。

おもひいて【名】**おもひで**(思出)に同じ。

おもひいてがほ【名】思出顔【名】思ひ出でたるごとき樣子。〔古語〕 枕「すすき…昔おもひいで顔になびきてかひろぎ立てる」

おもひいてぐさ【名】思出種【名】おもひ出でとなるべき種(ネタ)。〔古語〕 忠峯集「春の野は生ひぬものなく見ゆれども思出草はなき世なりけり」

おもひいとなむ【動四他】思營む【動四他】慇懃に思ひていとなむ。心にかけて世話す。〔古語〕 源氏「おもひいとなみつかうまつる御うぶやの儀式」

おもひいら【動下二自】『いらる(苛る)を見よ』いらいらしく思ふ。心にいらつ。〔古語〕 源氏「思ひいられたまはぬにしもあらぬに」

おもひいり【名】思入【名】思ひ入ること。執心。 世間娘氣質「娘は芝居におもひいり有つての男にくみなれば」

おもひいる【動四自】■ふかく思ふ。おもひこむ。 源氏「つらきも、うきも、かたはらいたきことも、おもひいれたるさまならで」 ■世をいとはしく思ひて、山にのがれ入る。〔古語〕 千載「世をいとふ心は月をしたへばや山のはにのみ思ひいるらん」

おもひいれ【名】思入【名】■心をかくること。心を込むること。 ■芝居の狂言にて、俳

優が、白(フセリ)の終りたる後、無言にて意味ありげに見詰めをること。おもいれ。

おもひ-いれ 思入【副】心に満足するほど。十分に。おもふさま。存分に。おもいれ。「おもひいれ、懲らしめてやった」

おもひ-う 思得【動下二他】心のあてが附く。かんがへ得。思ひ出し得。殺心集「とにかくに思ひうるかたなくてなんと、言ひもやらず、さめざめと泣く」

おもひ-うかる 思浮る【動下二自】心定まらず。心そらになる。うかれごころになる。源氏「年ごろ思ひうかれたまふさま、聞きわたりても、久しくなりぬるを」

おもひ-うしろむ 思後見【動上二他】心をかけて、親切に後見す。〔古語〕

おもひ-うた 思唄【名】思ふところを陳べたる唄。天の網島「思ひ思ひのおもひうた」

おもひ-うたがふ 思疑ふ【動四他】疑はしく思ふ。心のうちに疑ふ。伊勢「男、こと心ありてかかるにやあらんと、思ひ疑ひて」

おもひ-うつる 思移る【動四自】心移る。こころがはりす。源氏「さればよ、おもひうつりにけりと、うれしくて」

おもひ-うとむ 思疎む【動四他】うとく思ふ。うとんず。答題「我が住めらんに妻(そ)すゑたらば、思ひうとみなん」

おもひ-うむ 思倦む【動四他】いやに考ふ。心にあく。おもひうんず。〔古語〕新拾遺「今日とてもいそがれぬかななべて世を思ひうみにしたなばたの絲」

おもひ-うんず 思倦んず【動佐變自】前條に同じ。〔古語〕伊勢「あてなる女の、尼になりて、世の中をおもひうんじて」

おもひ-うらがる 思裏枯る【動下二自】さびしく思ふ。心ぼそく思ふ。〔古語〕萬葉「わがせこに我が戀ひをれば わがをどの草さへ思ひうらがれにけり」

おもひ-うらぶる 思ひうらぶる【動下二自】心ぐるしく思ふ。わびしく思ふ。〔古語〕萬葉「ぬえ鳥のうらなけしつつした戀に思ひうらぶれ」「て選擇す。

おもひ-えらぶ 思擇ぶ【動四他】心の中に

おもひ-おき 思置【名】思ひおくこと。

おもひ-おきつ 思掟つ【動下二他】心に定む。決心す。

おもひ-おく 思置く【動四他】一心に定めおく。源氏「ものまめやかに靜かなる心の趣ならんよるべをぞ、つひの頼みどころには思ひおくべかりける」二おもひのこす(思殘す)に同じ。〔古語〕新古今「おもひおく人の心にしたはれて露わく袖のかへりぬるかな」

おもひ-おくる 思後る【動下二自】心劣る。〔古語〕源氏「たよりうすかるべき女房にだに思ひおくれつつ」

おもひ-おこす 思起す【動四他】一心をはげます。心をふり起す。思ひ立つ。竹取「かぐやじて、おもひおこして、弓矢をとりたてんとすれども」二おもひいだす(思出す)に同じ。

おもひ-おこす 思遣す【動下二他】彼より此方を思ひやる。〔古語〕更科「かくてながむらんと、おもひおこする人あらんや」

おもひ-おこたる 思怠る【動四自】思ひゆるむ。わすれる。〔古語〕

おもひ-おとす 思落す【動四他】劣れるものに思ふ。かろきものに思ふ。源氏「むかしより、人にはおもひおとしたまへれど」

おもひ-おとる 思劣る【動四自】劣れりと思ふ。〔古語〕源氏「さりとて、おもひおとり、ひげせんもかひなかるべし」

おもひ-おもひに 思思に【副】各、自分の思ふとほりに。こころごころに。山家集「すみれ咲くよこのつばな老いぬればおもひおもひに人かよふなり」

おもひ-およぶ 思及ぶ【動四自】心が、その物事の上に達す。考へおよぶ。おもひいたる。源氏「上も、下も、おもひおよびいでたつこそ、心たかきことなれ」

おもひ-かかる 思掛る【動四自】心寄る。〔古語〕夫木「その色はためしもなきをいかにして思ひかかれる峯の白くも」

おもひ-かぎる 思限る【動四他】おもひきる(思切る)に同じ。〔古語〕源氏「かかるかたに、おもひかぎりつるありさまになん」

おもひ-かく 思掛く【動下二他】一心に掛く。二ゆかしく思ふ。ねがふ。したふ。戀ふ。欲す。源氏「芹川の大將どのを、君の女一の宮おもひかけたる」

おもひ-がけず 思掛けず【句】おもふ(思ふ)の條下を見よ。

おもひがけなし 思掛無し【句】おもふ(思ふ)の條下を見よ。

おもひ-かしづく 思傅く【動四他】大切に思ひて附添ひ護る。〔古語〕源氏「かぎりなくあはれと思ひかしづききこえたまふに」

おもひ-かたむ 思固む【動下二他】しかと心に定む。殺心集「諫めければ、更にゆるぎなく思ひかためける事と見えければ」

おもひ-がなし 思悲し【形二】心かなしくあり。〔古語〕萬葉「旅なれば思ひたえてもありつれど家にある妹し思ひがなしも」

おもひ-かぬ 思兼ぬ【動下二他】いかに思ひても、心落附かず。考附かず。堪へがたく思ふ。心にあまる。思ひあまる。萬葉「いもを思ひいのねらえぬに秋の野にさをしか鳴きつつまおもひかねて」

おもひかね-の-かみ 思兼神【名】高皇產靈神(タカミムスビ)の御子。智慮まします。天照皇太神の天岩戸に隱れたまひし時、謀を設けて誘ひ出したまへり。

おもひ-がは 思川【名】思ひ嘆くことの絶間なきを、川水の止まらぬに譬へていふ。〔古語〕伊勢「おもひがはたえず流るる水の泡もうたかた人に逢はできえめや」

おもひがは 思河【名】とうしゐう(藤四郎)を見よ。

おもひ-かはす 思交す【動四自】一互に思ふ。相思ふ。二互に戀しく思ふ。ともになつかしむ。源氏「いみじうおもひかはしきこえさせたまひて」

おもひ-かはる 思變る【動四自】心かはる。心改まる。心がはりす。源氏「とだえおかんをりこそは、さやうにおもひかはりぬべき心地なんする」

おもひ-がひ 思甲斐【名】思ひたるしるし。心配したるかひ。萬氏「ねたし我よそにのみ見んさくら花おもひがひなくこぞも散りにき」

おもひ-かふ 思替ふ【動下二他】思をかふ。

考へなほす。玉葉「淋しさを世のうきかたに思ひかへてみ山の月をひとり見るかな」

おもひ-かへし 思返【名】おもひかへすこと。反省。再考。天の網島「おめおめ太兵衛に添ふものか。をなごは、われ人、ひとむきに、おもひかへしの無いもの」

おもひ-かへす 思返す【動四他】改めて思ふ。非と知りて改心す。思ひなほす。源氏「をかしきさまを見えたてまつりても、何にかはなるべきなど、おもひかへす」

おもひ-かへる 思返る【動四自】考がもとにかへる。もとの如く思ふ。〔古語〕後撰「こと人に逢ひぬべりて後、いかがありけん始めの人におもひかへりて」

おもひ-がほ 思顏【名】物おもひに耽る顏つき。枕「などてかはと、思ひがほにえ知らぬは、憎ささへ添ひぬ」

おもひ-かまふ 思構ふ【動下二他】心にたくむ。心にくはだつ。源氏「人とくしづめなど、心知れるどちは、おもひかまふ」

おもひ-かろむ 思輕む【動下二他】かろく思ふ。重く思はず。大切に考へず。〔古語〕新六「命だに思ひかろめてすごす身に名の立つことの何からみん」

おもひ-きって 思切って【副】しかと心を定めて。斷然と。

おもひきほふ 思競ふ【名】心のうちにて互に競爭す。まけじとおもふ。〔古語〕源氏「いかで、人よりさきに、深きこころざしを御覽ぜられんと、おもひきほふ」

おもひ-きや 思ひきや【句】おもふ(思ふ)の條下を見よ。

おもひ-きゆ 思消ゆ【動下二自】深く思に沈む。心も消ゆるばかりに思ふ。〔古語〕古今「雪ふりて人もかよはぬ道なれやあとはかもなくおもひきゆらん」

おもひ-きり 思切【名】思ひ切ること。あきらめ。斷念。

おもひ-きり 思切【副】おもひきって(思切って)に同じ。「思ひきり叱る」

おもひ-きる 思切る【動四他】一おもひとまる。あきらむ。斷念す。思限る。二心をたしかに定む。堅く決心す。思限る。

おもひぐさ 思種・思草【名】㊀物おもひのたね。心配のたね。（歌などに、草の意にかけて用ふ）〔古語〕 萬葉「道のべの尾花がもとの思ひぐさ今さらさらに何か思はむ」 ㊁**おもひもの**（思者）㊀に同じ。

おもひぐさ 思草【名】（植）**をみなへし**（女郎花）の異名とも、**つゆくさ**（露草）の異名とも、又、**すすき**も、**りんだう**（龍膽）の異名とも、又、**すすき**（薄）・**ちかや**（茅）・**なんばんぎせる**（南蠻烟管）・**しをん**（紫苑）・**さくら**（櫻）・**なでしこ**（撫子）、又、**たばこ**（烟草）の異名とす。〔古語〕

おもひくす 思屈す【動佐變自】**おもひくっす**（思屈す）に同じ。〔古語〕 狭衣「日ごろ、よろづに思ひくしたりつる人人も」

おもひくだく 思碎く【動四他】さまざまに考ふ。種種に思ふ。〔古語〕 源氏「つひにかくかけとどめ奉りたまへるものをなど、とりあつめて思ひくだくに」

おもひくだく 思碎く【動下二自】さまざまに思ひ亂る。〔古語〕 榮花「ちぢに思ひくだくれど、のたまふべき人しなければ、心にとどめて在り經（ゝ）たまふ」

おもひくたす 思朽す【動四他】あしく思ひなす。心の中にてくさす。おもひさます。〔古語〕 源氏「それしかあらじと、そらに、いかがは推しはかり思ひくたきん」

おもひくつ 思朽つ【動上二自】思を果さずして終る。思ひながら朽ちはつ。〔古語〕 續後拾遺「くちなしの下ぞめごろも下にのみいはでやつひに思ひくちなん」

おもひくっす 思屈す【動佐變自】心よわる。心晴れず。思ひくす。思ひしなゆ。〔古語〕 源氏「うひうひしくふるめきたらんなど、おもひくっしたまへり」

おもひくづほる 思崩ほる【動下二自】元氣無くなる。思ひよわる。おもひしをる。〔古語〕 狭衣「月頃おもひくづほれつる胸のうちどもあきて」

おもひくはふ 思加ふ【動下二他】考を添ふ。〔古語〕 源氏「みづからだに、なほかかること、おもひくはへじと、いよいよ深くおぼす」

おもひぐま 思隈【名】人の心のくまぐまを、殘りなく思ひやること。十分なる同情。〔古語〕 夫木「思ひぐまの人はなかなか無きものをあはれに犬のぬしを知りぬる」 ㊁**隈有り**【句】思ひやりあり。心ゆきとどく。〔古語〕 濱松「おもひぐまありて、心ぐるしうものしたまふべきなり」

思隈無し【句】思ひやりなし。心にかけぬさまなり。〔古語〕 源氏「さくらゆゑ風に心のさわぐかなおもひぐまなき花とみるみる」

おもひくんず 思屈ず【動變自】**おもひくっす**（思屈す）に同じ。〔古語〕 枕「むげに思ひくんじにけり」

おもひくゆ 思悔ゆ【動上二自】後より悔しく思ふ。〔古語〕 萬葉「さめぬ夜は千夜もありともわがせこがおもひくゆべき心はもたじ」

おもひくらし 思暮【名】思ひつつ日をすごすこと。拾遺「今來（コ）んといひて別れしあしたより思ひくらしの音をのみぞきく」

おもひくらす 思暮す【動四他】思ひ込みて、日を送る。物思に日をくらす。（思明すに對して）

おもひくらぶ 思比ぶ【動下二他】心にくらぶ。考へくらぶ。

おもひくる 思暮る【動下二自】思ひつつ日暮る。〔古語〕 夫木「思ひくれなげきあかしの濱に寄るみるめ少くなりぬべきかな」

おもひぐるし 思苦し【形二】こころぐるし（心苦し）に同じ。〔古語〕 萬葉「ありぎぬのさゑさゑしづみ家の妹に物言はず來にて思ひぐるしも」

おもひくるふ 思狂ふ【動四自】ものぐるほしきまで思ふ。思ひみだる。

おもひけがす 思穢す【動四他】思ひおとす。さげすむ。 盛衰記「うしろ闇（クラ）き者ぞと思ひけがされ奉りて、世にたちまはりては、何の面目かあるべき」

おもひけす 思消す【動四他】强ひて忘る。おもひ止む。

おもひけつ 思消つ【動四他】前條に同じ。〔古語〕 源氏「この事も、おもひけちて」

おもひご 思子【名】深く愛する子。かはゆく思ふ子。 榮華「父母のおもひごにて、片時も見えたまはねば、思し騷ぎたまふ」

おもひこがる 思焦る【動下二自】しきりに思ふ。おもひもゆ。 源氏「涙たゆるときなく、娘どもも思ひこがるるを」

おもひこころざす 思志す【動四他】おもふ。こころざす。したふ。戀慕す。〔古語〕 榮花「その宮に、おもひこころざし聞えさせたまへり」

おもひこす 思越す【動四他】とりこしてさきの事を考ふ。 續古今「出でぬまの山のあなたを思ひこす心やさきに月を見るらん」

おもひこなす 思ひこなす【動四他】あなどる（侮る）に同じ。〔德川時代の俚語〕 芭蕉「この種とおもひこなさじ唐がらし」

おもひこふ 思戀ふ【動上二他】ふかく戀ひ慕ふ。 萬葉「心には火さへ燃えつつ思ひこひいきつきあまり」

おもひこみ 思込【名】思ひこむこと。おもひこむ（㊁）に同じ。

おもひこむ 思込む【動四他】**おもひいる**（思入る）に同じ。

おもひこむ 思込む【動下二他】心にこむ。心に隱す。〔古語〕 後撰「戀しきも思ひこめつつあるものを人に知らるる涙なになり」

おもひこる 思懲る【動上二自】懲りて再びすまじと思ふ。 堀杰「つれなさに思ひこりずと嘆きしをけさは嬉しき心なりけり」

おもひさし 思差【名】その人に心ありてさす盃。（おもひ取に對して） 曾我物語「おぼしめさん方へ、おもひざしたまへ」

おもひさだむ 思定む【動下二他】心に定む。決心す。 源氏「多かるなかにも、えなんおもひさだむまじかりける」

おもひざま 思樣【副】**おもふさま**（思ふ樣）に同じ。〔信濃國の方言〕

おもひさまし 思冷【名】年來深く思ひかはしたる男女の、他人の中言により又は思の外に仇なる事ありて、その思のさめたること。〔俚語〕

おもひさます 思冷す【動四他】熱中したる心を、ひややかならしむ。〔古語〕 源氏「あさましう、今までながらへはべるやうなれど、おもひさまさんかたなき夢に、まどはれはべりてん」

おもひざめ 思覺【名】心に思ふことありて、眠のさむること。 冥途飛脚「思ひ思ひて思がつもり、思ひざめにもさむるもの」

おもひさわぐ 思騷ぐ【動四自】思ひて、心落ちつかず。むなさわぎす。 源氏「憂きことを思ひさわげばさまざまにくゆる烟ぞいとど立添ふ」

おもひしづまる 思鎭まる【動四自】心しづまる。心落ちつく。 源氏「しばしは夢かゝのみたどられしを、やうやう思ひしづまるにしも」

おもひしづむ 思沈む【動四自】深く思ひ込む。思に沈む。〔古語〕 源氏「など、たぐひあらじと、いみじうものをおもひしづみけん」

おもひしづむ 思鎭む【動下二他】心を落ちつかしむ。心をしづむ。〔古語〕 源氏「しばしおもひしづめよ、事のさま思ひめぐらして」

おもひしなゆ 思萎ゆ【動下二自】考しをる。おもひくんず。おもひしをる。〔古語〕 萬葉「うち日さす宮ぢを行くにわが裳はやれぬ玉の緒の思ひしなえて家にあらましを」

おもひしに 思死【名】物事を心にかけて煩ひ死ぬること。 大鏡「これをおもひじに、かたはらにふせりて死にけり」

おもひしぬ 思死ぬ【動奈變自】思ひつめて死ぬ。心に思ひつつ死ぬ。 萬葉「言ふことのかしこき國ぞくれなゐの色になる出でそ思ひ死ぬとも」

おもひしのぶ 思忍ぶ【動四自】心にしのぶ。こらへ思ふ。 源氏「おもひしのびがたきに、をりをり人見たてまつりつれば」

おもひしむ 思染む【動四自】深く思ひ込む。〔古語〕 源氏「いとあはれと、物をおもひしみながら」

おもひしめる 思濕る【動四自】考へしづむ。うれひにしづむ。〔古語〕 源氏「世の中おもひしめりてものしたまふ」

おもひしる 思知る【動四他】さとり知る。心に知る。なるほどと思ふ。 源氏「つらきをもおもひしりけん」

おもひしをる 思萎る【動下二自】おもひしなゆ（思萎ゆ）に同じ。〔古語〕源氏「おもひしをれて、心ぼそかりければ」

おもひすぐ 思過ぐ【動上二他】おもひすごす（思過す）に同じ。〔古語〕萬葉「朝よひごとに立つ霧のおもひすぎめや」

おもひすぐし 思過【名】おもひすごし（思過）に同じ。

おもひすぐす 思過す【動四他】おもひすごす（思過す）に同じ。萬葉「雲ゐなす心もしぬに立つ霧の思ひすぐさず」

おもひすごし 思過【名】思ひ過すこと。おもひすぐし。過慮。

おもひすごす 思過す【動四他】一一とほりに思ひつつ日を經。冷淡にすごす。思ひすぐ。思ひすぐす。〔古語〕萬葉「こすげろの浦吹く風のあとすすかかなしけ子ろをおもひすごさむ」二すこしの事を餘りに深く考ふ。過度に思ふ。おもひすぐ。おもひすぐす。

おもひすつ 思捨つ【動下二他】心にかけなくなる。おもひやむ。おもひはなつ。見すつ。源氏「さりとも、おろかには思ひえすてきこえたまはじ」

おもひすます 思澄す【動四自】心を落ちつけて思ふ。雜念（ザツ）を去る。心をすます。源氏「おこなひつとめたるさま、いみじうおもひすまし」

おもひそむ 思初む【動下二他】心にかけはじむ。おもひはじむ。古今「あすか川淵は瀬となる世なりともおもひそめけん人はわすれじ」

おもひたがひ 思違【名】おもひちがひ（思違）

おもひたがふ 思違ふ【動四他】おもひちがふ（思違ふ）に同じ。

おもひたがふ 思違ふ【動下二他】おもひちがふ（思違ふ）に同じ。

おもひたがへ 思違【名】おもひちがひ（思違）

おもひたけぶ 思哮ぶ【動四自】たけく思ふ。强く思ふ。勢ひこむ。〔古語〕萬葉「ますらをの思ひたけびて隱せるその妻あめつちに通り照るともあらはれめやも」

おもひだしわらひ 思出笑【名】以前ありし事を思ひ起して獨り笑ふこと。

おもひだす 思出す【動四他】おもひいだす（思出す）に同じ。

おもひただよふ 思漂ふ【動四自】考ゆらめきて定らず。心落ちつかず。濱松「風さわぐ浪のうへなる船よりも思ひただよふ何ゆゑにそも」

おもひたち 思立【名】おもひたつこと。くはだて。決心。

おもひたつ 思立つ【動四他】發意す。決心す。おもひおこす。くはだつ。企圖す。源氏「なほ世にへじと、深うおもひたちて、尼にならんと」

思立つ日が吉日【句】事を思ひ立ちたる時に、直ちに實行に著手するをよしとす。〔諺語〕

思立つ出（デ）【句】能（ノウ）の脇のする替の形の名目。「融（トホル）」の曲にて、「思立つ心ぞしるべ」の下歌を謠ひながら橋掛（カリガ）を出て來る形。

おもひたつ 思斷つ【動四他】おもひきる。あきらむ。斷念す。おもひやむ。おもひとぢむ。おもはつ。おもひたゆ。おもひとまる。おもひとどまる。おもひとどむ。

おもひたどる 思辿る【動四自】それかあれかと思ふ。考へ込む。〔古語〕源氏「しかおもひたどるによりなん御子たちのよづきたるありさまは、うたて、あはあはしきやうにもあり」

おもひたのむ 思賴む【動四他】たのみに思ふ。〔古語〕萬葉「大船のおもひたのめる君ゆゑにつくす心はをしけくもなし」

おもひたばかる 思ひたばかる【動四他】おもひはかる（思量る）に同じ。〔古語〕源氏「いとほしくおもひたばかりたまふ」

おもひたはる 思戲る【動下二自】心からたはむる。〔古語〕古今「百草の花のひもとく秋の野におもひたはれん人な咎めそ」

おもひたむ 思溜む【動下二他】多くの思を心にたくはふ。風雅「これやさは安達の眞弓今こそは思ひためたる事もかたらめ」

おもひたゆ 思絶ゆ【動下二他】おもひたつ（思斷つ）に同じ。〔古語〕萬葉「旅なれば思ひたえてもありつれど家にある妹しおもひがなしも」

おもひたゆたふ 【動四自】心定まらず。決心しかぬ。思案に暮る。おもひやすらふ。おもひわづらふ。〔古語〕

おもひたゆむ 思弛む【動四自】心ゆるぶ。油斷す。〔古語〕金葉「いつをいつと思ひたゆみてかげろふのかげろふほどの世をすごすらん」

おもひたらはす 思足らはす【動四他】思を滿たしむ。〔古語〕萬葉「天地におもひたらはし」

おもひたわむ 思撓む【動四自】思ひしをる。心しなゆ。〔古語〕萬葉「ますらをの心はなしにたわやめの思ひたわみて」

おもひちがひ 思違【名】思ひちがふこと。思ひたがひ。

おもひちがふ 思違ふ【動四他】考へちがひをなす。思ひあやまる。おもひたがふ。

おもひちがふ 思違ふ【動下二他】前條に同じ。

おもひちがへ 思違【名】おもひちがひ（思違）に同じ。

おもひづ 思出づ【動下二他】おもひいづ（思出づ）の略。〔古語〕記「いらなけくそこに思ひて悲しけくここに思ひて」

おもひつき 思附【名】おもひつくこと。かんがへ。工風。

おもひつく 思附く【動四他】一一考が心に浮ぶ。おもひよる。考へつく。二忘れたる物事を辛うじて思ひ出す。考へつく。三慕ふ心生ず。萬葉「藤波の思ひまつはし若草の思ひつきにし君がめに」

おもひつく 思附く【動下二他】前條に同じ。狂言（烏帽子折）「なにとした物でありやらうぞ。それがしがおもひつけたは」

おもひつくす 思盡す【動四他】十分に思ふ。考へ盡す。風雅「思ひつくす心よ行きて夢に見ゆなそをだに人の厭ひもぞする」

おもひつづく 思續く【動下二他】つぎつぎに思ふ。さまざまに思ふ。おもひつらぬ。源氏「こころえぬすぐせ打添へりける身をおもひつづけて臥したまへり」

おもひつつむ 思包む【動四他】心につつむ。心にかくす。心の中に祕す。

おもひつま 思妻【名】愛する妻。はしづま。〔古語〕記「ながさだめるおもひづまあはれ」

おもひづま 思夫【名】女の戀しと思ふ男。謠曲（水無月祓）「思はぬ人をおもひづまの、跡を慕ひてのぼり瀬の」

おもひつむ 思積む【動四自】思かさなる。〔古語〕萬葉「筑波ねのよけくを見れば長きけに思ひつみこしうれひはやみぬ」

おもひつむ 思詰む【動下二他】ひたすらに思ふ。おもひこむ。源氏「あさましうのみ思ひつめて止みたまひしに」

おもひつもり 思積【名】おもひつむこと。積みかさなる思。〔古語〕續千載「年をのみおもひつもりの沖つ浪かけても世をば恨みやはする」

おもひつよる 思強る【動四自】思ふこと厚くあり。思ふことまさる。（思弱るに對して）〔古語〕落窪「おもひつよりて、起きゐて」

おもひつらぬ 思刻ぬ【動下二他】さまざまの物事を並べて思ふ。古今「うきことをおもひつらねて雁がねの鳴きこそわたれ秋の夜な夜な」

おもひて 思出【名】前の事を思ひ出して慰むこと。なぐさめぐさ。おもひいで。古今「散りぬとも香をだにのこせ梅の花こひしき時のおもひでにせん」

おもひど 思所【名】思ふところ。〔古語〕

おもひとがむ 思咎む【動下二他】心にとがむ。あやしく思ふ。〔古語〕源氏「まさに人のおもひとがめじや」

おもひとく 思解く【動四他】了解す。おもほどく。〔古語〕千載「おもひとく心ひとつになりぬればこほりも水もへだてざりけり」

おもひどち 思徒【名】互に思ひあへる者。思ふどち。〔古語〕源氏「上も、かぎりなき御おもひどちにて」

おもひとおむ 思綴む【動下二他】おもひたつ（思斷つ）に同じ。〔古語〕源氏「人のたえは

てんさまを見はてて、おもひとぢめんも」

おもひ-とどこほる 思滯る【動四他】思ひ切りて物事をなすを得ず。〔古語〕榮花「内にも參りしに、おもひとどこほりしかとて、ひたぶるに剃りすてさせたまひておはします」

おもひ-とどまる 思止まる【動四他】おもひたつ（思斷つ）に同じ。

おもひ-とどむ 思止む【動下二他】おもひたつ（思斷つ）に同じ。〔古語〕源氏「この人をとまりにとも、おもひとどめはべらず」

おもひ-とほす 思通す【動四他】何時（ひ）まで思ふ。〔古語〕山家「浮世ともおもひとほさじおしかへし月のすみける久方の空」

おもひ-とまる 思止る【動四自】おもひたつ（思斷つ）に同じ。詞花「淋しさに家出しぬべき山里をこよひの月におもひとまりぬ」

おもひ-どり 思取【名】自分の心ざす人より、盃を受取ること。（思差に對して）〔古語〕脊載「おもひざし・おもひどり、その後は、亂舞になる」

おもひ-とる 思取る【動四他】思ひ知る。さとる。源氏「いとまたくかしこき君にて、心におもひとりてければ」

おもひ-ながす 思流す【動四他】Ⅰそれからそれへと思ふ。つぎつぎに思ふ。思ひめぐらす。〔古語〕源氏「この世の外の事まで、おもひながされ」Ⅱあきらめて、心にかけず。未練を殘さず。おもひはなつ。斷念す。

おもひ-なぐさむ 思慰む【動下二他】しかあらんと思ひてなぐさむ。新古今「ぬる夢にうつつのうさも忘られて思ひなぐさむほどぞはかなき」

おもひ-なげく 思歎く【動四自】思ひてなげく。思ひ出してなげく。源氏「親のおきてにたがへりと、おもひなげきて」

おもひ-なし 思做【名】おもひなすこと。增鏡「思ひなしさへ花やかなり」

おもひ-なす 思做す【動四他】思ひ量（ひ）りてそれと定む。源氏「女はさこそ忘れたまふを、嬉しきにおもひなせど」

おもひ-なずらふ 思準ふ【動下二自】これをかれに準へて思ふ。おもひよそふ。〔古語〕源氏「天に生るる人の、あやしき三つの途にかへるらん一時、おもひなずらへて」

おもひ-なだむ 思宥む【動下二他】次條に同じ。拾玉「身のうさを思ひなだむるかひもなくさわぎ出でぬるわが涙かな」

おもひ-なだらむ 思宥らむ【動下二他】おもひのどむ（思和む）に同じ。〔古語〕源氏「世の中を、みなさまざまにおもひなだらめて」

おもひ-なびく 思靡く【動四自】心から靡く。

おもひ-なほす 思直す【動四他】思ひ改む。思ひかへす。

おもひ-なほる 思直る【動四自】心改まる。おもひかはる。〔古語〕源氏「いづくをまた思ひなほるべきをりとか待たん」

おもひ-なやむ 思惱む【動四他】心苦しきまで思ふ。心になやむ。おもひわづらふ。

おもひ-ならふ 思習ふ【動四自】Ⅰさとる。了解す。〔古語〕伊勢「君によりおもひならひぬ世の中の人はこれをや戀といふらん」Ⅱ常に思ふ。思ひ慣（ナ）る。〔古語〕源氏「また二つなくて、さるべきものに思ひ習ひたるただ人の中こそ」

おもひ-なる 思成る【動四自】その考になる。その心になる。〔古語〕源氏「いとほしうおもひなる事も侍りながら」

おもひ-なる 思慣る【動下二自】おもひならふ（思習ふ）Ⅱに同じ。〔古語〕新後撰「物をのみ思ひなれたる老が身にねざめせられぬ曉もがな」

おもひ-ね 思寢【名】深く心にかけて寢ぬること。思ひつつ寢ぬること。古今「君をのみおもひねに見し夢なればわが心から見つるなりけり」

おもひ-ねざめ 思寢覺【名】思寢のさめたること。〔古語〕增鏡「物をのみ思ひねざめにつくづくと見るもかなしき燈の色」

おもひ-ねんず 思念ず【動佐變他】Ⅰ心の中に祈る。祈念す。源氏「さるべきついでもありなん、命長くとこそ思ひ念ぜめ」Ⅱ心に泳（ク）ふ。がまんす。

おもひ-のこし 思殘【名】おもひのこすこと。おもひおき。未練。

おもひ-のこす 思殘す【動四他】心をのこす。殘念に思ふ。未練殘る。おもひおく。源氏「かかるところに棲む人、心におもひのこすことはあらじ」

おもひ-のどむ 思和む【動下二他】思を靜む。のどかに思ふ。おもひなだむ。おもひなだらむ。〔古語〕源氏「今すこし、みづからも思ひのどめ、又しづまりたまひなんに、參りこん」

おもひ-のぶ 思延ぶ【動下二他】心をゆるむ。心をやはらぐ。〔古語〕萬葉「わがせこと手たづさはり明けくれば出でたち向ひ夕されば振りさけみつつ思ひのべ」

おもひ-のほか 思の外【句】おもひ（思）の條下を見よ。

おもひ-のぼる 思上る【動四自】おもひあがる（思上る）に同じ。〔古語〕源氏「雲の上におもひのぼれる心には千ひろの底もはるかにぞ見る」

おもひば 思羽【名】Ⅰいとふば（銀杏羽）に同じ。おもひばね。Ⅱきみしらず（君不知）に同じ。

おもひ-はからふ 思量らふ【動四他】おもひはかる（思量る）の延。

おもひ-はかり 思量【名】考へはかること。おもんばかり。おもふはかり。

おもひ-はかる 思量る【動四自】心にはかりて考ふ。おもんばかる。おもひたばかる。工夫す。考定す。竹取「よき人に逢はせんと思ひはかれども」

おもひ-はぐくむ 思育む【動四他】大切に思ひて、はぐくむ。〔古語〕源氏「幼からん御娘のやうに、おもひはぐくみ奉りたまふ」

おもひ-はげむ 思勵む【動四自】心にかけてはげむ。源氏「くちをしくは見えじとおもひはげみつつ」

おもひ-はじむ 思始む【動下二他】おもひそむ（思初む）に同じ。源氏「何に、かくあながちなることをおもひはじめて、心ぐるしくおぼしなやますらん」

おもひ-はつ 思果つ【動下二他】おもひたつ（思斷つ）に同じ。〔古語〕源氏「あこはらうたけれど、つらきゆかりにこそえおもひはつまじけれ」

おもひば-つつみ 思羽包【名】拜領したる香木又は香爐などを入れおく包。

おもひ-はなつ 思放つ【動四他】思ひ離るるやうにす。おもひきる。おもひすつ。おもひながす。〔古語〕源氏「したりがほにも、もとの事をおもひはなちたらんけしきこそ」

おもひ-はなる 思離る【動下二自】思はぬやうになる。おもひたゆ。源氏「ひたすらに憂しともおもひはなれぬ男聞きつけて、涙おとせば」「同じ。

おもひ-ばね 思羽根【名】おもひば（思羽）に同じ。

おもひ-はばかる 思憚る【動四他】心にはばかる。源氏「よろづ多くおもひはばかる事のありて」

おもひ-はふらす 思散らす【動四他】思に心を亂す。〔古語〕萬葉「天雲におもひはふらし」

おもひ-はらから 思兄弟【名】むつまじき兄弟。心合ひたる兄弟。〔古語〕榮華「大納言殿の北の方は、いづれとも、もとよりいみじきおもひはらからにて」

おもひ-はるく 思晴く【動下二他】思を晴らす。心をはらす。〔古語〕源氏「例のけしきなる今朝の御文にもあらざめれど、なほえおもひはるけず」

おもひ-びと 思人【名】ゆかしくおもふ人。愛する人。こひびと。情人。

おもひ-ひらく 思開く【動下二自】思無くなる。心のどかになる。（思結ぼるに對して）夫木「春はまづ頼む南のみ山より思ひひらけてにほふ梅が枝」

おもひ-ふす 思臥す【動四自】思ひながら臥す。思ひつつ寢ぬ。枕「置きていぬべかりけるなど思ひふしたるに」

おもひ-ふす 思ひふす【動下二他】全く思ふ。信ず。〔古語〕新古「わがものと思ひふせたる人妻はもとへはやらじただは戀ふもと」

おもひ-ぶり 思振【名】思ひよせたるやうにすること。〔德川時代の俚語〕きのふけ

ふの物語「御文のことは、色色さまざまのおもひぶりの御文章のうちに」

おもひ-ふる 思舊る【動上二自】思ひつつ久しくなる。〔古語〕新勅撰「よそにのみ思ひふりにし年月のむなしき數ぞつもるかひなき」

おもひ-へだつ 思隔つ【動下二他】心にへだつ。氣を置く。源氏「右近は、こと人なりければ、おもひへだてて」

おもひ-ほく 思惚く【動下二自】心おろかになるまで思ふ。心ぼんやりとす。おもひほる。〔古語〕源氏「むげにおもひほけたるさまながら、もの打言ひたるけしき・用意、くちをしからず」

おもひ-ほこる 思誇る【動四自】志を得たるやうに思ふ。自慢に思ふ。萬葉「さならべる驚はなけむと心にはおもひほこりて」

おもひ-ほどく 思解く【動四他】おもひとく（思解く）に同じ。〔古語〕續古今「憂しとてもおもひほどけば夢の世をいとふは人のさめぬなりけり」

おもひ-ほる 思惚る【動下二自】おもひほく（思惚く）に同じ。〔古語〕狭衣「かなしくいみじく思ひほれたまへり」

おもひ-まうく 思設く【動下二他】かねて思ひおく。心に準備す。考へおく。源氏「心一つにおもひまうけて」

おもひ-まがふ 思紛ふ【動下二自】まぎらはしく思はる。〔古語〕源氏「あやしう、ただ、それかと、おもひまがへらるるをりをりこそあれ」

おもひ-まぎらはす 思紛らはす【動四他】思ひまがはしむ。

おもひ-まじる 思雜る【動四自】同時にさまざまの事を思ふ。〔古語〕源氏「おもひまじるかたなくて見たてまつらましかば」

おもひます 思增す【動四他】思ふ心加はる。伊勢「葦べより滿ちくるしほのいやましに君に心を思ひますかな」

おもひます 思優す【動四他】まさりてよしと思ふ。〔古語〕源氏「この君も、東のをば、やんごとなく睦じうおもひましたり」

おもひ-まつはす 思纏はす【動四他】心にまつはす。絶えず心に掛く。〔古語〕源氏「わづらはしげにおもひまつはすけしき見えましかば」

おもひ-まどふ 思惑ふ【動四自】思ひ定めかぬ。おもひまよふ。源氏「こはいかなる事ぞと、おもひまどはるれど」

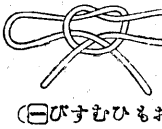
おもひ-まはす 思廻す【動四他】さまざまに思ふ。おもひめぐらす。源氏「おのづからゆきまじり、物まぎるることこそはべらめとおもひまはして」

おもひ-まよふ 思迷ふ【動四自】おもひまどふ（思惑ふ）に同じ。源氏「みづからの心には、何ばかりおもひ迷ふべきにあらねど」

おもひ-みだる 思亂る【動下二自】如何にせんと、さまざまに思ふ。思ひ思ふ。考一定せず。源氏「あぢきなく夢のやうに過ぎにしなげきを、またや加へんと、おもひみだれて」

おもひ-みる 思見る・惟る【動上一他】よく思ふ。かんがへみる。おもんみる。源氏「おぼろげならぬ契のほど、あはれにうれしくおもひみるままに」

おもひ-むすび 思結【名】㊀紐の結び方の一。掛帶結の別法とす。下の圖を見よ。㊁ほうじゅむすび（寶珠結）に同じ。



（㊀びすむひもお）

おもひ-むすぶ 思結ぶ【動四他】心につつみ持つ。心に含む。起「結二之意裏一、ココロニオモヒムスビテ」

おもひ-むすぼほる 思結ぼほる【動下二他】次條に同じ。〔古語〕源氏「世に經（へ）じと、ふかう思ひたちて、尼になりなんと、おもひむすぼほれたまふめれば」

おもひ-むすぼる 思結ぼる【動下二自】物思に心ふさがる。おもひむすぼほる。（思開くに對して）〔古語〕萬葉「なづえの菅のねもろに思ひむすぼれ嘆きつつあが待つ君が」

おもひ-むせぶ 思咽ぶ【動四自】物思に心ふさがる。〔古語〕源氏「世になくなまめかしう、まばゆき心ちすれば、おもひむせびつる心のやみもはるるなり」

おもひ-むつぶ 思睦ぶ【動上二自】むつまじく思ふ。〔古語〕源氏「親しくおもひむつぶるすぢは、また無くなんおもほえし」

おもひ-めぐらす 思廻らす【動四他】おもひまはす（思廻す）に同じ。源氏「かたき詩の心をおもひめぐらし」

おもひ-もの 思者【名】㊀おもひびと。おもひぐさ。戀人。㊁愛妾。めかけ。

おもひ-もゆ 思燃ゆ【動下二自】おもひこがる（思焦る）に同じ。

おもひ-やすむ 思息む【動四自】かりそめに思ふ。なみ一とほりに思ふ。〔古語〕

おもひ-やすらふ 思休らふ【動四自】心定まらず。おもひたゆたふ。〔古語〕源氏「ゆくりなくあくがれんことをば、女はおもひやすらひ」

おもひ-やむ 止む【動下二他】おもひたつ（思斷つ）に同じ。源氏「さばれ、おもひやみなんと思へど」

おもひ-やむ 思病む【動四自】人を戀ひ慕ひて、病となる。〔古語〕萬葉「玉づさの使も來ねばおもひやむ我が身ひとつぞ」

おもひ-やり 思遣【名】おもひやること。想像。同情。

おもひやり-ごと 思遣事【名】おもひやる事。おしはかり。〔古語〕源氏「人の心より外なるおもひやりごとして、物ゑんじなどしたまふよ」

おもひやり-じんじや 思往神社【名】但馬國城崎（ササキ）郡八代（ヤシロ）村大字中村に鎮坐せる式内の古社。

おもひ-やる 思遣る【動四自】心なぐさむ。心はれやかになる。心ゆく。〔古語〕萬葉「わがせこを見つつしをればおもひやることもありしを」

おもひ-やる 思遣る【動四他】㊀はるかに思ふ。おしはかりて思ふ。拾遺「おもひやるこしのしら山しらねども ひと夜も夢に見えぬ日ぞなき」㊁（特に）他人の苦しさをおしはかりて思ふ。同情す。

おもひ-ゆづる 思讓る【動四自】情愛減ず。〔古語〕源氏「おもふ人具したるは、おのづからとおもひゆづられて」

おもひゆるす 思許す【動四他】心の中に許す。源氏「罪おもき御心をば、僧都におもひゆるしきこえて」

おもひ-よす 思寄す【動下二他】寄せて思ふ。比べて思ふ。思ひあはす。おもひよそふ。おもひなずらふ。聯想す。大和「ゆゆしとて忌むとも今はかひもあらじうきをばこれに思ひよせてん」

おもひ-よそふ 思準ふ【動下二他】おもひなづらふ（思準ふ）に同じ。〔古語〕源氏「いとかくはしくて、らうたげにうち泣くも、なつかしくおもひよそへらるるぞすきずきしきや」

おもひ-より 思寄【名】思ひよること。考へつき。ぞんじより。狂言「鬮罪人」「まづ、亭主から、思ひよりを仰せられ」

おもひ-よる 思寄る【動四自】思ひあたる。考へつく。源氏「ゐておりけるにやと、おもひよりけり」

思寄らず【句】おもひがけず。ゆくりなく。おもひもよらず。意外に 源氏「内には、おもひよらず、狩衣姿なる男の、しのびやかにもてなしてはひよりける」

おもひ-よろこぶ 思悅ぶ【動四自】よろこぶ（悅ぶ）に同じ。源氏「失せにし女子のかはりにと、おもひよろこび」

おもひ-よわる 思弱る【動四自】心よわる。おもひ屈す。落膽す。（思强るに對して）〔古語〕源氏「關守のうちも寐ぬべきけしきに、おもひよわりたる」

おもひ-れ 思入【名】おもひいれ（思入）の略。

おもひ-れ 思入【副】おもひいれ（思入）の略。

おもひ-わかる 思分る【動下二自】考へ定めらる。（專ら打消の形にていふ）〔古語〕源氏「あさましくおぼえて、ともかくもおもひわかれず」

おもひ-わきまふ 思辨ふ【動下二他】心に辨別す。おしはかりて知る。

おもひ-わく 思分く【動四他】考を定む。分別す。（專ら打消の形にてふ）〔古語〕源氏「おもひわかぬばかりの心にて」

おもひ-わする 思忘る【動下二他】わする（忘る）に同じ。大和「からくして思ひ忘る

る戀しさをうたて鳴きつる鶯の聲」

おもひ-わたす 思渡す【動四他】思ひ及ぼす。おもひやる。〔古語〕源氏「されば、思ひわたさるるにやあらん」

おもひ-わたる 思渡る【動四自】心に思ひて月日を送る。思ひながら過ぐ。〔古語〕源氏「年ごろ思ひわたる心のうちも、聞えしらせん」

おもひ-わづらふ 思煩ふ【動四他】おもひなやぶ思惱む)に同じ。萬葉「見つつあれば心はもえぬかにかくにおもひ煩ひねのみしなかゆ」

おもひ-わぶ 思侘ぶ【動上二他】苦しくおもふ。わびしくおもふ。いとはしくおもふ。思ひくたびる。おもひわぶる。〔古語〕源氏「おもひわびぬべきにより」

おもひ-わぶる 思侘る【動下二他】前條に同じ。〔古語〕萬葉「立ちかへり啼けどもあれはしるしなみおもひわぶれてぬる夜しぞ多き」

おもふ 思ふ・想ふ・懷ふ・憶ふ・顧ふ・惟ふ【動四他】一物事を理解せんとて、心をはたらかす。考ふ。思考す。思慮す。二過去の事を考へおこす。追憶す。追想す。回顧す。三おしはかる。推量す。想像す。四愛す。いつくしむ。古今「世のうきめ見えぬ山路に入らんにはおもふ人こそほだしなりけれ」五したふ。戀ふ。「おもふ仲」六願ふ。望む。七憂ふ。心配す。ものおもひす。思うた壺【句】「思ふ壺」に同じ。重井筒「かねてより思うたつぼへあたりしと」思うたより生むが易い【句】「案ずるより生むが易い」に同じ。〔諺語〕思うたり叶うたり【句】「願ったり叶ったり」に同じ。

思はざる外(ガイ)【句】「思はぬ外」に同じ。謠曲(隅田川)「思はざる外に一人子を人商人に誘はれて」

思はず【句】思ひがけず。〔古語〕源氏「のりの師とたづぬる道をしるべにておもはぬ山に踏みまよふかな」

思はぬ外(ガイ)【句】おもひがけず。思はざる外。思ひあへず。謠曲(谷雪)「思はぬ外の歎かな」

思ひあへず【句】一前條に同じ。〔古語〕源氏「思ひあへぬほどなれば、心騷ぎて」二おもふに堪へず。〔古語〕古今「拾ひあつめとれりとすれど玉の緒の短きころ思ひあへず」

思ひ思はる【句】相互に思ひあふ。

思ひ思ふ【句】思ひたる上に更に思ふ。かさねがさね思ふ。拾遺「年を經て思ひ思ひて逢ひぬれば月日のみこそうれしかりけれ」

思ひがけず【句】豫想せざりし結果を生ず。思ひよらず。思ひがけなし。金葉「大峯にて、おもひがけず櫻の咲きたりけるを見て」

思ひがけなし【句】前條に同じ。

思ひきや【句】思ひがけし事ならんや、思ひがけず。全く豫期せざりき。古今「忘れては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見んとは」

思ふ思ふ【句】思ひながら。源氏「などりなうつろふ心のいと輕きぞやとはおもふおもふ、なほ心げさうは進みて」

思ふ方(カタ)の風【句】順風。〔古語〕源氏「思ふかたの風にて、限りける日かずたがへず入りたまひぬ」

思ふ門(カド)【句】戀しく思ふ人の家の門。俗曲(八體)「思ふかどには、竹を植ゑて、雪のふりたる曙を、つれなき人に見せばや、なびく笹の葉」

思ふ壺【句】豫期したる狀態。づぼし。

思ふごち【句】心あひたる友だち。思ふ同士。おもひどち。〔古語〕土佐「立てばたつゐればまたゐる吹く風と波とはおもふどちにやあるらん」

思ふ仲【句】互に思ひあふあひだがら。

思ふ仲に風吹く【句】次條に同じ。夫木「草の葉も動かぬ夏の照る日にもおもふなかにや風も吹くらん」

思ふ仲には垣をせよ【句】「親しき仲には垣をせよ」に同じ。〔諺語〕

思ふ仲のいさかひ【句】男女の親しきあまりに、却りて諍(ソウセイ)をおこす。思ふ中のつづりあらそひ。思ふ仲の小いさかひ。〔諺語〕

思ふ仲の小いさかひ【句】前條に同じ。〔諺語〕

思ふ仲の綴爭(ツヅリアラソヒ)【句】前條に同じ。〔諺語〕吾妻我集「寄レ衣戀。からころもうらみて紬をひきさくや思ふが仲のつづりあらそひ」

思ふ仲は涼しい【句】親しき者同志うち向ふ時は、心すがすがしくして、わだかまりなし。知った仲は涼しい。〔諺語〕

思ふ念力、岩をも通す【句】「念力、岩をも通す」に同じ。〔諺語〕

思ふ日【句】きじつ(忌日)に同じ。謠曲(佛原)「今日は思ふ日にあたれり」

思ふも著(シ)く【句】思ふに違はず。〔古語〕躬恒集「わが聞きて人には告げん時鳥おもふもしるくまづここに鳴け」

思ふゑ【句】思ふゆゑ。〔古語〕萬葉「思ふゑにあふものならばしましくも妹が目かれてあれ居らめやも」

思へば呪(ロ)ふ【句】人を思ふこと深きあまりに、却りてのろふに至る。〔諺語〕夷(ネ)の思ふ所に匪(カ)ず【句】『易經』の渙卦に「渙有レ丘、匪二夷所一思」とある。本づく。渙は渙散、夷は常人。渙散したるものを集めて丘(カ)の如くにするは、常人の思慮の及ばざる所といふ義。普通の人の能く思ひ及ぶ所にあらず。〔諺語〕

おも-ぶく 赴く・趣く【動下二他】おもむく(赴く)に同じ。〔古語〕續紀「敎へたまひ、おもぶけたまひ」

おも-ぶくら 面脹【名】顏の肥えて圓きこと。名義抄「豐下、オモフクラ」

おも-ぶけ 赴・趣【名】おもむけ(赴)に同じ。〔古語〕

おもふ-さま 思ふ樣【副】心に滿足するほど十分に。思ふやうに。おもふまま。存分に。意の如く。おもひいれ。おもさま。思ふ樣に。狂言(きんし慢)「さてもさても、をかしい事を申して參った。おもふさま、笑ひぐさををすへてやりませう」

おもふさま-に 思ふ樣に【副】前條に同じ。萬葉「色見むとうゑしもしるく山吹のおもふさまにも咲ける花かな」

おも-ぶせ 面伏【名】おもてぶせ(面伏)に同じ。落鏈忠頼をびんなしと思ひおきたるにや、又おもぶせなり」

おもふ-に 思ふに・惟ふに・顧ふに【副】おもひめぐらしてみるに。考へみるに。想像するに。おもんみるに。おもみらく。

おもふ-はかり 思量【名】おもひはかり(思量)に同じ。〔古語〕保元「敎長卿、おもふはかりなくて」

おもふまま 思ふ儘【副】おもふさま(思ふ樣)に同じ。狂言(土產鏡)「思ふまま打擲をした、堪忍ならぬ」

おもふまま-に 思ふ儘に【副】前條に同じ。金葉「思ふままに答へたる對策のふみども」

おもふ-やう-に 思ふ樣に【副】前條に同じ。「語」

おも-ぶり 【名】おもむき(趣)二に同じ。〔古語〕

おもぶる 徐ぶる【貌】おもむる(徐)に同じ。〔古語〕紀從容、オモブルニ」

おもへらく 思へらく・意へらく・謂へらく・以爲らく【副】『思へることの義』おもへるには。考ふるには。

おもへらひ 【名】次條に同じ。〔古語〕紀神色、オモヘラヒ」

おもへり 【名】かほいろ。かほつき。顏色。〔古語〕續紀「禮(ヰ)なきおもへりなく」

おもほえず 思ほえず【副】おぼえず(覺えず)に同じ。〔古語〕萬葉「おもほえず來ませる君を佐保川の蛙聞かせず歸しつるかも」

おもほさく 思ほさく【動他】『おもほす(思ほす)ことの義』おもほすには。〔古語〕紀「以爲、オモホサク」

おもほし 思ほし【形二】おもはし(思はし)に同じ。〔古語〕萬葉「おもほしきことづてやらずこふるにし心はもえぬ」

おもほし-めす 思ほし召す【動四他】次條の敬語。おぼしめす。〔古語〕萬葉「とほくあれば一日一夜もおもはずてあるらむものとおもほしめすな」

おもほす 思ほす【動四他】『おもふ(思ふ)の

敬語の形「思はすし」の轉』**おもふ**(思ふ)の敬語。おぼす。おぼしめす。おぼほす。〔古語〕源氏「いかにおもほしたまふにか」

おもほてり 面熱【名】おもほてること。おむひてり。〔古語〕紀「作」色、オモホテリシテ」

おもほてる 面熱る【動四自】怒りたる色が顔一面に現はる。いきどほりて顔赤くなる。〔古語〕

おもほゆ 思ほゆ【動下二自】『おもはゆ(思はゆ)の轉』おもはる。おぼゆ。おぼほゆ。〔古語〕萬葉「しらなみのよするいそまをこぐ船のかぢともまたくおもほえし君」

おもほゆ-らく 思ほゆらく【動自】おもほゆることの義。〔古語〕萬葉「よしゑやし戀ひじとすれどゆふま山越えにし君がおもほゆらくに」

おもほる 溺ほる【動下二自】おぼほる(溺)に同じ。〔古語〕伊勢集「さらばよと別れし時にいはませばわれも涙におもほれなまし」

おもみ 重味【名】『みは接尾語、味は假借の字』重くある程合。(かる味に對して)

おもみらく 惟らく【副】『次條の語の連體形の延』**おもふに**(思ふに)に同じ。〔古語〕

おもみる 惟みる【動上一他】**おもひみる**(惟ひみる)に同じ。おもんみる。〔古語〕

おもむき 赴・趣【名】㊀おもむくこと。㊁ふぜい。おもしろみ。あぢはひ。おもぶり。趣味。躬恒集「その屏風の歌、所所の題、おもむきにしたがへり」

おもむく 赴く・趣く・趨く【動四自】『面(オモ)向(ムク)くの義』㊀むかふ。むく。〔古語〕竹取「この吹く風はよき方の風なり。あしき方の風にあらず。よき方におもむきて吹くなり」㊁むかひてゆく。おもぶく。㊂したがふ。歸(キ)す。〔古語〕榮華「國王ときこゆとも、おもむきたまひなんや」

おもむく 赴く・趣く・趨く【動下二他】㊀むかはしむ。おもむかす。むかひてゆかしむ。〔古語〕㊁したがはしむ。〔古語〕隆信集「いと心つよかりける人を、いひおもむけて、かくし忍びはべるを」

おもむけ 赴・趣【名】おもむくること。おもぶけ。しむけ。〔古語〕源氏「大殿の御おもむけの異なるにこそあなれ」

おもむろ 徐【貌】しづか。ゆるやか。おもぶる。丁寧。

おもんず 重んず【動佐變他】『重みすの音便』おもく見なす。貴ぶ。(輕んずに對して)「思慮。

おもん-ばかり 慮【名】おもんばかること。

おもん-ばかる 慮る【動四他】**おもひはかる**(思量る)の音便。

おもん-みる 惟みる【動上一他】**おもひみる**(惟みる)の音便。

おもめ-はぶたへ 重目羽二重【名】目方重き羽二重の總稱。(輕目羽二重に對して)

おもめ-もち 面持【名】かほいろ。かほつき。面色。〔古語〕枕「いみじきおももちして」

おもや 母屋・主屋【名】㊀家の中央の部分、即ち庇・廊下などならぬところ。もや。竹取「おもやの内には、女ども、番にをりて守らす」㊁專ら住居に用ふる建物、即ち物置・長屋などならぬ處。ほんや。おほや。

おもや【名】**おもわ**(面輪)に同じ。〔古語〕萬葉「わがせこをいつぞ今かと待つなへにおもやは見えむ秋風ぞ吹く」

おもやう 面樣【名】顔のさま。おもかげ。おももち。おもざし。〔古語〕枕「額髮ながやかに、おもやうよき人の、喧きほどに、文をえて」

おもやか 重やか【貌】重くあるらしきさま。おもおもしきさま。おどそか。たふとげ。おもらか。おもりか。〔古語〕

おもやく 重役【名】おもき役、又これを勤むる人。ちゆうやく。

おもやくにん 重役人【名】重き役を勤むる人。かしらだちたる役人。河原院引「出入屋敷の重役人と、無念をこらへて、手むかひせねば」

おもやなぎ 面柳【名】變(カサネ)の色目の一。表は濃き青、裏は薄き青。

おもやる 思やる【動四他】思ひなさる。推したまふ。狂言(六人僧)「それほどにおもやらば、死んでいらざること」

おもゆ 重湯【名】米を煮たる汁。きはめて淡き粥。飯の取湯(コトリ)。保元「怪しげなる僧房に入れまゐらせて、おもゆなどを進め奉りける」

おもよろひ 重鎧【名】札(ネサ)厚く作りて重き鎧。太平記「歩立(カチ)に力疲れ、重よろひに肩を引かされ、片時が間に疲るべし」

おもら 母良【名】伊勢神宮に奉仕する女。子良(ラ)よりも年のまさりたるもの。月經の間は籠(モ)りゐて、仕へず。

おもらか 重らか【貌】**おもやか**(重やか)に同じ。〔古語〕源義「小き唐櫃の金物したるがいと重らかなるを」

おもり 錘【名】㊀物の重さを増すために附け加ふる物。「釣絲のおもり」㊁秤の一方にかけて、物の目方をはかる具。分銅。

おもり 御守【名】㊀まもること、又まもる人の敬稱。㊁こもり(子守)の敬稱。

おもりか 重りか【貌】**おもらか**(重らか)に同じ。〔古語〕源氏「ころも箱のおもりかに、古代なる」

おもり-づきん 重頭巾【名】さはのじようばうし(澤之丞帽子)に同じ。四季はなし「いでたち、常めかぬ末づかひの女…はねもとゆひの目に立つほどに折掛け、御所ぞめのおもり頭巾、淺く火燈ぴたひをとりひろげ」

おもり-ばうし 重帽子【名】前條に同じ。

おもる 重る【動四自】㊀目方重くなる。風雅「うちしめりすすきのうれ葉おもりつつ西吹く風になびく村雨」㊁病氣重くなる。源氏「日日におもりたまひて」

おも-わ 面輪【名】**おも**(面)に同じ。萬葉「もち月のみてるおもわに花のごとゑみてたてれば」

おも-わく 思惑【名】**おもはく**(思はく)を見貌を見忘る。〔古語〕榮花「すみぞめの衣うきよの花ざかりおもわすれてもをりてけるかな」

おもわく 思はく【名】『おもはく(思はく)を見忘る。〔古語〕榮花「すみぞめの衣うきよの花ざかりおもわすれてもをりてけるかな」

おもわ-すれ 面忘【名】おもわすること。萬葉「おもわすれだにもえすやとたにぎりてうてどもこりずこひのやつこは」

おもわる 面忘る【動下二他】他人の容貌を見忘る。〔古語〕榮花「すみぞめの衣うきよの花ざかりおもわすれてもをりてけるかな」

おや 親【名】㊀『おゆ(老ゆ)を見よ』父母・祖父母及び先祖の人人。〔祖〕〔古語〕紀「遠祖、トホツオヤ」㊁父又は母、又は養父母。㊂子あるの人。㊃をさ。かしら。㊄物の殖え生ずるもと。「芋のおや」㊅おやかぶ(親株)の略。㊆園藝上にて、變種は實を結ばぬため、別に種子を採るために特に栽培する苗木。㊇遊戯の際、子と假定したる者を保護する役目ある者。㊈相合せにて、花札を一座に配る役目。先づ札を打ち得る權利あり。

親苦(ク)・子樂(ク)、孫乞食(キヨジキ)【句】親は、勞して財産をつくり、子は、その庇蔭によりて、安逸なる生活をおくり、孫に至れば、家産を失ひて、あはれみを他人に乞ふに至る。〔諺語〕

親ならぬ親【句】まことの父母ならぬ親、即ち繼父母・舅姑などの類。

親に跡を遺る【句】子が親に先だちて死ぬ。〔德川時代の語〕一代男「色、青ざめて、戀に貌をせめられ、行末たのみ少く、おっつけ親に跡やるべき人の」

親に似た龜の子【句】親によく似たる子の譬。〔俚語〕

親に似ぬ子は鬼子(ヨナキ)【句】親の性質に似ざる子は、人の子にあらず。〔諺語〕

親の因果が子に報ゆ【句】親の惡しき行の結果が、子に禍をなす。〔諺語〕

親の恩は子で送る【句】親に育てられし恩は、子を育てて報ゆ。〔諺語〕

親の恩より師匠の恩【句】師匠の恩の重き譬。親子は一世(セイ)、師は三世(セサン)。〔諺語〕

親の親【句】父母の父母。祖父母。〔古語〕拾遺「親の親とおもはましかば問ひてましわが子の子にはあらぬなるべし」

親の心、子知らず【句】親の子を思ふ心を、子はよく察せず。〔諺語〕

親の脛を噛(カジ)る【句】**すねかじり**(脛噛)を見よ。〔諺語〕柳誓「親の脛かじる息子の齒の白さ」

親の光は七光(ナナヒカリ)【句】親の餘澤は子孫七世までにも及ぶ。〔諺語〕

親の守(ガモ)【句】子を思ふ親の心。〔古

おや

語」古今「たらちねのおやのまもりとあひ添ふる心ばかりはせきなとどめそ」親の持たする子心【句】親の仕向けによりて、如何様にも子の心の変ずる譬。〔諺語〕

親の慾目(ヨクメ)【句】親の愛情より、他人の子に比べて、わが子のすぐれて見ゆること。〔諺語〕

親は無いか【句】人の技藝の堪能なるを譽め上ぐるに、かほどの藝を、その者の親が見たらば、さぞ嬉しからん、との意にていふ語。 鹿筑波「親はないか舞はいたいけな胡蝶かな」

親は無けれど、子は育つ【句】一親が早世(ハヤ)などしても、遺(ノコ)りたる子は、どうにかして成長しゆくものなり。〔諺語〕二世の中の事は、捨てて置きても、どうにかかうにか成りゆくものなり。〔諺語〕

祖(オヤ)の子【句】父祖に劣らぬ子。おやまご(親孫)参照。〔古語〕 蕉葉「清きその名をいにしへゆ今のをつつに流さへるおやの子どもぞ」

打つも撫でるも親の慈悲【句】親は子を撫(ナデ)愛すると共に、これを打懲すこともあれど、結局は子を完全なる人物に育て上げんとの至情より出づ。〔諺語〕

生(ウ)の親【句】假に定めたる親ならぬ、實際の父母。生の父と生の母と。

おーや【感】意外の事物に出遇ひたる時などに發する聲。おやまあ。〔俚語〕

おや 親【接頭】數多き物の中の最大なる意。「おや船」「おや骨」

おやいぬ 親犬【名】親たる犬。(子犬に對して) 狂言 戎卜物「ゑのころが親犬になりあがります」

おやいびり 親いびり【名】親をいぢめること、又その人。

おやいも 親芋【名】里芋の根の、最初に出來たる部分。いもがしら。(子芋に對して)

おやうし 親牛【名】親たる牛。(子牛に對して) 狂言 弁子聟「親牛も、子も、皆引かせてやった」

おやおもひ 親思【名】親を大切に思ふこと、又その人。

おやおや【感】おやの重語。〔俚語〕

おやかうかう 親孝行【名】かうかう(孝行)に同じ。(親不孝に對して)

おやがかり 親掛【名】親に保護せられてゐる身分。へやずみ。

おやかす【動四他】おやけるやうにす。おやす。〔俚語〕

おやかた 親方【名】一恩を受けて、親として頼むべき人。 平治 今は、一向おやかたとたのむなり」二主人。〔職人などの語〕三一組合のかしら。おやぶん。四おやもと(親元)に同じ。五相撲(スマ)の年寄の敬稱。六芝居にて、俳優の敬稱。

おやかた 親形【名】あに(兄)を云ふ。〔備前國の方言〕

おやがたち 親形【名】あに(兄)を云ふ。〔土佐國の方言〕

おやかたぶん 親方分【名】一親方たる身分。二親方になずらふること。

おやかたもち 親方持【名】親方にかかへられをる身。主人もち。 丹波奥作「そっちも、こっちも、親方もち」

おやがね 親金【名】芝居にて、俳優に對して、日給以外に前拂する給金。

おやがひに 親甲斐に【副】親たる甲斐にて。 手習鑑「親がひに座が高い、小供どもへ、どれ挨拶」

おやかぶ 親株【名】きうかぶ(舊株)に同じ。

おやがほ 親顔【名】親のやうに振舞ふこと。親めくこと。

おーやかましう 御喧しう【感】『おやかましく有るべしの意』一人との挨拶終りて別を告ぐるときにいふ語。さやうなら。二藝人などが、その技を演じをはりたるとき、聽き手にむかひて挨拶にいひ、又、藝妓が客の席にあらはれて音曲などを始めんとする時、客にむかひていふ語。〔俚語〕

おーやがみ 祖神【名】先祖の神。うぢがみ。

おやがる 親がる【動四自】親らしく振舞ふ。おやめく。おやだつ。〔古語〕 源氏「いかがとなん見たまへると、おやがりていふ」

おやぎ 親木【名】接木(キギ)の臺となるべき木。臺木。

おやぎんかう 親銀行【名】〔商〕他の銀行に對して、資金の融通・再割引等の種種の便宜を與ふる中央銀行以外の大銀行。(子銀行に對して)

おーやく 御役【名】一やくめ(役目)の敬稱。二つきやく。月經。〔女の語〕

おやくあな 御役穴【名】芝居にて、監察のために出張したる役人の居る席。桟敷(サジキ)に設く。

おーやくしよ 御役所【名】一やくしよ(役所)の敬稱。二えどまちぶしより(江戸町年寄)の俗稱。

おーやくそく 御約束【名】一やくそく(約束)の敬稱。二馴染の藝妓に、毎月與ふる手當の金錢。〔京都の遊廓の語〕

おーやくゑん 御藥園【名】やくゑん(藥園)の敬稱。

おーやげ 親氣【名】親らしき樣子。〔古語〕 曾我「女の身として、おやげもなきに似たれども、いかなる人の聟となり、思ひ鎮めておはしませ」

おーやけなし【形一】いたはし(勞し)に同じ。〔信濃國の方言〕

おやける【動下一自】陰莖勃起す。おゆ。〔俚語〕

おやこ 親子【名】一親と子と。父子。母子。二鶏肉と鶏卵。三蠶豆(マメ)と豌豆(エンドウ)。四おやこどんぶり(親子丼)の略。

親子は一世(セイ)【句】親子の關係は、この世のみに限らる。親子は一世の契(夫婦は二世・主從は三世に對して)〔諺語〕

親子は一世の契【句】前條に同じ。〔諺語〕 保元「親子は一世の契と申せども、來世は必ず一つ蓮に參りあふやうに御念佛候ふべし」

親子は一世、師は三世【句】親子の關係よりも、師弟の關係の方深し。親の恩より師匠の恩。〔諺語〕

親子は三界の首枷(カセ)【句】「子は三界の首枷」に同じ。 謡曲 実盛「親子は三界の首枷と聞けば、誠に老ごころ、わかれの涙の雨の袖」

おやご 親御【名】他人の親の敬稱。おやごさま。おやごぜ。

おやこーがき 親子垣【名】建仁寺垣の一種。竪の竹を大小交へて用ひたるもの。

おやこーぐさ 親子草【名】〔植〕しだ(齒朶)又はゆづるは(譲葉)の異名。(新年の飾として用ふるにつきていふ)

おやこーげんくわ 親子喧嘩【名】親と子とのあらそひ。

おやこーごころ 親心【名】一子を思ふ親の慈悲心。 源氏「いとさかしき御おやごころなりかし」二親になりかはりて思ふこと。 源氏「今はまた見ゆづる人もなくて、親ごころにかしづきたてて見きこえたまふ」

おやごーさま 親御樣【名】おやど(親御)に同じ。

おやごぜ 親御前【名】おやど(親御)に同じ。

おやこーづき 親子月【名】陰暦十二月の異稱。〔古語〕 冀傳抄「われ人のみたまをまつるおやこづき松や命のためしなるらん」

おやこーどんぶり 親子丼【名】丼に暖かなる飯を入れ、その上に鶏肉と鶏卵との煮たるを掛けたる食品。おやこめし。おやこ。

おやこーなか 親子仲【名】親子の間がら。

おやこーなべ 親子鍋【名】鶏肉と鶏卵とを共に煮たる食品。

おやこーなんばん 親子南蠻【名】蕎麥の種物(タネモノ)の一種。鶏肉と鶏卵と葱とを入れたるもの。

おやこーに 親子煮【名】鶏肉と鶏卵とを一緒に煮ること。

おやこーまめ 親子豆【名】蠶豆(マメ)と豌豆との皮をむきたるを、煮合せたるもの。

おやこーめし 親子飯【名】おやこどんぶり(親子丼)に同じ。

おやーころし 親殺【名】親を殺すこと、又その人。

おやーさと 親里【名】親の居る里、又その家。おやもと。おけかた。 一代女 古代は、緣づきのかどでには、親さとの別れを悲しみ」

おやざまに 親樣に【副】かりに親として。〔古語〕 源氏「うしろやすからん人に、おやざまにあづけて」

おやじ

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの はひふへほ まみむめも やゆよ らりるれろ わゐゑを

おやざめ 親鮫【名】鮫の親。大きなる鮫。その皮を鞘などに作るに、質堅し。（子鮫に對して）長町女腹切「そのつか絲のほつれそめ、わがおやざめのつれなきを」

おやじ 同じ【形二】おなじ（同じ）に同じ。（古語）萬葉「本も枝（エ）もおやじ常盤に」

おやしほ 親潮【名】（地）海流の一。カムチヤツカ半島の海岸より、千島列島の東に沿邊ひ、北海道の南東岸より本州の東海岸を沿ひつつ南下して、金華山沖に至る寒流。黒潮と共に、水族の最も群集するところなり。千島海流。

おやじやひと 親者人【名】おやぢやひと（親ぢや人）の誤讀。

おやしらず 親不知【名】一赤兒の時に、孤兒となり、又は他人に養はれて、生みの親の顔を見知らぬこと。二おやしらずば（親不知齒）の略。三『波荒くして親は子を又子は親をかへりみる暇も無き意』波うちぎはなどの通行に危險なる場所。

おやしらず 親不知【名】（地）『前條三の意』越後國西頸城（ヒキク）郡の海岸の險路。市振（イチフリ）村と歌外波（ウタト）村との間、約九町ほどのところ。蓮華（ケン）山脈の盡頭、斷崖となりて海に迫り、波濤寄せくれば身を岩石の間に潜め、その退くを待って通過するほどの難所なりしが、明治十六年以來、山腹に道路開けて、車馬の往來も自由なるに至れり。俗稱、親不知子不知（コオヤシラズ）。

おやしらずこしらず 親不知子不知【名】（地）前條に同じ。

おやしらずば 親不知齒【名】人類の齒の中にて、最も遲く（二十四五歳ごろに）生ずる四枚の奥齒。おやしらず。

おやしろ 親代【名】兩親に代りて小供を養育すること、又その人。そだておや。盛衰記「家安親代となりて…終日（モスガラ）に育みたてまつり」

おやす 【動四他】おやかすに同じ。（俚語）きのふはけふの物語「馬めが、かの物をおやしてをりけるを」

おやすずめ 親雀【名】雀の親。猿蓑「珍碩「日のかげやごもくの上のおやすずめ」

おやすみ 御休【名】『やすむ（休む）の假體言の敬語』おしづまり。御寢。

おやだいだい 親代代【名】おやちゆうだい（親重代）に同じ。

おやだから 親寶【名】おや（親）の尊稱。（子寶に對して）

おやだつ 親だつ【動四自】親らしくあり。親めく。（古語）和泉式部集「思はずに心うき事ありければなん、心もゆかぬと、親だつ人のいひたるに」

おやたはけ 親婚【名】子が親に通ずること。上通。（古語）

おやだま 親玉【名】一數珠のうちの、中心になる大なる玉。だつま。二かしらだちたる人。かしら。頭領。（俚語）三藝人などを賞めはやしていふ語。

おやだんな 親旦那【名】父親たる主人。おほだんな。（若旦那に對して）

おやお 親父・親仁【名】『親（オヤ）父（チチ）の約』一ちち（父）に同じ。しんぷ。二老爺。ぢぢい。長町女腹切「堅い親仁のかるくちも」三おやかた。おやぶん。かしら。博多小女郎波枕「われわれが相手になる。おやぢ一人心もとない」四とうじ（杜氏）に同じ。

おやぢがた 親父形・親仁形【名】芝居にて、老人に扮する役。

おやぢかづら 親父鬘・親仁鬘【名】芝居にて、老翁に扮する場合に用ふるかづら。

おやぢやひと 親ぢや人【名】次條に同じ。

おやぢやもの 親ぢや者【名】『親である者の訛。大藏流の狂言「二千石」に「親である者」といふ語あり』親たる人。おやぢと。おやぢやひと。おやぢや。

おやぢゆうだい 親重代【名】父祖より代代傳へ來たること、又その物。おやだいだい。重代。

おやつ 御八【名】『午後の間食は江戸時代にも行はれし習慣にて、その頃の時刻にていへば八つ時頃なるよりいふ』午後二三時頃になす間食。（俚語）

おやづき 親月【名】『盂蘭盆（ボンウラ）の行はる陰暦七月の異稱。

おやっさん 親父【名】『親父（チオヤ）さんの意』一中年以上の亭主。（大阪の語、又、越中國の方言）二いやしき身分の老人。（大阪の語）たるものなるべし。長町女腹切「毎日二三度使が走る醒が井の親粒も、まだ入れてやるまいな」

おやつぶ 親粒【名】親鮫の皮の、つぶだち

おやて 親手【名】花合せの、親となりたる人の手札。（俚語）

おやとり 親鳥【名】鳥の親。（子鳥に對して）

おやとり-ことり 親取子取【名】小供の遊戯の一。親一人、鬼一人、他を子とし、子は親の後に從ひて、鬼に捕へられじとし、親は子を守りて、鬼を禦がんとするもの。おやとりことろ。

おやとろ-ことろ 親取子取【名】前條に同じ。

おやなし 親無【名】親を失へること、又その子。（みなしご。

おやなしご 親無子【名】一親を失ひたる子。みなしご。二せいじ（私生兒）に同じ。

おやになひ-ぼし 親荷星【名】さんくわう（三光）（二）を云ふ。（關西の方言）

おやねこ 親猫【名】猫の親。（子猫に對して）

おやねずみ 親鼠【名】鼠の親。（子鼠に對して）

おやばか 親馬鹿【名】愛に溺（オボ）れて子の缺點に氣づかぬ親。おやばかちやんりん。（俚語）

おやばかちやんりん 親馬鹿爺吝【名】『おやまかちやんりんに語路を合せたるものなるべし。爺吝は假借の字』おやばか（親馬鹿）に同じ。（俚語）

おやばしら 親柱【名】（建）欄干の端に取附けたる太き柱。多くは裝飾を加へ、擬寶珠などを附く。

おやはん 親判【名】證文などに、親が立ちあひて押す印。

おやばら 親腹【名】母とその娘とを娶りたる時、母の腹より生れたる子。（むすめ腹に對して）（古語）榮花「おやばらの御子をば五の宮、むすめ腹の御子をば六の宮とて」

おやひ 親鏹【名】（鑛）並行鑛脈の數條ある中の、幅も長さも他より大なるもの。

おやびと 親人【名】おやぢやひと（親ぢや人）に同じ。榮花五大力「國もとのおやびと初め、一家中、そうたちまで」

おやぶ 親歩【名】田畠のなど總段別。

おやふかう 親不孝【名】ふかう（不孝）に同じ。（親孝行に對して）

おやふね 親船・母船【名】一もとぶね（本船）に同じ。（傳間船に對して）二いせぶね（伊勢船）に同じ。

親船に乘ったやう【句】「大船（フナ）に乘ったやう」に同じ。（諺語）

おやぶん 親分【名】一かりの親。二その人のよりつきて頭と立つる人。（子分に對して）三茶「親分と見えて上座になく蛙」

おやぼね 親骨【名】扇の兩端にある太き骨。

おやま 御山【名】やま（山）の敬稱。御山は晴天【句】高山に登る人の、天候の變らざらんことを祈りつつ、道道唱ふる語。

おやま 御山【名】（地）加賀國金澤市の舊稱。

おやま 於山【名】一遊女。女郎。おやまん。（京都・大阪の語）二芝居の女形（オヤマ）。

おやまかちやんりん 【感】相手を愚弄しながら、承諾の意を表はす挨拶の語。（江戸の語）

おやまき 親まき【名】一『まきはまく（枕く）の假體言』母親と通ずること。おやたはけ。（古語）二他人を罵りて呼ぶ語。おやまけ。（古語）著聞「親まきの聖覺や、はらまきの聖覺やなどねめつつ」

おやまぐるひ 於山狂【名】遊女にくるふこと。女郎ぐるひ。（關西の方言）天の網島「女房・小供の身の皮はぎ、その金でおやまぐるひ」

おやまけ 親まけ【名】おやまき（親まき）一に同じ。（古語）著聞「榮性法眼め、おやま

けおやまけと、大聲にていひて」

おやまご 親孫【名】親の後繼(カヘキ)たるに恥ぢざる子孫。「親の子」參照　毛吹草「聲よきはおやまごなれや郭公」

おやまごしをがみ 御山越拜【名】上總國木更津(キサラヅ)にて、彼岸の中日に、太陽の富士山の嶺を越えて入るを、數珠を手にし、海岸に踞り、稱名念佛しつつ拜むこと。

おやまざんせう 御山山椒【名】(植)ななかまどに同じ。

おやまさり 親優【名】子が親にまさること。藝「筍のおやまさり」

おやまだち 御山立【名】富士・御嶽(オタケ)など、各講中の人人の登山・參詣のため出立すること。大抵、毎年六月に行はる。

おやまにんぎやう 於山人形【名】女の姿に作りたる人形。

おやまん【名】**おやま**㊀に同じ。〔京都・大阪の話〕　膝栗毛「なんぢやあろと、おやまんのありたけ出さんせ」

おやまりんご 御山林檎【名】**いはなし**(岩梨)を云ふ。〔關東の方言〕

おやまりんだう 御山龍膽【名】〔植〕龍膽(リウダウ)科に屬する多年生の草。莖の高さ約一尺。葉は鋭頭の披針形にして、對生す。八月の頃、筒狀・青紫色の花を開く。我が國各地の山地に自生す。觀賞用として栽培せらるることあり。「繪。

おやまをを 於山繪【名】遊女をゑがきたる

おやみ 親見【名】花合せにて、親となるべき者を定むるために、人數だけの札を、各一枚づつ　場に伏せて撒き、その札の中より、最も價値の高き札を拾ひたる人を、それと定むること。「ふこと。

おやみまひ 親見舞【名】親のもとを見舞

おやんなさいやし 御遣んなさいやし【名】品を御遣りなされませの意。『德川時代の乞食(キジ)の一種。　浮世風呂「おやんなさ　やしが來たやうだ」

おやめく 親めく【動四自】親がほに振舞ふ。親らしくす。おやがる。おやだつ。〔古語〕　源「おやめきて扱ひたまふ」

おやも 親文字【名】㊀辭書の檢出する語が熟語なる場合に、その頭に書出したる文字。㊁はなもじ(花文字)に同じ。㊂活版の字母。

おやもと 親許【名】**おやざと**(親里)に同じ。

おやゆづり 親讓【名】親より讓り受けたること、又その物事。

おやゆび 親指【名】㊀手足の指の、端にありて、最も太きもの。おほゆび。おほおよび。おほよび。㊁一家の主人公。亭主。　一茶「時雨るるや親椀たたく啞乞食」

おやわん 親椀【名】大なる飯椀。「じ。れと。(子指に對して)〔俚語〕

おやをけ 親桶【名】**おほをけ**(大桶)㊀に同

おゆ 御湯【名】ゆ(湯)の敬稱。

おゆ 老ゆ【動上二自】㊀『おや(親)と語源を同じくす』としとる。年齢つもる。としよる。㊁よわる。衰ふ。㊂時候、末になる。たく。　蜻蛉「老ゆる春」

老いず死なずの藥【句】次條に同じ。古今「音羽の瀧の音にきく、老いず死なずの藥もがな」

老いせず死せぬ藥【句】これを飲めば、年をとらず又死にもせずと傳ふる藥。不老不死の藥。老いず死なずの藥。　謠曲「浦島」「月日をこの宮にたたみかくして、年なみの老いせず死せぬ藥をこめ」

老いせぬ藥【句】これを飲めば、いつまでも年をとらぬ藥。　謠曲「菊慈童」「老いせぬや藥の名をもきく(聞く・菊)の水」

老いせぬ門(ゲ)【句】**ふらうもん**(不老門)に同じ。

老いたる馬は、路を忘れず【句】㊀「老馬(ラウバ)の智」を見よ。㊁代代の恩義を蒙りたる者は、いつまでも元の主人を忘れず。　盛衰記「いかで昔の好(ヨシ)を忘れ奉るべきなれば、終には皆參るべし。老いたる馬は路を忘れず、古人はいひ誤りなし、必ず思ひ合はすべし」

老いたるを父母(ボ)【句】年老いたる人に對しては、父母の如くに事ふべき譬。〔諺語〕

老いては、子に從へ【句】『大智度論九十九に「一切女身、無二所繫屬一、則受二惡名一。女人之體、幼則從二父母一、少則從レ夫、老則從レ子」とあるに本づく。さんじゆう(三從)參照』年老いては、何事も子に委すべし。〔諺語〕

老いては、ますます壯(サカ)なるべし【句】『漢書の馬援傳に「丈夫爲レ志、窮當二益堅一、老當二益壯一」とあるに本づく』年老ゆれば、壯者を凌ぐ意氣を起すがよし。〔諺語〕

老いて再び稚子(チ)となる【句】年老いて、精神衰へて、再び小供の如きさまとなる。「愚(グ)に歸る」參照。〔諺語〕

ぎゆ【動下二自】**おやける**に同じ。〔俚語〕　きのふはけふの物語「松だけのおゆるをかくす吉田どのわたくし物と人やいふらん」

おゆ 老【接尾】老いたる人の姓又は官名に添へて用ふる語。〔古語〕　萬葉「はしうとの連(ジ)おゆ」

おゆどの 御湯殿【名】㊀**ゆどの**(湯殿)の敬稱、又その處に給仕する女。　丹波與作「丹波の國の一城主、由留木殿のお湯殿の子、しらべの姫は、お國ばら」㊁**おゆどののうへ**(御湯殿上)の略。

御湯殿の女官(クワンン)【句】清涼殿の御湯殿上(オユドノ)に奉仕し、御臺盤所などの御用をも勤めし女官。

おゆどののうへ 御湯殿上【名】㊀清涼殿の西庇の御手水間(ヲテウヅ)の北にある一間四方の室。呑湯を始め沐浴の湯まで、すべての湯を沸しおきしところ。一說に、湯呑には關係なく、その西に簀子(コノ)を隔てて、御湯殿ありしより名づくといふ。㊁室町將軍の大奥の次にありて、御茶の湯などを沸しおきし室。

おゆどののうへのにき 御湯殿上日記【名】〔書〕文明の頃より慶長の末までの、禁中の女房の假名日記。數十卷あり。

おゆび 指【名】**および**(指)に同じ。ゆび。

おゆふぎやう 御湯奉行【名】室町時代に、將軍が諸侯の第に赴きし時、その諸侯の家にて臨時に命じて、沐浴に關する器具等の始末を掌らしめし役。

おゆみ【名】他人の妻。〔對馬國の方言〕

おゆみのじんじ 御弓神事【名】諸社にて祓(ハラ)などするために、神官が的を射る儀式。正月、神社にて五色の的をかけ、榊を立て、注連(シメ)を引き、白木の弓にて射る奉射神事(ヤウジジ)。御結(ムスビ)。

おゆみはじめぶぎやう 御弓始奉行【名】鎌倉幕府及び室町幕府の職制の一。柳營にて毎年正月の初めに行はれし弓始めの儀式を奉行せしもの。

おゆらく 老ゆらく【自動】『老ゆることの義』おいらく。〔古語〕　萬葉「あめなるや月日のごとくわがもへる君が日にけに老ゆらくをしも」〔語〕

おゆるみ【名】しやくし(杓子)を云ふ。〔女の

およかけ 綾【名】**おいかけ**(綾)の訛。

およぎ 泳・游【名】**およぐこと**。すゐれん。水泳。游泳。

泳を搔く【句】**およぐ**(泳ぐ)㊀に同じ。今萬「片手を以ておよぎを搔きて、岸さまに來て」

およぎだこ 泳蛸・游蛸【名】〔動〕蛸の一種。沖に棲み、脚間に開張せる膜を有し、巧に遊泳す。

およぎば 泳場・游場【名】およぎをする場「所。游泳場。

およぎふくべ 泳瓢・游瓢【名】泳ぐ時に携へて、身を輕く浮ばしむるに用ふるふくべ。

およぎぶね 泳船・游船【名】およぎに用ふる船。　およぎふくべの類。

およぐ 泳ぐ・游ぐ【動四自】㊀水の上を浮びて行く。游泳す。泳を搔く。㊁うまく世を渡る。游泳す。〔俚語〕

およし 老【名】老いたる人。〔古語〕

およしを【副】『しをの約はを』**およそ**(凡)に同じ。一說に、**およし**は老いたる人。〔古語〕　萬葉「およしをは斯くのみならしたまきはる命をしけどせむすべもなし」

およすく【動下二自】年齢の割合に智慧まさる。老巧に見ゆ。ちみに見ゆ。〔古語〕　源「世こそさだめなきものなれど、いとおよずけのたまふ」

およずけ【名】およずくること、又その人。〔古語〕　榮花「東宮は、二十三にぞおはしましける。こよなき程の御およずけなり」

およずけ-もの およずけ者【名】およずけたる人。およずけ。〔古語〕 著聞「道良はおよずけものなり」

およそ 凡【副】おほよそ(大凡)の約。およしを。 著聞「およそ君と臣とは水と魚との如し」

およそもの-どころ 御粧物所【名】節會(セツヱ)の日に、臨時に設けて、陛下に御靴を奉るところ。紫宸殿の北庇に、假に屏風を立て回らして作る。

およづれ 妖【名】人を惑はすることば。いつはりなる噂。およづれごと。妖言(ヨウゲン)。〔古語〕 萬葉「およづれかわが聞きつる」

およづれ-ごと 妖言【名】前條に同じ。〔古語〕 萬葉「たはことかおよづれごとかこもりくの泊瀬(ハツセ)の山に庵せりといふ」

およづれ-びと 妖人【名】妖術・妖言にて、人を惑はす人。

およな 嫗【名】おうな(嫗)に同じ。〔古語〕

およ-ながゆ 御夜長【名】■禁中にて、大床子(ダイショウジ)の御膳のおろしを、女中の夜食に賜ふこと。〔古の女の語〕 ■夜食。〔女の語〕 「同じ。

およばす 及ばす【動四他】**およぼす**(及す)に

およばずながら 及ばずながら【副】及び難しとは思ひながら。不十分ながら。(謙遜していふ)

およ-ばれ 御呼ばれ【名】饗應せらるること。

および 指【名】ゆび(指)に同じ。〔古語〕 源氏「女も、えをさめぬ筋にて、および一つをひきよせて、くひてはぐりしを」

指(ヒヨ)を屈む【句】次條に同じ。〔古語〕

指(ヒヨ)を折る【句】「指(ヒ)を折る」に同じ。〔古語〕 拾玉「山の奥に指を折りてかぞふればあすより春もめぐり來にけり」

およ-び 御呼【名】■呼ぶことの敬語。 ■他人より饗應に招かるることの敬語。

および 及【名】およぶこと。達すること。「およびもない身分」

および 及【接】また。かつ。ならびに。 榮花「五月十一日にぞ、左大將、天下および百官施行といふ宣旨くだりて」

および-かかる 及掛かる【動四自】近づきかかる。〔古語〕 悟盛「人のうしろにさぶらふは、さま惡しくもおよびかからず」

および-ぐるし 及苦し【形二】およびにくし。およびがたし。〔古語〕 夫木「山道やみのひろぎぬ織るはたのおよびぐるしき戀もするかな」

および-ごし 及腰【名】立ちながら體を屈め、隔れる物に手を及ぼさんとする態度。 芭蕉「卯の花やくらき柳のおよびごし」

および-つく 及著く【動四自】ゆきつく。とどく。いたる。 拾玉「波の上に一つに見ゆる雲までは及びつきぬる我が心かな」

および-ぬき 指貫【名】ゆびぬき(指貫)に同じ。〔古語〕 和名「鎗、於與比沼岐、所二以縫一衣具也」

およぶ 及ぶ【動四自】■とどく。いたる。ゆきつく。ゆきわたる。それになる。達す。 源氏「大將の御有樣ぞ筆およべくもあらずとて」 ■手などを延ばして屆かす。〔古語〕 枕「みなる扇を我が持ちたるして、およびてかき寄するが」 ■要す。いる。(專ら打消の形に用ふ)「屆出に及ばず」 ■叶ふ。なる。 新千載「松が枝の高師の濱の沖つ浪およばぬ色にかけて戀ひつつ」

およぼし 【名】被物(カブリモノ)の一種。 長崎歳時記「一向宗御正忌とて、男子は肩衣を著し、女子はさらし木綿或は西洋布の類を以て頭にかづき、是をおよぼしといひ、俗にすみ手拭、また角(ツノ)かくしと異名す」

およぼす 及ぼす【動四他】及ぶやうにす。およぼしむ。およばす。

およん-なる 御寢んなる【動四自】**およる**に同じ。(おひんなるに對して)〔俚語〕

より-こう 御寄講【名】衆人寄りあつまりて舞ひ遊ぶ會。〔眞宗信徒の語〕

よる 御寢る【動四自】いぬ(寢)の敬語。 著聞「月をも御らんぜで、およるなれば」

よろひ-ぎ 御鎧著【名】主君の鎧を著て、その後に從ひ行く者。主君の命あれば、ただちに脫ぎて奉る。

ら 己【代】おれ(己)■に同じ。〔俚語〕 一

蓙「おらが世やそこらの草も餅になる」

らがはる 己春【名】〔書〕一茶の句文集。一卷。嘉永五年上梓。

らぶ 【動四自】悲しみ叫ぶ。〔古語〕 萬葉「い仰ぎてさけびおらび」

ら-へ 己家【名】『己(オ)が家(ヤ)の略』わが家。へ。うち。〔羽前國・羽後國の方言〕

らん-かぜ おらん風【名】東又は東北より吹き來る颶風。〔肥前國平戸の方言〕

らんだ 和蘭・和蘭陀(西 Holanda 葡 Holanda)【名】■【地】歐羅巴洲の西部にある國。首府をアムステルダム(Amsterdam)と稱す。 ■わけのわからぬ物事。ふしぎなる事。〔德川時代の語〕 ■茶道にて、古渡の和蘭製の陶器。

らんだ-あひる 和蘭鴨【名】〔動〕ばりけ

らんだ-いちご 和蘭苺【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する多年生の草。三個の小葉より成れる複葉を有し、花は白色、果實は赤色、多漿の肉質にして、味最も佳し。せいやういちご。 いちご。

らんだ-うし 和蘭牛【名】〔動〕和蘭原產の乳牛。乳牛として最上種なり。

らんだ-うど 和蘭獨活【名】〔植〕**らんだじかくし**(和蘭雉子隱)に同じ。

らんだ-おしろい 和蘭白粉【名】白粉の一種。白粉と硫酸バリウムとにて調劑したるもの。

らんだ-おり 和蘭織【名】いちごぎれ(覆盆子切)に同じ。

らんだ-かいう 和蘭海芋・野芋【名】〔植〕天南星(テンナンセイ)科に屬する多年生の草。地下莖より葉を出す。葉はやや箭形、花莖は地下莖より生じ、長さ一尺餘、花は肉穗花序に排列し、八月頃開く。白色にして大形なり。いしいも。ぐはずいも。

らんだ-がらし 和蘭芥子【名】〔植〕みづたがらし(水田芥子)に同じ。

らんだ-きじかくし 和蘭雉子隱【名】〔植〕あすはらがす(石刀袖)に同じ。

らんだ-きやうばいはふ 和蘭競賣法(獨 Hollandische Auktion)【名】〔商〕最初に賣手より最高價を示し置きて、競賣に付する方法。

らんだ-げんげ 和蘭紫雲英【名】〔植〕しろつめくさ(白塡草)に同じ。

らんだ-ごしつ 和蘭牛漆【名】〔植〕うしたきさうに同じ。

らんだ-さう 和蘭草【名】〔植〕はこねぐさ(箱根草)を云ふ。〔武藏國の方言〕

らんだ-しやうぶ 和蘭菖蒲【名】〔植〕菖蒲の一種。葉は菖蒲に似て、春、二尺ほどの黃赤色なる莖を出す。

らんだ-せきちく 和蘭石竹【名】〔植〕かあねえしよんに同じ。

らんだ-ぜり 和蘭芹【名】〔植〕繖形(ケサイ)科に屬する二年生の草。普通の芹に似て、葉の刻み一層細かに、莖もそれより高く、秋季より冬季にかけて、嫩葉と根とを食用とす。

らんだ-つけぎ 和蘭附木【名】まつち(燐寸)を云ふ。〔肥前國長崎の方言〕

らんだ-な 和蘭菜【名】〔植〕はぼたん(葉牡丹)に同じ。

らんだ-なでしこ 和蘭撫子【名】〔植〕かあねえしよんに同じ。

らんだ-にふさつ 和蘭入札【名】和蘭船入津の積荷を入札して買取ること。〔德川時代の語〕

らんだ-びゆ 和蘭莧【名】〔植〕はこ(破胡紙)に同じ。

らんだ-へうじゆん 和蘭標準【名】『英 Dutch standard』課稅又は貿易上、砂糖の色合評定の標準。

らんだ-まき 和蘭卷【名】紅梅餅の一種。食料紅を加へたる原料にて、石竹(セキチク)の花形に造り、白色の原料にて卷込み、小口切りにしたるもの。

らんだ-みそ 和蘭味噌【名】とつかみそ(てつか味噌)の舊稱。

らんだ-みつば 和蘭三葉【名】〔植〕繖形(サンケイ)科に屬する二年生の草。全體平滑にして、芳香・甘味及び辛味を有す。根は紡錘形、莖は二三尺に達す。葉は羽狀複葉にして一尺內外に及ぶ。性濕地を好む。嫩葉と多肉の根とを食用とす。きよまさにんじん。せれりい。

らんだ-もみ 和蘭樅【名】〔植〕くわうえふさん(廣葉杉)に同じ。

おらんだ-やき 和蘭燒【名】■料理の一種。魚肉に、燒きたる雞卵を張附けなどせるもの。〔紅毛燒〕 ■かぢつねきち(梶常吉)を見よ。

おらんだ-りう 和蘭流【名】和蘭より傳へたる醫道の一派。蘭方(カタン)。

おらんだ-れんげ 和蘭蓮華【名】〔植〕しろつめくさ(白塡草)に同じ。

おり 澱【名】流動物の底に淀みたるごみ。をどみ。沈澱物。

おり 下【名】おち(落)(七)に同じ。

おり 織【名】織ること、又その物。〔言〕

おり 己【代】おのれ(己)を云ふ。〔九州の方ぐ。

おり-あぐ 織上ぐ【動下二他】織りて仕上ぐ。機(ハタ)を織りをはる。

おり-あさぎ 織淺黃【名】織色の淺黃なる

おり-あふ 下合ふ【動四自】おりて來て出合ふ。〔古語〕 寶忠集「さみだれはくち木を流すみ山川まづおりあひてかた寄せにけり」

おり-あを 織襖【名】織物の襖。裏地は、白

おり-いだす 織出だす【動四他】織りて造り出す。おりだす。おりいづ。

おり-いづ 織出づ【動下二他】前條に同じ。

おり-いと 織絲【名】機織に用ふる絲。

おり-いぶ 阿利布・阿列布(英Olive)【名】■〔植〕かんらん(橄欖)に同じ。 ■おりいぶいろ(阿列布色)の略。

おりいぶ-いろ 阿利布色・阿列布色【名】鼠色と茶色とを含みたる綠色。橄欖色。おりいぶ。おれえぶ。

おりいぶ-ゆ 阿利布油・阿列布油【名】かんらんゆ(橄欖油)に同じ。

おり-いる 織入る【動下二他】織込む。組入る。狂言(三人盲姓)「汝等が名を織入れて、三人して一首詠め」

おり-いろ 織色【名】■古の織物に經(テク)絲と緯(ヨコ)絲との色を異にして織りたるより生ずる色合。これに種種の名あり。例へば經絲を青にし緯絲を黃にしたるは女郎花、經絲を紫にし緯絲を紅にしたるは紅梅の類。 ■染絲にて織りたる織物の無地(ムル)の色。(染色に對して) ■濃き淺黃色。

おり-うすもの 織薄物【名】織色の淡きものなるべし。〔古語〕 種蕉裝束抄「おりうすものといふは、藏人などもきたるものなり」

おり-えび 織葡萄【名】紫と赤との絲にて織出したるえび色。

おり-おん (英Orion)【名】■希臘(ギリシヤ)神話中の神。ネプチユウン神の子。美容と强力とを有し、狩獵に長ぜし巨人。 ■〔天〕星座の一種。馭者星座の南方に位し、赤道の兩側に跨れもの。星座中の最も美麗なるものにして、俗に三つ星と呼ぶ三星は、この中に屬す。

おり-かく 織懸く【動下二他】織りてひきわたす。 金葉「晉羽山もみぢ散るらし逢坂の關の小川に錦おりかく」

おり-かさね 織重【名】ふたへおり(二重織)

おり-かた 織方【名】おりざま(織樣)に同じ。

おり-かふ 織變ふ【動下二他】織りて變はらす。

おり-かへす 織返す【動四他】織りあらたむ。おりなほす。 後撰「秋風のうち吹くからに山も野もなべて錦におりかへすかな」

おり-かも 織氈【名】織りたるかも。〔古語〕

おり-かりぎぬ 織狩衣【名】織りたる狩衣。

おり-きん 織金【名】きんらん(金襴)に同じ。

おり-きる 織著る【動上一他】衣服に織りて著る。 萬葉「ひたさをにもには織著(キオリ)て」

おり-くち 下口【名】家・階段などの下り口。

おり-こ 織子【名】機を織る職工。

おり-こむ 織込む【動四他】金銀絲又は模樣などを織入る。

おり-とん 織紺【名】經(テク)・緯(ヨコ)共に木綿の紺絲にて織りたる織物。めくらじま。あをじま。

おり-さま 織樣【名】織りやう。おりかた。 源氏「色のおりざまも、世のつねならず」

おりじなる (英Original)【名】〔文・美〕■藝術家の個性の顯著に表現せられたること。獨創的。 ■げんさく(原作)に同じ。(複製又は摸寫・摸造に對して)

おり-じり 織尻【名】織物の、織りゆきたる最後の部分。おりどめ。(おり附に對して)

おり-しりがい 織鞦【名】編みて造りたるしりがい。坂東しりがい。

おり-すぢ 織筋【名】練貫(ネリヌキ)の一。横筋を太く織出したるもの。條條聞書「おり筋など申すものは、慈照院殿御時までは召されぬ候はぬよしに候」

おり-ぞこ 織底【名】いしぞこ(石底)に同じ。

おりだし-もん 織出紋【名】衣類その他のものの、直接織出したる紋柄。おりもん。

おり-だす 織出す【動四他】おりいだす(織出だす)に同じ。

おり-たつ 下立つ【動四自】■下りゆきて、その場所に立つ。いりこむ。 源氏「袖ぬるるこひぢ(經路・濃泥)とかつは知りながらおりたつ田子のみづからぞ憂き」 ■親しくその事にかかはる。〔古語〕 後撰「わび人のそぼつてふなる涙川おりたちてこそぬれわたりけれ」

おり-たび 織足袋【名】足袋の一種。指足袋の如く織りたるもの。「地布。

おり-ぢ 織地【名】織物のしたぢ。織物の

おり-づ 下津【名】〔地〕尾張國中島郡にありし村。今は稻澤(ヤハ)町の一部となる。古は、京・鎌倉間の通路に當り、旅客絡繹たる大驛たりき。おりど。

おり-つく 織附く【動下二他】織りて附く。おりいだす。

おり-つぐ 織次ぐ【動四他】織ることを止めず。織りつづく。〔古語〕 萬葉「千名には も人はいふとも織りつがむわがはたものの白麻ごろも」

おり-つけ 織附【名】■織出したること、又その部分。 ■布帛の織始めの部分。(おり尻に對して)

おり-づまり 織詰【名】織物を織終へたる上にて、經(テク)絲の長さの減じたる度あひ。

おり-て 織手【名】機を織る人。 延喜式「織部司四十八人、織手四十人」

おり-ど 織戶【名】細木にて網代(アジロ)・菱形などに編み織りたる戶かといふ。をりど(折戶)參照。 庭訓往來「部(ヘヤ)・隔子(カク)造戶、妻戶・織戶」

おり-ど 下戶【名】〔地〕おりづ(下津)に同じ。十六夜「二十日、尾張國おりどといふむまやを行過ぎぬ」

おり-どの 織殿【名】機(ハタ)を織る殿舍。

おり-どめ 織留【名】おりじり(織尻)に同じ。

おりどめ 織留【名】〔書〕山城國の地理と歷史とを記せるもの。著者詳ならず。

おり-な 下名【名】古、除目(ジモク)の時、中務省・兵部省の丞に交付せんがために認むる、四位以下の官に新任する者の姓名。

おり-ない 【形】をりないを見よ。

おり-なし 織成【名】くみたて。こしらへ。組織。

おり-のこし 下貽【名】雙六の一種なるべし。 尺素往來「園碁・將棊・雙六・下貽(オリノコシ)」

おり-のべ 織延【名】次條の略。 平家「おりのべを一きれも得ぬわれ等さへ薄恥をかく數に入るかな」

おりのべ-ぎぬ 織延絹【名】北國より織出しし一種の絹織物。普通の織物より寸尺の長きものなるべしといふ。おりのべ。 平家「近江米二萬石、北國の織延絹三千疋、往來のために、山門へ寄せらる」

おりのべ-どころも 織延衣【名】織延絹にてつくりたる衣。 平家「山法師おりのべどころもうすくして恥をばえこそ隱さざりけれ」

おり-のぼり 下上【名】■おりのぼること。あがりおり。 土佐「みな人、舟のとまる所に、子を抱きつつおりのぼりす」 ■街道を往復すること。

おり-のぼる 下上る【動四自】下り又のぼる。昇降す。上下す。 奈良「高き山深き谷を、おりのぼりまかりありきて」

おり-のり 下乘【名】■下(オ)るると乘ると。乘りおり。 ■身のふりかた。身の處置。

おり-は 下際【名】下(オ)るる時。おるるはづみ。 淀鯉出世灘「鯉も、瀧へ登って、今では、どうも、おりはがない」

おり-ば 下場【名】■下(オ)るる場所。 ■かはや(厠)を云ふ。〔駿河國靜岡の方言〕

おり-はた 織機【名】はた(機)に同じ。

おり-はへ 織延へ【副】彼方より此方に長

くわたりて。おりのべて。おりはへて。〔古語〕夫木「旅人のたち野の原の唐錦おりはへさらす秋萩の花」

おりはへて 織延へて【副】前條に同じ。〔古語〕古今「たがみそぎゆふつげ鳥か唐ごろも龍田の山におりはへて鳴く」

おりひと-しんわう 織仁親王【名】〔人〕有栖川宮職仁（ヒモヒト）親王の御子。九歳の時、桃園天皇の猶子となり、親王となる。天資英邁敏捷にして、和歌を好くし、書道に達せられ、落飾後法名を龍淵と稱し、文政二年薨ず。年六十七。

おり-ひとへ 織一重【名】紅・蘇芳（スハウ）女郎花（ヲミナヘシ）などの色に織出したる單衣。〔古語〕著聞「女郎花のおりひとへを、なまじひに打ちかけられける」

おり-ひめ 織姫【名】一機（ハタ）を織る姫。著聞「われは極樂世界の教主なり、織姫は我が左の脇の弟子觀世音なり」二たばたひめ（棚機姫）に同じ。〔織女〕

おりひめ-ぼし 織女星【名】たばたひめ（棚布）に同じ。

おりぶ 阿利布・阿刻布【名】おりいぶ（阿利布）に同じ。

おり-べ 織部【名】一裏蔭（ザ）にて包みたる乘物。二おりべさかづき（織部盃）の略。三おりべやき（織部燒）の略。

おりべ-がた 織部形【名】石燈籠の形式の一。古田織部正（シキブノカミ）重然（シゲナリ）の墓にあるものの形に因（チナ）めるものにて、茶人好みてこれを用ふ。

おりべ-さか 下部坂【名】〔地〕伊勢の外宮域内多賀宮へのぼる坂路。

おりべ-さかづき 織部盃【名】織部燒の大なる杯。おりべ。

おりべ-しや 織部紗【名】古田織部正（ノオリベ）重然（シゲナリ）の好みにて、京都竹屋町にて唐人をして縫はしめし裂地。

おりべ-づかさ 織部司【名】おりべのつかさ（織部司）に同じ。

おりべ-どこ 織部床【名】天井の下の壁に幅五六寸の板を打ちて、軸物を掛くるやうにしたるもの。狹き室にて床の間を設け難き場合に限る。

おりべの-かみ 織部正【名】織部司の長官。おりべのしやう。

おりべの-しやう 織部正【名】前條に同じ。

おりべの-つかさ 織部司【名】古、大藏省に屬して、綾・綿等の織物の事を掌りし役所。正（カミ）・佑（スケ）・令史（サカン）等の職員を置かれたり。おりべづかさ。新六「ももしきや大内山のうしとらに織部のつかさあやや奉る」

おりべ-ぼん 織部本【名】〔書〕天保年中に觀世織部の印行したる謠本。

おりべ-やき 織部燒【名】天正年間、古田織部正（オリベノカミ）重然（シゲナリ）が尾張國瀬戸村にて造り初めたる陶器。多く草書を描き、黑褐色又は綠色の釉藥（ウハグス）を施せり。青綠色の釉藥を全體に施し、白く菊花を一つ拔きたるものを青織部と稱す。おりべ。

おりべ-りう 織部流【名】茶の湯の一派。古田織部正（オリベノカミ）重然（シゲナリ）を祖とす。

おり-まず 織交ず【動下二他】交ぜて織りいる。

おり-まぜ 【名】『まぜはまじの轉』七月の末ごろに吹く風。

おり-みだす 織亂す【動四他】文（ヤ）をこみ入るやうに織出す。おりみだる。

おり-みだる 織亂る【動四他】前條に同じ。〔古語〕拾「えび染のいと濃き指貫（スサキ）に藤の折枝ことごとしくおり亂りて」

おり-みだる 下亂る【動下二自】亂れて下る。玉葉「白雲はゆふべの山におりみだりなかば消えゆく峯のむらさめ」

おりんぴや （英Olympeia）【名】次條の略。

おりんぴや-きやうぎ オリンピヤ競技（英Olympic games 又は Olympicas）【名】一古、希臘（シキリヤ）のオリンピヤ祭に行はれし競技。はじめは希臘各州の者の集り來るに止まりしも、後には、國外の歐洲各地よりも參加し、且つ體育的諸競技以外に、なほ繪畫・彫刻・文學等の競爭場ともなり、希臘の人心統一上、又、文明の發達上に大なる貢獻をなしたり。おりんぴや。二運動競技の總稱、又は競技會。おりんぴや。

おりんぴやさい オリンピヤ祭【名】古代、希臘國エリス（Elis）州なるオリピンヤ（Olympia）にて、四年毎に、夏の初めに五日間行ひしゼウス（Zeus）神の大祭。餘興として諸種の競技を催しし、紀元三九四年にテオドシウス（Theodosius）大帝の命によりて廢せられ、一八五八年近世の式によりて、復活せらる。

おり-め 織女【名】機（ハタ）を織る女。

おり-め 織目【名】織物の織りたるすぢめ。

おり-もの 織物【名】一織りたるものの總稱。二（特に）綾に織りたる絹布。辨内侍日記「おりもののきぬの裾は」

おり-もの 下物【名】一げつけい（月經）に同じ。二のちざん（後産）に同じ。

おりもの-いと 織物絲【名】織物に用ふる絲。はたいと。

おりもの-し 織物師【名】機織を業とする人。

おりもの-しけんぢやう 織物試驗場【名】織物の研究及び調査をつかさどる所。

おりもの-ぜい 織物稅【名】〔法〕織物に賦課する稅金。

おりもの-せうひぜい 織物消費稅【名】〔法〕織物に賦課する消費稅。

おり-もん 織紋【名】おりだしもん（織出紋）に同じ。

おり-もやう 織模樣【名】織物に、地色と異りたる色絲を用ひて織出したる模樣。厚板・繻珍・錦・金襴・唐織などの類。

おり-や 織屋【名】機を織る家。はたや。

おりやる 【動四自】『おちやるの轉』一居らる。居たまふ。ござる。おはす。おはします。〔足利時代の語〕狂言（三本柱）「なうなう、次郎くわじや、三郎くわじや、おりやるか」二行きたまふ。出かけらる。來たまふ。ござる。おはす。おはします。〔足利時代の語〕狂言（三本柱）「賴うだ人の召すは、おりやれ」

おり-ゆ 下湯【名】事をなしをへて湯あみすること。一說に、單に入浴のことなりと。〔古語〕保元「古き湯屋をかりて、常におりゆをぞしける」

おり-ゐ 下居【名】おりゐること。〔古語〕

おりゐの-ぎ 下居の宮【名】【句】御位を退きたまへるみかど。太上天皇。〔古語〕源氏「おりゐの帝に、ひとしく定まりたまへれど」

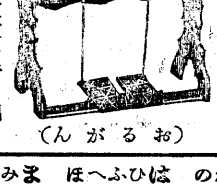
おり-ゐる 下居る【動上一自】一下（オ）りて居る。さがりて居る。〔古語〕土佐「磯におりゐて、わかれがたきことをいふ」二天皇位を退く。〔古語〕榮穩「その時のみかどもおりゐたまふ」

おる 織る【動四他】一絲などを縱横に組合せて、布帛・莚などを作る。古今「霜のたて露のぬきとそよわからし山のにしきのおればかつ散る」二くみたつ。まじへ作る。

おる 下る・降る【動上二自】一したに行く。くだる。さがる。二位を去る。退讓す。枕「藏人（クロウド）おりたる人」三貴人の前より退出す。伊勢「曹司におりたまへれば」四露・霜など、凝りて形を造る。

おる 凝る【動下二自】しれてあり。おろかになる。おろく。〔古語〕源氏「賢がりたまへど、人の親よ、おのづから、おれだることそ出で來べかめれ」

おるがん 風琴（英Organ）【名】西洋の樂器の一。大小、種種の瓣を具へ、蹈板を蹈み、鞴（ヒイ）の如き仕掛によりて、空氣を送り、簧（ハネ）を振動せしめて種種の音を出しむるもの。ふうきん。おおるどおる。


（んがるお）

おるけすとら 管絃樂（英Orchestra）【名】おわけすとらに同じ。

おるごる （蘭Orgel）【名】おわるどおるに同じ。

おるたあ （英Altar）【名】〔基〕神及び聖徒を祀る祭壇。古代より種類多し。また種種に裝飾し、薄肉彫を加へ、鍍金（ヅ）を施すもあり、ゴシック建築時代には尖塔または破風を附して、小建築の形を呈せるもありき。

おるたあぴいす （英Altar-Piece）【名】〔基〕パネル（Panel）にて裝飾せる祭壇。佛教の厨子（ヅ）に當る。中に神または聖徒の像を薄肉彫として藏め、若くは繪像として掛

け、四方に種種の建築的裝飾を施し、往往全部を鍍金(キン)す。

おるとらまりん（英Ultramarine）【名】うとるめえに同じ。

おれ 己【代】一第一人稱。われ。おのれ。おら。（下賤の人に對していふ）「俺」 著聞「おれが母にて候ふもの、姉よりもよくさふらふ」 二第二人稱の卑稱。おのれ。なんぢ。きさま。 甚ほととぎすよ、おれよ、かやつよ、おれ鳴きてぞ、われは田に立つ」

おれい 御禮【名】れい（禮）三四の敬稱。

おれいねんぶつ 御禮念佛【名】佛の加護により幸を得たる御禮として、念佛まうすこと。 天の網島「これも、十夜の如來の御かげ、これからなりとも、御禮念佛」

おれいまゐり 御禮參【名】れいまゐり（禮參）に同じ。

おれいん 油酸（英Olein）【名】（化）一オレイン酸とグリセリン酸との化合によりて生ずべきエステル。脂肪・油脂の普通成分の一。とりおれいん。 二ステアリン蠟製造の際、脂肪を液化して得る脂肪酸の混合物より、固狀ステアリンを掬ひ取りたる殘餘の油狀の液。成分はオレイン酸・パルミチン酸及びステアリン酸にして、石鹼の製造に用ひらる。

おれいんさん（英Oleic acid）【名】（化）グリセリンと化合し、オレインとなりて、數多の脂肪、特に肝油・オリイブ油の如き油類の中に存する有機酸。

おれ-れう 御寮【名】『お寮人の略』びくに（比丘尼）に同じ。 狂言、比丘尼「このおれうを、みなおあんおあんと仰せらるる程に」

おれえとりい（英Oratory）【名】一（基）小き私設の禮拜堂。 二歐洲の建築にて、禮拜堂に擬して造れる室。

おれえぶ 阿列布【名】おりいぶ（阿利布）に同じ。

おれえぶゆ 阿列布油【名】かんらんゆ（橄欖油）に同じ。

おれおれし 癡癡し【形二】『おる（癡る）を見よ』いかにも愚かなるさまなり。（古語） 源氏「もとよりおれおれしく、たゆき心のおこたりに」

おれ-が 己が【名】『おれが斯く斯くの事をしたりとて、えらがる意』うぬぼれ。てんぐ。自慢。（俚語）「腹の中に、おれががある」

おれ-さま 己樣【代】戲に自分を尊みていふ語。（俚語）

おれ-それ 【名】一あれやこれや。何やかや。 傾城酒呑童子「人のおれそれ、世の中の義理、仁義を知るが最期、貧乏神が乘りうつる」 二かれこれの作法。 浮世風呂「おれそれが何處かちがって參ります」

おれっ-ち 己達【代】第一人稱の複數又は單數。おれら。おれ。（東京の俚語）

おれ-まどふ 癡惑ふ【動四自】『おる（癡る）を見よ』心しれてまどふ。おろかに思ひ惑ふ。（古語） 源氏「おれまどひたれば、いとぞ口惜しき」

おれんじ（英Orange）【名】一（植）みかん（蜜柑）に同じ。 二西洋繪具及び染料の一。赤と黃との原色を混和したる色を出すもの。

おれんじいろ 橙色【名】前條二に同じ。

おれんじくろむ（英Orange chrome）【名】西洋繪具の一。オレンジ色の濃厚にして不透明なるもの。鉛のクロム酸鹽より製す。

おれんじばあみりおん（英Orange vermilion）【名】西洋繪具の一。バアミリオンに似て、一層赤味を帶び、光澤あり、且つ不透明の度も少し。

おれ-もの 癡者【名】おれたる人。おろかもの。ばかもの。おろもの。（古語） 源氏「深きらふなく見ゆるおれ者も」

おれ-ら 己等【代】第一人稱の複數又は單數。われら。われ。 讃岐典侍日記「おれら知らぬに、教へよ」

おろ【接頭】一あらき・くはしからぬ等の意。「おろおぼえ」 二僅か・聊かなどの意。うろ。「おろ癒ゆ」「おろ睡(ネム)る」

おろ-い【形】『おろよし（疎善し）の訛』よからず。よくなし。（豐後國の方言）

おろ-いゆ おろ癒ゆ【動下二自】病・傷などすこしなほる。いささか癒ゆ。（古語） 今昔「三日ばかりを隔てて、杖目おろ癒ゆるほどに」

おろ-おぼえ おろ覺【名】ふたしかなる記憶。うろおぼえ。 丹波與作「父樣(サマ)が殿樣の御氣にちがうて、國を御出でなされたは、三つの時で、おろおぼえ」

おろ-おろ【副】一およそ。ざっと。ほぼ。あらあら。不十分。（古語） 宇治「この事、おろおろ聞えたりけれども」 二まばらに。すこし。（古語） 宇治「翁の髮もはげて、しろきとてもおろおろある頭に」

おろ-おろ【感】人の涙もろく又うるみて泣く聲。 重盛子「よう刀をぬかしやんすと、睨む眼の中、おろおろと、女は涙もろかりし」

おろおろ-ごゑ おろおろ聲【名】おろおろと泣く聲。

おろおろ-なみだ おろおろ涙【名】おろおろと泣きて流す涙。うろうろなみだ。 天の網島「おろおろなみだの獨りごと」

おろか【名】（動）鱶(カワ)の一種。極めて大なるもの。

おろか 疎【貌】十分ならぬさま。劣れるさま。言ふに足らぬさま。おろそか。ぬかり。疎略。「哀といふもおろかなり」 卷穗「長き仰言を、あけくれおろかならず思ひたまへながら」 「ばか。愚鈍。

おろか 愚【貌】『前條の意』智力なきさま。

おろか-ひ 稽【名】ひつち（稻）に同じ。（古語） 和名「稽、於露加於比。俗云二比豆知一。自生稻也」

おろかし 愚し【形二】おろかなり。愚鈍なり。ばからし。（古語）

おろか-びと 愚人【名】おろかもの（愚者）に同じ。（古語） 起下愚、オロカビト」

おろか-ぼ 稽穗【名】ひつち（稻）に同じ。（古語） 夫木「谷ふかみ十代(トシ)の小田にゐもりして稀にそだつるおろかぼの稻」

おろか-めく 愚めく【動四自】おろかに見ゆ。おろからしくあり。

おろか-もの 愚者【名】愚鈍なる者。おろかびと。ばかもの。ぐしゃ。おろもの。おれもの。 「俚語」

おろく 阿六【名】おろくぐし（阿六櫛）の略。

おろく 癡く【動下二自】おる（癡る）に同じ。

（古語） 起失意、オロケ」

おろくぐし 阿六櫛【名】木曾街道の藪原（ハヤブ）驛の名產なる一種の櫛。昔、同街道妻籠（ツマ）に、お六といふ女あり、旅舍を營む傍ら、木櫛を製造し、頗る巧みなりしより、終に遞櫛の販賣をなしに、忽ち四方に聞えて、同地の名產となり、享保中、藪原驛にて、摸造し初め、原產地を凌駕するに至れり。藪原は信濃國西筑摩郡木祖(ソヲ)村の大字、妻籠は同郡吾妻村の字。おろく。

おろし 下【名】一おろすこと。下にやること。 二新しき品物を用ひはじむること。 三おさがり（御下）二に同じ。おろしもの。おすべり。 古事談「御料の御おろしを出されたり」 四おろしにかけてすりくだきたる大根又は山葵(ワサビ)。 風俗文選「蕎麥きりのおろしに驚き」 五おろしど（下子）の略。「じ。

こきおろし（扱落）に同じ。

おろしの馬【句】おろしうま（下馬）に同

おろし 颪【名】高き處より吹きおろす風。（おもに熟語の形にて用ふ）「筑波おろし」「叡山おろし」「山おろし」「谷おろし」

颪の風【句】山おろしの風。（古語） 元良親王御集「うらみつつなげきのかたき山ならばおろしの風の早く忘れぬ」

おろし 卸【名】おろしうり（卸賣）の略。

おろし-あし 下足【名】馬などの、左の前後の足を共にはこび、次に右の前後の足を共にはこぶこと。

おろし-あふぎ 下扇【名】能樂の型の一種。開きたる扇を右手に高く持ち、正先へ進みて上より下すもの。

おろし-あゆみ 下步【名】しづかに練り步くこと。ゆるゆるとあゆむこと。 傾城反魂香「人にのぼれの戀の坂、おろしあゆみの道中は、花の立木のそのままに」

おろし-うま 下馬【名】おろしあしをなす馬。おろしの馬。

おろし-うり 卸賣【名】生產者又は問屋より請賣の人に賣渡すこと、又その人。おろし。小賣に對して。

おろしうり-しやう 卸賣商【名】卸賣の商業を營むこと、又その人。

おろしうり-しやうげふ 卸賣商業【名】卸賣をなす商業。

おろしうり-しやうにん 卸賣商人【名】次條に同じ。

おろしうり-にん 卸賣人【名】卸賣商業を營む人。おろしうりしやうにん。

おろしうり-ねだん 卸賣値段【名】卸賣商業にて、賣手と買手との間に決定する貨物の價格。小賣値段より廉價なるを常とす。おろしねだん。おろしね。もとね。（小賣値段に對して）

おろし-え 下枝【名】切りおろしたる枝。おろしえだ。〔古語〕千載「二月ばかり、花咲きたるおろしえに結ひつけて」

おろし-えだ 下枝【名】前條に同じ。〔古語〕

おろし-ぐすり 下藥・墮藥【名】墮胎せしむるに用ふる藥。こおろしぐすり。

おろし-ご 下子・墮子【名】墮胎又は流產。こおろし。おろし。

おろし-こむ 下籠む【動下二他】格子などを全部おろして、立てこむ。〔古語〕拾穗「人音もせず、おろしこめて」

おろし-ごめ 下米【名】貴人・神佛の前に供へたる後、おろし下げたる米。字治「大饗のおろしごめとて」

おろし-ざく 卸作【名】こさく（小作）に同じ。

おろし-じる 下汁【名】大根おろしに、牡蠣（カキ）・蛤（ハマグリ）などを入れ、中味噌に煮汁を入れて造りたる汁。

おろし-そふ 下添ふ【動下二他】申し下して添ふ。〔古語〕榮花「院の御ぞども、おろしそへさせたまへるに」

おろし-だいこん 下大根【名】大根を、大根おろしにてすり碎きたるもの。刺身（サシミ）などのつまとす。おろし。

おろし-なみ 卸並【名】卸賣値段と同じ價にて賣捌くこと。

おろし-に 卸煮【名】鰕又は魚肉を油にていたため、好き鹽梅に煮たる後、その煮物を取出し、汁にて大根卸を淺く煮て、前の魚にかけ、上にしぼり生姜をかけたる食品。

おろし-ね 卸値【名】おろしうりねだん（卸賣値段）に同じ。

おろし-ねだん 卸値段【名】おろしうりねだん（卸賣値段）に同じ。

おろし-もの 下物【名】おろし（下）㊂に同じ。

おろしもの-の-つかさ 下物職・監物【名】けんもつ（監物）に同じ。〔古語〕紀監物、オロシモノツカサ」積紀「下物職、オロシモノツカサ」

おろし-や 下矢【名】低き方にむかひて射おろす矢。おとし矢。盛衰記「兵ども、楢よりおろしやに射る」

おろしや 俄羅斯【名】（地）ろしや（露西亞）の舊稱。落葉「アメリカが來て吊上げた皐丸（キヤマン）をおろしや（下しや・俄羅斯）また來て吊上げる」

おろす 下す【動四他】㊀低き方にしづかに移す。垂れさぐ。くだす。さぐ。㊁陸上の物を水上に浮べ又は水中に沈む。伊勢「中務（カナツ）の宮の池に、舟を造りて、おろしはじめて」拾遺「みそぎあるけふ辛崎におろす網は神のうけひくしるしなりけり」㊂切り卸す。剃り去る。萬葉「青柳の枝切りおろしゆだね蒔きゆゆしき君に戀ひわたるかも」源氏「横川の僧都、近うまゐりたまひて、御ぐしおろしたまふほどに」㊃位又はその地位より退かしむ。㊄擦りくだく。磨りへらす。「大根をおろす」「金を鑪にておろす」㊅新しき品物を用ひ初む。「草履をおろす」「新造をおろす」㊆肉を切る。料理す。字治「おろしはてて、いりやきなどして、試みよとて」㊇神佛の供物を引下ぐ。貴人の飲食物・著用物の不要の分を下し賜ふ。㊈いまだ分娩の時期の至らざるに、無理に胎中の兒を促し生れしむ。墮胎せしむ。元輔集「子をおろしてける女の」㊉神おろしを行ふ。㊊惡しくいふ。そしる。ののしる。貶す。〔古語〕源氏「かはらけとりたまへるを、あさましうとがめいでつつおろす」㊋花合せにて、おろしをなす。㊌うち任す。うけおはしむ。「工事をおろす」㊍卸賣を爲す。〔卸す〕

おろす 下す【動四自】高き處より吹來る。吹きおろす。千載「みむろ山おろす嵐のさびしきに妻とふ鹿の聲たぐふなり」

おろす 卸す【動四他】問屋より請賣人に賣渡す。

おろす 織す【動四他】『織らすの轉』織りたまふ。〔古語〕記「めどりのわがおほきみのおろす機」

おろ-すう おろ据う【動下二他】おろし据う。〔古語〕萬葉「難波津にみ船おろする八十機（ハタ）ぬき今は漕ぎぬと妹（モ）に告げこそ」

おろせ【名】㊀㊁昔、駕籠かく者の、「重くばおろせ」といふ歌をうたひて舁きたりしが、中昔より歌をうたはず、ただ「おろせおろせ」とかけ聲したるよりいふとぞ』**かごかき**（駕籠舁）を云ふ。〔昔の京都・大阪の語〕色道大鑑「次條の略。〔昔の京都・大阪の語〕鑑「おろせ。これも、駕籠乘物のことなり。又、乘物を舁く四夫をさして、おろせともいふ」

おろせ-かご おろせ駕籠【名】かごかきが客を乘せて舁く駕籠。おろせ。〔昔の京都・大阪の語〕風流曲三味線「きやつに鼻をあかせんと、おろせかごにも乘らず、足を宙にして宿へ歸り」

おろせ-やど おろせ宿【名】徳川時代に、かごかきどもを發ひきし宿。風流曲三味線「浮世小路（ウキヨウヂ）のおろせやどの勘吉」

おろ-そか 疎か【形動】くはしからぬさま。輕輕しきさま。十分ならぬさま。なほざり。粗略。不注意。おろか。うろそか。字治「前生の運おろそかにして」

おろちよん（英 Orochon 又 Oronchon）【名】シベリヤの內地に住める人種。ツングウス族の一にて、馴鹿を飼養するもの。體質も、風俗も、他のツングウスに比して、さしたる特色なし。

おろっこ【名】（英 Orokho 又 Orotcko 又 Oroke）樺太（カラフト）中我が國境附近に住する未開の種族。ツングウス系に屬し、顏面扁く、頰張りて、眼小さし。

おろなき-いろ おろ泣色【名】おろおろと泣出すばかりの顏色。盛衰記「入道は口說（クド）き立てられて、おろなき色にはおはしけれども」「泣く。

おろ-なく おろ泣く【動四自】おろおろと泣く。

おろぬき-だいこん 疎抜大根【名】㊀すぐりだいこん（選大根）に同じ。㊁（植）はたのだいこん（波多野大根）に同じ。

おろぬき-な 疎抜菜【名】うろぬきな（虛抜菜）を云ふ。〔九州の方言〕

おろ-ぬく 疎抜く【動四他】多くある物の中より、間を隔てて抜取る。まびく。うろぬく。

おろねぶる 疎睡る【動四自】すこしねぶる。微睡す。〔古語〕字治「あはれげなる顏して、足をうち擴げて、おろねぶりたるを」

おろ-ぶり 疎降【名】雨などのすこし降ること。こぶり。

おろ-ふる 疎降る【動四自】わづかづつ降る。〔古語〕夫木「ながむれば春ならねども霞みけり雪おろふれる遠き野の里」

おろ-もの 愚者【名】おろかなるもの。ばか。おろかもの。おれもの。愚人。

おろ-よし 疎善し【形一】㊀いささかよし。やや可なり。㊁わろし（惡し）に同じ。おろいい。〔備前國及び九州の方言〕藤翠毛「客どもに向って、あんがいおろよいことぬかいて、よかばいものか」

おわい【感】東京市中の人家の大小便を汲取るを業とする人。しもさうぢ。さうぢや。〔東京の俚語〕

おわ-わし【名】『おあし（御足）の訛』ぜに（錢）を云ふ。〔女の語〕

おわ-わたし 御渡【名】でんがく（田樂）㊀を云ふ。〔女の語〕

おわたし-がき 御渡書【名】徳川時代に、老中・若年寄よりの申渡の文書。

おわりよ【感】小供の泣きごゑ。〔元祿頃の語〕一代女「聲のあやぎれもなく、おわりよ・おわりよと泣きぬ」

おわ-われ 御我【代】第二人稱。あなた。見聞集「おわれの里の左衛門四郎殿」

おわ-ねご 御居處【名】しり（臀）を云ふ。〔女の語〕「同じ。

おわ-ぞしき 御會式【名】おめいく（御影供）に

おをり-ぶぎやう 御折奉行【名】おさかづきだいおをりぶぎやう（御盃臺御折奉行）に同じ。